THE CENTRAL REVIEW

中央公論

9-1927

九月號

第四十二年 第九號 第四百七十六號



婦人

九月

■結婚するに際して

（一）世の非難に應へる……徳田秋聲

（二）自ら俎上に上る……山田順子

■洋樂講座……野村光一

■地球の老い……正木不如丘

■社會問題としての隣のラヂオ

◆ラヂオのみかは……高畠素之

◆徳孤ならず必ず隣あり……高島米峰

◆家庭が市場・安息所である限り……小川未明

◆避けずに馴れること……矢部謙次郎

◆隣のラヂオは社會問題に非ず……權田保之助

■新歸朝者の觀た日本婦人……訊風

■男女と左利右利……富田

■聖貧に就て……柳宗悦

父戀ひし母戀ひし

◆母の幽靈……加宮貴一

◆不幸な母……城しづか

◆父の追悼……吉屋信子

◆亡父の命日に……國木田みどり

◆もう一つの不幸……水木京太

（短篇）

■未開な風景……中條百合子

■伏せられた札……塚原健二郎

■服裝改善是非

■生活と料理

■名物漬物紹介

長篇「憂鬱な愛人」の稿を續くるに際して……松岡讓

◆定價七拾錢　振替東京三四　中央

公論

號

■花占ひの頁
■化粧品の分析
■美容講座
■(心臓問答)疾痢

(長篇)
■愚人の唄……正宗白鳥
■夜曲ホ長調……久米正雄
■顯現……谷崎潤一郎

◆公論 二科選 鏡社

死の誘惑

◆死を求むる心……谷崎精二
◆殉死する心……三津木貞子
◆親の愛に惹かれて……安居良光
◆人生の訂正を……別所悌一

■化粧の僕……中川一政
■ノラとヘレンの悲劇……青野季吉
■謎の支那問題……山川菊榮

今月の問題……吉野作造

■黒い繪具……原阿佐緒
■(詩)礫……西條八十

■女から観た芥川さん……(筆者)ささきふさ・岡本かの子・三宅やす子・高群逸枝・宇野千代

■(世界の女性)革命の二婦人……古莊國雄
■新しき學校参觀記……原田實
■數學の出來ない子供の導き方……上野陽一

宵話

◆男・女・男・女……逸馬
◆鏡怪……清二
◆居靈地での話……信衞

■市川猿之助……邦枝完二
■三都の女漫畫釋……岡本一平

本間久雄著

菊判五四〇頁
天金塗總布函入

（理想的美本）

歐洲近代文藝思潮概論

定價四圓貳拾錢
郵稅拾八錢

最新刊

本書の特色

（一）近代文學を語るもの先づ第一に知つて置かなければならない古典主義、浪漫主義、寫實主義、自然主義等を始め、唯美派、惡魔派、象徵派等、所謂世紀末文學として最も興味ある文藝思潮を、精細に系統的に解說して、近代文學の理論的方面を明かにしたこと。

（二）『ファウスト』『レ・ミゼラブル』『ボワリイ夫人』『居酒屋』『美貌の友』『人形の家』『復活』『ドリアン・グレイの繪姿』其他近代文學の名著大作の梗概を語りながら、その思想上の特徵を一々具體的に說明したこと。

（三）逍遙、鷗外、二葉亭、魯庵、抱月、敏其他諸名家の譯文を引用して、文學鑑賞の實際に資したる外に、歐洲近代文學と我が明治大正文學との關係を明かにし、飽く迄も、吾々日本人の問題として、外國文學を取扱つたこと。

▼三色版及口繪拾數葉、外に挿畫七拾個入

東京牛込 早稻田大學出版部發行 振替 東京一一二三 大阪六八九〇〇



遺書



湖上秋意　　平福百穂筆

◇長崎高等商業學校教授 伊東勇太郎新譯◇

（大好評を博し賣行激甚）

新刊

全譯 チュード

人間愛の宿命悲劇

四六判最上製五百頁
八ポイント一段組箱入

正價金貳圓八拾錢
送料十八錢

（（名文章家として世既に定評ある））
（（著者が原稿紙堂々一千五百枚に））
（（心血を濺いで成りし模範的譯書））

チュードは歐洲文壇の巨星トマス・ハアディ翁屈指の傑作中最も深刻な最も寫實的な而して最も藝術的香氣高きものである主人公チュードと從妹と舊師とを遶る戀の三角關係と熱烈火の如き學問の思慕と執拗蛇の如き愛慾の追窮とに若き魂をさいなまるゝ主人公の苦悶・人生の暗黑面に弄ばれて生存を悲觀し弟妹を道連として自ら縊るゝ凄惨なる幼年自殺等をテーマとせる作者得意の宿命悲劇で全篇叡智と人間愛と哀愁と抒情味に輝き亙へてをる。譯筆極めて精嚴一字半句に搖曳せる幽趣微韻をも苟もせず流麗にして雅健創作に優るものがある此泰西の名花が斯くも完全に我が藝苑に移植せられた事は我が文壇近時の快事である吾等は此思想と暗示とに富む近代の名作を味讀して人生を深く考へ直さなければならない。

伊東勇太郎著 ●鑑賞研究 **英詩の味ひ方** 初學者と雖も一讀直ちに英詩の趣味の堂奥に參入し知識を得る良書（三版） 正價金貳圓 送料十八錢

伊東勇太郎著 ●**最新英語獨習講義** 本書によればこんなに解り易く覺え易いものかと好になる（三版） 金貳圓五拾錢 送料十八錢

栗原寅治郎著 ●解り易き國際講話 **最近世界の大勢** 內容豐富記述平易一讀現時の國際政局を明かにす（新刊） 正價金貳圓 送料十八錢

春藤與市郎著 ●古今 **世界大海戰史** 海權爭奪の爲に演じた古來幾多國民の血湧き肉躍る花々しき奮鬪を記す（新刊） 金貳圓八拾錢 送料十八錢

佐藤種治氏著 ●**參考日本歷史精說** 太古より現代までの史實を探究し詳說明したる有益の良書（新刊） 金六圓八拾錢 送料廿七錢

木村泉・高橋與惣共著 ●理論實際 **學校の夏季聚落** 學校衞生施設に關して詳細に敍述せる各學校必備の參考書（新刊） 金四圓八拾錢 送料廿七錢

東京市神田區表神保町七番地 **大同館發行** 振替貯金口座東京八七貳番

讀賣新聞

此努力を見よ

四氏招聘

正宗白鳥氏
武者小路實篤氏
小山内薫氏
廣津和郎氏

讀者文藝欄の偉容を見よ

文藝欄の大擴張

ラヂオ版二頁附錄

我社の誇り

圍碁

日本棋院棋正社の對抗戰
野澤鈴木兩七段の決死的十番大試合（棋譜連載）

將棋

全國六段平手標準爭霸戰
木村花田兩八段の十番勝負爭ひ手合（棋譜連載）

空前の壯擧

日曜夕刊四頁發行

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ

煙草も一度「カロツト」を口にすれば

再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本社代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロツト」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロツト」の御註文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロツト」を御説明申さう」と云つて主人は翌十五日午前十時「カロツト」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて與れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロツト」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好きな方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロツト」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロツト」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが社員の方「やつ！之は驚いた、之は煙草が不味て吸へない、煙草がいやになりました、到底煙草は吸 ないですね！」驚いたと仰有いました、此 光發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も、どれ僕も一つ」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立になつて「カロツト」を取り上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね！」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞讃下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロツト」を御用ひになれば何等の努力を要せずして再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロツト」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

特徴

外見恰も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人參の精氣を含有せるを以て朝鮮人參が具有せる諸効用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は煙草に對する永き嗜好を離れて再び顧みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を治すべし。

カロツト（凡百日分）

金貳圓五十錢　ベークライト製パイプ付（カロツト味一瓶　きらひ液一瓶）

金參圓五十錢　象牙製パイプ付（カロツト味一瓶　きらひ液一瓶）

送料（内地十八錢　臺、朝、樺四十五錢）

引替送料（内地三十錢　臺、朝、樺五十五錢）

御注文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて發送可仕候

◎代金引替は御便利の郵便局を御申越願升

發賣元　東京府大森不入斗八二八　榮川堂　振替東京五二九一一番

代理店　東京市京橋區瀧山町十三番地　天下堂　振替東京七〇六八番



昭和二年

中央公論

九月一日發行

九月號

第四十二年第九號
第四百七十六號

政友會内閣の對滿蒙政策

在野時代から政友會は、支那に對する政策としては所謂積極主義を主張して居つた、殊に幣原外相の非干渉主義に對しては正面から反對して居つた。やがて田中大將を首班とする政友會内閣の出現するや、世人は二重の意味に於て對支政策に一大激變を見るべきを豫想したのであつた。二重の意味とは、一つは政友會の在來の主張を顧慮し、も一つは田中首相と張作霖との多年の緊密なる關係を念頭に置いてのことである。世間の輿論が幣原前外相の遺策に餘りに好意を有ち過ぎた爲めか、幾分激變の到來の緩和された形はあるが、對支政策に根本的轉換を見るべきの筋道だけは、眼ある者には極めて明白であつたのである。

然らば我が對支政策は政友會内閣に依てどう變つて行くのか。之が總括的解説は別の機會に讓るとして、差當り私共は最近現はれた次の二つの事實に深甚の注意を拂つておきたいと思ふ。一は山東出兵並に其結果としての北支那形勢の變化、二は我が對滿蒙政策の積極的確立、即ち是れ。

山東出兵に付ては我國の論壇でも兎角の評がある。概して之を難ずるの聲が高いが、併し之に依て政府が始めから期した目的の十分に達せられたことは疑ない。それは張作霖派の頹勢挽回に依て立派に北支那擾亂の危惧を防ぎ止めたからである。但し之が支那に於ける形勢の自然の推移と如何の關係ありや、又張作霖の勢力挽回に因る一時的平和は果して隣邦民衆一般の希望に合するや否やは別問題だ。之等に就ても論ずべき點は頗る多いが今は略する。唯こゝには特に日本の山東出兵は支那の形勢の上に實に異常な大影響を與へたといふ事實だけを指摘するに止めておく。

日本の山東出兵は固より張作霖の依頼に出でたものではない。併しこの出兵に依て張作霖は始めてその救ふ可からざる頹勢より再起し得たことは亦一點の疑を容れない。謂はば彼は日本の出兵に依て九死に一生を得たやうなものだ。けれども斯は固より彼の依頼に因る事ではないから、彼に於て再生の恩を謝するの義務なきは勿論、形式上主權侵害を楯として我が出兵に抗議して來たとて亦別段怪しむにも足らぬ。が、何と謂ても今日の日

ぬが彼に取つて一縷の望たるの事實だけは否み難い。之を打開策として、帝國政府は之に反省して作今的に打
滿蒙政策の確立を揭言して居る。先きには山梨大將の渡支に依て逆ろ張作霖と我が田中首相との間に密接なる緊
契なかりしかを疑はしめたが、其後物々しき東方會議やら又山本滿鐵社長の拔擢などに依て滿蒙對策の用意を
さ／＼怠りなきものあるを想はしめる。成る程軍閥者流や帝國主義者の考へさうな滿蒙政策の確立には今が一番
い〻潮時であらう。烱眼なる田中首相のこの機を外さず、從來何人も容易に成し能はざりし所を成就して天下を
あツと云はせようと企らむのは、彼としては蓋し當然の行き方であらう。

尤もこの積極的新政策の實現を見るのは初秋の頃になるのださうだ。併し帝國政府の意氣込みにもう早既に頗る凄い。新聞の傳ふる所に依ると、所謂新政策の大體の輪廓は次の如きものだと云ふ。（一）張作霖を滿蒙の主權者と認め、その域内の治安の維持に關しては出來る限り彼を援助する。（二）滿蒙に於ける帝國の優越的地位は何人にも侵さしめない。張作霖をして之を承認せしむべきは勿論、ひろく之は内外に宣明もする。（三）商租權問題を始め從來の懸案は一切此際片付けてしまう。（四）治外法權を撤廢し、内地雜居を許容せしめ、且其地域内に於ては日支兩國人民の權利を完全に同等にする。細い點をも擧げたらこの四ヶ條に盡くるのではあるまいが、大體この邊と觀て、之が立派に成功するなら、成る程我國の利權屋の大によろこぶだらうことは想像に難くない。

我國は今日現に張作霖の死命を握つて居る、大抵のことは云ふ事を聽かせ得さうにも見えるが、意外にも八月はじめの奉天特電は次の樣な事實を報じて我々を狼狽させて居る。『支那側の勝手に實施した附加關稅に對し、日本側が條約違反として之に應じない所から、奉天官憲は支那商人に日本商との取引を禁じ、犯した者は拘留した上之に莫大の罰金を課したので、以來彼我の取引は全く休止して居る云々』。併し支那の事情を知り又張の爲人と其立場とを知る者に取て、斯の如きは實は意外でも何でもない。身投げを救つてやつたからとて相手の女が必ず言ふ事を聽くと限らぬ如く、彼には彼の立場があり又時勢の自ら促す所の微妙復雜な狀態もある。之等を考慮の外に置いて、單に此際我が欲する所を安價に成就し得べしとするのは、聊か冒險の嫌がないでもない。我國はこの點では從來隨分にがい經驗を嘗めて居る筈だ。

但し事の成否にか〻わらず、云ふだけの事を云つて見るのは構はない。併し我々國民は固より、云々の利權が獲られるからと安心して政府の出兵を忍耐してゐるのではない。

中央公論



第四十二年第九號
九月號
第四百七十六號

樂觀主義及び悲觀主義經濟學

小泉信三

十九世紀末葉、限界効用學説を提げて墺太利學派なるものが擡頭した時、獨逸第一流の理論的頭腦たるハインリヒ・ディツエルは、之に對して舊派の學説を辯護して、價値の理論は既に七十年前リカアドオに依て道破せられた。今日に及んで此に一語を増減する必要を認めない、といふ程のことを謂つたことがある。今日に於ても、例へばブウドゲ（Siegfried Budge Grundzüge der theoretischen Nationalökonomie, 1925）の如きは大體に於て正統派の學説を殆ど其儘踏襲し、

又盛名嘖々たるカッセルの著作「共産主義社會の理論」（カッセル社會經濟學原論）にも正統學派の[illegible]。此人々の說に一々賛成する譯ではないけれども、私自身正統學派の貢獻といふものを可なり重要視する方であつて、正統派以後の學者の理論的業蹟の割合に大ならざることを屢々感ずるものである。

さて其の正統學派であるが、正統學派なるものはアダム・スミス、マルサス、リカアドオの三人に依て創建せられたことになつてゐるから、此の三者の間に學說の統一のあることは、例へばフイジオクラアト學派と稱せられるものがケネエの學說の信奉者祖述者であつたのと同樣であつたかのやうに思はれ易いが、事實は決してさうでない。近づいて仔細に觀察すれば、吾々は三者の間の共通點を指摘するのに寧ろ努力を要するといつても好い位であつて、アダム・スミスとマルサスとマルサスと、リカアドオと、リカアドオとアダム・スミスとの個々學說の相違に至つては、殆んど數へるに遑がないのである。此處には其相違の一々に就いては論じないが、三者の著作を一讀して何人にも直ぐに感ぜらるゝに違ひないと思はれることは、アダム・スミスの樂觀主義と殘る二人の悲觀主義との著しい對照である。アダム・スミスを出でてマルサス、リカアドオに入れば、滿目の光景は殆ど一變するの感がある。後年獨逸歷史學派が勃興して舊派の經濟學に攻擊を加へた時、アダム・スミスとリカアドオとは往々一括して其標的にせられたけれども、單に研究方法論上から見ても、スミスとリカアドオとを同樣に取扱ふことは失當であるのみならず、其經濟社會觀上に於ける樂悲明暗の差違は、到底二者を一樣に論ずることを許さないのである。內地植民の實行による大地主制度の撤廢に由て資本主義を廢絕し、豐富と自由と平等とを實現すること決して難事にあらずと主張する、現在經濟學者中第一の樂觀家に推すべきフランツ・オッペンハイマアが屢々アダム・スミスを讚美し、常にマルサス、リカアドオを排斥するのは蓋し故なきにあらずである。

アダム・スミスの樂觀主義には形而上學的基礎がある。英吉利の理神論（Deism）は十八世紀後半には其盛時を過ぎ、

デギッド・ヒュウムは之を一轉して懷疑主義に陷らしめたと謂はれてゐるけれども、而かも猶ほアダム・スミスに於ては理神論的思想の頗る純粹な形に於て表明せらるのを認め得るのである（Richard Zeyss の好著 Adam Smith und der Eigennutz. 1889. 參照）。

世界は世界以上、世界以外に存する神が創造する所のものであつて、一度び神に依て與へられた法則に服從し、機械的に其の定められた軌道に沿ふて運動する。然るに彼の「偉大なる仁愛全智の實在」は、其の被創造物の完成と幸福とを實現せんとの目的を以て世界を創造し、又其爲めに諸法則と秩序とを定めた。これがアダム・スミスの世界觀であつて、神の攝理に依て諸物に賦與せられた發展の諸動力、神が此發展の基礎たらしめた諸法則と諸秩序とが即ちスミスの「自然的」と稱する所のものである。故に「自然的」なるものは、彼れに從へば、一方に於ては本源的なるもの、神が欲するところのもの、創造計畫中に存するものゝ謂であつて、同時に他面に於て、人類と全世界との爲めに唯一の正當、有用、善良なるものゝ謂であつた。而してスミスは人間の生活及び行爲の有ゆる領域に於ける此の「自然的」なるものゝ認識に到達せんが爲め、先づ人間の本性及び衝動の分析を試み、其結果として、全智全能の神は人間に自利と仁愛との本能を以てし、又此等本能の發動を適宜のものたらしめんが爲めの同情感情を以てした、といふ結論に到達した。而して斯る賦性を以て生れた人間は、單に其自然的衝動の發動に從ひさへすれば、自ら期せずして自己一身の幸福と共に全體の維持完成幸福を促進するといふ。「道徳情操論」中に左の如き意味の一節がある。

宇宙の各部分に於て、吾々は實現せんとする目的に對する手段の按排せらるゝことが精妙を極めてゐるのを認め、而して一植物一動物體の機構に於て、如何に一切のものが個體の保存と種族の繁殖といふ、自然の二大目的を進めんが爲めに工風せられてゐるかを嘆賞する。併し乍ら吾々は、是等のものを見るに當つて、有効原因と終極原因とを識別する。食物の消化、血液の循環、幾多汁液の分泌は、皆な動物の生命といふ大目的のために必要なる作用である。併し乍ら吾々は、決し

て此等の作用を彼の目的を以て說明して、之を以て其有効原因となさんとすることなく、又決して血液は自ら循環し、食物は自ら消化し、而して循環又は消化の目的を理解し意圖して之を行ふものとは想像せぬ。時計の齒輪が皆な時の指示といふ、時計が其爲めに造られた目的に適合してゐることは、賞賛すべきものである。其の様々の運動は、最も微妙の方法を以て此結果を生ぜしめんが爲めに協力する。假に此の齒輪等に、此結果を擧げやうとする欲求や意圖が、賦與せられてゐたとしても、其の功を奏することは決して此以上には出ることが出來まい。而かも吾々は、斯る欲求と意圖とを時計製作者には歸するが、決して之を齒輪には歸することなく、又齒輪が彈條に依て動かされ、而して彈條も亦た其の生ずる結果を意圖せぬこと齒輪と擇ぶ所がないことを知つてゐる。然るに物體の作用を說明するに當つて、斯くの如く有効原因と終極原因とを區別して謬ることがないにも拘らず、心意上の作用を說明するに當つては、吾々は動もすれば此の異なる二物を混合せんとする虞れが多い。「吾々が自然的原理に導かれて修練啓發せられた理性の可とすべき目的を進めるに至るや、吾々は動もすれば、吾々の依て以て此等の目的を進めんとする情操行動等を彼の理性に歸して、之を其有効原因となし、而して實は神の智惠なるものを知らずして人間の智惠なるべしと想像するのである」（Theory of Moral Sentiments. Bohn's Standard Library Edition. pp.126-7)。

アダム・スミスの「彼の偉大なる仁愛全智の實在」に對する信頼は、經濟生活上に於いては各個人自利心の自由發動の結果に對する樂觀となつた。個人はその自己の狀態を改善せんことのみを念頭に置いて、毫も公共の利福を思ふことがなくても、此の自利的行動は「見えざる手」に導かれて自ら全體の利福を增進せしむる結果を擧げぬといふことはない、といふのである。各個人が其の自家の狀態を改善しようとする努力をば、「正義の法に抵觸せぬ限り」自由に放任すれば、彼れの所謂「明白單純なる自然的の自由制度」は自らにして確立される。「自然的」自由の制度は、即ち神が欲する所の制度である。即ち各人の所有權及び勞働の自由行使に對する拘束は、「自然的自由の最も明白なる侵害にして又從つて不當」

であるといふ所以である。

アダム・スミスは國富論に於て國富增進の政策を説いた。スミスに依れば國富の增進は分業に因る勞働生產力の增進と、資本の蓄積に因る生產勞働者の增加とに俟つべきものであつた。而かも此二事を實現せしむるには何等の人爲政策を必要とせぬ。人間には生得の交換慾がある 各人が自給自足を營んでゐる限りは此慾望は滿たす譯に行かぬ。分業は實に此の交換慾を滿たさんが爲めに謂はば自然必然的に發生したものであつて、決して人間が分業の利益を目的として故らに之を起こしたものではない。スミスは凡そ斯樣に說いた。又資本の蓄積はといへば、資本の蓄積は節約に由て行はれる。然らば人をして節約せしむるの方法如何。節約と相對するものは浪費であるが、節約心と浪費心とは果して何れが強く人を動かすか。スミスの見る所に由れば、全體に於て結局節約心は常に浪費心に打克つのみならず、大に之に打ち克つものである。此點に於てもスミスは自然に信賴して人爲的干涉政策を不要としたのである。

彼れは又、蓄積せられた資本を直ちに農工商三業に並び投下する事をせずに、先づ之を專ら農業に投じ、次いで工業商業に及ぼすを以て國富充實の捷徑としたが、此點に於ても、彼れは事物の自然的徑路は即ち國富增進の爲めに最も有利なる徑路であることを確信した。「事物の自然的行路に從へば、發達しつゝある社會の資本の大部分は、常に先づ農業に、後に工業に、最後に外國貿易に向はしめられる」のである。屢々引用される「此場合に於ても、他の幾多の場合に於けると同じく、彼れ(個人)は一の見えざる手に導かれて其意圖の中に存せざる效果を助成する」といふ文言は、此の資本投下の順序を論ずるに方つて用ゐられたものである。神は人間の幸福を希ひ、其目的を達せんが爲め之に自利心を賦與した。成程或學者のいふ如く、これはヘエゲルの所謂「理性の狡策」に對應する「自然の欺瞞」とも評すべきものであらう。

アダム・スミスの樂觀主義は此に止まつては居らぬ。右に述べたものは、國富增進の爲めに取るべき正しい政策であるが、スミスは假令誤まれる有害の政策が採用せられても、國富究局の增進は之を阻止し得るものではないと信じたのである。

人體の健康は、嚴格なる養生法を遵守して始めて之を維持し得るものではない。經驗の示す所に由れば、人體は決して衛生的でないと認めらるゝ生活法の下に於ても、猶ほ屢々完全なる健康を保つことが出來るものである。人體には人の知らぬ或る保存の原理があつて、不養生の惡結果を防止し、若しくは矯正し得るものゝ如くである。社會も亦た然りである。「自ら醫師なる……ケネエ氏は、政治的身體に關しても同種の觀念を抱き、それは一定の嚴格なる養生法、即ち完全なる自由と完全なる正義との正確なる養生法の下に於て始めて能く成育繁榮するを得べしと考へてゐるものゝ如くである。氏は政治的身體に於て、各人が絶えず怠らざる自家境遇を改善せんとする自然的努力は、多少偏頗にして且つ壓制的なる經濟政策（political economy）の惡結果を幾多の點に於て豫防し、且つ矯正し得る保存の原理たることを考察しなかつたものゝ如くである。斯る經濟政策は、一國民の富と繁榮とに向ふ自然的進歩をば多少遲からしめることは疑を容れぬけれども、必しも常に全然之を阻止することは出來ぬ。況んや之を退歩せしむることをや。」

但し上述の如き形而上學的思辨に出發したアダム・スミスは、他面に於て着實なる事實の觀察者であつた。而してその觀察し得たる事實は、必しも悉く其根本思想上の樂觀主義と一致するものでない。普通に起るといふ意味に於て自然なるものは、必しも「正當、有用、善良」なるものではない。それ故スミスの用語例に於ける「自然的」が必しも形而上學的の意義を有するものゝみでないことも、ハスバツハ等の指摘する通りである。彼れが又幾多の個々の點に於て自由競爭に制限を加へる必要を認めたのも、即ち「自然」に對する「人爲」の干渉の必要を認めたのも、何れも事實の觀察に教へられての事である。此處にエムピリイとメタフイジクとの衝突があるといふことは、確に言つて差支ないのである。併し乍ら、共あるにも拘らず、全體に於て、「國富論」が人間社會の經濟的將來に對して下す豫想の甚だ樂觀的であることは、多數讀者の否認せぬ所であらう。若し私の見落しでなければ、スミスが土地收穫遞減の法則を說いて居らぬといふことも、個々此判斷の旁證となすことが出來よう。屢々收穫遞減法則の確立者として指名せらるるエドワアド・ヱストも此事を指摘し

て、アダム・スミスは「同數の勞働者に依て爲され得る仕事の量の改良の進歩と共に增加することが、農業に於ては製造業に於けるよりも比較的速かならず」との原則は認めたけれども、農業上に於ける斯る改良を妨げ、又は停止し、或は更に「耕作の進行に連れて勞働の生產力を現實に減退せしむる」ことすらある別の原則は、之を認めなかつたと記して居るのである（「土地への資本投用を論ず」六頁）。

此のアダム・スミスと二十餘年後に現はれたマルサスの「人口論」とが著しき對照をなすことは、言ふ迄もないことである。

人口は食物よりも速に增加する。而かも人間の生存には食物を缺くことが出來ぬ。從つて人口の增殖は何等かの方法で食物の許す限度內に抑止されなければならぬ。其方法は既に生れたものを死なしめるか、然らずんば食物の缺乏を恐れて之を生れしめぬかであるが、何れにしても其は窮迫と罪惡との何れかに歸着せざるを得ない、といふのが當初のマルサスの主張であり、後に到つて始めて、所謂「道德的抑制」に據り此の二殃禍を免るべき途を求めたのである。

此の人口原理をリカアドオは採用した。リカアドオとマルサスとは私交上に於ては頗る親密な友人でありたから、學問上に於ては大概の問題に關する所見を殊にして、會話文通の上で常に論爭を交ぢへつゝ研究を進めた間柄であつたが、ただ獨り人口原理だけは其間に於て例外をなしてゐた。人口原理だけはリカアドオも異議なく承認したのである。マルサスの人口論に對する「反對者の攻擊は、たゞ其力（人口論の）を證明することにのみ役立つた」と或機會に彼は言つたことがある。而して此人口原理がマルサス、リカアドオ兩者の悲觀主義に於て重要なる役目を演じてゐることは、言を俟たないのである。

マルサスは人口論の始めに、正しき理論は實驗に由て確證せらるゝものでなくてはならぬと謂つて居る。而して暗にゴ

ドキン其他の人間完成可能論者を指して、若し假りに人をして人間が望ましき駄馬となるといふことを信ぜしめんとするならば、人間の頭が漸次伸長し來りつゝあること、其脚が漸く突出して硬化しきつたこと、其脚足の形状が漸次變化しつゝあること等を示さなければならぬ。其をせずして、徒らに人間が駄馬と化し得た暁の幸福を說くのは、時間と勞苦との浪費だと言つた。而かもマルサスが斯く實證的の議論を重んじたにも拘らず、猶ほ他面其思想の根柢に「形而上學」而かも基督教的形而上學」が横はつてゐたことは、注目を要する。

併し乍ら、人口と食物との増殖力の不均衡は避け難き約束であつて、此の不均衡の結果は貧困か罪惡か二者其一を出でぬといふならば、此の人口論と仁愛全智の神の攝理に對する信頼とが如何にして相容れるかは、人の知らんと欲する所であらう。マルサスは大要左の如くにして此二つを相調和せしめようとしてゐる（マルサス人口論第一版第十八第十九兩章）。マルサスは人口原則を神に由て人間に與へられた試み（trial）と解することを肯んじない。斯く解することは、「猜疑と前知力の欠乏と」に似たる何物かを示すものであつて、吾々の信ぜんと欲する神の屬性と相容れぬといふのである。マルサスの見る所に由れば、人口原理は人心を向上發達せしめんが爲めに與へられたものである。全能彼の如き創造主と雖も、人間を其の高き目的に適ふものたらしめるには「一定の過程」と「一定の時」とを要する。彼れは（マルサス）は「世界と此人生とを解して、試みの爲めではなく、心意の創造と形成との爲めの神の偉大なる過程、活動力なき混沌たる物質を覺醒して精神たらしめ、地の塵を精煉して靈たらしめ、粘土の土塊より天上の火花を發せしむるに必要なる過程」となさん……と欲する」ものである。謂へらく「心の第一の大覺醒者は肉體の欲望であるやうに思はれる。」而して一度び覺醒せる心意をして活動を續けしめるものも亦た欲望の刺戟である。「蠻人にして若し飢餓の欲、若しくは寒氣の苦痛に由て其無感覺狀態より喚び醒まされることがなかつたならば、彼れは永久に樹下に睡るであらう。」此飢寒を避けんとする努力が「彼れの能力を形つくり、且つ其活動を絕たしめざる所の練習」であると。

さて生命を維持する爲の食物の必要は、恐らくは他の何れの肉體的若しくは心意的欲望よりも大なる努力を喚び起こすものである。「最高の實在は、土地は多大の準備勞働と工風とが其表面に加へらるゝ迄、多量の食物を産すべからずと定め給ふた「神にして若し其を欲するならば、無論人間の開拓耕耘播種するを待たずして有ゆる種類の植物を成長せしむることが出來よう。其をしないのは「人を行動に刺戟し、人の心を理性に形つくらんが爲め」である。此種の刺戟を與へ「人を促して、土地の充分なる耕作に出て攝理の仁慈なる計劃を進めしめんが爲め、人口は食物よりも遙に速かに增殖すべしと定められた」のである。「若しも人口と食物とが同一比率を以て增加してゐたならば、人間は恐らく終に野蠻状態から脱却することが出來なかつたであらう。」

斯の如く解し來れば、人口原理の作用は必しも悲觀することを要せぬものゝ如くでもある。マルサスはいふ、「此の一般法則……が多大の部分的害惡を生ずることは疑を容れぬ。併し乍ら、僅小の反省は恐らく吾々に、それが利益の大なる餘剩を生ずることを納得せしめるであらう。」と（三六一頁）。利益といふのは、いふ迄もなく、努力の刺戟である。而して人口論第一版の最後の章は、左の如き文章を以て終つて居る。「害惡が世界に存在するのは、絶望を造り出さんが爲めでなくて、活動を造り出さんが爲めである。吾々は忍んで其に服從すべきものではなくて、其を避けんが爲めに努力すべきものである。各個人が已れ自身若しくはその影響し得る限りの範圍から害惡を除かんが爲め其の最大の努力を用ゐることは、單に其利益たるのみならず、又其義務である。而して彼れが此義務を行ふこと愈々多く、其努力の方向を定むること愈々賢明に、而して此等の努力の成功することが愈々多ければ、彼れに恐らく愈々已れ自身の精神を進め、且つ高め、又愈々完全に其創造者の意志を遂行するものゝ如く思はれるのである。」

此處にマルサスは、缺乏に刺戟せらるゝ努力を以て、創造計劃を遂行する所以の途なりとして說いて居る。然るに、抑も彼れの人口論は、始め人間の努力の無効絶望を力說したものである。人間が如何に努力しても食物の産出は人口の增加

に伴ふことは出來ぬ。又若し、消極的に人口の增加を抑制せんとすれば、吾々は一層と必然的に一罪惡に向はなければならぬ、といふのが其論旨であつた。此結果は果して創造計劃中に存したものであるか否か。予はただ右に引用する所の諸節の文書と、人口原理其者との能く相調和し得べきや否やを疑ふものであるが、兎に角、科學的實證的研究を貴んずといひ、實證的研究は人間完成には人口原理といふ「大なる、予の解する所を以てすれば、打ち克ち難き困難」の存することを認めたといふマルサスが、他面に於て此の「原理」を人間向上の爲めに創造者に依て與へられたものと解して居たことは、上記の通りである。

リカアドォには此の形而上學が全然缺けて居る。リカアドォは其性格素養境遇上極めて非哲學的の人であつた。其幾多の經濟學上の著作には、ゾムバルトの口吻を弄すれば、これこそ殆ど一グラムの哲學をも見出すことが出來ぬと言つて好いのである。ベンサムがいつた、「自分はミル（ジエエムス）の精神上の父であつた。而してミルはリカアドォの精神上の父であつた。從つてリカアドォは自分の精神上の孫であつた」といふ言葉は、屢々引用せらるゝ所であり、又事實強いてリカアドォに何等かの哲學を求めれば、これはベンサムの功利主義であつたといつて差支はないが、此のベンサムの影響とても、之を考證するには、リカアドォの著作中恐らく最も重要でない、其遺稿の「議會改革論」中の文言を引用しなければならぬ次第であつて、アダム・スミス、マルサス、リカアドォと三者の主要著作を讀んで比較する場合には、我々はスミスに絶えてなく、マルサスに僅に有るベンサムの影響のリカアドォにあることを認めるよりは、寧ろアダム・スミスに大にあり、マルサスに猶ほ存する形而上學のリカアドォには絶えてないことを先づ感ずるといつた方が當を得たものであらう。

さてリカアドォは形而上學と絶縁して、其の實務上の經驗と若干の讀書とに由て得たる知識と、その生れ乍らにして具

有し、恐らく金融、株式市場に於ける實務處理の間に鍛錬せられた推理力とを以て、經濟學の研究に向つた。彼れはマルサスから人口原則を繼受した。土地收穫遞減の法則は、彼れの同時人たる前記エドワアド・エストが彼れと同時に之を明確なる形式に言ひ現はしたのであるが、リカアドオは別にエストを俟つ迄もなく、當然自明の理として此法則を承認して居つた。即ち彼れは生活に餘裕のある限り其限度まで增殖せんとする人間をば、耕作の進行するに從つて生產力の減退する土地の上に住まはせた。而してリカアドオ自身及び其の業務上日常接觸するところの銀行家、手形株式仲買人は、利廻りの差の厘毛を爭ふ人々である。彼れは其の周圍に見る倫敦シチイメンの心理を以て一般に勞働者資本家地主の心理を推した。勞働者が收める賃銀率の平均、資本家が收める利潤率の平均は、人口增殖、土地收穫遞減と共にリカアドオが理論推究の前提となつたのである。全然形而上學を離れ、而して右の如き準備を以て發達したリカアドオの求める所は、世界觀上の意味でなくて、たゞ獨り因果理法の說明のみであつた。アダム・スミスを出でてリカアドオに入れば、詢に滿目の光景は一變するの感がある。「彼處には世界觀的倫理的に基礎を定められた一の社會觀經濟觀、此處には、冷靜にして無味乾燥なる、論理的に、且つ一見一切の倫理的世界觀的なるものを棄てゝ、偏へに論理的たらんとのみ欲するデギッド・リカアドオの思考法」がある（ゴエッツ・プリイフス）のである。

斯の如くにして得られたリカアドオの推究の結果は、如何なるものであつたか。

人口原理の作用があるから、勞働者の賃銀は大凡そ其の生活の慣習的必要以上に超過することがない。若し超過すれば、生活が安樂となつて人口が增加し、勞働供給の增加に由て賃銀は引下げられるからである。さて土地の收獲が此賃銀を持續的に超過すれば、玆に賃銀以外の所得がある。これが資本家の利潤である。從つて利潤は當然土地の豐度の高いところで高い。農業に投下せられた資本額と此の利潤額との比例が利潤率を定める。若し商工業利潤と商工業資本との比例が是に一致しなければ、農業からの資本流出か、農業への資本流入かに由て利潤率の平均が實現されるといふのである。

さて利潤の獲得を目的に資本は蓄積される。資本が蓄積されれば、勞働に對する需要が増加する。需要が増加すれば、賃銀が勞働者の慣習的生活費以上に騰貴すれば、前記の約束に由て人口が増加する。人口が増加すれば、穀物の生産額を増加せしめなければならぬ。併し收穫遞減法則の爲め、資本を未耕の新たなる土地に投じても、或は既耕の土地に重ねて投じても、其收穫は當初のものには及ばない。從つて其から勞働者の生活必要額を控除した餘剩は、減少する。即ち利潤の減少である。利潤額が減少すれば、利潤率も減少する。此の減少した農業利潤率が一般利潤率を定める。農工商業間に利潤率の平均があるならば、同じ農業に投ぜられた資本の利潤率は無論平均しなければならぬ。さうすると、當初の第一の土地收穫から賃銀と、此の減少した率に由る利潤とを控除すると、猶ほ其處に餘剩が殘る筈である。これが地代である。更に人口が増加する。必要なる追加穀物を得んが爲めに更に土地耕作を進めなくてはならぬ。同じ資本の投下に對する土地收穫は減少する。利潤率は減少する。舊利潤率と新利潤率との差丈け既に耕されてゐた土地の地代が騰貴する。人口が愈々増加すれば利潤率が愈々下降し、地代は愈々騰貴するのである。玆に階級的利害の衝突は避くべからざるものとなる。而して斯く利潤が減少して地代が騰貴するのは、抑も何に由て然るのであるか。外でもない。土地の產出力が人口の無限に増殖せんとする傾向に伴はぬからである。即ち「自然の吝嗇」の爲めである。玆でリカアドオの分配論は、マルサスの地代論と衝突する。マルサスは地代が決して「獨り地主にのみ有利であつて消費者には比例的に有害なる價値の移轉に過ぎぬもの」ではなくて、それは「國富に對する追加」であり、「寛大なる攝理の賜」たることを力說したのであるが、リカアドオは此の一種のフイジオクラアト思想を排斥して、地代を以て利潤削減に外ならぬものとしたのである。而してリカアドオは殆んど當然自明の事として、地主階級の利害は社會全體の利害と相容れず、資本家階級の利害は社會全體の利害と一致するものと解してゐたから、社會の發達は所得の分配を愈々反社會的ならしめると考へることになる。(「農業保護論」の示左節にリカアドオは左の如く說いてゐる。或は低き利率其者を以て一國に有利なりとなすものがある。予の信ずる所に由れ

ば、眞理は其正反對である。低き利率は大なる資本蓄積の徴候であるが、それは又低き利潤率の徴候、一國の富と資源との増加を許さぬ、靜止狀態への進行の徴候でもある。一切の貯蓄は利潤からせらるるものであり、一國は速かなる進歩狀態にある時に最も幸福なのであるから、利潤と利子とは如何に高くても高きに失するといふことがない。詢に地主が土地を抵當にして資金を調達する場合の犧牲が減少するといふことは、利潤と利子との低い國に取つて貧しき慰藉たるものであらう。一國の繁榮と幸福とに貢獻することは、高き利潤に如くものはないのである」。）

さて斯の如く、人口が益々増加し、土地の餘剩産出力が愈々減退する究局の結果は何うなるかといふことは、理論的に興味ある問題である。人口が増加する。耕作が擴張される。利潤率が下落して地代が騰貴する。利潤率が下落するから、生産上資本放下を要すること多き商品の價値は比較的下落する。其程度が愈々進んで、利潤が皆無となれば、所得の種類は倂に賃銀と地代との二つとなり、一切の生産物の價値には利潤要素は含まれぬ譯であるから、其相互の交換比率は含有勞働量のみに由て決せられることになる筈である。ところが、抑も所得を蓄積して資本とすることは、當事者に取つて或犧牲を意味するものであり、利潤の刺戟を俟つて始めて行はる、ものであるから、利潤の消滅と共に（實は其より以前に）資本蓄積は停止する。併し資本の蓄積が停止すれば勞働に對する需要の增進も停止する。さうすれば、勞働の供給增進が需要に追及して、賃銀は生活費と一致する。賃銀が正しく生活費に一致する所では、刺戟がないから、人口の增加も停止する。即ち此處で一切の發展が止むのである。一國が斯く「資本並に人口增加の極限に達した」狀態をば、リカアドオは「靜止狀態」と稱して居る。これが人間社會が到達すべしと考へらるゝ終局狀態である。

前に擧げたブリイフスは、正統學派に關する獨創に富む研究を發表して居るが（Untersuchungen zur klassischen National ökonomie.1915）其中でリカアドオの經濟學に對する貢獻は、資本主義行詰まりの斷案を下したことにあるといつて、其點で彼れとマルタスとを比較した。即ち資本主義制度なるものは、利潤獲得を本義とするものであるが、利潤獲

得の盲目的衝動其者がやがて利潤の獲得、從つて資本主義の存立を不可能ならしめるといふ現象に於て兩者の間にある一致があるといふのである。（一九二一—三頁）。

是は面白い批評で、私の知る限りでは、プリイフスに由つて始めて聽くことを得た所のものであるが、併し乍ら茲でグリイフスは、兩者の間に存する極めて重要な相違を指摘することを逸してゐる。それは利潤率が減退し、次いでは利潤が皆無ならんとして資本主義が行詰まるといふ理由が、リカアドオとマルクスとでは正反對なる一事である。上記の如く、リカアドオは、利潤低減を土地生産力の遞減に依て説明する。反之マルクスは、行詰まりを資本主義の下に於ける絶大なる生産力の發展と資本主義制度其者との衝突に求めた。即ち原因は、一方にあつては生産力の減退、他方にあつては其増進である。一方にあつては自然的事情、他方にあつては社會的事情である。而して茲に悲觀樂觀の岐るべき理由がある。

マルクスはマルサスの人口論を錯覺に出づるものとして排斥した。人口が食物に對して過剩となるのではない。資本主義特有の資本蓄積が、資本に對して相對的に勞働者を過剩ならしめるのである。具體的にいへば、機械採用の爲め勞働者が不用となるのである。それが經濟學者の目に映じて、食物に對する人口の過剩と見えたに過ぎぬといふのである。即ち彼れは人口問題を失業問題として取扱ひ、而して失業發生の原因を資本主義的生産方法の罪に歸した。これは資本主義の後により善き社會制度の建設せらるべきことを信ずるマルクスとしては當然さうあるべきことである。資本主義行詰まりの問題に於ても、同じくマルクスは其原因を自然に求めないで、資本主義特有の生産分配方法に求めた。即ち或は、利潤率の漸次低落するのは勞働生産力の増進と共に、一定の價値を生み出す爲め機械道具原料等に支出せらるゝ所謂不變資本部分が増加する爲めであるといひ、或は勞働生産力は増進するのに勞働者大衆の購買力は制限せられてゐるから、茲に避け難き生産過剩が起るのだと説明したのである。然るにリカアドオにあつては、行き詰まりは生産力減退の爲めに起る。そこで二人の下す結論は、當然全然異なるものでなければならぬのである。リカアドオによれば、拘束するものは自然であつて、

拘束されるものは人間である。矛盾は人間と自然との間に存するのである。故にリカアドオの場合には、行き詰まるものに特定の一社會形態ではなくて、人類社會其者である。マルクスにあつては、生産力の發展が資本主義を行き詰まらせ、且つ其の生産力の發展が社會主義的社會秩序の存立を可能ならしめるのであるから、資本主義の行き詰まりは歡迎すべき新社會出現の前提であるが、リカアドオに取つては、現存社會形態が行詰まれば、其が一切の終局であつて、局面の新開展は全然不可能である。故に利潤が皆無（若しくは皆無に近きもの）となり、資本の蓄積が廢せられ、人口の増加が停止する時は、單に資本主義の終末に達する時ではなくて、人類社會其者の發展が止む時である。故にリカアドオの悲觀主義がある。而して利潤の低落及び消滅を土地の餘剰生産力の減少に由て説明する以上は、此結論は避くべからざるものである。

　リカアドオが當時マルサスと説を殊にした問題に、一般的生産過剰なるものは果して起り得べきや否やの問題がある。普遍的生産過剰なるものは起り得ないとは、有名なジエエ・ベエ・セエの市場理論が教へる所である。其理由は「生産物に對して販路を開くものは即ち生産物であり」、一物の供給は即ち他物に對する需要を意味するものであるからだといふのである。リカアドオはセエと同意見で、「生産物は常に生産物又は勤労に依て購買せられ、貨幣は單に交換を行ふ媒介物に過ぎぬものである。特定貨物が餘りに多く生産せられ過ぎて、それに費された資本を償はぬ程の供給過剰が市場に起るといふことはある。併しそれは一切の貨物に就いては起り得ないことである」と謂つた。此説に反對したものは、マルサス、シスモンヂ等であつた。此問題は當時最も重要なる論爭問題の一であつて、後のマルクスの生産過剰論と此に對するツガンペラノウスキイ其他の批評及び反對批評は、此當時の論爭の繼續とも見るべきものである。兎に角、此問題に就ても、リカアドオは營利經濟組織に對しては悲觀してゐない。悲觀してゐるのは、人間の要求に對する自然力の有限であつた。

　以上を以てアダム・スミスの樂觀主義とマルサス、リカアドオの悲觀主義との對照の一端を記したつもりである。たゞ

此對照の外に、此推移に對する解釋があつて然るべき筈であるが、いま經濟唯物史觀に陥ることを好まぬから、此問題を他日に留保して、姑らく事實の記載に止めて置きたい。又資本主義行詰まりに就いて言つた、リカアドオとマルクスとの觀察の相違は、極めて興味ある理論問題を提出して居る。それは利潤率の低減、資本主義の行詰まりは果して生産力減退の爲めに起るか、或は生産力增進の爲めに起るかの問題である。假りに資本主義は其發達の最も古い英國に於て先づ行詰まるものとして、リカアドオに由れば、此の行詰まりは自然力の涸渇の爲めに起るのであるし、マルクスに由れば、現行社會秩序が生産力の發展を拘束する爲めに起るのである。亞米利加の資本主義は普通猶ほ多くの發展の餘地を存するものと認められてゐるが、それは亞米利加の自然資源が豐富なる爲めであるか、或は生産力發達の程度が亞米利加に於いて今猶ほ低い爲めであるか。此問題は更に別の機會に考へて見たいと思ふ。

唯物論哲學としてのマルクス主義

佐野學

(一)思惟の運動と社會的實踐の過程

(1) マルクス主義は哲學を有しないか?

マルクス主義は哲學を有しない、といふ卑俗な意見は社會發展の生きた現實過程を把握することのできぬ哲學者の大多數を支配してゐるように見える。然し十九世紀以來の大きい現實たるプロレタリアート運動の實踐原理として益々深刻な價値を發揮しつゝあるマルクス主義が確乎たる世界觀、方法論、認識論、歷史哲學の上に立脚しないといふことは斷じて無いのである。ブルジョア哲學者中の慧眼な人々、例へばナトルプ、シュタムラー、トレルチ、テンニースの如き人々は、種々の方面からマルクス主義の「粗雜さ」を證明しようとし、若くは之に一定の哲學的基礎付けを與へようとしてゐる。哲學者、殊にカント主義者の或る部分が社會主義に近付いたことは事實である。然し之等は不幸にも、そして當然にも、マルクス主義に對する偏見又は改惡を含んでゐる。

マルクス主義が哲學を有しないといふ意見は、歷史的にも論理的にも誤謬である。

科學的社會主義の創設者であるマルクスもエンゲルスも、その學問的生ひ立ちから言へば、哲學から社會主義に近付いたのである。二十七歲の青年マルクスは「プロレタリアートは哲學のなかに彼の精神的武器を發見する」「人間解放の頭部は哲學であり、其心臟はプロレタリアートである」と書いてゐる。マ

ルクスとエンゲルスとは、その經濟學、政治學、社會史等の學問的活動の領域に於ても、更にその偉大な實踐的政治的活動の領域に於ても、常に獨得の哲學的基礎に立つてゐる。その基礎とは辯證法的唯物論である。

エンゲルスは「吾々ドイツの社會主義者はサン・シモン、フーリエー、オーエンの繼承者であるばかりでなく、またカント、フイヒテ、ヘーゲルの繼承者であることを誇る」と言つた。マルクス主義はドイツ古典哲學と直接の關聯を持つてゐる。だが辯證法的唯物論は、人間思惟の歷史から見て、ロシヤの偉大な社會主義者プレハノフの言つた如く「古代ギリシヤに於てデモクリツトにより、又部分的にはその先驅者たるイオニアの思想家に依つて根柢を据へられた世界觀が既に到達した最高の發展段階を表現する、近代的唯物論なのである。」マルクス主義哲學は近代プロレタリアートの社會的鬪爭の實踐的必要に應じて生れてきたのであるが、その思惟材料からみれば、近世におけるイギリス經驗論、フランス唯物論からカント二元論、ヘーゲル辯證法的觀念論に至る近世哲學の精髓が其母液となつてゐるのである。これらのマルクス主義の歷史的性質については後に述べる。こゝには、先づ、何故にブルジョア階級の哲學者がマルクス主義哲學を理解しないか？といふ問題をとりあげて見る。

(2) 思惟と實踐

その最大の理由は今日の哲學者の大部分が生きた現實を「哲學的に」把握することができなくなつたからである。「哲學とは其時代を思惟の中に把握することである」といふヘーゲルの言葉の强烈な實踐的意義は、理論と實踐とを公然分割する今日の高踏哲學にあてはまらない。今日の觀念論哲學は人間の實踐生活人間の眞の文化生活、人間の未來の進步に對する刺戟力又は理解力を失つた樣に思はれる。なぜさうなつたか？それは、彼等の代表する階級、即ちブルジョア階級が社會的進步の主體たることを止めたからである。

思惟の運動と社會變革の過程は深い交互作用を持つてゐる。各意識が生活を決定するのでなく、生活が人の意識を決定する。各時代の哲學は其時代の人間の生活觀を最も深く反映する。だが「……理論的原則は現存する階級鬪爭即ち吾々の眼前の歷史的變動の實際的狀勢が普遍的に表現されたものにすぎない。」（マルクス）社會が階級的分裂をしてゐる限り、哲學は各個の階級の生活觀を最も强く反映するのである。他方に於て社會生活の本質は變革といふことである。否、自然と社會とを通ずる一切のものの本質は變革といふことに在る。自然及び歷史は矛盾に

たち、この矛盾の解消に念き、統一と共に更に新しい矛盾が現れ、次の新しい變革を用意する。矛盾は統一よりもヨリ本質的であり、すべての運動の根源であり、矛盾なきところに發展、動力、生命はない。不斷の矛盾、不斷の變革、不斷の統一は社會生活のみならず、原形質の儚き生涯をも支配する運動法則であり、運動形態である。「戰は萬物の父であり」（ヘラクリット）、「矛盾は前導者である。」（ヘーゲル）而して社會における矛盾と變革は、今日、階級の對立と鬪爭との形態をとつてゐる。

歴史は教へてゐる。變革の主體即ち社會の進歩を指導する階級は、各時期について一つしかなく、社會全體の進歩はこの階級の實踐に依つて推し進められることを。哲學者等は常に其屬する階級の利益を擁護する精神的武器として自己の體系を作り上げる。然し其階級の利益が全社會の利益と一致するが如き階級の持つ哲學のみが、進歩性を有し、現實性を有し、眞理を有する。眞理とは現實世界の正しい把握のみならず、その發展の方向の認識を含むものである。而して現實中の現實たるもの、最も集中化された現實とは、社會的矛盾の解決に役立つ變革的實踐である。この實踐を指導する階級が最も現實的の階級であると共に、その階級の哲學は歴史の進歩のために強烈な武器となる。

社會主義者のうちにも哲學を意識的に輕視する人々がゐる。この態度は全く誤謬である。かくの如き偏見が生じたことにも社會的理由がある。それはマルクス主義から革命的要素を拂ひ捨てた、政治上の日和見主義と對應するものであり、且つ同じ社會的根源から出てゐる。科學的社會主義の創設者が決して哲學を輕視しなかつた一例として、最近發表されたエンゲルスの三四十年前の遺稿「自然辯證法」を擧げることが出來る。同書はエンゲルスが一般的哲學方法としての唯物辯證法を自然にも適用し、自然科學の基礎的範圍を確定しようとしたものであるが、彼はそのなかで近代自然科學の根本害惡は哲學と絶縁したことにあること、自然科學の各個の認識領域相互の正しき連絡は單純の經驗的方法にては不可能であること、自然科學は理論的思惟即ち哲學を缺くを得ないこと、人間の思惟の歴史的發展道程即ち哲學史に關する知識が理論的自然科學の樹立する理論に標準を與ふること、等を述べ、そして次の如く言つてゐる。「哲學は社會及び科學の一定の發展段階における人間の思惟の最高の成果である。哲學は、それなくしては人間の知識が全く考へ得ないところの、概念あるひは範疇を展開する。しかし此等の諸範疇そのものは更に人間の知識及び行動全體の發展の歴

史的産物である。だから古い、新しい以前に支配せられた方法及び哲學的體系を基礎としては、科學の進歩は不可能である。人間の知識及び人間の實踐の所與の各發展段階には、それぞれ一定の「哲學」、一定の方法論が適應する。……」

(3) マルクス主義の獨歩性

哲學史家はカントよりヘーゲルに至るドイツの哲學運動の全環を極めて論理的に敍述し得てゐる。だがヘーゲル以後の哲學史の敍述になると、甚だ非論理的であり、羅列式であり、列傳風である。何故か？

その主要の社會的理由は、ブルジョア觀念論が社會進歩の精神的武器といふ切實な意義を喪失したからである。カントよりヘルダー、フィヒテ、シェーリングを經てヘーゲルに至るドイツ古典哲學は、十八世紀末よりのドイツのブルジョアジーの革命的實踐――封建的ユンカーの倒壞、大工業の確立、資本主義制度の確立、近代國家の建設――の理論的表現であり、その限りに於て社會進歩の實踐過程に對する最も有力な精神的保障者であつたのである。例へばカントについて見れば、彼はブルジョア社會がその革命期に於て生み出した最も偉大な思想家である。彼の思惟形式についての革命は、現實世界における革命の社會的進行程の現實的な一要素であつた。マルクスは百年前の一論文に於てカント哲學は「フランス革命のドイツ的原理」だと書いたことがあり、又、フランスのブルジョアジーの革命的社會哲學を十八世紀末のドイツの抽象的な自由主義のなかに反譯したものがカントであるといふ意味を書いてゐる。カントの理性とはブルジョア的理性のことであり、彼の意味する市民とは財産なきプロレタリアートを含まず、その自由なる意思とは自由競爭を欲求するブルジョアジーの欲求の哲學的表現である。然し封建的制度に比して資本主義制度は確に人類の偉大な進歩であり、その限りに於てカント哲學は強烈な進歩的役割を演じたのであり、この哲學の歴史的意義もそこに在る。――

然しブルジョア階級の革命的實踐は十九世紀後半より止んだ。かくの如き實踐の主體として、ブルジョア階級に代つて歴史の正面に登場したものはプロレタリアートである。この客觀的な社會的事實はドイツ古典哲學の包含してゐた革命的要素をプロレタリアートの哲學たるマルクス主義に譲らざるを得なくなつたのである。同時にドイツ觀念論は生きた現實を、プロレタリアート運動のなかに盛られてゐる眞理性を、把握する力を失つたのである。そして彼等は社會上の保守主義の支柱とならざるを得なくなつてゐる。

ブルジョア階級の革命的實踐、カントよりヘーゲルに至るドイツ古典哲學、プロレタリアートの革命的實踐、その理論的表現としてのマルクス主義の辨證法的唯物論、この四個の異れる形態を、歴史上の單一なる進化過程の四要素として把握しない限り、マルクス主義の歴史性を見拔くことはできない。エンゲルスがドイツの社會主義を以て其の古典哲學の繼承者と呼んだ理由はこゝに在る。エンゲルスは「フオイエルバツハ論」のなかでも、ブルジョア科學の領域に於ては、何物をも顧慮しないドイツ古來の理論的精神が古典哲學の消滅と共に完全に消滅し、無思想の折衷主義、卑俗なる立身出世主義が支配してゐることを指摘し、たゞ勞働階級の中にのみドイツの理論的精神が害はれずに存續し、勞働の發展史の中にのみ社會の歴史全體の理解の鍵の存することを敍述し、「ドイツ勞働者運動はドイツ古典哲學の繼承者である」と、こゝにも繰り返してゐる。

ブルジョア階級の哲學者がマルクス主義哲學を無視、非難、拒否する理由の一つとして、プロレタリヤ階級運動の實踐上の目標がブルジョア社會に於て殆んど實現し得ないものであるといふ理由をあげる事もできる。ブルジョア階級の哲學者がその階級的立場を捨つる場合に限りマルクス主義は彼等にとつて認識可能の對象となる。他方に於て、或る支配階級が沒落に近づいてゐる程度に從つて其階級を代表する哲學者が從來、他の階級に向つて試みた無意識的欺瞞に意識的欺瞞の加はる程度が多くなる。換言すれば御用哲學化する程度が甚しくなる。此事は吾々が既に今日の政治生活上にも味ひつゝある所であるまいか？

(4) 頽廢期の歐羅巴ブルジョアジーと其哲學

私は哲學が各階級の生活觀の反映であること、今日のブルジョア哲學が社會進歩の刺戟力でなくなつたこと、を述べた。その二三の例をあげて見る。

オスワルド、スペングラーの「西歐の沒落」は甚だ有名な本で、日本でも一部に於て持てはやされてゐるとのことである。だが此書物は資本主義末期のブルジョアジーの悲觀的傾向と懷疑主義との最もよき意識的表現である。世界戰爭の莫大な破壞、經濟的恐慌、社會的危機、ブルジョア制度の運命的な破綻の過程、近づきつゝあるプロレタリアートの不可避な政治的勝利、かゝる客觀的現實の前に、ブルジョアジーは絶望、懷疑、恐怖、悲觀を感ぜざるを得ない。スペングラーは最もよく之を表現する。彼は全人類史から因果律の思想を抹殺して運命といふ思想を以て之に代へてゐる。各種の社會は少年から老年へ、それから死を以て終る一の輪である、歐羅巴の「文化の輪」は

既に創造的な力を消耗して下り坂となつた。歐羅巴はローマ帝國の運命を踏む、と彼は「豫言」してゐる。だが歐羅巴にはブルジョアジーが沒落しても、プロレタリアートが殘つてゐる筈である。新しい歐羅巴の創造者たるものがプロレタリアートであることは、「運命」ではなくて、歴史的必然なのである。スペングラーが一九一八年に書いた「プロシヤ主義と社會主義」といふ小冊子は、その顯著な反動振りに依つて人を驚かす。彼はそこでブルジョア的努力、ファシスト的專制を憧憬してゐる。

彼は、宗教の中にあらゆる文化の本質があると考へ、神への信仰はあらゆる科學よりも價値があり、貴族と僧侶とがあらゆる方面に於て文化を擁護する者であるとなし、「ケーザル主義」を讃美してゐる。そして第四階級即ちプロレタリアートは無文化で、無形式で、無歴史で、「ラヂカルなる無」("das radikale Nichts") に外ならず、ケーザル主義を以て拘束すべきことを説いてゐる。一九一八年のドイツ革命後に、ブルジョアジーはファシスト的要求を持つに至つたが、スペングラーは敏感な獵犬の如く、これを「哲學」に表現してゐるのである。

同じ意味で、一種の流行哲學となつてゐるヴァイヒンガーの「かのように」(Als ob) の哲學をあげることができる。彼の哲學の根據は全く消極的のもの、即ち擬制である。彼はいふ、「神が在りとすれば、我はこのやうに行動せねばならない」とあり、「彼は神が存在するかのやうに行動せねばならない」と、又、いふ、「擬制主義にとつても價値がやはり最高のものである、だが此價値は形而上學へ導かるゝが如き、人間精神から獨立した永久の基礎ではなく、理性から派生した空想的活動の必然且つ合目的の形像である。價値は之に依つて非價値となるのでなく、反對に、人間精神の最も高價な立證である」と。ヴァイヒンガーの哲學はブルジョアジーの懷疑を極めてよく表現するものであり、新カント哲學の解體の一形相を成すと見ることができる。

パウル、エルンストといふ人の「ドイツ觀念論の崩壞」(一九一八年) といふ本も歐羅巴ブルジョアジーの降伏の一宣誓的表現である。彼は資本主義の盲目的な組織を呪つてゐるが、哲學の理想をアジヤに見出してゐる。「何故に支那に資本主義が其土台を得なかつたか？それは支那人が農業を愛し、尊敬し、その單純な欲望を充たすものを、自ら少許の土地から作り得たからである。……改良も革命も必要でない。必要なことは舊の道徳に歸ることである。」「最高の形而上學的思惟は、吾々は之を、印度の森林中で裸で生活し、米食のみで身を養ひ、冥想生活をしてゐる人々に負ふてゐる」などと書いてゐる。支那の農

民や印度の乞食坊主は社會の前資本主義期の一生活形態に外ならない。——歐羅巴の哲學者や文學者の一部にはアジヤの研究が甚だ盛になり始めたとのことである。しかしながら、そこには腐敗的ブルジョアジーの二日酔の焦悴した氣分が大分手傳つてゐる。これを無暗に有難がつてはいけない。吾々アジヤ人はアジヤを深く正しく理解しなければならない。だが、腐敗したブルジョアジーや小ブルジョア的ヂィレッタントの精神に於てせずに、プロレタリアートの觀點から。マルクス主義の精神に於て！

（二）マルクス主義哲學の源泉

本論文はマルクス主義哲學の發展を文藝的又は文獻的に研究するものでなく、その本來の論理的發展に沿ふて其本質的部分を明かにすることを目的とする。文藝的又は文獻的研究は有用なことであるが、書物の澤山ある、そして有閑なる人々にそれをやつて貰ふことにする。私は極めて簡單にこゝにマルクス主義哲學の源泉の主要部分について數言する。

プレハノフは曾つて次の如く言つた。「オルバウクとエルヴェシウスとは形而上學的唯物論者であつた。彼等は形而上學的觀念論と闘つて之を破つた。彼等の唯物論は辨證法的觀念論に地位を讓つた。この觀念論は今度は辨證法的唯物論に依つて破られた」と。この言葉はなほ甚だ不十分であるが、とにかくマルクス主義の哲學的源泉を簡潔に言ひ現はしてゐる。

マルクス主義全般の主要な源泉はドイツの哲學、イギリスの經濟學、フランスの社會主義だといふことが言はれてゐる。青年時代のマルクスとエンゲルスとは當時の獨、佛、英の最も發達した社會科學上の産物を非常の勤勉を以て研究し攝取したのであつて、マルクス主義は最初よりインターナショナルの性質を帶び、決してドイツの特殊的産物ではなかつた。之を其哲學についてみるに、青年時代の彼等は十八世紀のフランス唯物論にも大なる同情を持つてゐたのであつて、「神聖家族」（一八四五年）には之に關する叙述がある。フランス唯物論は機械論的であり世界を一個の過程として理解する能力がなく、實體を絶對不變と考ふる形而上學的誤謬に陷つたが、舊來の形而上學的觀念論をカントと異る方面に於て、だがヨリ有效に破つたのである。大膽公然たるフランス唯物論は教會、地主、專制君主、封建社會一般に對する大膽公然たる宣戰狀であり、廣汎なる大衆を封建社會の破壞へ呼びさます警鐘の役割をした。カントはキリスト教神學の傳來の「神と自由と不死」なるものが認識の對象たり得ないことを批判的に立證したが、實踐理性に於て之を再

び「要請」として取り上ぐることを敢へてした。是に反してフランス唯物論者殊にオルバックは神の存在をも否定したのである。

マルクスがヘーゲルの强烈な影響を被つたのは周知のことである。マルクスは唯物論者たる以前には確信的な辨證法的觀念論者であつたので、彼の學位論文「デモクリット及びエピクルスの自然哲學の差違」は純粹のヘーゲル的精神を以て書かれてゐる。カントの二元論を徐々に克服したドイツ觀念論の發展はヘーゲルの辨證法に於て極處に至つたものであるが、エンゲルスのいふが如くヘーゲル哲學は「顚倒せられたる唯物論」と言ひ得べきものであつたので、ヘーゲル左黨のなかからフオイエルバツハが出て唯物的自然觀人間觀を確立するに及んで、マルクス、エンゲルスはヘーゲル哲學の呪縛から解放され、その辨證法を保持すると共に徹底的な唯物論的基礎の上に始めて自己の哲學を完成したのである。マルクスとエンゲルスに對してヘーゲルの影響は國家、法律、財產、自然科學等に關する思惟方法にも及んでゐるが、最も深刻な影響を殘したものは辨證法に外ならない。フオイエルバツハの唯物論哲學の影響はヘーゲルにも劣らずに强烈なものである。フオイエルバツハ哲學は深刻な、痛烈な、剴切たものであつて、唯物論の歷史から見て、今日も價値たるを失つてゐないといへるが、しかし今日に於ても彼の生時と同じく、彼の哲學への價値に充分に正しい評價を受けて居らず、學校哲學から冷遇を受けてゐる。社會主義者はマルクス主義の重要な哲學的源泉たるフオイエルバツハ哲學を知る必要がある。

＊　＊　＊　＊

マルクス主義の哲學的基礎は辨證法的唯物論である。それは一のまとまつた綜合的なものであるが、その構成部分を分けてみると次の如くなるであらう。

第一は思惟又は精神を本源と見ずして自然又は物質を本源と見る哲學的唯物論。

第二は自然及び歷史の運動原理を把握する一般的方法論としての辨證法。

第三は歷史の唯物辨證法的把握たる歷史的唯物論（唯物史觀。）一般的方法論としての辨證法の提供する普遍的範疇はこゝで具體的特殊的形態を見出す。例へば生產力といふ範疇は歷史に特有なものであつて、自然界にはない。

第四は自然の唯物辨證法的把握としての自然科學の基礎理論。こゝでも特殊な具體的範疇が見出されねばならぬ。

第五は實踐を基準と見る認識理論。

第六に歴史的唯物論に依つて基礎付けられた倫理學を考ふることもできる。

哲學にとつて最も重要なことは正しい出發點と正しい方法とである。マルクス主義は出發點として哲學的唯物論を、この方法として辨證法を把る。私は本論文に於て第一に擧げた部分のみを取扱ふのであるが、先づマルクス主義が舊唯物論から如何なる遺産を繼承してゐるかを考へて見る。

(三)マルクス主義は舊唯物論のいかなる遺産を繼承するか？

マルクス主義の唯物論哲學は、これを人間の社會に、歴史に應用した點に於て、これを實踐と結びつけた點に於て、これを辨證法と結びつけた點に於て、舊來の唯物論と強烈なる差異を有するのであるが、全唯物論に共通する基礎的部分は完全に繼承され且つ發展されてゐる。ギリシヤ以來の長い傳統を有する唯物論はマルクス主義の形に於て其最高の發展を見てゐるのである。今、マルクス主義が舊來の唯物論から繼承し且つ發展してゐる基礎的部分を列擧してみよう。

(1)自然(物質)が本源である

我は非我に、意識は存在に、精神は自然に如何なる關係に在るかといふ問題は哲學上の根本問題である。エンゲルスはいふ「精神と自然と何れが本源的かといふ問題の答へに依つて哲學者は二大陣營に分裂した。自然に對する精神の本源を主張するものは觀念論に屬し、精神に對する自然の本源を主張するものは唯物論に屬する」と。存在と思惟とはあらゆる認識、あらゆる科學における最高の對極物であつて、これ以上重要のものはない。あらゆる流派の哲學は觀念論又は唯物論の何れかに屬する。兩者の中間を彷徨する二元論、折衷論は哲學として正統的のものでない。唯物論の基礎的前提は外部世界の承認であり、物が我々の意識の外に且つそれと獨立して存在することの承認である。マルクス主義はこの立場を把る。知覺される對象と、對象の知覺とは同一でない。實在そのものと實在の表象とは異る。實在は實在の表象とは無關係に存在する。實在の概念又は表象は主體の意識に依存して居り、後者の滅亡と共に消滅するが、それ自體としての實在即ち外的世界は吾々の意識と無關係に存在する。自然が人間以前より存在してゐたことは自然科學上の疑ふべからざる眞理である。

實在とは自然であり、物質である。最初の所與は物質である。在るとは思惟のなかに在るといふ謂でない。物質が本源で

あり、それは思惟の外に獨立に存在する客觀的存在である。物質から獨立した精神の先世界的存在なるものはない。精神も物質である。然り、最も高度に發達した物質である。意識は物質の一性質に外ならない。物質は吾々の感覺に反射する。物質とは空間及び時間のなかに存在して吾々の感覺に作用し且つそのなかに反映する客觀的實在である。人間も自然の一部に外ならない。人間は主體であると共に客體である。「私にとつて主觀的に純精神的、非物質的、非感覺的なものも、それ自らは客觀的には物質的、感覺的である。」（フオイエルバツハ）エンゲルスもいふ「吾々の意識と思惟とは如何に超感覺なものに見えようとも一の物質的肉體的器官たる頭腦の所産にすぎぬ。物質が精神の所産でなく、精神が物質の最高の所産に外ならない」と。

唯物論に敵對する一切の流派の觀念論は精神を創造者となし、精神の先世界的存在を假定するのである。觀念論にとつては、主體がなくては客體がない。思惟若くは表象が實在である。世界が自我なしには存在しなくなつたり、人間が腦髓なしに考へたり、認識又は感覺と物理的世界とが等視されたりする。プレハノフは獨在論者を揶揄し「獨在論に依れば諸君は諸君の兩親から生れないで、却て諸君の兩親が諸君から生れたことになる、何となれば諸君の兩親の實在も諸君の知覺における存在に還元されるからだ」とやつた。實に獨在論は個人主義を出發點とするのであるが、超個人主義から出發する類ひの觀念論も依然として獨在論における如き缺點を有する。觀念論のスコラ哲學的、神秘的、僧侶的迷妄は自然及び歷史に對する人間の正しい認識を妨げる。レーニンが「唯物論と經驗批判論」のなかに引用したフオイエルバツハの言葉を私も次に引用しておかう。

「人間の意識の對象とならない自然は、思辨哲學にとつて、乃至は少くとも觀念論にとつては、カント的物自體であり、現實性なき抽象であらうが、然し此自然が直に觀念論を破綻に導くのである。自然科學は必然性を以て吾々を導いて次の點に到らしめる――即ち少くとも自然科學の現在の狀態から考へてまだ人間存在の條件がなかつた當時、自然即ち地球がまだ人間の眼や人間の意識の題目でなかつた當時、自然はまさしく絕對に非人間的な實體であつたのである。觀念論はこれに對して――然しその自然は思惟されたる自然である――と反對する。勿論。然し私がソクラテスやプラトンを思惟するばかりだからと言つて、彼等が私のために存在しなかつたと言ひ得ず、また彼等が私の居ない現實の中に存在してゐなかつたことにはならないのと同樣に、この故に自然が或る期間に亘つて現實に存在しなかつたとは言ひ得ない。」

(2) 物質の存在形式は運動である

エンゲルスは「運動は物質存在の形式である、いつ如何なる所に於ても運動なき物質、物質なき運動はない」と言つた。運動は物質に固有なものであつて、その存在の根本形態である。現實性と運動とは分つことができない。何等かの運動をなしつつあるものが現實的であり、それが運動する限りに於て現實的である。運動は實在性、現實性の基準である。空間及び時間は運動する物質を前提する。空間及び時間はカントの謂ふが如く先驗的の直觀形式でなく、實在的形式である。物質は空間を充たして居り、物質は時間のなかに發展し運動する。運動のない所には生命がない。自然におけるすべてのものは變化と運動とのなかに在る。變化と運動とを基礎として、物質の一定の總計が存在する。運動の概念は變化の概念を伴ふ。吾々の知覺は不斷に變化するが、この知覺の可變性は物質の運動と變化とを反映するものに外ならない。物質の形式は運動であるといふ、以上の唯物論の基礎的説明がいかに重要な意味を有するかは、之を形而上學的觀念論や感覺的現象論に比較して見れば分る。之についてギリシヤ哲學における唯物論者ヘラクリットの貢獻を思ひ出して見よう。パルメニデスを首領とするエレア學派の哲學者は、世界を、變化する現象界と永久不動の實體界とに分ち、後者は思惟を通じてのみ認識し得るものであり且つ後者のみが實在的であると教へた。後世の感覺的現象論の父たるプロタゴラスは認識の源泉を感覺の中にのみ認め、表象のみを實在と觀じ、「人は萬物の尺度なり」といふ理屈に到達した。パルメニデスの形而上學的觀念論にありては、現象界と實體界との相互關係を説明することができず、兩者を統一する契機が缺けてゐる。プロタゴラスに在りては、感覺世界のみが實在的であつて、それと客觀世界との具體的な結び目が存在しない。ヘラクリトスは兩者を克服して次の如く説明する、曰く在るものは全て變化し、變化するものは全て在り、實在と非實在との統一は生成である、と。物質の根本的な屬性は運動、變化、生成に外ならない。ギリシヤ哲學における此鬪爭は、また近代哲學における唯物論の諸觀念論に對する鬪爭にも妥當する。

(3) 思惟と實在との自同性について

周圍の世界に關する吾々の思想はこの世界そのものに對して如何なる關係にあるか？吾々の思惟は實在的世界を認識する能力があるか？吾々は實在的世界の觀念及び概念の中に實在の正しい映像を産出する能力があるか？この思惟と實在との自同性

の問題に對し、唯物論者は觀念論者と異つた意味に於て肯定的な答へをする。吾々は感性を通じて事物を把握する。思辨哲學者が殆んど輕視した感性に再び科學的權利を附與したのはフォイエルバッハである。彼は廣い意味の感性、即ち感覺と感情とにおける直接の體驗を通じてのみ、主觀が實在に到達することを確信した。彼は、思惟を通じてでなく、感官を通じてのみ眞の意味の對象が與へられること、直接的知識の秘密が感性であることを説いた。しかし唯物論者は感覺的現象論者の如く、感性を本源だと見るものでない。物質が吾々の感覺に反映するのである。物質のなかには人間の感覺と一致する能力が存在してゐる。「唯物論は正統感覺論であり、純粹感覺論（現象論）は非正統觀念論である」（デボーリン）。唯物論は第一に物質を最初の所與と認め、第二に物質の基底に人間の感覺と一致する、同種的な、同質的な能力が含まれてゐることを承認する。客體は私にとつて感性の對象であろばかりでなく、またその基礎である。フォイエルバッハの言ふ如く「實在は主語であり、思惟は客語であるが、しかも後者は主語の實體を含有するところの客語である」「實在的實體だけが實在的事物を認識することが出來る。」思惟が自己存在をする抽象でない限りにおてのみ、思想は實在から離れない。いかにして思惟が實在に近づくかといふ、この根本問題は、唯物論的基礎に於てのみ解決することが出來る。私は次のやうに書いたことがある。「思惟と實在と、感覺と思惟との自同性は唯物論に依つてのみ説明せられ得る。感覺と思惟とは同一の根源を有ち、同一の發展の異れる段階を表はしてゐるものであり、物質の感覺性と精神性とは自然一般の發展史の過程の異れる表現である。觀念論者は唯物論を指して形而上學だといふが、唯物論がその認識論を思惟と感覺との同種性に基礎付ける限り、それは唯一のアンチ形而上學である。」

(4) 意識は實在に依つて決定さる

外部世界はそれ自體にて存在する。吾々の意識、思惟は外部世界に依つて制約せられる。「本來、實在が主語であり、思惟が客語であり、思惟は實在から出るが、實在は思惟から出ない。實在は自己から出で、自己によつて存し、自己のなかに根源を有する。」（フォイエルバッハ）主體は客體から創造されるものである。意識は超自然的のものでなく、物質的なものである。意識は實在に依つて決定せられる。

意識が實在から決定されるといふ、此唯物論上の觀點が社會生活に適用されると強烈な意義を帶ぶるようになる。超絶的な精神といふ創造者を假定する觀念論的歷史觀は、歷史から人間

性、自然性、現實性を奪つてしまふ。人間の諸社會的意識は彼等の社會的存在から決定されたものであり、前者は後者の變動に作つて變動するものに外ならない。人間の意識を最初の所與と見ることは、歴史の解釋に信仰主義を導入することを意味する。意識自體が物質的のものであり、物質的にのみ其起源が説明せられ得る。

(三)物自體と現象。絶對眞理と相對眞理

カントは　吾々は現象を認識し得るが、物自體は認識不可能のものであつて　たゞ信仰を通じて之に接近することが出來ると説明した。信仰主義に屈して、人間自身を侮辱する反動性は、プラトンの理念　パルメニデスの實在界　カントの物自體に共通する所である。エンゲルスはカントの物自體の説を不可知論と呼んだ。勿論、對象と知覺との數量的同一を信ずることは誤謬である。（現象論者は此誤謬を犯すものである。）吾々の知覺に限界があり、完全に外部世界と一致することは出來ぬ。物自體と現象とは數量的にも內容的にも完全な同一物でない。然し此故を以てカントの物自體が認識し得ないといふ信仰主義を許すことはできない。物自體と現象との間には何等本質的な差違はない。差違はたゞ既知と未知との間の差違があるだけである。カントの物自體とは實在性のない抽象である。本來、物自體とは「實在性ある抽象」であり、吾々の外部に存在して居るものであり、認識可能のものであり、「現象」と何等原則的に異る所はない。吾々の知覺の對象は吾々の知覺自體と異り、物自體は「吾々のための物」即ち現象と異つてゐるが、それは後者は前者の一部乃至一面であるからである。然し無知から知識が生成し、不完全な知識は次第に完全となる。人間の認識能力には絶對的な限界はない。相對的な可動的な歴史的な限界があるのみである。マルクス主義は人間の認識能力の可動性　進歩性を認めるし、一定の歴史的　時期における認識能力は根柢に於て物質的生產關係に依つて規定されることを認める。マルクスとエンゲルスとは「物の個々の具體的性質を知り盡したならば物自體を認識したわけである」といふヘーゲルの思想を支持するのみならず、この物自體を認識する基準は實踐であると考へる。エンゲルスは「プヂングを知ることは之を食ふことである」といふ通俗的な言葉で之を説明してゐる。

物自體と現象とを分つことは誤謬ではない。現象の基礎に物自體が在る。然し吾人の意味する物自體は認識の對象たり得る實在的客體である。然しカントは物自體を單に思惟されたものとして考へ、これを實在として見ない。彼は物自體の現實性

を、即ちこの客觀的實在性を奪ひ去り、本來の存在を有する本體」であるものを「思惟された本體」に變化してしまつてゐる。この點にカントの全誤謬が存してゐる。カントは唯物論者であり、觀念論者でもある。唯物論者たるカントは外界の實在性を承認した。觀念論者たるカントは精神の神秘性を信仰して、客觀的實在たる物自體を現實性なき抽象物に變化し、超絶的な、認識不可能な、彼岸のものとしてしまふのである。

人間はコールタールの中にアリザリンが存在してゐることを知らなかつた。今日、人間は之を知つてゐる。これを知つた瞬間から、コールタールはアリザリンとの關係に於て、人間にとつて物自體から現象となつたのである。レーニンは「現象と物自體との間のあらゆる秘密な、狡猾な差異は、無駄な哲學的たわごとである。事實上、各人は「物自體」の「現象」即ち「我々のための物」への單純明白な變形を幾百萬回となく、實踐上、見てきてゐる。この變形はまた認識である」と書いてゐる。

人間の認識は絶對眞理に到達し得るのであるか？ マルクス主義は然りと答へる。カント哲學が物自體の認識の不可能を主張するのは上述の如くである。他方に於てヒュームの如き懷疑論者やマッハの如き經驗批判主義者は人間の知識が絶對に相對的であることを主張する。しかし人間の無知は相對的無知に外ならない。必要なる條件が與へられたについては、人間の認識は絶對的眞理を反映する。こゝに絶對的眞理といふは終局的眞理といふ意味であつて、不變不動な永久眞理たるものが在るのではない。客觀的眞理とは事物の個々の現實性の總計をいふのである。人間の認識能力は歴史的になほ多くの制限を有つてゐる。然し人間の思惟はその性質上、絶對眞理を把握し得る。絶對眞理は相對眞理の總計から積み上げられる。科學の各發展段階は其度毎にこの總計のなかに絶對眞理の一粒々々を加へる。然し科學の各段階の發展程度に應じ、眞理の限界は、知識の將來の發展によつて伸縮されるものとして、常に相對的である。しかし現象論者の信ずる如く、絶對眞理と相對眞理との間に超え難い限界があるのではない。人間は相對的眞理に依つて一歩々々、絶對眞理に近づくのである。

認識の基準は實踐であり、生活である。人間の實踐は日々の生活裡に於て「物自體」を「現象」即ち「吾々のための物」に變じつゝある。吾々の認識とは人間の主觀的表象に實在的客體が適應することであるが、この認識の眞理性の試驗され、確證され、獲得されるのは人間の實踐の中に於てゞある。

唯物論者は一切の觀念論や不可知論と假借なく戰ふのである。ブルジョア哲學は實踐を回避し、抽象と純粹思惟の領域に

閉ぢ籠り、物自體、外的世界の剩ます所なき認識の可能を疑つてゐる。是に反してプロレタリヤ的思惟及び並に實踐は客觀世界の認識可能を大膽に認め且つ原則上、之を支配し得る可能性を認める。かくの如き點に於ても、プロレタリア階級はブルジョア階級との鋭き對立物である。

(6) 時間と空間

カント哲學は時間と空間とを以て先驗的な直觀形式であるといふ。これ亦一の僧侶主義、信仰主義である。空間と時間とは實在の法則、實在の形式、實在の條件であり、客觀的範疇である。私が此處に居り、君が彼處に居り、外的に相互に聯絡する。異つた場所に配置されるといふことがあつて、始めて組織ある自然がある。空間をその現實性に於て把握するとき、場所の制限性は空間から抽象し得ない。場所の制限性と結びついてのみ空間は一つの實在的具體的概念である。時間も單なる直觀形式でなく、根本的な生活形式、生活條件である。連續なく、運動なく、變化なく、發展なき所には生命も自然もない。發展と時間とは切り離すことができぬ。時間なき感覺、時間なき意思、時間なき實體は無意味である。時間なき發展は發展なき發展と言ひ得る。「絶對的本體は自ら自己の中より發展す」といふ思辨哲學の命題は、之を逆にした場合に於てのみ、即ち「自ら發展し、自ら時間的に展開する本體のみが一の眞の現實の本體である」と言ひなほした場合に於てのみ眞である。

唯物論は吾々の意識から獨立する物質の客觀的存在を承認する。唯物論は空間と時間との現象論的又はカント的概念を否定する。世界には運動する物質以外に何物もない。そして運動する物質は時間及び空間の外に於て運動することができない。時間外の存在、空間外の存在は全く意味がない。空間及び時間に關する人間の表象は相對的であるが、それは空間及び時間の客觀的實在を否定するものでなく、此相對的表象を通じて絶對眞理へ近づくのである。レーニンは「空間及び時間に關する人間の表象の變化性がこのいづれの客觀的實在をも顚覆しないのは、恰も物質運動の構成及び形態に關する科學的知識の變化性が客觀的實在と外的世界とを顚覆しないのと同樣である。」と言つてゐる。

(7) 必然と自由

唯物論者は物質が客觀的に存在するものであり、その存在形式が時間及空間の内部における運動であり、そして其運動が因果的に、合法則的に、必然的に行はれることを確信する。然る

に觀念論者に依れば、因果性も必然性も[illegible]であるといふことになつてゐる。原因と結果との間に客觀的な必然的連絡がないとすれば、原因が結果の後に來たり、時間が逆行したりすることが可能である。一方に人間の認識があり、他方に自然必然性がある場合、明白に自然必然性が第一次のものであり人間の認識が第二次のものである。後者が前者に適應するだけのことである。エンゲルスは「必然性は認識せられざる限りに於て盲目である」といふヘーゲルの思想を採り入れてゐる。自由とは必然性の認識なのである。意思の自由とは、事物に關する知識につれて事物を解決し支配し得る能力を謂ふに外ならない。人は必然性を認識し、之に服從することに依つて、自由となり、自然に對する支配者となる。人間の認識は相對的であるが、それは一歩々々、絕對眞理に接近し、「物自體」を「吾々のための物」たらしめ、「盲目的な必然性」を「吾々のための必然性」に變化させて行くのである。人間の眞の自由、眞の向上は唯物論的見地からのみ獲得される。吾々の外に獨立して活動しつつある法則を認識する根本過程もやはり實踐である。人間の實踐の過程に於て、自然現象の過程は人間の頭腦に客觀的に眞實に反映し、かくして人間は自然に對する支配者となる。物自體の認識を絕望し、恣意的な「意思の自由」を妄想する觀念論者に人間[illegible]マルクス主義はこの必然性と自由の[illegible]社會生活に適用する。歴史的必然の發見が科學的社會主義の前代における空想的社會主義との根本的な差違である。社會主義の勝利は之に依つて希望でなくて必然となつた。

(8) 抽象と具體

事物の存在形態は常に具體的であり、特殊的であり、個體的である。唯物論者は具體から抽象を導き、特殊から普遍を導き出す。これが事物の客觀的實在性、現實性、眞理性を把握する唯一の方法である。然るに觀念論者はその逆である。彼等は普遍を特殊に先行せしめ、抽象を具體に先行せしめる。彼等は世界の現象のなかに交互に動き合ふ無數の種々の原因の代りに、一個の原因、一個の本體、一個の名稱を與へる。彼等は普遍、抽象を自然の根本的本體と見、普遍から特殊へ、抽象から具體へと下つてくる。かゝる進路は全く顚倒したものである。觀念論者は思想を對象から抽象するのでなく、思惟された對象を原因と眺める。これは事物に關する思想から事物自體を導かうとするものである。無から現實を創造しようとするものである。マルクスはいふ、「抽象のみありて分析の存せざる以上、究極の

抽象に於て、一切の事物が論理的範疇として表現されるのは驚くに足りない。……あらゆる對象から有生たると無生たるとを問はず、人間たると物たるとを問はず、一切の謂はゆる偶然的なものを抽象することに依てこれを究極まで抽象してゆけばただ論理的範疇のみが實體として殘る、といふことになる。……形而上學者は此世界の事物は刺繡であつて、論理的範疇こそ地布であると主張する。……存在するところの一切の事物、地上と水中とに生きとし生ける一切のものは、抽象によつて、一の論理的範疇に還元され得るといふこと、かくの如き方法によつて、現實の世界を、悉く抽象の世界、論理的範疇の世界に溺らし得るといふことに何の不思議があるだらうか」と。

抽象するとは、自然の本質を自然の外部に、人間の本質を人間の外部に、思惟の本質を思惟の外部におくことを意味する。思惟と實在との眞の統一を破壞するものこそ觀念論者の抽象である。客觀的現實的自然は感性を通じて個々に、特殊的に、具體的に與へられる。低いものから高いものへ、無知から知へ、具體から抽象へ、特殊から普遍へ、これが人間認識の、人間生活の法則である。マルクスは「具體的なものは、それが多數概念の包括なるが故に、即ち雜多の統一なるが故に、具體的なのである。具體的なものは、現實なる出發點であり、從つて直觀と表象との出發點である」と言つてゐる。異なる、普遍としての普遍は、人間の妄想のなかに在るにすぎない

普遍、抽象から出發する觀念論者は、必然に、世界の本源者又は第一原因として神なるものを生み出すに至る。「神がなければ世界は説明する事ができぬ」といふのが徹底した觀念論者の言草である。だが事實はその逆である。即ち神があれば世界は説明すべからざるものとなる。現實的自然は神がなくとも、哲學や神學がなくとも、客觀的に實在してゐる。哲學の任務は事物を在るがまゝに、その現實性に於て、把握することに在る。普遍、抽象から出發する世界の説明は、必然に目的論的説明に轉形し、人間を偏見の牢獄に繫ぎ其眞の自由の獲得を妨ぐる。唯物論はかゝる信仰的、僧侶的、神秘的、スコラ哲學的、超自然的、超人間的なる一切の觀念論の虛僞と戰ひ、人間をして眞の人間性に立たしめ、眞の人間文化の創造を目的とするのである。

(四)マルクス主義は舊唯物論の如何なる部分を克服したか?

本稿は豫定よりも長くなつたから、以下簡單に敍述し、詳しいことは他日を期する。

マルクス主義が舊來の唯物論の基礎的部分を採り入れ且つ之

を發展せしめてゐることは上述の如くである。然しマルクスとエンゲルスは舊唯物論の維持すべからざる部分を變革し、改良し、克服してプロレタリアートのための新しい世界觀を作り上げた。彼等は彼等の舊來の哲學的見解の「自己淸算」のために、一八四五年より一八四六年にかけて「ドイッチェ・イデオロギー」といふ哲學的著作を共同著述し、新ヘーゲル派の批判といふ形の下にドイツ觀念論と決定的に袂別した。この書物はスチルナーに關する僅少の部分が以前に發表されただけで、原稿のまゝに殘つてゐたが、一九二五年に「マルクス・エンゲルス・アルヒーヴ」にフオイエルバッハに關する部分が發表された。それはマルクスが一八四五年に書いた「フオイエルバッハ・テーゼ」と共に、彼等の新唯物論の形成過程を知り得たる重要文獻である。（マルクス「哲學の貧困」、マルクス、エンゲルス「共產宣言」、エンゲルス「反デューリング論」エンゲルス「フオイエルバッハ論」、エンゲルス「自然辯證法」、マルクス「資本論」の數ケ所、等はマルクス主義の唯物論のための重要たものであるが、最も興味のあるものは前に擧げた二文獻である。）

マルクスとエンゲルスが舊來の唯物論の根本缺點と認めたものは何であつたか？　そして如何に之を克服したか？　を極めて簡單に述べてみる。

第一、マルクスとエンゲルスは舊來唯物論の多くが機械論的唯物論であることを認めた。十八世紀のフランス唯物論にあらゆる事物に機械論の尺度を適用した。彼等は世界を一個の過程として理解する能力がなく、實體が不變であるといふ形而上學的誤謬にも陷つてゐた。ビュヒネル、モレショット等の自然科學的醫學的唯物論もフランス唯物論と同じ誤謬を有するものである。マルクス主義はかゝる機械論的立場を克服し、歷史的過程の思想を以て之に代へた。

第二、マルクスとエンゲルスとは舊唯物論が非歷史的であつたことを認めた。後者は歷史の領域になると觀念論を持ち込んでゐた。マルクスはいふ「フオイエルバッハが唯物論者である限り、歷史は彼の前に現れず、彼が歷史を取扱ふに至ると既に唯物論者でなくなつてゐる」と。また自然そのものの解釋に於てすら歷史的に探究せねばならぬのであるが、舊唯物論は此點について發展を度外した非歷史的自然觀に立つてゐた。

第三、マルクスとエンゲルスとは舊唯物論が非辯證法的であることを認めた。世界は過程として把握せられなくて、不變の實體が假定されてゐた。運動は物質の屬性として示されてゐたのであるが、それは單に永久に循環して居るだけであり、常に

同一の反覆を繰り返すだけのものであつた。マルクスとエンゲルスはヘーゲルの辨證法を唯物論と結び付けた。對立物の闘爭、その同一性、矛盾、否定の否定、止揚、綜合、生成、飛躍、量の質への轉化及びその逆、世界の自己運動等、等、ヘーゲル辨證法の精髓は最も美事に唯物論の基礎と結合した。辨證法と唯物論との何れかを缺くマルクス主義は本當のマルクス主義でない。

第四　マルクス　エンゲルスは舊唯物論が人間の本質を抽象的自然的に理解し　歴史的社會的に理解しないことを認めた。人間は現實に於ては必然に一定形態の社會に屬する。人は人間を歴史に於て行動するものとして考察するときにフオイエルバツハの抽象的人間から社會に生ける人間に到達する。人間の本質はその實體から社會關係の總體である。フオイエルバツハの「人間の實體」といふ思想「種屬としての人間」といふ思想はマルクスに於て「社會化された人間」といふ輝ける思想に代つた。また人間は人間の全本質の展開する現實性の領域であり、人間は歴史に於てのみ明確な自己確認に到達する。

第五　マルクスとエンゲルスとは舊唯物論が感性のみに捕はれて實踐的方面を見なかつたことを認めた。人間は直觀の生物たるばかりはなく、實踐の生物であり、行動の生物であるのである。「フオイエルバツハは單に人間を感性的對象として見ただけで、感性的活動として理解しない。」「舊唯物論の立場は市民社會である。新唯物論の立場は人類社會又は社會化された人類である。」「哲學者は世界を色々に解釋してきただけである。だが肝要なことは世界を變革することである。」マルクスはフオイエルバツハの人間觀に多大の尊敬と同情を有したに拘らす　彼が現在の生活關係に何等の批評を試みないことを責め、彼は實踐から逃避したと罵つてゐる。

舊唯物論は人間の社會生活を唯物論的に説明し得なかつた。マルクスとエンゲルスとは自然と歴史とに通ずる辨證法的唯物論の見地から、人間の社會生活を規定する最も根本的な推進力が物質的生産關係であることを發見した。政治、法律、宗教、道德、藝術、哲學等の社會上の上部建築の起源と發展とに始めて綜合的な説明を施し得た。そして今日における社會的矛盾の解決が階級闘爭の形態を採ることを科學的に明かにした。歴史の必然も、人間の自由も、人間の創造的活動も、舊來の神秘的妄想的な觀念論の立場からでなしに、始めて唯物的に、即ち科學的に、説明せられた。

＊　＊　＊　＊　＊

今日、マルクス主義者の内部における哲學的潮流は少くと

もこゝにあると思ふので第一群はマルクス及エンゲルスの哲學的基礎に立つて、これを忠實に祖述し且つ發展させてゐる一派である、ロシヤのプレハノフ、レーニン、ブハーリン等を先頭にするものである。世界戰爭前におけるカウツキイの著書にはマルクス主義哲學の正統的方面を發揮したものがある。第二群はカント主義に依る社會主義の哲學的基礎付けを行はうとするもので、墺太利のマツクス、アドラーが其首領である。マルクス主義は一切の觀念論と敵對するのであつて、カント主義を許すことが出來ない。第三群はドイツのゲオルグ、ルカツチの一派であつて、彼の著書「歷史と階級意識」が代表作である。此書は多くの淸新な見解を藏してゐるが、辨證法を歷史にのみ限らうとする點に於て根本的に誤謬である。自然と歷史とを分割すれば、唯物論は徹底的に崩壞する。吾國における社會主義の陣營内には在來、粗雜な經驗主義のみが存してゐたが、社會生活殊に無產階級の政治生活の急激な展開は、社會運動の新しい哲學的基礎付を必要とするに至り、その實踐的原理としてのマルクス主義の哲學的基礎についての眞摯な思索がおこりつゝある。かゝる思想運動は在來見たるが如き流行哲學の推移と異なり、吾國の社會生活の內部に深い根柢を持つてゐるものであり、從つてその影響は強いものとなるだらう。マルクス主義は[illegible]的發展を宣揚し、その成果に[illegible]ざることを[illegible]する必要がある。（一九二七、[illegible]記）

決裂したる軍縮會議

水野廣徳

六月二十日以來ジュネーブに於て開かれたる日英米三國の海軍々縮會議は、各國委員四十餘日に亘る努力の効も空しく、八月四日を以て不成功裡に終りを告げた。世界の將來は平和か戰爭か、やがて免れ難き海軍擴張の競爭、日本は更に新たなる國際重大の機局に當面した。

既に決裂したる軍縮會議過去の經緯を説くことは死兒の齡を算するよりも尙ほ無意義である。併しながら會議の決裂を論ずる爲めには、決裂に至る迄に於ける各國の主張や、努力や、交渉商議の曲折やの大要を知ることが必要である。左は前號擱筆以後に於ける會議經過の概略である。

○多難の軍縮會議

開會の劈頭、米國の提出したる補助艦比率五—五—三案には日本が反對し、補助艦總噸數案に對しては英國が諾と言はず、日本の提案たる現有勢力基準案には英米共に贊成せず、當初專ら單艦問題のみを提案したる英國は其後突如として巡洋艦七十隻約六十萬噸と云ふ尨大なる要求を提示し、日本全權のみかは世界を驚倒せしめ、爲めに會議は早くも停頓するに至つた。英國の此の突飛なる要求は軍縮會議の精神を沒却し、却て軍備擴張を促がすものとして日米の大反對を受け、世界の輿論亦英國に不利であつた。英國の提案に從へば、之に依つて英國は目下建造中竝に協贊濟(未起工)のものの外に尙ほ約十四萬噸の增建を要し、米國は英國と同噸數に達する爲めには現勢力以外に更に四十三萬噸の大擴張を必要とし、日本亦假りに英米の六割

とするも、倘ほ約十在萬噸を建造せねばならぬのである。由來常識に富める英國としては斯る無思慮なる提案と云ふべく、是れ現保守黨政府の軍備過重政策の罪とも云ふべきであらう。

英國の此の尨大なる軍備擴張的提案に氣を呑まれたるものか、米國全權は米國最初の提案たる英米巡洋艦の最大限度たる三十萬噸を四十萬噸に增額し、英國に向つて妥協を求めた。此時日本全權は、米國が日本側に一言の交渉もなく恣まに公式提案を變更して英國に交渉したるは、國際信義に反するものとしてツムジを曲げ、米國全權に一本參らしたなどの餘興も傳へられて居る。

日本全權は米國の此妥協案四十萬噸を以て倘ほも軍縮の精神に反せる擴張案となして反對し、別に日本の妥協案として、水上補助艦英米各四十五萬噸、日本三十萬噸を提案した。斯くて巡洋艦噸數に就いて日英米各異りたる提案を見るに至りたるが、各國案の距離大なるが爲め、容易に妥協點を見出すを得ず、會議の空氣は漸次險惡となり、早くも決裂の危機をすら傳へらるゝに至つたのである。之が爲めに決裂を避けんとして第一回總會は延期に延期を重ね、其間に難局打開の爲め種々の交渉協議が行はれ、英米兩國政府よりは其全權に對して政治的解決の内訓さへあつたと云ふことである。

斯くて英國は自國提案の十斜に讓みたるもので、元の主張讓みたる巡洋艦六十萬噸の要求を撤回し、一三一〇條件の下に米國の妥協案たる四十萬噸を承諾することゝなつた。併し日本案とは倘ほ巡洋艦を通算して十五萬噸の開きがある爲め、我全權は飽くまでも軍備擴張協定には絶對反對の旗幟を押し立て、英米の妥協案を突き放した。此時若し米國が英國と妥協提携すれば、日本は可なり苦境に立つたのであるが、米國の眞意は寧ろ日本案と近似せるが爲め、日本に同情して傍觀の態度を取るに至つた。是に於て今度は日本と英國との正面交渉となつた。英國が軍備擴張を意味する自國案を拋棄して日本案に同意するか、日本が自國の正しき主張を棄てゝ英國案に屈するか、左も無ければ會議決裂となるかである。軍縮會議の成否は兎に角、軍縮會議が軍擴會議に早變りして世界と後世との物笑ひとなるや否やは、一に懸つて日本の決心に依るのである。

事情斯くの如く、ジュネーブ會議は豫想の通り難産に陷り、一難去つて又一難、英米の妥協略ぼ成つて纔に決裂を免れたかと思へば、今度は日英案の衝突である。會議順導の爲め種々の會合が所々で行はれ、或は一方に軍人を除外したる純政治的巨頭會議が開かれるかと思へば、他方には五十面下げた軍人委員達が「ヤング、ネーバル、ボーイ、ミーチング」をカフエーで

開くなど、互に打ち解け話やら、腹の搜り合やら、こゝジュネーブの空は晴朗常ならずで、軍縮の産みの陣痛に全權以下各國委員の苦惱の程が思ひやられたのである。

○第二回總會

かくて會議の空氣も稍や緩和せられたる爲め、七月十四日に至り漸く第二回總會が米國代表本部の大廣間に於て開かれた。英國全權は從來の提案を撤回し、更に巡洋艦驅逐艦の合計噸數を英米五十五萬噸、日本三十三萬噸とする新提案を持出した。此案は米國最初の提案に於ける最大限度に合致するもので、三國間の比率は五—五—三である。之に對し日本全權は先づ其の比率の點に於て反對するのみならず、日本の要求の如く英米の七割を保有するとせば、日本は現勢力以上に約十萬噸の建艦を必要とし、軍縮の精神と目的とに背反するとの理由を以て、斷乎として英國の新提案を拒否したるが爲め會議は再び迷宮に入り更に商議を重ねることゝなつた。

此日の總會に於て三國代表は交々立つて何れも自國の立場と自國の主張とを聲明した。之に從へば英國は

其の全世界に跨がる長大なる海上交通線を確保する爲め、少數の大巡洋艦よりも多數の小巡洋艦を有利なりとし、之が爲め巡洋艦の排水量と備砲の大サを輕減せんことを主張し、之に對して米國は

自國の通商を妨害する敵巡洋艦を驅逐する爲めには多數の劣勢巡洋艦よりも寧ろ數は少くとも勢力の大なる巡洋艦を必要とし、之が爲め英國の提案たる排水量及備砲の輕減に同意し難き

ことを唱へ、日本は其間に在つて專ら英米の妥協に力め且つ英米兩國にして同意するに於ては、日本は如何に低き制限にも應ずるの用意あることを聲明して居る。此等の聲明に依りて巡洋艦に對する英米の要求が全然相反せることが明白となり、會議の眞の難關は四十萬噸とか五十萬噸とかの量の問題にあらずして、巡洋艦の備砲を八吋とするか、六吋とするかの質の問題であることが判然した。此の備砲問題こそ實に今回の會議の死命を制するものにして、會議の前途には更に一團の黑雲が低迷するに至つたのである。

世界大戰當時英國大艦隊司令長官として武名嚇々のヂエリコー元帥は新西蘭代表として此日の總會に列席し、實戰の經驗よりして大に專門家振りを發揮し、「大戰當時英國は百十餘隻の巡洋艦を有しながら尙ほ不充分でありしことを考ふれば、今日の七十隻は決して過大の要求ではない」などと、英國の元帥會議

と間違へたほた演説を爲し、米國全權ギブソン氏から「戰時に於ける萬一の場合に應ずる爲めに必要なる軍艦をば、平時に於て悉く準備せねばならぬとすれば、海軍力の制限は到底行はるべきものでなはい」と、痛いところを一本突かれたるなどは誠に御氣の毒の至りであつた。元帥に取つては海上の決戰よりも机上の論戰の方が苦手であらう。我國も東郷元帥を軍縮會議などへ派遣することは絶對禁制である。

○英國の最後案

越へて十九日に至り、日英兩國互に五萬噸づつの歩み寄りにより、水上補助艦英米各五十萬噸、日本三十二萬五千噸、内一萬噸巡洋艦英米各十二隻、日本八隻とし、此外各國とも其の割當噸數の二割五分に相當する艦齡超過艦を保有し得ることに、兩國全權の間に妥協が成立した。之が所謂日英假協定案と稱せられたるものである。之に對して米國の同意を得る爲めには先づ巡洋艦の備砲問題を解決せねばならぬのである。然るに米國は八吋砲主義を固執し一歩も讓るの氣配が見へない。故に英國にして讓歩するにあらざれば、折角成立したる日英假協定も米國の賛同を得るに難く、會議の成功を期することが出來ないのである。

ここに於て英國政府は事の重大なるに鑑み、更に軍縮會議に對する根本方針を確立する爲め、一八日同全權を倫敦に招還し、翌日閣議を開いて審討審議すること一週間に及び、外務大臣は議會に於て英國全權の主張と要求の至當たる旨を聲明した。英國全權は二十八日ジュネーブに歸還するや、即日英國の最後案として左記要領の新案を日米兩全權に提議した。

一、水上補助艦（註、巡洋艦及驅逐艦）

日本　三二五、〇〇〇噸　英米各　五〇〇、〇〇〇噸

内一萬噸（備砲八吋砲）巡洋艦

日本　八隻　英米各　十二隻

一、潜水艦

日本　六〇、〇〇〇噸　英米各　九〇、〇〇〇噸

一、一萬噸以外の巡洋艦

最大排水量　六、〇〇〇噸　最大備砲　六吋砲

愈最後の難關たる備砲問題が最後の俎上に載せられた。英國の此最後案に對し、米國全權は卒直に、備砲制限に對しては絶對不贊成の旨を表明し、會議は愈決裂の五分前に持ち來たされ今は唯形式的に米國政府最後の同答を待つばかりとなつた。鈍重の空氣はジュネーブに漲つて、各國委員の面には沈痛の色が漂ふて居る。

六吋對八吋と云ふ純軍事的問題の中毒に犯されて正に死に瀕せる軍縮會議を生かさんが爲め、米國よりはダレス案の追加條項、日本よりは建艦休日の調停案など、種々政治的解毒劑が試みられたるも、事此に至りては最早やカンフル注射も、酸素吸入も効を奏せず、あはれジユネーブ軍縮會議はシヤイネストツク狀態を續けること數日の後、遂に八月四日午後三時を以て、各國全權の聲明書をば會議を葬むる挽歌として空しく終焉を告げたのである。

○會議決裂と各國の態度

今夏六月クーリツヂ大統領提案の當初より難産の氣味なりしジユネーブ軍縮會議は遂に流産した。主要役たる各國全權の注意や努力の足らざりし譯ではなく、母體が帝國主義と云ふ遺傳的病毒と國際猜疑と云ふ神經的疾患に犯かされて居たが爲めである。今更誰が決裂の責任者であるかなどと論議立てするにも及ぶまい。言はゞ連帶責任である。唯併しあれ程多くの人が多くの金を費して爲せる數十日の長き努力に對し、何の得る處、何の殘す處なしとは、あまりに情なく、あまりに呆氣がない。せめて會議の跡を尋ねて各國の態度を觀つて見たい。

先づ主催者たる米國に就いて見るに、同國は開會の劈頭、補助艦總噸數をば水上水中を合して英米最大限六十四萬噸、最低限五十一萬噸を提案したるは、其の標準の根據が不確實なるのみならず、日本政府が數回に亘りて五－五－三比率の適用に反對を聲明せるに拘はらず、此の比率を正式に提議したるは、會議の主催者として稍や誠意を缺げるの嫌がある。殊に英國より巡洋艦六十萬噸要求の提案に接するや、倉惶として最初の提案よりも十萬噸を增して、英國に妥協に求め、日本より一喝を食ひたる如きは、聊か狼狽の譏を免れ難きと共に、自國提案に對する確乎たる自信と、軍備縮少に對する斷乎たる決心の乏しかりしことを表白するものである。併しながら自國案よりも一層軍縮の意に適へる日本案の提出を見るや、自國案を固執することなく、日本案を支持したるは聊か軍縮に忠なるものと云ふべきであらう。

次に英國の態度を見るに、同國が巡洋艦六十萬噸、之に驅逐艦二十萬噸を加ふれば實に八十萬噸と云ふ尨大なる水上補助艦の要求を提出し、世界の視聽を驚かしたるは、常識的なる英國の遣り方としては頗る意外とせるところであるが、世評の不人氣を見れば忽ち二十萬を値引して米國の四十萬噸妥協案を容れんとし、更に日本の強硬にして合理的なる反對に會へば、再び五萬噸を減じて遂に水上補助艦五十萬噸に減額し、當初の要求

といふ十箇條を提議したるに、[illegible]のみである。と共に、そこに英國の英國たるところがある。之を[illegible]して、英國が軍縮會議に忠實なるの餘り、忍ぶべからざるを忍んで多大の犠牲を拂ひたるものとすれば、英國の誠意と雅懐とに對して至大の敬意を表するに足るも、八十萬噸の言ひ値を九十萬噸に負けるとは、神聖なるべき軍縮會議を以て掛引を主とする商談と同一視せるの疑がある。英國の態度に對し何人も一片の疑惑を抱かざるを得ないであらう。若し夫れ米國の六吋砲搭提出に在りては、純軍事上の見地に於て英國としては不當の要求である。同様に米國が之に反對したるも亦軍事上の見地に於ては不當である。當初世人が深く意に留めざりし備砲問題が、遂に會議を決裂せしむるに至る迄に重大化したるは、畢竟英米共に軍事的要求に重きを置き過ぎ、政治的考慮を怠りたるが爲めに歸因する。軍事的見解が政治的見解を壓すれば、軍縮會議の到底成功せざるべきは前號に於て論じたるところである。

最後に日本の行動である。開會の初め我國が國防の最少限度を理由として、何等軍縮の實なき現勢力基準案を提出したることに就きては前號既に論じたる通りで、當時我等は軍縮に對する日本當局の誠意を疑つたのであつた。然るに其後英國の修正案出づるに及びてより以來、我海軍當局と我全權との態度は頗[illegible]權が敢然として英國の妥協的なる提案を拒否し、米國代表に對しては日本は絶對に同意なきことを聲明し、以て英米の妥協を向ふに廻はすも敢て辭せざるの意氣と決心とを以て會議の[illegible]に努力し、遂に英國をして我提案に近づかしめたる正々の主張と堂々の態度とは、我外交史上稀に見るの立派さである。殊に我全權が第二回總會に於て、若し英米にして同意せば如何に低き制限にも應ずるの用意ある旨を聲明したるは、平和に對する我國の誠意と覺悟とを全世界に表明したるもので、我等平和を愛する者の深く感謝するところである。

從來の我が主張は常に、綜合的に平和欲求の崇高なる人道的思想に基づくとも、或は又單に軍費輕減の經濟上の目的に出づるとも、何れにしても軍備の縮少が世界の平和に及ぼす結果は一である。之を華府會議の際、陸奥の復活に横車を押し通ふし、數理觀念の缺けたる國民と嘲はれたる當時に比すれば、數段の頭の進步である。彼の唯然として出兵のみ是れ事とし、國費を浪費して厭はざる陸軍當局に比し、少くも世界的識見を有せる海軍當局の明智に對し國民は讃美してかなりである。ジュネーブ會議に於ける成績不良につき[illegible]する。

○八吋と六吋の衝突

抑も八吋砲と云ひ、六吋砲と云ひ、口徑(彈丸の直徑)僅に二吋の差である。此の僅に二吋の差が、動もすれば將來の國際關係に重大不測の禍害を残すの恐れを懷はず、一たび決裂せば再び回復し難き軍縮會議を犠牲に供して迄も爭はねばならぬとは何故であらう? 英國は何故に六吋案を提出したか、米國は何故に八吋案を固執したか。聊か軍事專門に亙るの嫌はあれど、簡略に其の理由を述べて會議決裂の眞相を解剖して見よう。

華府會議に於て、巡洋艦の最大排水量を一萬噸、最大備砲を八吋と制限した。凡そ許されたる範圍内に於て最大限度の兵力を保持せんとするのが、軍事上自然の要求であると共に軍人の通有心理である。一萬噸八吋砲巡洋艦は華府會議後果然各國海軍の爭ふて採用するところとなり、目下建造中并に協賛濟のもの英國十五隻、日米各八隻の多きを算して居る。

そもそも戰時に於ける巡洋艦の任務は多種多様にして、其の任務に應じて大小形體を異にするを便利とする。而して巡洋艦の最も重要なる戰略的任務は自國の通商保護と敵國の通商破壞である。而して自國通商を保護する爲めには、積極的には味方の巡洋艦を優勢ならしめ、消極的には敵の巡洋艦を擊攘することである。又敵の通商を破壞するには、直接には敵の商船を襲ひ、間接には之を保護する敵巡洋艦を擊滅することである。

英國の如く海外到る處に廣大なる屬領地を有し、且つ本國に要する食料物資の大部分を海外の供給に仰ぐ國に在りては、海上通商航路は國家生活の大動脈であつて、萬一之が杜絶切斷するが如きことあれば、英國は忽ちにして死滅の外はないのである。故に英國としては其の長大なる商船航路を保護する爲めに、出來得る限り多數の巡洋艦を必要とすることは理の當然である。而して一定の經費を以て多數の巡洋艦を保有する爲めには、製艦費や經常費等の關係上艦型を小にすることが必要である。即ち英國としては其の通商航路を保護する爲めに、例へば一萬噸の大巡洋艦十隻よりも五千噸のもの二十隻の方が有利なのである。是れ英國が今回の會議に巡洋艦の最大排水量をば六千噸に輕減案を持出した所以である。

英國は又其の通商航路の廣きと共に多數の優良なる商船を有して居る。現在英國は速力二十節以上の快速商船四十餘隻を有せるに對し、米國は僅かに四隻、我國の如きは未だ一隻の既成船をも有しない。更に十五節乃至二十節の商船に至りては英の三百隻に對し、米は僅に五十隻を有するに過ぎない。而して是等商船は華府協定に依りて戰時六吋砲六門の搭載を許され居る

を以て、之に武装を施せば相當有力なる假装巡洋艦として、充分通商保護の任に服し得るのである。故に戰時英國は優勢なる假装巡洋艦を有し海上に活躍し得るも、米國は此種の艦に於て僅に英國の六分の一を有するに過ぎないのである。是れ米國が對英作戰に於て大なる苦痛とせるところでなければならぬ。然る處、六吋砲と八吋砲とは口徑は僅に二吋の差に過ぎざるも、其の攻撃力は約二と五の比を有し、八吋砲の力は六吋砲の二倍半に相當するを以て、六吋砲を搭載せる假装巡洋艦は八吋砲を有する巡洋艦に向ひ到底對抗は出來ないのである。左れば若し英國の敵にして八吋砲巡洋艦を多數に有する時は、折角英國が持てる優勢なる假装巡洋艦も大に其威力を減殺される譯である。是れ英國が一萬噸巡洋艦（八吋砲装備）の隻數制限と、六吋砲案とを提出したる所以である。即ち敵國の八吋砲巡洋艦を制限して、自國の假装巡洋艦の威力を増さんが爲に外ならないのである、

英國が六千噸、六吋砲巡洋艦案を提出したる理由の眞意を了解せば、米國が之に反對したる理由も亦自ら知られるであらう。即ち米國は食料並に物資に於て殆んど自給自足し得るとは云へ、國家經濟が外國通商に依つて維持せらるゝことは他國と同一轍である。故に戰時通商の破滅は經濟戰に於て窮極の敗戰に陥いるものである。左れば米國としては戰時自國の通商保護と英國の通商破壊上の爲め、米國の強大なる武装した巡洋艦を要望要求する作戰上、攻撃力の大なる八吋砲巡洋艦を必要とするのである。叉英國は六吋砲と八吋砲との爭なるも、其實假装巡洋艦として商船を活用せんとすると、活用せしめずとするの爭である。敵は本能寺に在りで、底には底があるのである。

英米兩國が専ら軍事上の問題に捉はれて相爭ひ相譲らざる間に立ちて、我日本は一段の高所より兩者の妥協調停に力めたるは、我國の立場が然らしめたところとは云へ、大に欣快に堪へぬところである。併しながら我國としては食料物資を海外に仰ぐ點に於ては、英國と等しく通商航路保護の爲め小形巡洋艦の多數を有利とし、假装巡洋艦を有せざる點に於ては米國と等しく敵の假装巡洋艦を驅逐する爲め八吋砲巡洋艦を必要とするものである。此問題に關し若し強ゐて英米何れに與みするかと云へば、寧ろ米國と利害を同じうする點が多いであらう。故に米國が英國案反對の矢面に立たざりしならば、或は日本が米國の代理を勤めたかも知れないのである。

右の如く戰爭を目的として軍事的見地より言へば、英國の主張は、英國として當然であり、米國の主張も亦米國として當然である。互に相背反せる當然が出會へば、武備の破裂するのも是れ亦當然の歸結である。凡そ國家の安全は自國の武力のみに

信頼するか、將た國際の信義をも信頼するかである。自國の武力のみに信頼しながら軍縮會議に參加するとは自己僞瞞である。之に反し國際信義を信頼するならば、軍事上の要求は或程度まで犠牲に供すべきである。否な寧ろ犠牲に供して差支ないものである。國際信義を信頼せずして軍縮會議を開くなどは、恰かも相手を信用せずして取引の相談をすると同樣、疑惑續出、誤解頻至、到底相談の纏まる筈がない。世界の大政治家を以て任ぜる人間も、一たび帝國主義的軍備過信病に犯されると、忽ち色盲となつて此の見易きの道理すらも判らなくなるものと思はれる。或國の態度の如きは恰かも淸盜の袈裟同樣、軍縮の名の下に相關的軍備擴張の鎧が餘りに露骨に見へ透いて居る。

○決裂の教訓

斯くてジュネーブ會議は遺憾ながら決裂した。各國委員五十日の苦心も、努力も空しく水泡に歸して一個條一項目の協定すらも殘らない。如何に各國全權が共同聲明書などを發表して善後の計を講ぜんと圖るも、自我的、利己的なる其の醜き尻尾を隱すことは出來ない。殊に英米全權の發したる決裂の聲明書なるものは、何れも愚痴の繰言繰り返へして、自讃自讃、互に責を他に課せんと力め、動もすれば自國主張の辯明に急なるの餘り、他の揚足取に腐心せんとせる如きは、正に醜の最後屁同樣鼻持がならない。其間に在りて決裂直接の衝に當らざりしだけあつて、日本の聲明が最も妥當なりしことは必ずしも自畫自讃ではなく、日本全權は外に使して能く其終りを全うしたるものである。

物理學上に謂ふところの力の不滅が眞理であるならば、あれ程多數の軍縮會議委員がジュネーブに於て費やしたる有形無形のエナージーも亦何等かの形を以て殘らねばならぬ譯である。或は一面に於ては、今回の會議は軈て築かるべき軍縮大殿堂の基礎に投ぜられたる目に見へぬ礎石であるとも言へるであらう。或は又他面に於ては、今回の失敗は將來の軍縮問題に致命傷を與へ、延ひて世界平和に一大陰翳を投じたるもので、所謂鐵既の草臥儲であるとも見られるであらう。何れにしても今後の軍縮運動に對する高價にして而かも苦き經驗と教訓であつたことを失はぬであらう。今度の會議に依つて我等は愈明確に次の教訓を覺ることを得た。

不平等不合理なる國家の獨占權が正認せらるゝ帝國主義的にして資本主義的なる現在國際組織の下に於ては、眞の平和を目的とする軍備縮少は決して行はれない。若し行はるゝものありとせば、夫は唯經費節約を目的とせる自國に都合よき利己的軍縮のみである。元來帝國主義や資本主義の目的は畫

界の所有と利得との獨占である。而して其の目的を達成するに最も有効なるものは軍備と稱する武力である。故に帝國主義資本主義國が軍備を縮少せんとするは猶ほ自ら其爪をもぐと同様の自己破滅を意味する。唯他國が自國よりもヨリ多くの犧牲を拂ふ時に於てのみ軍備縮少に賛同する。

されば今後苟くも國際的軍備縮少を提議せんとする者は、之が達成の爲めには自國の軍備をヨリ多く犧牲に供するの覺悟が無ければならぬ。此覺悟と犧牲物なくして、唯平和人道の美名佳辭を連ねて漫然軍縮會議を提議するとも、會議の結果は唯徒に會議開催地のホテルとカッフエーを肥やすに過ぎぬであらう。華府會議のハーディング大統領とヒューズ全權とは軍縮の祭壇に捧ぐべき多くの犧羊を持つて居た。ジュネーブ會議のクーリッヂ大統領とギブス全權とは正かの時に使ふべき唯一枚の切札も持たずして、カルタの親元となつたのである。不用意と云へば不用意であるが、正直と云へば正直である。此の苦き經驗と明かなる教訓とに鑑み、各國共に今後進んで軍縮會議を提案する如き大膽にして勇敢なる政治家は恐らく有るまいと思はれる。斯くて軍備縮少問題は帝國主義のツラストとも評せらるる國際聯盟の專賣物となり、其の可能性は愈益薄くなりつゝある。

○決裂後の世界相

ジュネーブ會議決裂の結果として忽ちに生ずる問題は補助艦建造の競爭である。今の各國の政治家は會議決裂を口實として直に露骨なる海軍擴張を行ふ程に率直でもなければ愚昧でもあるまい。故に會議が不成功に終つたからとて明日より海軍競爭が始まると思ふは恐らくは杞憂であらう。併しながら當分の間或は永き將來に亘りて新しき軍縮會議の開かるゝ見込もなく、且つ今回の會議に依りて或程度迄各國海軍の腹の底が判りたる結果として、最早や誰に遠慮もなく之が對應策を自由に講じ得るに至つたことは事實である。殊に米國は從來巡洋艦の建造を極度に制限し居たる關係上、之が反動として相當大なる擴張を見ることは恐らく既定の事實であらうと思はれる。米國の此の巡洋艦擴張が若干程度まで我が海軍を刺戟し、爲めに海軍大臣の平和好愛計が何度まで傾斜するかは、國民の今より大に注意すべき點である。國防の最少限度が又もや動き出さうとも、國民は財布の紐を固く締めて妄りに弛めてはなるまい。

會議決裂が齎らす最も重大なる國際問題は英米の關係であらう。將來兩國の親善關係が如何に變はり行くかを論ずるは尙ほ聊か早計であるのみならず、國際の禮儀に反する恐れもある。

併しながら會議の結果が兩國の間に新たなる深き一條の溝を加へることだけは爭ふべからざる事實である。殊に英米兩國が事實的に互に假想敵國と目して、私かに牙を研ぎ居れることが、今回の會議に依りて相等露骨に暴露せられたるは、世界に投げられる一つの大なる謎であつて、兩國の爭覇氣分は今後一層濃厚を加へるであらう。英佛、英露、英獨、而して英米と、相手代はれど主代はらず、英國が世界一方の横綱の位置を占むることも既に久しいものである。此の世界の爭覇戰に連戰連勝の英國と、現在事實的の世界第一國米國との相撲こそ天下稀代の見物である。血は水よりも濃ゆしと云ふが、黄金は血を水にする力がある。同じ流れを汲むアングロサキソンの兄弟喧嘩、他人の我等の干與すべき幕ではない。爭ふ者をして爭はしめよ。我等は見料なしに見物したい。日英同盟などの燒つ木に火を付けて、海軍競爭の渦の中へ卷込まるるなどは愚の骨頂である。日本は決して淫婦の秋波に鼻氣を延ばしてはなるまい。

次に會議決裂の結果として最も憂ふべき問題は華府協約の廢滅である。同協約は大正十一年より有効期限十ケ年、滿期一ケ年前に繼續協約が結ばるゝにあらざれば滿期後五ケ年にして自然消滅するものである。故に昭和六年には繼續するや否やを決せねばならぬのである。同協約並に其付屬協約こそは現在世界に於ける國際平和の柱礎であると共に、關係各國民を海軍競爭の重き負擔より免れしむる救の神である。されば同協約には縦令改定すべき種々の缺點ありとは云へ、大は世界平和の爲めにも、小は我國民利福の爲めにも、是非とも存續せしめねばならぬものである。

然るに今回の會議に於ける補助艦制限の失敗は、直接間接に世界の軍備熱を煽り、爲めに華府協約にヒビの入る如きことの絶無を期し難い。若し斯かることありとせば、今回の會議こそは實に毛を吹いて疵を求めたるものにして勞して害あるものである。クーリッヂ大統領は平和を求めんと欲して平和を害し、軍縮を得んと欲して軍擴を促がしたる結果に立ち到るのである。之を以て世界各國民は將來戰爭の脅威と負擔の過重とより免れんと欲せば、今度の失敗に絶望することなく、自暴することなく、せめて華府協約だけなりとも、之を擁護し、之を存續し、以て海上の戰魔をして縦令補助艦の手足は自由に動かし得るとも、胴體たる主力艦だけは協約の鐵鎖を以て固く制縛して置くことが必要である。而して眞の軍備縮少は道を更めて出直すにあらざれば、到底成功の彼岸には到達せぬであらう。元來帝國主義と軍備とは相並行せる鐵軌の上を走る兩輪の車である。一方を進めて一方を止めることは到底出來ぬ因縁の軸に依つて繋がれて居る。軍備縮少よりも帝國主義の縮少が先決問題でなければならぬ

(二年八月七日)



普選前衛戰と無產政黨

馬場恒吾

日本に現存する無產政黨は之を右傾より數へると、日本農民黨、社會民衆黨、日本勞農黨、勞働農民黨の四つである。彼等は何れも今秋の普選前衛戰ともいふべき府縣會議員選擧に向つて進出すべく意氣込んで居る。この選擧が殆んど全國的（三十九府縣）に行はれる普通選擧の第一戰と見て有意義なるのみならず、無產政黨としては、此府縣會選擧に依つて、來年の衆議院總選擧に對する進出力を試驗せられると云ふ心持ちがある。それ故に彼等は已に其立つべき候補者の數をおぼろげながら發表した。それに依ると日本農民黨百十五名、社會民衆黨約六十名、日本勞農黨五十六名、勞働農民黨百四五十名と云ふのである。固より此等の數は選擧間際迄には多少の増減はあるだらうけれども、現在の合計にて三百七十以上になる。今秋選擧さるべき府縣會議員定員總數一四五〇に對し、無產政黨候補者の數は四分一强になる。府縣會議員の四分一を無產政黨員で占めれば非常に好成績と云ふべきであるが、實際は此候補者數の幾割が當選するかゞ問題である。私は無產政黨の幹部を訪ねて、其所屬の黨派、若しくは他の黨派の當選見込を聞いて見た。どの黨がどれ丈の當選見込で居るかは、玆ではそれを別々に書く事を氣の毒に思ふ。それ故に各方面で當選見込と云ふ數を合計して計算すると、それが僅かに六十名乃至七十名と云ふ事に、諸

方面の意見が一致したのに驚いた。それは立候補に對する當選率が六分一であり、改選府縣議員總數に對し、二十四分一と云ふ情けない數字を出したのである。

固より無産政黨候補者の當選數が六七十名に止まるか、或は又豫想外に多數に上るかは實際の成績を見た上でなければ判らない。それは無産政黨今後の活動如何にも依り、全國に亘る選擧民の自覺の程度如何に依りて決せられる事であるが故に、今日の當選見込み少數なるに對し、何人も悲觀する必要はないのである。併し、何故に當選見込みが斯の如く少數であるかの理由に對しては、吾々の注意が促がされる。

斯の如く當選見込みの少數なる理由に對し、無産政黨以外の解釋には少なからざる誤解がある。例へば或者は云ふ。左傾的の無産政黨は候補者が當選するや否やは眼中に置かず、只全國的に賑かに候補者を立て、それを機會として、其黨の抱く所の理論を宣傳すれば、彼等の目的は達せられる。そして無産政黨としては其れが正しい方針である。何となれば無産政黨の任務は單に中央政界に活動する事にある。それは無産政黨のみならず、凡べての政黨は中央の議會中心に活動すべきものであつて、政黨が地方自治に浸入し、從つてそれを攪亂する事は百害あつて一益なし。だから無産政黨が府縣選擧に力瘤を入れるのは愚だ。少くとも只之を宣傳用以上に考へるのは間違つてゐると云ふのである。

地方自治制に政黨の浸入が好ましきか否かは殆んと論ずる價値のない問題である。何となれば、それが好ましきにせよ、好ましからざるにせよ、政黨は地方自治制に浸入し來ると云ふは動かすべからざる事實であるからだ。既成政黨が地方自治制を喰物にした弊害は之を認める。併し其弊害に向つて戰ふ爲めには無産政黨若しくは既成政黨ならざる他の議員團を以て之に對抗する以外に方法はない。既成政黨が惡い事をしていけないと、いくら選擧民に說いて廻はつた所で、他に頼るべき有力なる政黨若しくは政團が存在せざる限り、投票は矢張既成政黨若しくは其代名詞的の政團に依つて掻き集められるのである。其實例は之を東京市政に見る。吾々は既成政黨が如何に東京市政を腐敗せしめてゐるかを聞き飽きるほど聞かされた。そして市政を刷新する必要のある事は、知り過ぎるほど知らされた。然るに悲哉、さうした高尙な理論家は自分では立候補せず、又他の誰れそれに投票してやれとも云はず、只百年一日の如く市政を刷新せよと說くが故に、市民の投票は初めは宇宙に迷ひ、最後には矢張元の既成政黨の擁立する候補者に投ぜられる。既成政黨の自治體侵入に對しては、矢張政權の政黨的勢力を以て戰ふ以外

に有効な方法はない。これはあるやうに考へるのは政治の非常識た頭脳の所有者か、或は無政府を折る事の好きな少人である。

無産政黨は全く用のなきものならばいざ知らず、若しこれが社會的有益性を有するものとしたら、それは先づかうした自治制刷新に用ひらるべきである。のみならず、無産政黨の中堅地盤たる無産階級の關心は其重心を生活に置く。既成政黨の地盤たるブルジョアが生活に心を労する事少なく、從つて天下國家を論ずる餘裕があるに對し、無産階級は天下國家をも論じはするけれども、これ以上に彼等自身の生活に大いなる苦心を有してゐる。そして實際生活に直接に關係を有することは、國政と自治政、孰れが大であるかは容易に判斷出來ない。無産政黨の活動の分野は中央政界にあるべく、府縣自治制は第二義的のものであると説くのは、恐ろしく獨斷に流れた議論である。

尤もかうした議論は革命理論を無條件に受け入れゝば多少可能になる。資本主義最後の段階たる帝國主義に入れる世界——金融資本の確立——ブルジョア階級國家の崩壞——政權奪取——無産者獨裁——さうした理論を信仰するものに取つては、勇敢なる前衛分子の活動に依る中央政界に於ける政治闘爭が此運動のクリームであり、亦その指導方針である事は敢て不思議とするに當らない。然るに別に革命理論の信仰者とも見へない所の指導者に、[illegible]のみある如く[illegible]のと見られる。

併し如何に左翼無産政黨——即ち中央に於ける政權奪取を目標とする黨派にしても、局外者が思ふほどこれほど府縣選擧の實績に無關心でない。彼等も矢張出來得るならば多數の當選者を得んと思ふ。それのみならず、如何に只宣傳用にのみ議會を利用せんとする方針であつても、議會に一人の代表者をも有せずしては、宣傳の目的すら達する事が出來ない。そして議會に代表者を送る爲めには先づ府縣會議員をも當選して、衆議院選擧の地盤を開拓しておく事が絶對に必要になる。故に如何に左翼無産政黨であつても、今度選擧の結果に無關心であり得ない。それを無關心であるかの如く云ふは世間の誤解である。

選擧の成績が不良なるべき理由として局外者の説く誤解の今一つは、無産政黨が四つに分裂して互に悪口を云ふ事、恰も既成政黨の泥仕合の如くである。それが彼等の選擧をして失敗に終らしむべき所以であると云ふ。これは全く理由なき事ではない。それ故に社會民衆黨は府縣選擧に對する無産政黨の共同動作を企てた。それは六月二十二日佐世保に行はれた縣會議員補缺選擧に際し、其所の海軍工廠が當日投票を行使せんと欲した

三百六十名の職工に早退けを許さなかつた事に關連してゞあつた。當時工廠の當局は職工が投票したければ半日缺勤すればよいと云つて、平常の通り午後四時四十五分迄就業せしめた。投票は五時〆切られ、其間の十五分間に投票場に行き着く事は絶對に不可能であつた。其結果全投票數の三割である三百六十名が棄權したと云ふ事件があつた。

社會民衆黨は將來もこんな事件があつては困ると云ふので、先づ日本勞農黨に向つて共同動作を採らん事を提議した。日本勞農黨は此交渉は無產政黨中の最左翼にある勞働農民黨をも誘つて共同動作をすべきだと云ふ。社會民衆黨は、農民黨、日勞黨とは共同働作を採る意志はあつたが、極端な指導精神を有する勞農黨と共同する意志を有たなかつた。從つて此交渉は破れ、府縣選擧に對する有力なる提携も今日の處は不可能になつた。併し無產政黨間の仲が惡るいと云ふ事が實際選擧に大なる影響を及ぼすか否かを今から豫言するのは早計である。何となれば、最左翼の勞農黨は獨自の理論と方針とを有するけれども、他の三黨は程度の相違こそあれ、何れもソーシヤル・デモクラトの範圍を逸してゐない。それ故に彼等は本質的に飽くまでも相剋せねばならぬと云ふ理由がない。それのみならず、彼等の幹部は大抵個人的には親密な友人關係になつてゐる。それ故に彼等が實際の府縣選擧に臨んで、互に候補者を立てる時になれば、今より鹿爪らしき地盤協定をせずとも、以心傳心的に容易に有無相通ずる手段に出づる可能性がある。絶對に當選見込のなき地盤に於ては三派共に候補者を立てゝ互に宣傳するであらうけれども、比較的に有望な選擧區に望めば、一議席でも既成政黨にやるよりは、無產政黨の何れかに取らせ度いと云ふ潛在意識が働く、それ故に無產政黨間の泥仕合が之を既成政黨のそれほどに、深刻惡辣なものと見るのは稍觀察を誤つた嫌ひがある。

無產政黨の何れをもが創立一年前後、まだ地方に其地盤を擴げる餘裕を有たぬと、それも彼等の選擧成績が惡るからうと云ふ理由の一つとして數へられる。然るに地方に於ける無產政黨の宣傳は東京に居る智識階級が思ふよりは、遙かに廣く、且つ深く行き亘つてゐる。それは無產政黨は既成政黨の如く、地方を開拓する時間と餘裕を有たなかつた。併し無產政黨の主義主張は一般的な新聞雜誌が質的にも量的にもかなりの同情を以て、連續的に報導し評論した。それが政治の一新を希望してゐる一般人民の間に深き感興と希望を惹起してゐる。之に加ふるに、無產政黨の宣傳は既成政黨に依つて非常に助けられた事情がある。既成政黨に屬する政治家が地方に行つて行ふ所の傍若無人の振舞、其首領株の野心と利權慾に關する惡聲醜聞、それらは

地方人民の心をして自然に、政治的には黒塊の塊りの如く見へる無産政黨に向はしめた。地は熱して居る。種を蒔けば大に發展する準備は出來てゐる。

斯の如く、無産政黨の選擧成績が惡るからうと云ふ理由として、局外者の理解する所には到る所に誤解が發見せられる。併し、成績が惡るからうと云ふ見當に關しては無産政黨自身の觀察も同樣である。

然らば選擧の結果が悲觀される實際の理由は何ぞやと云へば、それは矢張金の問題となるのである。府縣選擧の選擧費用は法律に依つて制限されてゐる。それは選擧區内の有權者總數を定員で割り、それに四十錢を乘じた額を超ゆべからずと云ふのである。例へば有權者一萬、定員二名の所ならば、五千に四十錢を乘じたる二千圓が制限額である。然るに此運動費として計算されなくてもよい所の種々の費目が設けられてゐるが故に、既成政黨の候補者は大抵一萬圓乃至二萬圓を準備してかゝるものと見られる。既成政黨本部に於ては、府縣選擧の運動費として四十萬圓を作らねばならぬと耳語されてゐる。本部の費用がそれであるが故に、候補者自身の作らねばならぬ金が一二萬に上る事は想像に難くない。

之に對して無産政黨の運動費は極めて些々たるものである。尤も外間では勞働農民黨に五六萬の資金を作るならば七八十名の候補者を立てるであらうと噂するものがある。それにしても一人前七八百圓の運動費である。日勞黨も亦一人前七八百圓見當で運動費を作らんとしてゐる。社會民衆黨は運動費は支部一任にして、本部は應援辯士、ポスター、其他の物質的援助を受持たんと云ふ。これ故に一人前の運動費が明確に知られない。日本農民黨は支部と本部とに依つて一人前二千圓見當を當がはんとする。曰く、千五百圓以下で選擧を爭ふのは無謀なことだ。候補者保證金二百圓、郵便物費用五百圓、事務所二ケ所十日間で二百圓。演説會場三十ケ所で三百圓、雜費三百圓、合計千五百圓が最少額である。外に五百圓なければ心細い限りだ。それ故に二千圓作らねばならぬと。それが黨内の空氣である。

無産政黨が恐れるのは、何れの無産政黨にも加入してゐない勞働組合、農民組合の向背である。假令へば之を各地に散在する局地的の農民組合に見る。全國の農民組合約四千として、それが中央に於ける無産政黨の何れかに屬してゐるものが一千あつて、殘りの三千は個々獨立してゐる。それが果して既成政黨の誘惑に對して果して反對の立場を固守し得るや否や。從來は知らず、過去に於ては、此等の農民組合が團體として既成政黨に投票した例は農民運動者の頭に深刻な印象を殘してゐる。

固より無産政黨の運動者が費やす十圓は、既成政黨の百圓に向ふ。それは前者の行動がすべて簡易率直であるが故に、今迄の政治運動家のブルジョア氣分に要する費用が省かれ、其運動者は既成政黨のそれの如く、金の爲めに働くと云ふ習慣を付けられてゐないからである。併しそれにしても運動の實費は必要とせられる。それが千五百圓若しくは二千圓と計上される。

無産政黨の陣營に於ても、今日已に府縣會選擧を見當てに支部樹立、演説會開催に活動してゐる人がある。それが地方の小ブルジョアであつて、前記の相當の運動費を捻出し得る個人にあつては、其運動の形勢は極めて有望である。其主張する所が、捨鉢的な革命理論でなく、而して眞實に既成政黨に依つて腐落せられたる現代政治を改革せんと欲する熱心を示す限り、それは地方人心の深き共鳴を得て居る。さうした種類の候補者は當選殆んど確實と見られる。併し此種類の候補者が全國に幾人あるかゞ明瞭でない。

選擧の實戰に際して、無産政黨は其實際運動の方針に關して一つの岐路に立つてゐる。即ち其主義主張に共鳴する有産者に向つて無産政黨の門戸を開放するや否やである。彼等の政治運動をして有効ならしめる爲めには、有産者の共鳴者をも入黨せしめ、そして其黨の運動資金を豐富ならしめる事である。然らずんば此政黨運動を何處迄も勞働運動、小作人運動の延長となし、有産者に對しては、それが有産者なるが故に排斥を續ける事である。日本では日本農民黨、社會民衆黨は稍前者に近く、日勞黨、勞農黨は後者に近い。併し英國では此問題は一九一八年以來解決されてゐる。其年の選擧以來、英國の勞働黨は階級的黨派たる地位を捨てゝ、貴族でも資本家でも、其政策に贊成するものならば之を歡迎すると云ふ態度を採つた。其結果勞働黨は急速な發展をして、遂にマクドナルド内閣を組織するに到つた。其内閣には三名の貴族が大臣となつてゐた。

來るべき府縣選擧に於て、無産政黨が最少六十名の當選を得るとする。それにしても一府縣一二名である。一二名の議員は府縣政を動かす力を有たぬ。併し、彼等が府縣會議員である地位は、彼等に府縣會の議決以外に、無産階級の爲めに大いに働くべき機會を與へる。今迄官憲の爲めに不當な壓迫を受けた勞働組合、農民組合は、其代表者をして、府縣會の議場に於て大聲叱呼して官憲を糾彈せしめ得る。知事若しくは警察部長に對し、同等若しくはそれ以上の立場に立つて談判し得る。例令當選議員の數が僅かに六十名であつても、敢て悲觀するには足らぬ、無産政黨の六十名は既成政黨六百名の價値を有し、そして其れは近き將來に於て實數六百名になる種子である。(二、八、五)

滿鐵首腦者の更迭と滿蒙政策

神田正雄

一

滿蒙の問題が我國家の存立の上に、重要價値が加はつて來ると同時に、如何に滿蒙を處理するかは、我朝野を擧げて論議研究の題目となつて居るのは事實である。此の際に滿蒙を支配する重要地位に在る、南滿鐵道會社々長、副社長の更迭を見たことは、相當に世人の注目を惹いてゐる。

安廣前社長は、所思を實行するの所氣を持つた人で、緊縮時代の社長としては蓋し適任であつた。しかし一長一短は免れず積極的に活動するには物足りないとの批評も少くなかつた。大平前副社長は溫厚の長者で假すに時を以てするのでなければ手腕を發揮するやうの人でなかつた。

今回新たに社長になつた、山本條太郎氏、副社長に就任した松岡洋右氏は、何れも當代の手腕家として自他共に許してゐる人々である。その上に現政友會內閣は前內閣の對支方針を手緩しとし、一大刷新を斷行せんとし、その手初めとして滿蒙問題の解決を遂げんと意氣込んで居り、故に黨內の最も辣腕家である山本氏を社長に拔き、黨籍は無くも田中首相の信任厚く且つ前に滿鐵理事として聲明を馳せた松岡氏を副社長に配したることは、此機會に於て、南滿鐵道會社の組織を一新し、その權限を擴張し、大に滿蒙經營の實を擧げんとするものではないかと察せられる。

由來我が國の滿蒙經營は、明治三十八年九月に、ロシヤからその所有であつた、權利、特權、財產、炭坑等を讓り受けて以來、種々な變遷を經て今日に至つて居るのであるが、當初滿洲の經營は、政治的に重きを置き、多くの施設も經濟本位とのみは行かなかつた。されば支那及び列國の誤解を受ける事もあつたが、その後時代の變化に伴なひ、專ら滿蒙に於ける經濟的の發展に努力することゝなつた。

滿蒙の經營が既に經濟を本位とすれば、從來の如く滿蒙開發

の機關を、複雑にし、所謂三頭政治、四頭政治の混亂に陥れることは、直接滿蒙開發の任に當るもの許りでなく、一般の迷惑尠くないので之を刷新し、寧ろ滿鐵會社の如きを中心として經營を進めることの時宜に適したるを思ふものである。

二

一體滿鐵會社の如き對外的であり、且つ營利を業とするものにあつては、國内の黨爭の外に超越せしめなければならぬとの議論も立つ。然るに此度は前に述べたやうに、政黨に重大關係を有する人を社長に任命してゐる一面からすると、國民が疑惑の目を瞠はらざるを得ないものがあるが、又一面からすると政黨政治を完全に行はんとすれば、滿蒙に於ける政府の政策を圓滑に遂行する上には腹心の士を擧げて局に當らしめる必要がある。吾々としてはその行ふ所の政策が、果して國利民福を主眼とするか、將た又黨利本位に行動するかを充分に監督する責任がある。

我國朝野で叫ばるゝ滿蒙開發は二つの意味であると信ずる。一つは滿蒙の地は、日清、日露二大戰役の結果、日本とは特殊關係の地域であるから、政治上他の支那本部の領域と同じでない。仍て滿蒙に於ては政治的に特別の待遇が受けたいと云ふのと、今一つは以上の關係にある土地柄であるから、經濟的には是非特殊の關係に置いて欲しいと云ふのである。

滿蒙を特殊關係の地域と思つて居ることには兩說共に變りはないが、最近は領土侵掠的の意味に於て滿蒙を考ふる日本人は殆んどないと云ふても宜しい。日本の望む所は、滿蒙を經濟的に開放して我國民の生活問題解決の一地方として、支那人と共存共榮の目的が達したいと云ふのにある。

此見地からすると、實業家としての經驗と手腕とある人が、局に當ることは寧ろ歡迎するとも排斥する理由を認めない。又滿蒙經營の先驅は如何に考ふるも交通機關の完成にある。即ち鐵道の敷設と自動車路の修築は、その重要なる事である。然るに從來滿鐵會社の方針が動もすると會社本位に傾いて、滿蒙開發の眞目的に副はない場合が多かつた。然るに今度副社長となつた松岡君は首席理事で居つた際に、滿蒙開發は鐵道敷設が先決となして、是が完成に努力し、昨年開通した洮昂線の如き一に松岡氏努力の結晶とさへ唱へられて居るので氏に期待するものも少くない。

但し手腕家は兎角細理を顧みない弊がある。加ふるに氏等の背景を爲す政黨は有名の利權獲得に拔目のない黨員多く、現に先年同派の人が滿鐵會社を支配した際に、忌はしい事件の發生

したことは世人の記憶に新たな事實であつて、此點の實效に決して忽せにすることは出來ない。

三

滿鐵會社を中心としたる。滿蒙開發の事業は其數少くない。しかし是を斷行するには、先づ滿鐵會社に根本的の改革を行はなければ出來ない相談である。唯り滿鐵會社許りでない、半官半民の特殊會社は、情弊が多くあつて、首腦者二三の更迭位で改革の實を擧げやうとしても到底目的を達し得られるものでない。特に滿洲の伏魔殿と稱せられて居る、滿鐵王國の根本改善は餘程の手腕と勇氣とを必要とする。

滿鐵會社の改革を終了したる後は、會社の本務に立返つて鐵道の敷設に努力するは第一着手である。日本及び列國の對支政策の根本が鐵道の敷設にあると同樣に、我國の對滿蒙政策の根本問題は、支那側と協議の上、滿蒙各地に成るべく多く鐵道を敷設することであると信ずる。

昨今は支那側に於て鐵道敷設の有利な事を悟つて、支那自身の出資で鐵道を築造する機運に向て來て居るが、支那の政情が現在のやうであつては、他の有力の援助なくては迚も滿足の敷設を爲す譯に行かない。茲に滿鐵會社の活動の機會が生ずる譯である。

但し從來は滿蒙の鐵道敷設に向つて滿鐵會社の方針は、社線を培養する線路の作築には喜んで應ずるも、社線培養を裏切るものは勿論、社線に利益を齎らさないものは、その敷設を喜ばない傾向があつた。滿鐵が營利會社である以上は、是も致し方なしとするも、苟も同社が滿蒙開發の大使命を有し、その開發が間接に又直接に我國の人口及び食糧問題を解決する一助となるに於ては、出來得る限り鐵道敷設に努力すべきである。

四

滿蒙の地に交通機關の完備することは、直接に移住民を促し、農產品の増加を見ることは過去の實例に照して明かである。從てその生產物資を他に搬出する爲めに、又滿蒙に人口の増殖は、他より雜貨その他の必需品を移入せざるを得ないので、自然に港灣を新に修築することも考慮しなければならない。

滿蒙はその土地廣く、生產物多量なる爲め、從來物資を輸出するに、大連、浦潮、營口の三港を有するも、既に現在に於ても十分と云ふことが出來ずに居るので、將來は必然的に吞吐港新設を盛に叫ばれるであらう。而も滿鐵が大連港の發展愛護にのみ意を注ぐ結果、他の港灣新設を好まぬやうな事があつては

ならぬ。

滿鐵會社は尠くも營利を目的とする一方に滿蒙開發に特殊の使命任務のあることを痛感し、社員の上下を通じて、支那人關係の上に於ても徒らに、時代錯誤の優越感念を去り、相互扶助の上に立つて相提携するに至つたならば、滿蒙開發の第一條件と稱せられてゐる商租權の解決も困難なく進行するであらう。

又朝鮮人の滿蒙移住、是も外交的の交渉許りでなく、滿鐵の如き有力の後援者があつて、その謀ふ所を指導することゝなれば、意外に潤滑な發展を見て、我國の經濟的に滿蒙發展の實を擧げることが出來ると信ずる。

五

日本は滿蒙問題に就て、其態度を決するとしても、殘されたる一の問題がある、それは滿蒙の秩序の維持を如何にするかである。

滿蒙開發が常に此問題と相關聯する結果、滿洲に事件が起ると日本人の方が支那人以上に騷ぎ出す奇現象がある。現に從來東三省の支配者たりし張作霖氏を援助するか、又は張氏に代るものあれば強て之を擁護せずに行くべきか、種々の議論のある有様に居る。

張氏は滿洲を支配すること長く、一部の日本人からは滿洲王と稱せられ、拔くことの出來ない威望のあるやうに思はれてゐたが、一昨年部下の反亂があつて鼎の輕重を問はれ、且つ平生の聲明である保境安民の主張を止めて、中央に乘出してから、その滿洲に於ける地位は頗る動搖して來てゐる。更に支那の國情を考ふる時、一黨一派に偏するの政策で進むことの不可であると共に、商人を援助するの効果なきことは既に幾度か苦き經驗を有して居るので、滿蒙に事を為さんとする者は、此點に細密の考慮を拂ふの必要がある。

而して支那現在の軍閥及び政客の人々は、一面に於て政治家であるが他の半面には全く營利に汲々たる實業家である。張作霖然り、馮玉祥然り、王永江然りである。從て交渉方面の事も、單に外交の手腕家のみでは支那人に致されるのは當然である。此點に於て滿蒙の交渉は或程度まで、實業的手腕家に待つものがある。

滿蒙の開發を單純な法理論、制度上からのみ考へずに、支那の國情、現在の有樣から見て、善處することは一種の試みとして、新任社長、副社長に希望を繋ぎ、第一に社內の更生的の改革を遂げ、進んで萬般の施設改善を為さんことを希望する。

(二、八、五)

不景氣は何時回復するか

太田正孝

一

なさけないのは、いまのお互の經濟生活である。大正九年の春に不景氣がはじまつてから、指おりかぞへて七年あまりにもなるのに、明るい日を何時になつたら浴び得ることになるであらうか。十二年の秋には震災でいためつけられ、本年の春には金融動亂で叩きのめされ、ずつと底ばかり走つてゐる。まだ、蛇の鎌首ほども、頭をあげて來ない。それどころか、みゝずの頭をあげたほどにも、景氣はおこつて來ない。いつになつたら九天にをどる龍の勢をもつて、景氣の線を描くことになるのであらうか。國民に、その努力が足らないのか。職として、ひたすらその問題を考へ、かつ行はねばならぬ當局者は、如何なる方策を樹てゝ機に臨んでゐるのか。——もとより、景氣もちなほしの問題は、國民にせよ當局者にせよ、たゞ内力だけで片付け得らるべきものではない。天の時は別にするも、國際の經濟狀況によつて支配せられることの少なくないことを注意しなければならぬ。わけて、アメリカと支那とにおけるそれ〲の經濟狀況は、強くわが國の景氣にひゞいてゐる。もちろん、國際對策として、わが國のとる態度そのものも、これらの國——とくに支那に對してひゞくことはいふを待たない。

それにしても、いまのわが國の不景氣は、あまりに深刻ではないか。失業者は、いくらある。大正十四年の秋、おもなる工業都市や鑛山などについて調べたものが、十萬六千人あつたといはれてゐた。不景氣の進むにつれ、それよりずつと增してゐ

るにちがひない。親を頼りとし、兄弟にすがりつき、家族主義の笠にかくれて、どうにか暮らしてゐるものも少なくなく、從つて眼に立つことも少ないやうであるが、それでも、すべてを通じ、未就業者まで加へれば、二十萬人見當もあらうとのことである。ひるがへつて財あるもの〻、摺り減らしつ〻ある形も、すさまじい。不景氣のはじまつた大正九年から十五年末までに、個人のことはわからないが、會社の解散したものは四十億千八百萬圓にのぼつてゐる。なかには一方に解散して他方に合同したものもあらうが、いはゆる看板をはづし放しにしたものも少なくない。減資も同じ期間において、十六億五千二百萬圓になつてゐる。これらは、いづれも財産目錄から帳消しにされてしまつたものである。さらに解散減資までゆかなくとも、配當を減じつ〻あるものはザラにあり、蛸配當も出來なく、形ばかりの命をつないでゐるものも少なくない。また貿易から見ても、大正三年から昨年末までに、輸入超過二十八億圓輸出超過十四億圓、差引輸入超過十四億圓になつてゐる。貿易外の受取勘定も、一時は運賃だけでも五億圓見當もあつたものが、いまは總べてを合せて一億圓を少し超すぐらゐにすぎない。在外正貨も十三億四千三百萬圓もあつたものが、この四月末には二億六千四百餘萬圓に減つてゐる。本年の上半期は入超も二億九千七百萬圓で、大正十年以來の成績であるといふ。しかも、その內容が、不景氣による購買力の減つたことが主因であるといはれてゐるから、喜ぶに足る數字ではない。たゞ、下半期の出超期關係などを考へると、本年は結局二億圓見當の入超でをはり、昨年の三億三千三百萬圓よりは、よい形になるのではあるまいか。それから、爲替相場は、一時大正十三年の秋に對米三十八ドル二分の一にも下つたものが、次第にぶりかへし、本年三月十四日には四十九ドル四分の一となり、ともかく正貨現送點にまで漕ぎ付けたのである。それが四月の金融動亂と正貨現送などいふ人爲策の除かれたのとからんで、再び爲替は不利となり、いまは四十六七ドル臺をさまよひつ〻ある。この亂調子は、時に輸入に不利をおよぼし、時に輸出に困難減退を來さしめ、落ちついてソロバンのとれやうもない形におかしてゐる。物價は次第に下りつ〻あるが、いまなほ戰前にくらべて八割ぢかくも高い。ことに食料品等の低落がにぶいため、一般の國民生活をおびやかしてゐる。金利も三月九日に日本銀行の公定步合は年五分八厘四毛にさがつたが、市場利子は相當に高い。そのうへ、動亂のため資金はいはゆる有力銀行にのみ偏在し、就中、中小工業者は資金を得るに苦しんでゐる。たま〳〵五風十雨天の時がよいかと見れば米價は下つて、農民の不平もおこつ

てゐる。加ふるに三月から四月へかけての金融動搖およびその後において、十五銀行近江銀行をはじめ、全國にわたつて三十三銀行が休業することになり、いまに臺灣銀行をのぞいては、八つの小さい銀行のほかは、開業の運びにいたらない。——から　して、失業、解散、減資、減配、入超、爲替相場、物價金利の現狀をゴタ〳〵とならべて見ると、すべてが不景氣のざまをみぢめに表はしてゐる。そして、農業といはず、中小の商工業といはず、金融業者といはず、みな締めつけられてゐる。——どうすればよいのか。

二

まづ私たちは、いまの不景氣に直面してゐる經濟界の人たちが、やゝもすれば他力本願によつて、この場をしのいでゆかうとする根性の少なくないやうに思はれる。たとへば、最近問題になつた川崎造船所の救濟にしても、それに關聯した十五銀行の開業についても、その適切な例とみることが出來るではないか。いままで思ひ切つた事をし、不景氣になつても當然やるべき整理をそつちのけにして、臭いものにフタをしつゝやつて來たが、十五銀行の休業をキツカケとして、いまさらの如くモガキだしたではないか。國家事業であると訴へる。泣きつく先きは、おきまりの政府の手である。それも、日銀の資金によらうとするのであるから虫がよい。すでに同じ系統であつて問題にもされた國際汽船への貸付などが世論の種となつて預金部の整理改善が行はれたといふことも、知らない顔をしてゐる。高橋藏相の光りに押されて一も二もなく賛成した政府も、三土藏相が實際に手をつけるとなると手先に使はうとした興業銀行からは體よくハネつけられ、世論は喧しく、閣議でも内輪もめをさらけ出し、たま〳〵おこつた大倉男の債權確保行動に口實をつかんで、つひにお流れにしてしまつた。かうした政府のやりくちは後に說くことゝして、救濟を受けんとする當事者が身を挺して眞面目に自力に主點を置いて解決しようとする考へがない。川崎造船所にせよ、十五銀行にせよ、ともに株主の未拂込金もあるではないか。すなはち、十五銀行には五千二十五萬圓といふ資本金一億圓の半額以上のものがあり、川崎造船所等も二千二十五萬圓、近江銀行も五百餘萬圓あるではないか。責任の限度を定められて組織された會社が、當然の拂込をだに爲さしめようとせずして、一にも二にも政府に泣きつき、預金部の金をネラはうとする如きは、言語同斷である。また、多くの債權者なり預金者なりに迷惑をかけながら、最後の一滴までシボリ出して見た私財を提供してうへのことならば、まだ理筋も

通る。さなきだに事業に投資した資本家なり企業家なりが、その失敗にあたつて私財をうまく隠すことは、よくあることである。みづから身も財も投げ出しての誠意もなく、國民一般の汗のかたまりともいふべき郵便貯金を出さしめ、まさかのときには國の補償――とりもなほさず國民の負擔に移さしめようとするがごときは、心のほどもおそろしといはざるを得ない。國家事業といふことを看板にするが、お互の事業にして直接間接國家に關係のない仕事があらうか。事業は、ある意味において、すべてサーヴイスである。國家的のものであるといふ考へをもつべきものであり、その考へでいくことはよいが、これを口實として救濟を仰がうとするのが、非理である。もしさういふ理窟により得るたらば、鈴木商店の事業などにも、國家として救濟すべきものが少なくなかつたであらう。とくに第三國間の貿易――いはゆる「出商業」なども折角手をつけ、年額三四億圓にものぼるに至つた仕事を、根こそぎ失ふ如きも、何とかしてよい「國家的」なる名目の充分つき得るものであるにかゝはらず、救濟の非理に耳を傾けなかつたではないか。これは一つの例にすぎないが、頼る根性をもつ經濟人も、頼られてどうにかしようとする當局者も、ともに惡るい。しかも、見わたせば整理せらるべくして整理せられない事業や經營が、何かの形において政府にたよろうとし、よし倒れるにしても、自己のためには、タヾは眼をつぶらないといふものが少なくないのは、いかにもなげかはしい。それにしても、凡百の整理のやかましい今日、ヨーロッパとくにアメリカにみるやうな、リシーバーシップの制度が設けられてゐないことは殘念である。役にも立たぬ法律をつくるヒマに、數年にわたつて不景氣と整理の聲のやかましいにかゝはらず、かういふ整理人制度も出來ず、そのために、つぶさずしてよかつた事業もつぶしてしまつたではないか。債權者なり、破綻會社の重役會たりから申し出て裁判所の任命によつて選ばれた公正た立場の人たちが破綻會社が他の債權者に擔保としたものよりも優先權をもつた整理人債券 Receivers Certificates 發行の特權をもつて整理し管理經營にあたることになれば、債權者も浮ぶし、投資者なり事業家も餘利に浴する場合もあることになる。この意味において、早くリシーバーシップ制度の確立をのぞんでやまない。否、かういつた制度そのものも、他力本願を排する意味に於て貴いのである。言葉をかへていへば、國民自身にさういふ根性のあるかぎり、整理は充かつ早く行はれたい。そのアク拔けの出來得ざるかぎり、景氣の曙光をみるの日も遠くたるといはねばたらない。

三

それにしても、職として不景氣を轉換すべき立場にある政府當局者は、如何なる態度に出でつゝあり、また出でようとしてゐるのか。

四月の金融動亂のあとをうけて政權をとつた政友會內閣も、早くも成立以來三ケ月あまり四ケ月近くになつてゐる。その間に何をしたか。七億圓までの補償法を通しておきながら、銀行を開き預金者なり中小企業者なりを救ふといふ仕事を第一として立つた當局者は、今日まで、いくつの銀行を開いてくれたか。ほとんどないといつてもよいではないか。たまたま十五銀行への開業資金などの關係もあつて川崎造船所を救ふべく手を觸れたのはよいとしても、あのザマは何事である。事大思想にとらはれがちの國民が、先きに放漫政策の張本人であつたことも忘れてしまつて、高橋翁を藏相にむかへた人氣を買ひ込んで、一度閣議を通しておきながら、その身がわりに立つたにすぎない三土藏相の案を、みづから蹴つてしまふ結果となつてしまつた。その間二ケ月のながきにわたる。さらけ出されたのは、藏相の無力と、統制し得るまでに財政經濟の基礎知識だに養はれてゐない田中首相が關係の問答に手の出しようもなかつたといふことである。さらにこれよりも惡いことは、三千萬圓の補償案にせよ、また關案の責任支出にせよ、手段として公開を避け、さきに臺灣銀行問題に對して主張した臨時議會を開いて國民に訴ふることを避けたといふ見さげ果てた根性である。考ふるところに、智もなく才もない。行ふところに、策もなく道もない。當局無力の譏をあびせかけられたのは、當然の當然である。しかも大倉組の假差押を口實とし、そんな債權の口もあつたかといふ顔つきをし、仲介整理者の案をよくも究めずして、貴き預金部資金に手をつけ、やがては國民の負擔ともなるべき案を提議した如きは、財痴とやいはん、無恥とやいはん——そのつぶれたのは笑止千萬の沙汰でもある。

かやうにして、世論の評判の惡るいことに、與黨も業をわかす。早く景氣を招來せよと、わめき立てた結果、當局に注言したことは何か。一言にして申せば、日本銀行をして金の手をゆるめ、金の雨を降らさしめようといふ根膽である。いはく、個人貸付をせよ。いはく、保證準備を擴張せよ。いはく見返り品の種類を多くせよ。勸業銀行、農工銀行、興業銀行などを通して産業資金を貸出せ。いはく折角みとめた日本銀行特別補償法をはたらかして金融の疏通をはかれ。いはく、もう一度公定歩合の利さげを行へ。この以外に附け加へられてゐるのは、休業銀行の了

夕を早く開けよといふことである。要するに通貨の膨脹を日本銀行に强ひんとする案である。徹頭徹尾インフレーションによつて、景氣の世にして見たいといふのにすぎない。なかにつき保證準備擴張問題は、三十二年もまへに定めたもので、當時正貨は一億圓足らずであり發行も二億圓内外であつたときとは、經濟狀況もちがふといふのである。しかし、たとひ保證準備は一億二千萬圓を限度としてゐるが、十二億圓見當までも限外發行でなくとも發行し得る現狀ではないか。よし擴張することに理由があるとするも、いまがそのときであらうか。一括してかやうにインフレーションを起さうとする案によつて、果して眞の景氣がやつて來るであらうか。もし、そんなことで景氣が來るのならば、苦勞はいらない。手つとり早くもある。かういふことを考ふる人たちは、定めし、大正六七八年ごろの通貨膨脹の甘き汁をおもひ出してのことであらう。案なき人たちの考へつくのは、こんなことであらう。なるほど雨は降らう。金の雨が降らう。しかし、それは一時的である。夕立にすぎない。暑かるべき日に、一としのぎの風を入れたのにすぎない。それも、部分的であり、蛙の面に三粒ほどな恩をうけるにすぎない。しかも恩とみたのは、その場のこと、かうした中間的の空景氣は、あとに永く禍ひの種を蒔くことになり、折角の整理も進まなくなり、眞の景氣に向ひ得る日とてはない。――しかも、かうした與黨の進言にもとづいて實行しようといふのが、三土藏相の金融政策であり、政府の景氣回復策である。そのおもなるものは、かうである。

一、台灣銀行の整理により、コール一億三千萬圓を放出銀行へ返すこと。

二、四月の金融動亂によつて增した郵便貯金が二億四千萬圓もあるから、地方公共團體ならびに各種組合の舊高利債の借替へや（八千萬圓）產業資金として貸し（四千萬圓）、かつ公債の公募に豫定してゐたものを預金部の引受けとすること（六千五百萬圓）――なほ、その後も郵便貯金が增したり、預金部の持つてゐる公債七千萬圓を賣り出した金もあるので、更に八千萬圓を地方團體や各種の組合へ高利債借換のため振りまかうとしてゐる。

三、勸業銀行、農工銀行、北海道拓殖銀行、興行銀行から五千萬圓見當の債券を發行せしめて、東西の一流銀行に引受けさせ、その金を地方產業資金として低利で貸付けること。

四、休業銀行の整理を早め、固定してゐる預金の流動するやうにさすこと。

五、震災手形の損失補償の基準もきまつたから、震災手形善後處理法による一億七百萬圓の貸付をなさしめること。

まことに總花をふりまかうとするもので、政友會のもち前をよくあらはしてゐる。人の根性は、なか〳〵消しゴムで消すやうにはなほらない。以上の政策のうちで、郵便貯金の地方還元は、主義として最も通りがよい。しかし、台灣銀行のコール一億三千萬圓（台灣銀行の整理については、私たちは異議をもつてゐる、とくにこのコールを返すことには非理を鳴らしてゐる）も、地方高利債の借替による八千萬圓も、落ちつくところは、東西の大銀行である。從つて資金の移動によつて景氣の湧くことも、一時的のものではあるまいか。そして精々これまで固定した資金が動き出すことになり、金融動亂の前の形にもどる位にすぎないであらう。金利の低落にも、日本銀行の利下にも馴致することになるであらうが、必然的に通貨膨脹を來さしめることに注意しなければならない。しかも、それが無理でもある。實力にも添ふてゐない。結局は、かうしたことも空景氣を演出するだけにをはるであらう。從つて、しつかりした基礎において立てなほしをやらうとする財界の整理を頓座せしむるの結果となるにちがひない。決して、かくのごときは、財界を起死回生せしむる方法でなく、積極的に景氣を打出すことにはならないと信ずる。

四

通貨膨脹による金融政策が、積極的の景氣回復策であるとの輕はずみの考へをもつてゐる當局者は、財政策についても、年來の主張による積極政策を實現することに心を碎いてゐる。もとづくところは、わが黨による景氣の回復策である。八月五日の豫算の概算閣議に上程された各省からの新規事業に對する要求額は二億圓を突破し、これに年度の進行に伴ふ經費の當然の增加を加ふるにおいては、三億五千萬圓にもおよぶといはれてゐる。とにかく、重要政策はまづ閣議できめてから豫算の編成にとりかゝるといふのであるから、この概算閣議は、どんなものであらうかと世間の注目してゐたのも無理がない。それが二億圓以上にのぼる新規事業であるといふので、眼をむいてゐる人たちもある。けれども各省のかうした要求は、たとひ國庫の乏しかるべきことは知りつゝも、その獨自の立場から割り出した目論見であるからそれが集めてみて巨額にのぼつたからとておどろくには當らないのであらう。さりながら、その內容につき、とくに振れ出しの聲の高かつた産業立國についての案を見ると、自作農創定、大規模の國營による開墾、米價安定機關の

設置、蠶糸研究所、機械研究所及高壓化學研究所の新設などが列べられてゐる。それに別途の公債計畫ともからんで、建主改從に政策を改めんとする鐵道計畫も、眼につく。大體において、積極政策の心の持主であることを表現してゐる。もちろん、そのすべてが、いまの世に欲を訴へてゐるものであり、景氣を回復し國民生活の安定向上に資する絶對性をもつてゐるものであるかは別問題である。しかし、往年原内閣の盛んであつたときほどの思ひ切つて大きい姿はない。くはしいことは、いま豫斷しかねることであるが、いづれにするも、「この目論見を實現することは、財源あつてのことであり、將來の財政計畫を亂さず、その向上性をもつてゐるものでなくてならないことは、いふをまたない。その財源については、さらに閣議において藏相から述べられるとのことで、本文を稿してゐるときには、まだきまつてゐない。けれども、おそらく、すでに世間に傳へられてゐるとほりであり、駒でも飛び出して來ないかぎり、その他しかるべきことは、これを想像するに難くない。いつも新規事業の財源にむけられる前年度剩餘金は、どうか。大正十四年度までに出て來た剩餘金のうちで、これから使へるものは一千萬圓見當にすぎない。なほ昭和元年度に生ずべき剩餘金は大略一億圓見當とのことであるが、その四分の一は片岡前藏相唯一の功績とまでいはれてゐる國債臨時償還にふりむけらるべきものであり、その額として二千五百萬圓をとられる。それに昭和二年度及三年度の追加豫算の財源として留保しておくべきものが六千萬圓もある。なほ後年度の財政計畫のためにも相當とられることになるであらうから、ほとんど一杯一杯になつて、新規事業にふりむけらるべき餘地もないことになる。何に致せ積極政策のためであるからといつて、無謀な閣僚のなかには、減債基金のくりいれを提案するものがないともかぎらない。輿論は、いたくこのことを恐れ、かつ難じてゐる。いまさら理窟をいふまでもない。――もと〳〵、剩餘金の出て來るのは、見積りの不正確からおきてゐる。そんな金が出て來るほどであるならば、血の出るやうな稅を減ずるなり、將來の國民の負擔とまでなる公債を減ずるなりするのが、當然すぎるほど當然のことであるからである。この意味から私たちは、現在の繰入れ額の少なすぎることを難じてゐる。しかるにいまこれを中止するやうなことでもすれば、十五年末に五十一億七千萬圓にのぼつたといふ國債のいよ〳〵增して來るのをどうするか。市價もさがり、擔保價格も低くなつて融通力を弱め、新規發行にもその條件は不利となり、國債信用にもひゞくことを思はゞ、中止說をおもひとゞなるべきであらうとおもふ。――それなら租稅などの自然

增收は、どうか。これも本年度の實績にも見るやうに、いかにも世間の不景氣は強く國民所得が減少して來たことゝ、歳入見積が嚴であつたゝめ、增收になる見込のものが少ない。とくに所得稅や營業收益稅の減少は寒心に堪えない。增しつゝあるものとしては、關稅と兌換券發行稅とが眼につくぐらゐである。この調子でゆけば、昭和三年度の自然增收は、あるひは見込み得ず、稅以外のものに求むるとしても高々一千萬圓以內であるとのことである。それならば、諸經費の節約によつて得る財源は、どのくらゐあるか。三土藏相は三千萬圓見當の見込みであるといはれてゐる。この點については、とくに中央にかたよりすぎてゐるとみるべき復興事業をくり延べたらばといふことも問題にならうが、そのためにバラツク建の假建築による移轉料も要ることになつて、不經濟であるから無意味になる。また物價の高かつたとき見積つた繼續事業は、物價の低くなつた今日は、切りさげが出來さうであるが、その費目の大部分を占むる陸海軍の一億五千萬圓（明年度割）は、兵器軍艦の製造費であつて、物價下落によつて減少すべき金は、新式の裝置に向けねばならぬので、これまた餘力がない。しかも、經費の全般を見渡せば、物價が今日よりも低かつたときに見積つたものもあらうから、差引されてゐますところも少ないといふことになる。から考へて見ると、いろ／＼の財源を集めて來ても、新規要求額の半分はおろか、四分の一にもおよばないといふことになる。――そして最後に殘されてゐるものは、公債だけといふことになる。否、いまのところでは、あくまで積極政策をやつてゆかうとするかぎり、公債にまで引づつてゆくのでなければ、豫算をつくることは出來ないといふ破目にある。それにしても、無力なる大藏大臣が爭へば、仲間喧嘩となるし、財政の知識に乏しい首相は、どう收めていつてよいかに苦しむにちがひない。しかも、積極政策を強唱した行がかりになやまされ、否それでなければ景氣が來ないと過信してゐるからには、どうしても公債增發に血路を求めんとするにちがひない。問題は、それが出來る餘地があるか、さうしたとして景氣が來るかといふことにある。なほ、增稅もしくは新稅をおこす意向はもつてゐないとの首相の言明であるが、いまどきそんなことをすれば、飛んでもないことになる。一錢五厘のハガキを二錢とし、三錢の封書切手を四錢とすることも永年の問題であるが、一般的負擔の增加において消費稅とえらぶところないものを、この際――とくに總選擧を前にして行ふやうなことはなからう。また、これをやつたとしても、千五百萬圓見當のものであらうといはれてゐる。――だから、どうしても公債增發に主力をおくといふことになる。

五

新規事業は、その多くが臨時的の施設でない。これをはじめる理由ありとするも、恒久的財源をつかむことにしてからでなければならぬ。しかるに、新税増税はせぬ、經費の節減も少ないといふ。公債では、やつぱりうまくゆかぬ。しかも、かりに公債によることになれば、その増加するにつれて既發公債の市價も低落し、ために新規の發行にも都合がわるくなり、これを以て融通してゐた事業界も金融界も擔保力の低下に苦しむことにもなるのである。しかし、目的が福利増進のための積極策であることをのみ主張して、公債によつて行はうとしても、そのこれに應じ得る力があるであらうか。なるほど、本年は幸か不幸か金融動亂のために郵便貯金が增して、所要の公債も、公募せず、預金部の引受けによつてすますことが出來た。けれど明年になつても同じことは期待されべくもなく、期待すべきことでもない。大體において大藏省當局は、預金部引受郵便局賣出しの限度を六千萬圓と見てゐる。どうしてもその以外は、一般公募によらねばならぬことになるが、さて、その力があろか。なるほど、今は一流の銀行には、資金がダブついてゐる。しかし、この形が永くつゞくべきものでないことは、いふまでもない。さきにも申したやうに、政府みづからも、現に資金の偏在をなほさうとして、地方産業資金にふりむけようとしてゐるではないか。そして公債發行額も、假りに本年度の一億五千萬圓にさらに五千萬圓を追加して二億圓とするも、一般公募としなければならぬ額は一億五千萬圓見當になるが、それも消化する力をどこに求め得るのであらうか。ましてや、明年度には三億五千萬圓の巨額に達する借款もあるではないか。この借款を行ひ、かの新規公債の增發を難なく行ひ得る見込が立ち得るであらうか。もし、さうしてまで行ふことになれば、必ずや金融市場は壓迫される。そして事業資金は吸ひ取られてしまふ。その結果は、果して産業を發達せしめようとした當初の目的を遂げ得ることになるであらうか。かう考へてみると、公債を募る理由も乏しく、募り得て消化し得る力も少ないといふことになる。さらに、それほどまでにして行ふ價ある新規の目論見であらうか。そんなに一日を爭つてやらねばならないほどの仕事であらうか。否、公債を增發したゝめに、通貨は膨脹し、それがために國民生活一般におよぼす影響以上に、積極政策を行ふことが價あるのであらうか。——私たちは、いひがゝりにコダわることのあまりの賢こさを思ふと同時に、看板の塗り替に進み得ざる頭の持主であることが諒解出來ない。かういふ意味で古るい手形

を出して來れば、地租委讓問題もある。そして、これも公債問題に引かゝりつゝある。もとこの問題は、大正九年、時の政府高橋蔵相によつて地租も營業税も委讓し、代換的に財產税を新設しようとしたことにはじまつてゐる。その後財源關係で地租を先きにすることゝし、その建議はもとより、第五十一議會には法律案まで出して、現藏相によつて提案理由を說明したといふ因緣付きのものである。前内閣によつて地價二百圓以下の田畑租を免じたため減じたとはいひながら、それでも地租は六千六百九十萬圓に達してゐる。市町村にやるか府縣にやるかといふ問題もあるが、その財源をどうするかは、さらに惱まされてゐる問題であらう。傳ふるところによれば、現在普通費でやつてゐる復舊復興の經費を公債にうつしてその一部を充たし、その他は、國から地方自治體にやつてゐる——警察費連帶支辨金・市町村交付金・地籍名寄帳整理補助・青年訓練費補助・耕地整理及土地改良奬勵費補助・農業倉庫建設奬勵金・副業奬勵費・荒廢地復舊助成費などの支給を停止しようといふのである。尤もその實行は昭和四年度からしようとのことである。明年度の豫算には關係がないやうであるが、後年度計畫から見て、やつぱり公債によるだけ新規事業が喰ひ込まれることになる。また補助金などを停止することに助長行政をしてゐる官衙において、なか〳〵承知しないであらう。とにもかくにも、いろ〳〵な二個が公債を中心として解決をつなぎつゝある。それで積極政策の看板を立てゝ景氣の實があらはれるものと思つてゐるが、くりかへしいふやうに、それは無理であり、おろかなことではあるまいか。

六

積極政策といへば、對內關係のみでなく、當局者は外交にも觸ひつゝある。景氣問題を取扱つてゐる本文の筆者は、わが國の景氣にふかい關係をもつてゐる支那に對して、在留民保護を名として出兵し、多大の出費をなしつゝあるうへに、反感を買ひ排貨までされてゐることを遺憾におもふ。綿業國として立とうといふ說さへある今日、その大得意に反感を抱かしめることは、そして積極政策の犧牲となることは、あまりに惜しい。そのうへ南滿洲鐵道會社も、その權限をひろげ、警察權課税權をはじめ、ある限度の外交をもなさしめ、イギリスの東インド會社における如き姿をあらはさうとしてゐる。かういふことが、さらぬだに宣傳性に富んでゐる支那人の間に、わるい感じをもたし、經濟上にも不利な立場におかれぬともかぎらない。私たちが支那との共存共榮を主張するわけは、そんなことでなく經濟上の意味における和平の擁護でなければならぬといふこと

にある。それにしても、わが國の景氣の來るのに他動力となつてゐる支那は、こゝ數年來内亂相つぎ、貿易も振はないうへに、銀貨の變動で苦しめられてゐる。いつになつて亂がおさまり、いつになつて景氣の波を打たせて來ることになるかはわからないが、さりとてこれ以上に悪るくはなるまい。否わるくなる餘地もないといつてよいほどである。——それに反して、アメリカの景氣は持ちなほして來てゐるやうに思ふ。昨年不況の原因となつたのは、棉花をはじめ小麥、砂糖、タバコの豐作に伴ふ安價のため農民の購買力まで減じたことに基くといはれてゐるが、それも棉花金融會社が出來るなどによつて救濟されてゐる。上半期において四十七億ドルの金——世界の金の半分以上をもち、エッチ、ジイ、ウエルスのいはゆる繁富に苦しんでゐるアメリカも、昨年百十五億ドルの戰債問題もかたがつき、物價は安く、金利は低く、國庫收入も多く減税に出でんとさへしてゐるほどで、こゝもと——少くとも昨年のやうなことはなく、景氣に向ひつつあるやうにおもふ。この意味からいへば、對米貿易と深い關係にあるわが國は都合よくなりつつあるともいひ得る。

七

しかし、對内關係においての國民のやりくちも、政府のやりくちも、いま見るやうなものでは、こゝ當分景氣は踊らないやうにおもはれてならぬ。たま〳〵出るとすれば空景氣であり、中間景氣ではなからうか。國民は、景氣の來るのを待つて根氣も盡きたらうが、いま一と息きの辛棒が足りない。そして、とかく他力本願である。政府はと見れば、これまた將來を見るの明がない。たゞ政黨至上主義にはたらいてゐるのみである。一從なく永く國民生活を壓迫する積極主義を無理に押し立てゝゆかうとしてゐる。四月の金融動亂を見て、イギリス人は政治が經濟に突入したからであるといつてゐた。しかし、それは、あればかりではない。爲政者の眼光は、つねに政治を經濟にはめ込まうとしてゐる。來るべき普通選擧による多數黨の夢を實現せんためにのみ動いてゐる。地方分權、それもよし。地租委讓、それもよし。米價下つたといつては、關税も復活し、買上げもするといつて、御機嫌をとる。彼等の忙しさうに振舞ふことは、はたして國民生活に本當のうるほひをもたらさしめることになるか。本當の景氣を來さしめることになるかといふ立場から、私たちは、まことに心もとなくおもふのである。

私たちの見地からすれば、本當の景氣は、國民一般の需要が增して來て、企業利潤の出て來るといふ意味でなくてはなら

ぬ。それには、整理を遠慮なくやり、生産費を少くするやうにして、しかもソロバンのとれるやうにし、さうしたゝめに需要は減し、少ないけれど堅實な利益を求めるやうにならねばならぬと思ふ。苦しからうが、やがて花さく春に會はんがためには、辛棒が大切である。また、金融界にしても、いまの休業銀行のフタをあけず、資金が有力銀行にのみダブついてゐる形はよくない。そこに弾力もなく、死んでゐる。とくに中小企業家が苦しんでゐる。この意味において金融界の縦斷的疏通が實策されねばならぬ。言葉をかへていへば、銀行の合同である。地方銀行間にも、また大銀行間にも、その事があつてほしい。最近川崎銀行と第百銀行とが、古るい歴史をもつてゐながら、――たとひこの間の取付さはぎで膽を冷かにしたあとであるとはいひながら、氣持ちよく合同したといふことは、財界近來の快事である。これにしても新銀行法によつて五ケ年内に資本金を引上げねばならぬ立場におかれてゐるものは九百行もあるといふではないか。まさしく、よい時である。もとより合同にあたつては、減資するなり、積立金の取くづしをするなり、整理を徹底してからでなければならぬ。かうした金融界の整理は、同時に事業界一般の整理をも促がすといふことに効があるであらう。その整理にあたつて、他力にのみよらうとするのは、さもしい根性でもあり、こんなことでは到底財界のアッサリを期すことが出來なく、從つて景氣の蘇生を見るの日はないといはねばならぬ。

この意味において、當局者も、いまの經濟生活をよく凝視せよ。仕事は、いくらでもあるではないか。益なき古き手形を一日も早く投げ捨てれば捨てるだけ賢こくなる。積極政策の財源をあさるまへに、反對に減税に減債に心を砕き、思ひ切つてやれ。反對黨の反對ぐらゐ何ものぞ。消極政策を標榜してゐながら、折角の整理を臺なしにし、昭和二年度において十七億五千八百餘萬圓の未曾有の豫算をつくつた政黨が、どの顔を以て他を攻撃することが出來ようか。否、國民生活を犠牲にして、政黨至上主義の道樂をするのは、普選を前にしては、あまりに罪ふかく、あまりに打算にも拙なるものではなからうか。もし、私たちの言を容れず、通貨膨脹による人氣とりや、借金してまで踊りたいといふ積極主義を持續してゆくにおいては、景氣は來るであらう――中間景氣が。そして恐慌が。――しかも永くその實を受けるのは、お互の國民生活であらう。

――昭和二年八月九日――

社會時評

無産政黨の無力

吉野作造

最近行はれた數回の選擧に於て（或は區會議員の選擧に或は縣會議員の選擧に）各無産政黨のどれもこれもが揃つて驚くべき無力を暴露した事實は、一面に於て頗る悲しむべき事であると共に、他面に於て大に吾人の反省を促すものでなくてはならない。ブルジョア階級殊に政界と財界との特權階級に對する社會の反感が斯の如く强く、同時にプロレタリアの自覺も漸く熾烈となりつゝあるの今日、少くとも目醒めたる無産階級の各方面に亘る自發的活動に對して一般社會が格別の好意を示して居る此際、選擧の實際に各無産政黨が揃ひも揃つてあんな見苦しい失敗を見たのは、何としても吾人の心胸を痛めしめずには置かない。

然らば何が這の失敗の原因か。之に關連して唯一つ疑のない點は、あの選擧の結果は必しも既成政黨の今なほ國民の間に信任の厚きを語るものでないことである。選擧に於ける無産諸政黨の無力は、反面から云へば既成政黨の成功を裏書する事實である。既成政黨に屬せずして當選の榮冠を獲たものは殆どなく、與黨たると野黨たるとを問はず、當選圏内で輸贏を爭ふものは常に既成政黨のみである。換言すれば、土俵は殆に既成政黨の政客に獨占され、事實に於て新興無産階級の闘士の登場は許されない形だ。而して誰が之を許さないのかと云へば、彼等に依て專ら代表さるゝ筈の一般觀衆その人なのだが、さうかと云つて之等の觀衆が現に土俵の上に角逐して居る者共に滿足して居るのでないことは亦極めて明白である。この事に就ては格別の證明も要るまいと思ふから詳々しくは說かぬが、兎に角在來の

政客に對して不平滿々たる筈の一般大衆が、イザ選擧といふ評野な機會に際して俄と新興階級の代表を顧みんとせないのは一體如何なるわけか。無産政黨の人達は勿論のこと之に多大の同情を有つと稱する人々も、深くこの點には思を潜める必要があらう。

私共の考では、這の變奇な現象に付ては二つの大きな原因がある樣に思ふ。一は大衆の容易に宣傳に乘り易いと云ふことである。他は無産政黨の對民衆活動は未だその本髓に達して居ないと云ふことである。

外の國の民衆と比較してどうなるかは判らぬが、今日の日本の民衆が頗る宣傳に誘惑され易いことは疑ない事實である。宣傳さへ行き屆けば下らぬ物でもドン〳〵賣れる。最近流行の圓本刊行などは最も巧に民衆のこの弱點に乘じたものであるが、併し之は圓本に始つたのではない、從來の選擧が實はその點に於ては大先輩なのである。而して選擧に於ける宣傳費の巨額なるは到底圓本に於けるものの比ではない。故に巨額の選擧費を擁する者には到底勝てぬのである。從てわが無産政黨は、眞に選擧の實際戰に何等か現實の收穫を擧げんとせば、實は豫め以上の事態に深甚の考慮を加へ、平素努めて民衆の良心を開導して居なければならなかつた筈だ。蓋し宣傳に狃るるは正確なる判斷の麻痺を意味し、この弊はひとり良心の自覺に依てのみ救はるべきものだからである。然るに今日の無産政黨は、果してこの點に十分正當なる注意を拂つたであらうか。各無産政黨は所謂無産階級に對して從來決して教育運動を怠つては居なかつた。併し乍らそは果して本質的意義に於ける教育であつたらうか。自分が考ふる如く人にも考へしめようといふ教育は、教育ではなくして矢張り一種の宣傳に過ぎぬ。果して然らば從來の無産政黨の教育運動は、昔し右を向いて居た者を新に左に向はしめたにとゞまり、良知良能の根本的開發を怠つた點に於ては既成政黨の宣傳と何の異る所もない。故に私共は、無産諸政黨の活動今日の如く盛なるを見つゝ而も猶選擧民の依然として極めて宣傳に乘ぜられ易きを毫も怪まぬのである。

加之私は、無産各政黨の大衆進出と云ふ叫びに接しても、彼等の眞に相手として居るのはどの階級かに往々多少の疑をもつて居る。彼等は工場勞働者の前に起つて獅子吼もする、又山間僻邑に分け入つて農民の相談相手ともなる。併し彼等の日夜關心するは之等の工場勞働者乃至小作農民の要求や感情ではない。最も彼等の氣にするのは少數の青年讀書階級ではないか。之等の者の間に聲價が騰ちその寄る所の新聞や雜誌に惡評でも出ると、直に重大なる影響を實際の形勢に及ぼすものなるかに感じ

て大騷ぎをする。そこで一生懸命辯護もすれば反駁もする。之でも間に合はぬと觀れば、相手方に猛烈な惡聲を浴せることに依て辛うじて自家の立場を支へんとする。要するに少數の青年讀書階級の空想的共鳴を得ればいゝ、之等をさへ捉へて居れば勞働者や農民などはどうにでもなると考へて居るのである。之では丸で既成政黨が少數の所謂地方有志家の懷柔に腐心すると何の擇ぶ所もないではないか。而して斯う云ふ方法で成功するには實は緊密なる組織と之を現實に支持する巨額の金が要る。支那の共産黨が一時素晴しい成功を見せたのはこの爲であり、我國既成政黨の滅ぶべくして却々亡びざるも亦この骨法を心得て居るからである。金もない從つて鞏固なる組織を有ち得ざる我國無産階級が、之を學んで成功しないのは分り切つた話ではないか。

私は切に無産政黨の人達に告ぐる、少數青年讀書階級の空想的興味ばかりを突つ付かずに、モ少し眞の無産大衆の實感を捉めと。諸君の眞の支持者たるべき純良なる大衆は、まだ諸君に一手をも觸れられずして到る處に遺棄されて居るではないか。

松島剛翁の「兵役革新論」を讀む

先頃松島剛先生はその著に係る「兵役革新論」一部を寄せられ我輩に批評を求められた。先生は明治十四五年の頃スペンサアの「社會平權論」を譯して洛陽の紙價を高められた人、我國政治思想の發達の上に貢獻する所尠くはない。最近は久しく世俗の論壇より遠ざかつて居られる樣だけれども、一片耿々の志は時に觸れて熄む能はざるものありしと見え、先き頃再び筆硯を驅つてこの一篇を草されたのである。賣品でないので普ねく世上の瞩目する所とならないのは遺憾だが、所論の內容は頗る時弊に適切なるものがある。私が爰に少しくその要領を紹介せんと試みるのは、單に老先生の好意に酬いんが爲めばかりではない。

先生の立論は要するに兵役に服する者に報償を與へよといふに歸する。之が爲に擧ぐる所の例證には幾多傾聽すべきものあり、但だその理論的說明に至ては人に依り多少の異議を有する者あらんも、之を一個急要の時務的建策と觀るとき、恐らく何人も異存はないことと思ふ。私は先生のこの一篇を讀んで何故

斯種急要の施設が今日まで等閑に附せられたかを怪まずには居られなかつた。それ程に先生の這の提唱は是非とも國民一般の問題として大に論じて貰ひたいものと思ふ。

先生の論旨を要約すると斯うだ。國防は本來の性質上國民全體の負擔すべきものである。併し實際は便宜上之を一部の壯丁のみに課する。而してその壯丁も皆徴されて役務に服するのではない。一定の標準に依て其間に選擇が行はれる。斯くして玆に我國に於ては兵役の義務を事實負擔する家族と負擔せぬ家族とあることになる。事實兵役の義務を負擔せぬ家族が徴兵制度に由つて何の影響を蒙らぬは云ふまでもないが、之を負擔する家族は爲に云ふべからざる苦痛と損害とを受くる。斯く兵役の義務を負ふと負はざるとの偶然の結果に依つて、その受くる所の犠牲に斯くも大きな差違があると云ふのは、甚だ不公平の沙汰ではないか。

唯不公平と云ふだけならまだ可い、兵役義務に伴つて負はさるる苦痛と損害とが餘りに大きい爲に、壯丁を取られた家族の慘狀には實は云ふに忍びざるものがあるのだ。之は人道問題としても大きいが、社會政策的見地から觀て不問に附す可らざるは言を待たない。而して這の慘狀に關する國民の感銘がまかり間違つて兵役に對する呪咀となり國防を徒に嫌忌する思想となるが如きあらば、更に一層由々しき大事ではないか。斯くて先生は之等の點に關する幾多の例證を擧げて世人を警醒するにつとめて居られる。

一體兵役に服して居る者の家族はどれ位の損失を負うて居るのか。物質上のものだけを數へても次の如き種類のものがあるといふ。(一)現役中勞働し得ざりし損失額、(二)現役中雜費として郷里より取り寄せる額、(三)豫後備役に依る損失、(四)傷病又は戰死に伴ふ事故と費用と。而して先生の計算に依ると、(一)の項目だけを取つても毎家族一ケ年の犠牲は平均金參百圓にあたるとのことだ。之は一日の賃銀を内輪に壹圓五十錢と見積り、毎年三百日働くものとして四百五十圓になるが、其中から三分の一を衣食費として控除したのだと云ふ。乃ち各家族は偶々兵役義務といふくじを引き當てた爲に毎年三百圓宛餘分に國家に捧げて居る格好になる。而して今日の現役兵數は約二十萬人であるから、總計六千萬圓の金が國民の一部から國家に絞り取られて居るわけである。之は(一)の項目に付てだけの話だが、其外のも加へたら損失の高は今一層多くなるのである。

故に壯丁を兵役に出した家族の中に往々悲慘なる生活苦に悩むものがあると聞いても怪むに足らぬ。中にも戰時傷病兵や戰

死者の遺族に至ては惨鼻の酷しき到底云ふに忍びざるものがある。先生曰く、『勿論これ等の不幸なる遺家族に對しては救護法による救助の施設がないのではないが、何故かその救助金は僅に實費の一小部分に充つるにも足らぬが一般である』と。して見れば之も改正を要する急務の一つであらう。併し斯は實は末の問題だ。更に遡つて兵役そのものが多大の犠牲であるの事實に鑑み初めから之に相當の報償を拂ふべきだと云ふのが、我が老先生の熱心な叫びである。

官吏に俸給を拂ふと同じく、兵士に相當の報償を給するは當然過ぎる程明白の事理だ。成る程兵役は國民一般の義務である。併し總ての人の義務なるが故にその報酬を必要とせずといふのは、その義務が事實に於て一人も洩れなく國民の普ねく負擔する所たる場合に限る。それでも之を國民一般の義務とすることと之に報償を與ふべきや否の問題とは全く別個の論だ。況んや事實に於ては一部少數者の負擔に止まるに於てをや。從來の傳統を盲目的に理由もなく株守するといふ外に、今日松島先生の提唱に反對すべき理由はどう考へても絶對に見出せない。

而してこの問題は實はたゞ理論上の必要から主張さるるだけの事柄ではないのだ。斯かる不都合なる傳統が今日なほ改められずに殘つて居る爲に、人道上將た社會政策上看逃せぬ弊害が既に澤山起つて居るではないか。是れ松島先生が老軀を提げてその解決に大なる熱情を傾けられて居る所以であらう。先生は往年永く帝國軍人後援會の常務理事を勤められて居つたとやら。然らば斯方面のことは丸で素人といふわけではない。大正九年にも「兵役報償の急務」なる一篇を草して知己の間に勸説大につとめられたと云ふ。この度また本篇を草されたに付ては思ふに深く期する所があるからであらう。私は老先生の熱心に酬ゐる爲めにも、この問題が一層強く世上の耳目を聳動せんことを冀ふてやまない。

終りに右の問題に對する松島先生の具體的對案を紹介しよう。先生の案は、壯丁一人を兵役に差出すことに依て各家族の蒙る損失の最低限金參百圓に相當する額をば、退營の時市町村役場を經由して一ト纏めに當該家族に給與すると云ふのである。一人當り三百圓とすれば二十萬人に對して毎年必要とさるる額は六千萬圓となる。之を如何なる財源に求むるかと云ふに、之は同じく兵役義務を負擔して居る全國の家族總數一千五百二十三萬に負擔させようと云ふのである。現に壯丁を出して居ぬ一千五百三萬の家族には無論だが、壯丁を出してゐる家族にも等しく之を負擔させるのである。一家族平均四圓足らずだ

から負ひ切れぬ程の額ではない。況んや之には無論累進法を適用するの餘地も大にあるに於てをや。

先生は我國でも時々問題になる非役壯丁税に關しては反對の意見を述べられて居る。先生の提案を非として此の壯丁税を主張するの說に對しては、理論の上から又財源としての適否の論からも、私には賛成は出來ない。一般兵役義務を負擔する全家族に公平なる課税を命ずるは相當に理由のあることであり、財源としても惡くはないと思ふが。併し之れあるの故を以て非役壯丁税を排するの理由は毫もない樣に私は思ふ。先生の說かる通り兵役に關する義務を直接に肉體を捧げて爲すものと間接に金錢を以て爲すものと二つに分け、後種の義務は普ねく之を全家族に公平に分賦した以上は、更に直接の義務につき偶々選に當りて實役に就くものと否らざるものとの間に何等かの形に於て負擔の公平をはかるは、理に於て當然であらう。肉體の勞役と忠誠の精神とを以てする高尙なる義務を金錢に見積るのは不都合だなど云ふのは屁理屈に過ぎぬ。せめて多少の金錢的出捐に依り、個々免れ得た犧牲の償ひをするは、寧ろ非とさるべき理由はない。私の考では、先生の提唱さるる樣な課税と所謂非役壯丁税とは理論上立派に兩立し得るものであり、又兩々竝行さするを得策とすべきものであると信ずる。

併し之等の細かい點はどうでもいゝ。財政の技術から云つたらまた種々改訂を要する點もあらう。が、根本主張の大綱だけは無條件に承認して貰ひたいものだ。根本の主張とは何ぞ。曰く、兵役には相當の報償を與ふべし。曰く、之が爲に要する費用は普ねく全人民の負擔たるべし。更に私は附け加へていふ、斯くして兵役は事實上始めて國民一般の義務になると。

政黨首領の今昔

近代日本の歷史の上から政黨の首領と祭り揚げられた先輩政治家を算へると、最も著しいのは先づ板垣退助と大隈重信とであらう。而してこの二人が特に推されて政黨の總理となつたに就ては、次の二つの事實を忘れてはならないと思ふ

第一は彼等が共に維新の元勳であり遠からざる過去に於ては大臣參議として世に時めいたと云ふことである。何と云つても此頃世間はまだ偶像崇拜の域を脫して居ない、如何に異常の英才でも庶民の出では天下が附いて來ないのである。故に國民的

の大運動を起すには看板になる「名」が入用であつたのだ。是れ大井憲太郎で行かず馬場辰猪で行かず板垣退助が必要なる所以、又沼間守一で行かず河野敏鎌で行かず大隈重信の名が必要とされた所以である。

尤も國民的運動の重點として必要とされた「名」も、時代に依て少し宛變つて來て居る。例へば維新前の勤王家の運動に在ては公卿を戴くことが出來ればそれでよかつた。大和十津川の亂にしろ但馬生野の變にしろ、公卿はあだかも皇室の代表者の様な意味で迎へられたのである。この點は維新となつても變る所はない。先づ太政の奉還をうけての後の新政府の最初の筆頭總裁は有栖川宮で、やがて三條實美が之に代つて永く太政大臣の地位を占めたではないか。而も其下に於ける各行政部の長官は當初は必ず公卿か大名かに限つて居た。併し段々政府も整つて來從てまた事務も複雜になつて來ると、空名だけでは地位が保てなくなる。勢ひ維新の大業に實際の功を樹てた英敏の陪臣にその地位を讓らなければならなくなつて行く。それでも明治十八年までは、政府の首班は公卿でなければならぬとの傳統が守られて居た。故にこの年の改革を以て始めて伊藤博文が内閣總理大臣となつたのは、或る意味に於て官制上の大なる平民化であつたと謂ていゝ。それでも身分の低いものでも宰相になれると云ふのでは滿足出來なかつたと見えて、この時伊藤以下の勳臣をば新に華族に列することにした。大正になつて原敬が始めて無爵を以て内閣總理大臣となつたのを人皆異例としたのは、馬鹿〳〵しい話だがまた以て如何に右の傳統が其後も永く時人の頭を支配して居たかを想ふべきである。今日だつて色々の團體が名も聞いたことのない様な華族を總裁にいたゞいて巧に田舎者を釣ることに成功して居ると云ふではないか。故に明治十年代の昔に於て、民主主義を基調とする政黨がその統率者の地位に虚名の高きものを求めたとて些の不思議もないのである。

第二に板垣も大隈も共に官界に於ける落伍者であると云ふ事實も看逃すことは出來ぬ。云ふまでもなく我國に於ける政黨は官僚政治に反對することから起つた。故に政黨は――政府擁護の爲に起つたものは別として――始めから政府の敵である。そこでその首領をばどうしても政府圏外の人才の中に求めなければならなかつた。この點に於て板垣大隈の二人が當時最も適當な地位に居つたことは云ふまでもない。啻に地位が適當なばかりではない、南船北馬の煩勞を厭はず到る處元氣のいゝ長廣舌を振ふ點に於て、特に彼等は最もその任に適して居つたのであつた。

板垣大隈を戴くことに於て我國の政黨運動は明治十四五年の頃急速の進歩を見た。板垣の系統に屬するものは自由主義を奉じ大隈の系統に屬するものは改進主義を唱へ、外に爾地一派の藩閥御用黨もあるがこは殆んど云ふに足らず、天下の政界は要するに自由改進の二大派に分有されしの觀があつた。唯この間に在て我々の看逃してならぬことは次の二つの大なる特色である。一は藩閥といふ共同の强敵を前にし乍ら自由改進兩派の反目は犬猿も啻ならず、極度の惡罵を交換しつゝ民黨陣營の不統一を暴露したことで、他は同じく自由派改進派と云つても規律整然たる鞏固な全國的團結の出來たのではなく、事實に於ては一縣内に三つも四つもの政團が簇出したことである。私の手許に明治十五年東京で刊行された「各地政黨一覽表並圖」と云ふのがあるが、之に依ると政黨の數が全國を通じて百八十七ある。又同年中村義三といふ人の編輯公刊に係る「内外政黨事情」を觀ても、主なる政黨として擧ぐるもの實に三十五に及んで居る。之に依ても全國的單一結成なんどいふことの當時てんで問題にならなかつたことを想ふべきである。若しそれ之等の政團が藩閥に對抗する場合と劣らぬ熱情を以て自由系對改進系の反目暗鬪に浮き身をやつしたことは今更說くまでもなから

右に擧げた二つの特色は何に[illegible]色々の原因はあらうが、要するに政府に對する[illegible]と、當時の政黨の使命が一に藩閥政府の壓迫亂暴と云ふ消極的批評的方面に在て未だ大政變理の積極的建設的部位に置かれてなかつた事に歸せねばならぬ。この點に於て當時の政黨は頗る今日の無産政黨に似て居る。當時と今日とは交通の便に霄壤の差があるので昔の樣な小黨簇出の勢を今日見ることは出來ぬとしても、事實に於て無産政黨の動もすれば地方割據的に陷らんとするの形勢にあるは否み難い。而してその原因の何れに在るにしろ、所謂左右兩翼が人目も憚らず見苦しき内輪喧嘩に無用の精力を徒費して居ることも爭のない事實である。併し斯うした景狀を呈するに至つたのも元より已むを得ない勢なのであらう。何れ來年の總選擧を過ぎて無産政黨がいよいよ政界の積極的要素として迎へらるゝに至らば、小異をすてて大同に就き、モ少し寬裕の精神を以て大局に協力する樣になるかも知れぬ。諸外國の歷史を觀ても、政黨の大きく纏まるのは何も政黨が積極的建設的要素としての地位に置かれた時である。戰前の獨逸の如く、議會の政黨が何とあがいても帝國政府の實權に寄りつけぬ樣な制度になつて居ては、政黨の政界實勢力としての發展

は到底期すべくもない。獨逸に於ける一般の文物のあれが如く發達せるに拘らず獨り政黨の發達のあれが如く貧弱を極めしは、一に右の點に説明を求むべきものである。外の國のことはどうでもいゝ。我國にありても憲法發布以前は、何と云つても政黨運動は實際政權の移動に何等の交渉も持ち得ぬ民間の空騒ぎに過ぎなかつた。故に板垣大隈の名聲を以てするも、僅に民間の評判をいさゝか高からしむるに止まり、今日の政黨の假瞞的宣傳と同様、眞に天下を動かす力とはなり得なかつたのである。

民間の政黨運動が所天の遠吠に類する間は、板垣大隈の如き人のみが首領として迎へらるゝに適する。一つには藩閥政府の敵であり、一つには元勲としての盛名を帶ぶるからである。併し斯の關係は憲法布かれ議會が開かれると違つて來る。尤も藩閥政治家連は、その代表者たる伊藤博文の當時の意見にも明なるが如く、議會の諸政黨をして獨逸の如きものたらしめんと努力した。政黨が政黨として内閣を組織すべしと云ふが如きは、憲法違反であるとさへ放言する者があつたのである。若し憲法施行後の日本の政界が彼等の希望する通りに發展したりしならば、恐らく今日我々の眼前に現はれて居る様な問題は概ね起らずに濟んだであらう。所が實際の推移は幸か不幸か藩閥者流の期待したとは全く違つた方向を取て進んだ。尤も事の茲に決定するまでには幾多の曲折あり固より一朝一夕にして成つたのではないが、一言にして約すれば、所謂大權内閣對政黨内閣の馬鹿々々しき論爭も今は昔の笑ひ草となり、表面の形式を何と繕つても、今日最早政黨を背景とすることなくして内閣に立ち得る機會は絶對になくなつたと謂てもいゝ。さて斯う云ふ時代になつて來ると、政黨の首領には依然として板垣大隈の類を戴いて行けるかどうか。よし板垣大隈で不可なしとしても、首領として彼等に期待する所の資格は從前と異る所なきや如何。次に私はこの點を少し考へて見ようと思ふ。

政黨創生時代に在て首領たるに必要な資格として求められたものは「名」であつた。今や憲法が布かれて政黨には新に議會と云ふ活動の新舞台が與へられた。今までは遠吠するだけに止まり到底寄りつくことさへ許されなかつた藩閥の勢力と公然角逐するの權利が與へられたのだ。斯うなると今までの様に無用の内爭に精力を徒費しては居れぬ。於是民間政治家は新に自派諸政團の全國的結成の必要に覺醒する。そこから又首領たるべき者には「名」の外に新に「組織的手腕」が要求さるゝことになるのである。

板垣大隈の政黨首領としての地位が――少くとも其の實際上の地位が――憲法發布に先つて早く既に影の薄らぎ、殊に議會開設後に至ては却て星亨の如き人格が之に代つて傍若無人に跨居せるの事實は、右の點を念頭に置いて始めて了解さるべき事柄である。併し之を以て星亨の如き組織的天才が政黨首領として迎へらるる様になつたと觀るのは適當でない。星亨が活躍せし時代は、政黨が始めて藩閥の强勢と正面衝突を試み、まんまと押し潰さるるか又は相對立し得る勢力にまで伸び上るかの奮鬪時代である。海のものとも山のものとも分らぬ時代だから尤も必要とさるるは腕の人であつて、在來の首領に併せて又之をも求め得ればよし、求め得ぬとすれば首領の事など餘り重きを爲さぬことになる。憲法發布後六七年間の政界の狀景を仔細に吟味せば蓋思ひ半に過ぐるものがあらう。さて此期間に於ける我國政界の抗爭に於て、政黨は見事な勝利を得たとは云ひ得ぬけれども、少くとも藩閥者流の宿望を粉碎するには成功した。賞めていゝか惡いかは別問題として、星亨の現實的見識と之を行るの奇妙怪絕の手腕は兎も角も我國政黨の實權的地歩をして確立不動のものたらしめた。之を事實の上に就て觀るに、藩閥は最早政權の獨占を主張し切れず、我國最初の政黨內閣なる憲政黨內閣の見苦しき失態に依て纔かに若干頽勢を挽回し得たとはいふものゝ、爾後十數年の政界は閥族と政黨との間の妥協に依て辛うじて一時的小康を保ち得ると云ふ有樣であつた。斯んな分り切つたことを說くのは併し私の本來の目的ではない。私の主題は斯う云ふ時代になると政黨の首領たるべきものに如何なる資格が要求せらるるかと云ふ點にある。そこで之より議論をその方に向けようと思ふ。

この點を正面から論ずるのは面倒臭いから、單刀直入この期に於ける著名なる政黨首領伊藤博文と西園寺公望とを俎上にあげ、彼等が何の他に長ずる所あつてこの地位に置かれしやを考へて見よう。之は外でもない、宮中の覺えめでたく其の個人的信任を賴りて政黨は始めて公然樞要の地歩を占め得たからである。無論政黨には事實上藩閥をして已れを無視せしめざる丈けの勢力はあつた。だから閥族政治家は政黨を操縱しようとしたのである。只操縱される丈けではいやだ、時には實權の地位に俺達をも置いて試て呉れ。這般の懸引に於て星亨は實に巧妙を極めたものだといふ。併しイザとなると、陛下の御信任がなくてうまく天下は取れるかの問題で何も行き詰る。之も緩々時勢の推移を待てばどうにか解決がつくのだらうけれども、政黨者流には實は之を待つだけの餘裕がなかつた。早く目的の彼岸に

達したいと熱る。それには宮中御信任の厚い人を首領に戴くに限る。斯くして板垣は弊履の如く棄てられて伊藤新に自由黨を踏み台として政友會を作りあげたのだ。伊藤に次いで西園寺が永く政友會の統領たりしも、畢竟彼は這の要求に應ずるものであつたからに外ならぬ。

尤も伊藤は深く自分の個人的聲望を恃みその意の儘に操縱し得べきを信じて政友會を作つたのであつた。故に屢々舊自由黨の繼承に非ず全然新しい政黨の誕生だとの主意を力説した。若し政友會が文字通りに當時伊藤の聲言せしが如くに發達したものなら、それは全然近代民主主義の精神とは相容れざるものでなければならぬ。幸にして實際の推移は伊藤の意の如くにはならなかつた。表にはハイ〳〵と云ひ乍ら裏面に於ける策士の劃策は徹頭徹尾伊藤の方針を裏切るものであつた。伊藤の遂に忍ぶ能はずして逃げ出したのも一つにはこの爲めであつたらう。兎に角政友會は遂に伊藤の意の如くならざることに依て始めて能く政黨の面目を維持したものと謂ふべきである。それだのに、昨今なほ時々伊藤公立黨の精神を遵奉するなどの宣明を聞くのは滑稽の沙汰である。

政黨首領としての手際に於て西園寺の方は寧ろ伊藤よりも數等上であつたと謂ていゝ。尤も星が死んだので統率が餘程樂になつたと云ふ關係もあつたらう。併し西園寺の下に於ける政友會は全然西園寺の政友會であつた。政友會が西園寺を有つのではない。一から十まで西園寺に頼つて政權に有りつくことが出來たからである。斯くして這の特異の優越的地位は、依然として惰性的に今日の彼にも認められて居る。而して西園寺時代に於て我々の最も注意すべき現象は、總裁專制の制度の確立したことでなければならぬ。この事がやがて憲政會にも模倣され、今日に至るまで――假令段々影が薄くなつて來つゝあるとはいへ――我國の政界に特異の影響を與へて居ることも吾人の決して見逃してならぬ點であらう。

西園寺がやめて原敬が後任の總裁となつた時は、丁度明治を過去に送つて大正の新時代の始つた時である。若し明治大帝が猶ほ在世ましましたら、西園寺の跡を原で繼げるかどうかは大問題であつたらう。必ずや西園寺に似た同じ様に宮中の覺えめでたき人が物色されたのではあるまいかと私には想像される。然るに明治大帝の登遐に依て時世は變り、大正時代に至ては政界非常時に於ける機務の解決は事實上所謂元老の手に委せらるることゝなつた。この邊の事も敢て詳説するの必要はあるまい。孰れにしても時世が斯う變ると、之に伴れてまた政黨首領に需めらるる資格も自ら多少の變更を見ないわけには行かない。

大正時代に於て政黨首領に要求された[illegible]一の資格に、[illegible]實權を有する元老の信任にどうかと云ふ點である。金を作り得ると云ふことも必要だ。政治的經歴も無論なくてはならぬ。併し之等の條件が如何に完備しても、イザと云ふ場合元老が推薦して呉れねば何にもならぬ。是れ政變時に於て政界の有象無象が元老の膝下に詣でて頻りに其意中を探らんと焦る所以である。誰しも熟知の事實だからこれ以上の説明はよさう。唯こゝに是非とも讀者諸君と共に考へて置きたいことは、斯う云ふ事態の當然の結果として次の如き特異の現象が政黨界に現はるるに至つたといふ點である。

（一）總裁專制の舊習が依然として保持さるること　元老の意を迎へることが政權に有りつくことの重要原因（この外に議會に多數を制するといふことも勿論必要だが、此方面のことは今は姑く別論としておく）だから、元老なるものが一體何を考へて居るか分らぬ限り、政黨總裁は豫め黨内諸機關の拘束を受けてその出所進退に自由を缺いてはならぬ。殊に我國の元老は揃つてみな政界の大先輩を以て居り偶に政黨首領輩を指導し得るを自負して居るから、猶更ら首領自身が常に白紙で居ることを必要とする。是れ總裁專制の出て來る所、而して今なほその[illegible]て政黨に[illegible]いつもそれが政黨入りに就ての[illegible]一人一黨主義などいふ勝手な議論の[illegible]に、天下の眺むる[illegible]起對にない革新俱樂部などにおいてのみ有り得る現象である。

（二）少數幹部閥の專恣横暴　總裁は白紙で居なければならぬとして絶對に相談相手を作らないわけには行くまい。さればとて多勢の者に諮つて公然の拘束を受けてはならぬから、自然彼は内密の裡に極めて少數の幹部を自分の相談相手とする様になる。是れ我國の政黨には表て向きの機關の外常に一種裏面の隱れたる幹部閥ありて大なる實權を振ふ所以である。之がまた絶えず黨界の平和を紊る種たることも周知の事實である。それが多くの場合政黨の健全なる發達を歪曲することに役立つことも、亦言をまたずして明であらう。

（三）元老の意を迎ふに急なるの結果時勢に伴ふ必要なる施設の攻究を怠ること　時勢の要求に促されて或る問題が政黨首領の頭に映じたとする。その場合彼の最も強く懸念する所は、之と國利民福との關係にあらずして之に對する元老の思惑如何である。少くとも彼の忖度する元老の思惑なるものが彼の態度を決する上に最も重要なる關係を有することだけは疑ない。而

して多くの場合に於て、元老輩は之等の問題に就ては例外なく頑迷固陋の見を持することも亦事實である。最近我國の各種社會的施設がこの方面よりの直接間接の壓迫に依て如何に屢々阻止されたかは、既に普ねく人の知る所であらう。

(四) 元老の周圍には常に一團の頑迷者流の群がるありて緊密に之を取卷いて居ること　元老は政界の樞機を握つて居る丈け、常に之に取り入らんとするものあり又平素その意を動かさんと努むるものもあつて、相當に人の出入の頻繁なるべきは想像に餘りある。從て元老は自ら之に依て教育され内外政界の事情にも通ずる樣になる。山縣公などはこの點に於て中々聰明であつたと云はれて居る。但しその教育たるやもと／＼彼に迎合するの目的を以て參ずる者より受くるのだから、到底所謂楯の半面を觀るものに過ぎざるは云ふを待たぬ。だから彼等は惡く利口なブルジョアの馬鹿息子と同じく、變態的に發育して一寸始末におへぬのである。抽象的な議論として私は國家の元勳には本來相當の敬意を表するものであり、所謂元老に對しても何等個人的反感を有するものではないけれども、近代歴史の事實の上に、政界の實際家が彼等の意向に迎合せんが爲めばかりで幾多必要なる施設の遠慮會釋もなく阻止されしの事實に鑑みては、心中時に大に憤慨の情を禁じ得ざることがある。

併し以上の如き形勢は大正の末期頃から少しく變つて來た。元老が内閣奏薦の實權を有すること、從て政黨首領が彼の意を迎へんとするに汲々たることに變りはないが、その奏薦權の實行に當りて最近の元老は昔の樣に氣紛れの選擇をやつたり出來心に動かさるるが如きことは無くなつた。一つには時勢進歩の當然の結果として元老の行動に對する民間の批評も露骨無遠慮になつて來た。元老も自ら漸く責任の重大なるを自覺せざるを得ない。斯くして元老は出來る丈け自家の行動を合理的な規道の上に置かんことを努める。換言すれば無茶苦茶な選擇をしない樣になる。是に於て後繼内閣の選任に關しては漸を以て一定の法則が成立せんとするの傾向を生ずるのである。然らば如何なる法則かと云ふに、有力なる政黨の統率者にして整然之を統制するの實力を有し優に時局を安定するの才能を有する者を推擧すると即ち是れだ。斯く云へば分り切つたことの樣だけれども、私は特に、從來は元老と氣脈を通じて居ると云ふ事實の上に黨員を服せしめ得たのだけれども、今度は黨員を服せしめ得るから元老の推擧にもあづかり得るのだといふ風に變つた點に、讀者の注意を乞ひたいと思ふ。彼に在て政黨首領は元老を笠に着て威力を黨員に振ひ得たのであつたが、此に在ては自家の實

支那の[illegible]を作つて多數に於ける[illegible]一員は、[illegible]の
實質的關係に於ては嚴に主客の地位を顚倒したと謂てもいゝ。

さて斯うした時代になると、政黨首領の最も意を用ふべき所は黨内の統制である。うまく部内をまとめ一絲みだれず手足の如く之を率ゐて行けるか如何に依て、首領としての適否がきまる。從て亦首領として要求さるる資格にも、新に「内部統率の手腕」といふ一條が加はることになる。之が丁度最近我々の眼前に現はれて居る現象であると思ふ。

私の考では、政黨首領の主たる仕事は或る意味に於て昔と今と著しく變つたと云へる。昔は元老の閥閥をめぐり歩いてその了解を得ることが毎日の日課であつた。惰性として之が今日にも盛に行はれて居る様である。事實に於て斯はまた丸で必要のないことでもない。併し今日では之のみを主として居つては足許があぶなくなる。何よりも大事なことは内部の結束を鞏うすることである。迂つかりすると黨内分裂の不祥事を見ぬとも限らず、勢力が二つに分れては何とあがいても大勢は決して自分に廻つては來ぬ。そこで今日の政黨首領は、或は右に劃き或は左に諮つて衆の思ふ所を常に能く理解してゐなければならぬ。昔の様に元老の信任あるを楯として傲然王者の威容を示し

[illegible]
ご[illegible]へ[illegible]が政友會總裁にして[illegible]黨員が[illegible]ては、いか。彼が今日如何に内部の統制に腐心して居るかを見ば、蓋し思ひ半に過ぐるものがあらう。

但し之を以て直に田中の力遂く原に及ばざるの證と爲すものあらば大なる誤りである。原は或程田中より偉かつたかも知れない。併し原をして彼が如く威力を振はしめたものは一つは時勢の力である。彼はよく山縣に取り入つた、西園寺とは固より友人の間柄と謂てもいゝ。之を後ろにかざして天下に號令するとき、黨員の譯もなく服從するは怪むに足らぬ。不幸にして今日はそんなコケ威しの種になるものはなくなつた。西園寺に多少その魅力なしと云ひ得ぬも、今日の彼は内部統制の實力を明示せし者でなければ進んで後援を與へようとはせぬ。故にその後援を得んとせば先づ以て黨員の心を得て來ねばならぬ。斯くして政黨首領は元老の門に走る前に先づ自家の家子郎黨の意を迎へねばならぬことになつた。從てまた一般黨員も自ら首領を見る昔日の如くなるを得ないことになる。茲處から黨員と首領との本當の有機的連絡が生れるのだと思ふけれども、從來の眼から見たらば首領の威望が著しく減退したのだとも見えよう。」

いづれにしても最近に至りて政黨首領が、ひとり元老の周圍をのみ顧念するのではなく、又大に黨内の空氣を理解するに努める様になり、之に格別の注意を傾けずしては首領としての働きを完うし得ぬと云ふ風になつて來たのは、頗る注目すべき現象だと考へる。

最後に私は以上の觀察から來る當然の結論に讀者の注意を喚起して本稿を結びたいと思ふ。政黨が台閣に上りたる場合の功罪を論ずるに當り、從來は政黨首領と共に彼をして或一定の方針を取らざるを得ざらしめた元老の一味の責任を論ずべきであつたが、今後は政黨首領とその政策決定の實質的要素となつた黨内部の責任が眞劍に問はるることになる。別の言葉でいへば、善いにも惡いにも、政黨は今日以後始めて實質的に政策決定の全責任を負ふ地位に立たされた。從來の如く元老並にその周圍の官僚閥族の直接間接の影響に壓さるることなく、眞に獨自自由の政策を行ふを得る地位に立たされたのだ。この新境地を彼等は果して如何に利用するであらうか。久しく闇に慣れた者は俄に光明に接して之に處するの途を知らざるが如く、依然として在來の舊套を追ふだけなら、我々國民は完全に政黨政治家の將來に絕望するであらう。

既成政黨の危機

昔の政黨は元老の意に迎合して其の信任を繋いで居さへすればよかつた。今はさうは行かぬ。第一には内部の結束をかためて醜きボロを外部にさらけ出さぬ様にするが肝要で、その次には徐ろに外部の信賴を博さなければならぬ。玆に所謂外部といふのは、昔は黨外の實權者たる元老の一味を意味するのであつたが、今は一般民衆を云ふことになつた。内部の結束をかためて而して一般民衆の信賴を博せん乎、それこそ眞に鬼に金棒である。併し今日の既成政黨は果してこの點に十分觀察を誤らないだらうか。

元老の一味に迎合することも、今日の政界に在ては、少くとも彼等の立場より觀て全然徒勞ではない。元老の一味は今猶ほ惰性的に若干の勢力を政界に擁して居るからである。併し乍ら要するに彼は今將に滅びんとする勢力ではないか。而して之に代るべく民衆の力は昨今勃然として興起しつゝある。少しく遠

[illegible]
黨の人達は今なほ民衆を甘く見て[illegible]に[illegible]
度を與へて居らぬ。成る程口には國利を謀るの民意を顧ふるのと云ふ。而も事實に於て彼等が民衆の利益を蹂躙するの如何に甚しきかは心ある者のひとしく慨歎する所ではないか。この點に於て今日の既成政黨は、その內部に於て實に重大なる危機を孕んで居るものと謂はねばならぬ。

若しそれ內部結束の爲に彼等の團束する所果して正鵠を得て居るかと云ふに是亦心細いこと夥しい。何となれば彼等は理に依てこの結束をはからずして專ら利に依て之を成さんとして居るからである。何を以て之を云ふか。乞ふ、先づ田中內閣組織當時の並にそれ以來の人才拔擢の方針を見よ。多少の例外はあるにせよ、大體の方針は才能そのものを眼中に措くにあらずして功勞を標準とするものではないか。前內閣の倒壞に對して又は從來の黨勢擴張に對し特殊の功勞あつた者に格段の地位を酬ひてやるといふやり方ではないか。必しもその地位に應しい才能があるからといふのではない。尤も現任の者をやめて他に之に代る好適任者が澤山あるのかと云はるれば、一寸返答に困りもするが、豫め能力を考慮して人才の選任を爲したのでないことだけは明である。さうすれば選に洩れたものの不平を云ふは
[illegible]首相を[illegible]
した。何[illegible]から[illegible]
置けば[illegible]も代へて[illegible]要求して來る、而して[illegible]
之を容れなくては、或は少くとも相當に之を優遇してやらなくては、政黨內部の結束がうまく行かぬらしいと云ふ果して然らば之は何の爲の結束であるか分らなくなる。國家の利益と伴はない結束ならそこに何等之を歡迎すべき理由はないからだ。

英國の例を以て政黨內閣の模範としていゝか否かは別問題とする。併し英國と大體同じ行き方をして居る我國に於て、英國に行はれて普ねく世の長所と認められるものは又大に我の參考に供してもよからう。英國は政黨內閣制だから總選擧の結果に依ては政府の首腦部はがらりと變る。併し首腦部の更代することに依て毫も事務の澁滯あらしめてはならぬとて、政變と共に更迭すべき首腦部の範圍をば必要缺くべからざる最少の程度に限つて居る。是れ即ち政務官と事務官との別の設けられし所以。而して事務官は所謂刀筆の吏僚として政變に拘らず在職し得るの地位が保障され、政治的理由に依り勝手に轉免さるることはない。要するに部內の人事は全然事務次官に一任され、當事も政務官の干渉を許さぬのである。故に政黨の內部が直接にも間

接にも進んで政府俗僚の進退に容喙するが如き事例は絶對にないと云ふ。それでこそ事務もあがり、又事務官の報告は立派に政務官の參考ともなるのだ。斯んな風に運ぶのでなくては、政務官事務官の區別は實は全く無意義なのである。

尤も我國の制度は、形を英國にまねて其實全く之とは違つた意味に運用されて居るのである。政務官が概して所謂黨界功勞者の獵官熱を滿足せしむる爲に設けられしは云ふまでもなく、之と事務官との限界を純正に劃さうなど云ふ考は始めからない。政務官に本來政務官としての能力なきは勿論であり、其間に乘じ物好きの事務官が政務官氣取りで政治的に狂奔することも屢々ある。而も斯の如きは當路の大臣より進んで誘惑する場合が多いのだから驚く。蓋し政黨政治家に取て事務官を政治的に濫用するよりも私の爲し易い方途はあまり外にない。各國に於ける多くの政弊はその始じめ皆茲に淵源すると聞く。故に政界にこの弊なからしめる爲には、政黨政治家に對つて極度の道德的潔癖が要求されねばならぬ。是れこの點の理想的運用がひとり英國にのみ行はるる所以である。我國の如く政黨界の先輩が率先して徳義をみだり公正を冒し、只之のみに依て勢力をかため來りし國柄に於ては、政務官事務官の區別のはつきりせんことを望むは無理であらう。それにしても今度の田中内閣の下に於ける有象無象の盲動はあまりにひどい。流石の田中首相も之には餘程困られたやうだ。何となれば之に聽いては内閣の面目は立たず容れざれば自ら内部の不平を醱酵して遂に黨の輕重の問はるる因となるからである。

この問題は單純な形で現れるものである丈け、急に解決されるといふ性質のものではない。首相が如何に之を處置して行くか、黨の内部が果して首相の裁量に服從して行くか。わるく行けば遂に結ひ難き破綻を暴露せぬと限らぬ。この點に於ても既成政黨の前途には重大なる危機が伏在して居るのである。

以上述べたことはひとり政友會ばかりでない、民政黨にも適用あるべきは云ふを待たない。

芥川龍之介氏の『死』とその藝術

(一) 實踐的自己破壞の藝術

大山郁夫

一

死んだ芥川氏とは、私は生前一二度――しかも極めて卒然と――顔を合はした以外には、何等の社交上の交渉をも持たなかつた間柄である。それは一つには、私たちが別々に歩んでゐた道の間の隔たりが餘りに大きかつたためでもあらう。また氏の書いたものにしても、最近の評論もしくは隨筆めいたものを、二三の雜誌の上で折々瞥見した位で、氏の本領であるべき創作として見られ得るものには、全然接してゐない。尤も、氏の舊作の若干は、ずつと以前に少しは讀んだことがあるが、しかしその内容は、今では殆んど私の記憶の外に洩はれてゐるのだ。

かうした不たしかなデータから、いま私が芥川氏について作りあげてゐる概念は、他の多くの人々が――恐らく一般の讀者人たちが――持つてゐるそれとは、大して逕庭がないものゝやうである。といふことは、私が氏の自殺の直後に、その事件に聯關して新聞紙上に現はれた諸家の感想談などを讀んで考へたことであるが、しかし實際に於て果してその通りであるか否かは、私には保證が出來ない。

それにしても、死んだ芥川氏が、氏との交渉のさほどにも少かつた私の上にも、或る相當に强き印象——その印象は氏の自殺によつて一層强められた——を殘してゐるところを見ると、私には、氏が極めて强い、といふより寧ろ尖鋭な、個性の持主であつたやうに思はれるのだ。

ところで、その尖鋭な個性の持主が、私に與へてゐたところの、そして今でも與へてゐるところの、彼自身についての印象は何ういふものであるか？ それは前にも言つた通りに、一般人が持つてゐる通りのもの、從つて通り一遍の平凡極まるものにすぎないものかも知れない。否、それればかりでなく、それは處々、もしくはどうかすると全體的に、間違つてゐるものかも知れない。だが、それは如何に客觀的に間違つてゐるにもせよ、私の主觀に於ては、——特に私の氏に對する印象としては、——間違つてゐるも間違つてゐないも問題でない、事實そのまゝのものである。兎に角私が、私に與へられた課題に答へようとすると、私はそれを出發點とするより外はない。そこで、私はまづ、以下の感想文に於ては、當然のこととして、それから始めることにする。

二

芥川氏について私が懷いてゐるその印象は、ざつと次のやうなものである。——

芥川氏が理知的な、靜觀的な、穩和な性質なのにも拘らず、どこか凄苦な感じを與へた人であつたことは、諸家の感想談などからも讀み取られるが、私にも矢張りさう思へた。少くとも、私が讀んだ限りの氏の最近に書いたもの——それは重ねて斷るまでもなく、極めて狹い範圍内に止まるもの——には、殆んど何れにも、何か冷めたい底光りのするものが埋められてゐたやうに、私には感じられた。氏が情熱の人であつたか否かは、私の知るところではないが、さういふことも決してあり得ないことではない。けれども、縱しさうであつたにせよ、それは冷めたい情熱であつたに相違ない。といふやうなことが、今私の頭腦を支配する。

更らにまた、私には、氏が絶えず何かを凝視してゐた人のやうにも考へられた。そしてその視線が、過去に向けられてゐたやうでもあり、現在に向けられてゐたやうでもあつたが、決して未來に向けられてゐたものとは思はれなかつた。ところが、意外にも、——否、決して意外にでなく、——それは、『死』に向けられてゐたものであつたことが、氏の自殺によつて明かにされた。即ちそれは、未來に向けられてゐたのだ。だが、それ

[illegible]
とのことと[illegible]自己[illegible]れに見[illegible]れた
かつたことの原因の、少くとも主要な一つでなければならない。
氏の書いたものを讀む毎に、私には、氏の創造的苦惱と、一種の懷古的情趣といふべきものとが、共に感じられた。しかも、これらは一の混然たる調和をなしてゐるものであつた。たぜか？　私はその問題の解決に努力したことは肯つてないが、唯私の漫然たるその場限りの簡單な解釋によると、これは、氏の住してゐた世界が、小ブルジョア的イデオロギーのそれであつたらだ。從つて氏は、最後まで意識的もしくは無意識的に、ブルジョア文化の肯定者（或ひは讃美者）として終始した。無論、氏の聰明は、氏をして纖密な取捨選擇を行はしめてゐた。だが、それは要するに、その限られたる範圍内に止まるものであつた。從つて、その創造的苦惱が如何に大きかつたにもせよ、それが擧げ得る効果は、畢竟局處的なるもの、末梢的なるもの、官能的なるもの、もしくは感覺的なるもの、等々に止まらざるを得なかつた。氏が技巧の上に極度の冴えを見せてゐたことも、殊に玲瓏珠玉の如き字句を綴ることに秀でてゐたやうなことも、更にまた、屢々蠱惑的なエキゾテイズムの世界を掲げ出すやうなことをしてゐたことも、——等々のやうに私に見られたのだが、しかし前々から幾度も斷つてある通りに、そ

[illegible]
[illegible]
[illegible]たいところの、[illegible]は見ることを[illegible]
くれた本質を[illegible]つた藝術家だ、この[illegible]限界内に於て[illegible]
限度の素質を代表してゐたものではないか？
それは兎に角、私から見れば、かかる限界内に於て勞作する藝術家にあつては、その創造的意欲が旺盛であればあるほど、益々その苦惱が大きくなる譯である。彼の仕事は必然的に小規模のものであるが、——それは全然孤獨の情態の下に於ても企て得られるほどの小規模のものであるが、——それだけに、彼はそれを思ひ通りの完全さに仕上げたためには、一層神經を尖がらせる結果に導かれるであらう。それには、個々の藝術家の稟質も問題になるであらうが、大體に於て、この傾向は免かれられないものと思ふ。芥川氏が、その遺書に於て、「僕の今住んでゐるのは氷のやうな病的な神經の世界である」といつてゐるのは、何を我々に示唆するか？　それは、一般に小ブルジョア的イデオロギーを脱けることの出來ない藝術家の行く道の突き詰めた尖端に展開されてゐる世界ではないか？

三

私の微かな記憶を辿ると、私が讀んだ限りの芥川氏の初期

（？）の作品には、遊戲氣分が橫溢してゐたやうに思はれるが、――この見方こそ大間違ひかも知れないが、――最近に至つては、無論創作方面のことは讀まないから知らないが、評論などの方面には、非常に嚴粛な眞劍味が看取されるやうになつて來てゐたと、私には考へられた。だが、その眞劍味も、不思議にも矢張り遊戲氣分以上のものとは、私には見られなかつた。私から見れば氏こそ眞劍になつて、――さうだ！最後には、一人の道伴れもなしに、冷靜に自殺の準備をとゝのへながら『死と遊んで』ゐられたほども眞劍になつて、――遊戲氣分に浸つてゐたものであつた。それほどの遊戲氣分に徹底したものは、外には滅多に見當らない。だからこそ、氏の自殺がユニークなものとして、我々の眼に映ずるのではないか？

だが、それも私から見れば、畢竟はブルジョア藝術の、さし迫まつた行詰まり及び破綻の一面を反映してゐるものに外ならないものだ。今や資本主義文明が最後の沒落過程の上におかれてゐる瀨戸際に當つてブルジョア藝術がその地盤の底から來た大動搖を感じてゐるのは、むしろ當然のことである。さうした大動搖のただ中にあつては、流石に芥川氏の如き、小ブルジョア的イデオロギーの一結晶である藝術至上主義に執してゐたといはれるほどの靜觀的態度の文人でも、――否、芥川氏がさうした靜觀的態度の文人であつただけに一層、――言ひ知れない不安を感じないでゐられなかつたのではなからうか？　芥川氏自身は、氏の自殺の動機に關しては、『僕の場合はただぼんやりした不安である』といつてゐる。そして、氏がさういつてゐる以上は、我々に於てそれ以上それを突きつめて究明する必要はないが、しかし私には、その『ぼんやりした不安』こそ、社會的に見て案外『ぼんやりした』ものでなかつたことが考へられてならないのだ。

四

上來私が言つて來たことは、私が芥川氏の人とその藝術とをよく知らない一個の門外漢だから言へたことであるかも知れないが、しかしそれは、芥川氏の人とその藝術とをよく知らない一個の門外漢にはさうも考へられることを示す一例として、私にそれを言ふことが許されるものと信ずる。

私が芥川氏の自殺の報道を載せた新聞紙を讀んだのは、大阪から東京へ歸る途中でのことであつたが、それは、私には少しも意外な感じを與へなかつた。少くともそれは、私の乘つてゐた汽車が絕えず東へ東へと動いてゐたことが自然であつたことほど、それほど自然なものであつた。殊に、その心にくきほど冷靜に取り行はれた死の前後の狀況を讀んで行けば行くほど、益々さう考へられた。

[illegible]ペトロニウスの饗宴の有様が浮んだ。そしてそれからまた、永く忘れてゐたシュペングラーの「西洋の没落」が、私の記憶に甦つた。私は私の心に囁いた。——

「バビロンや、エジプトや、ローマの文化史を回想するまでもなく、その永かりし光栄の日を過去の夢として、漸くその終焉の夕を自覺し始めた今日のブルジヤア文化は、それがごう然とすさまじき音響を立てゝ崩壊する瞬間に於てこそ、その最も壯美た爛熟の姿を見せるのではないか？ そして、小ブルジョア的イデオロギーの限界内の典型的文人芥川龍之介氏の立派な自己破壊の藝術は、それをその當然の割り宛てである小規模に於て象徴したものではないか？——」

私はまた考へた。——

「藝術至上主義の信奉者たちは、この曖昧な言葉をどう解釋するにしても、畢竟それが超現實的のものであり、從つてそれが現實の人間の實踐に關係のないものと妄想してゐることにかけては、その揆を一にしてゐるやうである。だが、彼等のうちの最も聰明な一人であつたやうに見えた芥川氏が最後に擇んだ道は、氏自身の意志如何に拘はらず、さうした考へ方を徹底的に克服したものではないか？」

私には、芥川氏の自己破壊の實踐そのものが、氏の藝術にフ[illegible]

五

芥川氏はその遺書のなかに、「僕に對する[illegible]條件——僕の上に影を投げた封建時代」といふやうな言葉が、ちらと顔を見せてゐる。それはしかし、我々に樣々のことを考へさせる。

そのことについて、私は詳までを言つてしまふ餘裕を持たないが、しかし次の一事だけは、今までに述べたことに附け加へておかうと思ふ。

我々のやうに、新社會の建設に立ち向つてゐるものの上にも、芥川氏の上にと同樣に、封建時代が影を投げてゐる。のみならず、我々は更らに、ブルジョア社會の下積みになつて、その負擔を骨身にまで感じてゐる。そして我々は、さうした狀態の下に於て、絶大の矛盾をも最も直接に、最も現實的に、恐らく芥川氏以上に感じてゐる。けれども、我々の仕事は、芥川氏の場合のやうに、消極的にその矛盾に殉ずることでなくて、我々の積極的努力を以て、その矛盾を揚棄することによつて、新境地を現實に作り出すことである。

かかる活動に從事してゐる我々もまた、如何に生くべきかの問題と共に、如何に死すべきかの問題をも絶えず考へさせられてゐる。だが、我々が我々の死について考へるとき、我々はそ

れを、過去の舊社會の末路を飾るものとならしめずに、當來の新社會への道の踏み石とならしめることを欲求する。我々が我々の遺骸を、その道の上に横へるとき、我々の僚友は、これを踏み越えて戰ひ進むであらう。だが、それは我々の本懐であらねばならぬ。

從つて我々は、我々の死の目的を考へることに熱中することはあるが、しかしその手段について熟慮する暇を持つたことはない。それ故に芥川氏が、その死の目的よりも、寧ろその手段を撰ぶのに專念して、そこに極めて周到なる用意をつくしたのを見るとき、――否、我々には死の手段と考へられるものが、氏にあつては寧ろ死の目的と考へられたのではないかとさへ思はれる根據があるのを見るとき、――我々は、氏と我々とが別々に歩んでゐた道の間の隔たりが如何に大きいかを、今更のやうに泌々と實感せしめられるのである。

（二）餘り具體的にでなく

生田長江

芥川氏のあの事件が、地方版の新聞記事となつて私の目に觸れたと殆んど同時位に、あれに對する私の意見を述べろと言つて來られた。しかし、あんな事件に對しては『つつしんで哀悼の意を表する』といふより以上に、餘り餘計な事を、しかも餘り急いで喋りたくも、書きたくもない私は大に當惑した。

成程、有島武郎氏の例の事件の時には、『有島氏の事件について』も書き、『有島氏の事件に對する批判の批判』といふやうなものを書いた。しかも、それは少しも強いられて、いや〳〵ながら書いたといふわけではなかつた。

だが、あの場合は、有島氏に好意を有つてゐる人も有つてゐない人も、それぞれに餘り馬鹿々々しい事を述べてゐて、有島氏の爲めにも廣い世間の爲めにも、何か書かずには置けないやうに考へて、そして書いたのであつた。

處で、芥川氏の自殺については、世間がどう見たか、どんな事を言つてゐるか、それを私はまだ知らないのであつた。從つて、書く方が書かないでゐるよりいいといふ、理由がまだ一つ

そこで此事柄をのべた上で私は約束した——締切の日が近くまでに、何か私の執筆を挑發するやうな問題でも耳目に觸れたなら、その挑發された程度に相應して何か書かうし、でなかつたら、總じて此種類の事件には、成るべく沈黙を以て對する方がいいといふ事をでも書かうと。

その締切日は目の前に迫つて來た。そして私は此十數日の間に、どんな感想と、意見と、批判とをあの事件に關して聞かされたか、讀まされたか。一言にして云へば、私も『中央公論』の編輯者に對する義理からばかりではなく、ほんの少しばかりは、書かないよりも書いた方がいいやうである。少くとも書いても差支ないやうに思はれる。

以上は前置だと、私が斷ることを豫想されるなら、それは間違つた豫想である。あれも、これから先に書く事も、あまりひどく種類のちがつた物ではない。そのつもりで讀んでいただきたい。

私はこれまでに二度ばかり、芥川氏と二人きりで話した。初めは、氏の學生時代に、私の預つてゐた原稿の事について訪ね

一度も[illegible]
も某の[illegible]私が、[illegible]たら是非申上げたいと思つてゐた事があるんですよ」と、おう揃つて、一寸膝をかける處へ導かれたのである。一度とも立話にも近いものながら、私の目に直接映じた芥川氏を再現する上に、かなり役立たないこともないのだが……だが、しかし、それは氏を語るより、遙かに多く私自身をも語ることになるから、かう云ふ場合にはふさはしくないだらう。

とにかく、こんな具合で直接に芥川氏を知つてゐることは極めて少い。その上、氏の藝術をも直接には、知つてゐるといふほどには知つてゐない。殊に最近の氏の作品について云ふと、讀まないでゐる物がかなり多くあるからである。

こんな立場にゐる人間の言ふ事だから、あまり重きを置かれても困るのではあるが、つねづね私は、『秀才』と結びつけ、『常識』と結びつけないで、『芥川龍之介』を思ひ浮べることは出來ないやうに思つてゐた。そして現在でもまだ、やはりさうである。

氏はかなり頭がいゝ。非常にいいとも云へやう。しかし、それは秀才的にである。

氏の書かれる物は、實際非常に上手で、そして非常に面白

い。しかし、それは厳密に思想家的の物、藝術家的のものとして見るよりも、寧ろ最高の常識人の物としてである。

曾つて廚川白村氏のなくなられた時あのあとへ芥川氏を据えたら、少くとも京都大學へ行く學生諸君の爲めには、大變いいことだらうにと思つて見たものである。勿論、廚川氏や上田敏先生にもゆづらないほどの立派な教授になつて貰へるだらうことを確信して。

最高の常識人といふ私の言葉が、芥川氏に對して拂ふ敬意の一限界を示してゐるのも、固より遺憾なる事實ではある。しかし、あれ位物分りのよさゝうな、我儘のなさゝうな、あてになりさうな、特に氏自身の反對な評價にもかゝはらず、申分なくヒユウメエンな心をもつてゐさうな性格は、遠方から見てゐても氣持がいゝ。深くつきあつて見たら、尚ほ一層氣持がいゝだらうと思ふ。

氏の自殺は、はじめて其報道に接した私達を、その刹那突然の事として驚かしはしたが、しかし、次ぎの刹那にはもう、それほどあの人に不似合な事でもないやうに思はせた。

誰でもがさうであるやうに、氏もまた生きてゐる時に見せたより他の物を、死ぬ時にも別に見せはしなかつた。

氏の親しい友人の一人である久保田万太郎氏の言葉をかりれば、『死んだあとでも取り亂した有様を見せない爲めの心遣ひ、更に仕事の上でも、今年は量的に驚くほどのものを書いてゐたことなども、死後「行き詰」つたなぞといふ批評を避ける爲めの用意だつたと見えないこともない』といふやうな點。『形見分け』をしたり、『古い作品をすつかり訂正』したりしてゐるといふやうな點。それから前の晩、食後につねの如く夫人令息達と『談笑』してゐたといふやうな點。これらの點を考へて見ると、氏の自殺は、かなり落ちついた、氣のきいた、嗜みのいい死にかたであると云はなければならぬ。

だが、ソクラテスやプラトンのやうなのが哲人であるとすれば、芥川氏自身が格別哲人らしい人でもなかつた如く、氏の死も格別哲人的なものではなかつたやうに思ふ。

誰が使ひはじめたのか、芥川氏の、とり分け其死の形容詞として、『冷徹』といふ言葉が盛んに使はれてゐるらしいけれど、あれは少くとも哲人的に冷徹した死に方といふほどのものではないやうである。

例へば、自分が自殺の誘惑に打ち負かされることを恐れて、友人にわざ〳〵一緒にねて貰つたといふやうな噂、度々自殺を企てて成功しなかつたといふやうな噂はどうか。さうした噂を

否定するやうな物も人も出ないのはどうか。

自分の自殺の動機は一に、『ぼんやりした』將來の不安だと書いたあと、まだ二十行も書き進まない内に、『ぼんやりした不安も解剖した』と書いてゐるのはどうした事か。

氏の所謂『生きる爲めに生きてゐる人間』といふのは、人間すべてを言つてゐるのかどうか。こんな大切なことをさへはつきりさせないでは、聊か哲人らしくないではないか。

氏が『人間獸』とか『動物的に死を怖れて居る』とか言ふ場合、人の『敢然と自殺』し得ないのは、その死に對する動物的恐怖を征服し得ないからとばかり考へてゐるやうに見える。しかし、少くとも氏自身が敢然と自殺し得るまへに戰ふたのは、何よりも人間性からの、人情からの躊躇であつたことは、あまりにも分りすぎてゐるではないか。そしてこれ位の反省さへ出來なかつたとしたら、その冷徹は常識人としての冷徹ではあり得ても、斷じて哲人的の冷徹ではあり得ないやうに思ふ。

今一つ哲人らしく冷徹してゐない證據をあげれば、既に冷かに自殺の準備をすまして、『今はたゞ死と遊んでゐる』筈の最高常識人は、さう云ふ口の下から、『しかし僕の何時敢然と自殺出來るかは疑問である』と、あともどりをしたやうな事を言ふのである。

『僕自身の縊死してゐる姿を想像し、贅澤にも美的嫌惡を感じた』云々はあまりにも當り前の、常識的な事で、こんな事を、こんなもつたいぶつた調子で書くといふのが、哲人的に冷徹してゐないことの一番いゝ證據になるかも知れない。

長谷川如是閑氏の談話の中には次ぎのやうな言葉がある——『私はもと〳〵自殺の現象にさほど特殊なものがないと考へてゐる關係上、氏の自殺についても、新聞なぞでザラに見る自殺者と大した相違がないのぢやないかと、別段殊更な考へ方が出來ないのだ』云々。

私は勿論、この談話の一節に見える長谷川氏ほどに、芥川氏の自殺を特色のない、平々凡々なものと見たくはない。なぜと云つて、氏位高級の常識人はさう〳〵ザラにあるものでなく、從つて氏位な生き方をし、又死に方をした人もさう〳〵ザラにあるものではなからうと思ふから。

要するに、芥川氏をも氏の死をも、あまり高く祭り上げるのはよい事ではないが、しかし、とにかく文壇まれに見る才人で、しかもよりまれに見るしつかりした性格をもつてゐた青年作家の、あの嗜みのいい死に方に對しては、衷心からの痛惜と共に、『流石は』といふ程度の嘆美をも表白するのは、それこそ私達のよき嗜みが、私達に要求するところのものであらう。

だが、それにしても芥川氏は何故に、何の爲めに自殺をする氣になつたものであらうか。『ある舊友へ送る手記』ははじめ遺書として發表されたのだけれど、本當の遺書として書かれたものではないと言ふ人々もある。少くとも、いよいよの決行よりもだいぶ前に、その大部分を書かれてゐたか、乃至まとめらてゐたかのやうに見えることは爭へない。

だが、しかし、あれが單なる遺書ではなくして、一面創作的なものであるにもせよ、とにかく、創作であるよりずつと以上に遺書であり、大體に於て遺書のつもりであつたらうことは、恐らく誰も疑はないだらう。

そして、あれによつて他の事は色々と分つたけれど、自殺の原因や動機に至つては、極めて僅かにしか分らない。あれで分る位の事は、あれを見ないでも分ると言ひたい位である。

夫人への遺書にも、氏の友人菊池氏への遺書にも、自殺の原因や動機を格別はつきりと書いてはないとのことである。

自殺の原因や動機をはつきりと理解して貰ひたい人もあり、全然知つて貰ひたくない人もあり、芥川氏の所謂美的嫌厭から、あまり有りのまゝに、あまり具體的に知つて貰ひたくない人もあり得るだらう。そして、何となく最後の場合が芥川氏の場合ではないかしらと思はせられる。

そこで、よくよくの必要でもない限り、餘りありの儘にならないやうに、餘り具體的にならないやうにと精一杯氣をつけ乍ら言ふのだが、島田青峰氏や、德田秋聲氏や、久保田万太郎氏や、殊に菊池寛氏なぞの推察を參考にして推察すれば、如何なる藝術家等の場合でもがさうである如く、芥川氏の場合もやはり、所謂思想生活に對する實生活の上の、さまざまな面白くない事情が、個人的な境遇や運命から來る壓迫が、氏の自殺に對する一番始めから一番終りまでの、又最も有力な原因動機であつたらう。

しかし、こんな風に言つたからとて私は、芥川氏が折にふれてその友人達にもらした、或は悲觀的な、或は懷疑的な片言隻句をとらへて、それを餘りに深刻な意味にとつて、それから氏の所謂『世事一切の事はもういやになつた』の唯一原因を斷定しようとすることは、寧ろつつしむべきであると思ふ。

なぜと云つて、ああした常識的な社交人は、相手の興味に相槌を打つ爲め、その時々にちがつた方向へ、隨分誇張した打明け話をもするものだから。

例へば、芥川氏が久保田氏には『いつも』次ぎのやうな話をしてゐたのである――

『お互に東京に家を持つてゐる者は、これと云ふ纒つた災難は滅多にないが、その代り、家庭關係の小さい紛糾がなしくづしに心を惱まさせる。そしてこのなしくづしの小さい惱みは纒まつた大きい禍ひより一層不幸なものだ』云々と。

その同じ芥川氏が菊池氏を相手にしては、いつも口癖のやうに、『生活の安定を計らねばならぬ』と言つてゐたのである。

更に、その同じ芥川君が宮崎光男氏の『憂欝な人生』觀に『強く相槌を打つて』は次ぎのやうにも言つてゐるのである。――『藝術に生きてるなんて言葉は、ほんとういふと、實に僭越至極な言葉だと思ふよ。やつぱり、食ふ爲めにしか生きてゐないのさ。食ふ爲めに稼ぐ。ところで、そこに、副産物として藝術といふものも生れて來るんでね』と。

思ふに、芥川氏は自分からさきに立つて、自分の愚痴をこぼすやうな人ではなかつたであらう。そしてかれの愚痴らしいものは、大抵の場合恐らく、相手の愚痴つぽい氣分に對して打たれた、ヒユウメエンな、温かな相槌たるに過ぎなかつたであらう。

さうした瘦我慢――それは近頃あまり流行(はや)らないけれど、決して惡い趣味ではない――がなく、他の大多數の現代人達の如く、みじめな愚痴を屢々とこぼして、他人からのぶしつけな憐憫を受けることに堪へられたなら、芥川氏は恐らくまだ〳〵死ぬ處へ來てゐない。所謂客觀的に見れば、氏の實際生活はあらゆる意味に於て、恐らくそれほど行きつまつてはゐなかつたに違ひない。

最も早くから最もおそくまでの、又最も有力な自殺の動機が其實際生活の上の不愉快な事情にあるにもせよ、尙ほ且つ其一般思想上の傾向が、人生觀が、少くともどれだけか動機を手傳つてゐるといふのは、大抵の文化人にあてはまる如く、芥川氏の場合にもあてはまるであらう。

たへとば、他から見てでなくとも、芥川氏自身から見て、かりに氏が文壇的に、または文學的に行きつまつたやうに感じたとする。その際、氏が『藝術の爲めの藝術』とでも云ふやうな傾向にゐたかゐないかは、さなきだに不愉快な氏の實際生活を一層不愉快にしたり、しなかつたりする條件としてかなり重要なものでなければなるまい。そしてこれが氏の自殺を捗(はか)らしたり、おくらしたり、乃至際どい處で喰ひ止めたりし得べきことを承認しないものはあるまい。

更により、一般的に、『世事一切の事はもういやになつた』と思はせたであらう種々なる事情をひつくるめて考へて見ても、氏が本來自然主義的な、懷疑派的な、乃至虛無主義的な思想傾向を有つてゐた場合には、さうした不愉快な事情が一層自殺を値したものになつて來たであらうし、それと反對な、謂はば宗教的な思想とか信念とかを有つてゐた場合には、所謂實際生活の大抵の事情が自殺へ誘ふのに、眞正面から抗爭してでも、氏を生きつづけささうとしたかも知れない。つひによく其抗爭に凱歌を擧げ得たかも分らない。

芥川氏は、自殺その物が道德的に善であるか惡であるかといふやうなことを、ひどく氣にしてゐたと見えて、例の『ある舊友に送る手記』の中にまで、『僕は紅毛人達の信ずるやうに、自殺することを罪惡とは思つてゐない。佛陀は現に阿含經の中に彼の弟子の死を肯定してゐる』云々と言つてゐる。

だが、從來クリスティアンなぞが自殺を罪惡視したのは、自殺が人生への絕望を意味し、呪咀を意味し、從つて神の愛、もしくは神その物への不信を意味したからにほかならない。だから、いかに自殺を罪惡呼ばはりする紅毛人だからと云つて、イエスを賣つたあとで自殺を遂げたイスカリオテのユダの自殺を、自殺その事を、あまり問題にしたのを讀んだことも聞いたこともない。

だからクリスティアンでも、クリスティアンらしい何物でもない芥川氏に對し、特にその自殺だけを攻擊するやうな紅毛人は恐らくあるまい。つまらない事を氣にしたものである。

自殺が自己の責任といふものを忘れて、もしくは回避する爲めに決行された場合、それを非難するのは、單に紅毛人の間にのみ見るところの道德的風習ではない。そして芥川氏とても斯うした風習を嘲笑することはしなかつたであらう。

反對に自殺が自己の責任を重んじた結果でありそれに依つて十分に責任の果されてゐた場合には、それを罪惡視するどころか、むしろ積極的に立派な行爲として嘆美することこそ、現代の道德的常識に屬してゐるだらう。

單なる『生きようとすること』が善でも惡でもない如く、單なる『死なうとすること』もまた、善でも惡でもない。如何に、何の爲めに生きようとするか、或は死なうとするか、そこへ來てはじめて私達の問題になるのだ。

自己の周圍、自己の延長である人々を主にして考へて見ても、彼等の爲めに死なねばならぬ時、決然としてよく死に得る

勇者は、彼等の爲めに死んではならぬ時、恐らくは又敢然として生き得るであらう。

自己その物に中心を置いて考へて見ても、單に死にさへしたら、そのあとが果してらくなものであるかどうかは、常識的な考方からさへ疑問とされてゐる。

阿含の佛陀を口にするほどの芥川氏ならば、勿論一應も再應も考へて見たことではあらうが、例へば一切を斷滅してニルヴアナの安樂境（永遠の生命といふのも同じ事だが）に入る爲には、通例八の數で數へられてゐる正しい道をふみ行はなければならないのである。

その正しい道は、私達がどんなに死にたくない（單なる動物性からでなく）場合にでも、私達の敢然として死ぬことを要求するかも知れない。そして其要求に應じ得たならば、私達は實際壯烈に死んだのである。

又その正しい道は、私達が「世事一切の事にもういやになつた」とどれほど思ひあきらめたくなる場合にも、尚ほ且つ頑強に私達の生きつゞけることを要求するかも知れない。そして其の要求に應じて、一思ひに死んでのけるに必要なより、百倍も千倍も大きな勇氣と忍耐力とをふるひ起して、猛然として、再び邁進し得たならば、私達は大抵の自殺者が自殺するときなぞと、殆んど比較にもならぬほどの壯烈な生き方を生きたのである。

所詮、勇者は勇者の如く死ぬこともあり、又勇者の如く生きることもあるのである。

一九二七年八月七日

(三) 輕井澤にて訃音に接す

有島生馬

芥川君の急死、自殺らしいといふ報知を初めて聞いたのは二十四日の晩、まだすつかり暮れ果てない頃のことであつた。私達は小諸で恰度その朝、藤村詩碑の除幕式をし、午後から記念講演會と音樂會を濟せ、町長始め土地有志の招待で關源といふ家

に行つて、一寛ろぎ、寛ろいだ處だつた。日々の記者の處へ東京から至急報で知らせがあつた。然しそれは田端の踏切りでの怪我のやうなことをも云つてゐた。はつきりしたことは、事實も、事情も、原因も更らに分らなかつた。同じ席にゐた山本鼎、福田正夫、佐藤惣之助氏等も唯驚いただけで、何等の推測もつかなかつた。正木不如丘氏は職掌から藥の分量などに就いて話をしてゐた。

翌朝私は未明に小諸を立つて、歸京の途についた。宿屋でも、停車場でも東京新聞が着いたか訊いてみたが、まだだつた。汽車が走り出してからも、どうかして早く新聞が見たかつた。見られないのが一種の不安のやうになつた。

輕井澤驛に着いた。避暑客や、外國人などが幾人かどや／＼入込んで來た。私はプラットフォムに下りて新聞賣を探し、あるつたけの東京新聞を下さいと云つたが、まだこれだけですといつて、三種の新聞を渡してくれた。私は輕井澤驛をまだ發車しない前に、もうその新聞をひろげた。そこに大きな活字と大きな寫眞で、芥川君の自殺が報じられてゐた。それでなくつても私は亡兄のことを思つてゐたが、紙面をみると當時のことがあり／＼思ひ出されて、感動を隱すことが出來ない位だつた。

輕井澤へは兄の事件以來足踏みしたことなく、別莊も取毀して終つてあつたから、幾度かこの驛を通過しながら一度も下車したことはなかつたのだが、今度小諸へ來る前日、姉と同道し、五六年ぶりで輕井澤へ寄つてみた。道端にある樹木などの目立つて生長してゐるので、時が吾々の記憶を追ひ越してさつさと過ぎ行くのをつく／＼感じた。甥等のために、テニスコートの近くに貸家を見たりして、三笠へ泊つたが、どうしても、兄の終焉の地を弔ふ勇氣は出なかつた。遠くからそこを廻避して歸つて來て終つた。

かうして今度の旅は私にとつては兄の死を思ふ機會が多かつたのである。然も輕井澤の驛頭で、偶然とは云ひながら、芥川君の死を知り、その遺書を讀む機會に遇つたことは、私にとつて、偶然が偶然とだけで濟されない。偶然でないといふ何等の理由をも見出すことは出來ないにしろ、その偶然を何か神秘に幽かな見るべからざる線の、震動と感ぜずにゐられないものがあつた。

遺書は三度意味もなく繰返して讀んだ。それは新聞が三つあつたから、十枚あつたら十度ぼんやり讀み返したかもしれなかつた。同車の人々も皆な今朝は熱心に新聞に喰入つて讀んでゐた。すぐ脇にゐた一人の獨逸人が日々を讀みながら、驚いたやうな聲を出して、伴れの男に芥川君の記事を繙譯して聞かせて

なるのが、何んとなく私を涙ぐませた。

芥川君には君が鎌倉在住時代に初めて會つた。何んでも、海軍士官の同僚らしい人をつれて家探しをしてゐて、私の家の近所へ來たので立寄つたのであつたかと思ふ。家の中へ上りもしないで、椽側で話して歸つた。私もさうであるし芥川君もさうであつたやうにさう初めから交際し易いやうな性の人間ではない。何んだか親しみにくい相な人のやうな印象を受けた。その後芥川君が私の小説「嘘の果」を半分だけ發表した時、日々で批評した一件から、一寸筆先の喧嘩をした。で芥川君の書くものはまで感心しては讀まなかつた。その後二三度會の席上などで逢つたが、何んとなく段々角がとれたやうで、よくなつて來てゐた。先方でもさう思つてゐたかもしれない。ある食卓で蘇峰先生に同君を紹介し、大分話の彈んで面白かつたとも思出す。

最後に逢つたのは五月三十一日の晩のことであつた。その時は日本橋のやまとで多勢一緒だつたが、日暮から飲み始め、更らに席を變へて十二時過ぎ隨分長く同席し、いゝ氣持で別れた。二人だけに通じるやうな話題なども出たりなどして打解けて話した。この最後の一緒に飲んで別れた酒は非常に私にとつてよかつた。これがなかつたら何時までも或るこだはりのため、後悔に似た記憶を後々まで殘さねばならぬことだつたらう。

列車に最近くに對座に皆いた。そこで會つたＹさんの[illegible]ると、かうして二人の人が逝つた。次の番は自分でないかと云る誰しも自分自身をある位置において考へてみるものではないかと云つた。Ｙさんは淋しさを感ずるやうにさりげなく笑つたが、それまでにもう何度かそれについて自問自答したといふ感を隱しきる譯に行かなかつた。然し弱い人間である以上誰れにだつてその位の神經のあるのは當然なことであらう。

そこから田端に引返し、愼ましやかな謙遜な氣持で、謂はゞ同罪者のやうな肩身の狹い氣持で、混雜してゐる芥川家の門を潜つた。そこの小じんまりと風雅閑靜な住ゐは、かうした取込事には極めて不向に見えた。焼香して椽側に坐つた未亡人の顔を見上げるに忍びなかつた。過去も現在も未來も一緒にごたごたになつて眼前に展げられたやうに複雜なものが私の頭を通り過ぎつゝあつた。

家へ歸る前麻布の島崎さんの處へ小諸の方の報告をしに立寄つた。そこでも芥川君のことが自然話題に上つた。兄の死と芥川君の死とを考合せてみると似てゐて、然もその中心動機は正反對の處から來てゐる。それは肉體の健康狀態をも考慮に入れてであるがと私は言つた。島崎さんも何か深く考へるやうにしてそれを肯定した。

齋町の玄關へ出迎に出た妻の顏にはいつもより婚し相な色が浮んでゐた。それは芥川君の死を考へ、運命の寂寥を考へつゝあつた、さういふことを直ぐ私に思はせるのであつた。

自殺から芥川君を批判することは到底私には思ひもよらない。誰れにも先づ出來ないことらしい。なぜなら氏自身それを試みるに生死をもつてし、尙且つそこに到着し得なかつた形に見える。然しその死から自殺を批判することは多少許されるであらう。少くもある人々に、私自身にもさういふ感が印象されてゐる。芥川君は自ら敢然と死を選んだ。選んだといふことは主觀的にせよそれに價値を見出したことになる。その點を芥川君ははつきりさせやうとしてゐる。又してゐる。芥川さんは死んだ、あゝ私は許される、さういつて暗い不安から解放された魂もあらう、芥川さんさへ死んだ、では私は生きてもいゝだらう、さう思つた魂もあらう。それは世路に矜る人々にとつて全く無用な暗示かもしれない、然し世の中には惨めな苦しい魂の方が遙かに多く存在してゐることを忘れてはならないのである。即ち芥川君はある高さの位置に立ち、死に對し冴え渡つた新解釋を與へた。ある與へ難いものを與へた。それこそ芥川君の生命をもつて描いた仕事の一つである。有ゆる現世の絆を斷ち、貴い樣々の犧牲を拂ひ、ソクラテスも、クリストも死を選んだのである。その相違は古と今、歷史と眼前の相違以外になんにもない。ソクラテスや、クリストの死に何かの意義を見出さうとする人は、芥川君の死、――それはもつと直接人間の生死そのものに觸れてゐる問題だが――それに就いてもある意義を見出すべきである。生許りが人間の生活でもない。死も生活の一部分と見ることが當然な筈である。

一方又芥川君はその選んだ最後によつて、君の非凡な詩的才能、及び藝術家的氣禀の純眞さを明白に裏書し、何卷かの遺作を靜かに自分の手で閉ぢたに齊しい。

（二、八、四、蛯谷）

(四　最後の鬼面藝術

高畠素之

生前の芥川氏とは交友があつた譯でなし、また作品に對しても、どつちかと言へば無縁の衆生だつた私である。氏の自殺に對する事情調査や心理分析は、隨つて私として適材でないことはよく承知してゐる。たゞ一の社會事實として、氏の自殺の『死』に於ける或る種の『新しさ』の發見が、巧言令色をヌキにして面白いと思へたので、妄評多謝の責任を引き受ける氣持となつたに過ぎない。

夕刊のなかつた翌日の朝刊で、特號の見出しでそれを知つた時は、さすがに胸奥の反應があつたことを記憶してゐる。同時に、又しても模倣自殺者が現はれるであらうことが思ひ合はされ、一瞬時その苦々しさが先に立つたのも事實である。が、肝腎の氏の自殺に對しては、それが意表の外のやうでもあり内のやうでもあり、不圖さうした種類の自殺ぢやないかと考へられた點が、例の遺書を讀んで行くあひだに次第に明瞭となつて來た。それほど氏の死に方は、如何にも氏らしい特色を濃厚に表明したものであつた。——といふと、どうやら誤見を誇りたさうな口吻になるが、それは氏が自殺したればこそで、自殺しなくとも、それなりに少しの不思議も感じなかつたであらう。死者を始め、その遺族や舊友に對しては勿論だが、眞の同情を當てようとする程度の強烈な興味で、與へられた自殺といふ事實を前に、ただ『彼ならさうもあらうか』と推量したことが、幸か不幸か適中したといふに止まつてゐる。無縁の衆生たる私にして然りとすれば、氏をよく知る限りの人々は、如何にも氏らしい死に方をそこに發見したであらうと思はれる。『自殺者は何のために自殺するかを知らないであらう』といへる氏の『經驗』を尊重すれば、あれやこれやと動機を穿鑿するだけ無駄な話しだが、しかし、『或舊友へ送る手記』に於ける氏の心境は、新技巧派と呼ばれた氏の創作手法に少しの歪みも見せないほど、それほど理智的な神經の躍動をうかがはれるのである。

實際、これは少しく氣障な言ひまわしになるが、芥川氏の最後の力作たる『自殺』は、彼れの藝術の當然なる發展の上に築きあげられたものであつた。その意味を逆面的に説明すると、自殺の方法が如何にも技巧的であつたばかりでなく、死の恐怖に對する不斷の理性的努力をもつて、やがて自殺をさへ一の遊戯の境地に融合せしめ得た點が、如何にも彼れの藝術を髣髴たらしめるからに外ならない。そこに時代的な或る種の『新しさ』を發見すると共に、多少の讃嘆があらうにもかかはらず、私が敢て『面白い』といふ所以もある。

二

先づ順序として、氏の藝術に對する私の所感を披瀝することにより、かうもあらうかといふ推論を展開したいと思ふ。

蛇に怖ぢざる盲人の勇氣を借用すれば、私は氏の藝術を大して感心しなかつた一人である。當初の古典物、享樂時代から中道の南蠻懐古時代まで、折りに觸れ時に及び、だいぶ讀むには讀んで來たつもりであるが、あれが肌合ひが違ふといふものか、どうも親しく溶けこんでは行けなかつた。奇智と逆說と反語と、そしてあの衒學と能筆とは、一脈の詩情と相俟つて特自の藝術境を開拓したことを認めるには躊躇しない。『なるほどこれが藝術といふものであらうか』と、門外の素人なりに一應の敬意を拂ふ反面には、また『これだけが藝術であらうか』といふ不滿も感じられ、氏の領有する文壇的地步に對しても、餘りに高く評價され過ぎてゐやしないかと疑つたことさへある。その感じは今に至るも變りはない。

私の氏に對する第一の不滿は、何よりもソツがなさ過ぎたことに置かれる。理智の積木細工に如何にも名人らしい彫琢をほどこし、懐古の燻しで一刷毛なすつた色合ひは、氏ならでは求められなかつた製作であるかも知れない。だがそれは、或る種の雛形的な藝術を意味するだけで、それ以上の何ものでもなかつたやうに思はれる。なくもがなの衒學や奇才が、餘りに縱橫に驅使された結果は、却つて氏の境地を歪めて見せた場合が少くなかつた。

その傾向は創作に於ける場合より、感想や隨筆に於ける場合が露骨であつたやうに思ふ。例へば『文藝春秋』の卷頭に連載された『侏儒の言葉』の如き、世評はどうであつたか判らないが、私に取つては退屈きはまりなきものであつた。『芥川龍之介もいゝか知らんが、獨りよがりのアホーリズムだけは願ひ下げにして貰ひたい』など、その話しが出るたび遠慮なく放言したことも記憶してゐる。『改造』で呼び物の『文藝的な餘りに文藝的な』も、題名だけはニイチエを髣髴させるやうだが、内容は理を詰んでも考へ落ちにさへならぬものが多かつた。殊に谷崎潤一郞氏との論戰などは、故意か無意か、論點を遠卷きにして中心に觸れず、傍の見る目をずゐぶんイラ立てたものである。

勿論それは、氏の頭の惡さから來てゐるのではない。頭腦は遺憾なく明敏なんだが、趣味といはうか習癖といはうか、好んで直接な花の美を眺めようとせず、いつも霞を隔てゝ效果を添へようとするため、肝腎の花が霞に遮ぎられて見えなくなるのである。

義技巧派と呼ばれ、[illegible]には、かうした氏の[illegible]目を持ち得ての批評であらうが。私のやうな[illegible]的な性格には、それが全く無駄な消耗のやうに考へられてならなかつた。そして時には、心情の結晶に突入する一段の勇氣を望みたいやうな氣もしたのである。その意味で、例へば『秋』といふやうな小說は、一流の造形美術的な臭味はまぬかれないにしても、懐古趣味を出さずに生きた現代人の心理を取り扱つたものとして、まだしも好感を持てたことを覺えてゐる。

三

芥川氏が懐古趣味に踏晦したのは、氏の藝術を生かす最善の方法をそこに發見したといふよりも、更らに性格的な必然の理由を孕んでゐるかのやうである。反社會的といつて惡ければ、反俗人的な異端者氣質があらゆる『現代』に於いて、氏の藝術を見出すことを拒んだ結果であらう。昆蟲の觸角にも似たる纖細な情感と、白金の留針にも似たる尖銳な理智の所有者が常にいつも反社會的な人間となるやうに、氏もまたその一人ではなかつたかと考へられる。

たゞ氏に於いては、さうした異端者氣質を有つ一面に、それに盲進すべく餘りに現代の紳士的要素を有ちすぎてゐる。これ[illegible]、氏の[illegible]といふよりは『[illegible]』といふ[illegible]を精透するには[illegible]を缺き、俗務に沒頭するには潔癖が勝ち、右往するにも左往するにも、一つの要素と他の要素とが干渉し合つて、その物理學的作用が妙に歪められたる『芥川龍之介』を作り上げたのではなかつたか。これは極めて常識的な解釋であるが、キリシタンの殉教に美を追慕する氏と、ジアーナリズムの諧謔に正を肯定する氏との間には、誰しも溶化しがたい矛盾を發見したことであらう。

私の目に映じた芥川氏は、人間も藝術も、秀才型ではあつたが、天才型ではなかつた。怜悧といふ形容詞は適合するが、もつと深い意味での聰明は大して惠まれてゐなかつたと思ふ。たゞ先天的な才氣と後天的な教養を遺憾なく驅使することにより、それを靈魂の上の聰明らしく振るまつたに過ぎない（らしく見られた。）それだけ、どつか『鬼面人を嚇す』といふ慨があり、時時は嫌味をさへ感じさせはしなかつたであらうか。氏を直接に知らない私として、なるべく斷定的な言葉は避けたいと思ふが、創作を見ても隨筆を見ても、常にさうした印象を與へられたことを悲しむ。隨つて私は、彼れの藝術を奇智や逆說に粉飾された鬼面藝術と解し、世評とはまた違つた意味で、理智の所

産たることを肯定してゐたのである。むしろ、氏の如き性格の人が藝術に進むとすれば、あゝした形態を取ることの悧好さを認めてゐたといふ方が適當であらう。それだけ猫や杓子が、氏を随意渴仰してゐるのを擽ぐつたく思ひ、その文壇的地歩に對しても懷疑的ならざるを得なかつた。

誤解を防ぐため一言するが、されぱと言つて、氏の藝術が全く下らなかつたといふのではない。特異な立場は十分に認め、新しい境地への開拓を認めるにも吝さかではない。ただ、鬼面はつひに鬼面ぢやないか、といふのが氏の藝術に對する忌憚なき感懷だつたのである。

見えすぎるほど自分が見えたらしい芥川氏が、這般の消息にのみ鈍感だつたとは考へられない。恐らく自分の弱點は他人以上にわかりもし、それで無難な懷古趣味を保護色に擇んだとも考へられるが、人こそ知らね、内心の悶惱は『クオ・ヴジス芥川』を反問したことがなかつたかどうか——

四

遺書に現はれた芥川氏の心理は、單にそれだけを表面的に見れば、徹底境に悟入した哲人の面影が躍如としてゐる。鬼面藝術の作家と誹議した私は、當然その不明を陳謝しなければならぬやうでもあるが、實はそれ自體が鬼面藝術の最後の傑作だつたと言ひたいのである。つまり、最後の至寶たる生命の放棄をさへ、如何にも彼れらしい鬼面で藝術化したところに、百まで舞りを忘れざる雀の本能を發見するからである。彼れは自分の毒死をさへ、如何にも理智的に客觀し得たと共に、その方法を如何にも技巧的に處置し得た！

自殺といふこと、これは戯談や醉狂でやれる藝當ではない。死に至るまでの苦痛は素より、死後の生命に對する漠然たる不安は、人間を自殺の危險から嚴重に遮斷してゐる。それだけ最後の一線を突破するには、容易ならぬ努力と勇氣を必要とするのであるが、芥川氏もまたこれは可成り深刻に經驗したらしい。ただ氏にあつては、自殺に伴ふさうした英雄主義に甘えるべく、餘りに理智の判斷が明晰であり過ぎた。これが氏をして、ともすれば自殺者の陷りやすき自己崇拜と自己陶醉から一歩を進出せしめ得た所以である。即ち自己を『神』としたい欲望の如何に古いかを感じ自ら『大凡下』として死ぬことに少しの不服を感じないまでに洗練し得て、むしろ『人間獸の一匹』が『色食にも飽いたところを見ると、次第に動物力を失つてゐる』ことを客觀し、極めて平民的（！）に我れと自らの命を制し得たのである。『僕は冷やかにこの準備を終り、今は唯だ死

と進んでゐる。『僕の今住んでゐるのは、氷のやうに透み渡つた病的の心理の世界である。』

斯くの如き情道は、如何にも芥川氏らしい特色を偲ばせる。同じ高嶺の月を眺める人間道の修業は、結局のところ、途端場に直面して死の恐怖を如何に切り抜けるかの努力だらうが、芥川氏の擇んだ道は安易な登山口からでなかつただけ、心ごころなる月見る人々の群にあつても、特に異色ある心境に安んじ得たことゝ察せられる。

芥川式が、如何にも理智的な眼光で死を直視し、やがては彼れ自身の心理をも、彼れの小説の主人公に對すると同じ興味を以つて冷靜に解剖することに於いて、從來のあれほど貴族的だつた自殺を平民的なそれに引き下げたのは面白い。これは確かに類型を破つた自殺である。もちろん宗教的でもなければ、道德的でもあり得ない。強ひていへば藝術的といふのだらうが、それも東洋的でなくて西洋的である。

如何にすればヨリ苦痛でなく、同時にヨリ醜惡でなく自殺し得るかの方法を毒死に發見してから、自殺手段に對する彼れの細心な注意は、遺書のほとんど全面を埋めるまで詳密に書かれてゐる。あれで見ると、單に理智的とか計畫的とかいつても足らないほど、それほど科學的な正確さの上に立脚してゐることが或る[illegible]科學的にもあり得る[illegible]

五

『誰れでも皆自殺するものは、彼れ自身にやむを得ない場合に行ふ』といふ以上、また『自殺者は何のために自殺するかを知らない』といふ以上、芥川氏の自殺の動機は『少くとも僕の場合は……僕の將來に對するボンヤリした不安である』ことを信用するの外はない。將來の不安なるものが有形的か無形的か、或は有意的か無意的か、そんな詮議も一切は無用である。まして新聞記者連の解釋のやうに、痼疾の肺結核とか、神經衰弱とか、家庭的煩悶とか、無論それらは『動機の全部』でないに違ひない。あれやこれやが累積して、久米正雄氏のいふ『人生觀上の問題』を形成したものであらう。

しかし、人生觀上の問題もよりけりである。芥川氏の有つた人生觀上の問題が、如何なる種類の煩悶であつたかにより社會的な重要性は決定される。社會的と云ふのがオセッカイなら、自殺者に於ける自殺の『意味』の厚薄が決定されるのである。遺書に依れば、芥川氏は彼れの先驗者と同じく、生きることの淺猿しさと反對に死ぬることの平和さを欲してゐた。それは

けでは別に新味はない。しかし、理知的なあまりに理知的な彼れはやがて自分自身の死さへ冷靜に客觀することに依り、如何にすれば最も容易に自殺し得るかに努力を集中し、他人の運命と同列に自分の運命を解剖してゐる。更らに次第に、自殺の方法や手段や場所を考究するうち、いつの間にか自殺そのものに對する親愛感を增したらしく、恰かもそれが最初からの目的であるかのやうに變化してゐる。これは驚ろくべき心境でともすれば、センチメンタリズムやヒロイズムの馬脚を露出したいところを、かうも日常茶飯的に片つけてゐるのは、舊來の自殺者には見られなかつた新型である。殊に自殺に依つて家が賣れないことを心配したり、幇助罪の不成立を野次つたりの漫歩ぶりは、そこに一脈の衒氣や稚氣の餘映を止めながら、それなりの『悟り』を如實に傳へてゐる。芥川氏なればこそ、この言葉は善惡の兩義に取つて貰つて差しつかへないが、芥川氏なればこそ、これは始めて到達し得た悟道の心境であらう。

同じく人生觀上の原因といふ理由で、親友の久米氏は北村透谷と彼れを比較した。だが、透谷の息づまるやうな英雄主義的自殺に對して、これはまた何と輕快に平民主義を發揮したことであらう。一方は主觀的で他方は客觀的、社會的には全く正反した類型を代表してゐる。それにしても、芥川氏のやうな自殺態度は、少くとも日本では最初の型を示したものと言つてよい。西洋だとて、小說や戲曲に描かれた繪空事としてなら兎にかく、實演としては餘り類似がないであらう。私が芥川氏の自殺を、敢て『面白い』と稱するのは、かうした新型を氏によつて發見したからである。

芥川氏のやうな性格は、容易に自殺し得ないと共に、容易に自殺し得る可能を兩面に備へてゐる。その點が、有島武郎氏などの場合とはよほど意味を異にする。私が意表の外のやうでもあり、內のやうでもあると言つたのは、彼れのさうした理智的な傾向に對してである。而も自殺した以上は、これに導くべき要素が如何に錯綜してゐても、恐らく發作的な衝動に身を委せなかつたであらうと察した如く、彼れは如何にも理性的な計畫の上に事業を完成したのである。藝術の上では無くもがなと思はれた衒氣や稚氣は、それあるが故に却つて一種の仙味を印象させ、自殺そのものをも容易に事務化し得たわけである。私はさういふ氏の性格に特異性を見ると共に、さういふ特異な性格に濃厚な時代色を認める。

（五）芥川君の死

武者小路實篤

芥川君の死についてはいろ〳〵の人がかくことゝ思ふ。僕のやうに同君のことをあまりよく知らないものがかくのは餘計なことのやうに思ふ。一體僕は他の人のことをかくのは何となく不安だ。他人の正體をつかむことは中々むづかしい。そして芥川君について正確な印象を得てゐない。

僕は同君のものを第一あまり澤山よんでゐない。よめば皆相當面白いのだが、ものをよみたいと思ふことが少ない自分にはついよまずにすます。自分のよんだ五六の作品で見た所では眞實さがいく分不足してゐるやうに思つた。それだけかき方に中々注意されて文體にたいする神經がこまかく、表現の仕方も中々かしこいと思つた。時に才がこきざみに出すぎてうるさい時もあるが、趣味も頭もいゝと思ふ時も多かつた。もつと生てゐたら、その方面で圓滿なものゝかける人になつたと思ふ。自分の領土を十分知つて、その範圍の仕事をされたら、類のない文體も獲得出來たかと思ふ。しかし僕のよんだ内で今記憶にのこつてゐるものは、芥川君の作としていゝものではないやうだから、同君のいゝものをよむ節に何か云はしてもらうことにしたい。

自殺については僕は新聞で始めて知つておどろいた。一日程、興奮し、同君はいゝ人だと云ふ氣と惜しいことをした氣と、死と云ふものにたいする考へとが頭についた。そして死と云ふものは思つたより親しめ、又近い所にゐるものだと云ふ氣がした。

同君がなぜ死んだかはわからない。又わからない所がいゝと思ふ。同君にも恐らくわからなかつたと思ふ。いろ〳〵のことが重つてゐるのは事實かと思ふが、死ななければならないと云ふことはないと思ふ。同君が生命力がもう少し強い質だつたらそんな原因もはねのけられる性質のものではなかつたか、それをはねのけない處に同君のいゝ處もあり、もの足りない處もあるが、しかし其處に清さを自分は認める。去るものあとを濁さず。同君は實際あとを濁さずに去つた。それだけあとにのこつ

た人は淋しいかも知れない。

死んだ本當のことがわからないのだから同君の死については自分は何にも云ひたくないが、しかし自殺といふものは、そのものとして僕は賛成出來ない。同時に非難もしたくない。

ゲーテがウエルテルをかいて自殺の誘惑に打ちかつたと云ふ話を聞いてゐるが、同君が遺書をかくことで死なずにすめ、そして新に生てくれたらよかつたと云ふ氣もするが、しかし死んでしまつた以上は仕方がない。

生てゐるのがいやにたつてしまつた人は死ぬのは仕方がないとも思ふ。同君を生てゐるのをいやにさせたものは何か。

それは有名な人を濫用する社會の罪か、家庭の責任か、當人の責任か。そのいづれでもないか。

どつちにしても生命力が強く、動物力が強かつたら死なずにすめたと思ふ。

動物力を芥川君は輕蔑してゐるやうだが、動物的エネルギーは僕は一がいに否定すべきものとは思はない。生命に滿ちた動物の美しさを自分は知つてゐるから。

寧ろ太陽や、星や、月の運行にも自分は動物力を感じ、生命と調和するものゝ美を感じる。美を感じた時そのものは肯定された時である。むしろ我等がはがゆく思ふのはすべての生き者が生命力を發揮出來ない運命を背負はされてゐることである。

しかし死にたくなつたものにとつて、肉的の胃腑にとつて食物ははきけを催すやうに、動物的生命は嫌惡したくなるかも知れない。それも生理的であればやむを得ないと思ふ。

へんなことをかいたかと思ふが、急がしすぎるものに無理にかゝせた人にその責任を負はせたい。實際あつい所を何度も何度も原稿催促にくる方の姿を見ると無下にお斷りするのがすまなくなる。

そんな同情はいゝことかわるいことか知らないが、芥川君はさう云ふ同情に理解してくれる人のやうに思ふ。

自分より若い人に自殺されて少しがつかりした。

自分は死をも恐れない人が、生をも恐れずに餓ゑ死にする迄も自分の仕事にかぢりつくことを讃美したいものだ。しかし死を恐れる我々にとつて、靜かに死線を越えて行く人を一種の勇士として見たい氣持も、自分には自然に思へる。

ともかくうらみがましいことを云はず、靜かに死んで行つた。そしてこの生に何も恐ろしいことはない、人間はいつでも、平氣で死ねるものだからと云ふ事實を示した同君を何と云つても一方ほめたい氣もするのは自分にとつて事實である。あとは他の人に任せる。

俳諧に於ける小說味戲曲味

露伴學人

俳諧といふのは元來滑稽詼諧といふほどの意味で、嚴正に言へば一の名詞では無い。詩歌の俳諧體といふのも、弄語的或は其他の諧謔の體といふことで、俳諧といふ辭は形容詞的に使はれてゐるのである。連歌が起つてから、正式連歌に退屈した餘興に俳諧之連歌が起り、後に「之連歌」を略して俳諧と云ふのみで、俳諧體連歌と云ふやうになつたのである。今こゝに俳諧といふのは無論俳諧之連歌をいふことと認めて貰ふ。然し俳諧之連歌は歷史的には滑稽なのが其の本質であるけれど、芭蕉が出づるに及んで、歷史的から云ふ本質には少し變つて來て、俚語俗言を用ゐた、必ずしも滑稽詼諧のものでは無い、云はゞ平民的現代的之連歌といふ意味とされて來たのである。勿論歷史的の習氣をも猶多少は存して、滑稽な味を存したものも無いでは無いが、大體に於て單に坐興的の滑稽なものであつたものを、詩歌其ものゝ本質に近づけた進步向上の功は芭蕉及び其一派の有するところであつた。

然るに時代を經過する間に、俳諧之連歌は之を作るものと味はふものとの減少を來して、俳諧之連歌の第一句即ち發句のみを作り、又之を味はふだけで、それで俳諧は足りると思ふやうになり、俳諧といふ語は俳諧之連歌の發句をいふやう

にも取られ、俳諧は俗語を用ゐて作る短詩といふやうに解されても差支無いやうになつた。時世の齎らした變化であるから別に咎むべきでは無い。が、大分に本來からは遠ざかつて來た譯である。で、俳諧を發句のみであるといふやうに早合點する人は、やゝもすると俳諧は詩歌同樣のものであるに關らず、詩歌の大部分を占むべき戀愛も人情も度外にして置いて、世相にも觸れずに、たゞ單に花鳥月諷、四季の節物を取扱ふのみで、平淡無味に近い、興味の少い、風流人的情趣のみを盛つたもののやうに看做す傾も有る。然しそれは後來の趨勢を以て眼を掩はれた上の感じで、俳諧が所謂月並俳諧、床屋俳諧に墮落したから生じたことである。少くも元祿の勃興期はそんなものでは無かつたのである。俳諧の盛期は決して發句のみで一世に歡迎されたのでも無く、又發句のみで興隆したのでも無い。いや寧ろ矢張り俳諧之連歌の其の連聯綿續して行くところの面白味、世相の記述も有れば批評も有り、人事の判釋も有れば贊歎も有り、戀愛をも扱ひ、哀傷をも扱ひ、諷刺も有れば嘆息もあり、所謂嬉笑怒罵、皆以て文を成して、而して四時の逝いて止まらざるが如く變轉遷移して行くところの眞趣は恰も實際の人生其儘であるを覺えしむるに感ぜしめられたので、そこで俳諧は世に悦ばれて、そして興隆したのである。詩想の純が足らないで、俗才の機の鋭い支考等が、芭蕉の歿後、俳諧之連歌を試みたがる世人に對して、先師の餘威を背後にして其の法や彼の式と、種々に有り難さうに傳授めいた事を云ひ散らして群盲を嚇しつけてから、世人は漸く俳諧之連歌を小面倒なものに看做し、且又寶暦後の面白くも無い型に嵌つた俳諧連歌に厭氣をさして、そこで俳諧之連歌は所謂俳諧師を以て立つ者の間には存したが、一般世人とは次第に緣の遠いものとなり、遂に發句だけが世人の有する平民的文藝の最短形の者として取らるゝの勢を成し、明治に至つては人をして俳諧之連歌には見限を付けて來てゝ終はせるに至つた。それ等の功過は今語らんとすること以外の問題だから差措くが、世人が俳諧之連歌に疎くなつた結果として、芭蕉及び其一派が元祿の盛期を現出したのも、たゞ單に發句の佳良なものを諸星が詠出した爲ののゝやうに誤解されては、餘り眞相に遠くなるから、一寸こゝに概略を指摘して置くのである。

既に俳諧をして眞の意味における詩歌たらしめた芭蕉等である。何で君相や人情を度外にして、風に、雪月花や四時の節物のみを詩として扱はうや。たゞ俳諧之連歌は本來が連歌である以上、連歌の式に押嵌して何を爲し辭を聯ねるのである。そこで自然に形式上其の發句には特別の場合を除いては戀愛や哀傷などを扱つたものは少い譯である。それ故に發句のみを以て、それが芭蕉等一派の作品全部のやうに誤解したならば、芭蕉等は一生戀愛其他、今日の人の所謂詩味小説味戲曲味等に全く目を閉ぢてゐる偏人のやうに見えて、こんな不可解なばかした事は無い譯になる。西人は杜子美の詩集を骨を折つて讀んで、そして戀愛に關する詩の乏しいのに疑訝したといふが、支那では詩經や楚辭を別として、戀愛などを表向に言ふことを大丈夫士君子の立派な事とはせぬこと、恰も我が武士道に於ける如き風習が、道義節氣を表面だけにせよ極端に尙ぶやうの世となつてから長く存したので然様いふ傾向も生じたので、我邦とは全然相異なる。我邦では記、紀、萬葉の頃から、古今以後になつては形式的にさへ取扱ふまで戀愛などは詩題となつてゐるのである。何で俳諧者流が遠慮や忌憚するところが有らう。發句のみで俳諧を論談すると、戀愛は俳諧に於ては甚だ稀薄であるが、俳諧が何で戀愛を疎外して居らう。

支那では詩がいつとなく硬化して、正廳的御客座敷的のものとなつた代り、早く香匳の一體を進出し、それから又詩餘の一體が生ずるに及んで、其の方は又殆んど全部が軟派で、兒女の情を敍する專門のものゝやうになり、戲曲、小説が出來るに及んで、大きな一ト流れとなつたが、俳諧は和歌より系を引いた連歌の庶子の如く世に出て來たので、本より自由自在を本質として立つてゐる上に、傳統的から云つても戀愛などを扱ふを憚る譯は無いので、和歌的なのがあるのみならず、小説味的、戲曲味的のものをさへ含んで人情世態の記敍批評諷刺慨歎等を縱横揮灑するに至つてゐる。發句一章の性質論は別として、俳諧の興趣を世に認められたのは、其質却つて此の方面に存したのを看過しては錯誤である。

誰しも猿蓑を讀んでは心づく句がある。寫實寫生の一ト風に於て清新纖細で俗人の所謂芭蕉十哲等にも勝れてゐる彼の

凡兆の句

さま〴〵に品かはりたる戀をして

といふのに、芭蕉が何と附けたであらう。

浮世の果は皆小町なり

と附けてゐる。凡兆の句は西鶴の一代女か一代男か、源氏物語の光君のやうな、然無くとも普通世人の榮枯浮沈壯年老齡の間に、上品、中品、下品、片戀、相惚、思ひさめ、泣別れ、有緣、無緣種々の戀をしたのを云つたのである。それを芭蕉は「皆」の一字に取つて押へて、玉造小町か卒塔婆小町か知らぬが、壯衰一夢、浮世の果は皆小町なりと云つてゐる。これは芭蕉の個性若くは信念から出た一般的批評だから誰にも感知さるゝ句で、句の善惡深淺は別として誰にも解り、誰にも氣が附くのである。けれど是の如きを外にして、世態人情に渉つて小說の如く戲曲の如きものは七部集の隨處にある。

夕飯に魳子喰へば風薰る　凡兆

蛭の口處を搔きて氣味よき　芭蕉

物思ひ今日は忘れて休む日に　野水

の三句の如きは、今の人の所謂氣分の描寫が自然に出てゐる。

大膽に思ひ崩れぬ戀をして　半殘

身は濡れ紙の取り所無き　土芳

前句も好いが後句の嗟歎も好い。西鶴が書いた刀鍛冶の貧乏弟子が全盛の芳野太夫を思染めたところに、及ぶことの及ばぬ身、と自ら悲む悶を書いたのは名句だが、此句の方が端的に描出してゐる。近松が博多小女郎に、宗七の汗を小女郎が拭ふところ、延紙有りたけをふき捨つるゝ、濡れて破るゝ人心、と書いたのは實に妙句だが、それとこれとは事情が全く

異なるけれど、戀に同じ濡紙を寄せた此句も其巧に於ては多く譲らない。姫歌の情、無力無能のなげき、清く純潔的ならんとする心、而して已まんとして已む能はざる眞情のにじみ出して來るのに自ら保つことの出來ないさまを僅々十四字で描盡して居る。

戀愛の句ではないが、

人も忘れし赤澁の水　凡兆

といふのに

うそつきに自慢いはせて遊ぶらん　野水

と附けてゐるのがある。赤澁の水は飮めぬやうな惡い水である。隨つて人も云囃さぬ古井である。噓つきが何かそれに就て物識めかして變な咄などをする。又例の何でも知つた愚慢先生の御話だと思ひながら、遊ぶ氣になつて腹で笑ひながら閑暇潰しの慰に聞いてゐる。一なことは世間に得て有る事だが、自慢云はせて遊ぶらん、と人の惡いやうなことだが斯樣云ひ取ると、そこに不可言の滑稽味があつて、勿體ぶつた噓つき、へゝエ、へーエと聽いてゐる海利口の男の對照が輕いユーモアを感ぜしめられて甚だをかしい。そこへ

又も大事の鮓を取出す　去來

と附けてゐるので、何とも云へぬ可笑しさが込上げて來る。此の鮓は江戸の握り鮓や大阪の壓し鮓ではない。大切な鮓といふのだから勿論の事、珍下物に屬する琵琶湖の鮒の鮓とか、北越の鮭の鮓とか、紀州の纏卷鮓とかいふ類のものである。それを大事のものと惜みながら講釋を添へて坐上へ取出すところ、フヽ、ハヽ、と笑はずには居られない。味はへば味ふほど下品で無い輕い可笑味は到底七偏人八笑人等の滑稽小説の及ぶところでない。

こそ〳〵と草鞋を作る月夜さし　凡兆

蚤をふるひに起きし初秋　芭蕉
その儘にころび落ちたる升落し　去來

の三章の如きは何の事もないが、眞率な、此頃の所謂生活描寫の短篇の、髓腦といふところである。

うき人を枳殼垣よりくゞらせん　芭蕉

うき人は即ち我を物思ひさする人である。此句が戀の句なることは言ふまでも無いが、恐ろしい曲のある句である。近松の鎗の權三の中に、實際に枳殼籬をくゞるところがあるが、芭蕉が斯樣な曲を言つてゐることには、發句ばかり讀んで俳諧を談じてゐる人の思ひも及ばぬことである。去來が此句に附けて、

今や別れの刀さし出す

と云つてゐるのも、何んとなく面白い光景だ。

桐の木高く月冴ゆるなり　野坡
門しめて默つて寢たる面白さ　芭蕉
拾うた金で表がへする　野坡

の三句のつゞきは、野坡の句に至つて餘り世俗的だが、世俗的なだけに拾つた金で疊の表がへして默つて寢たところは何といふ寫實的小說の氣味合だらう。

雪の後吹きはがしたる朧月　孤屋

といふ句は一句としても景色の思はるゝ佳い句であるが、其後に

蒲團丸けて物思ひゐる　芭蕉

と附けてゐる。何といふ映りあつた境界の戀の情であらう。一句で大抵な短篇小說が四頁五頁を費したより、一場の光景

は眼前に見える。

風細う夜明烏の鳴渡り　信武
家の流れたあとを見に行く　利牛
泥鰌汁若い者より健くなりて　芭蕉

洪水のあつた田舎の状だが、腹ぐすりの泥鰌汁に先づ壯年者が勢を出したところなど、發句の佳なるものは多くは畫的であるが、此等は雜文的に興趣を感じさせる。

むかしの子あり忍ばせて置く　其角
いさ心あとなき金のつかひ道　同

の一聯の如き、おとなき金の遣ひ道、女房にも千代にも云はぬところ、好箇の小説的光景だ。

小栗讀む片言まぜて哀れ也　其角

といふ句の小栗は小栗の判官の説經祭文か何かだが、後の三勝半七の物語の中の悲しい一節は此句から案じ出したのでは無いかとさへ疑はれる。

だまされてまた薪部屋に待つ　野坡

といふ句は自然主義的描寫でをかしい戀だが、それに附けた

好いやうに我が手で算を置いて見る　利牛

は刺笑的で滑稽の上乘だ。算を置くは占をする事である。落窪物語の藪醫師に算を置くといふ事實は無いが、何となく彼の老いて助平で獨り合點をしてゐる癡物を見る心地がする。

上置の干菜きざむもうはの空　野坡

卑しい女の戀だが、久松を戀うた野崎村の哀れな女の顔が見ゆるやうで、それに付けた

馬に出ぬ日は内で戀する　　芭蕉

の句は、堪らなく現實味の溢るゝ面白いものではないか。

宵々の月をかこちて旅大工　　依々

一句は旅大工が家を懷うて、月良き宵に歸思甚だ動くところである。それへ附けた

背中へのぼる子をかはゆがる　　桃隣

の句は、うるさがるべき人の子をも、心中に優しい情が湛へ滿ちてゐるところから、無邪氣になじむ其子を愛してあやすところ、實にホロリとさせる妙がある。

又今朝も佛の飯で埒を明け　　利牛

佛に供した飯を食つて朝を濟ます。何といふ意氣地無しを罵倒した毒語であらう。それへ附けて

損ばかりしてかしこ顏也　　杉風

と云つたのは思はず拍手させられる。實際世間には杉風の此の一喝に値する賢こ顏の人がある。うつかりすると自分等も其仲間だと、ヒヤリとさせられる。銳利な世相批判である。

死なぬ合點で病うてゐる　　沾圃
年々に家内のものと中惡く　　里圃

の一聯も偏固な性格の所有者を罵つて骨に徹してゐる。死なぬ合點で病うてゐる者は驚いて深省を發せぬわけには行くまい。

東風の又西になり北になり　　惟然

我手に脈を大事がらるゝ　芭蕉

天候の變化、氣溫の變化、それに自ら脈を取つて何の彼のといふのは、今の世でいふ神經衰弱者である。ノイラスチユイといふ言葉は新らしい言葉だが、二百年も前の元祿の芭蕉が其の患者を、笑つても居ないが、少し冷かし氣味に、大事がらるゝ、と云つてゐる。支考はイヤな男で、其後へ附けて曰く、

後呼の內儀は今度屋敷から　支考

これでは屋敷者の、男めづらしい內儀を後添に呼んだので氣ヤミになつたやうで、何だか變に毀弄してゐるでも有るまいがをかしい。

いらぬとて大脇差も打くれて　正秀

一人ある子も矮鷄に替へける　珍碩

大脇差を不用だとて與へるのは好いが、一人子を矮鷄が可愛いとて替へるのは大變な男だ。其後へ

江戶酒を花咲く度に戀しがり　正秀

と附けてゐる。老莊流か何か知らぬが、元祿には斯樣いふ調子な男もあつたかと、デカダン的情趣も物珍しくなく思はれる。

髮くせに枕の跡を寐直して　乙洲

醉を細目にあけて吹かるゝ　野徑

これは歌麿あたりの浮世繪のやうで、

女郎花心細げにおそはれて　無名氏

目のうち重く見遣り勝なる　野徑

これは土佐繪である。

何ともせぬに落つる釣棚　越人
しのぶ夜のおかしうなりて笑出す　荷兮

荷兮は七部集作者の中の特色ある一人で、戯曲的の傾きが其の想像に多い人である。此の越人の句は句通りの意味で作られたのであるに相違無いが、荷兮は何ともせぬに吊棚が落つることは無い、何ともせぬに落ちた、といふのであると取つて、夜這の失錯と、しのぶ夜の句を付けたのだ。此句の後百餘年にして十返舍一九の膝栗毛に、吊棚に落ちられて彌次喜多の究する大滑稽の一場があるが、此の越人荷兮の一聯をよく〳〵味はうと、文法上のテンスなどは少し不都合であるが、其の不都合の中に却つて無限の曲折が存することを思はせられ、そして十分に咀嚼玩味して融解會得すると、アハヽヽと笑ひ出したい光景が想ひ得られるのである。釣棚の前の句は、

熟加減又とは出來じ醤味噌

といふので、醤味噌の甕などが落ちて割れたのである。一九は創造的才能の少い男で、膝栗毛のをかしな談も大部分は二番煎じである。或は此句から案出したか、それとも自分の實驗か、それは知らぬが何にせよ此の一聯を熟く味はへば、膝栗毛より百餘年前に既に其の可笑味は荷兮によつて巧に描かれてゐることを思はせられる。

手束弓紀の關守が頑固に　珍碩
酒で禿げたる頭なるらん　曲水
双六の目を覗くまで暮れかかり　芭蕉

此の三句も關守を除いて甚だをかしい。酒で禿げたるの句は、禿頭の酒客を見るたびに思出さずには居られない句で、自分は若い時から何度此句を思出しては輕い笑を含んだか知れないし、そして今は自分が自分の手を頭へ當てゝ恐れ入つて

感心し來る段になつてゐる。へ、、。ところで芭蕉は双六に凝つた男が勝負に日暮も忘れて、其の禿頭を前へ突出して双六盤の目を覗いてゐるところを云つてゐる。高物罫染色になつて行く中に奇麗な禿頭が盤の上に光つてゐるかと思ふと、堪らなくをかしくなつて、そして酒や博戯に人の老い行き日の暮れ行くところを觀じさせられて、和らかな諷刺が外から逼り、淡い哀愁が内から湧くのを覺えさせられる。芭蕉は中々立派な滑稽味を有つてゐる。

千部讀む花の盛の一身田　珍碩
巡禮死ぬる道の陽炎　曲水
何よりも蝶のうつゝぞあはれなる　芭蕉

これは誰しも感じる名高い一ト續きである。一身田は高田派本山所在地である。巡禮陽炎の中に死し、蝶無心に其あたりにひらひらするところ、詩的、畫的、小説的、戯曲的であつて、いろいろさまざまの感情をも觀察をも批評をも解釋をも、盛つて餘りあるといふものである。

細き筋より戀募りつゝ　曲水
物思ふ身に物喰へとせつかれて　芭蕉
月見る顔の袖重き露　珍碩

芭蕉の句も戀する者に徹底した同情のあるところ、催々せつかれての五文字に生ける命をもつて現はれてゐるが、珍碩の月見る顔と云つた「顔」の一語も、曲折潜在して、實に言ひ得てゐる。

挑灯過ぎてあと暗き暮　野水
何事を泣きけむ髪を振梳ひ　落梧

暮色大に逼る頃、挑灯過ぎて其のあとが一段暗くなるところを云ひ得てゐる前句も宜いが、それはたゞそれだけの事であ

るのに、何事をの句が無限の感情を開展させてゐる。其の挑灯の連なつた一行は嫁取りか聟取りの一行であつて、家の紋鮮やかな其一行に出遇つた女が、如何なる事情が有つてか知らぬが、それを見て髪振覆ひ取亂して泣いたのである。古風ではあるが、好い小說的情景だ。

涙見るはなれ〳〵の浮雲に　　嵐雪

離れ〳〵の雲をぼんやりと見やるところ、是れ戀の情でなくて何であらう。一句は當時の歌の言葉を打掠めて用ゐてゐる。それに越人が

後添呼べといふがわりなき

と附けてゐる。此句が亦前句に劣らず人の感を惹いて暗涙をさへ催さしめる力がある。連合を失つたとて、それで世間は濟むものでは無いから、後添を呼べと人が云ふ。心の傷手からは盡きぬ血涙がまだ流れてゐて浮雲の大空に離散するところを見てゐる。然樣云はれて見ればそれも道理ではあるが、返辭も出來ずに、たゞナサケ無い、アヂキ無い感に滿たされてゐるところを、意義の包含量の多い「わりなき」といふ一語で表はしてゐるのは、何といふ妙味であらう。小說もここにある、戲曲もこゝにある。越人の此の一句を點出した心匠の靈機は人をして抵掌して妙を叫ばしむるに足りる

着物を砧に打てと一ツ脫ぎ　　嵐雪

明日は髮剃る宵の月影　　越人

白露のむれて泣き居る女客　　同

つれなの醫者のうしろ姿や　　嵐雪

の一ト續きも亦輾轉變化して明珠が玉盤を走るの趣がある。塵世を思切つた女の髮剃る前の宵に着て居たものまでを召使へかなんぞに與へて、心にかゝる雲も無い月影を仰いだ凄涼の光景も好い。仲好き朋友親類の女達の溢るゝ同情に泣く

ところも好い。それを一轉して、もはや望も無い、藥も盛れぬといふ醫者の後言を「つれなの醫者」の一と見立つたところも好い。

其角に至つては又一種の風骨を具してゐる。

恨みたる淚まぶたにとどまりて　越人

といふ句に

靜御前に舞をすゝむる　其角

と附けてゐる。鎌倉鶴岡八幡のところで、人も知つてゐる場である。そのあとへ

空蟬の離魂の煩のおそろしき　同

と附けてゐる。離魂の煩は即ち戀の病で、治するに道無きものである。これは賴朝の女の大姫が定められた夫の淸水冠者義高を、其父義仲を敵として殺した關係上賴朝が殺させて終つてゐる。それで大姫が苦悶遣る方無く、魂もぬけたる如き怪しき病になつて、賴朝も政子もテコズツテ居る。其の大姫を慰める爲に、すゝめられて靜が舞を奏することが東鑑に出て居る。靜は生きて天下のお尋ね者になつてゐる義經を戀ふてゐる、大姫は死んだ義高を戀ふてゐる。此の悲しい二美人の相會したところは何といふ劇的シーンの「氣味合深い」一場であらう。そこを點破して、「海河に盡は無い」と云つてダヾをコネて戀の意氣に兩親を威嚇したほどの大姫を持出して、「かげの煩の恐ろしき」と、大姫を憐むが如く、賴朝を刺るが如く、一語兩映、ぽつと云つて退けたところは何とも云へず面白い。こゝを拾ひ出して捉へたら才ある人は立派な一戲曲を成すに足りるであらうではないか。

やゝ思ひ寢もし寢られず打臥して　越人

といふ句は、一句としても、戀に惱んでうつら／＼としてゐる人を僅々の語に能く表はしてゐる。其角はこれに何樣いふ

句を附けたであらう。

米搗く音は師走なりけり　其角

と附けてゐる。うつら〳〵と物思つて寂しき枕に結べぬ夢を繰はせてゐる。と、ドシン〳〵と隣で米を搗いてゐる音が響いて來る。寢られない。思へば米をも搗く筈だ、師走である。……實に何とも云へぬ氣味合が出てゐる。流石に其角だ。たしかに此處は越人も感服し敬服し畏伏したらう。其角の句はまるで好い老禪師が輕い一拶を與へて、遶りきつたる淡癡淡をアツト云はせた概がある。

足駄はかせて雨のあけぼの　越人
後朝（きぬ〴〵）や餘りかぼそくあてやかに　芭蕉

といふ一聯がある。後朝の雨にかぼそくあてやかな女を憐んで戶外（こと）へ出させぬのか、それともかぼそくあてやかな女が引留めて歸さぬのか、それはどちらでも人々の想像に任せるが、何にせよ雨の後朝に膠漆の二人が離れとも無く離しとも無いところで、よく〳〵其の情態を味はふと、ウ、、それ御涎がといふ場だ。枯淡清寂一點張りのやうに思はれてゐる芭蕉に斯んな句があるのだ。詩の世界だもの、何の有らさるところが有らんやだ。

あて事も無き夕月夜かな　野水
露の身は泥のやうなる物思ひ　荷兮
秋をなほ泣く盜人の妻　越人

のつゞきも盜人の妻が實にめづらしくて而もおもしろい。

肌寒み一度は骨をほどく世に　荷兮
傾城乳をかくす有明　昌圭

これも名高い附で、一種幽微の感情がある。

　　顏懐(ふところ)に梓聞きゐる　　雨桐
　　黑髪をたばぬる程に切殘し　　荷兮

梓聞き居るは梓の神子(みこ)の言葉を聞き居るので、顏懐にの一句で光景睹るが如く、物思ひしながら降神術をする巫女が妖異幻怪なことを云出すのを聞味はつてゐる。三馬の浮世風呂の巫女(いちこ)は滑稽に書かれてゐるが、これは元祿だけに古風でマジメだ。荷兮の附句は又實に妙だ。其の聞いてゐる女はゴツソリと丸坊主に剃りこくつても終はず、黑髪をたばぬる程に切殘し、と云つてゐる。黑髪、たばぬるほど、切殘し。何だか未だ全く亡夫に一身をさゝげては終はぬ、少し浮世に色氣がある、さればとて亡夫に愛情も無論有ればこそ髪も削いでゐる女である。顏は懐に埋めてゐる女の、その髪を點出して、そして解釋は人々の隨意に任せて、有るが儘に現はしてゐるところ、小說ならば次の頁が無くては濟まぬ段だ。が、それだけであるのが、却つて又餘情が有つておもしろい。荷兮は小說家なら中々の人である。

　　門守の翁に紙衣(かみこ)借りて寢る　　重五
　　血刀かくす月の暗きに　　荷兮
　　霧下りて本郷の鐘七ツ聞く　　杜國
　　岩倉の聟なつかしの頃　　重五
　　おもふ事布搗歌に笑はれて　　野水
　　うきは卅(はた)歳(ち)を越ゆる三階　　杜國

血刀かくす月の暗きになど、まるで劇である。淋しい其頃の本郷の霧に七ツの鐘を聞くところなど、默阿彌見い位だ。岩倉は京都の在である。布搗歌に囃し笑はるゝ其の丸顏不美の女。楪茂の美のある小品である。

捨てし子は柴刈る長に伸びつらん　　野水
晦日を寒く刀賣る年　　重五

時代物の劇である。此の晦日の句に附けて

雪の狂呉の國の笠めづらしき　　荷兮

これもおもしろい。雪見に狂じた人の尋ねて來たのに邂逅したところで、これも劇的であるが、これに附けて

襟に高雄が片袖を解く　　芭蕉

は驚かせる。名妓の片袖を襟にして雪に興ずる豪興の態だ。此後に直ぐ

あだ人と樽を棺に呑み乾さん　　重五

と附けてゐる。此處等は寶暦以後のケチな俳諧のしなびたやうな俳諧とは全で違つてゐて、生氣潑剌、勃興期の勢を示してゐる。さうかと思ふと、

影薄き行燈消しに起きわびて　　野水
思ひかねつも夜の帶引く　　重五
こがれ飛ぶ魂花の陰に入る　　荷兮
その望の日を我も同じく　　芭蕉

と、芭蕉は芭蕉だけに、西行が如月望の日に死なんと願つたところを云つてゐる。

籬まで津浪の水に崩れ行き　　荷兮
佛喰ふたる魚解きけり　　芭蕉

佛は亡者である。屍體を食つた魚と解いたら分つたのである。これに附けて、

賑ふる花見次郎と仰がれし　羽笠

威張りこんで花見の催しをして大魚を開いたら屍骸を食つてゐたので興さめた、何といふ滑稽であらう、徒然草の食物を埋めて置いた談の上を行つてゐる。

床更けて語ればいとこなる男　荷兮

縁さまたげの恨殘りし　芭蕉

事情は不明であるが、これも小說的である。

乘物に簾透く顏おぼろなる　重五

今ぞ恨の矢を放つ聲　荷兮

これ等は全く演劇を見るやうで、荷兮の得意の行きかたである。

俳諧は發句だけでは盡きてゐない。發句以下特に歌仙ならば第七句以下、百韻ならば第九句から、縱橫無盡自由自在の揮灑がはじまるので、作るのも、讀むのも、そこからが面白い位である。と云つては少し云ひ過ぎるが、興趣は中々に多いものがある。後に至つて川柳といふものが起つて何時と無く別に一科を成すに至つたが、柳風のはじまりは實は俳諧之連歌の中の利けた句を單に一句だけ取出したところから起つたので、俳諧之連歌が陳々腐々で詰らぬものになつたので、柳風雜句が獨立するに至つた譯である。元祿あたりの俳諧は發句だけで其味は盡きない。そして其の俳諧之連歌の有してゐる領域は甚だ廣いもので、人間の一切に渉つてゐるので、從つて小說味も有れば戲曲味も有り、あらゆる味を有つてゐることを一寸語つた。

樂貧歌人橘曙覽

（その生涯と藝術）

相馬御風



一

明治時代に於てなされた和歌革新の最も光輝ある先驅者として落合直文、正岡子規、佐々木信綱、與謝野鐵幹（寛）等の人々を推すことは、おそらく誰もが躊躇しないところであらうけれども、私達は更にずつと以前に遡つて、越前の福井に橘曙覽といふ一個の偉大な先驅者のあつたことをも決して見のがしてはならぬ。而も此の時勢に先んずることのあまりに早かつたが爲に顯はるゝことのあまりに遲かつた先驅者を、初めて眞に先驅者として認め、確乎たる信念を以て之を天下に推奨した人が、正岡子規その人であつたことも、同時に私達の輕視してはならぬことだと信ずる。

明治三十一年「日本新聞」に『歌人に與ふる書』を發表して以後日を追うてます／＼和歌革新の志に燃えつゝあつた正岡子規は、翌三十二年二三月の交同じ新聞紙上に『曙覽の歌』と題する長文を連載して、初めて曙覽の眞價を天下に問うた。

「予の初めて歌を論ずる、或人予に勸めて、俊頼集、文雄集、曙覽集を見よといふ。其斯くいふは、三家の集が尋常歌集に異なる所あるを以てなり。先づ源俊頼集の散木奇歌集を見て失望す。いくらかの珍らしき語を用ゐたる外に、何の珍らしき事もあらぬなり。次に井上文雄の調鶴集を見て亦失望す。これも物語などにありて、普通の歌に用ゐざる語を用ゐ

たる外に、何の珍しき事もあらぬなり。最後に橘曙覽の志濃夫廼舍歌集を見て、始めて其尋常の歌集に非ざるを知る。其歌、古今、新古今の陳套に墮ちず、眞淵、景樹の窠臼に陷らず、萬葉を學んで萬葉を脱し、瑣事俗事を捕へ來りて縱横に馳驅する處、却て高雅蒼老、些の俗氣を帶びず、殊に其題目が風月の虚飾を貴ばずして、直に自己の胸憶を攄く者、以て識見高遒、凡俗に超越する所あるを見るに足る。而して世人は俊頼と文雄とを知りて、曙覽の名だに之を知らざるなり。」

以上は『曙覽の歌』を論ずるに當つて子規がその初めに記した緒言ともいふべき十數行であるが、それによつても彼がその頃提唱しつゝあつた和歌革新の道に於ける一個の好見本として其の人を見出し得た彼の快心さの如何ばかりであつたかゞほゞ窺はれる。子規の讀んだ志濃夫廼舍歌集といふのは、おそらく明治十一年に和本として刊行されたといふ、それであつたであらうが、それにしても天下なほ曙覽の名だに知るものなしとまで公言してゐるところに、一面彼の信念のほども窺ふことが出來る。

子規はいふ。

「曙覽、徳川時代の最後に出でて、始めて濶眼を開き、成るべく多くの新材料、新題目を取りて歌に入れたる達見は、趣味を千年の昔に求めて、之を目睫に失したる眞淵、景樹を驚かすべく、進取の氣ありて進み得ず、踟躕逡巡として姑息に陷りたる諸平、文雄を厭するに足る、徳川時代の歌人が、僅に客觀的趣味を解しながら、深く其蘊奥に入る能はざりしは、第一に「新言語材料を入るゝべからず」といふ從來の規定を脱却する能はざりしに因る。曙覽は先づ此第一の門戸を破りて、歌界改革の一歩を進めたり。」

又いふ。

「曙覽の歌は、萬葉に、實朝に及ばざる事遠しといへども、貫之以下今日に至る幾百の歌人を壓倒し盡せり。新言語を用ゐ、新趣向を求めたる彼の卓見は、歌學史上特筆して後に傳へざるべからず。彼は歌人として實朝以後只一人なり。眞淵、景樹、諸平、文雄輩に比すれば、彼は鷄群の孤鶴なり。歌人として彼を賞賛するに、千萬言を費すとも過賛にはあらざるべし。」

子規の曙覽に向つて加へた此のやうな評價は、今日から見れば當然であつたとしか思はれないが、當時にあつてはおそらく多くの人々を驚かしたことであつたらう。しかし、それほどであつたからこそ此の隱れた先驅者が死後三十餘年にして突如その光輝を現はすことを得たのでもあり、又それがやがて當時の和歌革新運動への影響たり得ることも出來たのである。

それにしても、今日私達が死後既に六十年も經てゐる橘曙覽

といふ一個の歌人を、今更の如くに讃美したり、又その藝術や生涯について殊更に研究したり味賞したりせずにゐられぬ理由は、單に彼がそのやうな和歌革新の先驅者であつたといふ事のみに存しはしない。寧ろさうした事よりも、一個の人としての彼の生涯が、又それのおのづからなる表現としての彼の藝術が、強く私達の心を動かす要素を持つてゐるからである。云ひかへると、彼その人が、また彼の藝術が、生命ある響を今日なほ私達の胸に與へるからである。それが單に歴史的に意義あるばかりでなくして、更に現在の私達の生活にも生きた力を與へるからである。

二

嘗て私は人及び歌人としての愚庵和尚について書いたことがあるが、その中でこんなやうなことを云つたと記憶する。

「良寛和尚の生涯と藝術とについての私の味索の折々に、私にとりて何かにつけて懷かしい聯想の對象となつた他の四五の故人があつた。西行、芭蕉、曙覽……そして桃山の愚庵もたしかにその一人であつた。」

まつたく此の十年あまりの間、私は時に自分ながらも執拗過ぎるやうな氣のすることがあつたほどに、良寛といふ一個の人物について考へたり語つたりしつゞけて來た。而もさうした盛り固ごつた中からも、私は時々前述の如き四五の故人の上に想ひを馳せずにゐられなかつた。就中橘曙覽については、他の人々のそれとは異つた一つの理由から、特に屢々心を惹かれたのである。それは良寛を生んだ郷土と、曙覽のそれと、更に私みづから現在住みつゝある土地との關係であつた。

越後の良寛と越前の橘曙覽と——かうした二人の歌人が、殆ど時代を同じうしてわが北陸道の兩端に生きてゐたといふことの奇緣、それを私は幾度となく想つた。良寛は寶暦七年（紀元二四一七）に越後に生れて天保二年（二四九一）に越後で死んだ。曙覽は文化九年（二四七二）に越前に生れて、明治元年（二五二八）に越前で死んだ。即ち曙覽は良寛より五十五年おそく生れて、三十八年おそく死んだのであるから、つまり二人は約二十年間同じ北陸道の東と西に生きてゐたことになる。而も生涯並に藝術に於て一味相通ずるところのあつた此の二人者は、つひに一度も相逢ひ相識る機會が惠まれなかつたのである。

ところが、それ以外更に私の奇異に感じたことは、此の二人の家系の間に一脈相通ずるものがあるらしい一事についてゞあつた。良寛の生家である越後出雲崎橘屋山本氏の家譜によると此家のもとの姓は橘であり苗字は山本を稱したのであつた

が、後姓を名乘ることになつたとある。なほ家譜には「山本氏姓は橘にして諸兄公に出づ、諸兄の子泰仁、泰門あり、泰明子に泰則、泰敎あり、泰敎の子に泰長、泰紀、泰實あり、泰實は第五男にして山本中納言と稱す、大同元年丙戌十月十日薨、是れ山本氏の祖なり云々」とある。更に曙覽の生れた越前福井の正玄家の家系を依田百川の撰文に成る曙覽墓碣銘について見ると、これも同じく左大臣橘諸兄より出たとある。そして代々紀州田邊に住み、其地名を姓としてゐたが、崇德帝の時飛彈守なる者があつて越前に移り住み、其子孫分れて七族となり、橘七郎を以て稱せられ世々名族として重んじられて來た、即ち正玄氏はその七族の一であると記されてゐる。曙覽が或は井手を名乘り或は橘を名乘つたのもつまり其の家系の出所に據つたのである。かう比べて見ると、良寬と曙覽との間には、單に精神的にばかりでなく、血統的にも一脈の相通ずるもの丶あつたことを無視し去ることを得なくなる。そしてそこに良寬と曙覽との間に、奇緣の一層深いもの丶存することをも、私は考へずにゐられないのである。

良寬と曙覽――此の二人の間には、何かにつけて何といふ相似點のあつたことであらう。豐かな名門の家に長男として生れながら、世を厭ふのあまり家督を弟に讓つて、自らは生涯淸貧に身を置いた――その點でも二人は殆んど同じであつた。歌の道に於ては萬葉集を宗として而も獨特の歌風を成した――その點でも二人は相通ずるところがある。書に於ても兩者共に唐の懷素を學んだと稱せられてゐる。

更に、緣の下に生えた筍を緣に穴を明けて室内に伸びさせてやつたといふ逸話が良寬にあるかと思ふと、曙覽にも次のやうな歌がある。

ひた土に延しきてつねに机するおくちひさき伏屋のうちに竹生いでて長うのびたりけるを其まゝにしおきて

壁くゞる竹に肩する窓のうちみじろぐたびにかれも枝振る

膝いるゝばかりもあらぬ艸の屋を竹にとられて身をすぼめをり

又、着物の虱を取つてそれを紙の上に遊ばせて樂んでゐるやうなことが時々あつたといふ逸話が良寬にあり、曰

のみしらみ音に鳴く秋の蟲ならばわがふところは武藏野の原

などいふ歌があるかと思ふと、曙覽にも同樣に次のやうな虱を詠じた歌がある。

着る物の縫目々々に子をひりてしらみの神世始まりにけり

綿いりの縫目に頭さしいれてちゞむ蝨よわがおもふどち

やをら出てころものくびを捫ひありき我に耻見する蝨ども
　　かな

まつたくかうした類の少い二人の逸人が、殆ど時代を同じうして北陸道の兩端に住んでゐたことを思ふと、同じく北陸道の一隅に住んでゐる私達は、一層何だか愉快にならされるやうな氣がする。良寬を思ひながら時々曙覽を聯想し、曙覽を思ひながら時々良寬へ心を馳せるのも、決して偶然ではないのである。

三

曙覽の傳記で纏つたものとしては、明治三十六年に富山房から出版された「橘曙覽全集」の卷頭に掲げられた長子井手今滋の「橘曙覽小傳」と、大正十五年十一月福井市中村書店から刊行された山田秋甫氏の編著に成つた「橘曙覽傳並歌集」中の詳傳の二つが最も信憑すべきものである。殊に後者は著者多年の研究の結果出來上つたもので、材料の豐富で確實な點では他の追隨を許さぬ好著で、永年の渴望を充たして貰つた感がある。

今、以上二篇の傳記及び他の數四の文獻によつて知り得た橘曙覽の略歷を摘錄して見ると、ざつと次の如くである。

橘曙覽は文化九年五月、越前國福井石場町の紙商正玄五郎右衛門の長男として生れた。母は同國府中（現今の武生町）の山本平三郎の長女で、名を樹子といつた。正玄家は前にも云つた如く著名の紙商で、資産に於てもかなりに富んでゐた。幼名を五三郎といひ、諱は初め茂時と稱したが、後尚事と改めた。それは易經の「不レ事ニ王侯一高ニ尚其事一」に據つたのださうであるが、その後に至つて更に曙覽（アケミ）と改めた。これは姓とする橘の實に因んだもので、赤質の齊によつたものだとの事である。而して黃金舍、藁屋、志濃夫廼舍、松戸等は其號であつた。

二歲の時彼は不幸にも母を喪つた。ところで、これは山田秋甫氏の詳傳によつて始めて知つたのであるが、母の歿後曙覽は母の生家山本家に引きとられて二十歲までそこで養育されて居たらしいとのことである。而してそのやうになつたわけは、父五郎右衛門が後妻を娶つた上に、曙覽が七歲の時に宜といふ異母弟さへ生れたといふやうな家庭の事情にあるらしいとのことである。

二歲で母を喪つた曙覽は、更に十五歲の時に父をも喪つた。こんな風で家庭に於ける彼の境遇は、ますます不幸なものとなつた。彼が父の歿後深く感ずるところあつて、佛門に入らうとでも思つたものか、日蓮宗の巨刹大道村妙泰寺住職明導に就いて佛教を學んだといふのも、おそらく自らのさうした境遇を悲しんだあまりのことであつたらう。ところがその明導といふ坊

さんは、佛學の外に漢籍に造詣深く詩歌をも能くしたところから、曙覽はその感化でいつとなしに佛學よりも文學の方に心を傾けるやうになつた。親戚の人達は、その爲に家業の衰頽を來たすことを憂へて、百方其志を飜へさせようと努めたけれども、彼は一向意に介せずに依然として家業をそつちのけにして文學に熱中した。そしてつひに意を決して、窃に京都に赴き賴山陽の高弟兒玉旗山の塾に入るやうなことをさへ敢てした。しかし、親戚の爲に居ること僅に數月で呼び戻され、やがて妻をさへ迎へさせられた。妻は三國港の豪商酒井氏の次女で、名を直子といつた。

こんな風で彼はやむを得ず家業を繼がされたのであつたが、心に多くそこに留まつてゐなかつたと見えて、二十八歳の時江戸へ出て數月間居つたこともあり、又三十三歳の時飛彈へ行つて宣長の高弟として名聲の高かつた田中大秀の門に入つたりした。

弘化三年、彼の齢三十五、その年の二月長男今滋を擧げたが、間もなく彼は深く決するところがあつたと見え、突如として家業と家産の全部を擧げて、異母弟宜に讓り、自らは妻子を携へて城南の足羽山といふところに草廬を結んだ。彼はかくして自分に與へられてゐた巨萬の財貨を敝履の如く棄て去つたと同時に、以後絶對に生家の援助を受けるやうなことをしなかつたといふことである。なほ彼が此擧に出でたのは、漢書の「閒居可ニ以養ㇾ志、詩書可ニ以自娛ㇾ」の語や、法華經譬喩品の「如來已離ニ三界火宅ㇾ寂然閑居、安ニ處林野ㇾ」の語に感激した結果であるといはれてゐるけれども、決してさうした單純な思想的要求からばかりでなかつたことは、前述の如き彼の家庭に於ける境遇を知るものには、直にそれと肯ける次第である。

おもふに、事こゝに至つたまでの彼の胸中の惱みは、非常なものであつたに相違ない。繼母及び異母弟と彼及び彼の妻との間の葛藤は、よしたとへ表にあらはれなかつたとしても、內面的にいかばかり苦しく惱ましいものであつたかわからぬ。かうした事は彼が隱棲後實家からは一文半錢の援助をも受けなかつたにも拘らず母の生家山本家には何かにつけて金品の援助を請うてゐたといふのでもほゞその一端を窺ふことが出來る。しかし、徒らに現世的利慾の爲に爭ひ戰ふべく、彼はあまりに淸かつた。と同時に、母を喪ひ父を喪つた悲しみから、自ら進んで救ひを佛門に求めたことさへあるほどに、彼は弱くもあつた。此の現世人としての彼の弱さが、心の人としての彼をして淸からしめた。出でて爭ふ代りに、彼は退いて自らの淸さを守らうとした。彼にとりては物質的欠乏からの苦しみよりは、たまし

ひの安らかさを脅されることが與へられなかつた。利慾の煩ひによつて醜される現世の葛藏裡に沈湎することによつて自己の精神的自由の傷けられることは、彼にとりては何よりの怖ろしいことであつた。彼が自己に與へられたる巨萬の富を抛つこと敝履の如くであつたのも、彼にはそれ以上に求むるところがあつたからに外ならぬ。彼は決して徒らに棄てる人ではなかつた。況んや彼は爭うて敗れた人などでは決してなかつた。又彼はいたづらに避けたり逃げたりする人ではなかつた。現世人としては弱かつた彼は、靈界人としてはまことに強い彼であつた。彼が退いたのは、又彼が棄て去つたのは、むしろ眞の自己を得、眞の自己を生かさうが爲に外ならなかつた。かくの如くして彼は聊も他を傷けるところなくして、而も自己を自由ならしめることを得たのであつた。

彼の長子今滋の書いた小傳中に左の如き一節がある。

「先子夙に自ら其禀性の家業に適せざるを知り、父祖傳來の家業財産を擧げ、悉く之を家弟に讓與し、身を挺して家を去れり、爾來三十年赤貧洗ふが如しと雖も、親戚に對し未だ曾て一言の貧を訴ふるに及ぶことなし、故に其家弟の如きも、先子に讓受けたる父祖の餘澤に浴し、現に市內屈指の商家たるにも拘らず、未だ曾て先子より補助の請求を受けしことあらずといふ、而して歿するに及び、親戚皆其俗情無きに驚けり、其親故は潔白概ね此の如し、人誰か貧の避くべく富の求むべきを知らざらむ、唯時の非にして富の求むべからざるを悟る、故に寧ろ清貧に安むずるの愈れるに如かずとするのみ、」

彼の貧乏は蓋し一とほりのものではなかつたらしい。而も彼は決してその爲に世を怨んだり人を憎んだりするやうなことがなかつた。自分に與へられた巨萬の富をむざ／＼と他人の手に委ねながらも、彼には露ほどの未練もなかつたばかりでなく、むしろ彼は自らの貧しさのうちに限りなき自由と安易を樂しみつづけた。彼は弱きが故に退いた。しかし、弱き者の清さに徹した彼は、怨みや嫉みや憎みや羨みや果敢なみから超越した強い彼となつてゐた。彼の歌集のどこを見てもさうした心の陰影は塵ほども認めることは出來ない。そこに彼の貴さがあつた。

曙覽には謂ふところの拗ね者やひねくれ者らしいところは寸毫もなかつた。彼の隱棲は決して拗ねたりひねくれたりした結果ではなかつた。彼は決して自分を不幸者などとは考へてゐなかつたらしい。そこに彼の明るさがあつた。

試みに貧生活を歌つた彼の歌を見るがいゝ。

米の泉なほ足らずけり歌をよみ文をつくりて賣りありけども

たのしみはあき米櫃に米いでき今一月はよしといふ時
たのしみはまれに魚煮て兒等皆がうましうましといふて食ふ時
膝いるゝばかりもあらぬ草の屋を竹にとられて身をすぼめをり
たのしみは錢なくなりてわびをるに人の來りて錢くれし時
たのしみは物をかゝせて善き價惜みげもなく人のくれし時
たのしみはつねに好める燒豆腐うまく烹たてゝ食せける時
たのしみはとぼしきまゝに人集め酒飮め物を食へといふ時
たのしみはほしかりし物錢ふくろうちかたむけて買ひ得たる時

人にかさかしたりけるに云々
山吹のみの一つだに無き宿はかさも二つはもたぬなりけり

更に彼が親友野楳に送つたといふ次の如き借金の依賴狀を見るがいゝ。

銀あるなら
四五百匁
無けりや
百文でも
二百文でも
ちよつと
御かし
野楳長者
曙覽貧生

何といふ明るさであらう。何といふ恬淡であらう。

かうした曙覽の頭を通して見た貧生活の如何なるものであつたかについての正岡子規の解釋も亦共に大に味ふべきものがある。

子規は言ふ。

「文人の貧に處るは普通の事にして、彼等が誇張的に其貧を文字に綴るも、亦普通の事なり、而して其文字の中には、胸裏に蟠る不平の反應として、厭世的、又は嘲俗的の語句を見るも、亦普通の事なり、是れ貧て安んずる者に非ずして、貧に悶ゆる者。曙覽果して貧に悶ゆる者か否か、再び之を其歌詠に徵せん。

余は曙覽の貧は、一般文人の貧よりも更に貧にして、貧曙覽が安心の度は一般文人の安心よりも更に堅固なりと。」

更に言ふ。

「安心の人に誇張あるべからず、平和の詩に虛飾あるべからず、余は更に進んで、曙覽に一點の誇張虛飾なき事を證せ

ん、似而非文人は曰く、黄金百萬㽞は門前のくろの糞の如しと、曙覽は曰く、

たのしみは錢なくなりてわび居るに人の來りて錢くれし時

たのしみは物を書かせて善き價惜みげもなく人のくれし時

曙覽は欺らざるなり、彼は錢を糞の如しとは言はず、あどけなくも、彼は錢を貰ひし時のうれしさを歌ひ出せり、猶正直にも彼は錢を多く貰ひし時の、思ひがけなきうれしさをも白狀せり、仙人の如き、佛の如き、子供の如き、神の如き曙覽は、余は理想界に於て之を見る、現實界の人間として、殆ど承認する能はず、彼の無垢清淨、彼の歌や玲瓏透徹。」

四

曙覽は自己の貧生活裡に於ける胸中の消息を吐露した五十首の歌に題するに「獨樂吟」の三字を以てした。私は曙覽の此の「獨樂吟」五十首と、木下幸文の「貧窮百首」とを、時々比べて考へて見た。そして兩者の題の相異についても、亦歌そのものの相異についても、少からぬ興味をおぼえた。前章に掲げた曙覽の歌は大部分その「獨樂吟」から選んだのであるが、それらと幸文の「貧窮百首」中からの左の如き歌とを比べて見るだけでも兩者の異り方の一端が現はれようと思ふ。

かにかくにうとくぞ人の放にける貧しきばかり悲しきはなし

わが門も松たてましをよの中の人なみなみの春をむかへば

久方の天つ雲井を飛ぶたづのたづきも知らぬ身のゆくへ哉

天地にあふるばかりの黄金もが世の人皆をあきたらはさむ

闇ならくなりくの底に入りぬべしこころの鬼のわれを責むるは

いにしへの人の飲みけんかすゆ酒われもすすらん此夜寒しも

いにしへの賢き人も市中にたしなめられしためしあらずや

わが宿に何のよろこびうるさうるさ門さしこめてなしといはゞや

まきながすにふの杣川にぶくして世に立つよりも死ぬる勝れり

「いさゝら井の水はすめれどわが衣あらひて着せむ妹がなき哉」といふ一首によつてもわかる通り幸文の方は獨身であつたが、曙覽の方は、

たのしみは家内五人五たりが風だにひかでありあへる時

たのしみは機おりたてゝ新らしきころもを縫て妻が着する時

といふ風に、妻もあり三人の子まである一家の主人であつた。隨て兩者の間にはおのづから心情の相異がなければならなかつたことは無論であるが、それにしても貧そのものに對する兩者の心の持ち方、またそれを通して見た世間に對する心の持ち方に於て、兩者の間には何といふ大きな隔りのあつたことであらう。子規の言葉を借りて云へば、幸文は正しく「貧に悶ゆる者」の好代表であり、曙覽は所謂「貧に安んずる者」の好典型である。而もしかく貧に惱み貧に苦しんでゐた幸文の歌が、私達の胸に切實な響を傳ふることのあまりに少いのは何故であらうか。無論私達は幸文その人の貧に苦しんでゐた事實を否定することは出來ない。しかも、これらの歌を讀んで、直にこれを彼が眞情の流露として受取るべく、何となくそこに一膜の隔てを感ずるのは何故であらうか。

それは兩者の歌の詠み方の相異に歸すべきだ——或はかうも云へるであらう。しかし、私はさう考へたゞけで捨て去ることは出來ない。自分が貧ゆえに人に罵られたりしたからと云つて直に古への賢人の忍苦を思ひ合せたり、「たづきも知らぬ身のゆくへ」を嘆ずるに當つて「久方の天つ雲井を飛ぶ田鶴の」などいふ廻りくどい序詞を持つて來たり、寒い晩に「かすゆ酒」をすゝらうとして憶良を引合ひに出したりしてゐる——かうしたことは決して單に作歌上の態度のみの問題とは考へられないではないか。

こんな風に、曙覽の「獨樂吟」と幸文の「貧窮百首」とを比べて、私はそこに「貧に悶ゆる者」と「貧に安んずる者」との相異といふやうなこと以外に、生きる心持の純不純といふやうなことについて深く考へさせられずにはゐられないのである。

もつとも、「貧窮百首」を詠んだ頃の木下幸文はまだ三十の若さであつた。

　つひにはと思ふ心のなかりせば今日の悔しさ生きてあらめや

　思ふこと早もならなむ今日の日の嬉しき人にむくいせんため

などと歌つてもゐるやうに、彼の胸奥には未來の功名を願ふ心が燃えてゐた。

　まき流すにふの杣川にぶくして世に立つよりも死ぬるまされり

といふやうに、かなり强い自負心も彼は持つてゐた。隨て彼が自らの貧窮を歌ふに當つても、單純にその苦しみや悲しみを歌はずにゐられずして歌ふといふやうな心持に徹することの出來なかつたのも、あながち無理とはいへない。

更に又彼の貧乏を曙覽のそれと比べて考へると、曙覽の貧生

活は彼みづからの求めて入つた境地であつたけれども、彼のそれは已むを得ずして置かれた境遇であつた。

　かくてのみわび人と知らば故郷の吉備の山川もつくりてましを

時にはこのやうな愚痴な考にも沈んだほどに、彼の貧生活は彼にとりては豫期に反した生活であつた。貧に安んじ、個裡の自由を樂むといふやうな心を持ち得なかつたことは、彼としては當然なことであつた。

しかし、それにしても、彼の「貧窮百首」が、その中の二三首を除く外殆んど全く私達の胸に切實な響を傳へないのは、何としたことであらう。そこに私達は彼の生活態度の不純をいなむことが出來ないと同時に、彼の詠歌の態度の不純をも認めずにはゐられないのである。彼には自分を一個特別な人間として見てゐるやうなところがあり、自分の貧しさをさうした特別な人間の經驗すべき受難でゝもあるが如く考へてゐたやうなところがあつた。さうした心持が、彼をして純眞に貧そのものゝ味を味はせなかつたのではないか。またそれと同じやうに、彼は歌として自己を表現することを、一種特別な事のやうに考へてゐた。さうした心持が、彼の歌をして純眞な自己表現たらしめなかつたのではないか。こんなわけで、彼の歌は結局「歌よみの歌」以上に出すに至つたのではないか。

　大丈夫のをのこさびすと打まげて泣かね心ぞまこと悲しき

　天地にあふるばかりの黄金もが世の人皆をあき足らはさむ

　いにしへの賢き人も市中にたしなめられしためしあらずや

などと自己を高處に置いて歌つてゐながらも、却てそこに或種の臭味、或種のいやしさを感じさせるのも、やはり前に述べたやうな彼の心の不純から來てゐるのではないか。

曙覽の歌は之れとは全く面目を異にしてゐる。

　米の泉なほ足らずけり歌をよみ文をつゞりて賣りありけども

　たのしみは物を書かせて善き價惜みげもなく人のくれし時

こんな風に彼は、所謂文人雅客達が口にするだに忌はしとするやうなことを平氣で歌つてゐるにも拘らず、私達には却てそこに彼その人の高さが感じられ、清さが感じられるのである。

　いつはりのたくみをいふな誠だにさぐれば歌はやすからむもの

と彼みづからも歌つてゐるやうに、それは彼の純眞さの結果に外ならない。子規が彼を評して「無垢清淨」といひ、彼の歌を評して「玲瓏透徹」といつたのも、決して過褒ではなかつた。

五

三十五歳で祖先傳來の家業と家産とを敝履の如くなげ棄てゝ之を異母弟宣に讓り、妻直子長男今滋と共に足羽山の草廬に隱棲した曙覽は、そこに居ること僅に三年で、更に城西の三橋町に轉居し、自ら藁屋と稱して生涯をその陋居に送つた。彼の其草廬のいかに見すぼらしいものであつたかは、前に掲げた「壁くづる……」の彼の歌を見てもその一端を窺ふことが出來る。

そんな狹い家に彼は二十年間もの永い歳月を極めてのびやかに住みつゞけた。しかも彼には長男今滋の外に菊藏、早成といふ二人の子さへあつたのである。

家がそのやうに狹かつた上に、生活の資に於ては彼は常に窮乏を告げ勝であつた。弟子達からの心づけも多少はあつたであらうし、潤筆によつての謝禮も少しは得られたであらうが、そんなことで一家の口を糊して行くことは到底出來なかつたことは明らかである。それにも拘らず、彼は一旦自ら放擲した實家に對しては、鐚一文の援助をも乞はなかつたと云はれてゐる。たゞ彼は時々母の生家から多少の援助を受けた。又最もよく自分を理解してゐた友人達に對して、折々無心を申出たらしい。要するに彼の收入といつては、それ位なものであつた。その貧しさのほどは推して知るべきである。

彼の歌にこんな詞書を添へたのがある。

「長月ばかり府中の山本氏の女どもこれかれひきまとひ來て此庵に宿りたると有けり、着すべき夜の物などかねて人のもとよりかりきて其まうけしおきけるに思ひかけざるをの子ひとりそひきてそれ着すべき物なし、日くれてなりければ又かりに行むもびむあしきにより、ありあふ今滋がのを其男子に着せて、今滋はおのがふしどの中にいれて寢さす、わらはなりしほどこそさしもあらるれ、今は大きなるからだになりぬれば、ひとりが身しろくたびによるの物よりはづれて肩さきあらはれ、ともすればこわき手足つきあてなどして寢まどふ云々」これによつて見ても、彼の生活の不如意のほども偲ばれて、寧ろ微笑にさへも誘はれるのである。

さうした貧しさにも、彼はいつとなしにそこに一種の安らかさを味ふやうになつたのであらうが、それにしても初めて彼が足羽山に隱棲した當座の彼のわびしさは蓋し尋常一樣のものでなかつたらう。いかに自ら進んで選んだ道だとはいへ、生れて三十五年を所謂豪家暮しに慣れて來た曙覽にとりて、突如として飛び込んだ其の貧しい草庵生活は決して樂なものでなかつたに相違ない。それも剃髮出家者のそれのやうに、自分一人だけ

のことならば兎も角、妻あり子ある彼としては、どんなにつらひ思ひに悩まなければならなかつたかわからない。その間の消息は、彼に次の如き歌のあつたのに徴しても、そのあらましを窺ふことが出來る。

世を遁れて後はそれとたのむべき生業もなく貧しう物しけれぱ、人も養はず何わざも自らしつつ辛きめのみ見つつすぎにけるを、此頃ひでり打つづき、つね汲む井の水枯れぬれば、さらに遠きわたりより妻のくみはこびつつ、苦しともせで物するをあはれに見なして

汐ならで朝な夕なに汲む水も辛き世なりと濡らす袖かな

如何に巨萬の富に恵まれてゐたとはいへ、繼母や異母弟等と共に營んでゐた從來の彼の生活は殆ど絶え間ない物慾の醜い爭ひや忌はしい感情の縺れの爲に、日毎に地獄にあるが如き苦惱のうちに過されたことであらう。それに比べれば隱棲後の彼の生活は、物質上の不如意こそあれ、まるでそれは天國の如き安樂な世界であつたらう。隨て隱棲當初に於ける彼及び彼の妻が、如何ばかりのびやかな氣持で朝夕を樂しみ得たかは、想像するに難くない。「ああ、これでやつと救はれた！」おそらく二人ともさう叫ばずにゐられなかつたことであらう。

しかし、一旦はさうした安易な氣持を惠まれた彼等も、日を經るに隨ひ斯生活に對する興味が薄らぐと共に、やがては慣れない物質生活の不如意の前に、今更の如きわびしさと苦しさと不安とを感じずにゐられなかつた時期がなかつたとは云へないであらう。それでも曙覽自身には、なほさうした中からも、心を打ち込んで行くことの出來る歌の世界があり學問の道があつた。しかし、彼の妻は……そして彼の子は……

こんな風に私は曙覽の清貧生活への徹底の經路を考へる毎に、常に感嘆措く能はざるところは、終始彼と生活を共にして世にも稀な温かな家庭の經營者であつた彼の妻直子のえらさに對してである。

曙覽の妻直子は、前にも述べた如く、同國三國港の豪商の家に生れたといふ以上、決して最初から貧世帶に處するやうな教育など授けられたものとは思はれぬ。而も自ら進んで夫曙覽と生涯その貧生活を共にしたばかりでなく、這裡に王侯をして羨やましめるほどの平和な世界を打ち建て、よく三人の男兒の教育をさへも常人以上に成し了すことを得た。これは全く驚嘆に値するほどの事實である。長子今滋の書いた曙覽小傳には、左の如き美談さへ傳へられてゐる。

「室直子資性貞淑、先子の壯に家産を弟に讓りて退隱せらるるに方りて、親戚等、其前途甚だ覺束なきを慮り、頻りに離緣

を勸めしに、直子笑ひて、院本堀川の段、人の憂き目を見捨るは、里の恥辱となる哩なの條を引き、以て決意を示す、親戚强ふること能はず、遂に終始艱苦を共にし以て內助の功を全うす、今年齡九十に至るも健康昔日に減ぜず。」

而して今澄が此の小傳を草したのは明治三十六年であつたが、直子はその後なほ十年の壽を保ち、大正二年丁度百歲で安らかに此世を去つたといふことである。まことに奇蹟的に貴い生涯を送り得た女丈夫といつていゝやうな氣がする。

兎に角曙覽のあの貴い淸貧生活について考へる上に、この優れた人格を持つた妻の美しい愛についての考察を外にしてはならぬ。曙覽をしてあの家庭を形造つたまゝでの淸く安らかな隱遁生活を徹底せしめたのには、此の稀有な美しい夫婦愛が與つて力あつたと信じていゝ。此の夫の生活に對する妻の聰明な理解と、美しい愛となくして、どうして曙覽のあれだけの貴い淸貧生活が營まれ得たであらう。その點に於ては、曙覽は世にも稀な惠まれた人であつた。

若し曙覽にしてあのやうな善い妻がなかつたとしたら、そしてあのまゝの境遇に置かれてゐたとしたら、彼は果してどうなつたであらうか。そこには實にさまざまな暗澹たる悲劇の舞臺が想像されると共に、最後には狂へるが如く世を遁れ行く一個の孤獨な隱遁者のさびしくいたましい姿さへ目に浮んで來るのを覺える。

曙覽の歌集中には、前に掲げた「汝ならで朝な夕なに……」と妻が薪水の勞をいたはつた一首の他に、なほ數首妻の上を詠んだ歌がある。

野邊に藁屋つくりて始めて移りける頃妻のかかる所のすまひこそいと恐しけれ、聞たまへ雨いみじうなんふる」、盜人などのくべき夜のさまなりなどつぶやくをききて

春雨のもるにまかせてすむ庵は壁うがたるゝおそれけもなし

野積きに家ゐしをれば、折々蛇など出けるを妻の見る度に打驚きて、うたて物すごき所かなと言ひけるを慰めて

おそろしき世の人言にくらぶれば逶迤いづる蟲の口はものかは、

○

ふくろふの棚すりおけと呼ぶ聲に衣ときはなち妹は夜かす

おのがすみかあまたたび所うつりかへけれど、いづこもいづこも家に井なきところのみにて、妻して水汲み運ば

することもかき數ふれば廿年餘りの年をぞへにける、あはれ今はめもやう／＼老にたれば、いつまでかかくてあらすべきとて、貧しき中にも思ひわづらはるるあまり、からうじて井ほらせけるに、いと淸き水あふれ出づ、さくもてくみとらるべきばかりおほうあるぞいと嬉しき、いつばかりなりけん、

　しほならであさなゆふなに汲む水もからき世なりとぬらす袖かな

とそゞろごといひけることのありしが、今はこのぬれける袖も、たちまちかわきぬべう思はるれば、この新しき井の號を袖干井とつけて

　濡しこし妹が袖干の井の水の涌出るばかりうれしかりける

　獨樂吟の中に

　たのしみは妻子むつましくうちつとひ頭ならべて物を食ふ時

　たのしみは機織りたてて新らしきころもを縫て妻が着する時

これらの歌を讀んだゞけでも、曙覽の貧生活のあらましがわかると同時に、彼と妻の間柄のいかに睦ましく溫かであつたかゞ察しられる。豪商の家に生れ育てられ、更に又豪商の家に嫁した彼女が、急轉してさうした貧生活に入り、みづから進んで水

仕事や機織りまで[illegible]手つて營みながら、而も朗けく安らかな愛を以て生涯夫をいたはり、子等をはごくみ通した其のけなげさは、全く涙ぐましいまで貴く感じられる。

曙覽のあの安らかな樂貧生活は、此の良妻の存在を外にしては考へることは出來ない。

六

曙覽の學問は古學であつた。年少妙泰寺明導について佛學を學んだが、それと同時に詩歌の趣味にも導かれ、つひには前者よりも後者に專ら心を打ち込むやうになつた。そしておのづから進んで皇典國文の研究に心を寄せるやうになり、彼の思想も次第に敬神尊皇の方へと傾いて行つた。殊に彼が福井藩士中根師賢（號雪江）と相識るやうになつてからといふものは、その感化によつて一層熱烈に皇典の學に志すやうになつたと云ふことである。

山田秋甫氏の橘曙覽傳中に引用された福井藩主松平慶永（春嶽）の文中に、

「福井にて勤王の志を立たる者、また勤王の起りしは外になし、中根雪江一人なり、勤王に功勞ありし人は、此人の上にいづるものなし」

とあるところから察すると、雪江は當時福井に於けるその方面の第一人者であつたらしい。又同じ文章の中に、こんな事も誌されてゐる。

「國家の爲盡力したる者は、福井において多し、尤其魁たる者をいはむに、勤王の盡力の原因たるものは、或年尙平といふ和歌よみ福井へ參りたりけり、福井人のうたよみを見て、二條家とか、冷泉家とやらにて、眞の歌にあらず、眞の歌といふは、古今集をさへよむがよろし、萬葉集が眞の歌なり、これを古體と云、此古體をよみたるが尤よろし、敎へられたるに、誰も感じて、此古體を學ぶものは渥美新右衞門友高、中根雪江等なり、ゆゑに和歌の道のひらけたるは、此兩人を魁とす、夫よりして橘曙覽も雪江の奬勵によりて古學をなす云云」

なほ中根雪江みづからも曙覽の事蹟について記した文章の中で、

「余は始の程こそ先達めきて物しつれ、暇なき官路に老朽果にたるを、翁はたゆまふ事なく、鋭意に高峯の雲路に分き登られたれば、今はしも仰ぎ瞻るさへ目ばゆかるを云々。」

など云つてゐるところを見ると、矢張曙覽にとりて中根雪江その人はたしかに善知識の一人であつたに相違ない。

しかし、中根雪江が江戸に上つて平田篤胤に師事したが、曙覽は險路をいとはず飛彈の國に赴いて、田中大秀の門に入つたのであつた。大秀は本居宣長の高弟であつた。曙覽は誰よりも本居宣長に向つて私淑のおもひを寄せてゐたのであつたが、其人今は世に亡いところから、特に大秀を選んで師とするに至つたのであつた。それは曙覽が三十三歳の八月のことであつた。

古學の研究いよ／＼深くなるにつれて、彼の勤王思想もますます熱して行つた。嘗ては世を悲しむのあまり佛門に入らうとまでした彼は、弘化三年京都に上り仁孝天皇の大葬儀が佛式を以てせられたのを拜し、

ゆゝしくも佛の道に曳き入るゝ大御車のうしや世の中

とまで憤慨するまでに思想上の變化を見るに至つた。

彼の尊皇思想がいかに熱烈なものであつたかは、歌集中の彼の述懷歌が何よりもよく物語つてゐる。

高山彦九郎正之

大御門そのかたむきて橋の上に頂根突きけむ眞心たふと

獨樂吟の中に

たのしみは神の御國の民として神の敎をふかくおもふとき

たのしみは戎夷よろこぶ世の中に皇國忘れぬ人を見るとき

たのしみは鈴屋大人の後に生れその御論をうくる思ふ時

伊勢外宮にまうで頂根突きをりつゝ

一日だにくはではあられぬ御食たまふ御めぐみ思へば身毛いよだつ

内宮にまうでて

御ひかりを朝夕うくる御めぐみは身を粉にすともむくいえられじ

山室にのぼりて鈴屋先生の御墳拜みて

おくれても生れし我が同じ世にあらば履をもとらまし翁に

南部廣矛が筥館へ旅立つに

一足だに入れむさきざき島人を諭せ日嗣の長かるゆゑ

ある時作る

利のみむさぶる國に正しかる日嗣のゆゑをしめしたらなむ

神國の神のをしへを千よろづの國にほどこせ神の國人

赤心報國

眞荒男が朝廷思ひの忠實心眼を血に染て燒刃見澄す

國の爲念ひ痩つる腸を筆にそむとて吾世ふかしつ

仇に向き腕たたきけむ古人にならひてこそは國に仕へめ

正宗の太刀の刃よりも國のためするどき筆の鋒揮みむ

國汚す奴あらば太刀拔て仇にもあらぬ壁に物いふ

失題

何わざも吾國體にあはぬは拙く顧みし物すべきなり

潔き神國風けがさじとこころくだくな神國の人

武士

尊かる天日嗣の廣き道踏まで狹き道ゆくな物部

大綱と天日繼を先とりてもろもろの目を編む國と知れ

天皇に身もたな知らず眞心をつくしまつるが吾國道、

こんな風に表にはひたすら悠々自適の清貧生活を樂む隱士の如く見えてゐた曙覽も、その胸中にはしかく熱烈な復古思想を把持する一個の革新思想家であつた。而も彼はつひにかの王政維新の曙光をまさ目にそれと見きはめることを得たのであつた。

大御政古き大御世のすがたに立かへりゆくべき御いきほひと成ぬるを賤夫の何わきまへぬ物からいさましう思ひまつりて

百千歳との曇りのみしつる空きよく晴ゆく時片まけぬ

あたらしくなる天地を思ひきや吾目昧まぬうちに見むとは

古書のかつ／＼物をいひ出づる御世をつぶやく死眼人

廢れつる古書どもも動きいでて御世あらためつ時のゆければ

此の數首によつても、その當時に於ける彼の感じた歡喜のいかばかりであつたかゞ察しられる。

けれども、さうした稀有な歡喜にあひながらも、つひにその理想の實現せられた實社會に生を歡ぶまでに至らずして、明治元年八月二十八日、五十七歳を一期として此世を去つた。而も殁後五十二年、即ち大正八年十一月十五日、彼は正五位を贈らるゝの恩典に浴するを得たのであつた。

古來大なる革新の復古の名によつて成されたものは、一にして止まらない。歐洲に於けるルネツサンス祭り、わが明治維新亦然りである。曙覧が抱懐せる熱烈な復古思想が、同時に正しき新世界に對する熱望であつたことを、誰か否定することが出來ようぞ。彼が主として萬葉を學びながら、而も同時に和歌革新の偉大なる先驅者たり得たのも、畢竟はその精神の源を前者と同じうしたものと云つてよい。

けれども、そのいづれに於ても、曙覧はつひに出でて戰ふ人でなくして、退いて獨想ふ人であつた。彼が勤王家としても、亦和歌革新者としても、その功績の直接世に顯はるゝことのなかつたのは、その爲である。和歌革新の先驅者としての彼の隱れた功績が、眞に生きた力となつてわが國の短歌界に働くことを得たのも、あの熱烈な戰ひの人としての子規を通してゞあつた。勤王思想家としての彼についてもほゞ同樣な見方をして差つかへあるまいと思ふ。

しかし、一旦播かれた種は、生命ある以上芽生えなければならぬ。曙覧は要するにさうした强い生命を持つた種を播いた人であつて、自ら刈り採る人ではなかつた。

七

人としての曙覧を想ひ浮べる度に、私が何よりも嬉しく、貴く感ずるところのものは、その「明るさ」であり、その「ほがらかさ」であり、その「淸さ」である。彼が巨萬の富を持つた家に主人たるべくして生れながら、つひにそれを放擲せずに居られなかつたまでの經過には、人知れぬ惱みや苦しみのいかばかり深刻なものがあつたかわからぬ。而も敢てそれをなした後の彼は、何といふ「さつぱり」としたものであつたことぞ。彼の歌集のどこを見ても、塵ほどの愚痴もない。露ほどのこだわりもない。ひがみ、屈托、未練、怨み——無論そんなものゝ影すらもない。彼の心境は常に玲瓏として玉の如くであつた。そして常に幼な兒のそれのごとくほがらかであつた。

或る日曙覧は彼の妻に向つて、「鹽がなくなつたから買つて來い」と云つた。妻は「買ふ錢がありません、しかし今米を搗いてゐますから後刻糠が出て來るでせう、さうしたらそれを賣つて鹽を買つてまゐります」と答へた。から彼みづからの書いて

ゐるほどに、曙覽一家は貧しい暮しをしてゐた。之れに反して彼が異母弟や繼母達に讓り與へて來た家は、百萬の富を擁してますます榮えつゝあつた。かうした境遇に置かれながら、何等のひがみも、屈托も、こだわりも、未練も感じなかつたばかりか、安んじてさうした貧生活裡に平和を樂しみ得たのは曙覽であつた。誰かそのほがらかさを貴しとせずにゐられようか。

たのしみは木芽瀹して大きなる饅頭を一つほほばりし時
たのしみはつねに好める燒豆腐うまく煮たてて食せける時
たのしみは小豆の飯の冷たるを茶漬てふ物になしてくふ時

といふ曙覽の獨樂吟五十首中の歌を評した子規の左の如き言葉を、私は嘗て膝を打つて感嘆したことがあつた。即ち子規は曰ふ

「此等の歌が曙覽ならざる人の口より出で得べきか否かを考へ見よ、陽に淸貧を樂んで、陰に不平を蓄ふる彼似而非文人が「獨樂吟」といふ題目の下に、果して饅頭、燒豆腐の味を思ひ出だすべきか、彼等は酒の池、肉の林と歌はずんば、必ずや麥の飯、藜の羹と歌はん、饅頭、燒豆腐を取つてわざわざ三十一文字に綴る者、曙覽の安心ありて、始めて之れ有るべし、あら面白の饅頭、燒豆腐や。」

曙覽は又錢がなければ無いと歌ひ、錢が欲しければ錢がほしいと歌ひ、錢を貰つて嬉しければ嬉しいと歌つた。その純眞にはいさゝかの陰影もなかつた。露ほどの氣取りもなかつた。彼ここそ寧ろ物に對して本當の恬淡な心を持つてゐたのだ。「われは財寶などの前には……」など氣取る所謂淸貧者流に對して、曙覽の歌はたしかに頂門の一針である。此の「錢のほしさ」を純化した點に於てだけでも、曙覽はたしかに一新境を打開した者といつてよい。

「曙覽は汚穢を嫌はざりし人、されど、身のまはりは小綺麗にありしかと思はる、元義は潔癖の人、されど何となくきたなき人にあらざりしか」と評した正岡子規の評語にも、私は「成程！」と感心した。元義のことはさて措き曙覽はいかにも子規の云つた通り、貧乏はしてゐても「身のまはりは小綺麗に」暮してゐた人であつたらしい。そしてその點でも良寛と似てゐたやうに思はれる。俗間に傳はつてゐる口碑には、良寛といふ人を無暗にきたない乞食坊主のやうに取扱つてゐるのも少くないが、私は決してさうは思はない。どんなきたない人達とも親しみ、又どんなきたない處にも安んじて居ることが出來たであらうが、彼みづからは決して他人に不潔な感じを與へるやうなことはなかつたのが、良寛の生活振りであつたらうと私は思つてゐる。それでなくては到底あのやうにさまざまな階級の多くの人々から敬愛されることが出來るものでない。曙覽もやはりさ

うした人ではなかつたらうか。

　ところが、當時福井藩主であつた春嶽松平慶永が、曙覽の學德を慕ふのあまり或日野遊びにことよせて彼の家を訪ねた折の事を彼自ら書いた「橘曙覽の家にいたる詞」と題する文章の中には、曙覽その人の生活ぶりをこんな風に書いてある。

「ちひさき板屋の淺ましげにてかこひもしめたらぬに、そこかしこはらひもせぬにや、塵ひち山をなせり云々。」

また、

「……入りて見れば、壁落かゝり、障子はやぶれ、疊はきれ、雨もるばかりなれども、机に千文八百ふみうづたかくのせて、人丸の御像などもあやしき厨子に入りてあり云々」

更に、

「屋のきたなきことたとへむにものなし、しらみてふ蟲などもはひぬべくおもふばかりなり。」

これによつて見ると、それはいかにもきたなげに思はれるが、しかしこれを以て曙覽の生活振を如實に寫したものと信ずることは、私などに出來ないことである。

　何となれば、この文章の筆者は、兎にも角にも三十二萬石の殿樣だからである。いかに下狀に通じてゐた明君であつたとはいへ、私達の見るやうな見方で曙覽の生活振を見ることの出來なかつたことは疑ふまでもない。「きたなきことたとへむにものなし」といふ形容の如きも、それは三十二萬石の殿樣の眼に映じた「きたなさ」であつて、私達風情のそれとは雲泥の差のあつたことは無論である。隨て春嶽公の文章にさう書いてあるからといつて、私達はそれを以て直に曙覽の生活振の眞相だときめてかゝる事は出來ない。

　しかし曙覽自らの歌にも、虱を歌つた歌のあるところから想ふと、彼も蟲はたけてゐたに相違ない。けれども、私達のやうな田舍育ちの、幼い時から共蟲に親んで來た者には、それもさして驚くに足らない。衞生觀念の進んだ今日でこそかれこれ云ふけれども、私達の少年時代の頃までは、田舍では蟲をたけることなんかさほど問題にはしてゐなかつた。だから良寛が蟲をたけてゐたといつても一茶に蟲の句があつても、又曙覽の着物の上に蟲が徊つてゐたといつても、私達はそれを以て直にその人達を不潔呼ばゝりする氣にはなれない。況んや、

たのしみは機織りたてて新らしきころもを縫て妻が着する時

といふやうな氣持を曙覽が愛してゐたことをおもふに於てをやである。更に況んや生涯をまめに働きつゞけた良妻直子が、常に曙覽の身邊に氣をつけてゐたに於てをやである。

しかし、さういふものゝ、身のまはりのこと、世俗的な事に

かけては、曙覽といふ人は兎角面倒臭がりやであり、無頓着であつたことは彼の歌集や文章を讀んだゞけでもほゞ察しられる。

「志濃夫廼舍歌集」第一集「松籟艸」に、彼が日常生活の必要品に關することを何かと書きつけて置く帳面を拵へるやうに人から勸められてそれを試みたが、一月か二月ですつかりいやになつてしまつて、それをうつちやつた際に詠んだといふ、

夕餉今日はけふのみたてておけ明日の薪はあす採りてこむ

といふやうな歌が載せられてゐる。

又、彼が五十歳の秋、十六歳の長男今滋を伴れて、美濃、尾張、伊勢、大和、浪華、京都と遊び歩いた日記中に、京都での次のやうな出來事が記されてゐる。

「五日。（十月）

雨いたく降り、風つよくふく。きのふ物ども雨にあひて、ぬれくたれけるにより、女あるじさらにあだしき物とり出てきせたる。いといまめきたる物なりけり。家にある程の事なりければ、をんなのきものゝ、たよりよきところにある、とりてかりそめにきせたるなりけむを、さなりとも心つかで、此衣ながら、蓮月尼がり行く。今滋うしろより、父のき給へる衣は、女のなりと見えて、袖ちひさく、つまいと長く侍り、さる故にやあらん、あふ人ごとに目をつけて、わらひつゝうちすぎ侍りぬといふ。云々」

宿で借着した着物が女の着物であつたのをそれとも氣づかずに、都大路を雨に濡れながら平氣でこれを着て歩いてゐたとは、あまりなとぼけ方である。曙覽といふ人には何かにつけてたしかにかうした一面があつたに相違ない。

彼と親交のあつた中根雪江も彼についてこんなことを書いてゐるといふ。

「……いつも髮そそげ、鬚も剃らず、敝れ垢つける衣着て綾錦の中に立交れど、恥らふ面持もなく、元來家貧しかりければ、米など乏しき折々もあれど、露ばかり心とせず、それをしも面白げにうたひ出などして、すべて直く正しき神習ふ道の上にとりて瑕瑾なきあまりは、世を思ふまゝに振舞てぞ有ける。」

無論曙覽だとて、貧乏そのものを好んでゐたわけではないであらう。たゞ彼は道裡の自由を愛したのである。

而も彼は一方にさうした自由の境界を樂みながらも、他方物質生活の貧しさの爲にはかなりに苦んでゐたことは事實である。たゞその苦しみに囚はれ、それにこだわらなかつたほどに、彼の心は高いところに達してゐたのであつた。

彼の物質生活が如何に貧しいものであり、而も彼の精神生活が如何に高く且豐かなものであつたかは、彼の歌集を繙くものの誰もが直に感ずるところであらうが、それにしても時の藩主松平慶永（春嶽）が親しく彼の住居を訪れた折の手記ほど、適確にその事實を物語つてゐる記錄は少いであらう。

はじめ藩主松平慶永が曙覽の存在を知つたのは藩臣中根雪江を通じてゞあつたらしい。そして夙にその高風を慕うてゐたものと見える。殊に安政の大獄に際し幕府の譴を蒙り江戸靈岸島の邸に幽居してゐた折の如き、中根雪江を介して曙覽に萬葉集中の秀歌を選び書かせ、それを幽居の壁に掲げて鬱を慰め、精神を鼓舞するの料に供してゐたといふ程である。それがつひに元治二年二月廿六日の草廬訪問といふ程にまでなつたのである。

すなはち其日春嶽は言を狩獵に托し、中根雪江を案內役として、福井三橋町の曙覽が草廬を訪ねた。その當時にあつては、堂々たる三十二萬石の大藩主であつた貴族が、躬自ら一介の布衣を其陋居に訪ねるといふやうなことは、殆ど奇蹟に近い出來事であつたに相違ない。

富比男を見まくほりする心よりふりはへて訪ふ蓬生の宿

といふ春嶽の歌に對して、さすがの曙覽も、

賤夫もいけるしるしのありてけふ君來ましけり伏屋のうちに

と感泣したのも尤もである。

その折のことを書いた春嶽の文章中、曙覽の生活の貧しさを叙した部分は、既に前に掲げた如くであるが、それよりも私達の心をうたれるのは次の如き最後の數行である。

「……かたちはかく貧しく見ゆれど、其心のみやびこそいと〳〵したはしけれ。おのれは富貴の身にして、大厦高堂に居て、何ひとつたらざることなけれど、むねに萬卷のたくはへなく、心は寒く貧くして、曙覽におとる事更に言をまたねば、おのづからうしろめたくて顏あからむ心地せられぬ。今より曙覽の歌のみならで、其心のみやびをもしたひ學ばや。さらば常の心の汚たるを洗ひ、うき世の外の月花を友とせむにつき〳〵しかるべし。かくいふは參議正四位上大藏大輔源朝臣慶永、元治二年衣更着末のむゆか、館に歸りてしるす。」

しかし、曙覽のえらかつた點は、その後時々城中に伺候して、隨意古典又は物語文等の講義を進めむことを藩主から求められたに對し、彼が、

花めきてしばし見ゆるもすゞ菜園田伏の廬に咲けばなりけり

と云つて固く辭して應じなかつたところにある。春嶽もさすが

がにえらかりた。即ち歌もえ、

鈴菜園田伏の廬に咲く花を見ては折らじさもあればあれ

から答へて再びそれを求めなかつたといふことである。

それにも拘らず、爾後曙覧の家へは侍臣の往復がますます頻繁を加へ、更に慶應三年に至りては慶永の後を繼いだ藩主松平茂昭の名を以て、曙覧に年々糜米十俵づつを下賜する旨が傳へられた。

而も、曙覧はそのことあつた翌年、即ち慶應四年八月二十八日、五十七歳を以て溘然として此世を去つたのであつた。

長子今滋の書いた小傳に、曙覧の臨終の有様をこんな風に書いてある。

「此日早且自ら起たざるを知り、一二後事を遺命し、且つ如斯古今未曾有の大御代に遭ひながら、眼前復古の盛儀大典を見奉るに至らず、況やかねての抱負も將に達するに向はむとして、今日はかなく世を去ること返す〲も口惜けれとて切歯瞑目せられたり、聞く人其志を悲まさる者なかりき、慶永侯「敷島の道のしるべは絶えにけり今より何をたづきにはせむ」と嘆かれたり、柩は生前風景を愛し居られし大安寺村の萬松山に葬れり、子三人あり今滋、南藏、早成。」

曙覧は、然しながら病みはじめて間もなくもう死を覺悟して

あたりこしい

死なるやまひ受のましと思へるこく人のくすり飲め

といふ

死ぬべしと思ひさだめし吾やまひ醫師くるしめ何にかはせん

死ぬべかる病を癒すくすり師の今も世にありや吾は見およばず

死ぬる命とりかへさるるくすり師は世はひろけれど有べく思はず

こんな風に彼は藥も飲まずに、ひたすら死を待つてゐたものと見える。彼が久しく仰望してゐた王政復古の理想がいよ〱實現の緒についた折も折死病にとりつかれたことは、彼にとりてどんなに殘念なことであつたかわからぬが、併し彼はその爲に死に臨んで靈魂の靜けさを擾されるほど現世に執着はしてゐなかつたであらう。彼は又、

一、うそいふな。

一、物ほしがるな。

一、からだだわるな。

この三ケ條を以て子孫への遺誡としたといふことである。人としての彼の志の那邊にあつたかは、これによつても察しられ

るのである。更に又彼は、

　幽世に入るとも吾は現世に在とひとしく歌をよむのみ
　歌よみて遊ぶ外なし吾はただ天にありとも地にありとも

とも歌つたことがあつた。憂國の志士としての曙覽は時に慷慨淋漓たるものがあつたが、而も人としての彼はこのやうに生涯を詩の世界に遊び通し、悠々として淸貧を樂しみつゝ此世を終つたのである。

八

　前にも述べたことであるが、曙覽は決して謂ふところの拗ね者ではなかつた。彼が自分に與へられた家をも家業をも亦巨萬の富をも弊履の如く捨て去つたことの如きも、決して自暴自棄の結果でもなければ、またつら當て的な反抗的行爲でもなかつた。無論そこに至るまでにはかなり深刻な苦悶があつたに相違なからうけれども、その苦悶に囚へられて一切を失ふべく、彼はあまりに高いところに心を据えてゐた。如何なる場合にあつても靜に考ふることの出來た彼は、苦悶に惱みながらも、自己と他との交渉を靜觀することが出來た。彼は爭ひの因て來るところを見極めることが出來た。又その爭ひがつまりは自己をも他をも等しく傷け破るものであることをも見極めることが出來た。そして終にみづから退き逃れることによつて、自らをも生かし、又他をも生かす道を求めた。彼の隱退は決して自棄的な逃避ではなくして、寧ろ眞に自己を生かす道への轉進であつた。而してそれは又他をも傷くることなく活かすべき一種の救ひでもあつた。

　しかし、かくの如く一切の富を擲つて殆ど無一物に近い境涯に身を置いたとはいふものゝ、彼は決して人間欲の一切を離れた仙界の人ではなかつた。彼には妻もあり子もあつた。又自身には凡夫相應の煩惱も具足してゐた。出でて王侯に事へず世俗に阿らなかつたとはいへ、やはり藩君の知遇に對しては淚を流して喜ぶことを隱さない彼であつた。自らに投げられた巨萬の富を弊履の如く捨てゝ顧みない彼であつたと共に、他人から物を書かされて善き價を惜しげもなく與へられることを喜ばずにゐられない彼であつた。

　彼は決して自ら奇を求めて獨高く居ることを好むやうな人でなくして、寧ろ最も平凡な生活裡に常に新たな味ひを求めて、そこに安住の歡びを見出さうとした人であつた。たゞ彼には執着がなかつた。こだはりがなかつた。爭はうとする心がなかつた。貪らうとする心がなかつた。去るものは追はず、來るものは拒まず、たゞ有るがまゝの生活に安住し、歡喜することが出

來た──そこに彼の平和があつた。隨て彼は外見は貧しかつたけれども、心は常に豐かであつた。そしてこの豐かな心を以て彼は生涯歌道の三昧境に身を處することを得たのであつた。

かくの如く世に立つて自己の生活を營む上に、私達の最も苦しとするところの爭はうとする心、戰はうとする心、奪はうとする心、貪らうとする心から超越した安らかさに居ることが出來た彼は、謂ふところの憂國の志士としての彼の生活に於ても、殆ど同樣な態度から離れることは出來なかつた。正岡子規が評したやうに、彼は「一たび國體の上に想ひ到る時は、滿腔の熱血を灑ぎて、敬神の歌を作り、不平の吟を爲す、慷慨淋漓、雄劍の如し、亦平日の貧曙覽にあらず」といふやうな一面があつたにも拘らず、彼はつひに自ら出でて戰ふ人ではなかつた。討幕の皇軍に召されて行く門弟等に與へた彼の歌などを讀むと、

色氣なく勅に背く奴等を討め盡して歸れ日を經ず
大皇の勅に奴等の首引拔て八つもてかへれ
朝日影かゝやきあはむ御旗をば戴き奉り太刀とり進め
大皇の魂の御楯といふ物は如此る物ぞと進め眞前に
大皇の勅頭にいたゞきてふるはむ太刀による仇あらめや

といふ風に、意氣誠に颯爽たる勇士の姿が眼前に彷彿するを覺えるが、而も曙覽みづからはつひに出でて戰ふ人ではなくして、寧ろ隱れて歌ふ人であつた。またその點に曙覽の曙覽としての世に對する眞の價値もあり得たのであつた。結局曙覽の眞に望んだところのものは、戰ひそのことではなくして、戰の彼岸に於ける眞の新らしき平和であつた。彼は決して徒らに熱狂し、徒らに怒號するやうな狂熱家ではなかつたのである。

九

子規の評した如く、浮世の名利を見ること、門前の犬の糞の如くであつた曙覽も、歌だけは死んでも捨てることは出來ないと云つてゐる。

歌よみて遊ぶ外なしわれはたゞ天にありとも地にありとも

まつたく歌は彼にとりての眞の「遊び」であつたと同時に、生命であつた。而も此の傳統的な藝術の世界にあつて、彼は正しく一個の純乎たる新人であつた。萬葉以後永く舊套の爲に囚へられてゐたわが國の短歌は、彼にとつて全く面目を新たにすることを得たのである。

曙覽の歌の眞の發見者の第一人は、何と云つても正岡子規であつた。彼はいふ、

「萬葉以後に於て歌人四人を得たり。源實朝、德川宗武、井手曙覽、平賀元義是なり。」

と。而も子規は以上の四人を以て同じく萬葉以後に於ける歌人中の眞歌人として併稱しては居たもの丶特に曙覽については他の三人の持つた特色以外に、その革新者的な面目を讃嘆し賞揚して措かなかつた。

子規が第一に曙覽の歌の特色として擧げたのは、曙覽の歌が子規自身宗としてゐた萬葉の影響を主として受けてゐる點にあつたことはいふまでもない。即ち彼はいふ

「曙覽の歌は比較的に何集の歌に最も似たりやと問はゞ、我れも人も一齊に萬葉に似たりと答へん、彼が古今、新古今を學ばずして萬葉を學びたる卓見は、我第一に賞揚せんとする所なり。彼が萬葉を學んで、比較的善く模し得たる（此の場合子規は決して通俗な意味での模倣を加味してゐなかつたこと無論である。）技倆は、我第二に賞揚せんとする所なり。」

しかし、かう云ひながらも、子規は決して萬葉の單なる模倣を以て作歌の第一義としてゐたのではない。又そうした點に於てのみ曙覽の歌の秀れた特色と見てゐたのではない。即ち彼は更に云つた。

「萬葉が遙に他集に抽んでたるは論を俟たず。其抽んでたる所以は、他集の歌が毫も作者の感情を現し得ざるに反し、萬葉の歌は善く之を現したるに在り。他集が感情を現し得ざるは、感情を有の儘に寫さゞるがためにして、萬葉が之を現し得たるは、之を有の儘に寫したるがためなり。曙覽の歌に曰く

いつはりのたくみをいふな誠だにさぐれば歌はやすからむもの

「いつはりのたくみ」古今集以下皆是なり。「誠」の一字は曙覽の本領にして、やがて萬葉の本領なり。萬葉の本領にして、やがて和歌の本領なり。我謂ふ所の「有の儘に寫す」とは、即ち「誠」に外ならず。………趣味を自然に求め、手段を寫實にとりし歌、前に萬葉あり、後に曙覽あるのみ。」

之によつて見ても、子規が曙覽の歌を萬葉に似てゐる故を以て賞揚したのは、それが萬葉の形態を模したからでなくして寧ろ萬葉人の態度と曙覽の態度とが一致してゐたからであつた。而も曙覽の歌想や取材の自然さ自由さを以て、子規はこれを「萬葉より進みたり」とまで賞揚したのである。

まつたく、曙覽以前又は同時代の和歌の多くを讀んだ眼を轉じて曙覽の歌を讀んだ者には、曙覽の歌はおそらく別世界人のそれの如く感じられたであらうほどに、材料に於て用語に於て句法に於てそれは新鮮であり、自由であり、豐富である。この點に於て曙覽は正に和歌解放運動の先驅者であつた。彼は久しく鎖されてゐた狹い歌の世界の門戸を打ち破つて、大天地大自

然の廣さにまで之れを押しひろげたのであつた。曙覽自らも次の如く主張してゐる。

「小澤蘆庵翁の歌に、いにしへは大根はじかみ韮なすび瓜のたぐひも歌に讀けり、といへるは、歌をむげに狹く取なし、古き集どもに、例ある物の外は、題もたやすくはものせず、なべて海月如す、筋も骨もなき物に讀そこなひ來れる惡癖を、呑破せられたるものにぞ有べき、まことに、中ころよりこのかた、歌は詞えんに、姿なつかしく、たけをあらせ、幽玄によむべしと、ひたふるに敎へたてゝ、彼好き女の惱めるところありとかいふ風情のみを尙きことに、心え執するがあまりのはてくは、諺にいはゆる正月詞といふ物のやうに、いつも定まりて、早春には、朝日のどかに、霞棚ひく、歲暮には、よする年浪、春ぞ待たるゝ、花には、雨のめぐみ、家つとに折る、月にくまなき影、雪に跡つけわぶる、などやうの詞の外には、世に歌詞はなきものゝごとくになり、百人が百人、一昨年も去年も今年も、同じことのみ、言ひ並ぶることの淺ましさよ………（中略）……かく寐言のやうなることのみ、よみふける歌人の多きより、すこしも學才ある人などは、歌をたゞはかなき物に思ひうとむじ、たけき事とは、詩にのみ赴くめり、然て世を經るほどに、歌は文盲なる者の手に落入て、いよいよ狹く、心淺きものになりて、詩の人情世態、雅俗にわたりて言ひ通るに、けおされんとさへするにいたれり、歌人とあらむ者、寐きたなくする目を能くさまし、此に憤りを發し、思ひを凝らして、よくよみ口の鋒を鋭にし、其事に隨ひ、其物に因り彼方此方のきらひなく、幽玄、洒落、艷奸、澹泊、殷富、凄凉、勇壯、溫柔、變化自在の臂を張りて、毛唐人の糟粕甞る詩人の陣を突崩し、我語囀りちらす舌、引き拔きくれんと、國風の旗さし建て、古言の鼓うちひゞかせて、後向かじ、背見せじと進まさらめや、勇まさらめや。」

彼はかくの如き熱烈なる抱負を以て、進んで和歌革新運動の先頭に立つた。而して目に觸れ、耳に聞き、心に感ずるところのもの丶一切のうちに美を見出し、之を歌はうと試みた。從來の歌よみ輩が、特に歌になりさうなものを探し歩いたのとは全然趣を異にして、彼は日常平凡の生活裡のあらゆること、あらゆる物のうちに、限りなき詩味を味ひ得た。平凡生活裡の眞實こそ彼にとりては無上の詩の世界であつた。

かくの如くして、彼は自らの貧乏の苦みを歌ひ、着物の襟を餇ふ蝨をうたひ、饅頭燒豆腐のうまさを歌ひ、錢を貰つた時の歡びをうたひ、鑛山に於ける工夫の勞働、紙漉場に於ける紙

漉女達の働きぶりまでも歌つた。さうした取材の範圍の廣さに於ては、曙覽ほどの歌人は現代のこの自由な歌壇にさへ極めて稀である。此の點に於ては現代の歌人達と雖なほ曙覽について大に學ぶべきものがあると信ずる。

試に、彼が鑛山の工夫の働きを詠んだ歌と、紙漉場を詠んだ歌とを取出して見る。

飛彈堀名銀山十一首の中八首

日の光いたらぬ山の洞のうちに火ともし入てかね堀出す

赤裸の男子むれゐて鑛のまろがり碎く鎚うち揮て

さひづるや碓たてゝきらきらとひかる塊つきて粉にする

箕かけとる谷水にうち浸しゆれば白露手にこぼれくる

黒けぶり群りたたせ手もすまに吹鑠かせばなだれ落るかね

鑠くれば灰とわかれてきはやかにかたまり殘る白銀の玉

銀の玉をあまたに筥に收れ荷緒かためて馬騰らする

しろがねの荷負る馬を牽たてゝ御貢つかふる御世のみさかえ

紙漉七首

家家に谷川引て水湛へ歌うたひつゝ少女紙すく

水に手を冬も打ひたし漉きたてゝ紙の白雲窓高く積む

紙買に來る人おほしさねかづら這まとはれる垣をしるべに

居ならびて紙漉くをとめ見ほしがり垣間見するは里の男子か

黃昏に咲く花の色も紙を干す板のしろさにまけて見えつゝ

鳴たつる蟬にまじりて草たゝく音きかするや紙すきの小屋

流れくる岩間の水に浸しおきて打敲く草の紙になるとぞ

何たる清新さ、何たる微妙さ、そして何といふ調子のしつかりさを持つてゐることであらう。かうした題材を歌はうとした點だけでも、たしかに時代から數步も數十步も進んでゐたことを證するのであるが、而もその觀方、感じ方、及び現はし方が旣にこゝまで行つて居たことは、正に驚嘆に値するものがある。連作體を以て歌つた點にも、特に注目に値する特色がある。

連作といへば、連作こそ曙覽が特に後人の爲に拓いてくれた一つの新らしい進路であつた。無論これは一面から見れば復古であるが、他面たしかに更新の一路であつた。就中慶應三年正月十五日自宅に於ける歌會の始終を、藩主松平春嶽に知らせる爲にとて彼の詠み連ねた十四首の連作の如きは、今日なほ私達の範とするに足るところのものである。

人麿の御像のまへに机すゑ燈かかげ御酒そなへ置く

設け題よみてもてくる歌どもを神の御前にならべもてゆく

さぐり題手にとるやがて頰杖をつきかかりけり口たたきや

め

老し妻の飯匕とりて盛りたるを一口君にささげ見まほし

疊かず狸のものの廣さにて客人膝をおしすりてをる

温めてただ一めぐりさする酒あかくなりたる顔つきを見す

汁食とすすめめぐりてとぼしたる火もきえぬべく人突あたる

おのがわざと曙覽一人はひとみちに歌なほしをる手も動かさで

夜更れば腹空しくやなりぬらむ物足らぬげに誰が顔も見ゆ

客人もあるじも身をぞ縮めをる下冷つよき狹き屋のうち

食ふ物はつくる寒さは強くなる小き火桶すがりあらそふ

よみ出し歌ことごとく取あつめ神の御まへにすゑて額づく

戸をあけて還る人々雪白くたまれりといひてわびわびぞ行く

何よりも實感を歌ふことを旨とした點に於て、曙覽が萬葉以後の第一人者であることは、私達の斷言するに憚らないところであるが、更にその實感を捉うるに當つて、彼がいかにデリケートなヴィヴィッドな心の働きを持つてゐたかは、彼の歌集を讀む度に私のいつも驚歎措かないところである。

四歳になるむすめ健女の死を悲みて

[illegible]

父の十七回忌に

今も世にいまされざらむよはひにもおはさむものをあはれ親なし

髮しろくなりても親のある人もおほかるものをわれは親なし

越智通世が妻のみまかりけるとぶらひに

亡き母をしたひよわりて寢たる兒の顔見るばかり愛きことはあらじ

友の江戸へ行くに

旅ごろも岐蘇は五百重の山つづきやどりおくるな朝出いそぐな

同前

武藏野のはてなく待たせわびさすな老ませる父いはけなき兒に

ひた土に莚しきてつねに机すゑおくちひさき伏屋のうちに竹生いでて長うのびたりけるを其まゝにしおきて

壁くぐる竹に肩する窓のうちみじろぐたびにかれも枝振る

島崎土夫主の軍人の中にあるに

歸りこば脚結の紐もとかぬまに先顔見せよ待ちつつあるぞ

旅にある友のもとに

君はやく歸れをとのみ思はれつみ母のみ顏見るたびごとに

　庵の壁の称れかゝれるを人してつくろはせつつ

あるじをもこゝにかしこに追たてゝ壁ぬるをのこ屋ぬち塗りめぐる

　鉢中游魚

網いれぬおそれ忘れて游べかし水とぼしくて住うかりとも

靜なるこゝろの友と見をるかな鰭ふる魚にわれもまじりて

わざをなみ靜にあそぶ魚ぞよき夜中曉いつ見てもはた

　竹内甚八郎が江戸へ行に

おとにきくとちの木山の雪なだれ輕く思ひてあふなだれに

　象蟻九首の中に

群よびにひとつ奔ると見るがうちに長々しくもつくる蟻みち

蟻と蟻うなづきあひて何か事ありげに奔る西へ東へ

　病床にありて鉢中の游魚をながめつつ

顏のうへに水はしがせて飛ぶ魚を見かへるだにも眉たゆきなり

かうした歌を讀むと、曙覽が如何に實感に忠實な歌人であつたかゞわかると同時に、その點が彼の歌をして永く生命あらしむる第一の要素であることも肯けると思ふ。更にいづれの歌も、その結句に特に注意すべき力點を持つてゐることも見のがしてはならぬ。

　彼は又自然の風物に對しても、かなりに敏感であつた。しかし、前に揭げた多くは人事に關するものか、若くは自然界の生物の生活に關するところのものである。而も大體に於て彼の歌が靜的な自然を歌つた作に於てよりも、動的な自然を歌つた作に於て遙に優れてゐた。そのことは彼の歌を鑑賞する上に、特に大に注意しなければならぬ重要事項であると信ずる。

　此の意味に於て、私は橘曙覽を以てわが國に於ける所謂生活派歌人の先驅者とも見てゐゝと思つてゐる。今日謂ふところの生活派歌人の第一人者として石川啄木を擧げることに何人も躊躇しないであらう。しかし、私は石川啄木の前に既にその先達として一人の橘曙覽のあつたことを閑却することは出來ない。その歌調に於て、その語法に於て、その內容に於て、曙覽はたしかに啄木等の先達であつたのだ。

良心破産者の生活

佐々木指月

（１）

海の風がぶつかつて、くるりと渦をまく崖の下で、中山文吉は今日も朝から働いた。

　赤土の崖の下で、洗ひ晒しのシャツ一枚になつて働いてゐるかれの姿は、まさに一幅の畫であつたが、働いてゐるかれ自身にとつては、それどころの話ではなく、かぶつてゐる帽子と額の間から硝子玉のやうな汗が落ちた。

　かれの仕事は農作であつた。それも日本從來の農作とはちがつて、もし名づけ得べくんば、文化農作とでも云ふべきものであつた。その農場には——農場と云ふほど廣い地所ではないが——四棟の温室と、少しばかりの花畠と、それに多少の水田がつながつてゐた。水田の方は人を雇つて作らせたが、花畠の西洋花と、温室のなかの西洋蔬菜は、かれ自身で作つた。アクチョク、アスパラガス、カリフラワー、それにまた、グリンピー、ストリングビンズ、レタースのたぐひ。それらは四季にかゝはらず、その温室から運び出された。

　西洋花の類では、ダーリア、コスモス、なぞは崖に近く花壇を作り。サフラン、ナツシサスなぞは、別に温室のなかに小さな池をしつらへて作つた。その他、季節に應じて色々の花類は作られたが、今日の、かれの仕事と云ふのは、崖の眞下の土をならして、そこへ、自家用の蔬菜の、茄子か、南瓜の品でも、作らうと云ふのであつた。無論、その種蒔きは來年のことではあるが。

　中山文吉は、二十餘年にわたつたアメリカの農園生活に見切

りをつけて、大正の大震災の二三年前、家族をつれて日本へ歸つて來たのであつた。かれは義兄が呑み殘して死んでいつた一と棟のあばら屋と、あばら屋ぐるみ、その遺族と、猫の額ほどの水田や畠を相續して、そこにかれの殘りの半生を送ることにしたのである。

　アメリカから持つて歸つたいくらかの金で、義兄の失つた田地なぞは、一部分、買ひもどした。しかし、義兄の妻――それは、かれの實の姉――と、自分の妻と、兩方の子供たちを合はせて五人、それも多くは役にたゝない女の子で、かれは自分一人の腕で、しつかりと土にしがみついて暮すより外に、生活の道はなかつた。

『それでもこれが地獄までつきぬけて自分の地所だと思へば、土くれ一つも自分の體だ。またこれが自分の生涯を葬る墓場だと思へば、この土から生ずるものゝ多い少いは問題ではないのだ。』と、かれはいつも、同じくアメリカ歸りの友人なぞの訪ねてくるたびに、言葉に力を入れて語つた。かれは赭い皮膚と、ストロングな腕と、善良なハートとを持つてゐる四十七八？の男であつた。

　かれは農作――殊に溫室のそれについてはエクスパートであつたが、その實捌き方については、なかなか思ふやうにはゆかなかつた。しかしかれの農場は、その位置の上からでは、好都合な地方に置かれてゐたのである。かれは、横濱と鎌倉と、兩方へその農作物を送り出すことが出來た。もつともかれは、それほど多くの顧客を要するわけではないので、横濱のブラツフにある西洋人の住宅や、カナダ通ひの汽船會社に賣り込むだけのものを作るのに、今では手が足りないで、家内中惣がゝりでやらなければならないこともあると云ふほどになつた。

『最初はこまつた。西洋人の住宅へ賣りにゆくと、日本人の下女なぞに撃退されてしまつた。それから、ちやんとフロツクコートを着て出掛けて、そこの主婦に面會を求めて、了解を得て置いて、あとから品物を屆けることにしたが、主婦が品物を一度見れば、もうこちらの物だつた。』と、それが如何にも名案であつたかの如く、かれは舊友の顏さへ見れば、必ずその話をした。

『フロツクコートは振つたなア！』と、その時のかれの意氣込みを想像して、それを聞かされたものは、誰でも笑はずにはゐられなかつた。

　あの正直そのものゝやうな顏をして、フロツクコートを着て、開き直つて、さて、わたくしは、長年アメリカで、文化農作をやつてゐたものでありますが、今回、當海岸に農園を設

けて、エヘン。なぞと、フォークタンなあの表情でやられては、如何な西洋人の主婦どのも、閉口せずにはゐられなかつたであらう？

『かれの顔は主婦向きに出來てゐるから。』とは、友人たちの蔭口であつた。しかし、かれは顔のみならず、そのブレインも、常に正直な働き方をした。

大正十二年の大震災には、かれもひどい損害を受けた。岸の土が崩れたので——その頃はまだ創業の——花畠と温室を二た棟まで壓しつぶされた。その崖といふのは、そこにある山の上の寺院の所有地なので、かれはその崩れた土を取り除いてくれろと申し込んだが、その寺院の住職は笑ひ顔で、かれの申し込みをしりぞけた。

『土だから取り除いてくれろとおつしやるのだらうが、火だつたらどうなさる。こちらで掴んで落したといふわけではなし、天變地異のしわざであつて見れば、如何とも致し方はない。土はどうか御自由にお取り棄て下さい。』と、かう云はれては、かれも文句のつけやうはなかつた。

かれは一と秋を棒に振つて、その土を取り除いて、田地を埋め、その上へ壓しつぶされた温室を移した。その時にかれは、崖の下を切り缺いて、そこのところへ二尺足らずの幅のある空[illegible]立たなかつた。

『今度は崖が崩れても温室を壓し倒されることはない。またこゝへこれだけの空地を取つて置けば、花畠の上に土の辷り落ちるやうなこともあるまい？』と、かれは自分の家族に語つた。

その後、その二尺足らずの幅さの地面は、崖の上の寺院の地所と、崖の下のかれの地所との仲介區域となつてゐたが、もう、今年あたりは、土も全く辷り落ちなくなつて來たし、それに寺院の方からも別に苦情も持ち出さぬゆえ、かれは、いよいよその土をならして、そこへ惣菜でも作ることにしたのであつた。

この仕事にかれはもう二日もつぶした。

『なに、出來た茄子でも寺へくれてやれば、住職だつて何が云へるものか。』と、かれは苦い顔をしながら、ことさら鋤に力を入れて、その土を堀り返した。

『パパーお晝！』と、後から突然に聲をかけたのはかのれ長女であつた。アメリカ産れで今年は十七。横濱に寄宿して女學校に通つてゐたのであるが、暑中休暇なので、近頃では家にゐる。

『えゝ、びつくりした。だしぬけに聲をかけるやつがあるか？』と、ふりかへつたかれの目には、水色の服を裾短かに着

て、絹の靴下に母親の吾妻下駄を引つかけて立つてゐるその娘の姿がうつゝた。

『お寺の屋なんか削つて、鳥にしたりするから、ぴく〳〵してゐるのよ。パパーは良心の破産者ねエ』と、どこかで聞いて來たのか、何かで讀んだのか、手頃な警句なので、かの女はそれを放げつけて、ぎやふんだらう?と云はぬばかり。つんとすました顔をした。

中山丈吉はしばらく默つて考へてゐた。娘の云つたことを眞にうけるやうなかれでもないが、肩の間へもぐり込みでもするやうに首を縮めて、默りこくつて考へてゐた。かれは解決しなければならぬ内心の疑問を、今こゝですぐにも解決しようとして、苦しんでゐるやうに見えた。

『おゝ、おれはな、』かれの聲には怒りの慄えがあつた。かれは汗の玉の中に光る目を見ひらいてゐた。『今までに良心の命ずるところに隨つて利益を得たことは一度もなかつた。おれは良心によつて活きてゐるのではない。土によつて活きてゐるのだ。』と、かれはその土の一語に心からの力を入れた。

（２）

立て膝うつす化粧鏡も、湯上りの襟脚に流れる明りも、分玉川花榮の素敵なハートを描寫する言葉にはならぬ。

『もつと蚊やりお線香を立ててさ。こんな、どぶ溜みたいなところの藝者になつちやア、やりきれない。あゝ痒い。ちよいと、何してるの?こんなところを掻いてよ。あたい、自分で掻いてる間なんかありはしないからさ。』右の手を逆にまはして、かの女はぴたりと背中をたたいた。

餅の肌には紅葉が散つて、爪で掻いたそのあとは、紅脂で樂書をしたやうだ。立て膝を半ばくるんだ緋縮緬。眞ッ白な夢と夢とが向き合つてゐる。

『まア、藪ッ蚊だよ!』ぴしやり!ぴしやり!

『おまへさん何してるのさ?うしろから少し煽いでよ!』と、鏡のなかをのぞき込んだかの女は、お白粉溶いた左の手を、天をさゝげた天女のやうに上は向きにして、くるりとこちらへ向き直つた。

『また新聞讀んでるの?朝も新聞、晩も新聞、夜中も新聞。おまへさん新聞讀みにうまれて來たの?だんまりだ。チエツ!』べろりッと舌――思つたほど長くない――を出して、またくるり。鏡の方へ向き直つて、『おゝ痒い!』ぴしやり。それは足の裏。かの女の膝の緋縮緬は、いつの間にか、ずりこけてゐた。

分玉川花榮は、二十六?露地の玉川の抱えだつたが、今年の

を獨立して、この土地へ來て、自前の藝者となつたのである。この土地の組合に加入する入費や、その外の萬端は、おまへさんとかの女が呼ぶ、その新聞を讀みにうまれて來たやうな男が出したのであつた。

さうしてこのおまへさんは、かの女のペートランであるのみならず、實はかの女の新婚の夫である。かれの名はこゝでは云ふまい。ともかくも四十一二の中年者だ。これもアメリカ歸りであつて（アメリカ歸りの話ばかりで、まことに殘念だが、アメリカ歸りの良心と、日本の藝者のそれとは、まことにいゝ取り組みなんだ。）向ふにゐた折から、日本へ歸つたならば、藝者屋をして見よう？と云ふのがかれの理想であつた。美人を自分のまはりに置いて、目を樂しませながら金を儲ける。美人は物いふ花であるから、かれは物いふ花の栽培にかゝつたのである。藝者屋はかれにとつては花畠の一種だ。たゞし、かれは目を樂しませるばかりでなく、耳をも樂しませようとするのだ。いや、目と耳のみでは濟むまい？

ともかくも、その物いふ花の一と莖は、完全に自分のものでなければならぬ。その花を花のうちの花として他の花を司どらせる。解語花壇のモナーキズム。クインに采配をふらせる。ヒズ、マジエステイは黒幕にゐようと云ふのだ。しかしかれは創未だいまだ世に出ないわけだけれど、このおまへさんの理想を實現するには到らないが、クインとなるべきおまへさんには手折り得て、その花に、花榮と命名した。尤もこの名は、かれの親友の一人が、クインの前途を祝福して添つた名であつた。花榮は、所謂、くず餅藝者のなかに於ては、たしかに名花に相違なかつた。

だが、月に叢雲花に風だ。氷にチプス、牛鍋にはさなだ蟲。かの女の花榮のくず餅肌は完全にかれのものにはならなかつた。かの女の島田髷は必ずしもほつれずに、每夜かれの枕元に戻つてくるとはきまらなかつた。さあ、さうなるとおまへさんは、はたしてはたで見るほどの仕合せものであつたらうか？勿論かれもそのくらゐなことは豫期してゐたであらうが、さあ、このおまへさんたるものが、それは當りまへだで、濟しこんでゐられたらうか？

かれは、そのくず餅肌を愛した。かれはそのくず餅肌を憎んだ。その島田髷を愛した。に、に、憎んだ。かれはその憎と愛とのスープのなかに陷つて、煮えくりかへらんばかりであつた。

抱きしめられたり、蹴とばされたり、花榮のイメーヂは——かれの胸のなかで——血だらけにされてゐた。が、實物の花榮は、そんなことは夢にも知らない。また、かれ自身は、その內心の鬪爭を『ふン！』と、鼻さきで笑ひとばして氣ぶりにさへ

も見せなかつた。

かれは、でつぷりと肥えて、ぬつぺりとした大男だ。目の細い、鼻の大きな、口數の少ない、分別男だ。かれはシカゴにゐて、カイロプラクチツクとか云ふ文化按摩をやつて儲けた。日本人のカイロ――手――は、また別だと云ふので、大分流行したさうだから、かれは異性の皮膚なぞには、倦きる程さはつてる男だ。

かれはその專門から割り出して、かれの妻、花榮の、どこからどこ迄が、所謂お座敷に屬し、どこからどこ迄が自分に屬してゐるか？そこに一つの定まつたラインを引かうと考えた。

かの女の藝――藝といふ程の藝があるのでもないが――それは無論お座敷に屬してゐる。かの女のくず餅肌。それは――ただの皮膚として考へて――どの邊までお座敷に屬すべきものであらうか？　そのラインの引きどころを想像すると、――いや、かの女がどの邊で最後のラインを引いてくれるかを想像すると――かれの息はつまつた。かれはごつくりと唾をのみおろした。

花榮の湯上り肌。宵の化粧。立て膝。緋縮緬。白い夢の向ひ合ひ。鏡のなかの、さうした姿を見るたびに、かれは悲鳴をあげたかつた。かれはかの女に飛びついて、手は手、足は足、ばら／＼に引き裂いてやりたかつた。だが、かれのなし得たことは、その大きな鼻の孔から『ふん！』と、息をふき出す――それだけのことであつた。あとは新聞に目をさらしてゐるばかり。

しかし、かれのにくらべると、花榮のハートは如何にも素敵である。それはこの土地で、かの女の名披露をした宵の明る朝のことだつた。かの女は島田の根もぬけて、へト／＼になつて歸つて來たが、

「おや、おまへさん、なにを云つてるの？　泊つて來るには當らなからうなんて？　あたいは藝者なのよ。晝間だけでも家にゐてあげたら貞女じやなくつて？　そんなにあたいをお座敷へ出すのがいやなの？　では、ちやんと奥さんに仕立てゝさ、山の手へでも住まはしたらどうなの？　そら、それは出來ないでしやう？　今、あたいがお茶ばつかり挽いてたら、折角、おまへさん、つぎ込んだ元も子もなくなつちまうわ。お客にはどこ迄も親切にして上げなけりやア、口はかゝつて來ませんからね。」かの女はぴつたりと云ひきつた。

『お客に親切にして上げるのに苦情はいはないが。』と、かれ、おまへさんは云ひよどんだ。『おまひがさぞ不愉快だらうと思つて、それを氣の毒に思ふんだ。』云ふことは同情心から出てゐ

うつゝにきこえたら

『嘘！　おまへさん、まだ素人くさいのね。氣が重くなるからそんな顔しつこなし。さア早く朝湯へでもはいつて來たらどう？　あゝ、くたびれちやつた。夜通しなんだからねエ。どれ一寝入りしましやうか？』かの女はぐつたりと長火鉢にもたれて、膝にはさんだ烟管に烟草をつめながら語つた。

それからもう半年もたつ、かの女は日増に賣ツ子になつて來た。夏の宵の溝ツ蚊と鬪ひながら、化粧を濟ました花榮は、近頃かかえた妹藝者に手傳はして、お座敷着を着はじめた。

『おまへさん。今夜もあたい歸らないよ。歸つて來たら、殺すなり、活かすなり、おまいさんの勝手だが、用先きに、じん助はお斷りよ。』ハー、マジエスティ花榮は、既にこの家のクインであつた。

『たゞ、腹へお土産をつめ込んで歸つてくることだけは御免だぜ。』哀れなるおまへさんは、妙なところで最後のラインを引かうとした。

『冗談云つちやアいけないよ。それが若し、お客のだつたと云ふことがわかれば、こんな耳寄りな話はないじやないの？』クインの黒い目の底から、氷のやうな冷笑が、さつと流れた。

『あれが噂のシヤンですよ』と、中尾すみ子が指さす方に、地曳網ひく男や女の群にまざつて、足の色の白い少女が地曳の網をひいてゐた。

中尾すみ子は、この漁村の小學校の訓導であるが、この夏一ぱいこゝにゐて、來る秋のはじめには、東京へ上るのだとか云つてゐた。かの女は、この海岸にある、自分の姉人の別莊に住んでゐるので、今日は、その姉人のところへ、東京から遊びに來た、ある畫家の案内をして、朝からこゝらをぶらついてゐたのであつた。

『あゝ、あれですか、そのシヤンと云ふのは』と、畫家はなにげなく答へた。しかし、かれは注意の目をその漁村のシヤンに向けた。あれが、その、小學校を追はれたと云ふ美少女なのかと、かれは心に思ひながら、その哀話の少女を眺めた。少女の方でも、こちらを見てゐた。小學校を追はれるほど美しいとも見えないが、漁村には過ぎものだと、かれも興味を感じて眺めた。

『姉はこの海岸の景色を、あなたに描いて頂くと申しておりました。』すみ子孃は、つゝましやかなもの云ひをした。この人

も、たしかにシヤンの一人であつた。訓導らしい、目立ない粧ひはしてゐるが、青春の血は無意識のうちに、かの女の唇に燃えてゐた。

『さう云ふお話もうかがひました。しかし、わたしが畫くとすれば、あの地曳の綱を引く漁夫の裸體ですな。どうです、あの皮膚の色は？まるで銅色のアメリカ印度人のやうですな？』かれは如何にもその銅色を好むらしく、漁夫たちの裸體にみとれた。

すみ子さんは、まともにそれを見ようとはしなかつた。いや、まともにそれを見るには見た。しかし、たゞ見てゐるだけのことであつて、別にその銅色については、好きだとも嫌ひだとも云はなかつた。のみならず、かの女の目は、直きに他の方向へそれて行つた。かれはあぶなく冷笑のうちに、かの女を眺めるところであつた。

『この海岸はですな、』かれは言葉の調子を高めた。『こゝから海を見るよりも、海からこゝを見た方が、繪になるやうに思ひます。自然のなかゝら繪を見つけようと思つて、却つてその御當人が、繪のまんなかにゐたりなぞすることは、よくあることです。あのシヤンからわたしたちを見れば、わたしたち二人はまさに畫中の人物なんです。』かれの言葉にすみ子さんは、少からず、きまりの惡るさうな顏をした。

汐入りの川には長い橋がかゝつて、橋の袂から松並木が左右に分れて、海岸の白沙を縫つてゐるあたり。曳き上げられて乾いた舟のかたはらに、この二人は立つてゐた。海はそろ〳〵上げ汐で、地曳ひく男や女の、えんやらさアの掛け聲は、打ちよせる波の響の低音のなかゝらきこえた。

網も追ひ〳〵曳き上げて來て、浮木の端が浮いたり沈んだり、白波のうねる向ふに見えるほど近づいて來たので、漁夫たちは一生懸命。漁夫におとらぬ肌のいろもつ女たち、しやがれた聲をしぼるなかに、シヤンもまざつて、ほい、ほい、えんやらさ。綱をからんだ腰のあたりに、力のはいるその形がとてもいゝ。

『あの少女は美しいから小學校を追はれたと云ふが、あのくらゐなのは、東京あたりの女學校にはいくらもゐるので、それがみんな美しいから學校を追はれたのでは、美しいものはやりきれませんな。』畫家はまたシヤンを眺めた。

小學校の生徒としては年齡も多過ぎるし、學課の成績も思はしくないし、他の兒童にもよくない感化を與へるし、それに男教員の自宅を訪問してこまるといふ理由で、この少女を退學さしたと云ふが、考へて見るまでもなく、そのうちの一つだつ

て、一人の生徒を國民教育の學校から、追ひ拂ふ理由やなぞにはなりはしない。そのうちの大きな理由は、男教員の自宅を訪問してこまると云ふのにあるのだらうが、こまるとは、いい言葉を見つけ出したものである。と、昨夜、聞いた話をまた思ひ出して、かれは、笑はずにはゐられなかつた。

『それでも漁村の少女としては、あの子は少し美しすぎるので、とかくよくない噂がありますものですから。』と、すみ子さんは、まじめに答へた。

『して見ると、さう申しては失禮ですが、あなたなぞも、漁村の小學校の訓導としては、少し美しすぎるやうですな。よくない噂はまぬかれ得ないでせう?』この畫家は皮肉屋だ。すみ子孃の姉人も聞えた皮肉屋だが、この畫家のお仕込みだと云ふことだ。畫家はその姉人の御良人の親友なのである。すみ子さんは髮の根まで赤くした。

『自分さへ正しければ、わたし、もう、何を云はれてもかまひませんの。實は、それがいやなので、ここの學校はよすことにしました。』と、かの女は聲を改めて語つた。

男教員の誰かれが、手紙でもつて妹に結婚なぞを申し込んでこまるといふことを、その姉人から聞いたことがあつたのを、この畫家は思ひ出した。なるほど、このこまるは本當にこまるだ。と、かれはこゝろおかしく思つた。

『あなたは結婚を申し込まれたのが、いやさに、この土地を去らうと云ふのですか?』かれは、むしろ、かの女には意外な程の質問をした。

『…………!』かの女は驚きながらも畫家の顏を見た。かれは語りつゞけた。

『結婚を申し込まれたたびに逃げまはつてゐたのでは、女はこの世界から逃げ出さずばなりますまい?』

『あの校長は結婚をしようと云ふのではないのです。』かの女の顏色は變つてゐた。

『え! 校長!』さすがのかれも呆れた。

かれは、昨夜、その校長に逢つたばかりであつた。五十六七の、目の大きい、謹直の權化のやうなその校長と、かれは、昨夜、そこの別莊で、長時間、眞面目くさつて話をしたが そこには、かの女もゐたし、かの女の姉人もゐたのであつた。——おれは、まだ若いなアとかれは思つた。そのくせかれも四十の坂は越してゐた。さうだらう、あの校長にだつて美しいものは美しいと見えるだらう、醜いものは醜いと見えるに違ひない。しかし自分は美しい故にそれをどうかしようとは思はない(?)尤も、醜いものは御免だが(?)と、かれは自分に云ひ譯

をした。

『美しい少女は小學校を追はれる。美しい女教員は學校をやめねばならぬ。それはどう云ふわけだか、あなた御存知ですか？』と、かれは不思議な質問を發した。

かの女はまた毛の根まで赤くした。この令孃は美しいと云はれるたびに赤くなるのだ。どうもそこが急所らしい。

『それは、』と、かれは言葉を次いだ。『美しいものは蠱惑する。蠱惑されゝば良心の破産です。だから美しいものは罪惡と見られる。裸體畫が特別室へ入れられるのはそのせいです。さき程から、あなたが、漁夫の銅色の皮膚を見て、まぶしさうな顏をなさるのもそのせいです。違ひますか？』どうですな？と云はぬばかり。あなたのやうな美しい方は、社會の特別室へ入れられるかも知れませんよ。』かれは、また、急所をねらつた。令孃は髮の先まで赤くした。

地曳の網は岸に上つた。二人は崩れる砂を踏んで、その間近まで歩いて行つた。小魚ひらふ漁夫たちのなかに、例のシャンは、なかば裸體でこちらを見ながら立つてゐた。近寄つてよく見ると、なるほど、調つた目鼻をしてゐる。ことに目には媚を含んで、手拭かぶつたその下に、三ケ月なりの眉毛が見えた。

『先生はん！このお方、東京のお客はんどすか？今日は、しけどすえ。なんにもとれまへんさかい、お客はんには、えらうお氣の毒！』その言葉のやはらかさが、かれの耳へはメロデーのやうに聞こえた。

『そこにある小魚でもなんでもいゝから、あとで届けておくれ。』すみ子孃は命じた。

『おほきに！』どの字に輕いアクセントをつけて、そのシャンは、白い齒をちらりと見せた。

學校を追はれた後、京都へ行つて、カフェの女給とかをしてゐたと云ふが、道理で京都の言葉を話す。しかし近頃では、またこの漁村へ歸つて來て、親兄弟と一緒に、地曳の網を引いてゐるのだと云ふことだ。

だが漁村の人々は、かの女には、もう誰も、口さへきかないさうである。

（4）

『八部琢堂老人の、家のまはりは茄子ばかり、茄子のまはりは糞ばかり。』と、いふ詩を作つて獻じたのは昔のことで、今では八部さんの家のまはりは貸家ばかりになつてしまつた——さうな。

しかし昔の袖ケ浦、寒川あたりのおこの味糟汁を食はしてや

ろから好いといふ手紙を受取つたので、辻専一は、自分のモーターボートに乗つて出かけた。かれは釣が道楽で、友人たちはかれのことを釣専一と呼んだ。

八部琢堂老人は、いくつになるか誰も知らない。何んでも西南戰爭當時の勇士だといふから、若くつもつても七十五六でなければならぬが、見たところ五十ぐらゐにしか見えぬ――さうな。

琢堂老人は逸話に富んだ人である。釣専一とは釣友達で、もうかれこれ二十年あまり交際してゐると云ふが、下總の村田川とかで、顔を合したのがそのはじめださうである。辻は、この老人の逸話をいつも友人たちに話して聞かす。

琢堂老人は長州は萩の產れで、庶子だつたので、京都のある禪寺へくれられて、小僧にされた。行業純一に修行して、廿三四の頃には知殿とかいふ重い役目を仰せつけられた。寺內の掃除や、火の用心をする役目ださうだ。

なにさま綺麗な坊さんなので、女の子がうつちやつて置かず。托鉢に出ると、おひねりの紙に紅筆で女文字のしたゝめてあるのを貰つて來るといふありさま。しかるに御當人は、さつぱり色氣もなんにもない。『女人は地獄の使ひ。能く佛種子を斷ず。外面は菩薩に似て、內心は夜叉の如し。』と斥けた。これでほんとうの釣にはできたない。

その話を聞いたかれの師匠、なんと云ふ時節と云ふのか、褒めるかと思ひの外、『そのやうなことをぬかしをるか！浅ましい墮落じや。いつか三十棒を食はしてくれんならん。』と、滅法界な立腹であつた。

その後かれの腹ちがひの兄が死んで、かれは家督の身分となつた。と、同時に、兄の遺言、家の名譽。かれは官軍に從つて九州へ下ることになつたので、改めて師匠のところへやつて來た。

『これが今生のお暇となります。』かれは死を決してゐたのだ。

『老大師には御法體つゝがあらせず、御長命あそばされますよう。』と、こみあげてくる淚を呑みながら、かれは別れの言葉をのべた。

『緣あらばまた逢はう。したが、行きがけに、これを一寸、萬松菴に屆けてくれるやう。別に返事を貰ふには及ばん。』と、師匠が書いて渡す封書を受取つて、

『萬松菴と申しまするど、あの、伏見の尼僧でござりましたな？』と、かれは問ひかへした。

『さうじや。別に廻り道といふでもあるまい。たしかに萬松菴の手許へ屆けてくれますように。』と、禪師は答へた

萬松庵然と云ふのは、その頃、聞こえた尼さんであつたさうな。四十三四の色白の、まろぽちや尼さんで、優しい顏をしてゐて、それで、とても、鋭い機鋒を持つてゐたと云ふのだから、たまらない。

件の若い坊さん——かれはその折はまだ俗形でゐたさうである——と、向き合つて、手紙をひらいてうなづいて、その坊さんを庵の入口まで送り出した。坊さんは仰いで女人の顏を見ずとばかり、そつぽばかり向いてたさうだ。

入口の障子のところまでくると、その尼さんが、一きは聲をやはらげて、

『もしえ！』と呼んだ——さうな。

若い坊さん、何氣なくふりかへると、尼さんは、じろりと横目をあびせた——さうな。

けがらわしいとばかりに、坊さんが顏をそむける途端に、

『ぴしやッ！』と、一つ、横づツぽうを見舞はれた。

『はツ！』と、驚く拍子に突き出されて、後ろへ障子をたてきられた。

草鞋を手に取らうとして、

『あツ！』なる程と合點が行つたさうだが、どんな合點がいつたのか、琢堂老。それぱつかりは釣專さんにも話さない——さうな。

ともかくも城山の一戰に屍山血河のなかにあつて琢堂さんは、宇宙愛の佛、彌勒のふところにゐるやうな氣がしたといふのだから、尼さんの横目は、よほど色ツぽかつたに違ひない。

その後、琢堂老は、女人を尊敬する念を起した——さうだが、琢堂さん自身が、誰に對しても、何んとも云へない溫情をもつてゐる人だ——さうな。釣專なぞは、この老人を、まるで父親か何かのやうに思つてゐる。

ある時、釣專は、この老人に、『人間は何んのために活きてるのでしやう？』と尋ねたと。四十づらを下げやがつて、尋ねることを欠いて、下らないことを尋ねたものだ。

『面白いことをするために活きてるのだ。』と、老人は答へたさうな。

『何が一番面白いでしやう？』と尋ねると、

『何が一番面白かつた？』と、きかれた——さうな。

釣專返事にこまつたと。

『まさか釣じやああるまいね？』と、云はれて釣專……

『なアる程！』と、悟つた——さうな。

世の中は、綺麗なものと、欲しいもの。その中間に面白いものがあるのだと。

綺麗なものは目に面白い。面白いから欲しくなる。一事が萬事だ——さうな。（目、耳、鼻、口、と、だん〳〵考へて貰はないとこまる。）

それを極めないと物足りないし、それを極めると相濟まない。（口說いて落ちないといま〳〵しいし、落られては大變だ。）

これに徹しないと生き甲斐がないし、これに徹しると命がなくなる。（無垢では女になれないし、女になると無垢ではなくなる。）

『だから、その、面白いことはやるがいゝが、飯だけは食はずばなるまい。』と、云つたといふが、老人はなか〳〵考へてゐる

自然は快樂の代價を要求す。その代價は飯を食ふことだとは、さすがのエピキユラスも思ひつかなかつた一語であらう。

して見ると、いくら面白いことをしても、米櫃さへ空にならなければ、良心の破産者にはならないわけだ。良心のメートルを米櫃ではかるやうになれば、倫理學と、經濟學とは、握手したことになるのだ。

東方の快樂主義者、八部琢堂老人は、モーターボートの操縦で、ギヤスリン臭くなつた辻專一を、自邸の二階に迎えて饗應した。壁には陸軍少將の制服を着た寫眞と、習志野の兵營の前に立つた大佐時代の寫眞とがかけてある。後のは老人が日淸戰爭から歸つて來たときの紀念で、前のは日露戰爭に從軍した時の紀念である。いづれも老人の昔を語る尊敬すべき記錄であるのだ。

長押にかけた偏額は、時の滿洲軍總司令官侯爵大山巖元帥の肉筆で、『髮長僧貌醜』琢堂さん野次られた形である。床の間の一軸は娥々たる麗筆で、『豁二開店面一無二他事一放二擲胡餅一引二客錢一』これが萬松庵なんだからたまらない。

『なアる程。』と、釣專は、これを見るたびに幾度感心したか知れない。

『この態度でおれはいつも戰場に臨んだ。』と、老人はつけ加えるが例だ——さうな。怖ろしいことである。

貼り混ぜの短冊の一つには、例の『家のまはりは茄子ばかり、茄子のまはりは糞ばかり。』釣專の惡筆が未だにある。

『これ、辻さんのでしよう？』と、當年とつて十九才の花恥かしき新夫人に云はれると、專さん、すこ禿のあたまを掻いて悲鳴をあげる。

『おい！ 辻に、おれの造つた酒を呑まして見ろ！』將軍の命令だ。

三つ四つ違つたコップになみ〳〵とつがれた冷酒を專さん舐

めて見た。

『どれが一番よく出來てゐるな？』老人は尋ねた。

專さん舌を舐めずつて月を白ツ黑するばかり。

『こいつは、魚のゐどころを突きとめることは上手だが、酒のきゝわけは出來ぬと見えるな。おい、こいつには、あの、どぶろくでも飲ましてやれ！』琢堂老人一喝した。

專さん、コップを取り上げられてしまつた。

專さんは良心の破産者じやアないか知らないが、味覺の破産者だつたと見える。

（5）

『川施餓鬼を見にいらつしやい。』といふ招待をうけて、今井さんは、ぽツぽこ蒸汽で隅田川を上つた。

水神の渡しを、ぼんやりと考へ込んで、江戸の昔の色男氣取りかなんかで、紗の羽織の袖口に扇の風をばさつかせて、渡つたところはよかつたが、この男、元來がそそかし屋。

『と、あれはどこだつけな？　しまつた。來過ぎた。やつぱりあの橋を渡つた方がよかつたな。』と、いふうちに、汗はびつしより

『今日は、お暑いことでございます。』と、佇んだ稼業。かれは庭から回つてはいつた。

『あらまア、ようこそお早いお入り。なんてまア暑いんでしよう？』と、出迎へたのは、見たところでは年はわからぬ。大丸髷の奥さま。耳から口に割りつけた化粧下地に、さては身元がわかりさうだ。水締の髮から餘つた耳朶は唇のやうに赤い。

『さア、どうかお上り下さいな。あなた、お召し物をすつかりおぬぎになつては如何？　あらまア、なにも、さう御遠慮には及びますまい。まんざら、あかの他人じやなし。あなた、一ツ風呂お浴びになつてはどう？　さア、すツ裸におなんなさいよ。』と、この奥さまは追ひ剝ぎだ。

『じやア、まア、先に、御挨拶だけでもちよつと致しましよう？』と、今井さん――その名は瓦樂――白扇を、いやにかまへてかしこまる。

『御挨拶なら裸になつてからだつて出來るじやありませんか？　さう顏を見るか見ないに御挨拶の催促なんかするものではありませんよオ、見ツともない。さあ〳〵はやくお脫ぎなさい。暑ツ苦しくつて見ちやアゐられないから。』と、奥さまは、とうとう、かれを引きむいて褌一つにしてしまつた。

『如何にもこれぢやア態がわるくて、あなたに見られるのも、きまりが惡うございますからな。』かれは、裸でぴよこ〳〵と、

あたまをさげる。

「あなたの樣たんか、たとへ着物を着てゐたつて、ちつともいいことはありやアしないから安心なさいよ。まだうぬ惚れがあるのねエ」奥さまはおほ笑ひ。

「どうもこれは理詰めでげすな。」と瓦樂さん。瘦せた膝を前こごみにしてへこたれた。

「理詰めでしよう。」と、奥さまは濃い長い睫毛をあげた。丸髷がとても重さう。「みとや！ あの、瓦樂さんが、お風呂をお召しになるんだよ。」聲はどうしても三十代だ。しかし透るいゝ聲だ。

この奥さまと云ふのは、姓はしばらく預つて置くが、名はお種さんと申し上げる。吉原のある大見世の養女で、某子爵とかの第二夫人。しかし今ではその子爵さまは御老體ゆえ、この別莊へは引き續きお運びにならず、ことにこの夏は關西の方に御轉地。お種奥さまは、空閨を守る（？）こと、既に一年。お女中の、みとやと、お猫の、玉やと三人で、淋しいお住ひ。たまにかうして伺ふのは、今井瓦樂のみ（？）とある。

かれは高輪の道具屋さんだ。この別莊へは多年のお出入り。お種さんを堀り出したのもこの男で、子爵さまのお覺えは、かるが故に、目出たい。しかし實は、お種さんが、京町のその見世の女であつた頃からの關り合ひ（？）ださうだから、かの女の身元はこの男にきけばわかる。

お種奥さまは、素肌の上に浴衣がけで、素足にお庭下駄を、おひつかけなすつて、しばらくの間を縁先きで、川風にまた、その赤い耳朶をなぶらせる。植込みの松の根に赤い蟹の這ひ出る庭。大水鉢に咲いた紅蓮は眞ツ盛り。玉やは飛び石の冷たい上にぐつたりと伸びてゐる。

ところが、この純日本式の奥さまが、巴里歸り！なんだから驚く。それは外でもない。遂ひこの三年前まで、子爵さまのお伴をして、あちらに行つてゐたのである。女中のみとやも奥さまのお伴をして、やつぱり、あちらに行つてゐた。玉やはあちらのお猫ださうだ。だから、「こちらさまでは、皆さん、あちらにゐらしつたので、」と瓦樂さんは、なんぞと云ふと、それを持ち出す。流石の道具屋さんも、少しく胸が浮いたものだと見える。胸にも良心があるらしい。

燈籠流しには、まだ暮れきらぬ川の面を、ぼんやりと眺めながら、もう蚊がでるか、時々、團扇の音を立てゝ、しかし、お種奥さまは、何かから考へてゐるやうである。みとやはそとのお座敷へ朱檀のチヤブ台を出し、夏の坐布團を揃へ、蚊やり線香に火を點じ、金口銀口の卷煙草の函の蓋を裏返へして、道具屋さ

んの出て來るのを待つてゐる。みとやは廿四五。これも女中とは見えぬ程の美人ではあるが、とても、奥さまの比ではない。

赤鬼のやうになつて簾垂の外に佇んだ瓦樂さん。地獄の使ひが御殿女中に逢ひに來たやうな樣子である。

『あの、おみとさん。こゝへ脱いで置きましたわたくしの着物はどこへ行きましてげしやう？』と、きまりわるさうに顏を出した。

『お召し物は、奥さまがどこかへおしまひになりましたよ。このお暑いのに、あなた、あれを、またお召しになるのですか？』と、みとやの返事だ。主從心を合はされては、かれは、地獄へ歸るより外はあるまい。

やつと浴衣を借り受けて、子爵さまのする縮緬のへこ帶で、かれはチヤブ台の前へ坐つた。洗ひが出る、御酒が出る。煙草の煙はうす青く扇風器の風に流れる。花火の遠音。燈籠流しも程なく見えやう。みとやのお酌で、奥さまと差し向ひ。追々には十八番の、松しまや、嵯峨やおむろも開けやうと云ふのだから、道具屋さん、今井瓦樂、こゝ一刻千金と云ふところである。だが話の糸口は、あらぬ方から綻びた。

『あたし、いよいよ首になりさうなのよ。この間も、お留守居の山田さんがいらしつて、今までは、わたしの體は髮一と筋でも殿さまのもの、ほかの男には後ろ指ひとつさゝせはしなかつたが、もう、どうなりと、わたしの勝手に身の振り方をつけるがいゝ。今すぐにと云ふのではないが。と、おつしやるのですもの。ねエ、みとや！おまへも聞いてたらう？わたしその場で泣いちまつたんですよ。』と、それにしてもお種の方。ちつともしよげた樣子はない。

『して見ますると、なんでげすか、奥さまのお體には、さう申しては失禮でございますが、もう誰が、さはつても、いゝと云ふわけでございますな。』さすがは瓦樂さん。商賣にぬかりはない。

『たゞ道具屋さんだけには、さはらしちやア、いけないんですつて。』と、みとやは、わきから、然るべきラインを限つた。

『へゝえ、どうもこれは恐れ入りました。そのなんでげすな。さう致しまするとこの先、どうなさるお考へで？』と、かれは、でも、心配さうに、布團の前へ、ずり落ちた。

『わたし、また、あちらへ行かうと思ふのよ。みとやをつれて。』奥さまは放げだすやうな調子でいつた。

『お二人ツきりでですか？』と、かれは危ぶんだ。この奥さまの腹の底の見えぬやうなかれでもないが……

『あたし、あの下津を連れて行くことに、もう、きめました

の。あれならば、あたしたちと一緒に、あちらにも長いことゐましたし。それに、みとやの仲よしだから。」と、かの女は、はしやいで語つた。

『あら奥さまお人が惡い。仲よしはおかどちがひでございましやう？』と、みとやは、とんだ濡れぎぬは御免とある。

『でも、』と、瓦樂さんは遮ぎつた。『あれはお邸の書生さんでげしよう。して見ますれば、あなたがたとへ御自由のお體になつたとしても、それ幸ひに殿さまの御恩を仇でお返しになるやうなことをなされては、第一、後々のおために宜しく御座いますまい。』御酒の加減が云はせる言葉と云ふものは、どうも大變、大時代なものであると、奥さまはあきれ返つて聞いてゐた。

『質はね！わたし、この寄を――これはわたしの名義なのよ――特別に、あなたの手で賣らして上げたいと思ふんですが、すばらしい値に賣らなくちやア駄目よ。』奥さまは首の破產者だ。まごついてる時でない。

『せ、せいぐくふ、ふんぱつして、賣つて御覽に入れますでげしよう。』瓦樂さん、醉顏朦朧としちやつた。

『寄が賣れたら、道具はあなたのお望み次第。たんと買はして上げますよ。』奥さまのスマイルは、全く濃艶そのものだつた。

この奥さまは、良心の競り賣りだ。

投稿規定

一、投稿は今後書留郵便にて送附されたし。尙返信用書留郵券を必ず封入の事。此規定に反して萬一紛失したる場合あるも本社はその責に任ぜず。

一、投稿は「中央公論編輯部、投稿係」宛に郵送されたし。その場合必ず「中央公論原稿」と傍書ありたき事。個人に宛てゝ發送せらるゝは差支なきも一度は必ず係の手に渡るものなれば直接係に送らるゝ方便利です。尙個人の私宅に宛てゝ送らるゝ事は絶對にお斷りします。

遺書より關心事

小島政二郎

今まで目にした遺書のうちで、一番氣に入つたのは、正岡子規のだ。それの載つた本が、今手許にないから正確なことは分らないが、何でも戒名なんか附けてくれるな、お通夜も、しめやかにしずに、賑かに、いつも自分の枕許で談論風發する時のやうに、賑かにやつて貰ひたい、と云つたやうなことが書かれてゐた——と覺えてゐる。今度の芥川さんの遺言の中にも、戒名を附けてくれるなと云ふことが書いてあつたやうに聞いてゐる。昔は知らず、今では實際戒名なんてものは、我々の感情とは縁遠いものになつてしまつた。

森鷗外にも、お墓には「森林太郎墓」とだけ中村不折氏に書いてもらへといふ遺言があつた。向島の興福寺へ行くと、稍青みを帶びたガッシリした石に、その通り刻んである。忌日におまゐりすると、盛夏の荒涼たる燒跡の墓地に、孔雀草があらあらしく縱橫に伸び切り、黃に黑點を打つた、どこか乾いた感じのする花瓣を、目にきたなく、猛烈な勢で所嫌はず押し開いてゐる。しかし、鷗外には戒名がないのではない。自撰の戒名がちやんと附けてある。戒名自撰などは、几帳面過ぎるくらゐ几帳面な鷗外の性格を如實に語つてゐるではないか。

紅葉の墓にも、巖谷一六の筆で、「尾崎德太郎之墓」とだけ書いて、別の石に、「死なば秋露の干ぬ間ぞおもしろき」といふ辭世の句が刻んである。が、これにも「彩文院紅葉日崇居士」といふ戒名が立派にある。だから、文壇で、墓碣通り戒名を拒絕したのは、明治で子規、昭和で澄江堂の二人であらう。私も、若し遺書を書くなら、第一條はこの顰みに倣はうと思ふ。ついで

に、芥川さんには墓の設計まで書き殘してあつた。百ケ日までには、染井の慈眼寺の墓域に、故人お註文通りの墓碑が立つ筈だ。因に、慈眼寺は、潤一郎谷崎家の菩提所でもあるのだ。浦里時次郎の比翼塚も殘つてゐる。

そこの本堂で、お骨上げの日、芥川さんのお母さんと伯母さんとから、

「あれはよく冗談に、俺はウンと暑い日に死んでやるんだツて云つてましたんですよ。どうして？と聞くと、暑い／＼ツて會葬者が大難儀をするところを、棺の中から見てゐてやるんだツて……。さういふ皮肉家さんなんですからね。」といふ話を聞いた。全くその日は暑い日だつた。

一般的に遺書の話をするつもりが、お墓の話や芥川さんの話になつてしまつた。御免なさい。

本當を云ふと、私はまだ遺書といふものを見た經驗がないのだ。鷗外先生の時も、賀古鶴所氏を通して、お墓のことゝ、全集の印税の分配のこととを聞いただけだつた。今度の芥川さんの場合にも、「或舊友に送る手記」と「或阿呆の一生」とを許されて見たゞけだ。この二つを私は遺書とは思つてゐない。共に、藝術の作品として見るべきだと思つてゐる。あとの實際的な遺書については、何も知らない。唯聞いて差支のないことだけを、一つ二つ聞かされてゐるに過ぎない。だから、遺書を見た時の感じ其他については何も語る資格がないのだ。

唯お前も死ぬ時には遺書を書くかどうかと聞かれるなら、芥川さんの遺書を見るまでは、私は遺書は書かないつもりだつた。去年そんな話が出た時、私がさういふつもりを話したら、芥川さんも賛成して

「死んでまで、自分の意志で、あとに殘つた者の自由を束縛するなんて大覓杯だよ。」と云つてくれた。が、誤解してくれては困る。かういふ一場の座談をトツコに、故人の言行不一致を私は指摘しようと云ふのでは毛頭ない。そんな氣は鵜の毛ほどもない。この故人の意見が、よし座談でなくつて立派に書き殘されたものであつても、私は寧ろこの言行不一致の方を、最も人間的な現れとして愛する。まして芥川さんのは尋常の死ではないのだから、遺書のあるのが當然である。それを後に殘つた者の側から云ふと、遺書のあつた方が、いつまでも――肉體が燒かれて土の下に消えてなくなつてしまつても、いつまでも故人と我々との間に感情の疏通があるやうな氣がして、脈々として仄に殘るものがあつていゝことを初めて發見した。そんなことなら、私も遺書を書かうかしら。

それにつけて思ひ出すのは、里見さんが作品の中で二ケ所ほ

とで觸れてゐる、あとに殘る親友や親戚の、遺族に對する心遣ひに關する一文だ。どうか遺族を頼む、しかし望むところは、遺族があなた方に進んで相談を持ち掛けて行く時以外は、打ッちやつて置いてくれ、忠告も力添へも何もしてくれるな、遺族を遺族の思ひのまゝに生活さしてくれ、それが一番有難い親切だ、その代り、若し相談に行つたら、智慧を借りに行つたら、力添へを頼みに行つたら、その時は、出來るだけ相談に乘つてやつて貰ひたい。――これが、作品の中の人物が云つてゐることではあるが、やがては里見さんの覺悟だと私は信じてゐる。遺書を書くなら、それまでに、私も眞似でなしに、これだけの腹をシツカリ極めて置きたいものだ。

しかし、實を云ふと、私には遺書の問題よりも、死ぬ時の覺悟の方がより關心事だ。正岡子規の說によると、禪の悟りといふのは、いつでも平氣で死ねる覺悟かと思つてゐたら、さうではなくて、どんな時でも平氣で生きてゐられる覺悟だつたと云つてゐるが、それとは事變り、私は死ぬ時、まはりの者から「大丈夫、死にやァしない〳〵」と嘘を吐かれて死にたくない。端の氣はひで、大抵は感じるつもりだが、さうでもない、死病に取ッつかれた者に限つて、容易に死を自覺しないと云ふから、今のうちから親しい友達だけには「本當のことを云つてくれ」と頼んである。最後のドタン場で、上田敏のやうに、病氣の騙し討に逢ふのは一番いやだ。ちやんと死を知つて、逢ひたい人には逢ひ、從容として死に就きたい。

正直に云つて、今の私には遺書よりもこの事の方が關心事だ。問題外を云つて濟みません。

遺書の技巧美

上司小劍

私が若し、自殺するやうなことがあると假定して、遺書なぞは決して作らないつもりである。自殺といふ棄鉢な行動をとる以上、あとは野となれ山となれ、である。自分の志を書きのこして何かせんと、私は思つてゐる。しかし其の場になれば、またどう氣が變つて、三善淸行の意見封事の如き大文章を書かうとする心になるかも知れないが、かうやつて無事に生きてゐて、自殺を空想すると、遺書なぞはいやだと思ふ。

しかし、立派に遺書を作つて、段どりよく自殺を遂げた人の志に對しては、十分の同情と敬意とを寄せる。さうして、かく

まで現世に執着しながら、何故生きられるだけ生きなかつたかといふ一種の怨みに到着する。成るだけ美しく死んで行かうとする人の心の現はれが遺書といふものであらう。即ち現世に執着することのいかに強いかを示すものである。

私は幼時、加賀見山の芝居で、奥女中尾上が行燈の影で書くかきおきのくだりを見て、どうしても生きてはゐられない美しい女性の哀はれさに、涙を催したことがある。今ならづうづうしくなつてゐるから、あんなもの見たつて何んとも思はないが、其の時はスツカリ鼻を詰まらせてしまつた。美しい人、美しい死、美しい書置。私の幼い頭はたゞもう死の美感に酔つてしまつたのだつた。其の後の場のだんまりで、武士や奴や侍女等の引ツ張り合ふ文箱の紐が解け、蓋がとれて、中から現はれた封じ文の表書をば、折柄雲間を漏れた月の光りに見て、『書置の事』と叫んだ人の裂帛の聲。遺書といふものが、どこまで美化されるかわからない。

私も女だつたら、……幼い私は其の時さう思つて、尾上といふ美人を懐かしんだのであつた。自殺といふことは、女でなければするものでないと、單純な私の頭は、さう考へたのである。あゝやつて死んでしまへば、尾上といふ女は永久に若い、永久に美しい。穢くちやになつた醜いお婆アさんの尾上なぞは、想像するものもない。可哀さうなやうではあるが、尾上はよいことをした。實に／＼美しい死に方をした。と私はつく／＼感心して、加賀見山といふあの芝居が尾上といふ美人の死を更らに美化するために作られたものだとすら思つた。

それは村芝居で、俳優は播磨役者といふ旅の一行であつた秋の收穫の濟んだ後、毎年村では小屋がけの芝居があつて、場所は私の家のある神社の境内に、お旅所と稱する一宇の建物を中心にして設けられるのであつた。一年其の尾上岩藤の芝居が終つて數日の後、私が丁度樂屋になつてゐたあたりで遊んでゐると、あと片付けに來てゐた大工が、『坊んち、坊んち』と私を呼んで、『これが尾上の書置だッせ、あはゝゝ』と高笑ひしながら、穢くちやになつた卷紙を見せた。あゝアあの美しい遺書かと、私は其の夜の美しかつた死の情景を小さい胸に再現させて、慄へる手で大工から尾上の書置なるものをとつて見ると、先づ初めに『書置の事』と、これだけはほんたうに書いてあつたが、其の次ぎにはすぐ『酒一升』と下手な字でのたくり、『飲みたいなア、あばゝ』だとか、『あのあほ何してけつかる』とか、小學二年の私にも讀める出たらめばかりが、長々と書きつらねてあつた。しまひの方へ行くと讀めても私には意味のわからぬことがいくつもあつたが、それは、今から考へると、猥褻

きはさる文句だつたらしい。

けれども、私は其の出たら目な文句を書き並べた舞臺の上の書置を見せられても、あの尾上の美しい死に對して幻滅を感ずることはなかつた。さうして、今になつて考へると、尾上の技巧的な死に方にはあまり感心もしないが、舞臺の上で出たら目の書置を作つて自殺の眞似をしながら村々の小屋がけ芝居を打つて廻はつてゐた哀れな旅役者の生き方に同情することが深い。世間には死に同情する半分も生に同情しないものがある。

其の翌年、同じ村芝居で忠臣藏を見たが、判官の切腹は前年の尾上が死ほどに美しさを感じなかつた。たゞ自殺とは女だけのするものと思つてゐた幼心に、男もやツぱりやるのかと感じただけであつた。勘平切腹にも同じく尾上の死ほどの美を感じなかつた。さうしてこの二つの死には書置のないのを物足りなく思つた。それから十二三歳の頃山陽文集を讀んで、『節女阿正』といふ一文に、自殺と遺書との美を發見し、自殺はやはり女の領分だといふやうに考へた。山陽の文飾もあるであらうが、お正の自殺は可なり技巧的の美しさをもつてゐる。それに年が十八だといふのだからたまらない。あの一文を讀んだ人は知つてゐることだが、お正は長州赤間ケ關の近くの農家の娘で、許嫁の男があるのに親が其の許嫁を破つて他の男に嫁げと強ひたため、牛部屋に入つて赤い扱帶でしツかと膝をくゝり、出刃庖丁で胸を刺して自殺したのであつた。遺書二通、其の一通は兩親へ、他の一通は許嫁の男嘉右衛門へ宛てたもの、『御身と既に穴隙を鑽つたやうに言はれるのが心外である。二人の間の清淨潔白なことは御身の知るとほりである。私はたゞ御身に對する義理を重んじて死ぬのだ』といふあたり、貞操心の強い、愛情の深い、處女のいぢらしさが現はれて、私の見た遺書といふ遺書のうちでは、これに一ばん感動させられた。しかし、それも昔しのこと、殊に原文を見ないで、山陽の漢文によつたのだから、ほんたうのことはわからない。たゞ十二三歳の少年が、十八歳の處女の死を讃美したといふ記憶だけが、ぼんやり殘つてゐるに過ぎない。

遺書といふ課題は、最近芥川氏の死から思ひ付かれたものであらう。私は芥川氏のさつぱりとした死にかたと、往年正岡子規氏の根強かつた生きかたとを比べて考へてゐる。二人とも行年三十六歳。

非凡人と凡人の遺書

岡本一平

牛や魚は死ぬ時遺言しない。鳥や松の木も死ぬ時遺言しない。遺言するのは人間だけである。死ぬ時自分以外に他あるを顧みて其處に何か責任上の一言を遺して置く。これ人間が萬物の靈長たる由緣であらう。

毎年正月元日に筆を改めて遺言狀を書き直すといふ用意周到の人が僕の知つてる範圍で二人ある。然も二人共可成り永生きの方なので何通書き直したか判らぬ。年々そう書き直す必要があるだらうかと訊いたら一人は『葬儀車だつて年々進化するだらう?』一人は『年々遺言狀の思想が舊くなつて行くから』といつた。二人共遺言狀を書く眞劍さを用ゐて自分の魂をあらため驗るのだつた。中々ずるい。

禪の方で遺言の詩を遺偈といふのだがこれには大概型がある。生涯の間、一秒間も三昧から外れた事も無く一生涯も一爪彈きの間も同じだつた、と自分の悟境を述べたものがその一である。徒に眠り徒に食ひ戯れの世の中を戯れに終つたと自嘲めく口調で述べたものがその一である。自嘲めくとは雖もやはりその裏に悟の心境を誇示してゐる事は勿論である。もう一つは死の世界に入つて行く態度を示したものである。地獄も天堂も總に踏み破り去らんといふやうな調子のものである。

右からみるとずつと離れて、全く凡夫の心に立踏つて遺偈を示した例もある。近世では釋宗演氏なぞがそうである。『死に度く無い〱』といつて死んで行く臨終の仕方である。これも幾多の前例はあるが可成り洒脫のものとみられて居る。

桃水和尚は凡夫に如同する事に於て可成り垢脱けしたところまで行つたがそれでも臨終に隣卒風清月白とか何とかいふ遺偈を遺し片鱗を露してる。

遺言といふとすぐ芭蕉が門下に遺言の句を訊かれて平常の句みな遺言の句にあらざるなしといつたのを思ひ出すが前掲數項の遺言の仕方やこの詩人の遺言に對する態度やはあまり立優り

過ぎ杵柄間過ぎてわれ等にはピツタり來ない。

死に際には病苦や人生に對する愛惜の念やでわれ等凡人はとんだ考になつたり逆に反抗的に氣取つて見たりしてとても本當の事は述べられまいと思ふ。よつて平常死後の事は洗ひざらひ喋つてしまつて置く方がよいと思ふ。そして死病にかゝつた後にいふ事は取り上げないやうに近親に頼んで置くのがよいと思ふ。

遺言といふと却つて改つた氣になつて考への平度を失ひはしまひかと思ふ。

死ぬ人でよく家の家憲を定めたりなどしてその爲め家といふ形骸は遺命の力で何代か保つか知れないが家の内容の人間の生命は試錬される機會が少なくなり死物になる事が多い。これは家憲を定めるより人憲を定めた方がいゝ。先祖の中で自分は家系中の巨石だと信じた人は自分の善惡兩面の體驗を書き遺し子孫の實力生活の參考にするがよい。

凡人としてはそう遺言はくどくあるものではないと思ふ。自分で自覺して書き遺す程の生活も思想も持たなかつたし、子孫を導く程のそれも持つてゐるとは自信出來ないし、自分の生涯に於ての人世に對する感想のやうなものも大概誰かゞいつて呉れてるものの中に入るだらうし――

まあ身の廻りの捌きに就て家族に少し説明して置けば一人前の責任は濟むと思ふ。

死ぬる人々

小杉放庵

夭折の故人、青木繁が、東京へ出て來て、始めて淺草觀音へ詣る、と、國に居て夢に見た御堂の内部、ソツタリと目の前にあつたので、驚いたと云つたことがあるが、それとも違つて、や、此の一場の光景は、曾て見たこと、接したことがある、たしかにある。此の部屋乃至此の風景、此の人、あの人、位置、氣分、前生であつたか、去年であつたか、ともかく確かに二度目の事だ、と思ふ場合が時々ある。己れ獨りの幻象かと思ふと、他人もその如き經驗ありと云ふもある。その如き場面が、又も

現はれた、と一時強く心を打つたのは、芥川龍之介君葬式の時、菊池氏が靈前で弔詞を讀んだ。そして半ばにして泣きじやくりとなる、會中の婦人連鼻をすゝる、二三十秒の間、二十年の前、青山靈場で、國木田獨歩を葬る、田山花袋老が弔詞を讀む、半ばにして泣きじやくりとなる、會中の婦人鼻をすゝる、その昔の光景が忽然として、昭和二年に蘇つたと思つた。尤も坊さんは大正二年と引導の文の終りに讀んで、クスリと笑はせたが、あの日は馬鹿暑い日で、ちとのぼせ氣味の處、余りよく似た光景で、過去の印象と、ゴッチヤになつたであらう。すぐに又氣を取り直して、つら〳〵と思へば、獨歩龍之介逝去の年頃も相似たもの、同じやうに目から鼻へ拔ける才氣、奥さんの風采も共通點あり、子供衆の年頃も同じ頃、さて又、龍之介、獨歩、と連想し來れば、勢ひ寬、花袋と續けざるを得ず、年を取れば、と云つてもさまでの老人とも思はぬが、先づ人生五十近くなれば、いろいろの物を見るものかなと、憮然とする。

獨歩は病床に於て、已れの病は、どうで永くは生きさせぬ、近いうちに死ぬると思ふが、どうも此の、死、と云ふものが、ハッキリと現前しない、死をひたと見て死にたいものだ、と云つて居たが、芥川君の遺書と云ふを讀めば又、そこに死と相對して居る人を感ぜず、消えてしまふ人を感ぜず、旅客の一國より一國に移らんとする用意の如きを感ずる。尤も、あちらの一國は冥漠として測りがたいが、ともかく移動を感じて、消失を感ぜざるを、おもしろく思ふ。いや、文章の句々について、さやうに解釋するでなく、その如き感じを受けたと云ふだけの話、文章に到つては、世間さすがは龍之介の名文だと賞める向きもあつたが、私の見た處では、いつもの如くに跡始末がチヤンと屆いて居ぬやうで、ちと捕捉しがたく、一命を絕つ藥を前に置いての作文故、さうもあらうか、そこらが龍之介君の人間味のある處、と思つた。

芥川君の死の數日前に、沼波瓊音君が、りんぱ腺肉腫と云ふもので果てた、獨歩の死んだ時は、沼波君は新聞記者をして居て、大の獨歩崇拜、何年何月何日に國木田獨歩死す、是れ大いなる事實也、と云ふやうな冒頭で、一段も其余も書いた。編輯の方で小言が出たと云ふ話もある。沼波君は傾きやすく熱する質で、學校教師から俳人、記者、俳人、見神、傳道、それから又俳人國學者、學校教師、晩年は國士となつて、怪文書に交渉し、青年を集めて右傾的精神を鼓舞する、只一念の理想から動く故、人を容れがたく、世に受けられがたき姿、右傾の運動も、實行方面に何處まで進み得たか、訝かしいが、死に臨んで、さまざま遺言あり、葬送の形式まで定めて置いた、墓は小杉と話し合つ

である、銀杏の木を植えてくれる約束、と云つたさうだが、コチラは一向覺えず、そんな話もあつたらうが忘れて居たと云へば、大飯を喰つて、いつまでも活きて行くやうな奴は、困つたもんだと、骨になつて小言を云ふであらう。ともかく銀杏はおもしろき思ひ付、秋には是非一本植えに行かうと考へて居る。

芥川、沼波兩箇の死によつて、私の相往來する文友は殆んど盡きた。繪師の友は皆丈夫で、年長なるも年少なるも、皆此ままで相當の齡まで歩いて行きさうに思はれる。造形美術は、心を傷むる事少きか、情を慰むる事多きか、うまく仕事が運べば、筆の下に出來上つて行く。繪そのものに浮かれて來る、其人として失敗の作でない限り、繪は見るものより作るものの慰めとなる事多からう。原稿紙上に字を書いたでは、此の造形的工作的愉樂は少ないであらう。文徵山は九十にして神明衰（おとろ）へず、北齋鐵齋は八十を越して、ますます達者な筆を揮ふ。繪は手工の熟練大事故、相當の年功をかけずば身心一致に行かず、文學と美術の年齢制限、現役豫備の別れ目は、一二十年の差あるかも知れぬ。此の間去る處で、二三人集まつて、自殺の話が出て、畫家の自殺者を擧げて見んとしたが、皆々當坐に思ひつかず、美術學校の入學試驗に落第して、藥を仰いだのが一人あつた話、是はまだ美術家とは行かぬであらう。

夭折の天才畫家と云はれた、村山槐多青年は、肺を病んで、自身も永くはないと思ひ、それこれでヤケになり、上總の海へ行き、ならぬと云はれた酒、正宗の壜詰めを抱いて、折ふし干潮の遠い磯の上に登る、そこで酒をのみ、出來るかぎり恣（ほしい）まゝにふるまつて、潮が來たらそのまゝにならうとしたが、潮が來て見れば、あやにくに泳ぎの選手で、結句岸で見付けて手に汗を握る人々の處へ、拔手を切つて歸つて來た。其後一度、惡醉をして拙宅にころげ込んで、四顚八倒をなす、何を呑んだと問くと、しやれ頭で呑んだと云ふ。すぐさま彼の、しやれかうべを逆さまにして酒を注いでのんだ事と思ひ、頭の皿の中に何があらうが、委細かまはず傾けたらう、飽くまで命を疎末にする男だと、小腹を立てたが、何の、あとで聞けば、しやれかうべを曲げた金で酒を買つたと云ふ、ともかく保險率のあぶない性分、落付いて呉れゝばいゝが、と知つた限りの人に思はせて居たが、いくばくもなく、郊外に獨居して放恣な自然生活の裡に終つた。雪夜に友人を訪はんとして、道に凍えて、あくる朝見出されてから息を引取つた。病體にしてあばれ酒はのむ、養生はせず、先づ是などは緩漫な自殺法としてもよいか知れぬ。死ぬる前に記した文章の中には、遺書めいた書きぶりのものも見えたとの話。

自分の遺書──芥川君の遺書

廣津和郎

自分は未だ自分の遺書といふことについて考へたことがない。といふよりも、自分は自分が自殺するといふ事について考へた事がないといふ方が、一層適切な云ひ方かも知れない。と云つて、自殺を一遍も考へた事がないと云ひ切るのは、多少の誇張かも知れない。一度は十九の時、これは年頃の青年にあり勝な神秘的厭世觀のために、それからもう一度は二十五から二十六七頃、これは自分が女の事で失敗して、極度の自己嫌惡に陷つたため──後者の場合は比較的長くつゞいた。二三年間は時々自殺といふ氣持が動いて困つた。もつとも、それが女の事で失敗したためだと云ふ事に、その動機をきめてしまふのは、或は解釋が簡單に過ぎるかも知れないとも思ふが。──併しそれも重要な動機の一つとなつて、自分は始終生活否定の氣分に苦しめられてゐたと云ふだけは云ひ切る事が出來る。

けれども、三十を過ぎてからは、自分はそんな事は一度も考へたことがない。

芥川君の自殺する一ヶ月ほど前、自分は彼と「自殺」について語つた時も、自分は彼に向つて「自分は自殺を一度も考へたことがない」と云つた。彼は「それは不思議だ、僕は始終考へる」と云つた。──自分はその時も、彼に向つて次のやうに云つたと記憶してゐる。自分は自分が死んだ場合に、自分の親しいもの達が、それによつてどんな淋しみを受けるかを想像するとやり切れない。そこで自分は最後まで生き殘つて、みんなの死から受ける淋しみを自分がこらへてやらなければならないやうな義務を感ずる、と。

これは自分の强がりでもあれば、自惚れでもあるかも知れない。併し自分が死んで自分の遺族が淋しさに堪へるよりは、自分が最後まで生殘つて、總ての死の淋しみを自分が堪へるといふ想像の方が、自分には辛くない氣がする。──この考へは二十歳頃から自分に浮んで來た考だが、それが年々强くなつて行く。

自分は自分自身の動機では、最早自分を殺す氣にはならない。それだから、自分は自分の遺書といふ事については、何も考へたことがない。

○

自分が芥川君の遺書を讀んで感じた事は、彼の潔癖が、暗

さ』『陰惨』と云つたやうな、遺書に有り勝な感じを、少しも殘してゐない事だ。彼はそれを嫌つたに違ひない。それぱかりでなく、彼は彼が生前よく口にしたあの諧謔と同じ諧謔を、彼の遺書の中でも連發してゐる。――徹頭徹尾都會人である彼は死に對する原始的恐怖を、理智の力の前に見事に屈服させてしまつてゐる。

多分のいたづら氣までが。あの文字と文字との間には仄見える。自分の棺桶に花火を仕掛けて置いた茶氣――彼にもそれに似たものが見えないではない。

併し單なる遺書といふよりは、多分に、創作的冷靜を以て書かれた『或る舊友に送る手記』の前半は、彼の他の創作と較べて、さう上出來の部類ではない。自分はあの中に彼の冷靜な、計畫的自殺を讀んで、驚異を感じはするが、併しあの文章そのものは、彼の他の文章よりも優れてゐるものとは云ひ難い。――昨年の末から計畫されてゐた自殺準備のいろいろの事實は、彼の遺書よりももつと深いものであり、彼の遺書よりももつと透徹した感じを與へるものであるといふ氣がする。

唯自分があの『或る舊友に送る手記』の中で、深い感動を與へられたのは、後半殊に最後の自然の美しさを說いてゐるところであつた。

『ただ自然はかういふ僕にはいつもより一層美しい。君は自然の美しさを愛し、しかも自殺しようといふ僕の矛盾を笑ふであらう。けれども自然の美しいのは、僕の末期の眼に映るからである』、

自分はこの一節に深く引き入られた。さぞさうであつたらうと思ふ。彼は自然ばかりでなく、死期の近づきと共に、新しい眼で人生の諸現象を改めて見直したに違ひない。彼が賣笑婦の貨錢について、今更に人が『生きるために生きて』行く事の憐れさを痛感したのも、その死期を前にしての一種の新鮮な心眼に、それをしたために違ひない。彼があらゆる人々に深切になり、諧謔になつてゐたのも、殊に病氣の宇野浩二を、有らゆる努力を以て看護したのも、その死を前にしての、透徹した心眼が、總ての事を新しく懐しみ、新しく愛したために違ひない。『僕は他人より見、愛し、かつ又理解した、それだけは苦しみを重ねて中にも、僕には滿足である』と彼は云つてゐる。

自分は彼のさういふ言葉がそつくり解ると思ふ。自分は美しい、曇りなき明鏡を想像する。

自分は彼がその短い生涯の終りに、達すべきところに達してゐた事を思ひ、彼に對する愛惜と敬意とを覺える。――彼は彼の生き方で、十分生き切つたのかも知れないと思ふ。(八・九)

鷗外漁史そのほか

犬養健

○千朶山房

僕は漱石山房とは六町と離れてゐない處に二十年近く住んでゐながら、たうとうその玄關の蔦に隠れた呼鈴を押さずじまひになつてしまつた。その癖、僕の家からはるかに離れてをり、その上漱石山人の著書のほとんどすべてを當時讀破してゐたにくらべては、その作品についても知るところのずつと少なかつた鷗外漁史には、偶然の機會からお目にかゝつてゐる。まつたく明日青山を見るか白雲を見るか、誰にも分らない。

かういふ事をふと書いて見てゐるといふのは、僕がいま蜩の聲の下で、蚊柱のほとりで、浴衣一枚の暑さをさへかこちながら、この兩大家の著書をほとんど二三年振りに繙いてゐるからである。そして、その在世中にもつと接して置けばよかつたといふ心持は、つひにお目にかゝらなかつた漱石山人についても、一度千朶山房へあがる機會を得た鷗外漁史についても變りはない。明治の文人中先生と呼んでも僕の內の「青年」が負け惜しみを感じないのは、まづ此二家なのだけだから。

夏目先生に就ては、その風格がこの頃でもしきりに懷かしい。十年前僕はよく、あのまばらな生垣から先生の書齋を覗いて、あすこには山の湖水の靜かさのやうな靜かさがあると考へた。漱石山房に就いて記した芥川氏の隨筆などを讀むと、僕は時々嫉妬のやうなものを感じる。それから森先生に就いてはその旺んな——火花のごとき才氣煥發に惹きつけられる。（鷗外漁史に今更このやうな形容を使ふのは非禮に近いかも知れないが、あの相貌に接したものは誰しも第一印象としてさう思ふで

あらう。）また之の文章の持つ一種の質にきれいな發音に惹きつけられる。開きなほつた批評を別として、あのやうにきれいな、眞水で洗つたばかりとも云ひたい發音を持つた言文一致體は森先生のほかに見る事は出來ないであらう。（これを疑ふひとはギヨオテ傳を讀むがいゝ。ギヨオテ傳が長すぎると云ふならば、例へば新潮社版の「涓滴」のなかの「花子」といふ小品を讀んで見るといゝ。）

千朶山房へあがつた經緯といふのはかうである。僕はその頃學習院の高等學科にゐて、邦語部（演說部の）委員をしてゐた。これで森先生になにか講演をお願ひしたいと考へたのだ。一つ上級の越前の松平康昌といふのが委員中の先輩であつて、その康昌が幸に木下杢太郎氏を知つてゐるといふ。これで木下氏から鷗外先生にお目にかゝる日取りを伺つて貰つたわけだつた。

蜜柑を見る頃だから、われわれが千朶山房へあがつたのは寒中——たしか正月の中ばであつたらう。しかし康昌がわれわれに振りまいた豫備知識のやうに小さいお孃さんは玄關に出て來られず、書齋へ案內したのはやはり平凡にも書生さんだつた。康昌の話では、七つぐらゐのお孃さんが「こつちよ、こつちよ」と云つて廊下を先に立つて下さるといふことであつたが。——これが僕たちの學生らしいロマンティシズムに多少の不滿を與へた。

僕はよく覺えてゐる。先生の書齋は西向きに床間があつて南北ともに緣側になつてゐる十疊ほどの室だつた。南北ともに障子でその外に硝子戸がはまつてゐるといふのが、早稻田にあつた僕の家の廣間と同じ構造なので頭に殘つたのである。その室にあるじは實に血色のいゝ、くりくりと肉の出た頰を見せて座つて居られた。想像のほかに愛想がよく、始終眼尻に皺を寄せて笑つて居られた。先生に「あそび」「獨身」などといふ作があるが、それらの「絕えず晴々とした顏」を見せてゐる主人公は先生の風貌その儘である。しかし無論好々爺といふ樣子ではない。精力あり餘つての笑顏である。明快に應對しながら時々ぴくりぴくり釣りあげる眉の勢がそれを語つてゐる。「昔ならば（かういふ場合に）すぐ喧嘩を買つたのである」などと、何かの自叙的作品のなかに、その作の主人公を描寫してあるが、成程目のあたりの先生を見るとさうであつたらうと思はれる。絕倫の精力が喧嘩を買はないで居られぬ場合があつたに違ひない。——兎も角も尋常一樣の風貌ではない。芥川氏の用語を借りれば、本當に「神彩ありといふべき」である。

しかし正直に云へば僕が鷗外漁史のその面構を敬慕しはじめ

たのはごく最近の事である。生活力の豐富さを貪る氣持になつた此頃、僕は十年前に見た森先生が段々好きになり出した。その博覧強記に就ては少年の昔から聞かされてゐる。今更問題ではない。たゞあの滿ち溢れた精氣に注目しはじめたのは、同じ滿ち溢れた精氣に對する要求が自分にとつて切になつてからの事であつた。森先生が陸軍省に通はれた頃、或時どうも顏色がはつきりせず、平常と變りなく執務しては居るがあまり度々厠へ通はれるので、同僚が先生の用を足した後を覗いて見ると、夥しい血便だつたといふ話がある。鷗外漁史らしい逸話だ。それでもあの千朶山房のあるじはやはり「遊ぶ」がごとくに與類をさつさと片づけて居られたに違ひない。——

しかし前にも云つたとほり、このやうな、殆んど過度の健康さの魅力を、當時の生半可な僕はあまり解してはゐなかつた。それで僕は、自分の高等學校生徒的ロマンティシズムの尺度で推しはかつて、何だか目の前の先生に幻滅を感じた。一代の文人に逢つてゐる心持が少しもしなかつた。そのうへ先生はわれわれを殆んど子供扱ひに——其處へ出て來られた小學に通つてゐるお孃さんと同樣に扱はれた。「君その果物を食べたまへ。ナイフはこゝにありますよ」と云つた工合である。

生憎僕たちは只「遊び」にあがつたのではなかつた。それでしびれの切れかゝつてゐる足を堪らえながら、聞くたびに再三講演のことを懇願してゐた。しかし先生はにこにこして頭から問題にされない。「まあ、それよりか蜜柑を食べたまへ。蜜柑を」

それでも話が外れると、先生は相當に喋べる。こんな風である。

「僕は飜譯ならば、かうやつてゐてもどしどし出來るよ」

（先生の顎には、お孃さんがうしろからぶら下つてゐる。）

「机はまあこんなものだね」

（それはウエブスタアの大辭典ならば、まづ載りきらぬやうな小さい經机である。）

「しかし創作だと、やつぱりこれぢや少し困るね。」（先生の顎はお孃さんの云ふなりに、ブランコのやうに揺れてゐる。）「だからこの頃はあまり書かない。——書かないから僕は偉い先生がたに時々攻撃せられる」

（攻撃せられるといふことが、またそれでよき「遊び相手」であるかのやうな色である。）

それからこんな話も出た。

「獨逸語のうまいといふ人はまた少ないものだね。よく、大家と云はれる人の獨逸語演説を聽いてゐると、きつと一つや二つの間違ひがある」

「わたしは隨分變な本を讀む。(これはエロテイツクな書物といふ意味である。)しかし讀んでも少しも變な氣にならない。」

後年僕はこれを想ひ出して、あまり見縊られたものではないかと遅れ走せに憤慨した。

「君たちは武者小路君や志賀君を學校で知つてゐるの？あの人たちは皆大學を中途でよすね」

(これがいゝともわるいとも言はずに、相變らず眼尻に皺を寄せてゐる。)

そしてわれわれが機を見、又もや勇を鼓して講演を嘆願すると、先生は相變らず、實に面白さうに「まあ蜜柑を、蜜柑を」と揶揄されるのだつた。

先生が用で立つて行かれた時、僕たちは甚く不滿な顏を見せあつた。

「駄目だね」

「駄目だ」

「馬鹿々々しいね」

「馬鹿々々しい。いやに蜜柑をすゝめる」

「ポケツトに入れて歸らうか」

あらゆる寄宿生のやうに、僕たちも衒氣と食料品に對するさもしさとを持ち合せてゐたので、この會話が相當に實感を帶びて語られたものと思つて貰つて差支へない。しかし其處へ先生が「やあ失敬」と云つて襖を開けられたのには、われわれは全く恐縮した。

結局千朶山房への唯一回の訪問はこんな風にして不得要領に終つた。僕たちがいかに幼稚で禮を知らなかつたかは、玄關まで先生に送つて戴いてから、はじめて「さうさう」と云つた調子で、「私は××と申します」「○○と申します」と姓名をお傳へした事でも分る。

われわれは當時「スバル」「三田文學」「白樺」などを愛讀してゐた。アカデミイの名に恥ぢない特殊なアカデミイであつた當時の學習院で、鷗外漁史に講演をお願ひしたいと届け出るには、相當の勇氣が必要であつた。この勇氣がまた幼稚な僕達にとつて一つの快感であつた。しかし先生の前に出ると、「スバル」に就ては片言すら口に出せなかつた。――寧ろ出さないでよかつた。出したとしても、あの蜜柑をすゝめられた具合では滑稽に過ぎたものであらう。

○漱石山房

夏目先生に就ての因緣もまた講演を仲立ちにした因緣であ

る。——喇叭が鳴つて五時半に起されると、寄宿舍の小使がうつり香のする新聞を談話室へ運んで來る。朝の急行列車のなかで紳士が葉卷の匂を最初に樂しむやうに、寮舍の學生のわれわれは新聞のその匂を先づ樂しむのである。それ以上にその新聞に載つてゐる夏目先生の「こゝろ」を樂んだことは言ふまでもない。その同じ寄宿舍で長與善郎氏は「それから」を毎朝欠かさず讀んださうである。——僕たちもまた、光線の差す朝日新聞を前に置いて、「こゝろ」のなかの「先生」と夏目先生との共通點、相違點を論じたりした。

かういふ僕たちが夏目先生に講演をお願ひしようと云ひ出すのは當然だつた。鷗外先生にお頼みにあがつた年の秋であた。——松平議長はなかなか政治家肌の男で、學校への手前、翰林院の榮賞を斥けた夏目先生よりも先づ、文學博士の森先生をお招きする方針をたてたのである。

夏目金之助に講演依頼の事差支なし。

しかし鷗外先生のをりの手際から推して僕たちでは心もとなく思はれたのだらう。今度は邦語部長の岡田（正之）博士自身が漱石山房へ出かけた。「岡田さんはわざわざ、それも長靴をはいて來られました——」と講演の速記にある。ゴムの長靴をはいて質朴鄭重そのものゝやうな岡田博士に先生は厚意を持たれたに違ひない。云ひ違ひたたが速記が見るくらゐだから——[illegible]先生は承知して下さつた。

先生の講演はたしか十一月の中ばであつた。當時の「夏目さん」が來るといふ事は、寄宿舍では一つの大事件であつた。ところが、一番殘念であつていゝ筈の僕は不慮の出來事からその講演を聽くことが出來なくなつた。それは寄宿舍でストオムの少し激しいのをやつて、停學を喰つたからである。

ストオムとは storm である。語學の時間に Carnaval というふ字にぶつかつたので、どんな祭かと質問をすると、「まあ君たちのストオムのやうなものさ」と答へられた。

しかし storm でも謝肉祭（カルナバル）でもそんな事はいゝ。兎に角夏目先生の講演を聽き、先生と言葉をかはし、遊びにあがる許しを得る機會を逸した身の上になつた事に變りはない。僕はよほど圖々しくその日に講堂へ入つて行かうかと考へた。

退屈にも季感のあることを僕に教へたのはその停學といふ近世の刑罰である。先生の講演の當日、僕は何氣なく門の前へ出て、先生はきつとこゝを通つて學校へ行かれるに違ひないと思つた。——そのうちにまた、いや先生は矢來坂下から江戸川をぬけ、椿山莊女子大學の前を通つて目白へ行かれるかも知れないと考へた。——僕はぶら〳〵と帽子もかぶらずに漱石山房の

門前まで行つた。

三分も經たぬうちに轍の音がして、人力に乘つた先生が出て來られた。先生は門のところで車夫に何か注意した。そして車は僕の第二の想像にしたがつて、矢來坂の方向へ折れて行つた。

僕は車の上の横顏を、恐ろしく色のどぎつく黑い人だと思つた。そして僕の印象に誤がなければ、その日の先生は少し不機嫌だつた。

生垣の間から書齋がよく見える。それは凶形の欄干のついた平屋の洋館で、しかし庭一面の木賊、朽ちた趣、靜かさ、影の豐富さ、むしろ支那家屋といつた方が適切に思はれる、さういふ洋館であつた。僕は先生の立つた後、書齋に掃除の音でも起るかと聞き耳を立てゝゐたが無駄だつた。山中の湖水は四六時やはり山中の湖水だつた。

この講演の原稿はいま僕の所藏になつてゐる。それは校友會雜誌に速記錄を載せるので、先生に檢閱を乞ふたところ、われわれの手許に戻つて來たのは薄汚い速記者のそれではなくて、先生自身がすつかり書き替へられた原稿であつた。この事も、いかにも夏目先生らしい。

先生の此草稿を邦語部から貰ひ受けて、僕は講演をうかがふ事の出來なかつた償ひを得た。其原稿紙がまた僕にはなかなか氣に入つてゐる。それはちよつと拙な筆つきの――恰度「こゝろ」の扉繪に見るやうな筆工合の――雙龍の間に「漱石山房」と篆書で記された先生自作の原稿紙で、黄であらはした罫を描く手の、ところどころ故意と震へてゐるのも面白い。先生以後、このやうに原稿紙に凝り性を出した作家は、僕の知つてゐる限りでは佐藤春夫君ひとりであらう、佐藤氏のはやはり大型の黄罫で、ビアズレの版畫がそれを華華しく取り卷いてゐるといふ、大がかりのものである。香水をふりかけたら似合ふやうな原稿紙だ。行文に潔白になつた佐藤氏はあれをもうやめたかも知れない。僕であつたら、それは書き損ふことが氣になりさうなやつだつた。――

この時の講演は「私の個人主義」といふ題目で、勿論漱石全集に入つてゐる。

この講演のあとで、少くとも僕の五人の友だちが先生をお訪ねしてゐる。そのひとりは文學の志望に就て相談にあがつたのだ。その友だちはいま獨逸文學の先生をしてゐる。二人目の友だちは何でお訪ねしたか、今にはつきりしないが、まあやはりそれに近い相談であがつたのだらうと思ふ。この友だちはその

後も度々山房へ遊びにあがるやうになつた。三人目の友だちは柔道家で、しかし讀書家であり、自身の戀愛事件の相談にあがつたのだ。そして四人目と五人目は讀書家といふのではなかつたが、三人目の友だちとは同じ柔道の初段仲間で、恐らく戀愛事件の當人が、ひとりで出かけるのは心細いと云つたのだらうと思ふ。これらの事に就ては「硝子戸の中」に書かれてある。先生がいかに年長者として與へ得るかぎりの親切を僕の五人の友だちに與へられたかゞそれによつても分る。

しかし不幸なことに、僕にはさし當つて先生に相談すべき何ものも持たなかつた。僕は書物好きではあつたが、別にまだ創作をしたこともなく、從つて唯漫然とお訪ねすることはあまり失禮だと考へてゐた。もう一年、もう一年と僕は伸ばしてゐた。その頃の僕はまだ武者小路氏志賀氏長與氏、みな知らずにゐた。

だから先生が亡くなられた時、僕は、たうとうお訪ねすべき理由をこしらへ上げないうちに、機會を逸してしまつたと考へた。漱石山房にごく近い薪屋の息子は現に僕の幼な友達であつたのに。

それからざつと十年。滿庭の木賊といふのは珍らしい。薔薇やつつじに取り圍まれるよりも、一層あの支那家屋的西洋館は雨と本喰ひ蟲の朋だちになつてゐることであらう。しかし漱石山房がその後、門と塀とを大正七八年代に改築したと聞いて、僕にはその前を通つて見る氣がなくなつた。改築なぞ聞き間違ひだといいが。………

○鼻息の記憶

明治三十四五年頃だらう。早稻田の僕の家の森閑とした廣間に、支那人にしては清潔に過ぎた洋服姿の支那人がひとり坐つて、膳に對つてゐた。夕方には鵙と五位鷺が池に降り、夜は梟が啼く、さういふ寂れた庭だつた。

僕が襖を開けるとその紳士は「おいでおいで」をして見せた。手を擧げてしたのでない。僅かに點頭いてそれを現はしたのである。僕は近くへ寄つて行つた。平たい額で、頭を綺麗に分け、髭も手入れがしてあり、そして鼻息がゆつくり規則立つて、ひゆうひゆうと低い音をたててゐた。

その紳士はオムレツを食べてゐた。オムレツをフオオクで切つてゐた。

僕は目を見張つた。オムレツのなかに肉が這入つてゐる。自分に呉れるのとは譯がちがふ。牛肉の匂ひはいい匂ひだ。これは本當の西洋料理である。

その紳士は稀にしか白い歯を見せずに、行儀よく小粒の肉切れを背をたてゝ嚙みつぶしてゐた。それからやはり落ち着いた低い鼻息を僕に聞かせてくれた。

床間にはよく「開張天岸馬。奇逸人中龍」と拓が掛つたものである。

やがて僕はヘツト油の匂ふ臺所へ駈けて行つて、母にかう强請つた。「僕にもオムレツつくつてよう。僕にもオムレツつくつてよう」

これが孫さんに就ての唯一のはつきりした記憶である。孫さんといふのは孫文である。中山先生である。

孫さんの噂はそれからも度々家で小耳に挿んだ。

「孫のは、なかなかうまく行かんな」

と父が云つてゐるのを屢々聞いた。

「孫の戰術はあやしいからな」

とまた父が笑つて云つた。

ずつと後で聞いた話だが、孫さんが見學のために大演習へ父と出かけて行つて、「今度はあの軍がかう進みます」などと戰術の智識を振りまくと、きつとそれが正反對な結果にあらはれたさうである。「孫のはあやしい」とは、この逸話に對する揶揄なのである。

これから、やはりその頃だらう、朝早く僕の乳母の良人にあたる梅五郎といふ車夫が車をひいて、孫さんが急に新橋停車場へ逃げて行つた事がある。——

しかし十何年か經つて「孫のも、うまく」行つた。僕の父まで上海へ急に出かけて行つた。僕の學校が休暇になると、父は約束のとほりに「來い」と云つて來た。して見るとその時はもう上海は秩序整然としてゐたのだらう。ところが合憎、僕は化學か何かの成績がわるくて、主管の教師に旅行なぞもつての外だと云はれ、上海行はその儘になつた。今考へてもこれは殘念でならない。

それから孫さんは假大總統になつて日本へ來た。孫さんが家へ訪ねて來る日に、僕はいつものとほり學校へ出て行つた。歸つて來ると玄關に轍の去つたあとがあり、薄汚くて森閑としてゐるのは今朝のとほり、十年前のとほりである。たゞ茶の間だけは少し、ほんの少しざわついてゐた。僕の母はなかなか豪傑であるが、その母が「まあ孫さんも年をとつて」と感傷的に言つてゐた。家にはその十年前の孫さんを知つてゐる婆やが一人、まだゐたのである。

しかし國へ歸るとぢきに孫さんはまた亡命した。——「おや

おや」とその話の最中大きい聲で云つた。「何てまあ事だらう。まるで話のやうだ」

何といふ生活だらうと、中學生の僕は僕で中學生風に生眞面目に考へた。

しかしそれから後の、三民主義の中山先生に就てこれ以上平凡な事を書くのはあまり蛇足であらう。――

○ボン・ペエル

地震の前年に僕は廖仲愷氏と熱海でしばらく一所の宿に暮した。廖さんは當時、廣東政府の財政部長だつた。夢醒さんといふなかなか頭のはつきりしたお嬢さんを連れて、そのお嬢さんの病後の保養に來たのだと云つてゐた。（翌々年廣東政府の婦人部長になつた夫人――何香凝女史はそのをりには國に殘られた。）廖さんは早稻田大學と中央大學の、夫人は女子大學の、夢醒さんは佛英和女學校の出身で皆日本語が巧みだ。ことにお嬢さんの日本語は巧いなどと云つてわれわれと區別することが既に不自然である。女學校時代に「豆本」に曉通して、猿飛佐助、吉岡兼房、幡隨院長兵衛、何でも知つてゐる。そのうへ貫一お宮の碑の前を散歩しながら、不覺な僕に金色夜叉の荒筋を聞かせてくれたのもやはり同じ夢醒さんである。――その前年、廖さんの話の結婚を僕の父が媒酌した關係で、われわれは全然の他人でもなかつた。そして僕もまた猩紅熱の病後で、保養かたがた小說を書いてゐた。

稍々血色の衰へてゐるお嬢さんを連れて、廖さんはよく散歩した。でなければ英譯本の厚いイブセン全集を讀んでゐた。英文の政治の書物を讀んでゐることもある。しかし僕にしても門前の小僧である。廖さんが當時そのホテルへ泊つてゐたヨッフエを訪つて來てゐる事ぐらゐ、すぐに察してゐた。それは孫文が日本との提携に絶望して、廣東政府として最も行き詰つてゐる時期であつた。――廖さんはわざとホテルのホールの賑かな長椅子でごく簡潔にヨッフエの秘書シュワルサロンと語つてゐた。そしてぢきに別れ別れに散歩したり、ふたりして他の浴客へ何氣なく話しかけたりしてゐた。廖さんはまるで創作家のやうに、自身の持つてゐる一部のものを、その折その折に從つて誇示してゐた。即ちその時には廖さんは廖さんの内のボン・ペエルを同宿の客に誇示してゐた。

しかし一度孫中山の話になると、そのボン・ペエルは僕に向つてひとりの情熱家にうち變つた。それは外柔内剛の、江南人にしては珍らしく口數の少ない情熱家であつた。廖さんは現在

の孫文の立場に就てはこれを微妙に避けてゐた。しかし過去の孫文を、まるで親戚の青年に語り教へるやうに懐しげに語り教へた。「あの頃は。——あの頃は」と廖さんはよく云つた。その「あの頃」がまた僕に、化學か何かの試験の點のわるかつたことを想ひ出させた。

同じ日本で廖さんは留學中に孫文を知つたのである。

廖さんは屢々僕に廣東の家へ泊りに來いと云つた。別れる時に廖さんは駱駝色の鳥打に駱駝色の外套を着て「さよなら」を云つた。——尤もそれから東京の中華公使館で一寸逢ふ機會があつたが。——

一昨年の八月、廖さんが親英派によつて廣東街上で暗殺された時には、僕は恰度ヘルメットをかぶり蒙古馬に乘つて、山西省にゐた。山西省の大同府から雲崗石佛寺へ廻つて、大陸獨特の豪雨に打たれてゐた。そして北京に歸つた翌晩に、留守の間の新聞の閉ち込みを擴げて、それを知つたのだ。その晩僕は或る宴會へ出た。すると、食後のサロンで、蓄音機を大きく躍らせた青い絨毯のうへをあちこち歩きながら、偶然にも廖さんの甥にあたる、外交部秘書の沈さんといふ利かぬ氣らしい、しつかり者の青年が、日本の公使館付武官の揶揄に對して、笑ひながらから日本語で應酬してゐた。

「いや、わたしも赤いかも知れませんよ。支那のやうに貧富の懸隔のはげしい國では、たいがいの者は少し赤かくなりますからな」

そして僕が廖さんの急死に就てくはしい事を確めたのは、その會話のすぐ後だつた。

廖さんは思想的には廣東人中徹底的なラディカリストである。また外交的には徹底した反英派だつた。僕の憶測では、それは孫文から受けた後天的遺傳とも云ふべきものだらう。南方人の反英的感情はほとんど少年の日の悪夢から來てゐるのだ。この楊と水とに圍まれた家族的記憶が孫文から廖さんにも傳つてゐたに違ひない。それが廖さんの持つ理論と結ばつたのだ。孫文の場合のやうに。——そしてそれが廖さんの死を早めた。

廖さんは容貌どこか孫文先生に共通してゐた。清潔な丸顔、綺麗に分けた髮。——しかし一種子供らしく見える小柄な體格。そして柔和な眼尻が稍々下つてゐた。ボン・ペエルの印象はその眼尻が多く物を云ふのである。

廖さんが今生きてゐたら。そして武漢派の文官の中心が徐謙でなくて廖さんであつたならば？——しかし少くともこれだけ

の事は僕にも云へる。江南風流才子中、廖さんが一番孫中山の直弟子らしく意志が鞏固で、非場當り的人物だつたのではないかしら。——

熱海の或晩だつた。ホテルの談話室で僕たちは溫泉場名物の細長い箱入りの羊羹を茶卓にならべて、番茶を入れてゐた。お孃さんはたしか傍でピンポンをやつてゐた。何かお孃さんが可笑しい事を云つて、廖さんは、羊羹を嚙りながらよく笑つた。その時、廖さんのあらはしてゐるものは單純にして平和な愛情と、單純にして平和な食欲であつた。羊羹は、少し外齒で少し並びのわるい廖さんの齒の間から細く糸のやうに出るのである。それを廖さんは、相變らず眼尻に皺を見せながら、急いで啜つて、さていちいち小さく舌鼓を打つてゐた。僕はその廖さんに人間的な愛情以上に動物的な愛情を感じた。日向ぼつこする熊と熊との愛情、星を恐れる禽と禽との愛情を感じた。

廖さんにもう一つ癖がある。それは嘗て孫中山から聞いたと同じい——口を緘むでゐる時にひゆうひゆう云ふ低い鼻息だつた。——

昨年の眞夏に、東京で僕は偶然また夢醒さんに逢つた。（父の遺稿が出版されてをります。廣東へ歸つたらお送りしませう）と夢醒さんが云つた。夢醒さんは大變痩せ、うち覺つて僕の前に立つた。養生に日本へ來て明後日歸るのだと云つた。——間もなく「廖仲愷集」といふ遺稿が廣東から届いた。しかし同時に夢醒さんは、僕へ宛てゝ猛烈な民族的憤慨を洩らして來た。「改造」の「支那號」といふのは聞き捨てならない。なぜ中華民國號と云つてくれないのだ。——僕はあの多少妖氣を感じるほどに痩せて立つてゐた中華服のお孃さんと、この政談演說的攻擊とを比較して、眞夏の廣東といふ動亂的都市に對して白日夢を持つた。ポオル・モオランがカタロオニユに對して持つたやうに。

南方政府の所在地が移つたり、二つに分れたりするので少くも僕には大變都合がわるい。筆不精の僕はそのために「廖仲愷集」のお禮をさへいまだに出してない。お孃さんはあの勢ひで怒つてゐはしまいかと心配してゐる。だが、最近戴天仇氏が日本へ來たをりに、僕は夢醒さんの消息を得た。夢醒さんは戴さんと廬山にのぼつて猩紅熱に罹り、ひどく不健康のまゝで政府と一所に漢口へ移つたさうである。しかしその政府が其後あのとほりの行きがゝりなのだから、僕はやはり郵便の所書きに困つてゐる。——

劫火に燃えた浮世繪

小島烏水

初代一立齋廣重、晩年の大作、竪繪「名所江戸百景」の中に、駒形堂吾嬬橋（安政四年作）の一枚がある。左手下の方に、駒形堂の白壁と屋根を見せ、遠見に吾妻橋を、向ふ河岸まで斜にわたし、折からの細雨を蜘蛛の絲の風に光るやうに、胡粉で引き、どす黒い綿雲を、少しばかり千切つて投げた巾を、消魂さうに啼きながら、杜鵑が飛んでゐる。その駒形堂から、河岸に添うて、ものの一町と行かず、江戸名所圖會を見ると、葭簀張りの水茶屋の並んだところに、吾浮世繪の大蒐集家、蓬樞閣主人、小林文七翁が住まつてゐられた。江戸時代は、この邊の河岸に、屋形船、猪牙船などが繋がれ、界隈には、首尾の松だの、助六で名高い花川戸だのがあつて、觀音と吉原の盛り場を控へ、賑はつたところであつたが、首尾の松は切られ、屋形船は燃され、隅田川の水は腐敗して悪臭を放つても、去りにし榮華の迹を弔ふ念佛僧の如く、又は大隱は市に隱るといつた樂隱居の如く、文七翁は、浮世繪師の肉筆、版畫、繪本類を、紛然、雜然、山と積んで、その中に、冬籠りのやうに、巣を造つてゐられた。

私が翁と知り合ひになつたのは、晩年の事で、歌川廣重の傳記「浮世繪と風景畫」なる書を、大正三年に編述出版した以來である。その本の中に、翁の愛藏品に言及したところから、翁の注意を惹いたものと見え、ハガキで、所藏品を見せるから、遊びに來ないかと招かれたのが始まりで、爾來幾回となく、足繁く通つた。それも主として、廣重及び北齋に關する肉筆物、及び遺愛品であつた。それといふのは、私の本の中に、廣重の甲州日記を、寫本浮世繪師歌川列傳から寫し上げて、收錄した際、自筆の原本は、帝國大學圖書館に藏せられてある、とやうに、傳聞の儘を記して置いたが、實は文七翁の手に藏せられてあつたのだと言つて、その原本を見せてくれた。この日記は、

表題に「天保十二丑とし卯月、日々の記、一立齋」と記し、約三十八九枚許の、粗末なる紙に、猿橋のスケッチや畫食をしたゝめたといふ橋畔の休み茶屋などが、寫生されてあり、間々スケッチの傍に、本文に無い註解を添え書きしてあるが、傳記出版の前に、この原本を見て置いたらば、といふ憾みを抱きながら、私は手放し難なに、幾度も翻展をした。然るに翁の歿後、倫敦から出版された、エドワード、ストレンチ著はす所の「廣重の色刷」（一九二五年）を見ると、その中に駭くべき事實を發見した、即ち文七翁所藏の、廣重の日記と同物が、疾くよりウイルソン、クリウドソンなる人の手に歸して居り、著者ストレンチ氏は、既に一九一〇年四月、日本協會の講演用として、此日記を借覽したことがあつたが、其後、日記は競賣せられて、現在はジョナサン、ハッチンソン博士の手に歸し、ストレンチ氏は、今度の本に、新所藏者から借りて、原本からスケッチ二葉を模刻して、挿畫としてゐる。元來此日記は、文七翁所藏の原本に依れば、四月二日から二十三日迄で中絕し、十一月十三日から稿を次いで、二十二日に畢つてゐる。ハッチンソン氏のが、もしその間の中絕の部分であつたならば、首尾脈絡貫通して、面白いのであるが、文七翁所藏の分と、同じであるらしく、中絕の部分は、依然行衞不明であり、文七翁所藏の物と、重複の「原本」が、倫敦に存在する理由は、全然不可解である。之を尋ねんと欲しても、文七翁と日記と、今は兩ながら亡失したのを何としやう。

翁所藏の廣重物には、この外に、廣重の入門書がある。大奉書四つ切りの紙に、元祖歌川豐春印、同豐廣印を並べ、少し下つて、門人廣重と記した下に、同じく朱印を押し、文化九壬申九月吉日とある。ところが、後で知つたのであるが、この入門狀も、文七翁所藏以外に、同文の物が、廣瀨辰五郎氏にも所藏せられ、孰れが眞の原本か解らない。文七翁所藏の分には、他の遺愛品と共に、三代目廣重から、淸水晴風氏に宛てた讓渡狀が、附いてゐたかと思ふ。廣瀨氏の分は、廣重六十忌追善記念遺作展覽會に、他の貼文と共に、軸物に仕立てゝ、陳列せられたから、今猶ほ人の記憶に新たであらう。その兩方とも燒失して、今は亡いから是れも謎のまゝで永久に葬られたかたちだ。それから、廣重がつけたといふ唐紙の下圖、江戶及び本朝名所の着色絹本、又は墨繪の掛幅など、目錄を取つて置いたが、一々擧ぐるに遑がない。中にも廣重若書もの菊川英山風の雪中に傘さした美人の立幅は、廣重が感化を受けたところの、英山との藝術的關係を知るに便宜なる作品であつた。

翁は、懷月堂派や菱川派の肉筆、又は版畫から、美人若衆

の衣裳の模様を、畫工を雇うて、精密に寫させ、古代衣裳の模様集成を作るのだと言つて、數十枚の下繪を見せられたが、晩年、浮世繪美術館建設の意圖があり、それや、これやの、費用を辨ずるためか、翁としては手放しにくかつたであらうと思はれるところの、秘藏の光琳の屏風、及び幅物を賣り立てに出された。併し翁の所藏品の中樞を爲すものは、何と言つても、浮世繪肉筆物で、翁は世間の人が、版畫にのみ熱中して、肉筆に冷淡なのを憤慨せられ、肉筆を、年代又は流派別けに、系統的に陳列する意圖を私に語られて、翁の口癖の浮世繪歷史展覽をやるんだ、とよく言はれた。今日浮世繪肉筆の價値が、漸く認められて來た頃に、翁は世を去り、その上に、吁、翁が一生の富、精力、熱情、丹誠を蓄積して、翁の生命その物の全部であるかの觀をなした、貴重なる國寶の肉筆は、四年以前、九月一日の震災で、一紙半箋を餘さず、劫火に燃え盡くした。凡そ震災で堙滅した江戸藝術の至寶の中で、軟文學の圖書としては、安田氏所藏の松廼舍文庫の如きものはなく、浮世繪としては、文七翁所藏の肉筆物を以て、最も惜しむべきものと見られてゐるが、松廼舍文庫の方は幸ひに所藏者が生存せられてゐるから自らその記錄を作られるだけの、便宜は未だしもある。文七翁の藏品に至つては、自身物故せられて、記錄の徴すべきものが無いから、私は自身見聞の儘を、不完全にして、時に誤謬なきを保し難いと危ぶみながらも、憶ひ出の深い九月號に、記錄して置きたいと思ふ。

文七翁所藏の肉筆は、遠くは岩佐派に溯り、菱川派は師宣、師房、父子は素より、古山師重、同師政、和翁、師繼等の門葉に及ぼし、中にも杉村正高の肉筆は、フエノロサも、初めて見たと驚嘆されたもので、翁も殊の外、珍藏せられてゐた。傳記は判明しないが、常行、常正の如き、享保、寛曆時代の作家も加へ、鳥居派は清信、清倍、清忠、清重、清滿等を系統的に集められ、懷月堂派の大抵の作家は網羅せられてゐた。最も肉筆に長けた宮川長春、勝川春章の物は素より、肉筆の最も少ないと言はれた鈴木春信も、蒐集せられ、奧村政信、西村重信、石川豐信、北尾重政、歌川豐春、礒田湖龍、細田榮之等に及んでゐるが、歌麿の物は、珍らしくも、布袋に唐子の戲繪があり、窪俊滿の、萩玉川の絹本立幅の如きは、紫繪そのまゝの、淡脆感を抱かせる。奧村政信の二曲屏風半双の武者繪は、屏風だけに珍らしく、殊に東洲齋寫樂の、團十郎暫圖は、蜀山人及び七代目團十郎の畫贊があつて、寫樂の肉筆としては、恐らく天下一品であらう。清長のも、鳥居派でありながら、錦繪では、役者繪を殆ど描かない人であるが、團十郎暫の肉筆圖幅を、翁の所藏

品中に見[illegible]

ものは、恐らく北齋のこれであらう。

翁の北齋蒐集に就きては、先づ翁とフエノロサとの關係を知る必要がある。凡そ日本の浮世繪を海外に搬出、又は紹介したゝめに、有名となつた人は、林忠正、若井兼三郎と、文七翁との三人であらう。市場に流布する浮世繪に林忠正、又は「わかゐをやぢ」の認印を押捺した品を見ることは尠なくないが、若井氏は暫く措き、林忠正は佛蘭西の文豪、ゴンクウルと、個人としても親友であつたに對して、文七翁が、米國の浮世繪研究大成者にして、日本古美術復興の大立物たるフエノロサと、密接の關係があつたことは、好個の對照である。その林忠正も、浮世繪の滔々たる海外流出を見ては、憮然たらざるを得なかつたと見え、同業の文七翁が、明治廿五年十一月、上野松源樓に開かれた浮世繪展覽會目錄に序して「今にして此（浮世繪の妙所）に意を注がずんば、數年を出でずして、浮世繪は、日本の地を掃ふに至らん、友人小林文七、此に感ずる所あり、同好を促がし、浮世繪展覽會を開き遍ねく其巧妙を世人に知らしめんと欲す」と言つてゐるのは、眞面目に正面を切つてゐるだけに、一面に於て、浮世繪の海外大誘拐者であり、一面に於て國内保存の大蒐集家であつたところの、兩人のための、自嘲でも

あた、[illegible]

しかも文七翁は、浮世繪の代表的傑作は、手許に確保して、海外へ放さなかつたゞけの熱情はあつた。フエノロサも亦、浮世繪肉筆の優良品流出を、日本のために憂慮して、春章の名作、竹林七婦人が、海外に持ち去られんとするのを堰き止め、我が美術學校に購入せしめて、珠玉の散佚を、危くも取り止めたとは、文七翁の直話であつた。殊に北齋に對する稱讃に至つては兩人共に奴僕の如くであつた、フエノロサは、その大著「マスタアス、オブ、ウキヨエ」（一八九六年紐育板行）に於て、浮世繪師を藝術上の才能よりして、三流に分ち、第一流の大家として、又兵衛、政信、春信、清長、及び北齋の五人を擧げ、歌麿を第二流に、廣重には充分の理解と同情を持ちながらも、之を第三流に据えた程に、北齋を高く評價してゐるのみならず、明治三十四年、上野に開會された北齋肉筆展覽會の爲に、單行本の素晴らしい評論を書き上げた。この本は、北齋肉筆の大集成ともいふべく、寛政四年頃の作から、嘉永二年の逝去に至るまでの間、五十八ヶ年の製作を網羅し優良なる圖版を添えた中版百六十七頁の美本で、芭蕉布の表紙に、日繪として木版彩色の北齋肖像を添えてある、英文の故もあらうが、邦人間に流布すること極めて少なく、私の渡米以前、文七翁、手づ

から署名して、贈與せられたが、今では故人の記念となつたのみならず、恐らくその書も、絶版であらう。本書に收錄した北齋肉筆の大部分は、文七翁以外では、本間耕曹氏の愛藏品が、多くを占めてゐたが、文七翁は、後に之をしも買收せられ、幾流の大河を呑んだ大江の、汪々たる豐富さがあつた。その當時、北齋は既に四十年間も、歐米に於て持て囃されてゐたに拘はらず、本國の日本に於ては、研究する程の價値すら附與せられず、文七翁が上野美術協會に於て、北齋の肉筆物展覽を企つるに當つて、曾ては雪舟や兆殿司を並べた壁間に、浮世繪師の作品を掛けることを、屑しとせざるもあり、又作品は貸與するが、見つともないから、名を出してくれるなと、懇願した所藏者もあつたといふ話であるが、文七翁は、展覽會開催以外、北齋に關する前記の名著を、自家出版としたのみならず、此外に、有名なる飯島半十郎の葛飾北齋傳二卷、フエノロサの評釋に係はる浮世繪展覽會目錄（明治三十一年）を、和英兩文で、自費刊行せられた、是等の書は、今日となつては、漸く稀本の部に入つて、廣く搜されてゐるが、當時は孰れも反古同樣に、捨賣されたものであつた。

この中「展覽會目錄」に附隨して、文七翁に聞いた話であるが、フエノロサが、本文の解説を起草した時は、下書なしの、鉛筆の走り書きを、一枚毎に、活版所の手に渡して、側から印刷に附したのださうだが、それを文科大學の一生徒に、片つ端から譯させた。當時美術上の用語に、妥當なる譯字が無かつた際とて、學生も頗る困惑せられたらしいが、その譯文は、ギゴチない中にも、文章として、その頃の時代色を存するところに、奇趣が無いでもない。本文起草中、偶然、織田一麿氏に伺つた話に依ると、其學生は、今の幸田成友博士であつたさうだ。浮世繪研究史上の一挿話として、殊にフエノロサ、及び文七翁に關係のあるだけに、面白いと思ふ。

翁所藏の、北齋肉筆物の中から、記憶に殘つてゐる分を擧げやう。先づ第一に、大幅馬上鍾馗の作である、長さ一丈九尺、幅九尺で、丈夫一式の布を、三枚繼ぎ合せ、鍾馗が馬上に手綱を操つり、拔劍を垂れてゐるところを、描いたもので、衣のヒダは岩壁の如く、怒張した筋肉は雲慶の彫刻を見る如く、毛髮は冠を衝かんずるいきほひがある。線の最も太いところは、一寸五分ぐらゐ、前北齋爲一筆と落款の下に、「よしのやま」と、平假名で組み合せた方形の印形が描いてある。文七翁に依れば、この圖は、天保三年、北齋が七十三歳の時の作で、五月幟であつたらうといふ話であるが、もと入手せられた時は、秩が附いてゐたのを、取り外して、銀龍の古代切地で表裝されてゐた。それは併し、傳説に殘る名古屋西本願寺別院の、半身達磨のやうな、曲藝じみたトリックから離れて、筆力雄健な作品と

して、許さるべきものであると思ふ。

次に貴重とすべきは、北齋の自畫像（紙本）である。約八十五歲頃の全身像で、身長一尺五寸位に描かれ、袖無し羽織を一着に及び、冷飯草履を突つかけ、兩手を長い杖の上に載せて、横向きに何か考へてゐる。飯島半十郎氏の「葛飾北齋傳」下卷に、「北齋翁が平生の扮裝は、甚奇なり。あらき手織の、紺縞などの木綿を着し、上には柿色の袖なし半天を着し、六尺有餘の天秤棒を、杖に代へ、草鞋或は麻裏草履をはきて歩きたり。その狀、恰も、阿染久松の演劇中にある、質店の久作爺の姿の如し」とあるに、合致してゐる。この肖像の首から上を取つて、衣裳に手を入れ、北齋翁肖像として、飯島氏の北齋傳に入れてあるから、割合に多く人目に觸れてゐる。原圖は北齋門人、爲齋の家から發見されたもので、全身像だけあつて、手足から姿勢まで、如實に、精刻に、描き出され、今更北齋の驅使する線の、活躍の力に壓される。尤もこの肖像に對しては、近頃研究家の間に、果してそれが北齋の肖像であるかに就いて、疑ひを抱かれてゐる人もあるが、私は違ひないと確信するだけの材料がある、が今は細論に亘ることを避ける。文七翁は、生前に、この像をフアクシマイルに複製して、同好者に頒つ意圖を有せられてゐたが、實行に到らなかつたやうである。

北齋の遺珠とも言ふべきものは、そのスケッチ、又は板下畫の類である。「北齋漫畫」にブチ蒔けた、編次不同のスケッチは、寸尺差違の類があるにしても、富士の頂上から、青、紅、一褐色の、熔岩碎屑を、放流したやうに、小は小なりに、裂片は裂片なり、北齋の才能の、鋭角を閃めかせてゐるのは、矢張り、肉筆のスケッチに越したことはない。それを如何に多く、文七翁は蒐集してゐられることか。西人の北齋蒐集家も、悅んでこの種のスケッチを收拾してゐる。私の知れる限りに於て、大英博物館や、英國の畫人リケツ所藏の北齋スケッチには、逸品が多い。林忠正のコルレクション目錄（一九〇二年）にも、婦女の髮を梳づるデッサンは、必ずしも傑作と許すべきものではないが、當時可なりに注目されたものである。ボストン博物館に於ては、所藏の北齋肉筆物の中、スケッチ畫は百點以上も有してゐるとは、フエノロサの記する所である。今文七翁の蒐集に就いて見るに、文政四年頃の作と傳ふる、南本間氏所藏の畫帖二冊は、小スケッチ約百個を收め、江戶市井の人物が、活躍してゐる、人物の顏は、目を二つ點じたゞけで、鼻も口も眉もない。マリー、ラウランサンの石版や、エッチングにある女は、大抵鼻が缺けてゐるが、北齋の省略は、それ以上である。それでゐて、相撲の觸れ太鼓、夏の團扇賣り、洗濯する女など、活き〻〻として紙面から飛びさうである。この略畫に、物理的有機體は無いが、生理的人間性は、躍如としてゐる。素描もこれまで巧妙になれば、嚴として古典的である。物好きな西人批評家が、ダヴインチのそれを持ち出して、比較沙汰をするのも、

あながちに笑はれない、畫狂人の眞骨頭は、却つてかゝる粗畫に於て、深く見透されるのではなからうか。

その外、スケッチ畫の中に加へて然るべきは、天保七年の飢饉年に、市中では、行き倒れさへあり、錦繪草紙類の商賈は上つたりで、畫工の困窮甚だしかつた際、北齋は、唐紙、奉書、半切等の餘り物に、手當り放題、山水人物花鳥を揮毫し、粗末な畫帖に仕立てゝ、繪草紙店に並べたことがあつた。肉筆畫帖の店頭販賣は、當時としては、珍らしかつたと見え、相應の賣れ行きで、口を糊したといふものゝ、現に傳存の品は絕えて無く、これも一帖、文七翁の蒐集に見たのは、異とすべきであつた。

更により多く、珍重すべきは、隅田川兩岸眞景の卷物一卷で、これは北齋が、船中から、兩岸の推移を、變化するがまにまに、忠實に寫生したものであるが、櫓で推し櫂で漕ぐ船のことだから、動搖につれて、描線も畸形的に顫震上下してゐるところもあるが、觀察の鋭敏と、構圖の奔放は、一と目見て、忘られぬものである。名作「繪本隅田川兩岸一覽」は、この寫生から仕上られたものかも知れない。繪本に於ける狂歌師壺十樓成安の序に「ここに北齋ぬし、此頃隅田川兩岸の勝地を模寫せり、其圖中、微細にして、たゞちに景地に到れるが如し。實に東都の風光、正寫しといはまし」とある。その原圖だけに、歷史的に見ても珍とすべきものがある。

併しスケッチや板下畫の、端物を取り出て、彼是言はれるのは、恐らく大蒐集家としての、翁の本意でなからう。翁の所藏品は、北齋物だけにしても、展風、懸幅、扇面張等、數知れずの種類と分量が、累積されて、翁はその間に挾まれて、細くなつてゐた程である。早期時代の作品としては、寬政四年頃の作？清長の美人丸出しの、長身にして豐頰、燈籠鬢のたをやの、立姿を描いた、宗理と署名の幅物、又は同じ署名の、横向き美人に、京傳の贊をしたものなどが、目に殘つてゐるが、晚年の作では、紙本大立幅、全身昇龍之圖、畫狂老人筆、八十六歲と署名のある一幅は龍の全身一丈二尺、老來の筆致や、乾燥して、固くなつた雖はあるが、豪快の作たるを失はない。最も渾圓の完璧を以て許さるべきは、花見群集の絹本橫幅で、フェノロサが、文政十二年頃の作と鑑定したもの、構圖といひ、色彩といひ、調子といひ、技倆成熟の絕頂に達し、フェノロサをして讃嘆の評彙を空しうさせた作品であつた。

かやうにして、次から次へと、いかに明細に書き上げればとて、畢竟は賽の河原の兒童が、積み上げる石コロだ、鬼の一打に、崩壞する宿命を如何ともなし難い。重ねて言ふ、文七翁に依つて、蓄積せられた名品は、四年前の震火で、完全に一空した、今となつては、凡ては夢だ。併し文七翁が之を知らずに、先立つて逝かれたのは、翁のためには、せめてもの仕合せとして、祝福すべきものであつたかも知れない。

腸詰と詩人

——もだん・でかめろん其五——

谷　譲　次

1

『B・U・N・K——こちらは紐育放送局であります。』

といつたぐあひに街全體が一つになつて、朝から晩まで晩から朝までかうして自分の存在を廣告してゐるのが紐育——なんかとよくお上りさんが惡口を言つて歸るが、まつたく紐育で聞く巷の雜音は、しぢう紐育とその生活を布告(アナウンス)してゐる。「靜かな區域」と貸間の廣告にも銘打つてある百何丁目住宅街の眞夜中でさへ、耳底に力づよい都會の跫音、わああんといふマンハツタン呻きの奥に、かすかにそして絕え間なくこの聲はひゞいてゐる。

『B—U—N—K、こちらは紐育の放送局であります。』

BUNK——バンク、これは冗談だ。

が、さて、夜。四十八丁目に近いレキシントン大街のホテル・ケルトン、そこの日光客室にでも出たとしてみたまへ。

廣小路には電氣廣告の海がひろがり、パアク散歩街には鳩の巣みたいなアパアトメントが建ち並び、白い結晶體のやうに空へ隆起してゐる下町四十丁目界隈の高層事務樓、何哩も何哩も船渠がつゞいてゐる東河の岸、はるかかなたロング島市の製菓工場には夜業の灯がちらちらしてゐるであらう。そして、それらすべての上に、遠雷のやうな「アナウンサア紐育」の聲がころがつてゐるのだ。

バンク・バンク・バンク・バンクと聞こえるその紐育の行進曲のなかには、大喇叭(サクセフォン)にまじつて俗惡で盛大な唄聲がする。「はい、バナナ、

はありません。今日はバナ、は品切れです」といふ伊太利八百屋の言ひぐさを眞似たやつ。さうかと思ふと、チヤアルストン舞踊とあつて見物人が閉口するまで男女とも膝から先で床を撫で廻つたり、支那人教授ちん・りん・うおんがヤヒ・バヒ東洋倶樂部なんてのへ社交界のお歴々を集めて麻雀を傳授したり、さて、猶太人は扉をしめきつてお金の勘定をし、英吉利人は早くから寢てしまひ、佛蘭西人はこれから起き出し、自動車と高架線(エル)とSUBは、おのおの雜談と嬌笑と公衆道徳を滿載して驀進し、交通巡査が速度違反のタキシを停めて鉛筆の先を舐める。このとき散歩街では片眼鏡の紳士へ頰紅が話しかけて、頰紅を夜風が吹いて、夜風にJAZZが乘つて來て、JAZZに歌がはいつて——はい、バナ、はありません。今日はバナ、は品切れです。

もとのところへ返つちまつたが、要するに、これらがみんな大都會の呼吸となつて、一つに縺れて露つぽい星ぞらへ立ち昇り、反撥し、低徊し、退轉するとあのがあゝんといふ聲を發し、それに好運を追ふ人々のうめきがこもつてゐるのだ。

で、これは「好運を追ふ人」の物語である。

が、もう一度夜の紐育を見ると、はるかむかうロング島市の製菓工場には、夜業の灯がちらちらして、全國の女學生とその戀人たちのために贈答用の「微笑と接吻」「Say- It-With-Sweets」「あたしとあなた」「MY・OWN」だのといふ名の砂糖菓子製造を急いでゐて、白い水晶のやうに高層事務樓の櫛比する下町四十丁目附近はコリン・ムウアとリチヤアド・バアセルメスの散歩姿を發見した通行人のむれで押し返してゐるかも知れない。またパアク街に建ち並ぶ鳩の巣みたいなアパアトメントの一室では、バンクの音で幼女クリステナが眼をさまして、靜かにしづかに就寢のお祈りを繰りかへしてゐないとも限らない。

「——どうぞ神ちやま、毎日の麵麭を下さい。そして、ジヤムをうんとうんとつけて下さいね。」と。

そこでこの夜更け。四十八丁目そばのレキシントン大街、ホテル・ケルトンの日光客間へ出てみれば、そこに必ず、日光のかわりに濕氣を浴びて、しよんぼり、しかし昂々然と肩をそびやかして銅像化してゐる日本詩人——廣島縣人——トダ勝利の姿を見出して、驚く人は正確におどろき、さらに勝利の音聲を耳にしては、心臟の弱いものはジヤック・ホヰッテントンと言ふ間に卒倒することであらう。

といふのが勝利は、毎晩寢るまへに上から紐育を白眼んで——ネロのやうに——瞑想に耽り、バイロンのやうに詩囊を

こやし、こやし、多くの盲育人のやうに一日一度あすの「好運のおまじなひ」を唱へるのだが何しろ髪が大へんだから、ホテルちうの脊骨を冷して、かれらが、勝利は比較的馴れてゐて未知の紳士淑女にはあまり咬みつかないらしいといふ事實を知つて安心するまでにはいつも相當の時間を要する。

この髪と勝利の眼の下とに、上町は眠り下町はさんざめき、廣小路には電氣廣告の海がひろがつて――HUSH！

ごう。へい！

2

おうるらい！

まづ好運を追ふ日本詩人――廣島縣人――トグ勝利の名前からはじまる。トダは戸田だからさしつかへなしとしても、どうも勝利つて のがへんだと思つたら、はたして大した曰くがある。告白するところを聞いてみれば、一體べらぼうにせいの低いやつのことを俗にShortyといふんだが、このTがRに訛つてショウテイがショウリイとなる。肥つちよ（ファティ）がフアリイとひびくがごとし、だから日本人は往々にして街上なんかで『LO！ショウリイ、Shorty de blues？』てな挨拶を浴びせられる運命を有つてゐる。しかし運命とはいへ、あびせられる身になるとあんまり好い氣もちのしないことかもしれて、トダは日露戰爭の時に渡米した故事をも考へあはせてショウリを勝利と換つて自らトグ勝利と號し、もつて私かに快を行つてゐた次第で、ウオレス・アーウイン作「日本學僕の手紙」――これは尊敬すべき椅子だの、I ask you to knows、And-stand、there-4、discover をdiscover、などいふ言葉で書いてあるが――の主人公作者の腦作兒（ブレインチャイルド）日本青年ハシムラ・トウゴウの從兄だか從弟だかにカズン・ノギといふ日本詩人があつて、オハイオ州エクロン市かどこかの短期速成詩作通信學校から「誰にでもわかる詩のつくり方」――その廣告に曰く。彼女へ花をおくらんとする若人よ、待て。しかして三思せよ、花束とゝもに自作の美詩をそへるならば其の効果のいかに迅速かつ確實であるかを。こゝにおいてか本會は君のために彼女の心臟をダンスさせるやうな詩の作りかたを叮嚀親切に教授するものである。申込金は振替の會費に當てる。月謝至廉、質疑應答――なんてのを取つて矢つぎ早やに惡詩をつくつてはハシムラ・トウゴウ氏を苦しめることになつてゐるが、わが詩人勝利もこのカズン・ノギのご他聞にもれず、その詩はかつて二度三文雜誌のうめぐさに使はれたことがあるきりで、それもあきりにうるさい勝利の投稿に悩まされた編輯者が報償の最良手段として掲載したものであらう。あゝら・BOY！

これが好運を追ふ詩人トダ勝利である。

紐育の聲を上下左右に感じながら、勝利は毎夜ホテル・ケルトンの太陽室で好運の呪文を十二へん唱へそれから運命と指輪について考へてみ、さうして自宅の寢台へ歸つて眠つてしまふのがつねだつた。

好運を追つかける一日一打（デエリイ・ダズン）と、望みごとをかなへてくれる魔法指輪の件へ、こゝで筋が進んでゆく。

紐育は「人種の坩堝」の同意語（シノニム）であるといふ公式はこんにちでは歯刷毛はプロツアイラクテイクに限ると思ふのとおなじ程度の常識で、すでに坩堝である以上、あらゆる種族と典型の人間を一つに熔かしこんで紐育人といふ獨特の鑄形へはめていくのには何の不思議もないわけだが、じつさい昨日入市して辻々の人混時間にべそをかいた田舍者（ジエイクルウブ）が、けふはもう灌木林（ブツシユ）のにほひをすつかり落して小粋な鼻聲で「この小さな紐育村は――」なんかと生意氣なことをいふやうになるんだから、鐵爐紐育の標準化の力はまことにてきめんであると言はなければならない。では、この紐育つ兒の代表的人物はといふと、男ならさしづめゴウ・ゲタアといふ類型、女ではミス・スマアト・セットなる一團である。Mr. Go-getter は、何處迄も好運を追つかけて行つてつかまへずにはおかないといふ突進的近代人の精で、服裝は劃一的に專賣特許皮の靴にコリンスの洋袴をしてそれが企業と裸體芝居見物とポウカアに浮身をやつしてゐる。紐育女のMiss Smart Setは小意氣でおしやれな小悪魔、膝がしらに戀人の似顔を畫いたり、腰のまはりに[illegible]（スコイト）の名殘りをとゞめたり――そしてひたすら浪費と産兒制限とブリッヂとに寧日ない。この紐育をんなのなかの若い無責任な一派が、日本のもだん・があるに相當するめりけん名物のお俠娘（フラツパア）で、あめりかにもモダアン・ガアルといふ言葉はあるにはあるが、それは文字どほりに近代的教養と思想をもつ女性といふ意味だけで、いはゆるもだんは矢張り斷髪高跡濶歩流眄のふらつぱあすにとゞめをさす。これがゴウ・ゲタアと肩をならべて、ほしいと思ふものなら何でも飛んで行つて摑まうといふんだから、物質文明に對する亞米利加人の信仰と把握力を最も端的にあらはしてゐて遺憾ない。だからこのスマアト・セツトとゴウ・ゲタアの紐育市民を操つて紐育を動かしてゐる源泉は、「好運を追ふ野心」と「自分だけの人生を先づ物質的によくあらしめたい」との卑俗な、しかし一ばん現實な慾望のほかの何ものでもないのだ。この、個人々々の平凡な意企を思ふさま延ばさせるところに、「戸棚（カバアド）に骸骨を藏しない」新大陸あめりかの强みがあるので、その恩惠と保證のもとにのみ人は自己の勞蓄の果實を完全に享樂し得ることを信じ、それが

きた動力となつてあの大きな紐育生活の根據をなしてゐる。いつもべつにやかましい議論もなく、亞米利加が悠々としてこのためにかなり頭をわるくしてゐるやうに見えるほど——自ら業んでゐるゆゑんのものは、一に個人の生活力を橫へ張らずに銘々上へ上へと伸ばして往くところにある。じぶんじしんのこの日常生活の連鎖をよそにして、漠然とした人生の概念などを想定することは、あめりか人には出來ないのだから。

で、ゴウ・ゲタァの男もスマァト・セットの女も眼の色をかへて好運を追ひまはしてゐる——運命の獵人の都、B・U・N・Kの紐育。

紐育には電信柱がないし、電線が蜘蛛の巢みたいに張り渡つてゐたりなんかしないから、機會の神樣が前髮を振り亂して商業殿堂の空低く、時としては步道とすれすれに飛びちがつてゐる。人はたゞ眼を見ひらき、手を伸ばして其の前髮を掴まへればいゝのだ。が、さて、この機會の神さまは普通一般に知られてゐる神樣のやうに非常に悲しさうなお顏をしてソロモンの寢卷みたいなものを着てゐないで、そのかはり、仕立下しの碁盤縞で包んだおなかを突き出して、絕えずあたらしい事業をもくろみながらハヴァナをくゆらしてゐるから、ちよつと見たところではゴウ・ゲタァの親方のやうにしか認めないし、それに機命の前髮に對する[illegible]たり、中央公園の中央をお役に千八百弗使ひたりするほつと出相手の詐欺師（コンマン）——にまぎらはしい風體なのと、おまけにこの頃では機會の神さまの前髮なるものが、多くの場合[illegible]株式會社創立趣意書といつたふうな迂散くさい形式をとつてゐるので、どうも善良な市民は折角の前髮に 2ndstep を踏み、時としてはゴウ・ゲタァとゴウ・ゲタァが思はぬ鉢合はせを演じて、機會の神ならぬスマァト・セット孃の前髮を爭つてゐたりする。かういふと、もだあん・があるに前髮はあるまいと抗議する人があるかも知れないが、ところが、大いにあるから妙で、斷髮の毛を額へ垂らし、一本々々揃へて、眉の上部で同く孤を描き、これを稱して beau-catcher といつてる。男子捕獲器（ボウ・キャッチャア）だそうだ。もつとも大象をつなぐといふくらゐだから、遊冶郎の二三人は手もなく引つかゝること請合ひで、志願しても捕獲して貰ひたいゴウ・ゲタァ氏の大軍が、いつも第五街やBウェイをうようよしてゐる。

紐育はじつに運命とチャンスの市場である——なんかと考へながら、トダ勝利がホテル・ケルトンの屋上で其の愛好する「一日一打（デエリイ・ダズン）」に耽つてゐると、下の明るい步道を、例の男性捕獲器のうへゝ小さな帽子を突んのめらせた紐育女ミス・スマァ

ト・セウトの群集が尻で調子をとつて灯の海のはちへ流されてゆく。と、詩人勝利の頭に豫言者の言葉がよみがへつてくるのだ。

『やすらかにをる婦等(をんなたち)よふるひおそれよ、おもひわづらひなき者よをのゝきあわてよ衣をぬぎ裸體(はだか)になりて腰に短きすかあとをまとへ――以賽亞書第三十二章十一節。』

が、言はれるまでもなく紐育の女は疾うの昔にそのとほりにしてゐる。そこで勝利は慨然として手の指輪へ眼をおとす――銀に「好彩(ホウサイ)」といふ支那文字が彫つてある。で、指輪の挿話。

3

とにかく、電氣廣告の海の揺れてゐる芝居土園(ショウダム)廣小路に、プリシラ――バセラと聞こえる――帝國(エンパイア)、夢の國、何でもいゝ、安寄席を一つ覗いてみるとしよう。これが好運の指輪を紹介してゐる。

舞臺。ペンキ畫の田舍町大通りの背景。プラニガンの酒場、ダフアテイの靴屋、玉突場赤い土人亭の看板のむこうに、どういふ關係か、必ず村の監獄がなゝめに見える。觀客中の前科者に思ひ出の種をあたへて、ゆつくりくつろがせようといふつもかかも知れない。

人物。猶太人と愛蘭土人とが大聲に話しあつてゐる。利口者猶太人は平に山高をかぶつてフロツク・コウト。拔け役の愛蘭土人は乞食中の哲學紳士浮浪者のつくりだ。名は、猶太人がモラスで、愛蘭土人はマツト・オブライエンと、これも先刻お約束によつてきまつてゐる。

にわかはいつも掛合ひからはじまる。

モラス。やあ、お早うマツトさん、おや何うしたい。顔色がよくねえね。

マツト。なあにね、ゆふべこの往來でね、さうだ、ちようどこゝだ！二人の追ひ剝ぎ(ヘイウエイ・メン)に摑まつてね、ほうるど・あつぷされたのさ。いやはや。

モラス。いやはや。夜酒を呑んで歩くから惡いんだよ。

マツト。成程。そこのプラニガンの酒場から出るところをやられたんだからな。

モラス。それ見な。だがまあ、出た時でよかつた。この頃の酒場は質がわるくて、はひるとすぐに絞るからね。

マツト。それあいゝが拳銃で撃たれちやつた。

モラス。どこを？

マツト。指を。

モラス。巡査はゐなかつたのかい。近處に。—
マット。ゐたさ。向側に立つてふらつぱあと話してゐた。
モラス。なぜやつて來て悪漢を逮捕しなかつたんだらう？
マット。なぜ？だつて不思議はないぢやないか。やつらはべつに巡査に食つてかゝつたわけぢやないもの。—
モラス。さうか。そこへ出てくると巡査のはうが營業防害になるかも知れない。で、どろぼうは何うしたい？
マット。逃げちやつたよ。おれは地面に倒れてたんだ。すると其の巡査がきておれを捕縛した。
モラス。え？何だつてまた——？
マット。歩道に寢てるなんて不屆きだてんで。
モラス。それだけかい。
マット。それに巡査の平和を亂したかどで。
モラス。おやおや。で、何だらうな、追剝ぎは君の身體を探したらうな。
マット。うん。おかげで命拾ひをした。
モラス。命びろひ？　何うしてだい？
マット。いやね。泥棒のやつがこのポケットから引き出したのを見ると、一週間まへに家内から投函するやうに頼まれた手紙さ。すつかり忘れてたんだが、もしみつけるのが泥棒でなくて家内だつたら、おれは今頃生きてる身體ぢやないよ。家内に殺されてるね。
モラス。で、何か盗つてつたかい。
マット。あゝ。時計を一つやられたがね、もしもし、その時計は駄目ですよ、動いてませんからつておれが言ふと、泥棒め、敵ながらうまいことをぬかしたよ——さうかも知れねえが今は動いておれの手へ移るんだ、とさ。
モラス。高價い時計だつたのか。
マット。まあ、相當にね。しかし、どこへ持つてつたつて質に置くわけにあ往かないよ。町ぢうの質屋がおれの時計だつてことを知つてるんだからな。
モラス。現金もとられたんだらう？
マット。いや。現金は泥棒にあふまへに酒場で無くなつてた。
モラス。ブラニガンと來たらとても因業な酒場だからね。時計だけでも持つて出られたのが不思議なくらゐだ。
マット。それがさ、時計を持つてないやうに見せるために隨分骨を折つたんだよ。しぢう酒番に時間を訊いたんだ。
モラス。こんど見たら追剝の顏をおぼえてるかい？
マット。ひとりは確かに歯醫者上りに違ひない。なぜつて君、おれを殴るまへに優しい聲で言つたもの——よござんすか、す

こうし痛いかも知れませんよ、つて。

モラス。はゝあ。も一人の男は？

マツト。人の子の父だね。

モラス。え？

マツト。子をもつ親だね。やつ、おれへ拳銃を向けながらしみじみ述懐した。こんなことをされてお前も苦しいだらうが、されるお前よりも、しなければならないおれのはうがよつぽど苦しいのだ、と。ねえ君、世の父親が子供を叱る時のせりふぢやないか。

モラス。それはさうと撃たれたのかい。

マツト。指へ一發。

モラス。どれ、どれ――ふい、傷なんか何處にもないぢやないか。

マツト。その指輪へ命中したんだ。おかげでかすり傷一つ負はなかつたといふわけさ。

モラス。へえい！その指輪へ！

マツト。左樣。この指輪へ。ほらね、好彩（ホウサイ）と書いてあるだらう？これあ君、好運をもたらす支那の指輪でね、おれにとつちやあ命の恩人だ。全くあらたかなもんだね。

モラス。するとそれが目下流行中の極東の神秘、好彩（ホウサイ）の指輪かい。さう言へば誰もかれもみんなしてるやうだ。おれも一つ買はう。

マツト。發賣店、代價その他一さいは番組（プログラム）のうしろに書いてあります――さあ、唄にしよう！

モラス。宜からう。さ、唄だ。いゝか、一二三！――はい、バナナ、はありません、今日はバナナ、は品切れです！

4

この廣告には隨分お金もかゝつたらうが、かうして賣り出したのが、支那好運の指輪「好彩（ホウサイ）」である。くわしいことは裏に出てゐるといふから、はひる時入口で貰つた番組を引つくり返してみると、なるほど、好彩といふ字を浮きぼりにした實物大の指輪の寫眞が載つて、それに一面に文句が刷つてある。安價な舞台よりもこのはうがよつぽど振るつてる。かうだ。

「好運！神秘そのものゝごとき東洋の奥深き内部より、この玄妙きはまる支那王子の記念指輪は來れり。こは幾十世紀のあひだ培はれたる魔力の所産にして、この指輪を帯ぶる者はすべて好運、健康、幸福、長壽及び繁榮を得べしと言ひ傳へらる――とこゝまでが切口上で、それから――もちろん東洋の迷信をそのまゝに受け入れることは出來ませんが、多くの人が實際に試

みた經驗によりますと、この指輪は現代においても見事に好運を呼び寄せるとのことであります。それは女優、銀行家、機械技師、賭博者等社會各方面の知名の方々が、この指輪をはめてから一變して運がよくなつたといつてをらるゝのでもわかりませう。いまや好彩指輪の流行は大したもので、紐育社交界の人氣(ファッ)者となつてをります。あなたの御近處では、あなたこそこの奇妙な護符(メリスマン)を身に着ける最初の人たるべきです。いかにして指輪を活用し、即座に効果を持ち來らしむべきか、その方法については一つ一つの指輪に詳細な説明書が無料でついてゐます。保證純銀製。にせものにまどはされることなく、いま直ぐに男女別、住處姓名を御一報下さい。どんな指にでも合ひますし、もしお氣に召さなければ代金をお返し致します。現金一弗五十仙、C・O・D——代金引換小包——一弗六十仙。紐育市第五街三五三、ザンジバア商會。』

これが當つて、われもわれもと好彩(ホウサイ)の指輪をはめたから、すくなくとも製造元にだけは立派に好運を呼ぶ役目をはたしたわけで、いづれ人を食つた支那人が考案して、より以上に人を食つた猶太人——猶太人は豚だけは食べない——と協力して捕まへた機會の前髪だらうが、それにしてもよくゴウ・ゲタアの心理を摑んだものだ。この好彩に刺戟されて、色んな好運の指環が鐵道沿線分讓地の小住宅(バンガロウ)みたいに飛び出して來て、綠柱玉と藍寶石が十九個ちりばめてあつて金一弗九十八仙の支那孔雀指輪——紐育市パアク街二二一、東洋貿易會社輸入部發賣——といふのや、もつと物凄いのになると、神がかり占ひ指輪——これは Weird Mystic Outfit と稱する何とも薄氣味のわるいやつで、効能書によれば、

『元祖豫言適中神護の指輪。惡靈、病魔、呪詛その他一切をはらふ。古代の驚異。着用者は戀愛・事業・勝負事・人生百般にわたりて成功すること疑ひなし。純金に蛇と神秘幸運の紅玉をあしらひたるもの。今回お申込みの方に限り、不可思議にして興味ある神秘器具一式を添へ、かつ凡ての質問に答ふべし。男女? 愉悦? 仇敵? 結婚? 財產? 金錢? 生活? 好運?——ほかに附錄として小冊子神がかり問答、夢判斷、ならびに奧の手金儲け大全の三部を贈呈す。指輪は正價一弗九十七仙。紐育市東百廿五丁目一〇三ミスト社。』

これが相當商賣になつて立つて往くのをみても、紐育をはじめ全めりけんの男女が如何に好運を追ふに急であるか、まことに思ひ half に過ぎるものがあらう。

わが詩人トダ勝利はこの好彩指輪の忠實な愛用者だつたが、指輪だけでは心細いので、一日原小路一一三ビルデング內、

TARA研究所にダシ師を叩いて、自分の運命に關していろいろと親しく訊いたのだつた。あらゆる方法で機會の前髮を掴んで幸運にありつかうとするゴウ・ゲタアのひとりなんだから、あへて異とするに足るまい。

タラのダシ? Dhassi of Tara ?

またへんてこなことが出て來たやうだが、この驚嘆すべき神通術については、何よりも問題の星學者亞剌比亞人ダシ先生の公表した文獻によるのが早みちのやうだ。たゞ、科學で固めた巨大な立體的凹凸の底に、いかに多くの超自然の蜘蛛の巣が張り渡つてゐることよ。そして、機會の前髮を搜しあぐんだゴウ・ゲタアのむれが、なんと例外なくこゝへ一縷の望みをつなぐことよ——とだけ言つておきたい。およそ亞米利加人ほどめいめい自分に都合のいゝ單純な迷信を抱いてゐる文明人はほかにちよつと類があるまい。このことは、好彩指輪や「タラのダシ」がおびたゞしい歸依者を擁して、表面飽くまでもだあんで無頼で驀途の走ろほど樂天的な紐育つ兒のあひだに、隱然心靈の支配權を主張してゐるのでも、ふたゝび思ひ半ばにすぎるであらう。好運のことゝなると何でも大眞面目なのだから可愛い。詩人トダ勝利もこの點では完全なる紐育つ兒ゴウ・ゲタアであつた。

つぎは星使ダン師のお告げである。——君はどんな星のもとに、いかなる黄道のしるしを背負つて生れて來たか知つてゐるか。またその星兆(サイン)が君の人生にどれだけ大きな影を投げるものであるかを識つてゐるか。戀愛、結婚、交際、相續、企業において君は果して常に好運であり得るか。余は古星學をもつて一生の研究としてきた結果、ここに君の運命を司る黄道帶の前表を掌をさすやうにおしらせし得ることを欣快とする。たゞ君じしんが書いた君の生年月日さへ余の面前にあれば、余は直ちに君の人生の定まれる道を指摘し、君の星の示すところにしたがつて晝夜の行路に強い光明を點ずることが出來る。

何とも有難いきはみだが、この古星學(アストロジイ)といふのは天體の運行が人間におよぼす影響をしらべる學問だといふからちよつと奇妙なわけでむかしバビロニヤとアツシリヤに起つた星うらないが埃及へつたはり、それから希臘羅馬時代になつても人の運命は星座に相談して豫知し得ると一般に信じられてゐた。ことにあらびあ人は基督教義と戰つてこの古星學を遠く西境にひろめたので、歐羅巴は、コペルニカスが現れるまでながらく古星學の示教を受けてゐたといふ。なんでも太陽と月と重立つた遊星の通る道をひつくるめたものが zodiac これが古星學の根本原理、こいつが十二宮に分れてゐて、その一つ一つの星表(サイン)におのおの名前と象徴がある。白羊宮といふのが牡羊、金牛宮てのが牡

牛、その他雙子宮だの巨蟹宮だの獅子座、處女宮、天秤座、天蠍宮、射手座、磨羯宮、寶瓶宮、雙魚宮——と、この十二がまた春夏秋冬に區別されてるんだから、ブロウドウエイのあらびあ星占ひタラ研究所のDHASSI先生は、トダ勝利の生年月日を何うやつてどこへこじつけたのか知らないが、Anyhow、獅子座へでも祭り上げたものとみえて、しばらく沈思默考のゝち獅子にちなんでこんなことを言つた。『あんたは肉類を食し、肉類をあつかひなさい。性にあひます、あんたの星は肉を好むと出とる。うん、とても肉が大すきぢや。』

そして、勝利の脊の低いのを見て、ふつと思ひついたのだらう、ダシ師はおごそかにつけ足した。

『それも細長い肉だな。』

『細長い肉?』

『左様。ほそながい肉類がええな——はい、見料は一弗。』

5

人は誰でも一つの弱點をもつ。

勝利の場合においてはそれは腸詰(ソウセイヂ)だつた。

といふのは、勝利は腸詰には眼がなく、あらゆる種類——すべての腸詰と乾酪(チイス)の名をおぼえこむことはどんな給仕長にも言語學者にも不可能である——その腸詰を紐育から桑港まで縦に並べておいて、自轉車をとばしながら片つぱしから食べちまひたいと日頃から考へてる位ゐだつたから、タラのダシに細長い肉と言はれた刹那、勝利のあたまはたちまち色んな形態の腸詰でそれこそ腸詰それじしんのやうに一ぱいになつた。だから、ふらふらとTARA研究所を立ち出でた勝利は、すでに一つの決心を固めてゐた。人間の「弱い瞬間(ウイーク・モウメント)」といふものは仕ようのないもので、機會の神さまか惡魔かそれはあとでわかるが、まあ、星の命令を尊重して早速腸詰の屋台店でも出してみようと、かれ勝利はそつと手の好彩指輪に祝福の接吻をあたへたのだつた。

好運を追ふ紐育兒ゴウ・ゲタアにとつては、考へるといふことは直ちに着手を意味し、着手は即刻でなければならない。すなはち go-get-it である。It は好運、こゝでは腸詰だ。

フランクフルト、あれだつた、勝利の選定したのは。

場處は下町第三街の横町から横町。

まづ、不幸な腸詰フランクフルトをはち切れさうになるまで熱湯で茹で上げます。一ぱう丸麵麭を蒸器(ステイム)のうへゝ並べて上から相當固く絞つた熱いふきんを掛けて置きます。かうして丸麵麭をいつも柔かくあたゝかくしておいて、一つづつ片面の表皮

を薄く殘して二つに割つて擴げ、兩方の內側へ刷毛で溶牛酪を塗り、辛子を添へ、なかへ腸詰をまるごと挾めて手摑みのまゝ熱いうちにすゝめます――といふのがハット・ドッグ・サンドウヰッチ――正直にサンドウヰッチなんかといふよりもセミチとやつたはうが通りがいゝやうな連中が顧客の大部分だ――で、ばかに簡單なやうだがちよいとこつがある。何しろ白い上着をきて、白い蒸氣を吹く手車の上に突つ立つて、惡たれ、山の神、移民勞働者の通行人を相手に、

「はい・いゝと・しようりす・はつどつぐ・せみち・ひや・ぼういす！ すてつぽうあ&げつちゆうす！ Re l hot for 5 cents――五仙、五仙！ 赤くて熱いぞ、あゝら・BOY！」

なんかと我鳴らなければならないんだから、これだけでも色氣のいの字もあつちやあ出來る仕事ぢやない。加ふるに忙がしくなつてくると兩手の使ひわけが大へんである。左手で丸麵麭を開いて同じ手で腸詰を押し込みながら、右手はお釣りを配つてゐる。同時に口は「はい・いゝと・ひやあ――」といふさわぎで詩人勝利はかくして詩的感傷のすべてを無視しつゝ、人いきれと貧乏と病菌と洗濯物と外國語の渦まく紐育裏町で、愛する腸詰との共同作業をつゞけてゐると、そのためすこしくお金が出來たのはいゝが、あめりかの天も二物は與へない、おかげで勝利は戀人をなくしてしまつた。

考へても見たまへ。詩と戀と腸詰――この三つが鼎立するわけはないぢやないか。

アラベラは悲しかつた。

とかう一つ小說的に出しておいて――。

さて、と――さて、アラベラは悲しかつた。

それにしても、出來るだけ誤解を避けるためにここに斷言しておきたいことは、アラベラつてのは飛行機の部分品ではない。女の名、勝利の戀人である。

このアラベラは、父親といふのが玖馬生れの日本人で、おふくろは西班牙人、必然的にアラベラはあの唄にもある「閃めく眼と物憂い溜息とで柔らかに笑ふ creole の娘」で、黑髮と淺ぐろい顏と白い齒とのいすぱにあ領中央亞米利加人だつたが、アラベラのかなしみは自分が混血兒だつたからではなく、また愛人勝利が腸詰にうつつを拔かしてゐるからでもなく、じつはすこし肥り過ぎてゐたためにほかならない。といふのは、婀娜似柳腰といふわけでもあるまいが、女性美は柳のすがた(ウィロウイ・フィギュア)に限るとあつて、急に瘦せた女が持てはやされて來たのである。で、アラベラは悲しかつた。

[illegible]運を追ふ紐育女ミス・スマアト・セットの登場である。

この噂きのアラベラが現金係として勤めてゐたのが紐育下町の日本人料理店リフ・ラフ・キャフエで、腸詰料理を賣出しにして壁に「ジブルの腸詰に近づく人は賢者に遠さかる」といふすろがんが掛つてゐた。これは腸詰と英吉利風の發音の大嫌ひなアラベラの趣味には全然反してゐるわけだが、職業婦人は趣味で仕事をえらぶことは許されない。腸詰のために勝利を離れた彼女だつたが、こゝでは腸詰のために現金器を叩かなければならなかつた。勝利も何時しかセミチの街上賣りを中止して、アラベラを追つてリフ・ラフへ日參してゐた。

これからがみそなんだ。

が、その前に——。

豚に黄つぽい赤色を見せると、大がいの豚が即座に理智と禮節と責任を感じて紳士的になる。その證據には燻豚はすべて黄つぽい赤の布で包んであるぢやないか。といふので、豚の子——雌雄を問はず——に薄化粧をほどこして、黄つぽい赤いろのりぼんで飾り立てゝ、並樹街でもホテルの大廊でも、好運神として何處へでも伴れて歩くことが一時女たちのあひだに矢鱈に流行つたことがある。これは福の神に對する單なる狂信以外に、美は對照から生ずるといふ美學の原理に立脚してゐて、早いはなしが、どんな女でも豚と較べればすこしは美人だらうし、第一すつきり痩せても見えやうといふものだ。これを要するに何とかして痩せさへすればいゝので、曰く、肥つてる女に戀はない。曰く、ふとつた女が美の關門を通過するのは豚が針の穴を潜るよりも難かしい。肥滿が舞踏すると床が落ちることの、脂肪に着せる海水着はないとの、曰く何、曰くなにといふBUZZ・BUZZ、どうにかして痩せなければならない、痩せたい痩せたいの女性の聲が一九二〇年代の初期に當つて、亞米利加全土に耳を聾せんばかりに湧き起つた。減食、菜食、斷食などの凡ゆる形における節食法が痩せる機械、やせる藥とともに痩せる賢者、やせる專門家——一例、紐育市西三十一丁目三五〇番地のエレイン夫人——痩せる博士の手によつて呈供されて、一

『あらへフジバさん、あなた隨分お痩せになりましたこと！何オンスお減りになつて？』

『いゝえ、あなたこそまあお痩せになつて、お見それ申すところでございましたわ。あたくし？今朝計りましたら、三瓦ほど減つてをりましたの、レビニアさん。』

『まあ！三瓦も！へフジバさん。』

『えゝ！三瓦も！レビニアさん。』

なんかといふふうに、あめりかぢうの女といふ女が痩せんがためにめいめいそれこそ痩せる様な苦勞をすることになつた。

誰かゞ古靴下を發動機油で煮詰めた汁が利くと言ひ出したら、たちまち古い靴下が新しい靴下よりも高價になつたであらうし、また自分の耳を顔に――自分の顔に――附いたまんまで食べるのが一番いゝと知つたら、女達はみんな口を曲げて、なんとかして耳を食べたことであらう――といふのが、そもそも亞米利加にに、巨大な女が多い。ことに猶太人の女などは、處女時代にはさうでもないが一度結婚したとなると、安心するせいか、あれよあれよといふ間に肥り出して、しまひには夫君の手でなくては靴も穿けなくなるのがすくなくない。畫で見ても判るとほり、老孃ミス・グリインは蚊とんぼみたいに痩せてるに反し、ジョウンス夫人は概して河馬が安樂椅子に掛けたやうに肥滿し返つてゐる。さて、安樂椅子と言へば、人類はまだまだ懲りずに新宗教を案出する惡癖を脱し切らないといふ近いためしが、この痩せる方法の一つであるところの、安樂椅子と密接な關係のある「一日一打」(デエリイ・ダズン)なる不可思議な法悦が、あらたに發見された宗教として、映畫とさいころと傳道會社――株式會社――と類つぺた踊りの四十八州を世界風(フルウ)みたいに席卷しはじめたのも、實にこの頃からのことだつた。

めりけん國で新宗教が發見された――まるで油田みたいに――なんかと言ふと、ある人はポウル・ホワイトマンの舞踏交響樂のことだらうと思ふかも知れないし、他の一部の人士は、たに、それあ君腸詰の一種か、さもなけれあ靴下留(ガアタア)の變態ぢやあねえかな、ぐらゐのところで片づけてしまはないとも限らないが、この「毎日一だあす」の痩せる福音だけはれつきとした宗教で、早い話が立派な儀式と正文の祈禱とを備へてゐた。が、神はやきもちやきの神だといふから、こんな妖術を新發見の宗教などゝ稱することは遠慮しなければなるまい。しかし、大たい近代の流行のすべてが宗教みたいなもんで、この辨證はＡＢＣのごとく簡單である。Ａ、宗教も流行も誰かゞ思ひついて何時の間にかひろまる。Ｂ、どつちも個性を沒却した集團的感激を土台とする恐迫觀念みたいなもんだ。Ｃ、ともに異性――男から言つて――にその對象の大部分を置いてゐる。Ｄ、したがつて信者の多くが氣が變りやすいからさう長つゞきはしない。Ｅ、どちらもあんまり夢中になると精神と財政に狂ひを生ずる。など・など・などで、Daily Dqzen の救ひもこのＪＡＺＺ時代のあめりかでは女の流行を通りこして、一つの「あたらしく發見された宗教」であつた。一定の角度に帽子を曲げてかぶる流行が一つの宗教であるやうに。そして小さな手提げ――

手段にはだんだん小さくなつて、しまひに完全に見えなくなる間詞がある——の流行が一つの宗教であるやうに。そしてまた、人類愛・永遠の平和等の標語用抽象名詞の流行が一つの宗教であるやうに——「あゝら・BOY！」

ついでに「あら・BOY」つてのはなかなか洒落た言葉で、字に書いてみれば'That's the boy だが、ごく稀にしか「ザッツ・ゼ・ボウイ」とは言はない。決して言はないといつてもいい。「さうだ、さうだ」「そこだつ！」「うまくやつたぞ」「豪い！」「その通り！」といふやうな意味の感投句であめりか人は一せいに「あゝら・ぼうい」と發音する。なかにはこいつをもう一つ捻つて「えいら・ぼうい！」なんかとぶつけて濟ましてゐるやつもある。

自動車が衝突した——あゝら・ぼうい！
電車の昇降に女の膝が見えた——えいら・ぼうい！
獨立祭の行列に星條旗がひらひらする——えいら・ぼうい！
大統領がメリイ・ピックフオウドと握手した——あゝら・ぼうい！
芝居の幕があく——あら・ぼうい！
陽が照る——そら・ぼうい！
暑い！——あゝら・ぼうい！
なんでもかんでも——あゝら・ぼうい！
そこで——もう一度大聲に「えいら・BOY！」

Every day
In every way,
I'm getting
Better and better.

これがその痩せる魔法「一日一打」の正規祈禱文である。こいつを一日に十二へん唱へると、痩せたい人が立ちどころに痩せることは勿論、すべての心願望んで獲られざるなしといふんだから、何とか博士が自己暗示法（オウト・サヂェッション）として考案發表するや、好彩指輪を一蹴して、一頃は何處へ行つても「えぶり・でい・いん・えぶり・うえい」誰にあつても「えぶり・でい・いん・えぶり・うえい」何をしても「えぶり・でい・いん・えぶり・うえい」だつたが、痩せる目的のためには、宗教のつねとして其のまへに一つの森嚴な儀式を行はなければならない。こゝへさつきの安樂椅子が出てくるのだ。

まづ痩せたいと希ふ婦人は、朝起きたら寢卷のまゝで寢室の絨毯の上を急速度に轉がり廻る。かくして壁へ激突することを十二回、つぎに立つて安樂椅子——重ければ重いほど効能がある

——を十二度空中へ持ち上げる。が、自分で出來ない人は、雇人に持ち上げさせてそばに立つて見てゐてもいゝ。但しこの場合は、その婦人よりも先に雇人と安樂椅子が瘦せてゆくであらう。この「一日一打(デエリイ・ダズン)」の儀式を濟ましたのち、おもむろに窓ぎわに立つて神氣をしづめて十二へん口誦するのだ。

『えぶり・でい・いん・えぶり・うえい——。』といふ有樣で、日ならずしてこの呪文だけが遊離獨立し、それ自身、まんはつたんに飛び交ふ機會の神さまの前髮を摑まへる掛聲に使はれることになつたから、株屋は自動表示機の長卷紙を握つて「えぶり・でい・いん・えぶり・うえい」と眼をつぶり、タイピストはキイを叩きながら「えぶり・でい・いん・えぶり・うえい』と一日も早く佛蘭西の大公爵が蠟づけの髯と婚約とを持つて來て自分の足許へ投げ出さんことを祈り、料理人は鍋をかざして「えぶり・でい・いん・えぶり・うえい」と今朝賭けた馬が番狂(ロング・シヤット)はせを射るやうにと一心不亂に念ずる——はなしは元へ返つて、リフ・ラフ珈琲店だが、現金係アラベラも元戀人トダ勝利もともにこの一日一打の信徒であつた。アラベラは、瘦せてさうしてシンデレラのやうに玉の輿に乘るやうにと儀式と祈禱を怠らなかつたし、勝利は勝利で小さいまゝでも結構ですから好彩の運が向いてきますやうにといふんで、日夜「えぶり・でい・いん・えぶり・うえい」好運を待つて、アラベラはリフ・ラフにぢつとしてゐた。

ところで好運を追ふめりけん・じやつぷは、じつに奇體な言葉を使ふ。縱橫無盡に英語がまじるのは先づ仕方がないとしても、物の値段を「幾ら？」と訊く時 How much? といふので、「いくら」は必ず「はう・まつち」と覺えこんでゐる。それに相違ないんだから差閊へなささうなものだが、用ひ方によつては隨分と珍妙なことにもなる。

『彼奴(ヒム)、ハ・ウマチでも飯を食ふね。』

『金ならハウ・マチでも要るだけ持つてきたまへ。えいら・ぼうい！』

『ハウ・マチでも人を馬鹿にするがいゝや。』なんて調子だ。

——ハウ・マチでも飯を食ふ。いくらでも食べる。全く男つて何してかう食べてばかりゐるんだらう。なんといふ下品な述中だらう。まるで動物みたいに朝早くから押しかけて腸詰のやうにつめこんでまたおなかがすくまでそとにゐて、食慾が出てくるのを待つて歸つて來て、腸詰、おじやが、腸詰——あゝ食べちや氣が荒くなるのも無理がないわ。と瘦せるために減食してゐるアラベラは、男性ことにトダ勝利に對して絶大の憤怒を感じながら、毎日々々下町のリフ・ラフで現金器を前に、「六十五仙——五弗札で戴き——さんくす又何卒(カマゲイン)」とやつてゐると

あるひのこと、女給のひとりが高椅子の上にとまつてゐるアラベラに言つたのである。

『ちよいとアラちやん、あんたに聞かせたいわ。とつても大變なことよ。』

何だか知らないが、さては「えぷり・でい・いん・えぷり・うえい」の一日一打の顯(げん)が見えてきたかと、アラベラは強く胸を押へて訊き返した。

『あら、なあに？』

7

『あのねえ、アラちやん、あのね。』といふ前置きのもとに、その時くだんの女給が話したところによると――。『ショウリさんね、あの、ほら、あんたのいゝ人(スウヰテイ)だつたショウリさん、あいつ詩人だなんてうその皮なのね、お聞きなさいつてば。そのことで面白い事件があるんだからさ――あんたあの人と會つてないでしよ？この頃ぱつたり店へも來ないわね。何してるか知つてる？いま。ジブル腸詰會社の宣傳係りなんですつて。まあ！いけ好かない詩人ねえ。』

で手つ取り早く「豆をこぼして(スピル・ゼ・ビーンズ)」しまふと、好彩指輪のきゝめか、腸詰のおかげか、或ひは一日一打の効能か、とにかく勝利にも幸運がむいてきたわけで、茲に掲げるのがその dope である。

タラのダシ先生の忠告のおかげで戀を失ひ、戀人アラベラの反感のためにセミチ稼業を投げうつた日本詩人トダ勝利は、その後しばらくは奇蹟指輪好彩の法力を信じてアラベラのゐるカフェ・リフ・ラフへ通つて腸詰を平げてゐたが、さういつまでもぼんやりと好運を待つてゐるわけにも往かないので、つひに意を決して友愛職業紹介所の手を經て、身のまはりの召使(ヴアレ)として住みこんだのが、紐育地方裁判所の判事ダニエル・ダニエル氏の邸だつた。ダニエル・ダニエル氏は年配はトダ勝利とおなじくらゐであつたが、有名な獨身主義者で、家には老黑女の料理人がひとりゐるきり、日常の世話はすべて勝利が切りまはさなければならなかつた。だから給料も並外れて宜かつたが、それだけまた忙がしいこともいそがしくて、ことにダニエル・ダニエル氏の綺麗好きなことゝ言つたら、どんな艦長も及ぶまいと思はれるほどで、勝利は好運を追ふどころか用事に追はれつづけて日を送ることゝなつた。が、好彩指輪があんまり頼りにならない以上、かうなれば腸詰だらうが判事だらうがしつかり食ひついてゐざるを得なかつたし、それに實は、ダニエル・ダニエル判事は獨身者の常として矢鱈に人に物品をあたへることが何よりの道樂(ヘビイ)で、

『ショウリ、これをお前にやらう。』

『ありがとうございますダニエルさま。』
『ショウリ、お前にこれをやらう。』
『ありがとうございます、ダニエルさま。』
と萬年筆、ゴルフ服、煙草箱、マイヤアの中世及び近代史、袖扣鈕、去年の帽子、寫眞機のこわれたの、芝居の切符など順々にダニエル・ダニエルからトダ勝利へ所有權を移轉して、しまひには勝利も習癖になつて何も貰らはない日は頭痛がする——なんてふうだつたから、勝利は今にきつと、
『ショウリ、この家と土地をお前にやらう。それから銀行の通帳も、田舍の牧場も。』
なんかとダニエル・ダニエル氏が言ひ出さないものでもない——who knows?——といふんで、ひそかに妍彩の指輪を撫でて待つてゐると、ある朝、出勤の仕度を急いでゐたダニエル・ダニエル氏が、
『ショウリ、これをやらう。』
と拋り出したのを見ると、紫と黄色のだんだら縞の一本のねくたいだ。勝利はショウリイだから洋服なんか貰つても着られないし、こわれた寫眞機はあまり利用の途もないものだが、ネクタイならまあ我慢が出來る——勝利はかう思つた。で、ありがたうございます、ダニエルさまともらつておいた。

一週に一度、金曜日にはダニエル・ダニエル氏が倶樂部で晩餐をとるので、勝利は午後から休み（オフ）といふことにきまつてゐた。
だから、その金曜日の午後、拜領のねくたいで襟元を裝飾した日本詩人トダ勝利が、マデスン廣場で鳩にからかつてゐたのも充分說明のつく現象で、初秋の陽がビルデングへビルデングの影をおとし、ゴウ・ゲタアはスマアト・セットと腕を組み、健康と食慾と企業熱とがあめりかの都會に特有のにほひをつくり出し、ラデオの店からはB・U・N・Kの演藝放送が擴聲されて「はい、バナヽはありません。今日はバナヽは品切れです、」これにすつかり嬉しくされて通行人がお互ひに呼びかけてゆく。「あゝら・BOY!」
耳ががあんとする。紐育の聲だ。
久しぶりに持つ自分の時間を最も有効に消費すべく、勝利は下町のリフ・ラフへ鑵詰料理を食べに行つてアラベラにも會はうと、鳩と別れて歩き出した。と、碁盤縞に包んだおなかを突き出して、赭ら顏にハヴアナをあしらつた紳士が、いきなり勝利のまへに立つた。
『やあ（ヘロウ）!ラカワニアン!』
紳士が昂奮して叫んだ。
『EH?』勝利は皿の上の鑵詰のやうに冷靜だつた。『何です

か。』

『何ですかつて君、ラカワニアンだ！僕のネクタイを見て異れたまへ。』

　みると紳士は勝利と同じ襟飾をしてゐる――むらさきと黄のだんだら縞。

『君はラカワナ大學の出身でせう？　僕もさうです。一九〇五年度。同級にはダニエル・ダニエル判事なんかもゐる。やあ愉快、紐育でラカワニアンにあはうとは思はなかつた。君も昔を忘れずにそのネクタイをしてるとみえますね。いやどうも愉快愉快。さう言へばあの當時支那の方がゐましたよ。』

『僕は日本人です。』

　辯解しながら、勝利は機會の前髪が眼のまへにちらつくのを見た。で、きわめて大膽に應答し出した。

『さうですか。何年度の御卒業です。』

『千九百――七年、だつたと思ひます。』

好彩（ホウサイ）・好運・一日一打――勝利は念じた。

『私より二年あとだ。はゝあ、するとミシガン州の上院議員ジム・デヴイスン君と同級ですね。』

　紳士はなつかしさうにつゞける。同じ大學の卒業生でなければ持つてゐないネクタイを勝利の首に發見してうれしがつてゐるんだが、勝利はダニエル・ダニエル氏から貰つたのだ。ようんと勝利は好運のにほひを嗅いだ。

『さうさう、さうでした。ジミイ、あれもなかなかやつてますな。』

　勝利は汗だくである。が、引くにもひけない。

『利口なやつだからね。あ！　それから、ジョウ・ハウツラア、あの蹴球で鳴らした――。』

『何うしました？』

　勝利はあわてゝきいた。

『死にましたよ、戰爭でね。』

『へえい！　惜しいことをしましたな。』

と眉を寄せる。

『全く。生きてれあ今頃ラカワナの名を上げてる男ですからな。その後學校のはうへは？』

『すこしも顔出ししません。貧乏ひまなしで、はゝゝゝ。』

　これだけは勝利もほんとのことを言つた。

『いや、お互ひさま。いつか講堂を新築するとかつて寄附を言つて來ましたが――。』

『さうでしたね。もう建つたでせう。』

『先生方もすつかり變つたでせうな。』

『何しろ大分前ですからねえ。』
『じつさい。お！　そりやさうとお名前は？』
『トダ勝利。』
『わたくしジブルです。』
たうとう機會——勝利は喜悅を押しかくした。
『ジブルつて、あの腸詰のジブルさん——？』
『さうです。どこかそこらで晩めしでもやりながら話しませう。はからず珍しい方にお會ひして近來の快事です。どうも學校を出ると散らばつてしまひましてね、それに紐育は廣いし——だが、大學ネクタイもなかなか痛快な役をしますね。善き古きヲカワナ！　芝生と校舍、芝生と校舍！』
勝利は默つてうなづいた。二人はそこの大きな料理店へはひつた。壁に廣告がかゝつてゐる。
『ジブル腸詰に近づく人は醫者を遠ざける。』
『あれはあんまり面白くありませんね。』
勝利が言つた。
『さうですか。何かほかに名文句はないでせうか。』
『一日一打のジブル腸詰は他のいかなる一日一打にもまさる、といふのはどうです？』
『えいら・BOY！』

ジブル腸詰會社々長ジブル氏は、感きわまつて卓子ごしに勝利の手を握つた。さうして二人が食堂を出たとき、トダ勝利は高給の契約でジブル腸詰會社宣傳部へ入社してゐた——といふのがアラベラへもたらした女給の報告で、これがうそでない證據には、間もなく紐育ぢうのジブル繪びら（ポスタア）が貼りかへられ、灯の海の廣小路に一大電氣廣告塔が押つ立つたことでもわかる。
『一日一打のジブル腸詰は他のいかなる一日一打にもまさる。』
これが腸詰によつて好運に追ひついた詩人トダ勝利の唯一の傑作だつた。
二三日して下町のリフ・ラフ・キヤフエへ電話がかゝつてきた。
『アラベラさんですか。』
『えゝ。』
『僕と結婚してくれませんか。』
『あゝら・BOY！　ほんと？　えゝえゝ、結婚しませう——けど、あなた何誰？』
B・U・N・K、こちらは紐育放送局であります。

——おはり——

國定忠次

村松梢風

一

或時甲州の紬の文吉は、松井の喜之助に鰍澤の鐵五郎といふ乾兒を二人つれて旅をしてゐた。

或街道筋の茶店で文吉達は休んでゐた。それは秋の終りで、時刻は七つ下りだつた。文吉は、故鄕で、通稱吃安こと武居の安五郎と大きな喧嘩をして、其のために一時國を賣つてゐるのだつた。年齒は卅三か四で、今が賣り出しの盛り、何處へ行つても好い顏で通つた。

喜之助と鐵五郎は文吉が右左の腕と云はれる好い若い者だつた。

三人が休んでゐる處へ、彼方から一人の旅人がやつて來た。さんど笠を冠つて、長い引廻しを被り、勿論脚袢草鞋の、足拵へもきりつとしてゐた。旅びとは非常な早足で歩いて來た。脚の運びがよくもあゝ速に動くと思ふ程早かつた。だから直に三人の方へ近付いて來た。

可成り近付いてから見ると、引き廻しの裾の下へ脇差のこじりが三寸餘りも出てゐた。其の旅びとの風體からみると確かに長脇差に違ひなかつた。こつちの三人は早くもさう見て取つた。

「親分、むかうから來る奴は渡世人らしゆうごさんすね」と喜之助が云つた。

「うんさうだな、渡世人に違えねえ」

「顏は見えないが、氣の利いた男ですね」

「手前、あれア何處の旅人だか知つてるか」

「判りませんね」

「あれア上州者だ」
體の恰好や足拵らへを一と目見たゞけで文吉にはそれが上州の長脇差であることが判つた。
「上州者なら一つ近付きをして見ませうか」
「止せよ、下らねえ」
「だが、どんな野郎だか見て遣り度いものですねえ」
乾兒二人は莫迦に興味をもつたやうな顔をしてそつちを見てゐた。渡世人同士が道で出逢つた場合には双方から名乗り合つて挨拶をするのが其の社會の定法だつた。さふいふことを仁儀と云つた。たとひ名乗り合はないまでも、笠なら一寸傾げて通り過ぎる位は當然の禮儀である。
と云ふ間にかの旅人は茶店の前へ差し掛つたが、緣台へ腰を掛けてゐる三人の方へは眼も呉れずにサッサと通り過ぎやうとした。喜之助と鐵五郎は一寸癪に障つた。
「野郎眼がねえのか、馬鹿にしてやがる」
と云つた具合に緣台から尻を上げた。そして文吉の方を見ると、文吉も「呼び留めて見ろ」といふ眼顔をした。
「モシ〳〵、一寸待つてお呉んなせえ」
と文吉の乾兒が聲を掛けると、先方の旅人はピタッと足を停めると同時にクルッと後を振り向いた。
「お友達ですか」とこつちから云ふと
「お友達ですか」と、旅人の方でも同じやうに云ひ乍ら、廻しをパッとはねのけたと思ふと、手妻のやうに素速く冠つてゐた笠の紐を解いて裏返しに右手に持つた。動作の激しいことは尋常一樣でない。齢頃は四十前後、月代が少しのび、顔の色は稍ゝ蒼白く、巨きな鋭い眼をしてゐる。
文吉は乾兒に任せて置くわけにはいかないから自分が進み出た。
「お控えなせえまし」
「お控えなせえまし」
「何れの貸元か存じませんが、お呼び留め申して濟みません、爰は往來のこと、手前から申し上げますればお控えなすつてお呉んなせえ」
と文吉が云ふと、相手の旅人はおつ冠せるやうに
「いや、手前は少し忙しい旅ですから、御免蒙つて申します、貴方はお控えなすつてお呉んなさい」と云つた。
忙しい旅とは凶狀を持つて歩いてゐるといふ意味でもあつた。體の忙しい者をとらへて長々と仁義の讓り合ひをしてゐることは氣の利かぬ骨頂であつた。
「ではお言葉に從ひまして、どうか仰しやつてお呉んなせえ」

「手前は上州國定村の忠次と云ふ不調法者、どうかお見知り置き下さい」

と云はれて文吉はあッと仰天した。三年續いた凶作で飢渇に苦しんでゐる農民達を救はうため、公儀の飛脚を殺害して御用金三千兩を横奪した國定忠次が國を賣つてから既に幾年か經つてゐた。いまだに國中へ人相書の廻つてゐる日本一の凶状持だ。文吉なぞが甲州の山ん中で子供のやうな、喧嘩をして長脇差の貸元のと云つて見たところで、忠次の前へ出る日には月とすつぽん程貫録の相違があつた。流石の文吉も内心顫え上つた。「飛んだ者に引つ掛つて、どんな因縁をつけられるか」と文吉は後悔したが及ばなかつた。

「さては貴方が國定村の大貸元で御座いましたか、知らぬこととて飛んだ御無禮を致しました。申し遲れましたが手前事は甲州の紬の文吉と申す昨今驅け出しの不束者、何分お見知り置かれてお引立ての程をお願ひ致しまする」

と文吉は汗を流し乍ら云つて、乾兒の方を見ると、喜之助も錢五郎も忠次と聞いて青くなつてガタ〳〵顫へてゐる。

「手前達も國定のお貸元に御挨拶を申さねえか」

と云はれても、二人は物が云へなかつた。仕方がないから文吉が代つて

「是れに居りますは手前の若い者で、喜之助に錢五郎と申します、何分宜ろしうお願ひ仕ります」と云ふと

忠次は

「あゝさうですか、好い若い者だね」と云ひ乍ら直ぐに懐中から小判で二十兩取り出して「文吉さん、初てのお近付だが旅先のことで何も土産が無い。これは僅かだが忠次の志、お前さんの若い者に遣つて貰ひ度い」

「どう致しまして、飛んでもないことです、私の方で貸元に草鞋錢でもお持ちを願はなければなりません」と懐中へ手を入れ掛けると

「まア〳〵」と云ひ乍ら忠次は素速く其の金を文吉の懐ろへ捻ぢ込んで

「ぢやあ文吉さん、俺は急ぐから是れで御免なさいよ」

と云つたかと思ふと、もう何時の間にか笠を冠つてぴゆーッと向うへ行つてしまつた。

二

或る土地に房五郎と云ふ田舍の博奕打があつた。乾兒の三四人位あつて、土地だけの親分……貸元と云はれる身分だつた。

別段渡世人らしい修行をしたわけではないから、世間へ行けば親分で候のと云はれる男ではないが、狭い田舎にだけ居れば大威張りで暮してゐられた。

或時この房五郎の處へ一人の旅人が尋ねて來た。煮〆めたやうな衣物を着て無精らしく月代をのばした四十前の男だ。

「房五郎親分のお宅はこちらでございますか」

丁度房五郎は在宅だつたのでノコ／＼出て行つて

「俺が房五郎だがお前さんは誰だい」

すると旅人は上り端の處へ手を突いて齒切れのいゝ調子で仁義を述べ始めた。自分は上州の大前田英五郎の身内の某といふ者の叉乾兒で三五郎と云ふ驅出者だが、此の度御當所を通行したので房五郎親分にお近付を得たくて參りましたといふ口上。

旅人が尋ねて來れば多少の草鞋錢を持たせて遣るのは博奕打仲間の掟のやうなものだつた。午後の四時過ぎに來た者なら一宿を與へて遣るのが例だつた。房五郎の處へ遣つて來た旅人ももう時刻が遲かつた。

房五郎は相手が見窶らしいなりをしてゐるので頭から高をくくつて

「さうかい、ぢやあとにかく草鞋をときなさい、井戸は裏にあるから裏へ廻つて足でも洗つて來なせえ」と云ふと

「有難う御居います、ではお言葉に甘へて草鞋をとかして頂きます」

旅人は裏へ廻つて井戸端へ行くと盥に洗濯水を入れた儘そつくり置いてあるのを捨てもせずに其の水で足を洗つてしまふと、ザアーッと水を流して盥をチャンと片付けて置いた。

其の晩は寢てしまつたが、旅人は朝暗いうちに起きて、其處らを綺麗に掃除して、表へ水を撒いて、すつかり好い氣持になつたところで靜かに煙草をプカーリ／＼吸つてゐる時分になつて漸う他の者が眼を醒ました。

「客人大層早いな」

「お早うございい」

「おやスッカリ綺麗に掃除が出來てるが、お前さんがやつたのかい」

房五郎夫婦も起きて來て皆一つ所で朝飯を食ひ乍ら

「客人二三日遊んで行つちやどうだい」

「有難う御座います、ぢやあ二三日御厄介になります」

二三日置いて見ると、三五郎といふ其の旅人のすることが實によく行き屆いてゐる。毎朝誰より早く起きて掃除をして水を撒いてしまふ。煙草を吸つてる所へ他の者が起きて來てウロ／＼顏を洗つてる時分には茶釜の湯がシン／＼沸いてしま

ひ、房五郎が梅茶を飲まうと思つて長火鉢の側へ座つて見ると鐵瓶が威勢よく鳴り出し火鉢の中は綺麗に灰をふるつて銅の落しがピカ〱光つてゐる。飯は一番後から座つて一番早く食つてしまふ。人が出掛ける時には履物を揃へる。風呂桶へ水を汲み込んで明るいうちに湯に入れるやうにして自分は誰よりも後から這入るが上つてしまふと其の中で家内中の汚れ物をチヤンと洗濯をして置く。

「客人氣の毒だが油を買つて來てお吳れ」

といふと「へい」と云つて汚い手拭でチョイと頰冠りをして油瓶を提げて行つて來る。走り使ひでも何でもする。よく氣が付いて、することが素速くつて、それでちつともソツがない。

「どうだい今度の旅人さんはよく氣が付くぢやないか」と內の乾兒まで感心してしまつた。

「チョイトお前さん相談があるんだよ」

と房五郎の女房は夫に向つて云つた。

「何だい」

「他でもないが今度來た旅人をお前さんも見ておいでだらう、今迄旅人も隨分來たがあんなによく氣が付いて働く人をわたしや見たことはありませんよ、あれぢや女を三人も使ふより仕事がはかどるんだからね、あんな人をお前さん永く家に置けばどれ丈稼をするか知れやしないから、成る可く臺所へ行かねやうに留めてお置きよ」

「ウン、實あ俺もさう思つてるんだ」

夫婦で話しをしたあとで房五郎は旅人に向つて、

「どうだい三五郎さんお前急ぐ旅なのかい、大して急ぐ旅でもなかつたらもう暫らく遊んで行つちやどうだ」

「有難う御座います、私は何の當てもない體でちつとも急ぐわけぢやありません」

「さうかい、さういふ樂旅なら物は相談だが當分俺ん處で遊んで行つちやあどうだい、小遣ぐれえは拵へて立たして遣るよ、實あ俺ん處には若い者と云つたつてお前も見てゐる通り碌な奴はゐないから、お前が子分同樣にして居て吳れるなら俺も大變助かるといふものだ」

「どう致しまして、私のやうな端た野郎が居たつてお邪魔にこそなれ何のお役にも立つものぢやありませんが、こちら樣で置いて下さるなら何時迄も御厄介になりたう御座います」

「ぢやあとにかく二月三月遊んでゐると決めなせえ、若し氣に入つたら一年居たつて構やしない」

「私の方は、出て行けと仰しやる迄、一年が二年でも、一生でも御厄介になるつもりです」

旅人は五六日房五郎の家で働いてゐた。

すると、丁度其の頃其の土地で大きな博奕が出來た、房五郎はそれへ出掛けて行つたが運惡く負け續けで到頭百五十兩の星をしよつてしまつた。房五郎は青くなつてしまつた。我家に歸つて女房と額を集めて相談したが、田舎の博奕打の身分で百五十兩といふ大金の調達が出來やう道理はなかつた、けれども房五郎も、假りにも土地で親分とか何の頭とか云はれてゐる男であつて見れば、盆の上の借金をたゞ返せませんぢやあ事が濟まない、坊主になつて謝罪つたつて先方が承知して呉れなければ仕方がないから、腹を切るか夜逃げをするの二みちより外に思案はなかつた。腹を切るのも辛いがさりとて夜逃げをするのも情ない話だ。

夫婦が奥の間でヒソ〳〵相談をしてゐると、唐紙を靜かにあけて三五郎といふ旅人が其處へ這入つて來た。

「親分どうなすつたんですか」

房五郎はびつくりして

「何だ客人ぢやあないか、お前何んだつて斷りもなしにこんなところへ這入つて來た」

「いや是れア申譯ありません。實あ今何氣なく障子の外で貴方がたのお話を立ち聞したんですが、お前さん百五十兩ホシが出來たんですか」

「聞かれてしまつたら仕方がない、いかにも其の通りだ、こんな事はお前なんぞの知つたことぢやあねえ、默つて向ふへ行つてねえ」

「併し、百五十兩あれあいゝんでせう」

「それア百五十兩あれア文句はねえが、百五十兩と云やあ大枚の金だ、それが出來ねえから俺も苦勞してゐるのだ」

「百五十兩ツきりでいゝんですね」

「エ？此の野郎おかしなことを云ふねえ、百五十兩と云やあ手前なんか見たこともねえ大金だぞ、一生働いたつて出來るわけのもんぢやあねえ、百五十兩だ、錢で百五十ぢやねえぞ」

「房五郎親分、僕あ年から年中旅をして歩いてゐるが何にも道樂はございません、煙草は好きですが酒は飲まず、女郎買なんざ勿論いたしません、僕あ只錢を溜めるのが道樂なんです。旅人位結構なものはありません、只で泊めて貰つて立つ時には若干か草鞋錢を貰つて立ちます、永年旅をして歩いて、貰ひ溜めた金が丁度こゝに百五十兩ありますからどうか是れを使つておくんなせえ」

と云つて旅人は胴卷の中から切り餅で百五十兩の小判を揃へて房五郎の前へ置いた。房五郎も女房もあつと魂消てしまつ

た。

房五郎は旅人の顔を穴のあく程見てから云つた。

「客人、俺あ心配事で氣がイラ〳〵してゐたもんだからお前さんを見下げたやうなことを云つて濟まなかつたが、どうか氣を悪くしないでお吳んなせえ、併し、お前の深切は分つたが、其の金を借りて俺が使ふわけにやあいかねえから早くそつちへ仕舞ひなせえ」

「何故使つて下さらないんです」

「何故と云つて考へて見なせえ、お前さんが俺ん處へ來て草鞋を脱いでからまだ四日か五日にしかならねえ、俺に目がねえんだから仕方がねえが、其の間お前さんをお三どん同様にコキ使つたばかりで何の世話もしちやあゐねえ、其のお前さんから大枚百五十兩の金を借りるなんてことが出來るもんぢやねえ」

「それァそうか知らんが、儂の方から云ふと、たとひ三日でも四日でも飯を食はして置いて貰つた家の主人が腹を切るか夜逃げをするかといふ場合に、自分が金を持つてながら知らぬ顔をしちやゐられません。心配なさらなくつても、何、百五十兩位の金は又三年か四年旅をしてゐれあ溜る金です、遠慮なく是れを使つて難場を凌いでお吳んなさい」

「客人、改めてお前さんに尋ねるが、私は此の通り田舍の博奕打だ、ろくに話もしたことはなく、世間の貸元衆のお名前も知らない、土地だけの博奕打だから、何んにも存じません、どうかお前さんのお名前を聞かしてお吳んなさい」

「儂は三五郎なんで」

「冗談云つちやいけない、三五郎なんて聞いたこともねえ名だ、お前さんは何處のなにがしといふ立派な名前のある人に違えねえ、どうか本名を聞かしてお吳んなさい」

「本名にも戒名にも三五郎より外に名前は御座いません」

「それやいけない、いくら俺が田舍者でも馬抜けでもこれ位のことは判る、馬鹿にしないで云つてお吳んなさい」

旅人は一寸考へて

「ぢや云ひますが、明日の朝のことにしてお吳んなさい」

「今云つたらいゝぢやありませんか」

「いや今は一寸都合が惡いから、明日の朝迄待つて貰ひ度い、そこでとにかく此の金は使つてお吳んなさい」

「お前さんが本名を名乘つて吳れたら有難く借りるかも知れない」

「ではそれ迄預かつて居てお吳んなさい」

「さうですか、ぢやあ確かに預りました」

其の翌朝房五郎が起きて見ると旅人はいつもの通り綺麗に掃

除をして表へ水を撒き、水がめの中へも一杯水を張つてすつかりしてしまつて上り口の處へ腰を掛けて煙草をふかしてゐるから

「客人お早う」と云つて側へ行くと、旅人は草鞋をはき脚袢をつけてすつかり足ごしらへが出來てゐた。

「客人、どうしなすつた！」

「房五郎親分、大層お世話になりましたが、今朝立つことに致します、お前さんも體を丈夫に暮してお呉んなさい」

「足許から鳥が立つやうでどうも驚いたが、何でも立つと云ふなら無理に止めやしません、處で、約束だからお前さんの本名を聞かして下さい」

旅人はずつと房五郎の側へ身をすり寄せ、相手の顏に鋭い眼を注ぎながら

「俺は國定忠次といふ者だ」と云つた。

房五郎は「あッ！」と口をあいて後へ倒れんばかりになつた。

忠次は其の間につーッと行つてしまつた。

（完）



當なし行脚（其二）

ロシヤ大使＝アイヌ＝アカシヤ＝自殺

堺利彦

一　函館灣の早朝

夏の夜あけ、而もそれが海の上だ。只これ一つだけの爲にでも、こゝまで來た値打はあると思はれたほどの好い氣持で、七月卅一日午前五時前、私は汽船津輕丸の甲板に立つて函館灣の景色を眺めて居た。

暑い時だから涼しい處にといふ、極めて平凡な考へから、今度の行脚先を北海道にきめたのだが、そこに果して面白い寶の山があるかどうか。私は函館の市街と、そのうしろの山とに對して、多少不安に似た感じを持つて居た。

然し何しろ愉快だ。美しい大きな汽船が、音らしい音も立てず、波らしい波も起さず、まだ眠つている函館灣のウツスリした朝霧の中に滑りこんで、ボオオ、ボオオといふ、太い、低い、柔らかな汽笛を一つ遠慮がちに發したきりで、棧橋に横づけになつた。

アルパカの詰襟服を着て、パナマ帽をかぶつて、小かばんを一つ提げた私は、少し寒さを覺えながら、生れて初めて北海道に上陸した。（これまでの行脚記に、私は自分の風體を書かなかつたが、それでは讀者の目にうつる私といふ者の印象がボンヤリして、面白くないといふ説があつたので、今後は大體それ

も書く事にした。どうぞ諸君、右の通りの、瀟洒な（？）楚々たる（！）風體の旅客として、そのうしろ姿でも想像して見て下さい。但し前回および前々回の風體は、モツト奇拔なものだつたのですが、これをこゝに書きそへては、今度の印象を害するだらうから、書かないで置きます。）

私は先づ待合所の食堂にはいつてオートミールを食つた。次にポケットから地圖を出して函館市および其の附近の形勢を案じた。その時まで、私の足はどちらに向ふべきか、まだ極まつて居なかつた。もちろん私にも多少の豫備智識はあつた。湯の川溫泉、五稜廓、トラピスト修道院、それらが此の土地の遊覽所である事は心得ていた。そこで先づ湯の川、大體それときめて、今度は土地の新聞を一讀した。すると、そこに、ロシヤの大使ドブガレフスキー氏が避暑の爲め來函して、湯の川に滯在して居るといふ記事が目についた。これは面白い！　と云つて、何も私がロシヤ大使を訪問しようといふ野心を持つたわけでもないが、兎にかくそんな事で、私の湯の川行がいよ〳〵確定した。

新聞の記事に依ると、昨日あたり、ドブガレフヌキー氏に對して何か脅迫狀めいた物を送つた者があると云ふので、新聞記者が氏を訪問して、それに關する氏の感想を尋ねたところ、氏は棒縞の浴衣といふ無頓着な風采で記者に面會し、そんな事はいつこう氣にとめて居ないと語つたとある。私は此の謂ゆる『勞農ロシヤ』即ち正式には『社會主義ソヴイエット共和國聯盟』の日本駐剳全權大使の『棒縞の浴衣』姿だけは、是非チョット餘所ながらでも見たいと思つた。

二　湯の川の海水浴

電車に乘つて二十分間ばかり、野球の選手らしい學生の一群と、片田舍の一部落をこぞつて編成したかと思はれるお婆さんの一隊と、老少新舊のずいぶんなコントラストの間に蒸されると、わけなく湯の川の終點におろされた。こゝは一見して平凡な溫泉地だが、『津輕海峽に臨んで風光佳く、函館人士の遊樂地』だと云ふのだから、可なりに脂粉の氣は濃厚らしい。小いさな橋を一つ越えると、そこには根崎溫泉といふ別の名があつて、その海岸には朝から海水浴の客がチラホラ見える。今日は殊に丑の日で、海につかる女達が多いといふ。

私は偶然に出來た道づれと三人で、或る旅館の二階にあがつた。目の下に海水浴場が見える。海水浴場と云つて別に設備があるのではない。只だ自然に、そこの海で人が泳いでるし、その砂原で人が遊んでる。沖には昆布を取る船がたくさん出て

いる。海岸には昆布の干場もある。昆布ほしの男女と、海水浴の男女とのコントラストも却つて面白い。總てが隔つた趣きと、當世風との並行であり、折衷であり、混雑である。

フト右手の、砂の丘の上に引きあげてある船のかたわらを、一組の男女の通つて行くのが目についた。『あれは西洋人ですね』と、私の連れの一人が云つた。成るほど、女はネマキのやうな物を着てるし男は日本服の浴衣を着てるが、二人とも大きな體格で、その歩きぶりがどうしても日本人ではない。『新聞に、ロシアの大使がこゝに來てると書いてあつたが、あれがそれかも知れませんね』と、私は連れの二人の意見を求めたが、二人は何とも答へなかつた。そして西洋人の夫婦は家の蔭に隱れてしまつた。思ふに彼等は、朝の海水浴を終つて、今歸つて行つたのだらう。

私達は浴衣に着かえて、風呂にはいつて來て、好い氣持になつて再び欄干にもたれた。欄干の眞下に奇麗な、透きとほつた、靑く光る、小いさな流れがある。底に何か靑い物が沈澱してるらしい。善く見ると、薄い湯氣がホヤリホヤリその流れから立ち登つている。『あゝ、これが溫泉の湯のあふれだな』と、連れの一人が云つた時には、丁度私もそうだらうと氣がついて居た。

私達は其宿の裏口から外に出た。靑い小流れを跨ぐついでに、一人の男は少しくかゞんで、手の先をちよいと其の流れにつけて見た。『アヽ、あつい！』と彼は叫んだ。あとの一人もその通りの眞似をして、其の通りの叫びを擧げた。二人は頻りに湯の熱いことを感嘆しつゝ海岸に出た。

湯は熱いが海岸は涼しい。『この分ぢやア午後になつたら大變な人出だらう』『皆がさぞ色々な海水着を見せに來るだらう』などと話しあつてる人達もあつた。體格の好い三人づれの、好い意味のモダンガールが、それこそ得意らしい揃ひの海水着を着て、今丁度、海からあがつて來た。『あの左側のは西洋人ですね。』私の連れの一人が云つた。『どうだらう、あの見事な體格は！』今一人はそう云つた。『然し日本人の方もずいぶん立派ですね。』『よく揃つてますね。』『近來、日本の女は著るしく體格を好くした樣ですな。』『あれらは先づ傑作ですな。』やがて彼等は砂の上に尻をおろし、足を海の方に投げだして、それぞれ派手なパラソルをかざして居た。

三　海水着の女達

私等は旅館に戻つて飯を食つた。それが私に取つては晝飯、連れの二人に取つては朝飯だつた。偶然の道連れには、いろい

ろたチグハグがある。飯が済むと、彼等はもう立つと云ふ。私はまだ少し殘りおしい。双方とも妥協が出來ない。結局、彼等は行つてしまひ、私はひとり後に殘つた。『この邊には大ぶん西洋人が居る樣だな』と女中に聞いて見ると、こゝにも少し居る、が、函館にはたくさん居ると云ふ。ロシヤの大使の事を聞いて見ると、それはたしか、この先の方に家を借りて居るそうだと云ふ。先つき、そこを通つた、浴衣を着た西洋人がそれでは無いだらうかと聞いて見ると、それはどうだか分らないと云ふ。それ以上、要領を得られそうもないので、私の例の探檢に掛つた。

グッスリ二三時間も寢て、目をさまして海岸を見ると、大變な賑ひだ。そこら一町ばかりの間、砂原から海面にかけて蟻の群のような人出だ。私も飛びだして其の群の中にはいつた。然し私は獨りぽつちだつた。謂ゆる三々五々、あちらにも、こちらにも、一組づつ、立つて居るのもあり、歩いて居るのもあり、泳いで居るのもあり、休んで居るのもあり、靜かに話して居るのもあり、キヤツ〳〵と笑つて居るのもあり、フザけちらして居るのもあり、逃げたり追ひかけたりして居るのもある中に、只つた一人の遠方の客が、連れもなく、話相手もなく、ポツネンと立つてるのはちよつと寂しい心持だつた。

然し私は直ぐにその寂しさの味はひを知つた。そうした境遇の私であればこそ、今この場合、しみじみと、この賑ひを見物する事が出來るのだ。私は浴衣の裾をからげてハダシになり、下駄を片手にさげたまゝ、波打際をブラリ〳〵歩いて見たり、砂原をあちらこちらに横ぎつて見たり、或時は甲の群を眺め、或時は乙の組のかたわらに立ち、或時は又丙の連中の跡を追つたが、誰ひとり私を咎める者もなく、怪しむ者もなかつた。恐らく私の存在に少しでも注意した者もなかつたらう。

私は帽子も忘れて飛びだしたのだが、幸ひ扇子を持つて居たので、それを折々頭にかざして日光を防いだ。午後の日光はずいぶん强かつたが、海上の軟風はその暑さを消すほどに凉しかつた。

遊んでる人達は種々雜多であつた。男女學生、店員、サラリーメン、勞働者、小紳士、中紳士、奥さん、女中、藝妓、娘、子供、犬、その外、おかみさん、おばあさん、おぢいさんなど、あらゆる名稱、あらゆる資格があつた。その中でも殊に目立つのは、例の海水着を見せて居る若い女達で、それにも二種類があつた。即ち一種はモダンガールであり、一種は色町の人人であつた。

然しそれよりもまだ目立つのは外人であつた。この邊の人は

——當　な　し　行　闕——

多く『外人』といふ言葉を使つて居るやうだ。私は先づ一組の女外人を見つけた。

四　豊富な臀肉の筆致

一組と云つても、それは偉大な女外人ふたりであつた。一人は紫がかつた海水着を着て、砂原の上に腹這ひになつて居た。今一人はそれと殆ど直角に足を投げだし、半身を起して左の手に支へて居た。着物は何だか知らんが薄い輕い物をまとうて居た。何しろ二人とも其の體格の偉大な事が一通りでない。殊に紫の海水着のムク〳〵とした樣子は實に雄大莊嚴であつた。年は二人とも、もう餘り若くはない樣に見えた。

次に私の見つけたのは夫婦らしい中年の男女で、男は細かい格子縞の縮みの浴衣を着て、靴をはき、女は前のと同じく何か知らんが薄い物をまとうて、これも白い靴をはき、男は毛繻子かとも見える古ぼけた蝙蝠傘をさして足を投げだして居り、女は小さな日傘をさして男の横に寢そべつて居た。若しこの男の着物が棒縞の浴衣であつたなら、私は直ちにそれをドブガレフスキー閣下と認定するに躊躇しなかつたらうが、何分にも格子縞の縮みでは少し證據が薄弱である。然し私が幾度も幾度も其の前の方を行つたり來たりして、蝙蝠傘の中をのぞいて見た所に依ると、その人の圓い顔と、ギロ〳〵した目と、禿げた大きな頭とが、どうも曾て新聞で見たドブ氏の寫眞に似て居る樣な氣がした。今朝、船のかたわらを通つた夫婦の顏は見えなかつたが、恰好は正にあれとこれと同じである。そして其の船のかたはらの道は、宿の女中が、ロシヤの大使なら直ぐそこに家を持つて居ると云つた、その方角に通じて居る。あれこれを綜合して、私はこの男女をドブ氏夫婦と極めてしまつた。

この男女の直ぐ前の海面には、又一組の男女の外人が泳いで居た。彼等は暫くして上つて來たが、男の方は背の高い、いがぐり頭の好男子で、どうも見た事がある樣な氣がした。いつだつたか報知講堂でロシヤの民謠の會があつた時、私はそこでロシヤの大使館員だといふ、外人には珍らしい、いがぐり頭の、立派な人を見た事がある。どうもそのいがぐりと、このいがぐりと、同じ人である樣な氣がした。その男女はドブ氏夫妻のそばにやつて來て、女はドブ夫人と並んで身を横たへ、男はその前の方で砂を掘つて池を拵へたりして居た。

私はそれから、この人ごみの中で主人にはぐれたらしい犬の、心配そうにウロ〳〵して居るのを見たり、砂の丘の横腹に火を焚いて、鍋を持つて來て芋か何か煮て居る子供達を見たりして居る中、何だか知らんが向ふの方に大變な人だかりのし

てるのに氣がついた。これは確かに一事件に相違ないと、少し急ぎ足でそこに近寄つて見ると、何アんだ、例の油繪かきだ。然しその繪が頗る奇拔だ。大き女が海水着の姿で砂の上に腹這ひになつて居る。畫家は今その海水着の處を紫がかつた色で塗りつゝある。あゝあれだ！。私はそう思つて向ふを見ると、即ちそこに、先きの雄大な女外人が横たわつて居る。

この繪の奇拔な點は、雄大な女外人の腹這ひ姿を選んだといふ處にあるのは勿論だが、殊にその豐富な臀肉を、脊推から急角度で、圓い山の樣に隆起させて居る、その大膽な筆致に多大の妙味がある。畫家は今その臀肉の圓い山を黑味がゝつた紫に塗りつゝある。私はこの畫家を凡手でないと思つた。

五　臀肉隆起の中心點

餘り人立が多いので、私はそこを去つて暫らく砂原に尻をおろし、一群のはしやいだ女達――夏帶のキリリとした結びざまなどに水ぎわの立つて居る人達――が、白い足を波先に洗はせてキヤツ〳〵と騷いで居るのを、面白く眺めて居た。然し私はその間にも、折々首をうしろにむけて、かの偉大な女達と、その姿を寫す畫家を見ないでは居られなかつた。

今、私が見返つた時には、偉大な女達のそばに、更に他の外人の男女の一組がやつて來て居た。そしてそれが、おゝあの、外ならぬドブガレ氏夫妻であつた。ドブ氏は例の古ぼけた蝙蝠傘をさし、格子縞の縮みに細いしごき帶をダラリと結んだ恰好が、ずいぶん脫俗的であつた。ドブ夫人も可なりのデブ婦人で、小い日傘をかざした恰好が頗る面白かつた。二人は偉大な女達の傍らに尻をおろして、何か頻りに語りあつて居たが、やがて彼等は一齊に顏をうしろに向けて、かの畫家の方を見やつた。暫らくすると、一人の偉大婦人――腹這でない方の――がすつくと立ちあがつて畫家の方に走りだした。

それを見た畫家の群には歡聲のどよめきが起つた。偉大婦人はそこに走りついて、群集のうしろから畫面をのぞきこんだ。彼女は大いに笑つて居るらしかつた。ドブ氏夫妻は折々それを見やつて居たが、腹這ひ婦人は身動きもせず、依然として其の臀肉を隆起させて居た。やがて偉大婦人が何か叫びながら走り戾つて來た。皆が一度にドツト高笑ひを破裂させた。臀肉婦人も初めて、首をうしろにねぢむけて畫家の方を見やつた。その首をねぢむけた時の、脊中から臀部にかけての姿勢が又、何とも云はれぬ微妙甚深な曲線美を示して居た。

海の方から又一組の、海水着の外人男女がやつて來た。それは先程の、いがぐり脊高の好男子と、その妻とであつた。彼等

は又泳いで居たのだつた。彼等がドブ氏のそばに來て立つと、何を聞かされたか、急に又笑ひだした。そして脊高氏は直ぐに又畫家の方に走つて行つた。

私がその次に振向いた時には、畫家の群は全く解散して居た。カンバスは獨り空しく砂の上に立つて居た。畫家は何處に行つたのか。黒い脊廣に玉子色のズボンをはいた、髮の長い彼は、ボヘミヤン・ネクタイを風にひらく\させながら、砂の上の舟にもたれて休息して居る。小さい弟の手をひいた若い娘がひとりその近くに立つて、何か彼と話して居る。畫家はたしかに此の娘に於いて一人の知己を見いだしたのだらう。

私も畫家と一言を交へる機會を得たいものだと思つて、ブラブラそちらに足を向けた。然し私は彼に近づいた時、急に躊躇した。彼は今、若い娘と物語る機會を有して居る。その機會の前には、私が彼と一言を交へる機會なんどは、物の數でない。私はその近くに立つて居るさへ氣兼だつた。所が、彼等は極めて淡白だつた。『サア、もすこし勉强するかな』と、畫家が長い髮を右の指にくしけづつて立ちあがると、『早くかいておしまいなさいよ』と、娘は靜かにそれを勵ます。

畫家は再びカンバスの前に立つた。私は娘と共にそのうしろに立つた。畫面は四五人の男女の、腹這ひになつた、寢そべつた、うづくまつた、種々の姿勢を寫しだして甚だ面白い配合を現出して居るが、何と云つても、例の紫色の膚肉の圓い山が此の景色の中心だつた。今ドブ氏の一群は、この畫面とは餘ほど違つた位置を示して居るが、膚肉隆起の中心點だけは、依然として元の儘だつた。

又その一群には、若い痩形の娘だの、茶目の少年だのが加はつて、いよく\賑かになつて居たが、やがて其の茶目少年が我我の方に走つて來た。『おいペンキ屋さん、もうスツカリ出來ちやつたかい。』彼れの日本語は流暢を極めて居る。彼はまだ十三四歲だらうが、畫家よりも、私よりも、少し脊が高い。『ペンキ屋さん』を以つて呼びかけられた畫家は、頻りに畫面を見直し見直して居たが、『あんまりお尻の角度を急にしすぎたもんだから變になつちやつた』と、知己の娘さんを顧みて云つた。『先つき、あのそら、髮の短い人がやつて來て、このお尻をモットでつかくしろッて、そう云つたもんだからね。』彼は今度は茶目少年に向つて話して居た。すると茶目少年は面白がつて、『ヘエ！あの人がかい？。モット此のお尻を大きくしろッてかい？。ヘエエ！。おかしいなア、おかしいなア。』彼はそう云つて笑ひくづれながら、又あちらに走つて行つた。

日は漸く夕景色を帶びて來た。海岸の人影がまばらになつ

た。ドブ氏の一群も皆な打連れて歸路に就いた。臀肉婦人は立姿も素晴らしかつた。私はドブ氏の脫俗的なうしろ姿をつくづく眺めた。只その浴衣の棒縞でないだけが、何となく私に物足りなかつた。

六　五稜廓その他

その夜、私は湯の川の『千人風呂』にとまつた。根崎に『萬人風呂』もあつたが、少い方が私の心を引いた。

扨、私は偶然にもドブガレフスキー氏に依つて第一日の記事の材料を得たが、第二日以後はどうするか。當なし行脚が當を拵へるに苦しむ。私は夕飯の膳の上で札幌ビールを飲みながら考へた。今朝の新聞に、ドブ氏が避暑地を北海道に選んだ理由の中、アイヌを見るといふ一個條のあつた事を思ひ出した。私も北海道を行脚地に選んだ時、アイヌの事は先づ頭に浮んで居た。よし、それを一つ、差當りの當にして見よう。

この近處に何處かアイヌの居る處は無いかと、先づ女中に尋ねて見ると『そうですね、メノコなら居ますけど』と云ふ。メノコが何處に居ると聞くと、函館の遊廓に居るといふ。『だけど、メノコだつて別に變りはありませんよ。只だ毛深いだけです。』

八月一日朝、私は湯の川から函館へ戻る順路として、有名な五稜廓を見た。トラピストには行つて見る氣になれなかつた。五稜廓は延長千五百間に亘る五陵形の濠を廻らした、日本最初の洋式築城の迹である。その五陵形を星の形、或は桔梗の花の形と云はれて、急に床しい感じがした。濠にはボートが浮び、城內は公園になつて居る。公園には茶店が二三軒あつて、人がチラホラ遊んで居る。茶店には『榎本だんご』『武揚羊羹』などの看板が見える。榎本武揚等に代表された德川幕府の勢力がこゝで最後の息を引取つたのである。滅亡の美と、勝利の美が、この公園の中に結合されて居る。次の滅亡と、次の勝利はいつだらう。高い大きな松の木の下の涼しそうなベンチの上に、絆天着の勞働者がふたり、好い氣持そうにグツスリ寢こんで居る。恐らく失業者だらう。

電車に乘つて大門前まで戾つた。大門と云ふのは遊廓の大門ださうだ。毛深いメノコの女郎の居るのはここだらう。私はレストランにはいつて、サンドヰッチを食つた。珍らしい事には、こゝで蕎麥も食はせる。ちよつと東京の藪の味がした。但し汁のからいのと、蠅の多いのには閉口した。

何かアイヌに關する本を見たいと思つて、函館公園の圖書館を尋ねた。丁度今改築中で、本は見せないと云ふ。然し館長さ

んだらう、實直な、半白の髪を長くした、學者らしい人が出て、いろ〳〵親切に教へてくれた。それで私は長萬部で汽車を降りるといふ一つの當を得た。

その歸りの暑い暑い電車の中で、次の様な會話を聞いた。『アラいつお歸りなすつたの。』『今朝歸つたのですけど、まだ内にも行かないで駈けずりまわつてますの。』『あちらもお暑いでせう。』『暑いの何んのつて、そりや又別ですよ。』『さうでせう。あの……何處か入らしつて。』『えゝ只つた一度、……歌舞伎に。』

私が驛前で電車を降りた時、その東京がへりの婦人も一緒に降りた。私はアイヌを見るべく長萬部（オシャマンベ）に向つて汽車に乘つた。

七　大沼と駒が嶽

長萬部へ行く途中、ぜひ大沼を見物せよと教へた人があつた。私は單なる風景の觀賞者には餘りなりたくないのだけれども、狷介不羈とも云ふべき駒が嶽の雄姿を、汽車の中で隣席の人から指ざし示されて、大沼の水上からあの山を望んだ氣持は何とも云はれぬと聞いた時、ではツイ一晩、道草を食ふかといふ氣になつた。

東京にも劣らぬ宵の暑さが、さすがに夕刻はメツキリ涼しくなつた丈、私は小さなカバンを提げてセカ〳〵と改札口に出た。十間ばかり向ふには宿引の一隊が道を塞いで、次々にかしましく名乘を擧げている。私はこれを突破する勇氣もなく、されば と云つて、どの敵の手に捕虜されようといふ判斷もつかず、只だ逡巡として進みかねて居ると、丁度手頃な客とでも思つたか、ツイ驛前の小いさな宿屋の男が近づいて來て、無理やり私をその店に追ひこんでしまつた。

湯に入つて浴衣を着て、ぶら〳〵散歩して、沼に臨んだ『廣場』に出た。廣場の周圍には堂々たる旅館が並んでいる。自分も一かどそこらの客だといふ氣持になつて置く。廣場から島へかけた橋の袂に、ボートや小舟や艀舟や大形の遊覽船が繋いである。私も其の小舟の一つに飛び乘つた。船頭は直ぐに其の小舟に棹をさして、大小無數の島々の間を縫うて、沼の面を經めぐつた。成るほど好い眺めだ。そして好い氣持だ。靜かで、落ちついて、そして何處か沈鬱な趣きがある。駒が嶽の左の一角が鋭く聳え立つて、それからズツト右の方に傾斜した險しい山頂が大きな火山口を作つて、そしてその中に水を湛えて居るが、ツイ數年前まではずいぶん盛んな活火山であつたといふ。そんな話を聞いて居ると、夕暮の沼の眺めがいよ〳〵凄味を帶びて來る。

所が、まだそればかりでない。駒が嶽の火山口が湖水を爲して居るのと同じく、更に此の大沼その者が遠い昔の大火山口であつて、駒が嶽は實に其の大火山口の周邊の一部分に過ぎないかも知れぬといふ話を聞くと、趣味は一層加はつて來る。

然しそれは自然界の歴史だ。別に人間界の歴史がある。まださして古い事でもあるまい。案内記の記す所に依ると、蝦夷の治廳が松前に置かれてあつた頃、松前藩の代官が駒が嶽山麓のアイヌと衝突し、頗る苦戰に陷つた。その時、相原周防の守なる者が愛馬に跨つて只一人、湖水を横切つて敵地に迫つたが、今の村屋島の附近に於いて、愛馬もろとも、湖底深く沈んでしまつた。

今一つの案内記に依れば、永正十年六月、蝦夷蜂起し大館(松前)を攻む。館主相原周防の守季胤、戰に敗れて其二姫と共に逃れて大沼湖畔に至る。蝦夷追ひ來りて亂鬪す。季胤馬を踊らして湖中に入ること蛸の如く、即ち自刃して死す。二姫亦た石を結びて小沼に沈む、とある。

これは日本側の歴史であるが、若しアイヌ側の歴史が傳はつて居たら、この時大いに日本軍を苦しめ、多くの日本武士を殺した事について幾多の英雄美談がある事だらう。兎にかく其の頃までは、アイヌがまだ日本人と對抗した、獨立の一種族であつたのだ。私はそんな事を考へたりして、更に駒が獄を仰ぎ見た。あの峻峭な休火山の山麓に、今でもヒヨウカンなアイヌの一族が隱れ住んで、機を見てシヤモ地の侵略を企てるのではないだらうかと云つた樣な、ロマンチツクな空想にさへ耽つた。

宿に歸つて私は又サツポロビールを飲みながら、何處かこの邊にアイヌの居る處はないかと、給仕の女中さんに尋ねて見た。その女中は女中らしくない女中で、話が要領を得て居つた。この邊には居ないが、これから小樽札幌方面に向つて行く途中、噴火灣の沿岸の八雲(ヤクモ)、長萬部あたりには、少しのアイヌ部落がある。八雲は德川農場の所在地で、有名な德川義親さんの熊狩も、主として之のアイヌを使つてやるのらしい。八雲と長萬部との間に國縫(クンヌイ)といふ驛がある。そこから十里ばかり横にはいつた處に今金(イマカンヌ)といふ村がある。そこが此の女中さんの育つた處で、その近くにもアイヌの部落があるので、彼女は可なり詳しくアイヌの事を知つて居た。『どこも別に變つた處はありませんよ。只だ毛深いばかりで。』『毛深いといふ特徴は、どこの女中さんの云ふ所も同じだ。私が函館の遊廓のメノコの話をすると、『これは幾らも居ませうよ。メノコにも美しい人が多いのですから。』この人、いつこうアイヌを輕蔑して居ない。それから彼女は又、アイヌの浪花節語りの話をして聞かせた。その若いアイ

ヌは浪花節が大變に上手で、到る處で持てはやされたもので、そして先から先に、取りかへ引きかえ、シャモの女を女房にして居た。

アイヌの話はその邊で終つた。私は女中さんの親達の生國を尋ねた。それは越後であつた。彼等は越後から出て來て、北海道をあちこち働きあるいて、結局、前に云つた今金で相當の農園を開いた。そして彼女を産んだ。彼女はそうした北海道の田舍に育つて、今やうやく廿歳ででもあらうか、何かの因緣によつて此の大沼に來て、そして今晩こうして私の前に坐つて居るのである。『ヤットこゝまで這ひだしたところです』と彼女は云つた。私は青森の宿屋の小おんなが、矢張り在所の生れで、『今ヤットこゝまで浮び出たところです』と、同じやうな事を云つたのを思ひだした。田舍の娘達は皆な何處かに向つて、機會のある毎に這ひ出し浮びだすのである。この今金の農家の娘は思ひのほか鄙びて居ない。そこが北海道の內地と違ふ所かも知れない。彼女は村で受け得るだけの教育を受けて居る。そこに來るほどの活動、來るほどの興行物は悉く見もし聞きもした。言葉にも餘りナマリがない。きりようも惡くはない。また職業にすれても居ない。じみな、質朴な、好い意味での、田舍のモダンガールである。彼女は札幌も見ている、函館も見ている。これから更に何處に向つて這ひだすのだらう。『東京に行つて見たくはないか』と私は聞いて見た。彼女は默つて笑つて居た。そしてやがて云つた。『行つて見たくもあるし、こんな田舍者がそんな處にポツリと出て行つたつてとも思ふし、……』

彼女の話は一轉した。この宿屋には、函館のロシヤの領事館の人達が毎度大ぜい遊びに來る。私が湯の川でロシヤの大使を見た話をすると、彼女は又頻りにロシヤの領事の話をした。然し彼女はその領事館の連中の中、どれがエライ人なのか、ちつとも分らないと云つた。つまり彼等は皆な同じ樣にふざけて居るのだらう。彼等は大ぜいでやつて來て、臺所までもはいつて來て、ワタシ大變お上手などと云つて、自分で色々料理を拵へたりして、ビールやサイダーを册の中に持ちこんで、そしてワイワイと一日中騷ぎちらして歸つて行く。『あれが日本人で、あんな騷ぎをするのだつたら、ずいぶんなお金を使ふのでせうが』と彼女は云つた。『そこがロシヤ式なのだらうよ』と私が云ふと、『でも思ひの外、氣前の好い所もありますよ』と彼女は笑つた。

八　長萬部の案內者

二日の朝、私の汽車は大沼と小沼との間の、眺望の極めて好

い増峡を過ぎて、函館本線を長萬部に向つた。私は八雲よりも先に長萬部の名を聞いたし、又そのオシャマンベといふアイヌらしい發音が、ヤクモといふ神代的日本語よりも面白く感じられて、長萬部のアイヌを訪問する事にきめたのだつた。

汽車は八雲を過ぎ、國縫（クンヌイ）を過ぎて、長萬部に着いた。長萬部はオシャマン（即ち鰈（かれい））の居る處といふ意味ださうだ。こゝは寂しい田舍驛に過ぎないが、函館本線を室蘭に結びつける長輪線の分岐點で長輪線はまだ眞中の處が少し切れて居るが、それが近々全通すれば、可なりな交通都市に發展しようといふ場所柄である。

驛前に吐きだされた十人ばかりの人々は皆サッサと行つてしまつた。私は例の小カバンを提げて、ポカンと立つて居た。誰ひとり見ても吳れない。ありていの所、私は少々しよげた。然し何とかして見當をつけなくちやならない。兎にかくそこにある宿屋體の家にはいつた。大して『入らつしやい』とも言つて吳れない。然しそこの土間に丸いテーブルと椅子とがあるから、それに腰かけた。テーブルの上に新聞が一枚あるから、これを取りあげて少し讀んだ。

どうも調子がよくいかない。取りつきはがない。向ふの爐のそばには印絆天の男が燗德利を二本ばかり前に置いてチビリチビリやつて居る。そして臺所のおかみさんと何か面白さうに話して る。私は全く閑却された形だ。私はいよ／＼しよげた。然しいつまでそれでは埒があかない。そこで內々勇を鼓して、『この近處にアイヌ部落があると云ふ事ですが』と話しかけたところ、『えゝありますよ、すぐそこです』と、案外調子よくおかみさんが受け答へて吳れた。先づ有りがたい。

そこを少し行つて川を渡れば直ぐだと云ふが、その『そこ』と、その『少し』が心元ない。『私が暇だと案內してあげるのだけれど』とおかみさんはもどかしがる。『旦那は何處です』と印絆天も私に話しかけて吳れた。『東京です』と云ふと、『わしも東京です』と急に親類らしくなつた。其人は大工さんださうだ。モウこうなると話しの運びはらくだ。とう／＼おかみさんが赤ん坊を引つちよつたまゝ、私を連れて、誰か然るべき案內者を探して吳れる事になつた。

私はおかみさんの跡について小一丁も歩いた。おかみさんは或る店先に立寄つて、誰とかは居ないかと聞いた。居ない。こ ろころだがと云ふと、サアと云つて一人の男が店先に出て來た。おかみさんは私を其の男に任せて置いて、自分は何處かに探索に出かけた。『どちらからお出でです』と其人は私に聞いた。『東京から來ましたが』と云ふと、『私も東京です』と、其人

が急に又親類らしくなつた。其人は歯醫者さんで、この暑中をこゝまで出張してこの店先を臨時の治療所にして居るのであつた。私はいつの間にか其の店先に腰をかけて居た。『ずいぶんハヤルでせう』と聞くと、『イヤ駄目です、悪い奴が毎度來て、荒してますからね』と云ふ。十圓も二十圓も取つて、後ですぐにこわれる様な、無責任な事をして置くものだから、お客が皆んな懲りてしまつてるのださうだ。

『サア案内者を連れて來ましたよ』と、おかみさんが元氣よく戻つて來た。見ると、三十恰好の、物なれた様子振の、腕時計まではめた婦人が、表に立つて居る。『ヤア、これは勿體ない様な案内者さんですね』と、私も相當のお世辭を云つて表に出た。然し實のところ、一體何者だらうかと、少し不安に感じた。

九　アイヌ町

案内婦人は黒いパラソルをさして私の先に立つて居たが、何やらチョツト忘れたと云つて或る家にはいつて行つた。そこには『鳥長』といふ看板が掛つて居た。

鳥長から出て來た案内者を見ると、其の物なれた様子が成るほどとうなづかれた。彼女は何か少しみやげ物を持つて行かうと提議した。總て宜しく計らつて下さいと云ふと、彼女は寶燒酎を三本買つた。アイヌはこれが大の好物で、アイヌビールといふ言葉も出來て居るほどだといふ。彼女は初太郎といふアイヌの若者を知つて居るので、先づ兎にかくこれを訪ねて行かうと云ふのだつた。

アイヌの部落は川を一つ越えた向ふにある。案内者さんは女だてら、近道をしようと云つて、汽車の鐵橋を渡つて行つた。向ふの海岸の山の鼻に長輪線のトンネルの口が見えて居る。あそこの先が靜狩で、あの邊一帶、大變に景色がいゝ。リリイの花の一面に咲く野原もある。案内者さんがそう云つて向ふを指さした。

或る小流れにかゝつた小いさな橋の上まで來た。その向ふに古い、低い、草葺の、如何にも許く風雨にさらされた小い家の一村がある。それが我々の尋ねる部落らしい。橋の下には裸の子供が五六人水遊びをして居る。岸には丸木舟が一つ横たわつて居る。それがアイヌの物らしく見える。子供は大抵シヤモらしいが、あの一人だけは、目つきがどうもアイヌらしいと、案内さんが判斷した。

橋を渡つて村に入ると砂地のポカポカ道が炎天に照らされて、ずいぶん暑い。右手の一たむろは女の顔などアイヌらしくない。聞いて見ると、アイヌの居るのは左手の方だといふ。左手

の家々をのぞいて見るに、大抵は留守。皆な獵か畑かに行つてるらしい。村を横ぎつて海岸に出て見る。船は幾らかあるが人は見えない。皆な沖に出て居るらしい。

初太郎といふ人の家を聞いて見る。井戸のそばだといふ。ヤツト井戸館を見つけて、そこに居る女達に又聞いて見る。ツイ筋向ひの家がそれだ。初太郎は今留守だといふ。井戸のそばには三四人の女が居たが、その中の一人は脣のまはりに入墨をして居る。正にアイヌ婦人である。私達はそこで冷たい水を一杯飲ませて貰つて、稍や彼女等と親しんだ。然し入墨のアイヌ婦人は稍やはにかんだ様子で、容易に話相手になつて呉れそうもない。初太郎はいつ歸るだらう。今に歸るかも知れない。でも待つ處がない。では內に來て休みなさい、汚ない處だけど。一人の女はそう云つたまゝ、先に立つて私達を導いた。

そこは勿論、アイヌの家ではない。然し私達は兎にかくこれで手掛りを得た。物なれた私の案內者は、寶燒酎の一本をそこのおかみさんに呈して、實はアイヌを見に來たのだと告げた。それならツイ先隣りの家がいゝ。そこには面白いお爺さんとお婆さんが居る。よくあちこちからアイヌを尋ねて來る人達は、大抵みなそこに行く。そこには色々寶物などもある。ひとつ私が行つて様子を見て來てあげよう。おかみさんはそう云つて氣輕に出かけて行つた。この家のお婆さんに聞いてみると、元この村は二つに別れて、右手の方をカント（關東？）町、左手の方をアイヌ町と云つたが、そのアイヌ町にも今はカント町の者が入りこんで、アイヌは段々少なくなつて居るといふ。

おかみさんが戾つて來た。先隣りのお爺さんは留守だが、お婆さんが居る。今こちらに來るといふ。イヤそれでは面白くない。こちらから行かう。私達は早速出かけた。

十　アイヌの家

アイヌの家も外の家と變りはなかつた。然し外の家がアイヌ風になつてる點があるのかも知れない。土間があつて、廣い板の間があつて、その奧に襖の立つた部屋がある。板の間には大きな爐が切つてある。私達は板の間の上り口に腰かけた。白髮の頭を黑い布でしばつたお婆さんは、ソワ〳〵して私達を迎へた。

板の間には色々の物が取り散してあつた。『こんなに色々出して、丁度今日こんなお客様のあるのを知つてた様に。』お婆さんは今日『寶物』の土用干をして居たらしい。首にかける珠數の様なもの、耳にかける銀の輪、緞子や麻（？）に縫をした男女の上衣などがそこにあつた。

この家には二人の息子があつて、一人は漁場の頭、一人は船頭になつて居るが、今は皆な働きに出て居る。兄の方にはシヤモの嫁が來てる。その嫁は手拭を頭に卷いて、土間で立ちはたらいて居た。孫が二三人あるが、それにはアイヌらしい所が少しもない。お婆さんは目が少しショボ〱してるが、顏の色は白く、頬には薄い赤味がある。

私の案内さんがおみやげのビンを一本お婆さんに差出すと、お婆さんはそれを押し戴いて喜んだ。お嫁さんが栓ぬきと、中形のコップを三つ四つ持つて來た。(そんな道具は揃つてる。)案内さんは先づお婆さんにお酌をした。『これが好で〱』と、お婆さんは直ぐに口をつけた。私達も少しづゝそれを嘗めながら話を續けた。然しお婆さんが『好で〱』と云ふに係はらず、餘りはか〲しく飮まないので、案内さんが頻りに勸めると、『おらが獨りで戴いてはエカシに濟まぬ』といふ。エカシとは長老を意味するアイヌ語で、つまりお爺さんの事なのである。このエカシに對する女性の言葉、即ちお婆さんの事はフチといふ。『なあに、エカシにはモゥ一本こゝにあるから、フチは遠慮なくおあがりなさい』と云ふと、彼女は又非常に喜んで、『ありがたい〱』と繰返した。

彼女は又、珠數の玉をいぢくりながら、『こんな寶物があるから、こんなお客様も來て下さるし、こんな好い物も貰へる、ありがたい〱』と繰返した。それから彼女の頬は著るしく赤味を增して大いにハシヤぎだし、縫の上衣を着る眞似をして昔の事を語つて見たり、珠數の玉を首にかけて見たり、耳輪をはめて見たりした。彼女は又、曾てエカシと共に、それらの着物を着、飾り物をつけて、函館まで見世物に連れて行かれた事を語つた。彼女は又、近い頃、内地の人達が來て、同じくそれらの服飾を整へたエカシと彼女とを寫眞に取つて行つた事を語つた。

彼女は今七十一歳であり、エカシは二つ下の六十九歳である。彼女は目のわるい事を除いては極めて壯健で、而もその氣分が極めて快活で、醉に乘じて昔を語りながら、遂に手を叩いて歌ひだした。歌の文句はアイヌ語であるのだろう、我々には分らなかつたが、『あゝチョイ〱』などといふ日本語の相の手をやつて居た。隣りの家のシヤモのお婆さんも一人來て居た。フチの仲よしの友達らしい。これも燒酎のお相伴をして、フチの歌を面白そうに聞いて居たが、モツト何でも知つてゐるだけ皆な歌ひなさいと頻りにフチに勸めて居た。

私が大沼で買つて來た『アイヌ風俗』の畫葉書を出して見せると、お婆さん達は目がわるくて見えないので、若い者を呼んで

それを見せ、エカシが其の中に居ないか居ないかと聞いて居た。あゝこれは誰々だ、これは誰々だと、二三の知つた顔は發見されたが、エカシの顔は遂に見つからなかつた。それは八雲の人達の寫眞ばかりであつた。フチのお婆さんは稍や失望の體に見えた。內地人に訪問される事、寫眞を取られる事、畫葉書に入れられる事、見世物に出される事すらもが、彼等に取つては少なからぬ誇りであるらしい。

一つ私の意外だつたのは、アイヌが近隣から謂ゆる差別待遇を受けて居ない事である。雜婚もして居る、親しい交際もして居る。シヤモ側に於いて輕蔑排斥の樣子が少しもない。イヤそれどころでなく、こゝの老夫婦の如きは、エカシ、フチとして、近隣からも敬愛されて居るかに見える。それはアイヌに、異種族としての獨立の氣力が全く亡び盡したからだと考へられないでもないが、然し又、眼前の生活上、何ら輕蔑すべき理由がなく、そしてむしろ敬愛すべき理由があるのだろう。

十一　偉丈夫三原榮助

エカシは中々歸つて來ない。何處に行つたのかと聞くと、舟に乘つて川を上つて薪を取りに行つたといふ。そしていつもならお晝に歸つて來るのだけれど、今日は辨當を持つて行つたから早くは歸るまいといふ。仕方がないから私達は一應引きあげる事にして、挨拶を濟ませて立ちあがつた時、外からノツソリと門口に現はれた偉丈夫がある。アこれだなと私が思つた時、『おゝエカシが戾つた來た、エカシが戾つて來た』と、フチが大騷ぎで歡迎した。

丁度いゝ處にといふわけで我々は又腰を据ゑた。エカシは足を洗ひ着物を着かへて爐のそばに坐つた。實に堂々たる偉丈夫である。私はツイ內村鑑三さんの容貌風采を思ひ浮べた。然し我がエカシは更にそれよりも一まはりの大きさを有してゐる。色は黑い、毛は深い、鼻は大きい、目は輝いている、そして髮は白くて長い。彼は卑屈なお辭儀をしない。又文化的な挨拶を知らない。然し彼は直ちに私達の來意を理解した。そして濟んでアイヌビールのコツプを手にした。

フチのお婆さんは今一本のビンの栓を拔いた。そしてそれが、特にエカシの爲に取つて置いた物である事を説明した。エカシはニヤリ〱しながら續けさまにコツプを乾した。そしてコワイ〱と云ひつゞけた。これはくたびれたの意味らしく聞えた。その時、彼はフト半ば後ろを振りむき、左手を肩のあたりに擧げて、何か求めるものゝ如くであつた。『あ、何が欲しい？』と、フチは直ぐに立つて行つて、答を待たないで其の求める所

のもかをかし、手拭を持つて來てエカシに渡した。エカシはそれで顔をふき、手をふき、こぼれた酒をふいた。フチは其のついでに、うしろからエカシの肩に兩手をかけて、

『わしはこれがメンこくて、メンこくて、メンこくて！』とゆすぶつた。メンこいは可愛いを意味す。エカシはそれでも尖張り只ニヤリ〳〵していた。これがエカシ六十九、フチ七十一の夫婦である。

エカシはそれから煤けた包み物を奥の部屋から取り出して來て、それを私達の前に開いた。熊狩に用ゐる諸種の道具であつた。彼は手眞似をしながら一々それを説明した。そして最後に、馬蛤貝の舌の様な形をした、白い色の、熊の牙を出して、それを私に與れると云つた。私は有りがたくそれを頂戴して、牙の尖つた穎先の、少し曲つてピカ〳〵光つている部分を撫でながら眺めて居ると、フチは少し顔をしかめる様にして、『昔し、それで、エカシの脊中が』と云ひながら、自分の手の指で脊中を引掻く眞似をして『黒い血がダラ〳〵流れて』と、エカシの負傷した當時を追懐した。この熊の牙は、穎先のところを切つて、認印にでもせよと云はれたが、私はそれを切り刻むのが惜しい。細いステツキの持手にでもしやうかと考へてゐる。それは兎にかく、私は實に絶好の記念品を贈られた事を喜んでいる。

次にエカシはこのオソツテ…べ…語をかた。昔は二…に山のアイヌが居て、今の停車場のあたりまで出た…もあつたのだが、それが何處に行つたものやら、段々に無くなつてしまつた。今では、わしら夫婦と外に今ひとり、三人だけが年おさで、あとは皆な若い者ばかり。然し彼は左様に語りながら、悲哀の調を漏すでもなく、憤慨の氣を抑へるでもなかつた。

彼は更に一つの圓い貝桶様の物を持つて來て、その中から大きな、朱塗の、銚子と盃とを取りだした。總てが煤けて居り、缺けた所もあるが、彼等に取つては矢張りこれが其の昔の祝祭の器具として、神聖の感を生ぜしむるのだらう。彼は肅然と態度を改め、箸を取つてそれらの器具に一々數滴の酒を注ぎ、やがておごそかなアイヌ語を以て、それに對して暫らく何事かを語りつゞけた。人生祝福の祈りででもあつたらうか。先程からそれに聞きほれて居たフチは、『あんなうつわものにも皆それぞれたましいがある』と、私達に向つて説明した。（このフチの言葉がこの通りであつたかどうか、私の記憶が充分ハツキリして居ないが、意味はたしかにそうであつた。）

エカシはそれから又、自分の姓名を三原榮助（サンバラエイスケ）と名乘り、自分は讀み書きだけは駄目だが、外の事は、熊を取る事でも、船を漕ぐ事でも、何んでも知つてる。そして六十九歳の今日まで、

悪い事は只一つでもして居ないと語つた。前に私はこのアイヌの老夫婦が近隣から敬愛されて居ると云つたが、實際、このエカシの態度なり風采なりを見ても、そのほがらかな氣分、その竹をわつた様な氣立に接しても、實に優秀なるアイヌ族の一代表者として、深い尊敬と愛慕を禁じ得ないものがある。

最後にエカシは更に焼酎の幾杯かを乾して目元をトロリとさせ、その毛深い大きな手を打ちたゝいて、『婆さん飲め〳〵』と歌ひだした。すると婆さんは又『メンこい〳〵』を繰返してそれに應じた。エカシは寶物を片づけさせながら云つた。『こんな物も今に持な無くなつてしまふ。ナーニ、わしらは二人とも此の通りで、一杯飲ませてやりさへすれば、何んでも直ぐに片ばしから呉れてしまふのだから。』然し彼はそう云ひながら獨り自ら喜んで居た。彼は遂に立つて踊りだした。フチも負けず劣らず並んで踊つた。興はこゝで絶頂に達した。私達は實に充分の滿足と感謝を以てサンパラ家を辭した。

十二　鷄と雲丹と地酒

私達は腹をすかせて長萬部の町に戻つて來た。案内さんが私の袖を引いて、あそこを見よと云つた。町の右側の或る店を見ると、そこの帳場らしい處に、唇に薄い入墨のある中年の女が座つて居た。云ふまでもなく、それはアイヌで、今度そこに下宿屋、或は安宿と云つた様なものを開業したのであつた。このメノコは大變なやり手で、帳面もつける、算盤もはじく、大抵のシャモの女は眞似も出來ないと云ふ事だ。

私が感心して其の話を聞いて居る中、私達は鳥長の前まで戻つて來た。私は此の功勞ある女案内者に酬いる爲、鳥長に於いて晝飯を食べる事の光榮を有せざるを得なかつた。

私はそこで柔らかい鷄と、うまい雲丹と、自慢の地酒の二三本を味つた。實際地酒がわるくなかつた。

一體こんな田舎町で、どんな人がこゝらに飲みに來るのかと聞いて見るに、今に長輪線の鐵道工事が盛んになれば、こゝも何やかやで賑かになる筈だと云ふ。なあるほど、それで此の家に、白粉臭い若い女の居る理由も分つた。

こゝで聞いた面白い歌を一つ。『あなた位に嫌はれてくよくよするよな私ぢやない。お氣の毒だが、濟まないが、旭川三聯隊、みな男。』今一つ『あなた野球で名を廣め、私や藝妓で名を廣め。』云々といふのも聞いた。野球選手の持てるのは賀すべしだが、これでは身が持てまいと心配された。

十三　札幌、アカシヤの街路樹

二日午前、私は小樽にも寄らず、直ちに札幌に來て居た。札幌驛前の大通りは素晴らしいと思つた。殊にアカシヤの街路樹を美しいと思つた。

然し私はこのアカシヤの木について、まだ多少の疑念を持つて居た。アカシヤの木と云へば、ヨーロッパの本の中では久しいお馴染だが、實物を見たのは近來の事で、而もそれが市谷刑務所の構内といふ變な處で、看守さんといふ變な人に教へられたのだから、果してそれが本物か否か、どうも少し不安であつた。それで今、思ひがけなく、この北海道の首府の大通りで、街路樹として此の美しい木の列に接した時、是非とも今一度ハツキリと、それが果してアカシヤであるか否かを、聞きたゞして置きたいと思つた。

それで、その街路樹の蔭に、荷車に小いさな植木を積んで休んでいる男を見つけて、『これは何といふ木ですか』と問うて見た。『これですか』と彼は答へた。そして『そうですねえ』と續けた。彼はこの木の名を知らないのだつた。『アカシヤの木だろうと思ふのだけれど』と私が云ふと、『へええ、アカシと云ふのですかねえ』と、彼は逆様に私から教へられた形になつた。

私はいよ／＼不安な氣持になつた。然し差當りどうしようもない。それよりは折角つかまへた此の話相手を逃すまいと考へて、いろ／＼な質問を發して見た。それに依つて私の與へられた智識は、札幌の市街は丸で碁盤の目の様になつて居る事。そんなキチンとした町の作りで、日本中で、札幌に匹敵するものはにない事。札幌は月給取の町である事。小樽や函館に比べて、おとなしい上品な町である事。商賣は何と云つても小樽が一等である事。等、々、々。

こゝまで書いて、私は此の旅行と、此の記事とが、妙な一致點を持つて居る事に氣がついた。旅行と、その旅行記事とが一致するのは當り前だが、その意味より以外に於いて、こゝに一つ面白い一致がある。私は今度の此の旅行に於いて、初め道草を喰ひ過ぎた爲に、日限の切迫と、懐中の逼迫とに餘儀なくされて、豫定の數々を變更し節略して、終りは脱兎の如く歸つて來たのであつたが、今この記事に於いても、こゝまで書いて來るともう締切時間が眼前に切迫して居り、紙數も既に制限を超過しかけて居るので、あとは厭でも應でも、節略した旅行の事實に、更に大節略を加へて書きちゞめるより外は無い事になつて來た。

私は札幌公園に行つて見た。池のボートに乘る人の多いのを見た事と、こゝでは是非とも飲まねばならぬと思はれるサツポロビールを飲んだ事と、かの大通りの街路樹がアカシヤである事を確かめ得た事の外、何もなかつた。

次に私はアイヌ細工の店をおとづれた。髯の長い、頭の禿げたアイヌがひとり、店先で下駄にほり物をして居た。私はその同じほり物のある盆と箸とステツキを買つた。

その夜、私は狸小路をぶらついて、冷し水瓜を食ひ、リンドホ

ツチを食ひ、活動寫眞を見た。そして昭和館といふ面白い宿屋にとまつた。こゝは食事なし五十錢といふ簡易宿泊所で、蚊には大ぶん食はれたが、相宿の人と寢ながら心安く話したりするのが珍らしかつた。朝、歸る時、そこの主人に、『面白い這り口ですね』と云ふと、『えゝ、皆な喜んで來て呉れます。ゆうべなどずゐぶん來ました』といふ事だつた。

札幌まで來た者の、大てい誰でも行くといふ定山溪の温泉にも行かず、是非見たいと思つてゐた旭川の少し手前の近文(チカブミ)のアイヌ部落も見ず、四日朝七時半、札幌發上野行の汽車に乘つた。三十分後の八時には、例のロシヤ大使が札幌驛に着くと云ふのに、それも待ち得ないで。

十四　歸りの路

小樽に寄る事の出來ないのが如何にも殘念だつた。只一つ面白い事は、そこで買つた新聞の中に、『小樽中心會』の『市民に訴ふ』と題する檄文樣のものがあつた。それに依ると、『近來、小樽市に我國體と相容れざる主義を以て純良無垢なる勞働者を煽動』する者が現はれ、『官憲にさへ抵抗』し、『上長に對する禮を忘れ』て居る。そして『識者の一部には』之を『世界的傾向』として放任し、『此の傾向に共鳴』する者がある。然れども、斯の如きは『人類共同の敵として極力排斥せねばならぬ』と云ふのである。先程の勞働爭議が餘ほどこたえたものと見える。

狩太(カリブト)に寄れないのも殘念だつた。こゝには元の有島農場がある。有島武郎君がこの農場を解放した時、私も幾らかは其の相談にあづかつたりした事もあるので、それの現狀を知りたいと思つたが、果せなかつた。

函館青森間の聯絡船上の夕暮は愉快だつた。海は油の樣に靜かで烏賊つり船がたくさん出て居た。十何年振かで富山に歸る婦人が、この船の呆れるほど善くなつた事を感嘆して居た。それの連れた十二三の男の子は、今初めて海といふものを見て、無性に嬉しがつて居るのであつた。一昨日この船の上から身投をした女は幸ひ救はれて息を吹返したと、誰かゞ話して居た。この海には鱶が居て、人の屍體を喜んで食ふと聞いたのですがと、隣に居た人に話して見ると、それは多くは青森寄りの方だといふ答であつた。私はどうかして鱶の姿を見たいと思つたがその望みはとう／＼達せられなかつた。私はフト身投のことについて考へた。私のこの行脚の第一回では、犬吠崎の燈臺の下で、毎度投身者があるといふ事だつた。第二回の長瀞の急流でも、矢張り毎度の事だつた。然るに今又、この海上が同じく自殺の場所であるとは。今の世には自殺者が絶えない。從つて到る處が自殺所になつて居る。

私はその夜、青森の青い林檎を買つて再び汽車に乘り、翌日、松島、仙臺あたりを汽車の窓から眺めたまゝで、ヘト／＼になつて東京に歸りついた。

演藝時評

正宗白鳥

澤田の「金色夜叉」

「新撰組」は、新國劇劇團の十八番の一つ。左團次なら「松莚十種」に加ふべき程度のものなのであらう。無論劍劇である。

私は、現代の劍劇をあまり多く觀てゐないので、澤田の劍劇が他の劍劇とどう違ふかを、よく解してゐないのであるが、藝術としての澤田の演劇は、今度で大抵見當がついた。觀るたびに底の知れないやうな藝術が、現在の劇壇にある筈がない。一目瞭然なのだ。劇評といふものは、やらうと思へば、誰れにでも出來るやさしい仕事なのではあるまいか。

「白野辨十郎」「桃中軒雲右衛門」、それに、今度の「新撰組」。これ等を觀た私は、澤田が英雄の末路を現はさうと志してゐるのを知つた。たゞ劍に強いだけの英雄ではない。涙のある末路に人間の詩を唄はうとしてゐる。辨十郎の大詰に感傷的の詩趣があつて、澤田も器量を上げたのであつたが、あの詩趣が澤田の生命なのだ。彼れの他の劍劇にもあの味ひは多少浮んでゐるのであらう。作者がその特色を發揮させるやうな新作を彼れに與へたなら、英雄の末路趣味が、澤田一流の甘い感傷的な臺詞廻しで、盛んに舞臺に漂ふのであらうが、「新撰組」では、その趣味が、大詰あたりにところ〴〵微見してゐるだけなのだから、甚だ物足らない。近藤勇の英雄振りは、從來の新派のそれと違つたところを見出さない。從つて、しまひに英雄の末路的感傷に耽るのに、我々の心は惹かれない。

幕末の英雄、亡び行く時代を書いたものは、今のところ、岡本綺堂氏の作品が、手綺麗に出來てゐて感じがいゝ。普通幕末を題材とすると、薄つ汚い、頭の粗笨な志士氣質の田舍武士を現出するのが、例になつてゐるが、私はこの維新型の志士を舞臺に觀る時ほど、非藝術な感じのすることはない。「新撰組」でも、幕末の大小英雄が舞臺に並んでゐるのを見ると、先づ「拙い面」を並べてゐるといふ感じがした。苦鬪十年の後、意氣劇壇を吞んでゐる新國劇團も「新撰組」では、舊派俳優に脅威を感ぜさせるところは何もない。舊派なら、舞臺面がもつと手綺麗に行くだらうと思はれた。ことに、出し榮えもしない若い男女の色模樣を出したり、甘酒屋と下女を可笑味につかつたりしてゐるのは、舊派の陳腐な作劇法を下手に眞似てゐるので、天下の新國劇團としては見苦しい。この一座の劍の使用法には激しい意氣込みが、芝居事とは思へぬところがあると云はれてゐるが、劍の方ばかりでなしに、全體に舊劇などの常套は踏みにじつて進むくらゐな意氣があつたらなほいゝだらうと思はれる。

しかし、「新撰組」はどうでもいゝ。私は「金色夜叉」が在來の新派のそれとはどう違つてゐるかといふことに、多少の期待を寄せてゐた。近年調子に乘つて、何でもやれさうに、世人に思はせてゐるあの澤田のことだから、以前の新派の金色夜叉とは、面目を一新したものを作出すであらうと推察された。

全體紅葉山人の小說が今日なほ通俗の讀物として、年の若い男女に歡迎されてゐるかどうかは疑問であるが、少くも、お宮、貫一の名は人口に膾炙してゐる。この頃、一圓本が現れると、改造社でも春陽堂でも、最初の一卷に、紅葉集を出したのによつても、紅葉が一般の讀書界に潛勢力を有つてゐるらしいことが察せられる。一圓本によつて、新たに金色夜叉を讀んだものも少くあるまい。機敏なる澤田がここに目をつけたは、興行政策として當を失してゐないだらう。……私は、金色夜叉は、脚色と演出によつて一工夫を凝らしたら、「現代劇として相當に效果を擧げられないことはないとかねて思つてゐた。」

ところが、實際を觀ると、過去の新派劇を、尻目にかけて、新にこの大通俗小說を劇に生かしたと云ふところに、殆んど何處にも見られなかつた。脚色に於ても、舞臺裝置に於ても、俳優の演技に於ても、取上げて云ふほどの新味はなかつた。學生の風俗などに何十年か前を追憶させるやうな工夫もあつたが、原作にないやうな現代的言語なども用ひて當世向きにしたところもあつた。どうせ、原作を自由に取捨してゐるのだから、當世向きにしたつて構はないのだが、それなら、もつと思切つてやればよかつた。昔新派のやつたことに戀々としてゐる趣きがあつた。全體この金色夜叉は、世間並みの人情に支配された微温的な作品で、貫一の如き甚だ徹底を缺いて、時々思ひ出したやうに冷酷な眞似をしてゐるだけなので、腹の中は感傷的な人情家なのである。それだから一般の讀者に迎へられたのかも知れない。……今度の新脚色によつても、貫一は、荒尾のために多額な借金を返濟しようとするほどに友情美を發揮してゐるにかゝはらず、昔熱海行の旅費まで出してくれた舊友の遊佐や風早などに對しては、友情美を發揮しないのは不思議だ。ここは原作の方がまだしも自然らしいところがある。

私は、昔藤澤淺二郎や高田實の所演を見たことがあつたが、この時でも、私は熱海の海岸や芝山內（昔は上野であつたと記憶してゐる）の場では、たまらないいや味を感じた。しかし、お宮との別れは、今度のよりは藤澤の方が簡單で、いや味の度が少なかつたと思ふ。「忘られない日が一つ殖えた。三度の忘れられない日のうち、今度のが一番苦しい日であつた」とか、「苦があつて愛がます」とか原作にない餘計なことを云つてゐるのが、現代向きになつた譯だが、澤田の貫一の根本の缺點はその中途半端なところにあるのだ。彼れは、この甘つたれた場面を、甘つたれて演ずるには氣が差したらしく、思ひ切つては演じ得なかつた。それなら、もつと饒舌を謹んで、餘韻を殘して、會つて、彼女の心を見破つて、「今月今夜の月」の臺詞を殘して、女を蹴つて入ればよかつた。繪模樣を主としてもよかつた。……どちら附かずの演出振りは、あの劍的意氣を以て天下を風靡する澤田にも似合はしからぬことだ。甘いのなら、原作にある歌留多會の歸りなどの

甘さをこの海岸の一場に集めて、大に若い心の甘さを現はしたらよからう。さうしたら後の幕の貫一が引立つ譯だ。「今月今夜の月を曇らせる」といふ名代の臺詞も、お芝居にならない用意のためか、ひどく印象が薄かつた。

荒尾は、漢學育ちの日本青年には好かれる男で、高田實がまた馬力をかけて、漢學塾型の英雄にし上げたので、私にはたまらなく忌味に思はれたが、澤田は、この役をも遠慮して演じた。外形よりも內面に心を向けた。英雄らしくなくつて少し見窄らしかつた。「覺悟とは……讀んで字の如し」も、名代の臺詞だが、現代の見物は、かういふところに、あまり感心しなくなつたので、この一場は、高田時代のやうに見物の心を涌立たせたくなつた。……だから、昔の新派劇で賣物にした場割には拘泥しないで、原作の大綱を摑んで、一つの氣持を押進めて行けばよかつたのだ。

大詰の「鰐淵家の燒跡」の一場によつて、澤田は、面目の丸潰れを免れた。熱海でゝも山內でゝも、あまり喝采しなかつた見物も、ここでは大喝采をした。ここは、原作とはまるで違つてゐるのであるが、今まで樣子ぶつてゐた澤田も、ここではやつゝけろといふ意氣を見せた。はじめから、この大詰を目指して進んで來ればよかつたのに――熱海でうんと甘いところを見せて、その次ぎの幕から幕毎に憎みを蓄積して、最後に破裂させればよかつたのに――途中が煮切らなかつた。この最後の幕は、カイゼルの「朝から夜中まで」を連想させるところがあつた。

兎に角、この大詰は、紅葉でも新派でも思及ばないところで、澤田の新人たる所以である。

時間の關係からか、讀者が金色夜叉の大意を呑込んでゐなければ、人物も筋もよく分らないほどに抄略されてゐて、これだけでは獨立した戲曲とは云へない。從つて際物といふ感じがする。富山でも荒尾でも斷片的に出てゐるだけで、一篇の本筋に厚みをつける力をもつてゐない。

飜案物の「劍客商賣」は、前の二つよりも却つて面白かつた。曾我の家畑のものだが、五郎一座よりもくさ味のないのがいゝ。

今この批評を書終つたあとで、新聞の廣込みを讀むと、澤田は、ある新聞に於て、金色夜叉上演の理由と抱負とを述べてゐる。「資本萬能主義を呪ふ闘爭意志の人」として、貫一を現はし、「金の世の中への獻身的反逆」の彼れを現はさうと云つてゐる。時代に適應せんとつとめてゐる新人の云ひさうなことで、古くさい金色夜叉を今日に生かすのは、その點を强調するのも一つの方法であるのだが、紅葉の原作が人情小説なのだから、生中原作に拘泥してはその對社會の反逆なんかは現はせないので、芝居は澤田の抱負ほどではない微温的なものとなつてしまつた。荒尾を「豪傑肌の人」にしないで、「一種の正義派の失職青年」にしようとした心掛けは結構だが、近藤勇とか雲右衛門とか、英雄でも天才でもない人間をも、英雄くさくし、天才くさくした澤田の口からさう云はれるのは奇妙である。しかし、澤田にそんな心の動きがあるのは賴もしい。（八月二日、東京にて）

澤田は、「三千六百五十日」と題した過去十年の奮闘錄を見物に配つた。左團次は、新作の上演百五十種に達した紀念として、小冊子を編して知人に贈つた。彼等の人生行路に於ける一つの喜ばしいことに違ひない。彼等の知友や贔屓客は、彼等の爲めに祝し彼等に讃辭を呈してゐる。藝術に志す我々は、この二人の幸福者に對して羨望の念に堪へない。

左團次は上演目錄を數上げてゐるだけであるが、過去を語つたならば、澤田に劣らないくらゐな奮闘的材料を有つてゐるであらう。彼れと年齒を略々同じくしてゐる私は、小米と云つてゐた頃からの彼れの舞臺を知つてゐる。今日の大を成す役者としての素質を、その頃は私は寸毫も認め得なかつた。運がよかつたのか。努力の結果であるか。私は不思議に思つてゐる。彼れの成功は、要するに、運、根、鈍に由るのであらうが、彼れにしても、菊五郎にしても、名門の出といふことが、その成功の基礎になつてゐることは否まれない。歌舞伎役者のやうな傳統を重んじる特種の藝術家は、父祖の力が、世間的ばかりでなく、技藝の上にも非常に影響するのである。歌舞伎の雰圍氣の中に育つ必要があるので、畫家や小

說家ともちがつて、封建的の臭ひがつよくて、藝術家としての獨自性が乏しい譯である。能樂と似寄つてゐる。型の美がある代り、その束縛があつて、人間の個性が自から縛られるのだ。繪畫でも昔はさうであつたが、今日はそれから離れてゐる。

從つて、私は、能樂を非常に傑れた藝術とは思つても、自分では、生れ變つても能役者にならうとは思はない。先代のやつた型の眞似ばかりやつて一生を終らねばならぬ約束の下に技藝に志す人の心根を不思議に思つてゐる。昔の寶生某や觀世某がいくら非凡であらうとも、その劃した範圍を脫せられないと思ふだけでも、張合ひのないことである。小さくても自分のものを表はしたい。(能樂讃美者に云はせると、百も千も理窟があるであらうが)歌舞伎だつて同じことだ。

左團次は、舊を守るだけで滿足しないで、兎に角新作百數十を演出した。出來榮は兎に角、自分では快心なことであらう。しかし、二代目左團次であることが、彼れの藝術的成功を擴大させてゐる。そこへ行くと、澤田は裸一貫で今日の地位を築いた。それに、左團次とは違つて、これからさき難路がつゞいてゐるので、油斷をすると、谷の底にころがり落ちる恐れがある。

しかし、何時の世にも、新しい藝術は、祖先の古い傳統を背負つてゐないものによつて起されるので、假りに、第一の澤田は、先きが見えてゐるとしても、第二の澤田、第三の澤田が現はれて、それ等が十年二十年の苦鬪をして倒れたり起きたりしてゐる間に、劃時代的の大藝術が、新日本の劇壇にも燦爛として現はれるかも知れない。

非凡な演出はなかつたにしても、大劇場で百數十の新作を演じつゞけて、相當の效果を奏したことは、藝術家として、張合のある譯である。十年の奮鬪の結果が、一時だけでも目醒ましく現はれてゐるのも張合ひのある譯である。しかし、十年の苦鬪も、酬ひられるものは百に一つもないのだ。澤田と同時に劇界に踏出した多くの人々の現在を見るにつけても、私は苦鬪錄を他人に讀まし得られる人の幸福を思つた。苦鬪の骨折損をしてゐる藝術家を私は前後左右に飽きるほど見て

ゐる。そして痛ましく感じてゐる。

演舞場の八月

澤田が金色夜叉を演じてゐる間に、演舞場では、河合、喜多村、伊井の新派俳優の三巨頭が、谷崎氏の「お艶殺し」や、私の「隣家の夫婦」など、最近の創作を演じてゐるのは、私に一種の感慨を起させる。昔、歌舞伎役者に對して新派俳優と稱せられた彼等を、今日たゞ舊の如く呼ぶのは痛ましい皮肉なやうに思はれる。近年は、現代劇の演出振りを批評するに當つて、「新派のやうだ」との評語を下すことは、それだけで非難侮蔑を現はしてゐることになつてゐる。澤田は、今日の劇壇では、最新派である。しかし、彼れは、「新國劇」などと、人聞きのいゝ看板を掛けて、新派といふよごれた名を避けた。

現代の寫實を舞臺で試みんとした新派劇が何故にこんなに衰頽したのであらうか。川上音次郎をはじめ、高田でも藤澤でも伊井でも河合でも、その頃の時代の趣味に適應せんと志したことも、宣傳に努めたことも、決して今日の澤田に劣らなかつた。杉贋阿彌をはじめ多くの舊劇通は、新派には技藝の味が皆無であると評してゐたが、新興の藝術に對して、在來の尺度を用ひてケナしてゐたのは必ずしも當を得てゐたかつた。さういふ尺度で計れば、今日の新國劇だつて隨分非藝術である。私は、忠實無類の劇評家三木竹二が伊井の藝術を激賞して、長い間、彼れを贔屓にしたことを覺えてゐる。梅若實の如き能樂の大家が、新派劇の所演に、舊俳優に見られない氣魄を認めて、淺草の水野好美などの新派劇を持り日毎に見物することを樂みにしてゐたといふ噂をも耳にした。「新派にはない氣魄」は、今日なら、そつくり澤田を評すべき言葉である。有識者の間に高田實の評判の盛んであつたことは、今日の澤田にも勝つてゐたと思ふ。

世上萬般のこと、衰運に向ふと、過去の功績も、美所も長所も忘れられるのが常例である。盛んな時には、皆んなが譯

も分らずに雷同して阿諛し、衰へ出すと、譯も分らずに非難の石を投ずるのが、人情の自然である。本當の藝がなかつたからだ」とか、「低級な脚本ばかり演じてゐたからだ」とか、新派非難のいろ〳〵な理屈は、要するに、あとからくつつけたものである。澤田や曾我の家だつて、その上演目錄も演出振りも、決して高級ではない。………「いづれか秋にあはではつべき。」盛衰榮枯は人力でいかんともしがたいのである。

私は、先見の明を誇るのではないが、昔から新派を好まなかつた。當時の名優高田實の英雄振りを嫌つてゐた。川上に對しては憎惡を覺えてゐた。彼れは、私の批評に對して、私を新聞社へ訪問して、上べには微笑を湛へながら、私に詰問を試みたのであつた。さういふ意氣込みは結構であるが、その時、私は議論の上では、決して彼れに屈服しなかつたのに、彼れは私が彼れに言負かされたかのやうに世間に吹聽したのである。その上、彼れと知合ひであつた社の主筆を動して、私の劇評を止めさゝうとしたのであつた。……さういふことがあつたゝめに、私はます〳〵新派に對して反感を抱いてゐた。

しかし、私は、川上一座の所演に、一つ興味をもつて記憶してゐるものがある。それは、私がまだ學校にゐた時分のことであつた。川上は最初の洋行を遂げて歸朝した時、市村座に於て、歸朝土産として、滯歐中艱苦を極めた實驗を、そのまゝ、舞臺に上演したのであつた。外國の劇場で「備後三郎」を上演してゐるうち、興行が不成績で、饑餓に迫められて、舞臺の上で瀕死の思ひをするところなどを、當時の役者が自分の役を自分で演じた。無論貫阿彌一流の批評家から、藝術の邪道として罵られたのであつたが、私には兎に角、面白かつた。後年の小説の方面の自然主義を舞臺で現はしてゐたのだ。自己描寫自己告白をやつてゐたのだ。無論あの川上の寫實は、粗寫實で非藝術であつたであらうが、あの意氣で、すべての演劇に本心の自己を現はさうとする心掛を有つてゐたら、もつと清新な溌剌たる演技が現はれたのであらうが、そんな眞面目な藝術觀を彼れが有つてゐよう筈はなかつた。

私は、今度久振りに、所謂新派劇たるものを觀た。そして、昔は有つた筈の氣魄が影もなくなつてゐるのに驚いた。「お艶殺し」は、人殺しが續くといふ以外に、何の意味もないもので、久振りの巨頭大合同に、こんなものを選んだ興行主、あるひは俳優の心根を不思議に思つた。殺人劇を好む見物の心に投じたつもりなのか知れないが、これでは、六月のこの座で演ぜられた菊五郎の「厄年」にも遙かに劣るもので、近來の惡劇である。元來新派が江戸情調を現はさうなんて、自己を知らないといつていい。舊派の嘲りを買ふ所以である。

私の「隣家の夫婦」はまだしもよかつた。演出監督者の注意がよく行屆いたゝめでもあらうが、皆んなが、おとなしく靜かに演じてゐた。新派臭はなかつた。それだけに一般受けはしないに極つてゐるが、いつも變な演出ばかりされ續けてゐる私の作品のうちでは、今度の演出だけは、作家として稍々快く見てゐられた。……新派諸氏によつて、私の作品が舞臺に生きるのは皮肉な感じがした。

錦繪美謳歌を嗤ふ

七月興行に關する二三の新聞の劇評を讀んだ。新聞の劇評といふものは、概して、紹介程度の微溫的なものだが　新聞の役目としてはそれでいゝ譯なので、月々のお芝居に對して侃々諤々の議論を鬪はすのは、却つて不似合である。花見る人の長刀の感じがする。德川時代の「評判記」は、遊里の「細見」のやうなものであつて、今日の新聞劇評も、その調子を眞似てゐてもいゝのであらう。

ところが、演劇に關して新しい見解を持して、劇壇に革命を起さんとした何代の才人も、或は彼に對して猛烈なる反逆を試みんとする意氣は、次第に薄らいだやうである。小山内薫氏の如きはその重なる一人である。デ・アルキン氏の日本演劇觀についての小山内氏の感想（七月十八日の讀賣新聞所載）を讀んでも、それが改革者の言でないことが感じられる。

氏の劇壇に於ける長い努力もさしたる効果を奏しなかつたので、日本演劇の前途について夢見てゐた若い昔の夢も、年齢の進むとゝもに消失せて、徳川時代の日本人を祖先とする日本人らしく、歌舞伎劇にせめてもの不朽の藝術美を認めて安逸を貪ぼらうといふ氣になるのではあるまいか。デ・アルキン氏などは、歐洲劇壇の趨勢に飽足りないで、日本の奇怪不思議な歌舞伎劇を見て、内容のよく分らないのを幸ひに、自己の空想をそこに托してゐるのであるが、我々から見ると、彼等外人の出鱈目な批評に意外な妙味を覺えるとゝも、多くは噴飯を禁じ得ないものがあるのである。菊五郎の「筆屋幸兵衛」のリアリズムを賞讃した外人の無理解さは、小山内氏と雖も非難してゐる。

自由劇場創設者の左團次も、今は歌舞伎芝居に安立してゐる。あの頃のことは、一場の夢と觀じてゐるのであらう。今「演劇新潮」八月號を讀むと、「劇壇人の印象」の中の、「市川猿之助」の章下に、「彼れは、歌舞伎役者としては、一番不幸の時代に生れた」とされ、「歌舞伎の前途なぞ、全く暗澹として、二十年を出でずして亡びさうな時に生れ、…文壇では、自然主義の勃興、現實暴露、幻滅などといふ新術語が若い心の芽ぐまうとする芽を、無慘にもぎ取つた」時に生れたこの情熱家は、中學に入つて勉強し、大學へまで文學の講義を聞きゝ行つて、さうしなければ、將來の俳優として立てぬと考へたらしかつたが、「今の猿之助にして見たら、これらは苦しい努力であつたのであつた。そのためには、いろ〳〵の苦みこそあつたが、それによつて得たところの成果は少い」と批評されてゐる。つまりは、猿之助は、文學の修養も新知識の蓄積をも志さないで、歌舞伎の稽古ばかりしてゐたらよかつたといふ譯なのだ。

七月十日の東京朝日新聞に掲げられた、岡榮一郎氏の「七月の歌舞伎座」評の中に、かう書かれてゐる。

「歌舞伎を新しい演劇の見方で律しようとするのは、文學の方で、人生のための藝術を應用したい理屈張つた人間のすることで、お門違ひのおせつかいではないか」

この見解によると、歌舞伎を鑑賞するには、我々は現代を脱却して、舊幕時代の市井の徒と同様の心持にならなければ

ならぬ。歌舞伎を批評するには、「歌舞伎年代記」の作者などと同様に、「大評判大出來」と、役者のためにお太鼓を叩くのを主としなければならない。……さうすると、坪内逍遙氏をはじめとして、數十年間の多くの文學者の演劇研究も演劇批評も、かの猿之助の學校通ひと同様に、空しい努力であつたと云はなければならない。芝居の品評は、役者を取巻いてゐる劇通連に任せて置けばよかつたのである。由來人間は絶えず無駄骨折をするもので、世界の歴史は、一面人間の無駄骨の歴史と云つてもいゝのだが、明治以來の生眞面目な演劇評論も、その一例としていゝのかも知れない。

ところで、私は、岡榮一郎氏の所感に多少の同感を覺えるとゝもに、一方では大なる反對感をも抱いてゐる。

現代人が過去の藝術文學を味はふのは、現代人の心をもつてそれ等を味ふので、そこに意義もあるし興味もあるのだ。またわれ〳〵が徳川の江戸ッ兒と同様の心理狀態で歌舞伎芝居を享樂しようとしても、それは出來ない相談でもある。……萬葉集の和歌は、未開時代の日本人の單純なる詠歎の聲に過ぎなかつたにしろ、我々はそこに現代の心に觸れるものを探求しなければ滿足されなくなつた。聖書は昔は文字通りに受取られて一圖に有難がられてゐたのだが、今日の我々はそれでは滿足出來なくなつた。ホーマーの「ヲデッセイ」に唄はれてあるユリシースの冒險譚は、昔はそのまゝに讀まれてゐたのであつたが、後代の評家や詩人は、その古詩に於ていろ〳〵な人生味を發見し、怪奇な物語を單に怪奇な物語としてのみ受入れないで、我々の心胸に接觸するやうな新たなる解釋を試みたのであつた。作者ホーマーや、古代の讀者の夢想もしなかつた新見解をもつて「オデッセイ」を讀むことは、岡氏の所謂、「お門違ひのおせつかい」なのであらうか。聖書をも昔ながらの頑迷なる信者の如き態度をもつて拜誦しなければ、「お門違ひのおせつかい」になるのであらうか。少くも私は、不承知である。現今の自已の心をもつて古文學をも古聖典をも讀破したいと思つてゐる。

歌舞伎劇に對しても同様である。そこに今日の我々の心魂に觸れる「人生のための藝術」が潜んでゐるならば、それを探りだしたいと、私はかねて望んでゐる。南北や默阿彌などは、さういふことは少しも考へてゐなかつたにしろ、現代の

われ〳〵は、現代の新鑑賞法を用ひるに何の差支えもないのである。南北や默阿彌も、それでこそ今日に生き得られるではあるまいか。

七月の歌舞伎座に上演された南北物や梅暦や、その他近來相續いて諸劇場に現はれた舊劇については、「錦繪のやうに美しい」と讃美して、そこに多くの不滿を感じないのが、批評家の舊套になつてゐる。錦繪は舊幕時代の傑れた藝術品である。その傑れた藝術味が舞臺に出沒するのは結構なことには違ひない。私も、歌舞伎座に於ける南北物や梅暦の舞臺面が、錦繪美で色取られてゐるのを見て、快い美感を起した。日本の歌舞伎の特色として、永く保存すべきものだと思つてゐる。……しかし、名優視される舊劇派の幹部諸氏が、あちらの劇場でもこちらの劇場でも、月々舞臺に錦繪展覽會ばかりを催して滿足してゐるのを見て、奇妙不思議に思ふのである。堂々たる劇評家諸氏が、通りすがりの外國評家のお世辭見たいに「錦繪のやうに美しい」とのみ、俳優に對して諛辭を呈してゐるのを見て、苦笑を禁じないのである。羽左も梅幸も左團次も菊五郎も、錦繪模倣の活人形書となつて、自から足れりとしてゐるのであらうか。

錦繪は保存すべき過去の藝術である。今日の美術鑑賞家は、現代の畫家に向つて、錦繪の模倣ばかりを求めはしない。劇評家は、舊派の名優に對して要求するのは、たゞそれだけなのであるのか。南北の作品春水の作品に接しても、今日の名優諸氏はこゝに、形の上の錦繪美以上のもの、現代の觀客の心魂を動すものを見出し得ないのであらうか。

前に掲げた如く、「演劇新潮」の記者は、猿之助が、青年時代にその時代の思想的苦悶に感染して、學校通ひをして學問をしたゝめに、彼れの藝道の發展が妨げられたと斷定してゐるが、私には、この評語が全然腑に落ちない。第一、時代の苦悶を感じないやうな鈍物から、新代の傑れた藝術が生れ得ると、この記者は思つてゐるのであるか。また、酒色の耽溺以上に學問は藝は道の妨げとなると、この記者は信じてゐるのであるか。あるひは、猿之助の學問は、特別に藝道の妨げとなるほどに、深く且つ廣いのであるか。

私はむしろ、猿之助がその時代の空氣を感ずる鋭敏なる感受性と、收得したる學問を利用して、演劇の上に新しい道を求めようと努力しないで、谷崎君の所謂、菊五郎を一廻り小さくした歌舞伎役者として、錦繪美專門のお仲間となつて、餘儀なく安んじてゐるらしいのを、彼れのために惜んでゐる。芝居といふ藝術にも、菊五郎などの狙つてゐるところ以外に、いくらでも進んで行ける餘地があるのだ。

兎に角、この頃二三の新聞評を讀んで、私は、評者が、頭腦の空虚なる俳優に對して、あまりにだらしのない讚辭を呈してゐるのを、不快に感じた。

沓掛にて

—芥川君の事—

志賀直哉

芥川君とは七年間に七度しか會つた事がなく、手紙の往復も三四度あつたか、なかつたか、未だ友とはいへない關係だつたが、互に好意は持合つて居た。

七年程前淺草の活動小屋で初めて芥川君を見た。瀧井孝作君と一緒に來てゐて、私は二間程離れた所に一人で居た。丁度「暗夜行路」といふ小說を大阪毎日の通俗欄の爲めに書きかけてゐた時で、新聞の註文は關西の讀者は低級だから調子を下ろし、面白く書いて吳れと云ふやうな事で、面白くなかつたので「改造」の編輯員だつた瀧井君に若し「改造」で出してくれるならその方に出したい、とその話を私は二人の傍へ行つてした。知らない芥川君のゐる所でそんな話はいやだつたが、拘泥するのもいやで、私はその話を簡單にして、直ぐ自分の席へ還つた。瀧井君は紹介しようとしなかつたので、雜誌の口繪で芥川君とは知つてゐたが、私達は挨拶をしなかつた。芥川君が私の作物に好意を持つてゐて吳れる事は朧氣に知つてゐて、紹介すればお互に御辭儀したかも知れなかつたが、瀧井君が氣輕にさういふ事をする性質でなく、そのまま別れた。

東京日々の記者で「僕は菊池芥川両氏の後輩です」と肩書のやうに名乗つて來た男が、「貴方と芥川さんとはどつちが偉いと思ひますまい」と云つて居た事がある。私はその男から甚く輕薄な感じを受けてゐたから「何を云つてるんだ」と思ひながらその理由を訊返へさなかつたが、以前廣津君の話で、廣津君が毎晩夜明しで書きものをしてゐるといふ話をしたら、芥川君が、それぢやあ廣津君とは何時寢るんだ、と云つたといふ。芥川君は一人一人で會つてゐると昔無しいが、側に三四人ゐるとよくさういふ調子でものをいふと聞いてゐた。そんな事を切込むやうに云はれては堪らないと私は思つた。さういふ事を好きなら、日々記者の云つたやうにウマが合はぬかも知れぬと思つた。

その次、芥川君に會つたのは多分その翌年の夏、我孫子の家に小穴隆一君と訪ねて呉れた時だつた。瀧井君は「改造」の方をやめ、既に我孫子の住人だつた。丁度私は庭にゐた時で、直ぐ庭の方へ通つて貰つた。田舍の事で座敷も庭も同じやうなものだつた。

芥川君は吾々仲間が互に交はすお辭儀よりは叮嚀なお辭儀をした。長い髪が前へ垂れ、それを又手でかき上げた。我々は野人で、芥川君は如何にも都會人らしかつた。

芥川君は腹下しのあとで痛々しい程、痩せて見えた。そして非常に神經質に見えた。私は神經質な人に會ふと、互にそれを感じさせると切りがないので、反對に出來るだけ呑氣にならうとする傾きがある。これは何も考へてするのではなく、自然さうなつた。

芥川君は三年間程私が全く小說を書かなかつた時代の事を切りに聞きたがつた。そして自身さういふ時機に來てゐるらしい口吻で、自分は小說など書ける人間ではないのだ、といふやうな事を云つてゐた。

私はそれは誰れにでも來る事ゆえ、一々眞に向けなくてもいゝだらう、冬眠してゐるやうな氣持で一年でも二年でも書かずにゐたらどうです、と云つた。私の經驗からいへば、それで再び書くやうになつたと云ふと、芥川君は、「さういふ結

暇な御身分ではないから」と云つた。

芥川君は私に會つたら初めから此事を訊いて見る氣らしかつた。然し私の答へは芥川君を滿足させたかどうか分らない。

後で思つた事だが、私のやうに小說を書く以外全く才能のない人間は行きづまつても何時かは又小說へ還へるより仕方ないが、芥川君のやうな人は創作で行きづまると研究とか考證とかいふ方面に外れて行くのではないかと。然し今にして見れば芥川君は矢張りさうはなり切れなかつた人かも知れない。

後は割に呑氣な話で一日を暮らした。瀧井君と小穴君とは早い將棋を何番もさしてゐた。夏羽織の話から私は若い盛りに幾ら薄いとは云へ、こんなものを着るのはつまらない。昔は着なかつたらうと云ふと、芥川君は、遊びに行く若者が、夏羽織をたゝんで懷に入れて行く話などあつて、昔から着たものだ、然し今程長くはなかつたやうだと云つた。そして一人は氣がさすが、四五人仲間があれば昔のやうな短い羽織を着て見てもいゝと云つた。

私の所にある少しばかりの繪や陶器を見せた。芥川君は室生犀星君が陶器の蒐集をやつてゐる話をし、それを見てゐると、室生君の陶器に對する趣味が段々進んで行くのが分かつて氣持がいゝと云つてゐた。

今は誰れの事を云つたか忘れたが、文壇の誰彼に對し、私が無遠慮に惡口をいふと、芥川君はその人のいゝ點をはつきり擧げて辯護した。それは私に反對しようといふのではなく、純粹な氣持に感じられ、私は大變いゝ印象を受けた。

芥川君藏の「鳳立岐」（違ふかも知れないが）といふのと、「○哉」（此○の所は誰れにも讀めない）といふ藏六の大きな印を前に瀧井君が捺して來て私に見せた。そして○の所が見やうで「直」と見へるので、若し「直」だつたら私が貰ふべきだと云ふと、芥川君は「若しさうだつたら獻上します」と云つた。「直でなかつたら、此方の名前を變へてもいい」と私は笑談を云つた。立派な印で殊に「鳳立岐」の白字がいゝやうに思へた。そんな話から私は私の持つてゐる印を出して見せたが、芥川君等の眼からは一顧の價へもない物を芥川君は小穴君と一緒に「中ではこれが厭味がない」とか、「この方が面

白い」とか叮嚀に見てくれた。私は氣の毒な氣がした。その后「〇哉」は「直哉」でない事が分つたさうで、その印は遂に貰ふ事が出來なかつた。

その日、芥川君は私の「子を盗む話」といふ短篇が西鶴の「諸國物語」の一節から來てゐるのではないかと云ふので、私は「諸國物語」は一つも讀んだ事がなく、前にかいた「剃刀」といふのも似た話がビアズレーか誰れかの詩にある事、それから「范の犯罪」といふのが、テーマは反對だがモウパッサンに似たものがある由聞いた事などいふと、芥川君は後人の爲め何時かそれらを書いて置く必要があるだらうと勸めてくれた。私は西鶴は常に手元に置きながら、未だに其「諸國物語」を讀んで見ない程で、芥川君にすゝめられてからも何年となく、それらを書かずにゐたら、却つて芥川君が何かに書いてくれた。

夏の事で冷めたいビールを出したが、芥川君は飲まなかつた。そして腹具合が悪いと食事も僅かしかとらなかつた。子供に病氣をされると、仕事が出來ない話をすると、芥川君は自分にはさういふ事はないと云つてゐた。初めて會つた芥川君は噂で想像してゐた人とは大分異つてゐた。私はその後一度芥川君の家を訪ねたいと心掛けてゐたが、その機會がなく、京都の方へ引移つて了つた。

その次は三年前、私が山科に住んでゐた時、訪ねてくれた。私は京都へ出て、子供に三輪車を買ひ、重いのをかついで歸つて來ると芥川君と瀧井君とが自家で待つてゐた。間もなく里見と直木君とが來て、賑やかに話したが、此日どういふ事を話し合つたか、全で憶ひ出せない。下らない事だが里見が何とかいふ布か黒無地の羽織と着物に古い唐桟の下着を着てゐた事、芥川君が鼠の結城縞、直木君が赤糸の入つた御召を着てゐた事などを覺えてゐる。私でも瀧井君でもそれから見ると如何にも田舎臭いなりで、なりだけでも都の風が吹いて來たやうに感じた。その日里見は元氣だつたが芥川君は風邪の引きかけで元氣がなかつた。夕方から千本のすつぽん屋へ出かける事にしたが、見るから寒さうなので、私は祖父譲り

の毛羽織を芥川君に着せた。厚ぼつたいその羽織が細々した芥川君には勝ち過ぎて見えた。

芥川君は木屋町の宿の前で自動車を下り、直ぐ後から行くといつてゐたが、吾々がすつぽんやに着くと間もなく、直木君を電話へ呼び出し、寒氣がするからと斷はつて來た。

私達はその晩九里、清閑寺などいふ古い友達と共に梅垣といふ下河原の宿で遊び明かした。梅垣の女將は夏目さんの崇拜家で、夏目さんから貰つた手紙を額にし、自身の居間には四ツ切の寫眞を飾り、夏目さんを「うちの先生」と呼び、その出來のいゝ畫帖なども持つてゐた。そんな關係で芥川君も泊つた事があり、一ト晩語り明かした事があると女將はなつかしさうに芥川君の噂をしてゐた。

翌日、日暮れに電話をかけたらもう東京へたつたあとだつた。

その次は、其日私達は桂の離宮拜觀をするつもりで、家内を連れ、山科から汽車で京都へ來て、家内だけ急いで朝の食事をしなかつたので、驛の食堂で食事をさせ、その前で私はぼんやり烟草をのんでゐると、不意に芥川君と瀧井君とが入つて來た。その時は文藝讀本に私の短篇を入れる承諾を求めるのが用だつた。北陸の方からの歸りで、若い人の結婚の世話で來たといふ事だつた。離宮拜觀の許可證を受けて行けない人があり、丁度いゝので勸めたが、芥川君は用事があつて行けぬとの事だつた。

其晩だつたと思ふが、私は瀧井君と一緒に安井神社に近かい宿に芥川君を訪ねた。此時は私の方が甚く疲れてゐて、口を利くのも物憂く、殆ど話らしい話をせず一時間か二時間ゐて、雨降りの中を歸つて來た。芥川君は切りに自動車をいはうといつてくれたが、少し歩きたかつたのでそれを斷つた。

其次は古美術の寫眞帖を作る計劃をしてゐた時、東京方面の個人所有の繪を見せて貰ひに上京した折り、二度會つた。一度は目黑の山本悌次郎氏の家に支那畫を見せて貰ひに行つた時、どういふ繪を見るか、目錄から芥川君にそれを選ん

で貰つた。寫眞は前から決めてゐた物きり撮らなかつたが、芥川君は支那畫に精しく、選んでくれた物は大變いゝものだつた。山本氏も氣輕に色々見せて與れた。晝になり吾々はひる飯の御馳走になつたが、山本氏は用事で出掛けねばならぬと洋服に着かへ、再び出て來て吾々の食事をしてゐる傍で話込んでゐた。

これは後で芥川君が云つたといふのを傳へ聞いたが、鰯の鹽燒を食はされたと云つてゐたといふ。又聞きで、はつきりした事は云へないが芥川君がそれを苦笑の氣持で云つたとすれば、私は丁度その反對だつた。膳には他のものもあつたが、其鰯が一番うまかつたからだ。

早稻田の或る作家に就いて芥川君が「煮豆ばかり食つて居やがつて」と云つたと云ふ。これは谷崎君に聞いた話だが一寸面白かつた。多少でも貧乏つたらしい感じは嫌ひだつたに違ひない。

山本氏の所からの歸途松江の話をした。大正二三年の頃私は松江の内中原といふ所に小さな家を借り、一ト夏暮らした事がある。所が前年の夏、同じ家に芥川君が暮らした事があるとかで、二人は隣家の若い大工夫婦の噂などをした。それは芥川君が高等學校を卒業した頃の話らしかつた。

それから幾日かして、今度は赤坂の黑田家の筆耕園と唐畫鑑を見に行く時、又會つた。芥川君は麻布三河台の私の父の家へ誘つて與れた。(此邊記憶少し怪しく、前の山本氏の所へ行く時か、何れか忘れたが、兎に角一度麻布の父の家で私は芥川君と話した事がある)

その時芥川君は私の作物に對し好意を示してくれた。私の何に就いてどういふ意味の事を云つて與れたか、今は不思議な程忘れて了つた。誰れもさうだらうが、自分の作品を眼の前で讃められるのは具合の惡いものだ。返事のしようがなく、早く濟んで與れゝばいゝといふ氣になる。芥川君のがさういふ感じを私に與へたかどうか。多分諧謔にさういふ感じは與へなかつたかも知れないが、兎に角、どういふ話だつたか今は全く頭にない。

そして私も芥川君のものを評したが、これはよく覺えてゐる。それは主に芥川君の技巧上の欠點——わざ〳〵云ふ必要はなかつたが、私は前にそれを他の人に云つてゐたので、陰で云ひ、前で口を閉ぢてゐる事が何かの場合兩方によくない事が出來るのを恐れる氣持だつた。

芥川君の「奉教人の死」の主人公が死んで見たら實は女だつたといふ事を何故最初から讀者に知らして置かなかつたか、と云ふ事だつた。今は忘れたが、あれは三度讀者に思ひがけない想ひをさせるやうな筋だつたと思ふ。筋としては面白く、筋としてはいいと思ふが、作中の他の人物同樣、讀者まで一緒に知らさずに置いて、仕舞ひで脊負投げを食はすやり方は、讀者の鑑賞がその方へ引張られる爲め、其所まで持つて行く筋道の骨折りが無駄になり、損だと思ふと私は云つた。讀者を作者と同じ場所で見物させて置く方が私は好きだ。芥川君のやうな一行々々苦心して行く人の物なら、讀者はその道筋のうまさを味はつて行く方がよく、さうしなければ勿體ない話だといふやうな意味を云つた。あれでは讀者の頭には筋だけが殘り、折角の道筋のうまさは忘れられる、それは惜しい事だと云ふ意味だつた。

一體芥川君のものには仕舞ひで讀者に脊負投げを食はすやうなものがあつた。これは讀後の感じからいつても好きでなく、作品の上からいへば損だと思ふといつた。氣質の異ひかも知れないが、私は夏目さんの物でも作者の腹にははつきりある事を何時までも讀者に隱し、釣つて行く所は、どうも好きになれなかつた。私は無遠慮に只、自分の好みを云つてゐたかも知れないが、芥川君はそれらを素直にうけ入れてくれた。そして、

「藝術といふものが本統に分つてゐないんです」といつた。

「妖婆」といふ小說で、二人の青年が、隱された少女を探しに行く所で、二人は夏羽織の肩を竝べて出掛けたといふのは大變いゝが、荒物屋の店にその少女が居るのを見つけ、二人が急にその方へ步度を早めた描寫に夏羽織の裾がまくれる事が書いてあつた。私はこれだけを切り離せば運動の變化が現はれ、うまい描寫と思ふが、二人の青年が少女へ注意を向け

たと同時に讀者の頭も其方へ向くから、その時羽織の紐へ注意を呼びもどされると、頭がゴタ／＼して愉快でなく、作者の技巧が見えすくやうで面白くないといふやうな事もいつた。こんな欠點は私自身にもあるかも知れず、要らざる事をいつたやうにも思つたが、當時そんな事を思つてゐたので、これも私は云つた。芥川君は「妖婆」は自分でも嫌ひなもので書きかけで、後を止めたものだと云つた。

芥川君は私には最も同情のある讀者だつたが、私は誰れの物も餘り讀まぬ方で、芥川君のものも餘り見てゐなかつた。然しその后、芥川君から時々本を貰ふやうになり、例へば「一塊の土」とか、「點鬼簿」とか、題は忘れたが停車場で始終會ふ女に淡い愛情を感ずる短篇とかには感心した。その后、會ふ機會もなくそれを云へなかつたのは殘念である。「大導寺信輔の半生」などもよくなりさうなもので、中途で斷れたのは惜しかつた。

黑田家の畫幅を見た歸り、私は日本橋の方へ行くので直ぐ別れたが、芥川君は南部修太郎君を訪ねると、其時一緒だつた梅原と丁度同じ方向なので、二人は同じ自動車で歸つて行つた。そして其時芥川君は梅原の家へも寄つたとか、あとで梅原は「却々氣取屋だね」と云つてゐた。さういふ自身昔は氣取屋でない事はなかつたが、作者としての芥川君が少し氣取過ぎてゐた事は本統だ。アナトール・フランスの妙な影響が大分あつたのではないか。

佐藤君が「その窮屈なチヨツキを脫いだらよからう」といふ意味を書いてゐた事があるが、私も同感だつた。さういふ意味ではチヨツキを脫いだもつと別な芥川君があり得るわけで、今芥川君が自らを殺して了つた事は、さういふ芥川君を永久に見られなくなつた意味で、非常に惜しまれる。佐藤君がさう云つた時代からすれば芥川君自身既にそのチヨツキを脫ぎかけてゐたやうに思へ、尙心殘りである。透谷の事は知らないが、眉山や武郎さんの死よりもさういふ點で惜しまれる。年も若く、仕事の上の謎も多かつた。

大雅の「十便」を互に讃め合つた時、芥川君は「十便」に對し「十宜」を畫いた蕪村を馬鹿な奴だと云つてゐた。然し

久保田君の所にある「時雨るゝや」の句に雨傘を描いた芥川君の畫を新聞で見、銀閣寺にある蕪村の「化けさうな」の傘と全く同じなので、芥川君は惡く云ひながら矢張り大雅よりは蕪村に近かい人だつたのではないかと不圖思つた。同時に蕪村よりは大雅が好きだつたらうとも思つた。

芥川君とは黒田家の玄關で別れたのが最後だつた。死を決心して二年間といふその間は遂に一度も會ふ機會がなかつた。最近では改造社の演說で北海道へ行つた出先きから里見等と寄せ書きの端書を呉れた。里見には女の道連れがあり、その人も私はよく知つてゐるので、芥川君は「双兎賦圓。孤雁参寒」御諒察被下度候。端書が手元になく違ふかも知れないが、こんな串戯を書いて來た。その後、私が自分の近作集を送つたのに對し叮嚀な手紙を貰ひ、間もなく芥川君からも「湖南の扇」を貰つた。

私は芥川君の死を七月二十五日の朝、信州篠の井から沓掛へ來る途中で知つた。それは思ひがけない事には違ひないが、四年前京都で武郎さんの自殺を聞いた時とは餘程異つた氣持だつた。乃木大將の時も、武郎さんの時も、一番先きに來た感情は腹立たしさだつたが、芥川君の場合では何故か「仕方ない事だつた」と云ふやうな氣持がした。私にさう思ふやうな材料があつたわけではないが、不思議にさう云ふ氣持が一番先きに來た。

幾月か前の「文藝春秋」に芥川君は自分の腦のあらゆる皺に虱が行列を作り、食入つてゐる想像を書いて居た。これなど如何にも心身共に衰弱した人の想像らしく、見て私は身ぶるひを感じた。

兎に角私が會つた範圍では芥川君は始終自身の藝術に疑ひを持つて居た。それだけに、もつと伸びる人だと私は思つてゐた。

それから私は自分がかういふ靜かな所にゐるせいか、芥川君の死は芥川君の最後の主張だつたといふやうな感じを受けてゐる。（昭和二年七月三十日）

文藝時評

佐藤春夫

芥川龍之介を哭す

最後まで理智を友としたやうに見える芥川龍之介を弔ふためには、故人もこれを厭ふたところの感傷の辯をさけて、評論の形を以てこれを爲すことを、僕の友人の良き靈は宥してくれるだらうと思ふ。

「爲す者のみひとりこれを解す」これはニイチエの言葉であるが、僕はまだ一ぺんも自分を殺したものではない。だからこの友人のこの特別な死の消息については到底了解出來ないのは云ふまでもない。だから僕は彼を、たゞ僕にはかう見えるといふことによつて結局僕自身をしか語らないだらう。さうして讀者は亦、讀者の好むがごとくにこれを讀むことが出來る。――つまりは、ぐうたらで生き殘つてゐる人間の身勝手な言ひ草であるかも知れない。僕のよき友人であつた故人は、最近では僕の不作法を戯れに必然性と呼んで、寛大にもこれを見逃してくれた。だから若しこの文中に、少しでも、期せずして彼の靈に禮を失するやうなことがあつたにしても、思ふに彼は微笑を以て許してくれるだらう。

人としてまた藝術家としての芥川龍之介にとつて、最も致命的――噫、この言葉こそ今は最も文字通りに讀まなければならなくなつたが――なものは、彼が多くの場合、否、殆んどいつも容易に胸襟を開くことの出來ない人であつたといふ一點である。彼は端的に自己を語り出すことには堪えられない人であつた。やさしい心情と複雑な生活とを蔵しながら一切これを洩し得ないのである。さうして彼は自己韜晦者であつた。彼は最も廻りくどい方法で彼自身を表現した。この事實

は彼の最後の手記に於てもこれを見出すことが出來る。彼のやうな性格にとつてはあらゆる種類の自己告白は野卑極まる惡趣味に見えたに違ひない。「エトルリヤの花瓶」の作者を彼が熱愛したのは、さもあるべきことであつた。彼は或る時、昂然として、人々に恥を曝すために裸になつてそれによつて喝采されるなどは眞平だといふ意味のことを書いた。又、彼は或る時、僕の面前で「僕は見え坊だから。見え坊だから、……」と連呼した。彼の生活と作品とを開くべき鍵は、一つ茲にあるやうな氣がする。

僕は嘗て、作家としての彼を評して久米正雄の所謂「流露感」に乏しい事を指摘し、また彼は窮屈なチョッキを着てゐるとも云つた覺えがある。この僕の評に對して彼は「さう言へば、佐藤はまたあまりに浴衣がけだから」と或る人に答へたといふことを、僕は間接に聞いた。

今年の一月の中旬であつた。或る夕刻、飄然と僕を訪れた彼は、その日の午後五時半から、翌日の午前三時近くまで僕の家に居た。十年間の交遊の間で僕が最も密接に彼に觸れ得たのはこの一夜であつた。彼は彼としては出來るだけ裸體に近くなつて彼の生涯と藝術とについて僕に語つた。彼の言葉は八分どほり抽象的であつたが、それによつて僕は彼の心中には黑い何者かが蹲つてゐるのを知つた。しかもその何ものかは表現することを禁じられてゐるがために、その存在の色をます〳〵濃密にし、さうして彼を一層深く苦しめてゐるらしいのを僕は直感した。僕は彼に向つて、ヒステリイといふ病氣は如何にし發生するか、またそれを治療し得る唯一の方法は何であるか知つてゐるかを、彼に尋ねた。彼は知らぬと答へたので、僕は僕の耳學問を彼に傳へた。さうして、我々は我々の生活の急所に觸れてゐるといふその理由のために最も明したくない當の問題を、何等かの方法で少しづつ漏洩することがいつも必要であるが、就中、心中に苦悶を持つてゐる場合には一層必要であるだらうと忠告した。さうしてすべての文學者は自ら意識せずして不斷に、ヒステリイの療法を自ら企ててゐるのではなからうか、「思ふこと言はねば腹ふくるる」といふのは、ただの戯れではないと僕は言つた。さ

うして僕は、彼の胸中の雲をして雨降らせたならば、降らず雨降らせたたならば、といふことを認めたいであらう――僕には見え坊主から……」を彼がこれを述呼したのはこの時である。「改造」八月號の「文藝的な餘りに文藝的な」の一項目「ヒステリイ」は、彼と僕との當夜の話題を、彼がもう一度考察したものであるらしい。

僕はまた彼が常に金玉の文字を心掛けるがために、彼の作品から却つて脈動が失はれるのではないかを不斷から恐れてゐた。忌憚なく言ふけれども、僕の目には彼の文字は肌の色も白く目鼻立も整然とはしてゐるけれども、しかしどうしても人形を思はせるのであつた。この意味では彼は正しく「傀儡師」ではなかつたらうか。しかも彼は彼の表現のために益々刻苦して、その餘り彼は氣輕るに制作を樂しむことが出來ないやうな傾があるのを僕は考へた。さうしてその夜、僕は彼に向つて文章をなぐり書きすることを、つまり談話することを樂しむところの彼が恰もしやべる時と同じやうに樂しんで書くためには、全くしやべるが如く書くことを勸告してみた。さうして僕は説明した。我々の話は實に屢々、ときれ〳〵のうちによく要領を得たり、また半で別の話柄が生ずるために纏りがなかつたり、いつもこの上なく不完全でありながら、しかも我々の言はんとする精神なり心持なりは、相當によく通じてゐる。つまり談話に於ては我々はいつも口に出されない深山のことを聞くことが出來るし、不完全のなかから充分なものを見出す術、或は見出させる術を心得てゐる。文學の事業は必ずしも完成したものをつくるのではなく、我々の魂魄を傳へやうとするにあるならば、我々は我々の完成によつて我々を傳へることが出來ると同時に、我々の缺點我々の失敗によつても亦、決して他人を傳へるのではなく我々自身を表現し得るわけなのである。もし常に完成をのみ言ふとしたならば、昨日の完成は實に今日の未完成になつてしまふだらう。永久に一つの完成もないだらう。さうしてこの意味では我々の完成とはほんの一時的のもので、しかも缺點の方は永久に我々を傳へるといふべきである。考へてゐることは悉くこれを書けるものではない。古人の書いてる部分をとほして書き得なかつた部分を我々は知るやうに、我々も亦、我々の缺點をとほして我々の美點を知つてくれるやうな讀

者を持ち得るだらう。我々は既に所謂口語なる文體を選んで來たのだから、文字を扱ふ場合にも亦、言葉を扱ふ以上に窮屈な用心をしない方が、却つて眞に言文一致の精神に適ふといふものではないだらうか。――かういふふうに僕の意見は甚だ一面的で、またその論法は半ば常談のやうに氣輕なものではあつた。けれども、僕のつもりでは、この意見は少くとも彼にだけは採用してもらひたかつた。しかし、「ヒステリイの療法と文學」については即座に贊成の意を表した彼も、文學の言文一致精神については、これを了解するとは言つたけれども、容易に贊成しないらしかつた。掘り出したままの荒金で無造作に提供しようと僕がいふのに對して、彼は見事に結晶したままで掘り出される水晶のやうな鑛物もあると彼は答へた。ジャン・ポオルのやうな作家もあると僕が言ふ時に、彼はシャアル・ボオドレエルのやうな人もあると答へた。僕はまた言つた。作家は――わけても今日のやうな時代に於ける作家は、決して駄作を恥づる必要はない。作家の眞價と見るべきものは幾十百の駄作がその集中にあるかではなくて、傑作が一つあるかどうかだけである。或はまたその駄作がどんな質のものであるかである。僕はすべての作品は神樣との合作であると信じてゐるから、どんな愚作を書いても一向自分だけでは責任を負はないことにしてゐる。……

しかし、これらの僕が言はんとしたことの眞意は、つひに彼には充分に諒解されなかつたことを僕は後に知つた。「改造」四月號の「文藝的な餘りに文藝的な」の「僕等の散文」の中には、

「佐藤春夫氏の說によれば、僕等の散文は口語文であるから、しやべるやうに書けといふことである。それは或は佐藤氏自身は不用意の裡に言つたことかも知れない。……」

といふ書き出しの一項がある。しやべるやうに書けといふ僕の言葉は、僕としては屢々いふ言葉であり、從つて充分な意識を以て述べた言葉であるが、假りにもしそれが不用意に云つたとしてみても、それはどちらでもよかつた筈である。なぜかとなれば、しやべるやうに書かうといふ僕の說は、不用意のうちに、作者の人がらが現はれることを喜ばうといふ

意に外ならないからである。僕は實際、放心より外には完全な自己表現はないと考へてゐる程である。しかし、僕には結局彼には認められなかつた。さうして彼は「僕等の散文」の中で、僕の「しやべるやうに書く」説と全く反對の「書くやうにしやべる」説を述べてゐる。さうしてその好個の例として夏目漱石を擧げてゐる。僕は彼が擧げたこの例が果して適切であるかどうかを知らない。「即天無私」をモットォとしたといはれる夏目氏の文章が、或は言葉が、常に芥川氏が文章を書く時の如く一吟双涙的に窮屈なものであつたかどうかを僕は疑ふのである。實際、「しやべるが如く書く」説と「書くが如くしやべる」説とは、單に表現の問題ではなく、實に二つの人生觀、いや二つの生き方そのものでなければならない。即ち絶體の他力と絶體の自力とのそれを意味するのであると言ふべきである。さうして芥川氏は實に絶體の自力主義者であつた。これ等のことに就ては、いづれはゆつくりと彼と語り合はうと思つてゐたのに、今ではつひに永久にその機を失つてしまつた。

表現に於て絶對に自力を主張した人は、生活に於ても亦これを實行した。さうして彼は自らの生涯をも自ら決算した。自己を端的に語ることを欲しなかつたところの彼は彼が負はされて來たところの彼の氣質に殉じた。僕の所謂、窮屈なチヨツキを脱ぎ去ることを最後まで肯じなかつた。「激しい拷問の答の下で、切齒して一言も洩さないところの人間の私かに勝ち誇つた感情を汝等は知つてゐるか」といふニイチエの言葉を僕は今思ひ出すのである。狐に腹を喰ひやぶられながら遂に一聲の悲鳴をも上げずに死んだスパルタの少年の顔つきを僕は今思ひ出すのである。彼はこの最後の行動によつて、厄介な氣質を負はせられた彼自身を、身を以て表現した。彼の藝術の中には彼の生涯らしいものは直接には殆んど何ものをも表はさなかつた。しかし彼の生涯は遂に一つの藝術を現はした。それは彼が愛した「エトルリヤの花瓶」と同じ種類の短篇である。さうして彼は作品の人といふよりもむしろまた作中の人であり、態度の人であつた。

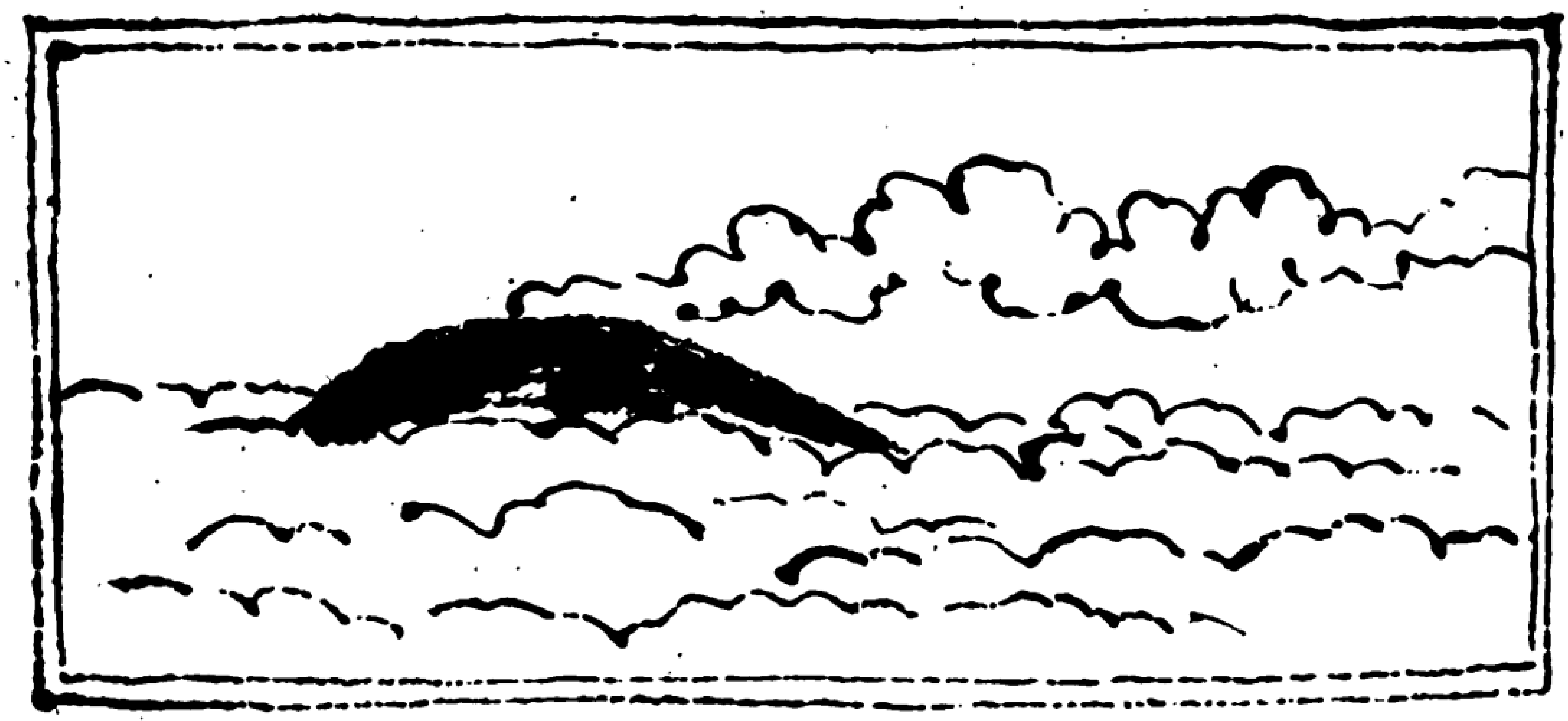
「僕はいつも僕一人ではない。息子、亭主、牡、人生觀上の現實主義者、氣質上のロマン主義者、哲學上の懐疑主義

者等、等、等、――それは格別差支へない。しかし、その何人かの僕自身がいつも喧嘩するに苦しんでゐる」

この言葉も亦、その二月某日の夜、僕の面前で彼が語つたものである。さうして後に同人雜誌「驢馬」に掲げられた。さうして今「湖南の扇」の一六〇頁にある。それは簡單にスケッチされた彼自身の自畫像である。この自畫像の背景には病弱が重苦しい黑い緞を垂れてゐるし、また前景には彼のそれによりかゝつた卓上にはエトルリアの花瓶に自尊心の花が――或は彼の言葉に從つて「武士道の代りになる虛榮心」またニイチエの言葉に從つて「男子にあつては道德の代用をするところの虛榮心」の花が生けられてゐる。彼の手は瘦せ細つて、その指はペンをあやつることに難澁してゐる。何故かとなれば彼は最も重量のある黃金のペンを放さないからである。これが僕の描かうとする最近の彼の肖像畫である。

しかも最後には、すべてのものがそれぞれに勞れることによつて彼のなかの喧嘩は納まり、彼の氣質上のロマン主義が勝利を制した。僕としては彼の中の人生觀上の現實主義が勝利を得たであらうことをどんなに希望するか知れないのだのに！苦痛のなかに人生といふものがどんなものであるかを觀つゞけて「幸福や平靜は大したことではない。我々の生きるべき世界はたゞ悲壯だけだ。さうして我々の樂しみは人生が我々にどんな姿で現はれるかを識ることにある――しかも出來るだけ多く」から言ふことは、彼の氣質にも、また彼の人生觀にも必ずしもさう不似合ではなかつたらうと思ふ。それだのに、彼は「幸福ではないまでも平靜」だと言つて、彼の生涯を短かい一篇のロオマンスにしてしまつた。それといふのも彼は生れながらの東洋人であり、且つ生て病弱の人であつたからであらう。彼の氣質には似合はしかつた事をも、彼の體質が拒んだのであらう。

友よ、我々は君の所謂「動物力」によつて未だに生きてゐる。さうしてその動物力の使嗾によつて自分たちの瓦全を何か意味あることのやうに思ひ、且つは君の玉碎を惜み悲しんでゐる。



衰頽時代

正宗白鳥

（一）

二三日じめ〳〵と降り續いた梅雨は霽れかけたが、まだ冴え切らない蒸暑い日の夕方であつた。

中泉夏雄は、獨りで銀座を散歩してゐた。京橋際から新橋までの兩側の街上を二度も往復して、可成りに空腹を感じて來たので、何處かで晩餐を食べようと思つて、自分の好みにかなひさうな家を物色してゐたが、ふと、彼れは、雜沓のうちに一人の人間を見つけて吃驚した。露店を覗いてゐるある男の横顏の一部が目についたゞけなのだが、それは中泉自身の心の底に潜んでゐるある人間の幻影ではなくつて、たしかに、その男の本物なのであつた。……朝川猛行に違ひなかつた。

そして、朝川を見つけた瞬間から、中泉は最早今までの中泉ではなくなつたやうに平靜が失はれた。彼れは、逃げるやうに通過ぎた。自分の背を見られてゐやしないかと氣遣はれた。しかし、銀座から離れようとはしないで、暫くそこらをうろついたあとで、ある喫茶店へ入つた。ソーダ水で渇きを留めて、金口の埃及煙草を喫ひながら、あたりの客を見てゐたが、さうして、眞向ひに据ゑられてゐる時計が、三分五分と時を刻んでゐる間に、意外にも、朝川に會つてもいいと思はれだした。たゞ會つてもいいばかりでなしに、先方が承知したなら、食事を共にして、何かと、相手の身について、久振りに話をして見たくなつた。

「最後に、朝川に上野公園の茶店で別れたのは、一昨年の九月の十五日であつた。美術院の展覽會で偶然出會つて、互ひに氣まづい思ひをしながら、それでも、知らん顏をして別れる氣にはなれなくつて、茶店へ寄つて、冷たいビールを飲んで、しら〴〵しく繪畫の批評なんかをしたのであつた―

あれから、二人をつないだ糸は、表面だけはポツンと切れてゐた。音信不通で、互ひの噂も滅多に耳に入れることはなかつたので、それつきり一生涯縁のない人として通過ぎる筈になつてゐた。

彼れは、さつき露店を覗いてゐた朝川の横顏が以前よりも老けて醜くなつてゐたらしいのを思出したが、それにつけて、自分の顏も大分老けて醜くなつたのを、鏡に映して見る如く思浮べた。

待つてゐても、朝川がこの喫茶店へ入つて來る譯はなかつたので、中泉は、サンドヱッチなど、さしてうまくもないカサカサした物で空腹を滿して、もう一度銀座を東から西へと一巡して、江戸川べりの自分の家へ歸つた。妻君のふみ子へのお土産には、木村屋の餡パンが投出された。

「有難う」湯上り浴衣を纏つてゐたふみ子は、沒表情で答へて、「銀座までいらつしつたの？」

「アヽ」中泉はふみ子の側へ足を投出して、「よくあんなに人が出るもんだな」

「銀座で誰れかにお會ひになつて？」
「おれが、銀座で知つた人に會はなかつたかと、訊くのかい」
中泉は妻の問ひにビクッとして、その問を咎めるやうに訊返した。
「あなたは銀座へ遊びにゐらつしやるたんびに、屹度お友達か誰れかに會つたと仰有るぢやありませんか」
「さうだつたかな。これまでは誰れに會つたか覺えてゐないが、今夜は會つたよ」
「誰れにお會ひになつて？」
「えらい奴に會つた」
「さう？」ふみ子は仕事の手をゆるめないで、上目でちよつと夫を見たゞけであつた。
「朝川猛行に出くはしたのだ」
「朝川さん？二宮にお家を有つてゐて、毎日丸ビルに通つてた方なんでせう。あの人はこの頃わたしのとこへちつともいらつしやらないぢやありませんか」
「おれも彼奴には二年目で會つたのだ。會つたといへるほど會つたのぢやないがね」
「可笑なことを云つてゐらつしやるのね。ぢや、どういふ風にお會ひになつたの？」
「朝川の顏が銀座の街上に宙ぶらりんにぶら下つてるのを見たのだ」
「詰らない戯談を云つてゐらつしやる」
「なに、戯談なものか。おれは大眞面目で云つてるのだ」
「あなたはどうかしてゐらつしやるのね。お酒も召上つてゐらつしやらないのに」
「少し變つた話をすると、お前は戯談にしてしまふ。お前のやうな氣性だと氣樂でいゝが、それで世の中が無事に渡れる

ものだらうか。……母親が生活難から子供まで殺して自分も自殺するといふ記事を新聞で讀んでも、お前は作り話のやうに思つて、何とも感じないんだし、男が嫉妬を起して女房を絞殺した話をしても戯談にしてしまふのだから、話をしても張合ひがないよ」

「ぢや、朝川さんの生首が銀座の街上に引つ掛つてたといふ話を、眞に受けて信用しなければいけませんの」

「まあ、さうだ」

中泉が眞顏でさう云ふのを聞いて、ふみ子は鼻の尖つた淋しい顏に笑ひを洩らした。

「お前は何も知らないから氣樂だが、おれは彼奴とは絶交をしてるんだよ」

「なぜお友達と絶交をなすつたの？」

「それはお前に話していゝことだか惡いことだか分らないな」

中泉は、今の場合、妻にでも胸の中を打明けたなら、鬱憤が晴れるかと思つたが、いくら氣性のなだらかな、いゝ意味にも惡い意味にも感激性に乏しい彼女でも、洗ひ曝らしに露出された夫の秘密を突付けられたなら、精神に動搖を來たすに違ひないと氣遣はれたので、話したくつて溜らないことを我慢して押えつけた。

「朝川さんといふ方は、柔しさうな顏してゐるぢやありませんか。そして、二三年前私達が若松町にゐた時分に遊びにゐらしつた時には、あなたと仲がよささうにお互にニコ〳〵して、大變面白さうにお話がはずんでゐたぢやありませんか」

「あの時のことを、お前はよく覺えてるのかい」

「あの時は、何だか、女の話をよくしてゐらつしつたわね。女はあんまり利口すぎた女よりも、少しくらゐは拔けてる方がいゝとか、品のいゝ顏した女よりも少し下卑たところのある女の方がいゝとか云つて、お二人の意見が一致したぢやありませんか。わたし次の室で聞いてゐて、朝川さんもあなたも、世間の人とは違つた、妙な趣味を有つてる方だと思つて

ゐましたよ。そんな話をしてる時の朝川さんの笑ひ祟つたら、また一種特別だつたことが、今思出されるんです。……ね白い歯を出して、首をすくめて、ヒツ／＼とと笑ふんですもの」

「彼奴のは鼬笑ひだ。……お前はなか／＼記憶がいゝね。……彼奴は並外れな女好きでね。女の話となると、羽目を外して相好を崩して、その鼬笑ひをし續けるのさ」

「いやですわね」ふみ子は眉を顰めた。そして、いくらか夫の話に引込まれたやうに、針を持つた手を膝へ置いて、「朝川さんには奥さんがおありなさるんでせう」

「そりやあるさ。今のは二度目のなんだらうがね」

中泉は、自分でさういふ言葉を吐いたことに嫌悪を感じた。

「二度目の奥さんですつて？ぢや、最初の方は離縁なすつたの？」

「まあ、さうだ。……今の妻君は三度目のかも四度目のかも知れないね」

「まさか。……」

「お前は氣樂な性分だから人間が分らないんだ。朝川のやうな男の心はなほ更分りやしないよ」

中泉は、朝川に對する焦燥の感じを妻の方へ注いで、相手の無理解を咎めるやうに云つた。ふみ子は、夫の不機嫌さを奇怪に思ひながらも、強いてそれに拘はらうとはしないで、再び針を動かした。中泉は、超然としてゐる妻の態度を牴牾しく思ひながら、臺所へ行つて、すでに乾いてゐる汗を拭つて、顔を洗つて、玄關脇の狹い部屋へ入つた。そこでは義弟の啓三が、双肌を脱いで讀書をしてゐた。

「今日は歸りがおそつかつたね」と云ふと、

「えゝ。圖書館へ寄つてゐました」と、啓三は、近視眼の光りの鈍い目を向けて答へた。

「活動小屋へでも寄つてたのかと思つてゐたよ」
「資力がさうは續きませんからね」
「今夜は君がゐたら、銀座へ連れて行かうと思つてゐたのに」
「ぢや、早く歸るとよかつたんですね」啓三は、惜しいことをしたと思つてゐるらしい口を利いたが、ふと、思出したやうに、「あの、元吉さんが二十日に横濱へ着くんださうですね」
「さう〳〵。そんな電報が來てゐたね。二十日といふと明後日だが、君は出迎へに行くつもりなのか」
「さあ、行つた方がいゝでせうか。……僕の出迎へを當にしてやしないでせうけれど」
「外に出迎へに行く者はあんまりないだらうから、君でも行つてやつたら喜ぶだらう。……僕も久し振りで横濱の埠頭場を見たくないことはないんだが、三時といふと、時間の都合がつくか知ら」
「僕があなたの代理になつて出迎へに行きませうか」
「うまいことを云つてるね。僕は代理の出迎へを出さなきやならんほど、元吉に義理立てをしなくつてもいゝよ。歡迎や送別や會葬だの祝賀會だのゝ義理責めには飽いてるからね。久振りで外國航路の汽船を見たいと思はなきや、元吉の出迎へなんかに行きやしないよ」
「僕だつてさうですよ」
「君は今から僕の口眞似をしなくつてもいゝよ。君はまだ浮世の面倒くさい義理に苦められてる經驗はないぢやないか」
「さうでもありませんよ」
「……君なんかの時代には、直情徑行で友人との交際が出來るんだが、僕のやうな四十近い年齢になると、さうは行かなくなるんだ。底拔けの馬鹿話をしてゐるやうでも、ちやんと用心をしてゐるのだ。用心が疎漏だつたら、損ばかりしてゐ

なきやならない」

中泉は、啓三を相手に、氣焔を吐いてゐたが、自家に寄食してゐるこの若輩の啓三に對してすら、思ふ存分に自分の胸裡の鬱氣をも毒氣をも吐出せないのに氣づくと、さつき銀座で見た朝川の横顔が血なま臭いほどにいき〳〵と眼前に浮動した。

啓三は、平生にました中泉の興奮した氣焔を滑稽に感じてゐるやうに、冷笑の影を唇邊に漂はしてゐた。

「君の勉强の邪魔をしていけなかつたね」

中泉は、暫くして自分の部屋へ引込んで、二三通の手紙を認めたが、さうして筆を執つてゐる間に、彼れは、二度も三度も机の側を離れて、部屋の中を歩き廻つた。……をり〳〵ドシン〳〵と踏みしめる彼れの足音を聞きつけたふみ子は、夫が何をしてゐるのかと訝つて、緣側へ出て、障子の隙間から覗いた。腕を組んで、何かを睨むやうな目付をして、部屋の中を歩いてゐる夫の顏は、かつて見たことのないほどに凄かつた。蒸暑くて鬱陶しい時候のせいで、夫の腦に異狀でも起つたのかと案ぜられながら、聲を掛けて驚かせるのは憚られたので、元の座へ戻つて、息を凝らして耳を留めてゐたが、やがて、手紙を持つて、啓三に命じてポストへ入れさせるために出て來た夫の顏は、不斷と異つたところはなかつた。

「まあよかつた」と、ふみ子は、ひそかに安心した。そして、自分の垣間見したことを夫には話さなかつたが、人間は一人でゐて他人に見られないところでは、隨分不樣な眞似をするものらしいと、彼女は獨笑ひを洩らした。

（二）

中泉は、數寄橋近くの丸辰商事會社へ十數年も續けて通つてゐた。老主人とは緣續きなので、長く勤めて來たのだが、無難な冴えない商事に彼れは多くの興味を寄せてゐなかつた。老主人の代理として、小さなブローカー氣質の部下を使つ

て、地方廻りをさせて株券の賣込なんかをさせるのは、自分の天分を發揮する所以でないと、悲觀することもあつた。しかし、規模の大きな縁のない所へ入込んで、苦勞をするのも躊躇された。それに、十に一つの思惑が當つたり、相手にうまく一杯喰せたりした時の快さは、たとへその事の内容はケチくさいことだつたにしろ、政黨が政權を取つたのも、大將軍が敵地を占領したのも同樣の快さであつた。

彼れは、朝川に出會つた翌日、定刻よりおそく、圓タクに乘つて、その會社へ出掛けた。空はよく晴れて、今年はじめての激しい暑氣に都會が襲はれてゐたので、彼れはチョッキ一つになつて、煽風機の風を入れてゐた。

二三度用談の電話が掛つて來たあと、ふと、珍らしい聲が受話器から傳はつた。

「君は中泉君だね。おれの聲が分るか」

「君は……」と云ひかけて、中泉はちよつと言葉を止切らせて考へてから、「君は朝川ぢやないか」

「まあ、さうだ。この頃貴公の方の景氣はどうだ」

「……全體どうしたのだ。……突飛に電話を掛けて。……何か容易ならん變事でも起つたのか」中泉は努めて快活に云つたつもりであつたが、聲は稍々震えてゐた。

「おれの方は至極泰平無事だ。ハヽヽ」

「……まさか電話でおれを揶揄はうといふのぢやあるまいね」

中泉の聲は憤りを含んでゐたので、二三の社員は彼れの方をぬすみ見した。

「君を揶揄ふなんて飛んでもないことだ。實は昨夕銀座で君をお見掛けしたので、急に懷かしくなつたのだよ。尾張町の角で君の横顔が見えたから、直ぐに追掛けようと思つたんだがね。自働車なんかゞ非常に雜沓してたから、車道を突切るのに大變手間が掛つたのだ。それで愚圖々々してる間に、君は何處へ入つたのか、影も形も見えなくなつて、いかにも殘

念だつたよ。あんまり殘念だから、今朝君に電話を掛ける氣になつたのだが、どうだ僕のとこへやつて來ちや」
「君も昨夕銀座を散步してゐたのか。この頃はカツフエー通ひでもしてゐるのか」
　中泉は氣が輕くなつた。
「馬鹿云つちやいけない。お互ひにもうそんな年齡ぢやないからね」
「さういふと、君はあれから十年も歲を取つたやうだよ」
「いや、おれも歲を取つたよ。ハヽヽ」
　朝川が感慨を籠めてさう云ふのを聞くと、中泉は、昨夕見た相手の顏の老けて醜かつたことを思出して、自分の目の間違はなかつたことに思ひ及んだ。
「それで、君はこの頃は東京に住んでるのか」
「いや、あれから、あちらこちら移轉して、この頃はまた二宮に住んでるんだがね。しかし、二三日前から、都合があつて東京に泊つてゐるんだ。東京驛の側の××ホテルに泊つてゐるのだ。正午までは身體が空いてるんだが、君の方で仕事の繰合せがついたら、此方へ遊びに來て呉れないか。僕の方からお伺ひしてもいゝが、そちらぢやゆつくり話込む譯には行かないだらうからね。成べく君に御足勞を願ひたいよ」
「さうだねえ」中泉は事務室を顧みたが、「滅多に得られない機會だから、可成都合をつけて出掛けることにしよう」
「どうかさうして呉れたまへ。ぢや、待つてるよ」
　朝川は、元氣のいゝ聲でさう云つて電話を切つた。
　中泉は自分の椅子へ戾つて、電話を通して聞いた朝川の言葉を、心の中ではじめから繰返して考へてゐたが、それ等の平凡な言葉が、世にも不可思議なことのやうに思はれた。……あの男に取つては、世界の人間の誰れよりも憎らしい厭

はしい人間のやうに思はれてゐたし、またさう思はれるのが當然であつた筈の自分が、今日になつて、さも親しさうに、あの男に招かれるは奇怪であつた。あの男に何か魂膽があるのではなからうか。今日の生活にも困つて、おれに無心を云はうと企んでるのではあるまいか。生活に困らないまでも、何か商賣をはじめようとして、資金の出所がないので、百計盡きて、恨みも嫉も忘れておれに依りかゝらうと、思ひついたのぢやあるまいか」と、中泉はいろ／＼に氣を廻して見たが、相手の腹の中がどうであらうと、彼自身昨夕から、朝川に會ひたくつて溜らなかつたので、天の與へのやうなこの招待を無下に斥ける氣にはなれなかつた。

で、彼れは、商賣上で爲めになる知人に會ひに行くらしく言拵へて、不在中の自分の仕事は、社員の一人に頼んで置いて、早速戸外に飛出した。

高臺から省線に乗つて東京驛で下りて、ホテルに着くまでに、彼れはべた／＼と汗ばんだが、この頃ことに飽き／＼してゐる商賣用で出掛ける時とは違つて、戀人にでも會ひに行く時のやうな爽快さを覺えてゐた。

ホテルのボーイに案内されて、五階の朝川の部屋の前に行つて、コツ／＼と扉を叩いた時には、中泉もさすがに胸が鼓動した。「お入んなさい。中泉君だね」と快活な聲で迎へられて、彼れは硬張つた顔に強いて微笑を浮べて部屋へ踏込んだ。

朝川は寢衣のまゝ寢台に横たはつて、新聞を讀んでゐた。この男も愛嬌笑ひを浮べたが、互ひに面と面とを突合せるのが、間が惡かつた。「あゝ云つても、君が來て呉れるかどうだかと危んでたものだから、まだ顔も洗つてない仕末さ。……失敬したね」と朝川は寢台を離れた。

中泉は、片隅の椅子に腰をおろして、汗ばんだ額を拭ひながら、寢台を見てゐたが、久振りに會つたこの舊友に、のつけに寢姿を見せつけられるのが、辱め余まれた皮肉たやうに感ぜられた。寢臺に置かれた枕は無論一つであつたが、中泉

の目には、その柔かい西洋枕の側に、もう一つ、異つた日本枕が置かれてゐるやうに思はれてならなかつた。この枕の主が、湯上りの艶々した顔して戸口から入つて來さうに思はれた。

「暑かつたらう。一しよに一風呂浴びて來ようぢやないか」と、朝川は、歯楊子を使ひながら、相手の暑苦しさうな身裝を見て云つて、「窮屈袋は脱ぎたまへ。僕の着替えの浴衣を貸して上げよう」

「面倒だね」と、中泉は躊躇したが、相手が鞄から浴衣を取出して押付けると、その氣になつて、事務服を脱棄てた。

二人は、一しよに、この階上に備へられてゐる浴室へ向つた。電車や汽車の音であたりは囂しかつたが、中泉は、久振りで都會を離れた溫泉場へでも行つたやうな氣持がした。互ひに相手の身體を觀察しながら、

「君は少し肥つたやうだね」と朝川が云つた。

「さうでもないよ。……君はいくらか痩せたやうだね」と、中泉が云つた。

「さうかしら」朝川は自分の肋骨を撫でながら、「さう云へばここらの肉が少し落ちたやうだね。痩せたのはまあいゝ。うまい物食つて遊んでればまた肥るだらうが、頭に白髪が出來だしたから心細いよ。」

「君はおれよりも、二つ三つ下なんだらう。まだ青春の境涯にゐる譯ぢやないか」

「ハヽヽ。おれが青春か……」

「ところで、君は以前の所へ二宮から出勤してるのかい」

「いや、あしこは三月ほど前から止めてる。まあ首を切られたやうな譯なんだ。……おれのこの細つこい首は、まだ落付くところが見つからないで宇宙を飛廻つてるやうなものなんだがね。……しかし、當分粥を啜つて生きてる分には差支えがないんだから、まあ安心してゐて呉れたまへ。……今日は暑苦しい職業話はお互ひに見合せようぢやないか。僕の身の振り方の御相談をするために君をお招きしたと思はれちやいけないからね。……君は百萬長者になつてるのかも知れない

が、それなら、僕も百萬長者になつてる氣で、お互ひに太平樂を言合つて、生命の洗濯をしようと思つてるんだよ。ハヽヽヽ、」

「君はいつの間に、そんな樂天家になつたのだ」

　中泉は、眼前の男の身體は昔の朝川であつても、異つた魂魄がそこに宿つてゐるのではないかと、疑ひたくなつてゐた。あの泣言を並べてゐた朝川、あの憎みの刃を磨いでゐた朝川が、自分に對してこんな氣樂な口を利くやうになつたのは合點が行かなかつた。

「おれが樂天家だつて？　青春だの樂天家だと、君は僕にいゝ名をつけて吳れた。有難いね」

「おれも、朝つぱらから仕事を抛つちらかして、湯に漬つたりして……君にあやかつて樂天家になつた譯だね」

　中泉は、朝川の使つた石鹸で、脂肪に富んだ身體をぬら〳〵と洗つてゐると、石鹸のにほひに女臭が感ぜられた。そのにほひは女といふものゝ漠然たるにほひではなくつて、暫く忘れてゐたある一人の女のにほひであつた。

「二宮では以前ゐた家にゐるのか」と、訊ねると、

「いや、あの近所だが、家は違つてるんだ。庭も狹いし室數も少いんだよ。人數が少いんだからどんな狹い家にでも住めるよ。儉約も成べくしようと思つてるしね」

「さうだね」と、中泉は、意味もなく調子を合せた。そして、かうした會話の順序から當然觸れなければならない問ひを口に出すのに躊躇してゐると、

「家内は今度二宮へ引込んだきり、一度も東京へは出て來ないんだ。たまには連れて來ようと思つて誘ひをかけても、出て來たがらないのだよ。我々二人の外には、小さな下女がゐるばかりだから、淋しいことは隨分淋しいんだがね」と、朝川は、事もなげに話の糸口をひらいた。

「でも、田舎にゐると健康にはいゝだらうね」と、中泉も事もなげに云つた。
「そりや、海岸の空氣は健康にはいゝに違ひないんだけれどね。都會で暮し馴れた人間は、田舎にばかりゐると、氣が滅入つていけないやうだよ」
「そりやさうだらうね」
「僕もあしこから毎日東京へ出勤するのにはへこ垂れてゐたのだが、仕事がなくなつて、毎日田舎にぢつとしてゐると、とてもたまらないよ。今度も一人で此方へやつ來てると、用事が運んでも運ばなくつても、のう／＼した氣持になるね」
朝川は、浴槽のふちに腰をおろして、足をぶら／＼させながら、さも屈托のなさゝうな顔をしてゐた。
「僕なんざ、ろくそつぽ避暑も出來ないんだからね」
「この夏は僕とこへ來ちやどうだ？」
「ウ、ン」
そこへ、女中が風呂場の戸口から聲を掛けた。「奥さまからお電話で御座います」と、知らされたので、朝川の顔には、今までの陽氣な色がすつかり失はれた。
「東京へ來てるのか知ら。そんな筈はないが……」と、呟きながら、慌てゝ、濡れた身體に浴衣を引掛けて駈け出した。
中泉の耳にも、「奥さまのお電話」といつた女中の言葉は、たゞならぬ響きを傳へたのであつた。その知らせによつて、朝川の陽氣を裝つてゐた假面が、すつかり剝げて、數年前まで見馴れてゐたあの男の生地が露出されたやうなのが可笑しくもなつた。
「朝川猛行の奥さん？」と美代子といふ女が世間で極められてしまつてゐるのが、中泉には滑稽であつたが、互ひに關係のある三人の外には、世間の誰れもが、その間の消息を些しも窺ひ知らないのが、愉快でもあり物足りないやうでもあつ

た。「あれはおれの一生に一度の變な事件だつたのだ」と、過去の記憶を、不斷にまして鮮明に思浮べながら、身體を拭つてゐたが、浴衣を着ようとして氣がつくと、自分の借衣の浴衣は朝川が間違へて着て行つてゐた。それで、爲方なしに、不氣味さを忍んで、朝川の着崩してゐる古寢衣を、身につけて浴室を出た。小走りに廊下を通つて部屋へ入ると、電話は今切れたところであつた。

「電話は二宮から掛つたのだよ」朝川の顏は、さつきほど生々してはゐなかつたが、略々平靜に返つてゐた。

「家に急用が出來たのか」

「いや、さうでもないんだがね、少し妙なんだよ。……家内が俄かに東京へ出たくなつて、これから汽車に乘つて此方へ來るから、ホテルで待つてゐて與れと云ふんだ。……是非來たいのなら仕方がない。待つてゐると云つといた」と、朝川は重つたるい口調で云つて、机の上の腕時計を見て、「今からだと、十時の汽車に間に合ふだらうから、十二時には此方へ着くだらう」

「二時間掛るのか」

「アヽ」

互ひに物を思ひながら、二人は少しの間口を噤んでゐた。……美代子が切符を買つて改札口を出て、プラットホームへ出て、汽車に乘込む有樣が、默つてゐる二人の目の前に浮んだが、その一人の目には、乾涸びた、女の形した機械のやうな女性として現はれ、他の一人の目には、一歩々々薫りを放つてゐる特種の女性として現はれてゐた。人並傑れて美しいと思つてゐる譯でもなく、戀しく思續けてゐる譯でもないのだが、美代子は、中泉に取つては、何時まで經つても路傍の人ではなかつた。さうなり切る筈はなかつた。……やがて朝川は口を開いた。

「君は正午まで此處にゐて、彼女に會つて與れるだらうか」目を据ゑて意味ありげに云つた。

「僕はさうゆつくりしてはゐられないよ。……これで、社の方では、僕がゐなくつちや困ることもあるんだよ」

「無論さうだらうがね。彼女は君が此處にゐることを知つて訪ねて來るんぢやあるまいが。……そんな筈はないに極つてるが。……しかし、これまでおれが勸めても東京へは來たがらなかつたのに、今日に限つて自分から思立つて此方へ來ようと云ふのは、珍らしいことなんだ。可成會つてやつて與れたまへ」

「おれも逃出さうと思つてやしないがね」中泉は嫌りのなさゝうな、碎けた口を利いて、「實はね。昨夕僕は君の姿を銀座で見つけたのだよ」

「本當かい。ぢや、なぜその時聲を掛けて與れなかつたのだ！」

「聲を掛けていゝか惡いかと迷つてゐるうちに、君の姿が見えなくなつたのさ」

「どうも不思議だ。」

朝川は、彼等にまつはつてゐる惡緣を感じて、再び口を噤んで、相手の顏を見据ゑたが、その目には憎惡の影は差してゐなかつた。むしろ執拗な親しみが覺えられてゐた。

「まだ二時間の餘裕があるのだ。おれの話をゆつくり聞いて與れないか」と云つて、女中を呼んで、紅茶とパンとチーズとを吩咐けた。それらが持込まれる間は、このホテルの組織などを話題にしてゐたが、食物が卓上に置かれると、朝川は、早速パンを割いてチーズと一しよに囓りながら、客にも勸めた。中泉も煙草を下へ置いて、お突合ひに、甘くもないパンの端を囓りだした。

「少し遲播きだが、おれは、今度失業したのを機會に、生活の革命をやらうと思つてる。人に使はれてばかりゐるのはいやになつたから、小さくつても、自分が主腦者になつてやりたいことをやらうと思つてる。萬一の場合の用意に手をつけないでゐた故鄕の田地を賣飛ばしたら、多少の資本は出來ないことはないんだしね」と、朝川が、田地の所有高やその時

價について話出すと、

「君は故郷にそんな財産を持つてゐたのかい。はじめて聞くよ」

「君にも話さなかつたかね。あんまり公明正大でない謂くのある財産なので、誰れにも隱してゐたのだよ。……しかし、今日はそんな事業の話を君にする筈ぢやなかつた。……生活の革命をする次手に、彼女(あれ)の仕末をつけたいのだ。……」

朝川の言葉はそこで止絶えた。モソ／＼とパンを喰つてゐたが、中泉は少し呆氣に取られた氣味で、默つて、欲しくもないパンの端つこをモソ／＼と喰つてゐた。煽風器は埃くさい風を二人の顏へ吹きつけてゐた。

（三）

彼女(あれ)には挺摺(てこず)つたよ。あの時突放しときやよかつたと、後で何度後悔したか知れなかつた。本來有難くはなかつた女なんだから、君といやなことがあつたゝめに、一時ひどく執着したにしろ、時が經つと、元の本阿彌で有難くもなくなるのはあたり前なのさ。………いや、あの時はお互ひに醜態を極めたものさ。……醜態を極めたいやな記憶と云ふものは、なかく／＼消えないものらしいが、君はどうだね。……心の中の泥をすつかり洗滌して、教養ある事務家に成り切つてゐるのかい。君のその目で直かに見たり、その耳で直かに聞いたりした僕の醜態は、今更僕の口から話すには及ばない譯だが、君の知らないあの時の僕の氣持や、あの後の僕達の生活狀態は、是非聽いて貰ひたいと思つてる。君より外に聽いて貰ひたい人間はないのだからね。外の者にはいくら此方で熱心に話して見たつて、たゞのお笑ひ草になるだけさ。この世知辛い世の中にそんな頓痴氣な話を眞面目に聽く人間はありやしないよ。

おれが勘付いた時分に、君は、おれに叩斬られやしないかと恐れてたかも知れないがね。僕自身もさういふ權幕をたびたび見せることは見せたが、本心は、とても君を斬るの突くのといふ勢ひはなかつたのさ。「君ばかりぢやない、彼女(あれ)をわが手

で絞殺すだけの元氣もなかつた。頭の髮を摑んで寢床のまはりを一廻り引摺り步いたのだ。男の意地としての關の山だつたのさ。それもたゞの一廻りしただけだつた。彼女はね、その時は落着きに落着きやがつて、おれの側へ体を擦寄せて、どうにでもして呉れとぬかしやあがるのさ。芝居にでもありさうな形だね。その時の彼女の姿がまた不思議に色つぽく見えるんだから、男の心つて可笑しなものぢやないか。……ところで、おれは彼女の一時の間違ひは、我慢して大目に見のがすことにして、たゞこの事が世間に知れなきやいゝと、何よりも、第一にそれを氣にしてゐたのだよ。君がこの秘密を他人に洩らす譯はないし、彼女が他人にお饒舌りする譯もないし、おれさへ默つておとなしくしてゐりや、平穩無事に日が過ぎて行くと、量見を極めたのだが、おれの望んだ平穩無事は、まづ望み通りに得られたぢやないか。天知る地知るの聖人の戒めは當らなかつた譯だけれどね。……

　君には隱したつて爲方がない。底をさらけ出して話さうよ。……あれから一年後、去年の眞夏の頃まではね。世間に秘密がばれないで、男としての恥を搔かないで濟んだのを喜んで、をり／＼氣まづい思ひをしながらも、兎に角平穩無事に日が經つて行つたのだが、去年の眞夏の頃また驚くべきことが起つたのだ。おれに男の威光がないのか、彼女が並外れに淫奔なのか、おれの面目はいよ／＼丸潰れとなつた次第さ。

「中泉の奴、この頃は丸辰の商事會社でなか／＼巾を利かせてるやうだから、少し强請つて來ようか」なんて時々は、いやがらせを云つて――いやがらせばかりぢやない、おれ自身が、眞劍にさう思つてたこともあつたのだが――彼女をチク／＼と痛めつけて、腹癒せをしてゐたものさ。ところが、彼女もさるもので、十年連添つた亭主を見くびりやがつたのか、

「あなたに强請の出來る度胸があるのなら、ゆすつて來い」と吐かすやうになつたのだ。

　さあゆすつて來いとせつかれて、よし來たと家を飛出せるやうなおれぢやない。差迫つて生活に困つてる身分でなかつ

たゝめでもあるがね。

そんなことはどちらでもいゝとして、彼女は、おれが社用で、二三週間關西方面へ出張してゐる間に、不都合なことをしでかしたのだ。……それが、またおれの友人の端くれで、女房持の、どちらかと云ふと、堅人の部類に屬する男なんだから、呆れた。無論女の方から誘惑の手を出したんだね。……それで、二度目がさうだから最初もさうだと、おれは見當をつけたのだ。二度目の男は案外正直な奴でおれに白状したよ。どんな刑罰でも受けると云つて謝つて、そして、自分から會社を辭職して地方へ行つちやつた。その時の白状には、隨分立入つた話があるんだが、それは此處では話さないことにしよう。しかし、君には思當ることがあるだらうと思はれるよ。僕は、幸か不幸か、女の誘惑を受けたことが一度もないのだから、その間の微妙な消息はよく解らないんだが、女の誘惑といふものは——特別に彼女の誘惑は、とても簡單なものらしいね。小説や芝居にあるやうなノンベンダラリとした、廻りくどい、手のかゝつた口説も何もなかつたらうと思はれる。極めて原始的らしいね。二度目のその男がさう云つてゐたよ。……その男はおれの不在を知らないで、ある用談があつて訪ねて來た。彼女とは可成りの顏馴染だつたから、用談の大要をおれに取次がせるために、おれの部屋へ上り込んで、差向いで話をした。……それつきりで關西の旅行先にゐる一人の人間が侮辱を受ける出來事が持上るのだ。

おれは、その男を二度目の男だと云つたけれどもね。二度目が三度目だか四度目だか疑へば疑はれないことはないんだね。……だけど、おれは二度目の事件を見つけたあとでも、彼女を放抛りださうとはしなかつた。特別な過激な制裁も加へなかつた。何だかから馴れつこになつたんだね。……それに、さういふことがあつたあとでは、彼女が、不斷の勢ひのないガサ〳〵した女とは人間が違つたやうに、色つぽくなつて勢ひがついて來るから不思議ぢやないか。特別に不思議がるのが間違ひなので、それが女としては本當なのかも知れない。その上、そんなことのあつたあとでは、彼女は、忠實に熱心に、家の事を切盛りするやうになるんだよ。

「わたしには魔が差したのです。わたしは脅迫されたのです」なんて、最初の時と同様に言譯をするのは、殊勝と云へば殊勝な譯さね。ハヽヽヽ。

　そこで、六ケしく云ふと、おれは自分達の夫婦關係については、立派に卒業したやうな氣持になつたのさ。昔からの習慣に拘泥してヤキモキするのは、無駄な迷ひだ。おれのやうな夫婦關係を續けてゐても、どうにか家庭生活が送れないことはないと、獨りで超然とした氣持になつてゐた。

　ところが、この頃は、自分で自分の精神狀態が變挺に思はれてたまらなくなりだしたのだ。彼女がおれの身の廻りの世話を忠實にして呉れたり、家事を手際よく仕末して呉れたりするたびに、彼女に新たな秘密の惡事がまた出來たんぢやないかと、疑はれてならなくなりだしたのだ。……どうもおれの精神狀態は、最初の時に大打擊を受けて以來變になつたのぢやあるまいか。男女關係について卒業してると思つてるおれは、その實落第してるのぢやあるまいか。

　外の人間には、親にも兄弟にも、こんな話は出來ないんだが、君にはこんな馬鹿げたことも臆面なしに云へると思つてゐたのだ。……君には何もかも話して、腹藏のない意見を求めたいと思つてゐたのだ。……おれがあの後、こんな氣持で、二年の間家庭生活を續けて來たのは、おれの頭がどうかしてるためだらうか。

　君はどう思ふ？

（四）

「「どう思ふ？」と訊かれたつて、僕には返事のしようがないよ」

　中泉は、朝川の熱心な問はず語りを、上べには當惑らしく見せながら、一語々々自分の心に喰入るやうな感じをもつて耳に留めてゐた。

朝川は、言ひたいことを言放したのを快く感じながら、新たに紅茶をついで、乾いた喉へガブ〳〵と呑込んだ。

「それだけ僕に喋舌らせといて、聞きつ放しにするつてことはないと思ふ」朝川は、相手を非難するらしく云つたが、ふと思ひついて、「ぢや、君の意見を聞かせて貰ふかはりに、一つ頼みたいことが出来たよ。……彼女が、偶然此處へやつて來るのは、天の與へだ。君がこの部屋に一人でゐて彼女に會つて呉れないか」

「いや、それは御免だ。……僕はもうお暇しようと思つてゐる」と、中泉は慌たゞしく云つた。

「それは卑怯だ」朝川は語調を烈しくして云つた。

「どうして？……僕をこの部屋に一人でゐさせたつて、君のために何の役にも立つ譯はないぢやないか」

「いやさうでないよ。僕は此所へ君一人を置去りにしようといふのでもないしね」

「少し話が分らないね」

「僕は、寢臺の下か、あるひは衣裳戸棚の中に隠れてゐるつもりだ」

朝川が眞顔でさう云つたので、中泉は噴きだした。

「笑ひ事ぢやないよ。僕に取つちや一大事なんだからね。……君はたゞ彼女に會つて、彼女の話しかけることに受答へをして呉れゝばいゝのだ」

「座興としても、少しあくどいぢやないか」

「座興ぢやないよ。……おれ達は不斷熱心にそのくらゐなことはやつてゐたのだ。おれは自分の家の床の下に藻繰込んだこともあつたのだからね。戸棚の中に隠れんぼをするくらゐ、何でもないのさ。……君はあの後は頭の健全な謹直な君子になつてるのかも知れないが、それなら尚更、僕の頼んだ役を買つて出てもいゝだらうと思はれるよ。彼女を前に置いて、過去の罪を後悔しようとも、二人で神に祈つて懺悔をしようとも、それは君の勝手だ」

「……そりや、君が是非頼みたいと云ふのなら、頼まれたつていゝがね。どうせ君に輕蔑されてる僕ぢやないし、どんな道化た役を勤めたつて極りを惡がるには及ばないんだから」

中泉は、不承々々に依頼に應じたらしく見せかけたが、好奇心は次第に燃立つてゐたのであつた。最近の美代子の様子をも知りたかつた。朝川の依頼に應じた結果、どんな悲劇か喜劇かゞこの部屋で演ぜられて、自分もその渦中に卷込まれるにしても、浮世の興味にこそなれ、自分の損害にはなるまいと、高をくゝつた。「朝川や美代子の前に出てゐる時のおれは、外の世間に對した時とは別の人間なんだ。氣取つたところがはじまらないのだ。他所行の假面を剝いで、馬鹿を盡さうとも、どんなに振舞はふとも、おれの價値に差響きはないのだ」と、覺悟は極めてゐた。

「承知して吳れたんだね。有難い。……汽車が東京驛へ着くのは丁度十二時なんだから。まだ大分間があるよ。……その間に君の生活狀態を聞かせて吳れないか。商賣の話は今日は聞きたくない。その外の話を聞かせて貰ひたいんだよ」

「僕の生活狀態なんかは極めて平凡なのさ。格別君に聞かせるやうな話はありやしないよ。毎日八時に家を出て會社へ行つて、不意の用事さへなければ、四時に仕事が退けて、大抵は眞直ぐに家へ歸へることにしてる。……昨夕銀座へ行つてゐたのは珍らしいことなんだ」

「君の生活がそんなに平穩無事だつたのか。家庭にも波瀾が起らなかつたのかね」朝川は腑に落ちないやうに云つて、「さう云へば、君の顏はあの時に比べてちつとも歲を取つてゐないよ。僕よりも年上の君の方が却つて靑年らしい若い顏をしてるぢやないか」

「戲談云つちやいけない。僕の平穩無事はへこたれた平穩無事なんだよ。僕は仕事の上では思切つた事をやらないぢやないが、その外の事ではビク／＼して日を送つて來たのだ。何時自分の足許に、天罰といふ爆裂彈が破裂するかも知れないやうな氣がして、おつかなびつくりで一日々々を通つて來たやうなものだ」

中泉は、改まつた、謙みを籠めた語調でさう云つた。半ばは相手の心を和らげる詫言のつもりでさう云つたので、朝川の耳にも、自然と快く響いた。多少は腹癒せになつたのであつた。

「さういふものかな。君も天罰を恐れてゐたのか」

「……」中泉は天罰といふ言葉をくどく口に出すのをいやがつて、默つて、お義理に首づいた。

「天罰はお互ひの上にふりかかつて來るんだね。君の上にもおれの上にも、一切平等にふりかかつて來るのだとすると、天罰は憎いよ。呪ふべきものだよ」

「……ところで、君はこの頃西山に會はないか」と、中泉は、輕く話頭を轉じて、側の安椅子に席を移した。

「西山？大學教授の西山志久二のことか。無論會はないが、あれがどうかしたのか」

「僕も近年會ふ機會がなかつたが、彼奴博士になつたね。去年の秋頃だらう。新聞で知つたのだが」

「ホウ。西山が博士になつたのか。おれは氣がつかなかつた。………あの時の頃を考へると、西山だつておれだつて、學才に差別はなかつたやうに思はれるよ。コツ〳〵學問ばかりやつたら、お互ひに博士くらゐになれたかも知れないね」

「君も博士になりたいのか」

「さあ。………博士になつて氣取つて見るのも面白いだらうがね。しかし、法學博士だの、大學教授だのといふえらい肩書を附けられると、少々困ることもあるね。……法學博士が衣裳戸棚の中に忍込むなんてことは似合はしくないだらうからね。ハヽヽヽ」

「ハヽヽヽ。馬鹿云つてる。僕は新博士の寫眞の入つた新聞記事を見た時に、お祝ひの手紙を一本送つてやらうかと思つて、文章に骨を折つて書くことは書いたんだがね。書いたあとで自分の文章を讀直して見ると、どうも氣が差してならないんで、手紙は引裂いてしまつた。なに、文章の巧いまづいはどうでもいゝのさ。だが、何年も年賀狀のやり取りさへ

ゐてしない舊友の立身を祝ふのは、何だかいやみに思はれたのだ。僕自身に、博士を羨ましいとは思つてもゐないのに、相手を煽てるやうな文句を並べて祝つてやるのは、しやらくさいやうに思はれたから、見合せることにした」

「成ほどね」朝川は目を見張つて、感歎するやうに云つて、「それが君の本音なんだね。おれなら、新博士の肖像で光つてゐる西山の寫眞を見たなら、自分の境遇に引比べて、涙の一雫くらゐは落したに違ひなかつた。今からでも祝ひの手紙を出したいやうに思ふよ。……どうだ、今此處で連名で書いて出すことにしちや」

「一年經つてのお祝ひは、間が拔けてらあね」

「なにいゝぢやないか。これも一つの記念にならあね」

朝川は、机上に備へつけられたレターペーパーを擴げて祝賀の意をサラ〳〵と認めた。

「さあ、君の名前も書いて置け」と、ペンを突付けたが、中泉は笑つて取合はなかつた。

「どうしても書かないのなら、おれが代筆することにしよう。それまでも拒絶すりやすまいな」

「それは君の勝手だ。どうにでもしろ」

「よし」

朝川は、朝川猛行といふ文字と肩を並べて、中泉夏雄といふ文字を書留めた。そして、書終つたあとで、相並んだ二つの姓名を、ドンヨリした眼差しで見据ゑた。見据ゑてゐる彼の眼差を、中泉は斜に見据ゑてゐた。さうしてゐる二人の氣持は同じやうなものであつた。……同じ學窓に學んだ舊友が幾人あらうとも、どれも、夕暮に野道で會つた人のやうに影が薄くなつてゐて、この二人にとつては、お互の姓名だけが互ひに濃厚に頭の中に印象されてゐた。互ひに相手の姓名だけは、時日の力によつても消磨されないで、鮮明な存在を保つてゐた。

「西山の住所は何處だらう？」朝川は中泉の方へ振向いて、互ひに目と目とを見合はせた。

「東片町だらう。新聞にさう出てゐたと思ふ」

「君は記憶がいゝね」

朝川は、封筒へさう書いて、ボーイを呼んで投函を命じた。

美代子の乘つてゐる汽車は、まだ横濱をも通過してゐなかつた。

「今戸塚を通つた頃だ」「もう程ケ谷を出てゐる」などゝ、朝川が時計を見ては、さも待焦れてゐるらしく云ふのを、中泉は努めて無心を裝つて聞流してゐたが、映畫の汽車の動きを見てゐるやうに、美代子を乘せた汽車は、急速度に自分の方へ迫つて來てゐるやうに思はれた。

彼れは借り物の浴衣を脫いで、洋服に着替えた。靴を穿いた。電車や自働車が目まぐるしく行きちがつてゐる街上の賑はひを、窓から見下すと、自分の頼まれた役を演ずるのが馬鹿らしくなつて來たが、何かの影のやうな手で自分の頸が強く摑まつてゐるやうで、部屋から逃出せさうでなかつた。

「おい、用心しないと危いぜ」

ふと、後から聲を掛けられたので、中泉は吃驚して、身體を後へ引いて振向いた。後から外へ突飛ばされやしないかといふ恐れが、ふと彼れの心を通過ぎたのであつた。

「おれは、先日そこから外を見てると、一思ひに下へ飛下りたいやうな氣になつたよ。君もそんな氣持にならないとも限らないから、用心したまへ」

「僕は大丈夫。頼まれたつてそんな馬鹿な眞似は出來やしないよ」

「一度もそんな馬鹿な氣持を起したことはないと云ふんだね」

「まあさうさ。五階から飛んで、他人の見世物になつたり、新聞種になつたりするのは、眞平だね」

「いや、見世物になつた方が、却つて氣樂かも知れないよ。見世物になるまいと思つて苦勞するのは苦しいぢやないか。……精神狀態が變になる譯だ」

朝川は、また汽車の進行を空想してゐたが、心の平靜を保つために、階下の理髮店へ髯を剃りに行くことにした。中泉は一人になると、寢臺の上に寢そべつた。常規を逸してゐる朝川の相手をして、忙しい社の仕事まで放任して、危かしい芝居を演じるよりは、無斷で逃出さうかと、隙を狙ふ氣にもなつたが、やはり釘付にされてゐるやうで、身動きが出來なかつた。「朝川の奴、おれの逃出す氣遣ひはないと思つて、平氣で行きあがつた。馬鹿な口は利いてゐても、おれの腹を讀んでゐるんだ」と、苦笑を洩らした。

朝川の身體の溫みの殘つてゐるやうな寢臺に橫たはつて、一人でぢつと目を瞑つてゐると、二年、あまり前、保養のために二宮の朝川の家に寢泊りしてゐた十日ばかりの、變つた生活が思出された。……妻君を外の部屋に寢かせて、朝川の寢室に、男二人で寢床を並べて、無邪氣な寢物語を取りかはしながら、快い眠りに就くのを例としてゐたのであつたが、ある夜、眞夜中に目を醒ますと、朝川の寢床は空つぽになつてゐた。中泉の耳は、家の中の微かな音をも聞洩らさないほどに鋭く働いた。妙な可笑しさを感じながら、眠つたふりをしてゐたが、暫く經つて朝川は、足音を忍ばせて歸つて來た。……その次の夜から、中泉はその刻限になると、ひとりでに目の開くのが例になつた。……さういふ癖のついたのがいけなかつたのだ。朝川が社の止むを得ない用事で終列車に乘遲れて、東京に泊つた晩にも、中泉の目は眞夜中の定刻にハッキリと醒めたのであつた。……そして、翌日朝川の歸るのを待つて、逃出すやうに東京へ歸つて來たのだが、それは、朝川が怖くなつたためだかりではなかつた。彼れの眞夜中の忍び足を耳に留めるのが堪へがたかつたゝめであつた。

こんなことなどを思出してゐるうちに、寢臺の肌さはりがよかつたためか、中泉はうと〳〵と假睡の夢に落ちた。髯を剃つて來た朝川に呼起されて、惜しい眠りを振拂つて起上つて、

「僕は今いゝ氣持で夢を見てゐたのだ。汽車の寢臺に寢て東海道を西へ〳〵と旅行してゐたところだつたよ」と云つて、生欠伸を洩らした。

朝川はそれには取合はないで「今十二時が打つたよ。汽車の着いた時分だ」と、おごそかに云つた。

「さうか。……そりや大變だ。愚圖々々しちやゐられないね」

中泉は、相手の嚴命に鞭打たれたやうに、目前の大使命をヒシと身に感じた。そして、手早く上衣を着けて靴を穿いて、化粧鏡のついた洗面臺の側へ行つて、顏を洗つて、椅子に腰をおろした。

「ぢや、おれはそこへ入つてゐるよ」

朝川は浴衣のまゝ、衣紋竹の掛つてゐる衣裳戸棚の中へ入つた。二人とも緊張した感じを覺えてゐて、ニコリともしなかつた。

「何か僕に注意しとくことはないのか」

「すべて君に一任する。君の好きなやうにやつて吳れ」

「いゝ汐時を見て、君がそこから飛出して來るんだね」

「おれは、成るべく辛抱を續けるつもりだ」

「君が飛出して來たら、僕は直ぐにこの部屋を飛出さうよ」

「さう短氣になつちやいけないよ」

二人は戸棚の內外でこんな話を取りかはしながら、廊下の足音に耳を留めてゐた。

（五）

「このお部屋で御座います」と、ボーイの聲がして、しるしだけのノックとゝもにボーイの手で扉が開けられたが、訪問者の顔は扉の蔭に隠れて、直ぐには現はれなかつた。中泉は椅子から立上つて、つとめて平然たる態度を取つた。
「お客様がいらつしやいました」
ボーイがさう云つて顔を引込めると同時に、美代子の半身が現はれたが、意外な人間を見つけた彼女は、自分の目を信じないやうに、相手を見詰めながら、戸口から足を進めかねた。一年の間に頬の肉が落ちて目顔が棘々しくなつた彼女の變化に、中泉は呆れながら、
「朝川君は急な用事で、さつき出掛けました。もう歸つて來る頃です」と云つて、側の空いた椅子を指差して、「さあ、お掛けなさい」
美代子は迂散くさい目で部屋の中を見廻したが、もはや氣遅れするところもなく、中泉に會釋して、部屋の中へ進んで、與へられた椅子に腰をおろした。
「朝川は本當に他所へ出掛たので御座いませうか。何だか變に思はれますわね。……わたしが此方へまゐることを、あなたは朝川からお聞きになりまして？」
「何だかそんなやうなことも云つてはゐましたが、……」中泉は、空呆けた顔して言濁した。
「では、あなたは、朝川との間に何か大切な御用がおありになつて、朝川の歸りを此處でお待ちになつてゐらつしやるの？」
「まあさうです」
「それにしては、今わたしがドアを開けて顔を出した時、あなたは案外お驚きになりませんでしたわね」
「いや、内心驚いたのです。今も驚いてゐますよ」

「わたしは以前のわたしぢや御座いませんの。邪推深くなつてゐますのよ。以前のやうな薄ぼんやりの女だと思つてゐらつしやると、大間違ひなんです。わたし達二人は邪推くらべをして日を送つて來たやうなものなんですわ。邪推で生きてますのよ」

なる程さう云ふと、美代子の顏は邪推の權化のやうに、中泉には思はれた。それとゝもに、過去の記憶は泥溝の臭ひのやうな臭ひをもつて、彼れの鼻を衝いた。

「あなたはわたしがこのホテルへ訪ねて來ることをよく御承知なすつた上で、こゝで待つてゐらしつたんでせう。朝川の差金ですわね」

「いや、さうぢやありません」

「この頃の朝川の企らみさうなことなんですわ。わたしを罠にかけて陥れようといろ〳〵に企らんでゐるあの人なんですもの。この頃はよく〳〵種が盡きたと見えて、あなたまで引張り出したのには驚いつちまふ。わたしが電話を掛けたのをいい機會に、あなたをお呼びしたんですね。あなたを此處へ引張りだしたことは、朝川の腕が凄くなつた證據なんでせうけれど、あなたは、また今になつて、どうして朝川と仲よしにおなんなすつたの？朝川の手先に使はれていゝ氣になつてゐらつしやるのは變ぢやありませんか」

「僕もひどく見くびられた譯ですね」と、中泉は苦笑して、「朝川の手先に使はれてゐるならゐるとして、久振りにこんな所でお目に掛つたのは、容易に得られない機會なんだから、あなたのこの頃の家庭の事情でも拜聴したいものですね」

「わたし達の家庭の事情？……朝川はどう云つてゐました？あなたはあの人からお聞きになつたんでせう」

「いや、まだ聞く暇はなかつたんです」

「朝川はわたしと別れて、外の人を家へ入れようと苦心してゐますのよ。この頃時々東京へ出て來るのも、わたしの代り

に家へ入れようと思ふ女を捜すためなんですの。今度だつてさうらしんです。……でも、誰れが、朝川のところなんかへ来たがるものですか。こちらで目をつけたつて、考へのある女ならむ方で御免を蒙りますわ。全盛代りの女をこしらえこから、わたしを追出さうなんて、男らしくない打算的な卑怯な量見ぢやありませんか」

「それも、さつき云つたあなたの邪推ぢやないんですか」

「いゝえ、それだけは邪推ぢやありませんの。ちやんとした證據があるんですもの」

「證據つて、何の證據です？」

「朝川は今度此方へまゐつてから、牛込に一軒家を借りることにして家主と契約をしたらしいんです。ところが、肝心その家主が、止むを得ない事情があつてその家をお貸しすることは出来なくなつたから、もう一軒外のに替へて頂けないだらうかと、端書を二宮へ寄越しましたのよ。東京へ移轉する話しなんか、わたしには一言も云はないで、一人で秘密で空家捜しなんかしてゐるんですもの。朝川の胸に魂膽のあることは分つてますわ」

「ぢや、その家主の端書が證據だとあなたは仰有るんですね。朝川君が新らしい奥さんを捜してることの確かな證據だと云ふんですか」

「あなたは、それをわたしの邪推だと仰有るの？」

「さあ、他人のわたしにはよく分りませんね。……でも、さつきあなたは、考へのある女は、朝川君なんかの所へ来る筈がないと仰有つたぢやありませんか。だから、御心配は御無用ですよ。へ、、、」

中泉が冷かに笑ふと、美代子はいきり立つて「そりや、考へのある女は朝川がどんな甘い口を利いても取合はないに決つてますけれど、世間には、男の出鱈目な話にでも直ぐに乗せられるやうな、浅慕な女が隨分多いんですもの」

「ぢやあなたは、その證據物件の端書を有つて、朝川君を詰問しにゐらつしやつたんですね」

「朝川は仕事の口を捜すのを口實に、東京へ出て來て、のん氣さうに空家捜しなんかしてるんですもの。忌々しいぢやありませんか。わたし、家主へは斷りの手紙を出して置きました」

美代子は熱心にそんなことを云つたが、聽く方では、面白くも何ともなかつた。異常な會見に相應しい異常な出來事を豫想してゐた中泉の失望は甚だしかつた。こんな詰らない役廻りをおとなしく勤めてゐるのに堪へられなくなつたが、朝川の目が戸棚の隙間から此方に注がれてゐることを思ふと、自分の自由に振舞ふことも出來なかつた。……から色も香も失せた婆あ染みた女を、昔ながらの姿形によつて、をり〳〵空想して懐しがつてゐた自分の愚かさをひそかに哂ひながら、

「あなたは、東京へ移轉なんかしないで、二宮のお家にぢつとして暮してゐたいんですね」

さう云つた言葉に暗示された美代子は、

「わたしだつて、いつまでもあんな家にゐたかありませんわ。あしこを離れても生活の路が立つて行く當てがありさへすれば、今日にも別れたいと思つてるんですけれど」と云つて、寢不足らしい充血した目に媚びを浮べて、「まさかあなたが、わたしの生活費の補助をして下さりやしまいし。……」と、馴々しく云つて、相手の顏を見直した。

中泉は笑つて答へなかつた。

「朝川はあんまり懶けるもんだから、勤め先をしくじつてのらくらしてるんですけど、あなたの御商賣は相變らず繁盛して、ます〳〵お金持になつてゐらつしやるんでせう」

「のらくらしてゐても喰つて行かれゝば結構ぢやありませんか。僕もさうなりたいと思つてゐますよ」

通り一ぺんの氣のない言葉を美代子は聞流して、相手の顏の方へ自分の顏を近づけて、「お金は出來るし、奥さんはお柔しくつてゐらつしやるしするから、あなたは大分お肥りになつたわね」

中泉は、それに調子を合はせて、「あなたも朝川君もいくらか痩せたやうですね」

「痩せましたとも。隨分心を使つたんですもの。……あなたは、人一人をこんな目に合はして置きながら、御自分一人いゝ子になつて涼しさうな顔してゐらつしやるんですね」

「こんな蒸暑い日に、僕が涼しさうな顔してるんですか。尤も僕は今あなたと差向ひでお話してると冷汗が出るやうだから、涼しさうに見えるのも、そのせいかも知れませんね」

「そんなにいやな思ひをなさるのなら、なぜ、わたしを此處で待つてゐらしつたの？わたしは一生あなたにお會ひしようとは思つてゐませんでしたの」

「これはお氣の毒でしたね。……おや、僕はこれでお暇しませうか。もう朝川君の歸つて來る頃ですよ」

中泉は口調からして事務家らしく云つた。今こそ、二年間心に澱んでゐた灰汁がすつかり拔けて、この二人の男女に對しては恐れも懐しみも、心の咎めも殘りなく消失せて、僅かに侮蔑の思ひが起るのみとなつた。そして、俄かに自分の仕事に向つて急ぐ氣になつて、椅子から立上つて、「わたしには差迫つた用事がありますから、これでお暇しませう」と、會社の應接室で普通の面會人をあしらふやうな態度で云つて、美代子の側を通拔けて行かうとすると、美代子は思はず手を伸して立塞つた。

「あなたは本當に行つておしまひなさるの？まあ待つて下さい。……あなたはわたしに何も仰有らないで行つてしまふんですか」

「どういふことです」中泉は、美代子の、熱い息――昔の彼女を思出させるやうな、あのにほひを持つた息に、鼻を襲はれながら、勿體振つて云つた。

「あなたはわたくしにお約束なすつたことをお忘れになつたのね」―

「あなたに約束したこと？」

それは、あつたかも知れないと、中泉は忙しく記憶を索つた。

「白ばくれてゐらつしやるの？……まあここへお掛けなさいまし。落着いてお考へになると思出せますわ」

さう云はれて押やられると、中泉は卒氣なく振切つて行くことが出來なくなつて、元の座へ腰をおろした。

「わたしも、稼業柄、大勢の人間にいろ／＼な約束をしてるもんですから」

「當座のがれの約束だから覺えてゐないと仰有るの？朝川の知合の市川さん見たいに、あちらへもこちらへも不渡手形を出してゐらつしやるの？……でも、わたしにお約束なすつたことだけは、御自分の本心からさう仰有つたのです」

「わたしは得意で嘘を吐いてる人間ぢやないから、無論本心から人と約束したこともありますよ」

「……あなたはホテルでわたしに會はふと仰有つたこともお忘れになつて？ホテルが人目に立たなくつていい。東京へ來たら電話を掛ける。さうしたら、御自分でホテルへいらしつて、そこでわたしを待合せることにすると仰有つたぢやありませんか」

「さうでしたか」中泉は低い聲でさう答へながら、顏を赤らめた。朝川がこのホテルに泊つたのも、自分が朝川の電話でこのホテルへ易々と呼寄せられたのには、さういふ妙な因縁が附纏つてゐたのだと、ふと無氣味に感ぜられた。

「さうでしたかもないものだ」相手を責める美代子の聲は高かつた。「ですからわたし、このホテルの玄關へ入つてこの部屋の前へ連れて來られるまで、わたしの耳の底に殘つてるあなたのお言葉を思出してゐました」

「あなたは大變記憶がいゝ。……わたしの約束といふのはその事ですか」

「いいえ」美代子は神經をピリ／＼させて首を振つた。「そのことはお互ひにどうにもならなくなつたのですもの。どちらが約束を破つたつてこと御座いませんわ」

「さうです。お互ひに、古い事に拘ることは止して、忘れていゝことは忘れた方がいゝんですよ」

「それでは、あのお約束も忘れてしまへと仰有るんですのね。……今度二人が會つた時には、わたしの一生を引受ける話をしようとお約束なすつたことも、お互ひに忘れてしまつた方がいゝと仰有るの？」

「そんなことを云つたか知ら？」

「云つたか知ら？もないものですわ。空呆けてゐらつしやる。……まさかの時にわたしが一生路頭に迷はないだけの方法はつけて置くと、あなたのその口で仰有つたぢやありませんか。……お約束通り、今日お會ひしたのだから、その方法をつけて頂けるだらうと、わたし、さつきから心待ちにしてゐましたのよ」

「でも、たとへわたしがさう云ふお約束をしてゐたにしろ、あなたは、今日路頭に迷ふ氣遣ひはないぢやありませんか。朝川君がちやんと隨いてゐるのに、傍の者が餘計なおせつかいをするのは變ぢやありませんか。却つて家庭の平和を亂すやうなものですよ」

「わたしどもの家庭の平和は、亂れきり亂れてゐるんですもの。これ以上に亂れる氣遣ひは御座いませんの。……朝川は、以前あなたが仰有つたやうな方法で、このホテルへどんな女を呼寄せてゐたのかも知れませんわ。……西洋のホテルは晝間でも寢臺を出しつ放しにして、枕まで置いて。……」美代子は物珍らしげに寢臺の方へ目を注いだ。

「あなたは、まだホテルへ泊つたことはないんですか」

「えゝ、一度も。……西洋の寢臺は寢心地がよろしいんでせうか」

「それはいゝやうです。あなたはお疲れになつてゐるやうだから、寢臺で御休みになつたらいゝでせう。わたしはお暇しませう」

「まあ待つて頂戴。……二年前の晩に、今度會つたらと仰有つた今度といふ日は、今日のことでしたわね。……朝川がど

ういふ氣でわたし達を此處で會はせようと企んでるにしろ、わたし、あの人を恐れなくつてもいゝんです」

中泉は正面に相手を見てゐられないやうな嫌惡を感じながら、尖つた爪で首根つ子を摑まれてゐるやうで動けなかつた。

「あなたも今になつて朝川をお恐れになる必要はありませんのよ。わたし、もう朝川に義理立てするには及ばないんですし、あなたも、わたしを朝川の妻としてお取扱ひにならなくつてもよろしいのよ」

「でも、朝川君はあなたのことを非常に氣にしてゐますよ。さつきあなたから電話が掛つて來た時に、彼女も暫らく川合にばかりゐたのだから、今日は芝居へでも連れてつてやらうかと、獨言のやうに云つてゐましたよ」

「朝川がそんなことを云つてましたの?」美代子は感情に燃えた聲して訊返して、「嘘でせう。この頃の朝川がそんな好意を有つてる筈御座いませんわ」

「さうですか。ぢや、わたしの聞間違ひだつたのか知ら。……しかし、朝川君はさつき新聞の芝居案内を調べてゐました。あれは、あなたではない外の女を誘つて行くつもりで調べてゐたのかな」

誠しやかな中泉の話に、美代子はふと乘出して、「でも、その事は、わたしから電話が掛つたあとのことなんぢや御座いませんの」

「さうです。わたしが此處へ朝川君を訪ねて來た時は、あなたが二宮をお立ちになつたあとなんですからね」

「……芝居へ行くのなら、あちらの衣服を着て來ればよかつた」美代子は獨言のやうに云つて、「わたしども、芝居のやうな派手な場所へは、二年越し行つたことないんですの。今朝大急ぎで頭髮をこんな丸めたきり飛出したんですから、隨分見つともないでせうね」

「兎に角、お湯に入つていらつしやるといゝ。直ぐ側に湯殿がありますよ」

中泉は、それに氣づかなかつた迂遠さを悔ひながら、美代子をうまく唆かして、ボーイを呼んで、彼女を浴室へ送ら

せた。

　そして、彼女の姿が見えなくなると、舌打して胸の不滿を洩らして、扉を内から堅く鎖して、「オイ」と戸棚の方へ向つて呼掛けた。

　聲に應じて衣裳戸棚の中から出て來た朝川の油汗の煮炎み出てゐる顏を見た中泉は、今にも噴出しかけたのを危く噛殺して、「暑かつたらうね。……僕も苦しかつた」と云つたが、朝川は、むつつりして、美代子の腰掛けてゐた椅子に、よろけるやうに腰をおろした。

「僕は譯も分らずに詰らない役を勤めさゝれた譯だが、あれでも君の爲めになつたのかい」と云つて、中泉は、相手がなほ口を噤んでゐるのを無氣味に感じて、「二人の話聲は殘らず君の耳に入つてゐたのだらうね」

「大抵は聞取れたよ。おれは實に不愉快な思ひをしてゐた」

「不愉快な思ひ？それは、はじめから君が豫想してゐた筈ぢやないか」中泉は相手を叱責するやうな語調で云つて、「僕こそ實に不愉快な思ひをした」

「よくもあんな話をしてゐられたものだ。……恥知らずにも程がある」

「それは誰れに向つて云ふんだい」

「誰れも彼もない。此處には二人の外にはゐなかつたぢやないか」

「僕は爲方なしに、あれだけの受應へをしてゐたのだ。實に不愉快だつたよ」

「彼女はまだ率直なところがあつたが、君はコソ〳〵何か云つたり、奥齒に物の狹まつたやうな口の利方をしてゐたぢやないか」

「馬鹿なことを云つちやいけない。僕は爲様事なしに受答へをしてゐたのだ」

「おれだつて爲様事なしに我慢して聞いてゐたのだ。飛出して怒鳴りつけようと何度思つたか知れなかつた」

「成程君の精神狀態はどうかしてゐるね。自分でこんな滑稽な狂言の筋立をつくつて、おれに馬鹿な役を無理に押付けて置きながら、自分の立てた狂言の運びをブツ／＼云つてるんだから」

「……彼女もおれの目の屆かないところでは、他所の男に向つてあんな口を利いたりあんな素振りを見せたりしてゐるんだね。……おれは君を利用していゝ試驗をした。……今彼女が風呂場から歸つて來たら、君を證人に立てゝ宣告するつもりだよ。そこでよく見てよく聞いて呉れたまへ」

「何の宣告だ？」中泉はうかと氣色ばんで訊ねたが、直ぐに打消して、自分の無關心を言現はすやうに、「何の宣告だらうと、君が君の妻君に言渡すことに干渉すりやしないがね」

「他人が干渉しようたつて、此方で受附けないからいゝよ。しかし、君は宣告の席に列席しなきやいけないよ」

朝川は上官が下僚に命令する如くに云つた。中泉は、「何を生意氣な」と心で嘲つて、再度の愚かしい役割は跳付けて、美代子が浴室から戻つて來る前に、この不快な部屋に暇を告げようとしたが、何かに行手を塞がれてゐるやうで、猛然として足を扉の外へ運ぶことが出來なかつた。

「君は腹が空いたらうね。何か料理を取寄せよう」と給仕部屋へ呼鈴を鳴らした。

その恩惠を中泉は斥けたが、朝川は、給仕に向つて、三人分の料理を吩咐けて、「大急ぎで」と言添へた。

「三人で會食をしようと云ふのか。僕は澤山だよ。僕はもう詰らない芝居から解放して貰ひたいね」

「まあおれに任かせて置くさ。解放する時が來たら、おれの方から解放するよ」

朝川が厳然たる態度を裝ふと、彼れの衣裳戸棚の潜伏の滑稽さが、中泉には思出されて、この痴人とのお突合ひは一刻も早く免れようとしたが、それはさう無雜作に相手から許されなかつた。……自分がゐなくなつたあとで、二人の間にどん

な物狂はしい軋轢があるか知れないが、さうしたら、自分も關係者として、餘計な惡名を脊負はされないとも限らないといふことも思浮んで油斷がならなかつた。……

「君は東京で貸家を搜してるのか。さういふ話だつたぜ」

「成程君はさういふことを聞かせられてゐたね。大間違ひさ。汽車で知合ひになつた平塚にゐる會社員に賴まれて、昔おれの知つた家主に訊合せたゞけなのさ」

「なんだ。そんなことだつたのか」

「ハ、、、」朝川は憫笑して、「さう云へば、君はおれが彼女(あれ)を芝居へ連れて行くやうなことを云つてゐたね」

「さうでも云はなきやならない破目になつたのだ」

「ところが、おれは近年、芝居見物をしようなんて、そんな悠長な氣持にはなつたことはないよ。君は時々芝居なんかを觀てるのかい」

「さう好きぢやないが、たまには觀に行つたこともあるね。君は本當の芝居は觀なくつても、なか〳〵芝居心があるぢやないか。……僕も君の仲間に引込まれてしまつた」

「おれのやうな家庭生活を續けるのは、おれの頭がどうかしてる證據だと思つてたが、君の方がよつぽどどうかしてるよ。……君は口では何と云つてゐても、後髮を引かれてゐるやうに、今までこの部屋が出て行けなかつたぢやないか。……あたり前の人間なら、おれの前へ出て尻を据ゑてゐられたものぢやない」

「僕がさつきから思つてることを、君は言當てたね」

中泉は些少の反感も起さないでさう云つて、それの言葉として、疲れた重つたるい足で立上つたが、その時、扉が頻りにノックされた。「早く開けて下さいね」と、せき立つた聲もした。聲を聞きつけた朝川は、「錠がおりてたのか」と呟い

て、急いで立つて扉を開けた。

湯上りで顔付の稍々和らいだ美代子は、夫の顔を見ると、「あなたは何處へ行つてらしつたの？」と、穏かに、むしろ愛嬌を浮べて訊ねた。

「おれは何處へも行きやしない。朝から此處にゐたのだ」

「ホテルの外のお部屋に？」

「いや、この部屋にばかりゐたのだ。中泉さんに訊ねて見るといゝ」

「變ねえ」と、美代子は部屋の中を見廻してゐたが、やがて、「畜生々々々々」と連呼して、「あの押入に隱れてやがつたのだな」とそちらへ目を向けて呟いた。

中泉は呆氣に取られてゐた。朝川は小氣味よげに笑つてゐた。美代子は、

「わたしを騙さうたつて駄目よ。さつき締つてゐた押入の戶が開いてるぢやないの。……中泉さんも卑怯ぢやありませんか。こんな人と共謀になつて」

「どうも申譯がありませんね」中泉は笑ひに紛らせて、おどけた表情して頭を垂れた。

「お前も今日のやうな暑い日に東京までやつて來て、御苦勞さまだつたね。用事もないのに」朝川は冷やかすやうに言つて、「しかし、お前の會ひたがつてた中泉さんに、久振りにお目に掛つたんだから、來た甲斐があつたやうなものだ」

「これが何年もかゝつて考へたあなたの腹癒せなの？……卑怯者二人はそこで見てるといゝ。わたしがどうするか見てるといゝ」と、いふや否や、美代子は窓の方へ驅寄つた。兩手で左右の窓枠をしつかり掴へるとゝもに、足を浮かせて、今にも飛下りさうな氣色を見せた。それは役者の如く巧であつた。

その瞬間、中泉は、「あぶたい」と叫ぶや否や、椅子を蹴飛ばして駈けつけて、美代子の身體を抱きすくめて、後へおろ

して、窓を閉めた。朝川も顔色變へて椅子から身體を浮かせたのであつたが、無事に濟むと、泰然として、「いつもの手だな」と呟いた。しかし、其言葉は、幸ひに中泉の耳に觸れたゞけで、動顛した美代子の耳には入らなかつた。

これも狂言かと、中泉は氣がつくとともに、脛も露はな美代子の肉體の温みが、自分の觸覺に殘つてゐるのが、忌はしく感ぜられた。消毒液で拭ひ取りたいやうにさへ思はれた。

そして、この後で起るべき夫妻の悶着に掛り合ふ苦しさを豫想して、逃ふやうに帽子を取上げて、ろくに挨拶もしたいで部屋を出た。ボーイが料理の容器を持つて此方へ向つてゐるのに、廊下で行會つた。

昇降機で階下へ下りて、往來へ出ると、中泉は自分ながら正氣づいたやうであつたが、美代子の肉體の温みは、いつまでも自分の肌にべた〳〵と附着してゐるやうで、その無氣味さと云つたらなかつた。

（六）

その晩、彼れは定刻に江戸川べりの自分の家へ歸つた。入浴後の晩餐の際には、一日の見聞の一端を妻に洩らすのが例になつてゐたが、その日は、肝心なホテル行については何も云はなかつた。朝川と美代子とのことは、その名を口に出すのをさへ恐れてゐた。

しかし、眞晝間のホテルの奇異な光景は、腦裡にこびりついてゐたので、葡萄酒のコップを舐めたり、オムレツをフォークで口へ運んだりしてゐる間にも、三人のあの時の言葉や擧動やが、彼の眼前に浮び彼れの耳底に響いてゐた。そして、妻との話は自から止切れ勝ちになつた。

「あなたは何を考へてゐらつしやるの？」ふみ子は、夫の樣子を見て、氣遣ふよりもむしろ滑稽に思つてゐた。

「何を考へてるものか。……」と、中泉は事もなげに打消して、元吉の歸朝の出迎へを話題にして、「おれも仕事の繰合は

せがつきさへすれば出掛けてもいゝがね。お前はどうだ。遊びのつもりで、啓三を連れて行つたらいゝだらう」と、勸めたりした。

「明日忙しかつたら行つてもよ御座んすけど。……」ふみ子は、あまり氣が進まなかつた。

「まあどちらでもいゝさ。是非行つてやらなきやならんていふ義理はないんだから」

「わたし達が出迎へに行つても行かなくつても、あの人は明日はこの家へ泊りに來るんでせうね」

「さあどうするかな。當人が泊りたいなら泊めてやつて、西洋の話を聞くも面白いだらうさ」

「でも、西洋を渡つて來た人のお持做しは六ケしいでせうね」

「ハ、、、。新歸朝者をそんなに恐れるには及ばないよ。漬物の茶漬でも擇んでやれば喜ぶだらう」

「まさか。……元吉さんも外國でいろ〳〵な變つた見學をして、えらくなつて歸つて來るんですね。あなたも、丸辰へばかり御奉公してゐらつしやらないで、若い時分に西洋で學問してゐらつしやればよかつたんですよ」

「そんなことはどうでもいゝぢやないか……洋行くらゐ、しようと思へば、これからだつて出來なかないんだしさ」

「本當に洋行でもなさる氣がおありになつて？」

「なぜ、今日はそんなことを訊くんだ。……元吉がいくら新歸朝者顏をしたつて、おれは、あいつに對して決して引け目は取らないつもりだ」

「それはさうでせうけれど……」ふみ子は、しげ〳〵夫を見て、「あなたはこの頃は、元氣がおありにならないぢやありませんか。今日は格別さう見えますよ。何だか物忘れをしてゐらつしやるやうね。社の御商賣に手違ひがあつて、氣をつかつてゐらつしやるんぢやないか知ら」

妻の言葉にギックリとした中泉は、食卓の向うに坐つてゐる妻の視線を眩しく思ひながら、「おれがそんなに氣力が衰

へてゐやうに見えるのかい。自分では何とも思つてやしないが」

「あなたはどんな帽子を被つてゐらしつたか、気がおつきにならないの？見せて上げませうか」

ふみ子は微笑を洩らして座を立つて、玄関の帽子掛けから、新しい麦藁帽子を持つて来て、「これは買立てのやうだけど、一圓均一見たいな廉物ぢやありませんか」と云つて、内側を出して見せた。そこの皮には、T、Aと持主の名が刻まれてあつた。

「T、Aつて誰でせう」ふみ子は、夫の同僚の姓名を二三思出しながら、「Aといふ字の頭につく人は誰れか知ら」と、頻りに探索しだした。

「他所で替へて来たんだよ。……帽子くらゐどうでもいゝぢやないか」と、中泉は妻の手前、心の動揺を隠さうとしたが、朝川の帽子をまで被つて持つて来た悪因縁に思はず舌打ちした。

「そりや、帽子くらゐはどうだつていゝんですけど、あなたの頭はどうだつて構はないと云ふ譯にはまゐりませんでせう」

「今夜は、お前もいやに七六ケしく云ふぢやないか」

中泉は、不在中に朝川から、帽子の間違ひを電話で知らせて来たのではあるまいかと、俄かに不安を感じて、「留守に誰も訪ねて来なかつたらうね」と訊ねた。

「今日は日曜ぢやないから、あなたに御用のある方が家へ訪ねてゐらつしやる筈はないぢやありませんか。何方か訪ねてゐらつしやる當てがありますの？」

ふみ子が疑ひを寄せるのを、中泉は防ぎかねて、「當てがある譯ぢやないが、朝川が電話でも掛けやしないかと思つて……

……」

「朝川さん？」ふみ子は疑ひの解けた思ひをして、「T、Aは朝川さんですのね。昨夕銀座の街上に首だけ見えてたと仰有つた朝川さんに、今日何處かでお會ひになつたのね」

「ウン、會ふことは會つた」

「そのせいですね」

「そのせいだ？」

「だつて、あなたは朝川さんを怖がつてゐらしつた。何か後目たいことがあるに違ひないと思つてきしたよ」

「朝川のやうな馬鹿な奴を誰れが怖がるものか」

「……向きになつて力み返つてゐらつしやろから可笑いわね」

「フヽン」

中泉は、深い意味のない妻の戯談口に乘て、自分で進んで、手引きして、おのが心に宿つてゐる暗い影を、相手にのぞかせやうとしかけたことを後悔した。そして、この話は打切つて、熱心に飲食ひに打込んで他を顧みない風を裝つてゐたが、同じやうにナイフやフオークを動かしてゐるふみ子が、今夜は不思議に目障りになつてならなかつた。……かうして自分達夫妻が向合つてゐるのが、朝川夫妻がホテルで向合つて食事してゐるのと同樣の光景のやうに思はれた。そんな筈はない。此處は平和な家庭で、ホテルの二人は絕え間なく反目し合つてゐるのではないか。彼等二人はあの晝飯の料理をもしみ〲味つてゐたのではあるまい。此處にゐるふみ子は彼女の夫の或事については何も知つてゐないのだし、彼等二人は互に暗い秘密を搔きむしり合つて、それを喰合つて生きてゐるのではないか。と、彼等と我等との極端な相違を念頭に浮べようと努めたが、フオークの上げ下ろしに目につくふみ子の顏は、晝間ホテルで見た美代子の顏と次第に似通つた。

「もう澤山」と、中泉は、ナイフを置いてソーダ水を一口飮んで、大きく息を吐くと、

「あなたは、今夜はあんまり召上らないぢやありませんか。どの皿にも少しづゝ手をつけたばかしで。……おいしくないんですの？」と、ふみ子は非難するやうに云つた。

さう云はれて、中泉は氣がつくと、鮮版食べた筈の料理は、端の方が突つかれてゐるばかりで、過半は殘されてゐた。

「お午に御馳走をどつさり召上つたんぢやたくつて？朝川さんと久振りにお會ひになつて、どちらかゞ口を切つて、一しよに御飯を食べようといふことになつたんでせう。どうもさうらしい」

「お前は今夜はいろ〳〵に邪推をするんだね。おれは朝川と一しよに食事をしたりなんかしないよ。……物をよく食べるも食べないも、その時によつてだ。人間の腹は機械のやうぢやないからね」

詰らないことを云つてゐると、中泉は自分の言譯が可笑しくなつたが、ふみ子の鼻の尖つた淋しい顏が目に映ると、それを蔽ふやうに、美代子の頬の尖つた陰相が目に映つた。二つの顏がごつちやになつてしまふやうだつた。

「お前は朝川を知つてる譯だね」と、ふと氣色ばんで訊くと、

「昨夕さう云つたぢやありませんか。朝川さんなら、わたし達が若松町にゐた時分に、一度お會ひしたことがあるつて。……あの方は柔しさうな顏してたことをよく覺えてますよ」

「ところが、この頃はあんまり柔しさうな顏をしてやしないね」

「どうしてでせう。あの後あの方は苦勞なすつたのか知ら」

「苦勞したのだらうよ。……とても正面に見てゐられない顏になつてる」

「見てゐられない顏？」ふみ子は、朝川に對して好奇心を起して、「どんな顏してゐらつしつて？　わたし見たう御座んすわね。」

「どんな顏つて。まあおれのやうな顏してらあ」

「さう？あなたのやうな顏？ぢや、朝川さんにお會ひするには及びませんわね」とふみ子は云つて笑つて、「さう云へば、朝川さんの奥さんはどんな方か知ら」

「お前のやうな顏してらあ」

その言葉に應じて、ふみ子は、「馬鹿にしてゐらつしやる」と云つたが、夫の顏には、戲談氣が少しも現はれてゐないので、夫の不機嫌な氣持が、朝川に何かの關係を有つてゐるに違ひないと、ます〳〵疑はれだした。昨夕銀座の散歩から歸つて來てから、何となく夫の調子が不斷と違つてゐたことが、一々譯ありげに思はれだした。しかし、その疑ひを問詰めて、夫の心を亂すのが氣遣はれたので、その話に觸れないでゐると、中泉は、食卓を離れて縁側へ出た。やがて、昨夕のやうに玄關脇の啓三の部屋へ入つた。

「君、これから、××ホテルへ行つて、帽子を替えて來てくれたまへ」と、簡單に用事を命ずると、

「靴も取違えてゐらしつたんぢやありませんか」啓三は、さつき靴を片附ける時に氣づいたのを、遠慮して知らせなかつたのであつた。

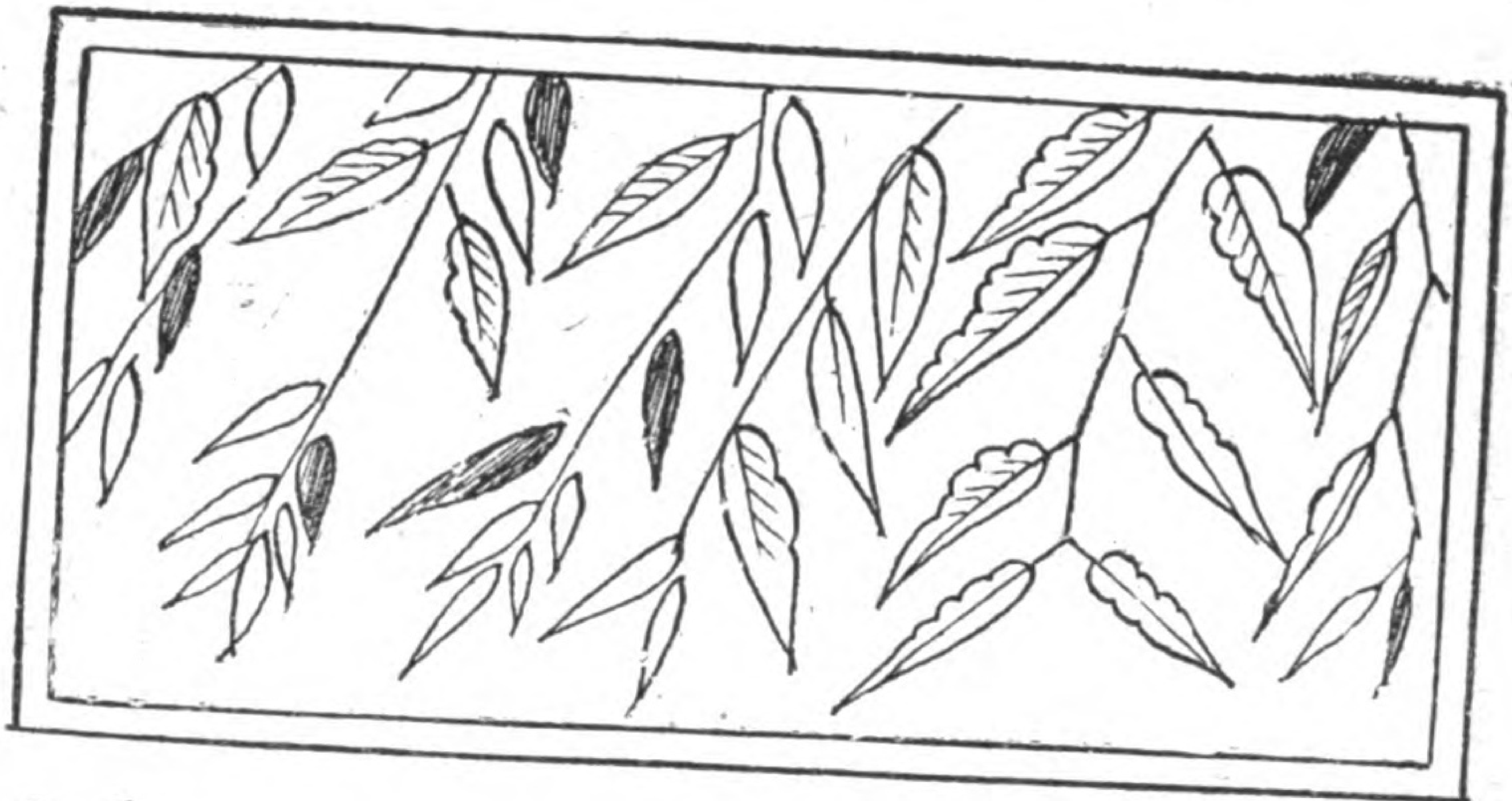
「そんな筈はないが……」と、中泉は一度は打消したが、直ぐに思返して、「ぢや、靴も一しよに持つて行つて替えて來てくれたまへ」と小聲で云つた。

そして、啓三が出て行つたあとで、「衣服だけは、朝川のを着て歸らなかつたのが不思議なくらゐだ」と、おのれの間拔けさ加減を嘲つた。

が、暫くして、靴も帽子も、啓三の手にぶら下つて無事に、本當の持主のところへ戻つて來た。

啓三の部屋で、彼れの讀みさしの小說を、拾ひ讀みして時を過してゐた中泉は、靴と帽子とを一瞥して、忘れて來た頭腦を取戻したやうに安心した。

「朝川はまだあのホテルにゐたのだね。君は會つたのかい」
「え、お部屋の戸口でちよつとお目に掛りました。
「一人だつたか、二人だつたか」
「顔は見ませんでしたが、女の聲がしてゐました」
啓三がさう云つてニヤ／＼笑つてゐるので、
「朝川は何か云つたらうな」と、中泉は訊ねた。
「わたしが持つて行つたものを朝川さんが戸口でお受取りになつて、奥へ持つていらつしやると、女の人が面白いものを見つけたやうに笑ひました。これでお芝居が幕になつたと、その女の人が云つてゐました。それから、朝川さんが、今日は御苦勞を掛けたのに御馳走も爲損ねて濟まなかつたと、あなたに申上げて呉れと云つてゐました」
「それだけか。その外は何も聞かなかつたんだね」
「えゝ。……でも、ドアを締めたあとで、朝川さんが女の人と一しよに、笑つてる笑ひ聲が聞えて來た時には、いゝ氣持はしませんでしたよ。わたしまで馬鹿にされてるやうでした」
「氣の毒だつたね」
中泉はさう云つて座を立つたが、立際に「明日は仕事の都合をつけて、君と一しよに元吉の出迎へに行くとしようか」と、相手の歡心を買ふやうに云つた。
その夜熟睡した彼れは、翌日は、稍々平靜な氣持に返つて、定刻に會社へ出勤した。幾日か經つうちに、次第にふみ子の顔は、鼻の尖つた淋しい相好をした不斷のふみ子らしい顔として、夫の目に見えるやうになつた。
朝川からはその後、何の音信もなかつたし、此方からも朝川の動靜を索らうとはしないで、自然に日が經つた。



炎天の下

下村千秋

一

三年前の春から病みついた病氣の療養と避暑を兼ねて、常陸の平磯海岸へ行く妻と、汽車の中で別れて、自分は一人、利根川畔のT——といふさゝやかな町へ下りた。

この町は、五年以前夏から冬まで住んでゐたことのある町で、こゝの伊勢甚といふ宿屋には當時一ト月ほど暮したことがあり、自分には相應深い親しみを持つてゐるので、この町のこの宿に暮すことは、何處にゐても苛々と落ちつけない近頃の自分を落ちつかせるに一等いゝ場所に思へた。で、せめてこの夏一ぱい、出來たら秋の終る頃までこゝで過さうと考へて（これは自分一人腹の中で極めて）來たのであ

つた。

妻は汽車の中で、

「こゝまで來たのですもの、海岸まで送つて來てよ」と、傍の弟には聞き取れないやうにして、何遍か自分の耳へ囁いた。

「俺が送つて行くくらゐなら、わざ〳〵弟を頼む必要はなかつたぢやないか」と自分はそれを言ひ張つた。

「そんなら私も一緒に下りて見る、そしてあなたが氣に入つてゐるといふ町や宿を見たい」と今度は妻はそれを言つた。

妻は、一旦は決心したものの、やつぱり自分から離れて暮したくなかつたのであつた。しかし自分は、一時も早く妻を離れた自分になりたかつた。（これ等の理由はあとで判る）

「餘計なことだ」不機嫌な顔で自分はさう答へた。が、一寸妻が可哀相になり「あゝまでお互ひに骨を折つて、やつとこの決心がついたのだからね、こゝでまた一緒に宿へついたりして、そのまゝずる〳〵と二人で暮すやうになつたら、何も彼も無駄になるぢやないか、素直に機嫌よく行きなさい！」

妻は泣きさうにべそ口をしたがやがて汽車が自分の下車する驛へ停りかけると、强ひて柔かい笑みを口元に見せて、「それぢや行つてまゐります。今月中にきつと遊びに來てね。川の深い所で泳いぢやいけませんよ、夜更しをしちや駄目ですよ。手紙の返事はきつと書いてね」と少し子供ぢみて、しまひの方を慌てゝ急かしく言つた。

ブリツヂを渡つてゐる時、汽車は動き出した。自分は延び上つて、靜かに動いて行く汽車の長い屋根をしばらく見下してゐた。

二

停車場前の廣場には、眞夏の日が眼に痛いほど反射してゐた。そこから直ぐ眼の前に、仰ぎ見るやうにして盛り上つてゐる寺の森からは、油蟬、シンシン蟬、ミン／＼蟬の無數の聲が、ヂヤーツと一つになつて、そこらの空氣を掻き立てるやうに鳴りひびいてゐた。けれどそれは東京の騷音とはまるで反對に、何處か自分の本能を喜ばせ、眼覺めさせるやうなひゞきであつた。（これは自分が田舍に育つたせいもあつた）炎天の往來にも、いかにも大河に沿つた町らしく、からんとした靜けさがあつた。自分はホツとしたやうな氣持になり、焦きつくやうな暑さを快よく身に浴びながら往來へ踏み出して行つた。

宿は寺の高い石段の下にあり、棟の高い厚い藁屋根をどつぷりと眞深にかぶつた昔の宿場の宿の名殘りであつた。今風の旅館も他に一二あつたが、曾ての一ト月ほどの逗留にもこの宿を選んだのは、昔の匂ひのこもつてゐるやうなこのがつしりと大地に落ちついた屋造りが、分けても自分の氣に入つたからであつた。そして今再びこれを見ると、つい二三時間前まで、東京のバラツク建築の、夏の陽にから／＼に陽反つてゐるやうな家々を見てゐただけ、それとはつきり對照されて、この宿の姿が身に染みて柔らかく穩やかに感じた。

宿の廣いうす暗い土間へ入つて行くと、そこの人達は五年ぶりの自分をよく見知つてゐてくれた。

「よくまあお出てたすつて」といふ調子で、主婦、老婆、主人と代る／＼上り框へ出て來て丁寧に迎へてくれた。

「また當分、お世話になりに來ました」と自分は、厄介ものでも賴みこむやうに言つた。

土間の隅には、茄子、白瓜などが、泥をつけたまゝ冷々と重つてゐた。そんなものを見ると、自分は鄕里の家へ歸つたやうな氣持にさへなつた。

自分はそこの上り框で、遠慮なし猿股一つになり、風呂場へ行つてからだを拭いた。そしてそのまゝで、二階の部屋へ案內されて行つた。黑光りのする仕切りの板戶、押入れの板戶も昔のまゝであつた。

自分は座敷の眞中へ大きくあぐらをかいて、譯もなく深い溜息をついた。それからまた立ち上り、腰窓から外を見た。

低く平らに並んだ町並の屋根の上から一段高く出て、利根の土手が長く遙かにつゞいてゐる。その土手の消えるあたりの空に瑪瑙色の入道雲がむつと浮んでゐる。これも昔のまゝであつた。自分はここでもまた深い溜息をついた。

三

この調子なら當分は大丈夫落ちつけさうだと解ると、自分は始めに一人腹の中で極めた通り、これを機會に少なくとも三月以上半年ぐらゐ、妻との別居生活をつゞけようと考へた。自分からさう考へるばかりでなく、理由は兩方にあつた。只、自分の方の理由は、それをありのまま妻に傳へることが妻のヒステリックな神經が許さなかつたので、それを別居の理由の中へ數へ入れることは妻の前では出來なかつた。

妻の方の理由は、この始めに書いた通り、妻の病氣の療養といふことであつた。妻は、三年前の春から脊椎カリエスに冒され、それから現在までずつとギプス・ベツトへ寢通しにしてゐた。その間にも妻の弱つたからだは、盲腸の手術をしたり、耳鼻科へ通つたり、肋膜のための注射を受けたりしなければならなかつた。さうしてこの春からは、脊椎カリエスが肋骨まで冒して來たやうにOさん（カリエスに罹つて以來世話になつてゐる醫者）から言はれた。そしてそれが確かだと判明すれば、その肋骨はすぐ切り取らねばならぬと言はれた。

妻の生活はそれで一段と眞暗になつたやうに見えた。

「あばら骨まで拔かれて、そんなになつて生きてゐたくない！」と妻は地團太を踏むやうにして言つた。

自分も、さういふ妻に對して何と言つてやつていゝのか途方に暮れるばかりであつた。しかし幸ひにも、肋骨カリエスを確かめるために寫されたレントゲンの寫眞には、その症狀が明瞭に現はれなかつた。

Oさんは、木の根のやうに腫れ上つた妻の肋骨を撫でて見ながら、

「寫眞に出ないところを見ると、これで案外にすんでゐないのでせう、手術は當分見合せて經過を見ることにしませうか」と言つてくれた。自分は喜んだ。そして、

「見合せていゝのでしたら、それに越したことはありません」と答へた。

けれど妻は、それは一時遁れで、遲かれ早かれ必ずその時は來るのだと言つて、手術を見合せることになつたことを少しも喜ばうとしなかつた。自分に取つてもそれは結局は同じことではあつた。しかしこの三年以來、次から次と襲ひかゝつて來る妻の病勢に對して、病人自身でないだけに、傍の者だけが感ずる消極的な弱り方、憂欝、苛立たしさに自分はまゐつてゐたので、自身不愉快に思ひながらも一時遁れを喜ぶやうになつてゐたのである。只これは妻に話すべき性質のものではなかつた。

とにかく手術をせず經過を見ることになれば、後は出來るだけいゝ經過を見るやうな方法を取ることが、妻を（自分をも）救ふ唯一のものであつた。そしてその方法は、脊椎カリエスに罹つた當初にOさんから注意されたこと——絶對安靜にゐること、滋養物を取ること、日光浴をすること、この三つを出來るだけ完全に守ることであつた。それからもう一つ、禁慾生活を守ること、これは以上の三つの療法を有機的に結合さして一つの健康素をつくる最も大事なことで、反對にこれを破ることはこの三療法を無役に殺して了ふことになるのであつた。そしてこれはこれまでの幾度かの經驗で、妻も十分承知してゐるものであつた。

妻との別居生活を自分が思ひ立つたのは玆から出發してゐた。實はこれもずつと前から考へてゐたのだが、或る事件が邪魔をして、それを言ひ出す機會がなかつたのであつた。

自分は別居生活に就て、靜かに妻に言つてきかせた。妻も今度はそれを素直に受け容れた。

自分は「木星」の「中村藻追悼號」といふのを取り出し、妻の前に開けて見せて、

「この人を見ろ、これはこの畫家が死んだ時の寫眞だが、普通の死人の顏とはまるで違つてゐるだらう。クリストのやうな顏をしてゐるだらう。この人は、肺を冒されしよつちう喀血をしながらも二十年も生きてゐたのだよ。死んだ原因も、肺が潰れ切つたからではなく、喀血のための窒息だつたのだ。左の肺はすつかり駄目になり、右のも僅か子供の拳ほどの大きさしか殘つてゐなかつたさうだが、それでも元氣で、しつかりと落ちついて、そして立派な仕事をしたのだ。喀血した時などにも、その時は苦しんでも、しばらくすると、靜かな、澄んだ、しつかりした顏にかへつたといふのだ。それは、この人は、病菌などのどうしても冒し得ない部分を病氣の間につくつてしまつたからだ。始めは精神的のもの、それから肉體的のものを。これには主治醫も驚いてそして敬服してゐたといふことだよ。この人はよく「病氣をだまし〳〵働く」と言つてたさうだ。お前の病氣は、この人のやうに致命的のものではないのだから、さうまで考へる必要はないが、少なくともこの人のやうに、病菌などの浸蝕できない所のものを先づ精神的につくるやうに心懸けねばいけないよ。そしてそれが出來れば、俺のやうな俗の者よりしつかりした信念で生きられるやうになる。今までのお前は、病氣を主人公にして置くのだからね。病氣がどんな横暴を極めようとも、泣き寢入りして行かうといふ風なんだからね。それぢや良くなりようがない。第一あゝまで熱心に世話して下さるOさんに濟まないよ。病氣は居候なんだよ。お前のは、少ししつこい居候だが、決して主人公にはなれないものなのだからね。だから大きく憐れんでやろといふ風にしてゐればいゝのだ。そしたら病氣の方で氣の毒に思つてひとりでに出て行くよ、不治の病氣を持つても二十年は生きたといふのだから、お前が健康體になることは容易なことなんだ」

それは六月始めで、海岸か河畔か（山の温泉はカリエスには禁物であつた）へ轉地したらいゝと云ふことなどを、それから自分達は機嫌よく話し合つた。

四

しかし翌日になると、妻は不機嫌な顔になつて自分に言つた。

「私だつて、昨日あなたが言つて下すつたやうなことを考へてゐるのですよ。だからもし私がまだ一人者だつたら、あの畫家のやうに、自分一人の心をしつかり見詰めて、そして病氣に打ち克つやうな心をつくつて見せましたわ。でもさうぢやないのですもの、これが出來ないんです。私がどんなに澄んだ靜かな氣持にならうとしても、あなたが傍から私の心を亂して苦しめるのですもの……………」

「また來たな！」と自分は思つた。妻のこの意味は――自分に十五六年前からの戀人があり、それとのさま〴〵のいきさつから、妻の心を極度に亂し苦しめたことを指すのであつた。しかしそれもその女が半年ほど前、樺太へ移つてしまつてから、具體的の交渉は全くなくなり、從つてそこから生れる混亂はすつかり消えてゐた。けれど妻の氣持は、もうそれだけでは納まらなくなつてゐた。

「心で思つてゐればおんなじです」と妻は言ふのであつた。「その上、いつか隙を見て樺太まで會ひに行かうと思つてゐるのですもの、考へると堪らなくなる！」

この事で、二人は今まで幾度言ひ爭つたか知れなかつた。

「それはみんなお前のひがみだよ。お前を苦しませるやうな意味であの女のことを思つてゐるのでないことは、これまで幾度言つてあるか知れないし、お前自身もよく承知してゐる筈ぢやないか」

妻がもし機嫌のいゝ時は――私もそれはよく解つてゐる。こんなことで苦しむのは、自分の影に怯えてゐるやうなものだといふことを考へる。けれど、一旦氣持がこぢれて變に疑ひ出すと、凡てのものが實際の姿となつてあり〳〵と見えて

來て、自分一人欺され、出し拔かれてゐるやうに思はれて、ゐても立つてもゐられなくなる――と自身の氣持を解剖しながら話すのであつた。

けれど今日の妻は反對に不機嫌の方であつた。氣持がこぢれて變に疑ひ出した時であつた。自分は、昨日あれだけ靜かに、少し昂奮さへして妻のために話したことを思ひ出し、少しぢれつたくなり、腹立たしくさへなつたが、努力して、

「もうその事を言ふのは止せよ」と柔かいものを頭から蔽ひかぶせるやうに言つた。

「私だつてちつとも言ひたくないのだけど、どうしても氣になつてならないのです。今度私を何處かへやつて置いて、その留守に普段考へてることを實行しようと思つてゐるのでせう？」

これは自分の夢にも思つてゐないことであつた。後から考へれば、妻のこれも無理もないことに思はれたが、今だしぬけにさう言はれると、妻の頭の動き方が、むしろ卑しくさへ感じられた。自分は憂鬱になつた。

「馬鹿な考へにも程がある。あの女は樺太にゐるのだよ」

「樺太だつて台灣だつて、行かうと思へば平氣で出て行く質ぢやありませんか」

「お前はもうあつちへ行け！そんな話で時間をつぶしてゐられない」

「また逃げる。私には素振りで、あなたが何をたくらんでゐるか、よく解るのですから」

「…………」

「あなたは、この半年、あの女の人が東京を去つてからこつち、一度だつて御機嫌の顏をしたことがないぢやありませんか。いつも暗い顏でぶすんとしてゐるぢやありませんか。これは私の邪推で、心に思つてゐる通りを實行できないからなのです。だからそのうち、あなたが何か言ひ出すことでせうと心待ちしてゐると、果して別居生活を持ち出したぢやありませんか」

自分は別居生活を思ひ立つた時、これを下手に妻へ持ち出せば、妻は樺太の女との事件を根據にして、自分の思ひ立ちを正しく解釋しないだらうと考へた、つまり、別居生活を口實にそれからだんだんと結婚生活から遠除いて行かうと考へてゐるやうに自分を解釋するかも知れぬと考へた。それで自分はこれを持ち出す機會をつかみ損つてゐたのであつた。だから別居生活に對して、妻とは全く逆の考へであつた。しかも妻の考へは、自分が考へてゐたことよりも卑しかつた。

「そんなら轉地など止めちまへ！」自分は大きな聲を出した。

それきり別居生活に就てはどつちからも言ひ出さなくなつてしまつた。

五

「一度だつて御機嫌の顏をしたことがない、いつも暗い顏でぶすんとしてゐる」ことは自分も十分承知してゐた。自分はさういふ自分を半年前頃から持て餘してゐるのであつた。

けれどこれは妻がいふやうな所には原因してゐなかつた。もつと遠く深い所から來てゐた。また妻のいふやうな意味でそんな自分になつてゐるのでもなかつた。

一口で言へば、自分は、自身の生活力の弱つて行くのにまゐつてゐるのであつた。生きて行く力、生活を伸して行く力、それが一月一月と弱つて行く。生きて行くことが如何に苦しい大きな仕事かをしみじみ痛感させられてゐる自分になつてゐるのであつた。

その原因となるべき遠く深い所のものを言ひ出したら切りがない。卑近な事で言へば、やつぱり妻の病氣が動機となつてゐた。いつまで經つても自分には馴れ切れない厭な形のギプス・ベットへ妻が寢てゐるやうになつてから、不吉な黑い影が部屋の隅々にひそんでゐるやうに感じられて、それがまた次ぎ〳〵と病厭を誘つて來るやうに感じられた——とさう

感ずることが既に自分が生活力を失ひつゝある證據であつた。自分はいつか一種の脅迫觀念に囚はれてゐたのである。

しかもこの脅迫觀念は、自分が病人自身でないだけに、次ぎ〳〵に入つて來る病魔が、自分自身を襲ふのでないだけに、二十年間も病魔と共に生きつゞけた叔家の場合のやうにそれに正面から向つて行つて鬪ふ譯には行かなかつた。自分が知らない間にこつそり忍び込んで來て、いつか自分の背後に乘り掛つてゐる。さういふ感じのものであるだけに、自分ではどうすることも出來なかつた——とまたこんな風な考へ方をすることが、生活力を失ひつゝある證據であつた。

かういふ弱り方をしてゐる所へ、樺太の女の事件が持ち上つた。自分はこの女に依つても、生きて行くことの難儀さを痛感させられた。波亂極りない十年間の結婚生活が破れて後、女の力で出來るだけの仕事をし、しかも尙ほ自分一人を生かして行けず、つひに樺太まで仕事を見つけに出掛けて行つた一人の不運な女に依つて、自分は人事とは思へず、生きて行くことの悲慘さを胸の痛むほど味はされた。世の多くの悲慘な人達に比べれば、それほどではなかつたかも知れぬが、それに依つて自分の心の受けた打擊は深かつた。人間の最後の姿を見せられたやうに感じた。さういふ打擊を受け、さういふ風に感ずることがまた生活力を失ひつゝある證據であつた。

これ等の事柄がさうなりつゝある自分を證據立てたのみならず、同時にまた一つ一つ、これ等が自分の生活力を奪つて行つたことは言ふまでもない。

この自分をどう盛り返して行かうか。言ふまでもなく、盛り返せるだけの力を自分が根底から築き上げねばならなかつた。が、このまゝの狀態ではどう努力してもそれが到底出來さうに思へなかつた。持ち上げ損つたものの下敷きとなつた者が、そのまゝでもう一度それを持ち上げようと努力するのと同じことであつた。さう考へると、自分は先づ、自分を上から壓しつけてゐるものから遁れねばならなかつた。つまり先づ自分一人きりになつて見よう。凡ての環境から切り離した一人の人間になつて見よう、といふことに考へは歸着した。妻との別居生活を思ひ立つた自分の方の理由といふのは

これであつた。

しかしこれは、前にも書いた通り、ありのまゝを妻に傳へることは、妻の現在の神經が許さなかつた。またさういふ妻の神經をうまくコントロルしながら、よく納得できるやうに傳へるだけの氣力と根氣とが自分にはなくなつてゐた。考へただけでも退儀になつた。(茲にも生活力を失ひつゝある自分が反映してゐる)それを無理に押して下手な傳へ方をすれば、妻は必ず横道に外れた解釋をするに違ひなかつた。二人の結婚生活がそこから破壞されて行くやうに取るかも知れなかつた。(もつとも第三者が冷酷な考へ方をすれば、それこそ結婚生活を破壞する根本の原因だといふ風に言ふかも知れぬが、これは自分の知つたことではない)しかし妻にまでさう解釋されては自分は浮ぶ瀬がなかつた。結局自分は何んにも言はずにゐるしかなかつた。だから、轉地の話から、妻が自分の心をあれほど卑しく解釋した時にも、これを言ひ出さずにしまつたのであつた。殘る所なく完全に言ひ現はし得、妻がそれを素直に正しく理解することが出來れば、自分に對する妻の卑しい考へ方、ヒステリカルな神經を一掃することが出來、同時に二人の間のちぐはぐなねぢくれた氣持をも眞直ぐに立て直せるのだと解つてゐながら、そしてそれは大きくは、妻と自分の生活、生命を救ふ原動力にもなると解つてゐながら、この最後の所でかうして動きがつかなくなつてゐるのであつた。そしてこの事は更らに自分を苛立たせ、憂鬱にし、無氣力にした。

時は丁度梅雨で、毎日暗い雨がじく〳〵降る。自分はます〳〵ぶすんと默りこんだ生活に入つて行つた。

六

一ト月あまり經つた。妻は一週に一度、Oさんの出てゐる浦田のN病院へ、腫れ上つた肋骨へレントゲンをかけに行つてゐたが、その歸途、よく銀座を歩いたり、三越へ寄つたりするらしかつた。さうしては疲勞と暑さとでぐつたりとなつ

て歸つて來た。妻さ晴らしのつもりだらうが、さういふことをしては病氣のためによくないことは解つてゐた。しかもさうせずにゐられない所を見ると、妻も、暗いじめ〳〵したこの家から僅かの時間でも離れてゐたいのだらうと思はれた。

　それは七月末のある午後であつた。妻は例の通り、病院へ行つただけでは淋すぎる時間に歸つて來ると、何んにも言はず自分の傍へ來て座つた。そして何かを訴へたさうに上眼で自分の方を見ては溜息をした。かういふことは近來に珍らしいことなので、自分も妻のそれに應ずるやうな表情をして見せた。と、妻は伏し眼になつて、

「私の話、聞いて下さる？」と言つた。

「どういふ話？」

「私けふ、病院のかへりに、急に動物園が見たくなつたので、一人でわざ〳〵行つて見たの。そして鶴のゐる所まで行くと、赤ちやんが一羽生れてゐたのよ。まだ赤肌が見えてゐて、脚ばかり無暗に長くつて、よろ〳〵してよくは立てない赤ちやんなの。その赤ちやんに親鶴が鰌を食べさせる所を見たのよ。親鶴が嘴の先に一匹の鰌をくわへて赤ちやんの嘴にくわへさせようとするの。けれど赤ちやんは、鰌にピチ〳〵はねられてすぐ泥の中へ落つことして了ふの。すると親鶴はその鰌を拾ひ上げて、水の方へ首をのばして泥を奇麗にゆすいでから赤ちやんの嘴へ持つてつてやるの。でも赤ちやんはまた落つことして了ふの。親鶴はまた拾ひ上げて泥をよくゆすいで持つてつてやるの。赤ちやんはまた落つことすの。親鶴はまた拾ひ上げて泥をゆすいで持つてつてやるの。それを何遍でも繰り返すのよ。決して途中で止めようとはしないのよ。さうしてたうとうしまひに食べさしてしまつたの。私、見てゐて涙が出て來た。動物園を出てからも、それを思ひ出すと涙がこみ上げて來て困つたわ」

　妻のこの話は、自分達の生活が如何に暖かい愛情に缺けてゐるかを暗示してゐた。けれど妻は、それを暗示する目的でこの話をしたのでないことは、それを話してゐる妻の氣持で解つた。只實感を話す

といふ風であつた。が、妻はこの實感に依つて、自分達の生活が如何に暖かい愛情に缺けてゐるか、如何に暗く冷やかに憂欝であるかを、改めてはつきりと感じさせられたに違ひなかつた。しかもこれを何處にも匂はしてゐない妻を見てゐると、自分は妻がいぢらしくなつた。

自分は默つて妻を抱いてやつた。と、妻は涙をほろ〳〵落し始めた。その涙を見ると、この一ケ月あまり妻に對して暗く塞つてゐた自分の氣持が、急に明るく開いたやうに自分は感じた。根本からでないまでも、ねじくれたまゝでも、ちぐはぐに喰ひ違つてゐた尖端だけは觸れ合つたやうに感じた。

「けふは、動物園へ行つただけなの？」

「うゝん、病院へも行つたの」

「病院へは、もう何度ぐらゐ通へばいゝの？」

「えゝ、その話もあるの。けふね、Oさんが、腫れが大分引いたから、けふだけでレントゲンをしばらく止めて見ようつて言つて下すつたの」

「えゝ、そりやよかつたな。そんなに利目があつたかね」

「そら、こんなに平らになつたでせう」

妻は胸をはだけて横腹を平手で撫でた。

「さうだね」と自分も手を出して撫でて見て、

「それぢやいゝ時だから、やつぱり轉地して見たらどうだ？　少し出遅れだが避暑も兼ねて」

「さして下さる？」

「そりやいつも考へてゐたことだよ」

「私だつて毎日考へてたのですけれど、あなたが受けつけさうもなかつたから、默つて我慢してたのですわ」
「俺は、お前の方で受けつけないだらうと極めてゐたのだ」
「まア…………」
「ぢや、さう極れば、またこぢれないうちにすぐ出かけたらどうだ？」
「えゝ、明日でも明後日でも。それであなたはどうなさる？」
「どうしようかな。以前行つてたことのある利根川の宿へ泊つてゐようかと考へたことがあるのだが」
「そこなら大丈夫落ちついて、勉強も出來さう？」
「大丈夫だらう」
「ぢやそこになさいよ。そして時々會へばいゝわね。用心してないと、私、だしぬけに會ひに行きますよ」
自分は聲をあげて笑つた。幾月ぶりに笑つた聲だらう、といふ氣がした。
それから妻の避暑を兼ねた轉地先をあれこれと物色して、結局いろ〳〵の點で便宜のある自分の國の平磯海岸といふことにしたのであつた。
翌日一日準備に費やし、妻の荷物にはギプス・ベットを入れ、その翌日、國から電報で呼び寄せた弟と三人一緒に家を發つた。自分は、夏休みの弟に、妻の案内役と海岸での遊び相手とを頼んだ。

七

かうして妻と別れ、一人利根川の宿へ落ちついて、ぢつと坐つて見ると、自分一人の心の重さ、とでも言ふべきものがどつしりと重く總身に感じられた。そして矢鱈と溜息が出た。

これは、妻との永い間の氣持の喰ひ違ひが表面だけでも觸れ合つたために、今まで妻に向つて苛々と働きかけてゐた神經が、自分一人の裡に立ちかへつたためであつた。自分は一方では自由な樂な自分を見出すと同時に、他方では、自分一人の重さを自分一人でしみじみと計つて見るやうな自分をつくり上げたのであつた。水の中で石を運んでゐた時、水の抵抗のみが氣になつたが、水から離して見て、石自身の重さを今更らのやうに驚き感じてゐるやうなのが今の自分であつた。そしてその重さは、氣力、根氣、生活力を失つた後の色も味もない滓のやうな心の重さであつた。(自分は一方で、夫婦といふものの關係の微妙さを始めて感じさせられたやうに思つた。)

自分はよく、一人利根の高い土手の上を往つたり來たりした。

思ひ切つて圓く廣くひろがつた空、限りなく平らに眞直ぐに伸びた地平線、その間に只白く洋々と横たはつてゐる利根の水、凡て平らな線ばかりで成り立つたこの廣漠たる自然には、かうした自分の氣持を搔き亂すやうなものは一つも含んでゐなかつた。それだけにまた、神經が妙にどんよりとした疲れを感じた。

自分は歩き疲れると、尻をはしよつて土手の草の上に腰を下した。大きな白帆が、空から降りて來たやうに動くともなく白い水の上を上つて來る。自分は頰杖をついて煙草を吸つた。遙かの河原の上で鳶が輪を描いてゐる。とき〴〵ピロ、、と啼く。それが靜かに水面を辷つて來て微風のやうに消えて行く。ぼんやりしてゐると變に寂しくなり、ひとりでに心は重く憂鬱になつて行つた。

勉強も仕事も出來なかつた。そして身體が一日一日と衰へて行くやうな氣がした。さうしてそれと反比例に、心の重さが一日一日と増して行くやうに感じられた。自分は、寺の森でチリ〳〵と啼きしきる油蟬に、からだの精力をしぼり取られるやうな思ひをしながら、長い晝寢をした。

それは一週間ほどした或る日の午後であつた。自分は例の通り、炎天の利根の土手を歩いて、ぐつたりとなつて宿へ歸

つて來た。そして二階の腰窓に腰を掛け、煙草をふかしながら、だるい眼を往來の方へ向けてゐた。

と、物影一つなく、カッと光つてゐる半丁程前の四ツ角へ、二人づれの影がクッキリと黑く現はれた。二人はそこで迷ふ風に立ち止つた。よく見ると、一人は、薄汚ない手拭をかぶつた老婆であつた。袋に入れた三味線を手に持つてゐる。背には大きな風呂敷包みを（二本の洋傘を横に乗せて）背負つてゐた。一人は老爺であつた。この暑さに黑い布の大黑頭巾をかぶり、肩には何か棒のやうなものを袋に入れてはすに掛けてゐた。そしてこの老爺は、持つた竹の杖の上に兩手を重ね、その上に顔を重さうに載せてぢつとしてしまつた。暑さに疲れ果てたといふ風であつた。

老婆は小さい頭を右に向け左に向けて見てゐたが、やがて老爺の片腕を執つて、自分の宿の方へ歩き出した。老爺はからだを老婆の肩に凭せて辛うじて歩きながら、ときどき前へのめりさうになつた。その度に地に黑く印した影が頼りなくよろめいた。暑さに疲れただけにしては變だと思つてゐると、やがてうめき聲が聞えて來た。老爺の聲である。病氣なのだなと判つた。

宿の前まで來ると、老爺は非常に重いものを持ち上げるやうに顔をあげた。額から頬から胸の方まで汗が光つて流れてゐる。それを拭はうともせず、口を力なく開き、ドロンとした眼で宿の土間の中を覗くやうにしてゐたが、間もなく倒れるやうに庇の下へ入つた。老婆もついて入つた。自分は氣になつたので、すぐ階下へ下りて行つた。

老爺はもう土間の上り框へ突つ伏してゐた。老婆はその後に突つ立つたまゝ氣兼ねするやうに奥の方を覗いてゐた。奥には、宿の主婦が子供に乳をやりながら添寢してゐた。

老婆は、自分の妻を見ると慌てゝ腰をかゞめて、

「御免下さりませ、御免下さりませ」と力のない聲で言つた。

「何處か惡いんですか？」と自分はこゞんで、老爺の横顔を覗いた。汗とほこりの臭氣がむつと鼻をついた。老爺はその

中で荒い息をついてゐる。閉ぢた眼が恐いほど凹んでゐた。

「へえ！……この町へ差しかゝりますと、急に變りまして、どうした工合でせうかのう」と老婆は小さい眼をしよぼしよぼさし、情を乞ふやうに自分を見上げた。言葉から關西者に思はれた。

「霍亂かも知れない」と自分は思ひ、女中の名を呼んだ。

「はーい」裏庭の井戸端の方から女中の返事がした。自分は台所まで出て行き、

「バケツに冷たい水を汲んで來て、大急ぎで」と怒鳴つて土間へかへつて來た。そこへ主婦も奥から起きて來た。

「お婆さん、さうして立つてゐないで」と老婆は主婦に言はれて、また何遍も腰をかゞめながら、老爺の草鞋を脱がせ、肩の棒のやうなものを解いた。板の間に置くとそれがガチヤリと鳴つた。刀の背であつた。自分は水を持つて來た女中に手傳はせて、老爺を仰に寢かせた。頭巾を取ると、額に、親指の頭で押し凹めたほどの凹みが險相に凹んでゐた。自分は、その胸をひろげ、水に浸した手拭を當て、頭にも別の手拭を當てた。

「えらい御厄介さまになります」と老爺はそれでも息聲で言つた。

「お醫者を呼びませうかね？」と主婦は誰にともなし言つた。と、老爺はそれを遮つて、

「それには及びません。ちよつとした暑さ當りでございます。しばらくかうしてゐさしていただけば、直きによくなりますで……」とそれを一生懸命に言つた。主婦もその意味を悟り、氣の毒さうにして默つた。自分の頭には老爺のこの一生懸命さが妙に深く浸みた。そして自分は、自分のもう一つの姿をそこに見てゐるやうな氣がして來て、さうしてゐるのが少し苦痛であつた。

一時間ばかりすると、老爺の顔色はよくなり、眼の色も少し活々して來た。呼吸も樂になり、額や胸の汗も乾いた。で、主婦の好意で、中庭に面した風通しのいゝ座敷へ移して休ませることになつた。主婦と女中が老爺の身體を運ばうとすると、老爺はそれをひどく恐縮し、熱心に拒みながら、

「お前さんはなぜもつと力にならん！」と老婆をゆすぶるやうに叱つた。そして頼りなく立ち上つた老婆の肩に凭れて緣側をよろ〳〵歩いて行つた。座敷へ入ると、そこに敷かれた布團へ寢る前に、老爺は主婦の足元へちやんと坐り、額を疊へつけて、

「勿體なうございます」と何かを拜むやうに言つた。そして布團へ横になると、兩手を胸の上に組んで、南無阿彌陀佛を咽喉底で繰りかへし始めた。

老婆は、上り框に置いた荷物を運んで緣側の隅へ置いた。それから頭の手拭を脫ぎ、まだつけてゐた脛の白脚絆を取り、裾のほこりを拂つて、緣の端へ兩脚をのばした。やがてのばした膝の上に兩手を支へて、ぐつたりと首を垂れた。女中がバケツへ冷たい水を汲みかへて持つて行つてやつても、默つて馬鹿丁寧に頭を下げただけであつた。

主婦と自分は、土間の方の座敷へ來て、茶をのみながら話した。

「旅藝人ですね」と自分は言つた。

「えゝ、浪花節語りか、祭文（さいもん）よみですよ」と主婦は言つた。

「でも、刀（かたな）などを持つてゐるのは變ですね」

「劍舞でもするのでせうか」

「しかしあの爺さんぢや、劍舞は出來さうもありませんよ。松井源水流の獨樂まわしかな」

「そりや尚ほのこと出來さうぢやありませんね」と主婦は微笑して、「藝人も辛いですわね。うちへも時々いろ〳〵な藝人

が泊りますが、氣の毒なものばかりですよ。それでも、若い者は何ですが、あの人達のやうな年寄りになるとほんとに惨めですよ」

「藝だつてどうせ時代遅れで、喜んでお金をやる人もないだらうし」

「えゝ、えゝ。活動だつていゝ加減のものぢやさつぱり駄目ですものね」

「關西の方の者らしいですよ」

「さうですか。あゝして何處といふわけなしに渡り歩いて、それで病氣でもしたらずゐぶん心細い話ですわね」

中庭の座敷の方ではいつか靜かになつた。老婆も足を縁側の方へ出して横になつてゐた。

自分は、毎日の午後、晝寝をする所に極めてゐた座敷が老爺達に取られてゐたので、その隣りの座敷へ行つて横になつた。が、いつものやうにすぐ眠りつけなかつた。汗が胸先にぢく／＼湧いて來る。自分は井戸端へ行つて手拭を冷して來て、それを老爺がやつたやうに額に載せて寝た。そのうちにいつか眠りついた。

それから何時間經つたか、自分は隣室の話し聲で眼を覺した。老爺の聲である。

「……仕方がない。さつぱりと諦めとくれ、わしはもうちやんと觀念しとる。佛様が迎へに來とるぢやから仕様がない。かうして寝とると、魂がすう／＼とこの胸から抜け出して行くのぢやからな。…………わしが死んだなら、お前さんは國へ歸るがえゝぞ。そして松太郎の世話になるがえゝぞ。あれはまだ大丈夫、あそこに住んどる。釣り橋を渡つてしばらく行くと火の見がある。そのまた少し先ぢや。お前さんも覺えとるだらう。いや、あそこにはもう住んどらんかな。もうかれこれ二十年にもなるでな。いやなに、大丈夫住んどるぞ。あの時でもあれほどの店ぢやつたから、今は素晴らしい店になつとるに違ひない。孫奴等も大きうなつとる筈ぢや。嫁はひどうしわい奴ぢやつたが、松太郎はえゝ男ぢやからのう」

それからしばらく團扇の音がパタ〳〵鳴つてゐた。やがてまた老爺の聲で、

「これからのう、わしの身體は、この町のお寺さんへ賴んで、どこの畑の隅へでもよろしい、埋めて貰ふとくれ。土の中へ埋めて貰へさへすればそれで結構ぢや。あとは何んもせんでえゝ、埋め放しでえゝのぢや。それからのう、このお宿さんへはようお禮をしとくれよ。野たれ死ぬことゝ思ふとつたに、かういふ立派な屋根の下で死ねるとは、まつことありがたいこつちやからのう。ほんに勿體ないこつちやからのう」

またしばらく團扇の音がしてゐて、

「お金はあるかな。お前さんが國へ歸る費用ぐらゐ持つとる筈ぢやが、胴卷の中を調べとくれ。今のうち調べとくれよ」

すると老婆の聲がした。ほろ〳〵と土の崩れるやうな聲であつた。

「心配はいらん、心配はいらん。費用がのうても結構かへれるでのう。そのやうな心配せいで、早う樂になつとくれ。お前さんの苦しい聲を聞いとるが辛いでのう」

「おう、おう、ありがたいぞ！おう、おう、……………」

それからどつちの聲か、ぼそ〳〵と泣く聲がした。それほどではないのに吃度死ぬことに極めてさうして話し合つてゐる二人の力のない聲を聞いてゐると、自分は妙に寂しい可笑しさを感じて來た。

自分はもう寢ころんでゐられなくなり、間もなくその部屋を出た。

九

夕飯後、自分はまた土手の上を往復して、すつかり暗くなつてから宿へかへつて來た。宿では、軒下へ縁台を出して、そこで主人と主婦が二人の子供に線香花火を燃して見せてゐた。自分も、縁台の端へ腰を下してその仲間へ加つた。草の

根を燃した蚊遣りの煙りが、土間に立ちこもり、少し眼に沁みる匂ひがそこらに漂つてゐた。

そこへ女中が、中庭の方から出て來た。女中は立つたまゝ、シャツ〳〵と闇の中に飛ぶ線香花火を見てゐたが、やがて自分の傍へそつと來て、小聲で、

「あの爺さん、お酒を飲んでるのよ」といかにも不平さうに言つた。

「さうかえ！」と自分は、女中とは反對の氣持で答へた。さう言はれて氣をつけると、なるほど老爺の酒に醉つた聲が、中庭を抜けてときどき洩れて來た。

「病氣だなんて、お芝居をやらかしたのだわ」

「そんなことアないよ。霍亂も輕いのだと、すぐけろりとなるものだよ」

「さうオ。何しろ變な爺さんね」

と、庭下駄の音がして、やがて中庭の薄暗がりの中から、その老爺がひよろ〳〵出て來た。

「御免下さりませ、御免下さりませ」と老爺は、土間へ立つて小さな禿げ頭をみんなの方へ下げた、「けふは、何とも申しやうもないお世話になりました。お蔭樣で命が助かりました。何んとお禮を申し上げてよいやら、ほんにありがたいことでございます」と言ひながら左右にふらついた。

「どういたしまして。まアこゝへお掛けなさい」と主婦は席を空けた。

「なんの、勿體なうございます。死んだと思へば、地べたへ坐つて夜を明かしても苦しうございません。ほんに今日は、あの婆さんに遺言をしたほどでございます。わしが死んだなら、あゝせいかうせいと一つ一つ遺言をしましたのぢや。まつたくのところ、わしの魂がこの胸からすう〳〵と抜け出し始めましたからのう。ところがこの通り、生れ變つたやうに元氣になりました。ありがたいこつちや、ありがたいこつちや」

老爺はそこでまた幾度も頭を下げた。下げた頭が土間の柱にぶつかりさうになつた。そこで上り框の端へ腰を掛けた。

「お爺さんはいくつになるね？」と主人が訊いた。

「七十三でございます。ほんたうは七十六なんぢやさうだが、わしの父親がやつぱり藝人で、生れ落ちるとからわしは所所方々へ連れ歩かれたで、いつまでも一つの年が取れなかつたらしいぢや。またその父親が、これの方にはけじめがないで、稼いただけは飲んぢまう。それで食ふに困ると餘計に飲む、といふ工合で、それではおふくろとわしはいつも泣かされましたぢや――わしは鼓で飲んどる、貴樣等稼いで來い、ぐず／＼しとるとひどいぞ――といふ調子だつたぢや。そこでおふくろとわしは稼ぎに出る。人の軒端に立つて、おふくろの三味線でわしが踊る。そこへ雨が降つて來る。雪が降つてくる。おふくろは泣きながら唄を唄つたぢや……それから、と……それから、と……こりや少し醉ふて來たわい」

「それでも藝をしながら諸國を歩くのは面白いだらうな？」と主人がまた訊いた。

「えへつへ……………若い時ア面白いこともございましたよ。第一その時分には、凡て藝人はほんとうの藝を叩きこんだものばかしで、それでなうては渡世が出來なかつたぢや。ところが今はどうです。西洋のちやか／＼を眞似たものばかしで、一から十まで道具でごまかす奇術やら、曲藝やら、活動寫眞やら。あれらはみんな藝ではなうてごまかしぢや。それをまた今の人樣は無性に喜ぶのぢやから呆れますぢや。わしにも一人の息子と一人の娘がありますが、娘奴は、何とか曲馬團へ入りこんで行衛解らず、息子の方は京都の活動寫眞の馬の脚ぢや。それでも御當人は偉うなつたつもりでゐるから、片腹痛いこつちや。會社の旦那はそれでお金をどつさり儲けますぢやろ。だが、なんぼ旦那は儲けても馬の脚にはこれんぼちの關係もないんぢや。それでまたいつ御用済みとなるかも知れん。だからまた夢中になつて馬の脚をつとめる。それで人間が出來上りますかえ。そこの所がのみこめんのぢやから馬鹿々々しうて話にもならんのぢや。すると息子はこ

うぬかしたぢや——お父つアんのやうな時代遲れの藝をしつとつたら、やがて野たれ死ぬばかりぢや。なるほどそれもほんとうになつたぢや。恥かしいお話ぢやが、この頃のわし達はまつこと乞食も同樣ぢや。わしのこの藝をどなた樣もよう見て呉れん。見てもお金は呉れません。それならば、どつちがえゝのぢや？　いやどつちも良うない。どつちが惡い？　いやどつちも惡い。わしはもうしみじみと、生きとるが辛うなりましたぢや。この老ひぼれの命一つが、重うて重うてもはや持ち運べなうなりましたぢや。」

老爺はそこで默りこみ、頭を深く垂れた。自分は、こゝでもまた、もう一つの自分の姿を見たやうな氣がした。と、海岸へ行つた妻の姿が頭の中を通り過ぎた。樺太へ去つた女の姿が通り過ぎた。そしてその後姿をぼんやり見送つてゐるやうな自分にいつかなつた。

自分はこの場のかうした氣分を轉換せずにゐられなくなり、何か言はうとしてゐると、女中が耳元へ、

「あの爺さん、泣上戸の醉つぱらひね」と言つた。

十

自分は、女中の言葉で苦笑しながら、老爺の氣を（また自分の氣を）引き立てるやうに、「お爺さん。お爺さんの藝はどんな藝ですか？」と訊いて見た。

すると老爺はホイと顏を上げ、自分の方を稍々しばらく見てゐたが、急に頓狂な聲で、「わしの藝でございますか」と言つた。それからまた稍々しばらくして「それは珍らしい藝でございます。日本中歩いても、わしの藝をやつとる藝人を見たことはございません。何しろ……………」

「人形つかひ？」と女中が口を挾んだ。

「違うとも、違うとも。人形ならだれでもようつかひますぢや」

「獨樂まわし？」と主婦が言つた。

「いや、いや」

「一人芝居？」と主人が言つた。

「まだ、まだ。さア當てゝ見なされば、只今でもして見せますぢや」と老爺は元氣づいて來た。

「綱渡りだ！」と大きい方の男の子が言つた。それにはみんな笑ひ出した。

「違い、違い。まア、お坊ちやん、この額をよう見て下され。額のこの傷痕が、わしの藝の本家本元ぢや」と老爺は片手をあげて、平手で額の凹みの上をピタリと叩いた。それにもみんな笑ひ出した。

するとやがて、老爺も聲を出して笑つて、

「どなた樣にも當る筈はござりません。まだどなた樣も見たことも聞いたこともない藝ぢやて、當らぬが當り前ぢや。それではお坊ちやん、お話しますぞ。…………先づこの額の穴へ、刀の切先を立てます。けふ、わしの肩へ掛けて來た、よう切れる光る刀ぢや。いや、それだけでも偉い藝ぢやろ。この額の穴もそれで出來たものぢや。さて、その切先を立てた刀の鍔の兩側へ、二枚の板を載せまする。（この邊から、藝人らしい口上になつた）またその二枚の板の兩端に、都合四つの茶碗を載せまする。それからまたその茶碗の上へ、さつきの板とぶつちがひに二枚の板を載せまする。そしてまたその兩端へ都合四ツの茶碗を載せまする。左樣に致しまして上から上へと幾重にも幾重にも積み重ね、京都清水は五重の塔、春は三月花の中より、ほつくらと浮び上つた景！」

こゝで老爺は立ち上り、兩手をあげ、足を面白くふらつかせながら、

「さてそれから、兩手に花の扇を持ち、三味の調子に合せまして春雨の一くさりを身輕く上手に踊つて見せる、といふ藝

でござります。いや、こりやまつこと嘘のやうな藝ぢやて、ほんとに見て見ねば納得できんぢやろ。明日の朝は大丈夫お目にかけますぢや。ほんに、下手に舞ふて見なされ、額に立つた刀の切先が、ザクリと骨に通つて、こつちのぼんのくぼまで突き抜けるといふものぢや。危ない、危ない！」

老爺はさう言つて、また口を大きく開いて笑つた。しかし聞いてゐたみんなは半信半疑であつた。

「刀の先を額に立てたら、血が出るだらうにな？」と主人が言つた。

「まつこと、始めのうちは肉が切れて血が流れて、骨まで通りました。だが、修業といふは恐ろしいもので、いつか肉も硬うなり骨も强うなつて、血も出んやうになりましたぢや。今ではこの通り、まるで茶碗の糸底のやうにかち〳〵になりましたぢや。といふても、痛さは沁みますぞ。うつかり下手に立てまするると、肉が切れて血が流れ出しますぢや。そこをまたうまく手輕くやります所に、わしの日本一の離れ業がありますのぢや」

十一

「刀藝(かたなげい)が始まりますから、はやく下りていらつしやい」

次の朝、寢床の中で新聞を見てゐると、女中が梯子段の下り口へ顏を出してさう言つた。自分は、寢卷のまゝ、眼鏡を掛けながら階下へ下りて行つた。

老爺も老婆も、最早旅の仕度をして土間へ下りてゐた。老爺は上り框に腰を掛け、尻を上にして草鞋の紐を結んでゐたが、結び終ると怠儀さうに腰を伸して立ち上り、上り框の頭巾を取つてかぶらうとして、私の顏を見つけた。

「お早うございます。昨日はえらい御恩に預かりました。厚う御禮を申し上げます」と力のない嗄枯れた聲で言つた。昨夜の元氣はどこにもなかつた。また昨日霍亂でうめいてゐる時とは違つた感じで、惨めにかよわく見えた。身體も一晩の

うちに更に小さく縮まつたやうに見えた。

老爺はまた言つた。

「昨晩はまたひどう酩酊いたしまして、えらい不調法を申し上げました。平に御容赦下さりませ」

「今日はどつちの方へ?」と、自分はさういふことを訊いて、老爺のそれに答へようとした。

「左様。この町を一まわりいたしまして、それから川について下へ下るといたしませうか。上へ上るより楽な譯ぢやから
のう」

「今日も暑いですから、日中は歩かない方がよござんすよ」と、子供を抱いて上り框に坐つてゐた主婦が言つた。

「はい〳〵、ありがたうございます。しつかり用心いたしますで……それではお禮に一番何か演じませう。婆さん、頼んますぞ」と持つた頭巾を禿げ頭にかぶつた。頭巾をかぶると、顔は急に藝人らしくなつた。

上り框の端に腰を掛けて、ぼんやり表の方を見てゐた老婆は、老爺からさう聲をかけられると、急いで煙管を取り上げて一ぷく吸つた。それから、袋の三味線を取り出し、ボン〳〵と絲の調子を合せ始めた。

土間に立つて見てゐた隣家の子供が、家の人達に知らせるためか大急ぎに外へ走り出して行つた。

老爺は、荷物の傍に置いた刀を袋ごと取つて、からんだ紐を丁寧にほどいた。そして中から黒鞘と朱鞘の大小二本を抜き出した。

「その藝は、けふはお止しなされ」と、老婆は三味の音をちよつと止めて、たしなめるやうに老爺に言つた。

「大丈夫ぢや、心配いらん」老爺はそれを少しむきになつて言つた。

やがて老爺は、短かい方の朱鞘の刀を左手に持つて、中身をサラリと抜き放つた。意外にも青いほど光つてゐる。それを土間の土へザクリと突き刺した。

「ほんとにあれな額の上に立てるでせうか?」と、女中が主人に囁いた。
「どうかなア」と主人も疑つてゐた。大きい方の男の子は、うしろから父親の首に巻きつき、頭だけ出して見てゐた。
老爺は、荷物をひろげ、行李の中から、刀の割りには大き過ぎる鍔を一つ取り出し、土間へ突き刺した刀の柄にはめた。それから二本の大きな扇、両端から赤い房の下つた一寸巾一尺ほどの長さの板を五六枚、茶碗を十個ほどを取り出し、扇と板は腰に、茶碗は重ねて懐に入れ、そこで静かに土間の眞中まで進み、
「さアー、始まり……」と叫んだ。
三味線がボン〳〵鳴り出した。さつき走り出した子供が眞先きに、素はだかの子供等、肌襦袢と腰卷だけのおかみさん達など七八人集つて來た。
老爺はしばらく土間の煤けた天井を見上げてゐたが、
「待つたり、待つたり」と老婆の方へ手をあげて三味線の音を止めさせ「こゝでは、ちと暗うて手が狂ふわい」と言つた。そこで、土間へ刺した刀をグイと抜き取り、切先の土を掌で拭ひながら往來の炎天の中へ出て行つた。
老爺はそこで眼を細めて、青空を遥かに仰いでゐたが、
「ハックシヤン」と一つ大きなくしやみをした。そしてちよつとよろけて「これで宜しい」と言つた。足元がひどく頼りない。
「さア、はじまアリ……」
老婆は軒下まで出て、立つたまゝ三味線を鳴らし始めた。自分達も軒下まで下りて行つた。往來にはいつか二十人ほどの人が集まり、老爺を囲んで輪を造つてゐた。通りすがりの自轉車の人もそれから下りて見物人の中へ加つた。
老爺はうんと両脚を踏ん張り、刀の切先を右手の親指と人指指とで持ち、上半身をうしろへ静かに反らしながらその手

を擧げ始めた。すると、踏ん張つた脚が少しよろけた。老爺は擧げた刀を下し、身を起した。そして周圍の人を見廻して、笑つて見せるやうな顔をした。これからまた刀をそろ〳〵擧げながら身を反らした。そこで刀の先を額へ當てがはうとして、脚がまたふらりとよろけた。今度は少し慌てゝ身を起し、足元の地に印してゐる自分の小さな黒い影を見下してゐた。汗が顳顬から頬を傳つてつるりと流れた。

やがて老爺は顔をあげ、また周圍の見物人を見廻した。今度は何の表情もない土色の顔と、妙に白く光る眼とが見物人の顔をかすめた。と、見物人の表情は、陽がかげつて行くやうに暗くなつて行つた。

老爺は三度、刀を擧げ、身を反らし始めた。今度は今までも倍もの時間を費やし、力を入れながら靜かに〳〵それをやつた。そして口をすぼめ、細い眼を三角にして眩しさうに上を睨みながら、稍々しばらく、刀と額と身體との中心を取つてゐたが、やがて刀の切先を額の穴の上へそーつと放した。と、刀はキラリと一つ鋭どく光つて廻轉した。一番前に出て見てゐた五つばかりの男の兒が、叫び出しさうになつてその母親らしい女の人の背後へ隱れてしまつた。

「危ない、危ない！」と老爺は急いで切先を持つて「下手に持つたら指がなうなる」と言つて笑つた。泣くやうな笑ひ聲であつた。

老爺はまたも身を起し、生唾を呑みながら額の凹みを指の腹で撫でた。さうして再び暗く險しい表情を周圍の人々へ映した。人々は變に動搖した。老爺の額から頬から胸へ、汗は玉になつて流れてゐた。

いつか老婆は、三味の音と少しも合はない聲で、淨瑠璃に似た節の唄を唄ひ出してゐた。唄ふといふよりは寧ろ泣きわめいてゐるやうな聲であつた。

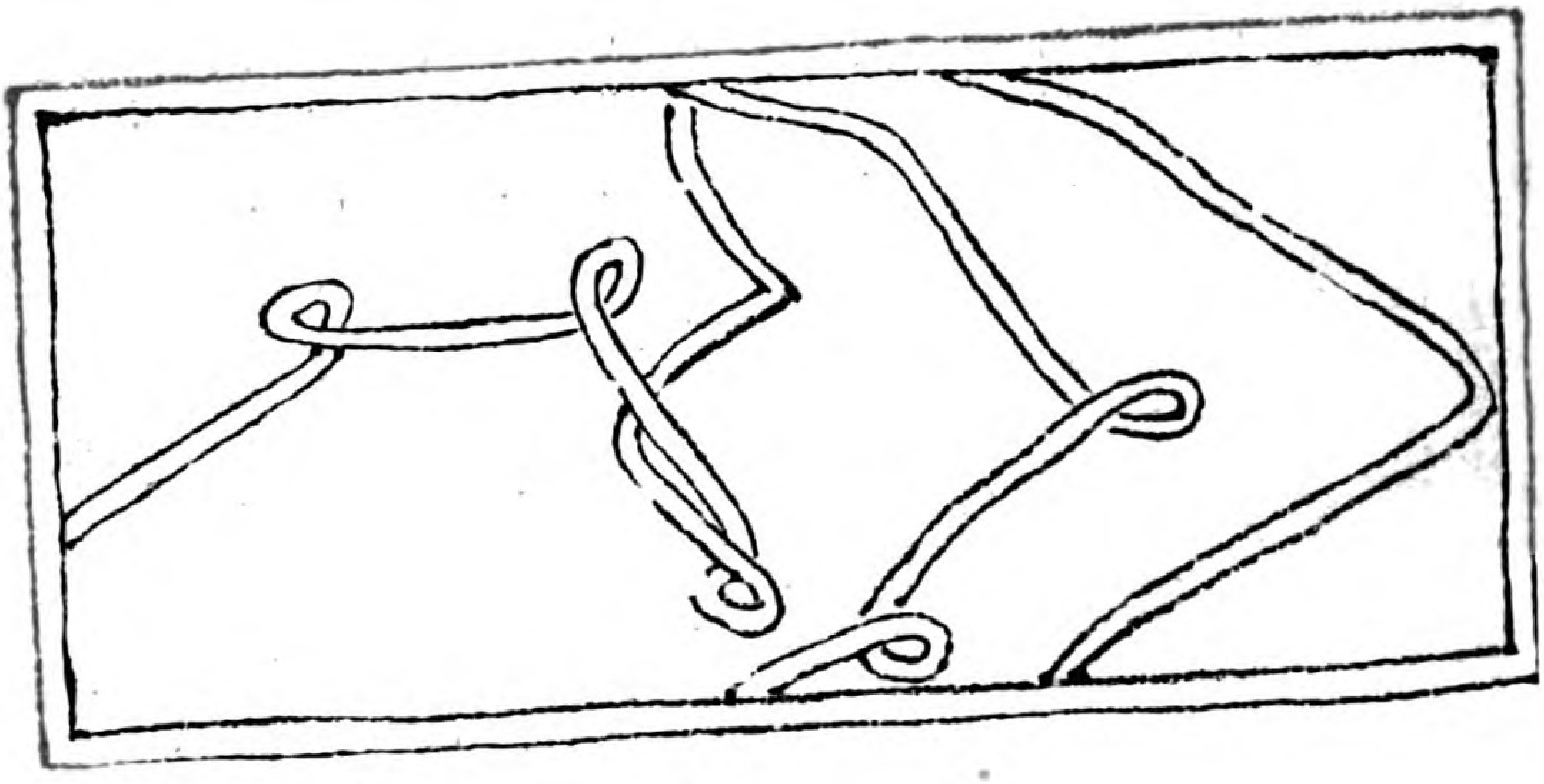
「京都清水は五重の塔、春は三月花の中より…………」

老爺はもう一度反りかへりながら、飛び出した咽喉笛を動かし、息切れた顫え聲でさう口上を述べた。そして一段と高

く擧げた刀の切先をちりくと額の上に下し始めた。刀の片側が眞夏の太陽の光りを受けて、カーッと燃え立つてゐる。見ると、變な恰好にのばした、刀を持たない方の手の指先が、痙攣を起しかけたもののやうに細かく鋭どく顫へ出してゐる………。

自分はそこまでしか見てゐなかつた。

その日の午後、自分は山形の山奥にある溫泉へ行くつもりで宿を發つた。しかしその途中、海岸の妻の所に立ち寄りたい氣持が頻りに湧いた。（完）



兒病む

——子供に書き遺す一節——

近松秋江

私の母、お前達のお祖母さんになる人が、生前よく、子を持つて知る親の恩といふことをいつてゐた。それは、古い淨瑠璃の中にある文句で、お祖母さんは、それを自分の經驗と引き合はして、しみ〴〵とさう感じたのであつたらうと思ふ。

私は、自分が子供の時から、それを幾度となく聞かされてゐたが、その時分には、たゞさういふものかと思つたゞけであつたが、自分がはじめてお前達二人の親になつて、なるほどお祖母さんのいはれたとほりだと、犇々と思ひあたる。

子を育てる親の勞苦は、いづれの親も同じであらうと思ふが、私達もお前たちの爲には隨分骨を折つてゐる。……………もし仕合にして、お前達が二十ほどにもなり、私も無事に生存へてゐたならば、その時、お前たちを育てるために、私達が、どんなに苦勞をしたかといふことを、十分に話して、恩に着せてやらうと思ふ

が、この頃には、私は、もうとうの昔、地の下に入つてしまつてゐるかも知れない。そしたら、お前達を大きくするために、どれほど私達が、苦勞したかといふことを話して聞かすことが出來ないから、それで、こゝに、お前達——百合子が疫痢を患つた時分のことを書き誌して遺して置くのだ。

苦勞した、苦勞したといつて、恩に着せるやうにいふのは、決して、その爲にお前達から、何か、その代りに恩返へしをしてもらひたいといふのではない。身體髮膚これを父母に享く敢て毀傷せざるは孝の始なりと、古語にあるとほり、お前達が、此の後も永く健康でありさへすれば、それで十分私達に酬ゐることになるのだ。

そもそも此の世に生まれて來て、親となり子となる因緣こそ、不思議な契りはない。なにゆゑに私はお前達を愛するのか、どう考へても理由はない。たゞ目的なしに愛するのだ。愛といふものに目的のないことは、藝術を鑑賞するに目的のないのと同じことだ。私は、お前達が今に大きくなつて私に樂をさせてくれるのを待つてゐるとか、老後を扶養してもらふのを目的としてゐるとかいふ考は少しもない。

今、百合子はわづかに五つ、道子は三つである。私とは、まるで、親と子といふよりも祖父と孫とほどの年齡の相違である。そんなことをあてにして居られるものではない。それにも係はらず、たゞたゞ私は、お前達の大きくなるのを一日千秋の思ひで樂んでゐる。いや、大きくなるのを樂んでゐるばかりではない。現在お前達の存在そのことを樂んでゐる。しかし、その樂みは、前にもいふとほり、如何なる目的を有する樂みではない。お前達の成長そのことが私には限りない樂みなのである。

そして、私のこの樂みは、現在私自身の生存の目的の全部を成してゐるといつてもいゝのだ。即ちお前達を愛することには少しの目的はないが、お前達を愛することは、私が今からして生きてゐる唯一の目的なのだ。無目的の愛そのことが私目的なのだ。

私は、飾るところなく、お前達二人を愛することに依つて幸福を感じてゐる。その幸福の感じたるや、あまりに幸福であるがゆゑに、或は傷けられはせぬか、毀たれはせぬかといふ不安、危惧の念を常に伴つてゐる。この幸福の感じが果して何時まで圓滿に續くものかといふ恐れが附隨してゐる。いひかへれば、お前達の一人か、或は二人ともに、いつかは失はれはせぬかといふ憂懼である。それは、お前達の存在によつて意識する私自身の幸福の感じを、絶えず脅かしてゐるところのものである。

「これほど、何かにつけて、氣をつけてゐるのだから、ほかのことは大抵恐いことはないつもりだが、たゞ疫痢だけは恐い。」

私は、お前達を愛撫しながら、時々、さういふ歎聲を洩してゐた。

百合子は五つ。いよ〳〵疫痢の危險區域の年齡になつた、とり分けて今年の夏など、私は常にその病氣に對して、防禦心を緊張さしてゐた。勿論、生の果物などは常から決して與へなかつた。新聞には六月頃から、市の內外に、疫痢で死亡する子供の多いことを報じて、幼い子供を持つ世の親達を警戒してゐた。

近い處に住んでゐる知人のエヌ氏が、やつぱり五歳になる女兒を、そのために殆ど一晝夜も立たぬ間に失つたといふことを聞いて私の心は異常に怖えてゐた。かゝりつけの醫師細田氏からも時々注意せられてゐた。そして注意すべきことは何から何まで十分に注意してゐるつもりであつた。

長い間待ち越してゐた書き物が、その日の午前十時頃に、やつと、ひと仕きり出來上つたので、それを、雜誌社から來て待つてゐた使者に渡して、私は、はじめて重荷をおろしたやうな心地がした。

これはもう二月頃から絶えず頭に引かゝつてゐた原稿で、それが七月の今日まで延び〳〵になつてゐたのであつた。その方の仕事を形付けてしまはねば、ほかの事には手も足も出せないやうな、囚はれを心に感じてゐた。それで七月の中旬に、仕事を形付けるために箱根に五六日行つてゐたのであるが、そこでも半分しか纏らず、廿一日には、もう、ぎり〳〵の締切りが迫つたので仕殘した原稿を持つて歸つた。すると、市川に入つたばかりの炎暑は、ジリ〳〵蒸すやうに照り付けて、氣象臺の報告によると、七月中で九十五度といふ暑熱は三四十年來にないことだといふほどであつた。私は、原稿のある處で、一ふつと妙案に行き詰つてしまつたのと、九十五度の炎熱のために二三日の間机に凭つたまゝ懊悩してゐた。それが今日、どうなりからなり形を付けたのであるからその悦びや知るべしである。

そして、その仕事さへ一と區切り形付けば、早速子供達を連れて、今年の夏は鹽原へ行くつもりにしてゐた。向うの宿も六月の末から約束してあるし、はじめは七月の十日頃に行くつもりであつたのが、たら〳〵自分の仕事のために今日まで延びたのであつた。

「さあ〳〵、仕事も濟んだ。明日といつても支度が調はないし、それに明日は芥川の葬式にも行きたい。明後日の廿八日に行くことにしよう。……これ、子供を二人とも連れていつて、いつもの橋の向ふの理髪屋で、髪々を剃つて來させ。お前とふみと二人でつれてゆけ。」

私は勇みたつやうにして妻に命じた。

妻は、一番若い女中のふみに向つて、

「一人で連れてゆけるだらう。」

といつてゐたが、ふみも、

「わたし一人でゆけます。」

といつて、ふみは、三つになる道子の方を背負ひ、上の百合子の方を歩かして、三四丁先きの床屋へ行つた。そして間もなく、頭を奇麗にして戻つて來て、奥の六疊に、仕事のおはつた後の疲勞で、また、ぐつたりとなつて横に寢そべつたまゝ、頭の朦朧としてゐた私のところへ、縁の方から廻はつて、奇麗になつた頭を見せに來た。

「おゝ、えらい早かつたな。おゝ道つちやんもか。……どうだ、ふみ、二人とも泣かなかつたか。」

「えゝ、總の方は、お姉ちやんの方は、すこし泣きさうにいつてゐましたけれど。」

「さうか、よし〳〵。」

私は、さうして子供の顏さへ見れば、疲れた頭や胸も、少しは蘇生を覺えたのだつた。ことに此の頃、大きい方の子の頭髮が黑くなつたのが眼についてきた。はじめ赤ン坊の時分はとにかく、誕生過ぎるくらゐになつても、毛が前頭部の方だけ、ひどく薄かつたりするので、私は戯れに、熊谷の頭のやうだと笑つてゐた。髮の色も赤かつた。それが此の頃では房房と伸びて、光澤も生じた。剃つたあとが青かつた。

「さあ、今日はこれから、ふみとお姉ちやんとお父ちやんとで、三越まで買ひ物にいつて來ようかな。」

などと、私は彈んだやうにいつてゐたが、そのうちに時間が立つのと、やつぱり、チリ〳〵照り付けて暑くなつて來たのとで、躊躇してゐた。そして、百合子は元氣に飛びまはつてゐながらも、何となく顏の色少しく惡かつた。それのみならず、小さい、メレンスの子供蒲團をふみに取出さして、寢るのだといつて、その上に腹這ひになつてゐたりした。しかし子供蒲團の上に寢そべることは、お人形さんを寢かすのだといつて、しとりで人形と一所に横になることも、めづらしくないので格別心にも掛けなかつたが、子供のことでは、何かにつけて、事を惡い方へ、大事に判斷しがちな私は、

「ふみ、お姉ちやんは、今日蒲團の上によく腹這ひになつてゐるぢやないか。」

「えゝ、眠いねむいといつてゐます。」

「そして、今月は、何だかよく、むづかるね。」

「え丶、何だか泣いてばかりゐるんだよ。」茨城縣の山の中から五月の初に出て來た彼女は、まるで落語家が山出しの女中の眞似するとほりの言葉であつた。

「どうもさうのやうだ。これでは、うつかり外に連れて行かれたい。」私は大事をとつた。

午后からは鬼に角自分だけは市中の方に用事があるのと、明後日鹽原へ行くには少々買ひ物もあるので、午飯(ひる)を濟まして出て行くつもりで、子供等と食卓を共にして飯にした。すると、近來傍眼(はため)には食慾の好くたつてゐた百合子が、めづらしく、まだ初の一膳をやつと食べるか、食べぬに、茶碗と箸をそこに置いて、ぐづ〳〵いひながらそのまゝ後(うしろ)に寢轉んでしまつた。

私は餉臺に對坐して、それを見たから、

「おやッ」といつた。

百合子に附いてゐたふみも、同時に、

「どうしたんでせう。」と怪んだ。

「こいつは、大變なことになるかも知れぬぞ。」

と、私は、いきなり自分の茶碗と箸とを、がちやりと下に置いて、そつちへ廻つていつて、百合子の樣子を見た。顏色が急に、今までよりも尙ほ蒼くなつて、唇の色が淡紫に變つてゐる。

「おい、すぐ、お前とふみと二人で下(した)の細田さんのところへ連れていつて診てもらへ。」

私は、かねて、まさかの時の醫者の注意や、新聞の家庭衛生欄の記事を讀んで心得てゐる知識から、それが大事の前兆ではあるまいかと危んだ。すると、愚かな妻は、つまらぬ騷ぎをするやうに笑つてゐて、容易に起たうとしない。

「馬鹿！横着者めが。さつさと醫者につれてゆかないか。」

それで妻は、自分で百合子を負つてふみと一所に醫者にいつた。けれども私は安心がならず、後から自分もいつてみた。醫者は、熱もないから下剤を出して置く。食物は粥と牛乳とを――やつてくれといつた。

歸りがけに、熱もないなら、夕方湯に入れても差支へないかと訊くと、差支へないといふので、先づ大したこともないと思つて、私は安心した。

子供は、先刻、一時さつと蒼くなつた顔の色もいくらか回復して、素人眼にも格別平常と變りはなかつた。それで私は安心して外に出ていつた。出がけに、醫者が構はぬといふから、二人を風呂に連れて行くやうに、いひ置いて出ていつた。今の家を新築してから別棟で小さく建てる豫定であつた浴室が、今すこしのところで使用出來なかつた。

臨原へ連れて行くには、一とほり入用の品は調つてゐたが、道子の穿く靴がなかつた。まだやつと歩き出した時分の赤い羅紗の靴の古くなつたのしかなかつたので、百合子が先から穿いてゐた赤皮の靴がもう小さくなつたので、それを道子にゆづり、百合子に新しいのを一つ買つてもらひたいと、妻が玄關に出て來て誂へた。

「よし／＼買つて來てやるぞ。」と、いひのこして私は出ていつた。

丸ビルの雜誌社に二ケ處ばかり寄つて用事を果たし、それから銀座の方へ廻つて、松屋で少々買ひものをして、百合子の赤皮の靴と一所に、包み紙に包んだ三四箇の買ひものをぶら下げて夕方五時頃に私は歸宅した。

そして玄關から上るのが、もどかしく、いつもするとほりに、すぐ庭から縁側の方へ廻つて、「おい、お姉ちやんはどうした？」と、何より先きにいはれた。そして庭から眼で百合子の姿をさがした。妻が出て來て、

「元氣です。變りはありません」—

「通じはあつたか。」
「ありました。澤山ありました。」
「さうか。それはよかつた。」
さういつてゐるところへ二人の子供がいつものやうにぞろ／＼出て來た。
「お父ちやん、おみやは。」といつて、傍に寄つて來た。
さういふ百合子の顏は先つきの若い顏色など少しも見えなかつた。今風呂から歸つたばかりのところであつた。とにかく私は安心した。
用事の都合で鹽原ゆきは、いよ／＼二十九日に定めた。
翌日も朝は粥と鰹節とで御飯をたべた。が午少し前になつて、妻は、
「百合ちやんは、今朝も亦た昨日のやうなものが澤山下つた。」といつた。
私は、それを聞いて、又頸をかしげた。
「又下つた。…………昨日の下剤が利いたにしては少しく時間があり過ぎるな。とにかく、もう一度醫者にいつて訊いてみよう。………ふみお前いつて、又、今朝下りましたが、どんなものでせうといつて訊いて來てくれ。」そういつて、女中を出してやつたが、又、ふみを遣つたのでは安心出來ず、又あとから自分で出掛けた。そして、細田氏に相談すると、たゞ話を聞いたゞけではよく分りませんから、連れて來た方がいゝでせうといふので、私は、ふみを返して、妻に連れて來るやうに命じた。
それから體温器を挿んでみると、細田氏は、
「うゝ、ある／＼。三十七度三分ある。これぢや、あんまり動かさない方がいゝです。そうつと寢かして、なるたけ安靜

にしておかないといけません。一度浣腸をしませう。そして、午後に行つて腸を洗ひませう。」
それからその場で浣腸だけしてくれた。それを妻が負つて歸ると、間もなく又少し通じがあつたが、それだけでは滿足出來なかつた。
私はその日の午後三時までに、芥川氏告別式に參列したいと思つてゐたので、その前に細田醫師の來てくれるのを待つてゐると、一時頃になつて來てくれた。百合子の腸洗滌はもう度々家でも經驗があるので、私達は女中を手傳はして早速その用意にとりかゝつた。
細田醫師が浣腸器のゴム管をとつて、肛門に挿入すると、私は、分量のもり目のあるガラスの瓶のところを持つてゐた。妻と、ふみの姉のまつとは百合子の手を握つたり、胸を押さへて、いろ／＼に賺かしてゐた。ヒステリイ質の臆病な百合子は、魂切るやうな聲を出して泣きつゞけた。が、そんなことには構はず醫者は幾回となく洗滌藥と微溫湯とを注いだ。私は、それを高く持ち上げたり、又低く下げたりした。不淨物の溶解したのが、瀬切つて迸り出た。私はそれをバケツに投下した。
そして洗腸が濟むと、子供は好い心地になつたもののやうに、すや／＼眠に陷つた。
細田氏は、私が、今日これから芥川氏の告別式に出掛けることを知つてゐるので、
「近松さん、安心してお出掛けなさい。浣腸もすんだから、これで大丈夫ですよ。」といつてくれた。
私は醫者を送り出して置くとすぐ俥に乘つて郊外の停車場まで驅付けた。手先を消毒したレゾールの臭ひがもの／＼しく鼻を打つた。何かしら疫病らしい豫感に襲はれた。
そして東中野の停車場で、これも芥川氏の告別式に往くところのエヌ氏に出會つた。エヌ氏は丁度二ケ月ばかり前に疫痢で愛兒の一人を失つたので、私は電車の中で、レゾールの臭氣のする自分の手先をエヌ氏の鼻の前に一寸持つていつ

て、

「このとほり今洗腸を手傳つて來たばかりのところです。」といつて、子供の病狀をはなした。

「熱が下つても決して安心出來ませんよ。私のうちの子供なんか、翌日になつて熱が下つたから、あゝ、これならもう大丈夫だといつてゐて、又急に惡くなつたんですから。」

「あゝさうですか。」と、いつてゐたが、私は、自分の欲目に內の子供はまさか疫痢ではあるまいと思つてゐた。

告別式には一寸時間が遲くなつたと思つたので、エヌ氏をさそつて、萬世橋から自動車で谷中の齋場にいつた。丁度いい處にいつた。

一時間ばかりで式が濟むと、歸りは鶯谷驛から池袋の方を廻はつて、少しも早く自宅に歸つてみたいと思つてゐたのであつたが、いつも、よく、こんな會合のくづれで一所になる、中村氏と德田氏とに誘はれて、一寸のつもりで、森川町の德田氏のところへ自動車で立寄つた。そこで暫く休息して西瓜を御馳走になつたりして、私はいゝ加減な時分に歸宅したかつたのだが、德田氏が何處かへ夕飯を食べにいかうぢやないかといふのに誘はれ、そこから又上野の三はしまで出掛けて、鳥鍋で三人で夕飯の馳走になつた。奇麗な浴室で風呂に入つたりして、すつかり好い心地になつてしまつた。時に子供のことも氣になつたが、浣腸もしてあるし、大した熱があるといふ譯でもないのだから安心してゐた。

それから又自動車で、中村氏とは牛込の矢來町で乘り別れて、自分ひとり新宿から又電車に乘つて、やがて自宅へ歸り着いたのは、もう夜の八時半を過ぎてゐたが、玄關で、いきなり、

「おい、子供はどうだ?」と訊くと、

そこへ立ち出てた妻が、

「大變好いです。」といふ。

私は、さうかといつて、先づ安心しながら、急いで洋服を脱いで、直ちに井戸端にいつて、冷水で身體の汗を拭いて、素つ裸體で蚊帳の中に入つて來た。

すると、二人の子供はまだ眼を覺ましてゐて、女中のまつと何か話してゐるところであつた。

「熱は?」と妻にきくと、

「熱は六度八分です。」

「ほう、上等だな。……どれ脈は?」といひつゝ私は、そつと百合子の脈を握つてみると、至つて穏かである。

「よし／＼、上々吉。これなら、明後日は、いよ／＼鹽原に行ける。」私は子供のやうにいつて悦んだ。私はそれから安心して、奥の六疊に設けた自分の寢床にいつて、就眠した。

ぐつすり眠つて、ふと子供の泣く聲で眼が覺めた。廊下を一つ隔てた八疊に母親と二人の子供が一つ蚊帳に寢てゐるのであるが、その泣き聲は、眠りながら聞へたのであつても、どうも小さい方ではないらしかつたので、私は、枕の上で耳を澄ますと、母親が何かしてゐるらしい。私は、いきなり、がばと跳ね起きて出ていつた。

「どうしたんだ?」廊下を急ぎながら聲を掛けた。

「お姉ちやんが吐いたんです。」

妻はさういひながら、百合子を敷蒲團の隅に置いて白い敷布を捲つてゐるところである。

「どんた物を吐いた?」私は、あの病氣だと、珈琲のやうな色をしたものを吐くと聞いてゐた。

「水のやうたものばかりです。」

「どれ。」といつて、蚊帳の中に入つていつて、吐物に濡れた敷布を見ると、なるほど肉眼には水のやうにたゞ濕つてゐる

ばかりである。

私は、しかし、それでは少しも安心出來なかつた。かねて恐怖してゐた、最も恐るべき運命が今いよ〱愛兒の上に襲ひかゝつて來たもののゝやうに思はれた。

「いよ〱大變なことになつてしまつた。」私は歎息するやうにいひながら、そこから又中廊下を隔てゝ茶の室の六疊に姉妹で寢てゐる、まつとふみを起した。

「おい、まつ、お前夜半に氣の毒だがなあ、ふみと二人で細川さんに行つて來てくれ。只今百合子が吐いたから、夜分に實に恐れ入りますが一寸御苦勞ねがひたいつて。行つて來てくれ。」

さういつて、[illegible]間の壁に掛つた時計を見ると、二時である。

「惡い時刻だなあ。………百合子を奪られてしまふかもしれぬ。」私は泣き聲になつて、いひながら、何度となく子供の額に手をあてゝ見たり、手首を握つて脈をみたりした。そして一刻千秋の思ひで、細田氏の來てくれるのを待つてゐた。

やがて女中が歸つて來て、たゞ今行きますといふ返事をもたらした。間もなく細田氏は夜中をも厭はず來てくれた。

細田氏は半分はづした蚊帳の傍にたゝずんで、私から、昨夜來の容態をひとゝほり聽取した上で、

「どんなものを吐きました。」といつて、傍に捲つて置いた白い敷布を又擴げさして、水樣のものを吐いて濕つてゐるところをじつと見た。

「これだけですね。………熱はさうないやうだ。」と、檢溫器を挿んでみたが、

「熱はやつぱり三十七度三分だ。脈が少し早い。………とにかく注射をしておきませう。」といつて、アドレナリン、アンナカ、カンフルの強心消毒劑を注射した。

さうしてゐる間に子供はまた枕に就いて、すや〱眠りはじめた。

「これで、又、きつと、よく眠るでせう。なるたけ、靜と寢かすがいゝです。」といつて、細田醫師は歸つていつた。
「どうも夜半に御苦勞さまでした。」と、私と妻は玄關まで送り出した。

その夜が明けて翌日は、存外子供は平穩であつた。
細田氏は午前中にも又來診してくれた。格別異狀はなかつた。脈も體溫も夜半と變りはなかつた。たゞ子供は眠りがちであつた。
「眠るのは構ひません。」細田氏は、「また午後に來て診ます。」といつて歸つた。

とにかく、見たところ病勢はさう劇烈といふ方ではないし、吐いたといつても、水樣のものを一度吐いたきりであつたから、私は安心してゐた。あの病氣ならば、もつと急速に襲來する筈である。それに注射もしてあるのだから、陽氣あたりの一時的の緩慢な胃腸カタルくらゐのものであらう。それに半歳以上も氣にかゝつてゐた自分の仕事の一つが一昨日不滿足ながらも、雜誌に一度の掲載分だけ形付いたので、次は、今度こそ期日に追掛けられないやうに出來すとしても、まだ餘日があるし、それに、今朝ほど校正刷りを持つて來たところを見ると、ある一ケ處のほかは、さう出來の惡いものでもない。この先は十分に構想を練つておいて早く纏めたいものだ。………

もう長い間工事にかゝつてゐた風呂場がやつと昨日までに出來上つたので、水道仕掛けのタンクだけまだ濟んでゐないが、水はバケツで汲み込んでもいゝから、今晩から久しぶりに自家の風呂に入りたいものだといつて、その方の支度を女中にいひつけておいた。私は何となく、久しぶりに心に一寸餘裕が出來たやうな氣持になつて、醫者が歸つたあとは、サル股と、半襦袢一つの裸體になつて、手拭でうしろ鉢卷といふ元氣で、物置きの道具箱から小さい鋸を持ち出して來て、庭の一隅に、ひどく繁茂して來た業平竹の一二本を挽き切つて、一々枝を拂ひ、節を平にし、湯殿に手拭掛けをこしらへたり、去年の暮にやつと住めるやうに出來上つてから、そこら中出たらめの處に釘など打たぬやうにしてゐたので、ど

うしてもこゝには一つ折れ釘がほしいといふ處に釘を打つたりしてゐた。さうしながらも、時々子供の傍に戻つて來て、すや〳〵眠つてゐる顏をそうつと覗き込んでみたり、手に觸つてみたりしてゐた。どうも蝿が馬鹿に多くつていけないので、ふみを寢てゐる枕頭に附けておいた。

それから又、やゝ暫く私は風呂場のまはり立ち働いて今度病室に來て見ると、子供は眠を覺ましてゐて、何か知らぐづ〳〵いつて、氣だるさうに、身體をあつち此方に轉がしてゐる。

「どうしたんだ?」と、ふみに訊くと、

「ぽん〳〵が痛いといつてゐるの。」

私はこれを聞いて又更らに胸を衝かれたやうな心地がした。

「なに、ぽん〳〵痛いといふ?」

「先刻からぽん〳〵が痛いといつてゐるの。」

見ると、先刻まで平常とあんまり變らなかつた顏が又蒼白になつて、口のまはりが血氣を失ひ、唇は淡紫色に變つてゐる。私は、一昨日から今まで、さうではあるまいかと、疑ひつゝも、まさかと思つてゐた病症がどうやら眞性の疫痢に相違ないといふ確信が生じて來た。とにかく打つちやつておいては可けない。

「ふみ、直ぐ細川さんにいつてくれ。……………どうもぽん〳〵が痛むといつて、急に顏の色が惡くなつたつて。」

私は臺處にゐる妻や女中に聲をかけた。

「おい〳〵、又お姉ちやんが惡いやうだ。ちえツ、そんな洗濯物などどうでもいゝ。子供が一人死んでみろ。洗濯も飯炊きもあつたものぢやない。」と、追ひ立てるやうにいつた。

ふみを醫者に遣つてをいても、私はそのまゝ靜としてはゐられなかつた。暑い日の照るところを、私は後から追掛け

た。と、ふみはもう戻つてくるところであつた。

「細田さんは何といつた。」

「すぐ後からまゐりますといひました。」

細田氏はすぐ來てくれた。子供は、いかにも苦しさうに絶えず寢返りを打つて、ぐづ〳〵泣いてゐる。

細田氏はじつと脈を取つてゐたが、暗い顔をして、「脈が隨分早い。」といつて、それから又聽診器を心臟部にあてたり、腹部に手をやつたりして暫く注意深く診察してゐた。

「どうでせう。貴下に診ていたゞいてゐれば澤山な譯ですが、誰れか他の人に診てもらひませうか。」

「さうですなあ……………」細田氏は、しばらく考込んだ揚句、「私の知つた醫者といへば瀬川にでも診てもらふんだが……………貴下の牛込の醫者はどうです。」

私は、心の中で細田氏がさういつてくれるのを待つてゐた。牛込の手島氏は、一昨々年の九月、百合子が生後やうやう十一ケ月になつた時母親が重患に罹つて、不意に母乳に離れた時手島氏の病室に入院させて、食餌に馴らしてもらつて以來度々診てもらつてゐた關係があり、つい一と月ばかり前に久しぶりに一寸自分で寄つた時にも、暫く見ぬ間に二人とも大分大きくなつたでせう。ぜひ一度連れて來て見せてもらひたいといつてゐたのであつた。私は、その後の自分の丹精を自慢ながらに、ぜひ連れていつて見てもらひたいと思つてゐた。いつも手島氏で目方にかけて見ると、表に掲げある幼兒の平均重量よりは二人とも五六百目から七百目くらゐは少なかつた。どうせ父親が十一貫目をあまり出ないのであるから、さう肥つた子供でありやうもないが、しかし、出來るだけ痩せた子供にさせたくなかつた。すると一昨日、今度の病氣で、はじめて細田氏に連れていつた時量つてみると、滿四歳に三ケ月足りない子供にしては、滿四歳の三貫四百目に丁度四百目足りないだけであつた。この子供の體質にしてはめづらしく、平均重量に達したといつて悦んでゐた目方が病の

發端であつた。

「百合子もやつと此の頃丈夫になつた。」

と、先達つて中妻といひ合つてゐた。それで、今度は、

「もう、あんなことをいふものぢやありませんなあ。」と後悔してゐるところであつた。

で、私は即坐に細田氏に同意した。

「手島さんなら、すぐ來てくれます。」

「それを一つ呼んでみるか。」細田氏は考へ深さうにいつた。

子供は、やつぱり苦しさうに頻繁に寢轉びを打ちつゞけてゐた。私と細田氏とは話を中途にしては、こちらを向いて脈を握つてみた。私にはどうもよく脈が分らなかつた。

「よく分りませんなあ。」

細田氏は、それには答へようとせず、じつと頭を澄まして脈を抑へてゐた。

「うゝ、やつぱり百五十くらゐある。……あれから吐かないですか？」

「えゝ、吐くのは昨夜きりです。」

「とにかく一本注射しておきませう。」

といつて、又アドレナリン、アンナカ、カンフルを一本注射した。暫く暴れてゐた子供は、暴れ疲れたゝめか、少しすやすやとなりかけた。

「こゝでは、話聲が耳についていけないから。」と細田氏はいつて、私達は隣室に坐蒲團を移して、そこで相談をした。

「どうでせう？……ぽん／＼が痛いといふのですから、まだ腸の中に惡い物が澤山あるにちがひないですが、もう一ぺ

ん腸を洗ふことは可けないでせうか。」

「さあ、それを考へてゐるんだが。洗ひたいのはぜひ洗ひたいが、その爲にひどく泣いて、此の上にまた心臟を疲らすのが危險だから、どうしたものかと思つて……」

「なるほど……」

「心臟を冒かされると、それつきりだから……手島さん來てくれるだらうか？」

「手島さんは、さういひさへすれば來てくれるです。つい先日も久しく見ないから、ぜひ一度見たいといつてゐたくらゐです。そして急の時には、電話を掛けさへすればいゝ。わざ〳〵迎へに來たりする時間を爭ふやうな時には、そんなことをして居られないといつてゐましたから、お宅の電話を拜借して電話を掛けませう。」

それから女中に命じて細田氏の宅に急がした。

「奥さんにさういつて、牛込の手島さんへ電話をかけてもらへ。東中野の私の家といへば分るから。」

細田氏は始終落着いた態度で考へ深さうにしてゐたが、獨言のやうにいつた。

「手島さんが都合よくこの一時間か二時間以內に來てくれゝばいゝが、それより遲くなると、このまゝにして手島さんの來るのを待つてゐられない。一つ思切つて別の注射をやつてみるかな。」

「それはどういふ注射ですか。」

「やつぱり同じ注射ですが、又少しく違ふ。そいつをやると大變に効果があるんだが、針が今までのよりかずつと太くなつて、時間が長くかゝるから、ひどく泣いて疲れやしないかと思つて、それも考へなけりやならないし……」

「はあ。……きつと泣くですなあ。……泣くのは構ひませんが、その爲めに、心臟を疲らしてはなりませんなあ。」

「實に痛し痒しだ。腸も洗ひたいし太い注射もしたいんだが……」

細田氏も考へに餘つてゐるやうにいふのであつた。

そこへ、待つてゐた女中が歸つて來た。

「手島さん居つたか。」

「手島さんは、葉山へおいでになつて、お留守です。明日の朝でなければお歸りになりません。」平素から、女中としての用事は滑りなく果すかはりに、何につけても膠も艶もない口の利きようをする一番年長の女中のまつは庭の方の緣側からさういつたきりで、すぐ又庭から裏の勝手口の方に廻はつていつたきりであつた。

私と細田氏とは、互に失望したやうな顏をして、顏と顏とを見合はしただけであつた。

細田氏は、女中の向うにいつたのに、何か追ひかけて、訊かうとしたが駄目であつた。

「明日になつて來たんぢや駄目だ。今日ももう晩になつては駄目だ。今一時といふところが大事のところだから。」さうして思案に餘つた風であつたが、

「思ひ切つて太い注射をしよう……」

といつたが、また「隨分痛いからなあ。」と、ひとりで言ひ返して、心は、とつおいつしてゐた。

私は此の際何ともいひやうがなかつた。たゞ醫師に一任してゐるのほかはなかつた。

「やりませう。……それぢや私一寸自家へ歸つて藥をこしらへて來るから。……三十分か四十分その爲に時間がとれるけれど、そのくらゐは遲れても、さう急に心臟を冒すやうなこともあるまい。……それと腦に來るといけないんだが、大抵大丈夫だらう。……それから氷で心臟のところをも冷やすやうにしておいて下さい。」

「えゝ、さうしませう。……腦を冒すといふと、どんな兆候を見せますか。」

私は怖えながら訊いた。

「吐くのです。」

「あゝさうですか。」

細田氏は注射藥を用意する爲めに歸つていつた。

その間に私は妻や女中を指圖して氷枕のほかに頭を冷やす道具を藥品店に取りに走らしたり、小さい氷袋で、小さい心臟部を冷やす方法をとつたりしてゐた。

四十分ばかりして細田氏は藥品を注射する機械を自分で携へて俥でやつて來た。

「どうです？　樣子は。變りはありませんか。」

「眠つてばかり居ります。」

「さうつと寢かしておいて下さい。……新しく調劑して來たのでまだ一寸熱いから少し冷まさなけや。」といつて、細田氏は團扇を取つて、目もりをした大きなガラス瓶を、はた／＼煽いでゐた。

そして、それが適度に冷却したところで、

「さあ、どうかな。」と病兒の方を覗いてみながら、「痛いからさぞ暴れるだらうが、やりませう。その代りに、こいつをうまくやらしたら必ず効く。葡萄糖は、とても具合の如いものですから。」

といつて、纖明な、小さいガラス管樣の瓶を取出して、その細い口のところを、こつ／＼と毀して、透明な高價藥らしい液體を、件の目もりをしたフラスコの瓶の中にたら／＼と滴らした。

「さあ、皆さんに手傳つていただかねばならぬ。誰れか看護婦の代りに、こゝを抑へてもらふ人が一人ほしい。」

「ぢや、まつお前それをやんなさい。どんなことですか。」

「これぢやあんた、こゝを強く抑へてゐて下さい。強く。」と、細田氏は自分の持つてゐたあるガラスの管の口を、まつの指先にゆづつた。

「近松さんとお母さんは百合ちやんの身體をかゝへるやうにして、何とかかといつて賺かしてゐて下さい。きつと身體を動かすだらうから。」

「おい、ふみお前も來て、この手を持つてをれ。……姉や、お前は道子の守りをしてゐるんだよ。こちらに來なくつていいから。」私は怒鳴つた。

細田氏は脱脂綿にアルコールを浸して、恐ろしく太い針を消毒してゐた。

「見てゐるのが厭で……」妻は、病兒の胴のところを靜つと抑へながらいつた。

子供はもう度々の經驗で、今に又きつと痛いことをされるといふことを知つてゐるので、うと〳〵としてゐた眼が覺めると、つんと鼻を突いて來るアルコールの臭とともに泣き出した。

細田氏は、子供の左脚の太股のところをアルコールを含んだ脱脂綿で清潔に拭いた。

「さあ、いゝですか、よくそこを抑へてゐて下さい。」と、低い、力のこもつた聲でいふと同時に、妻楊枝ほどもある太さの部分まで、ぐさりと注射針を子供の肉に刺し入れた。

病兒は、

「ひやあ！」と、魂切るやうな悲鳴を揚げて苦んだ。

「かうすると、さい〳〵か、ぢき癒るんだからねえ。すぐ濟むよ。」母親は爲方なしに氣安めをいつてゐたが、痛さは大人にも察しられた。

細田氏は左手に注射針を持ちながら、右手で一生懸命にゴムの壓搾球を握つてゐた。

脈を握つてゐるのと、顔色を觀測してゐるのとが、私の役目であつた。注射の效果は顯著であるにしても、その前に苦痛と身體の動搖との結果、心臟を冒したり腦につけるやうなことがあるのが、氣づかはれた。私は、今にもそれが實際に生じて來るやうな恐怖に襲はれてゐた。見てゐるうちに、思ひなしにか顔色が惡くなつて唇の色が淡紫色になつて來るやうに思はれた。それは決して思ひ做しばかりでもなかつた。やがて五分間もつゞいてゐる間に病兒は顔の色が蒼黄色くなつて、苦痛の脂汗(あぶらあせ)が面(おもて)に滲(にじ)み出してきた。唇が乾いて一生懸命の努力をしてゐることが見えた。

「さ、もちつとの辛抱だ。」細田氏はかけ聲をして頻りに壓搾球を握つてゐた。

「どうでせうねえ、顔色が大分惡くなつたやうですが……」

細田氏は、一寸こちらを振向いて、

「なに大丈夫だ。…………どのくらゐ入つたか。」と、目もりをしたフラスコを覗いてみて、

「もうぢき百だ。…………も少しの辛抱だから、やりかけたついでに、せめて百は入れたい。百入(はい)ると大抵十分だ。」

「おねえちやん、もうすぐ濟むんだよ。」母親は慰めた。

「あゝ、もう、すんだ〳〵。」私はそれにつゞけていつた。

ものゝ十分間近くも續けて、やうやく注射針は拔き去られた。手早くそのあとへ絆創膏が貼附せられた。局部は、多量の藥品のために不自然に膨んでゐた。それが次第〳〵に全身に吸收せられて行くのである。

「さあ濟んだ〳〵。」細田氏も、ほつとしたやうにいつた。

「さあ、濟んだ。これできい〳〵が癒るんだよ。」兩親の口から幾度となく同じ慰安の言葉がふりそゝがれた。

細田氏はそれから又脈をとつてみたり、心臟に聽診器をあてゝみたりして、

「なに大丈夫だ。」とうなづいた。

「今のために格別の故障はなかつたやうですか。」

「ありません。…………この注射が効けば大したものだ。」

「さうですかねえ。」

子供は、ひどく苦んだ後で、又眼を瞑つて眠りかけた。細川氏と私は隣室にいつて話した。

「今の藥で大抵大丈夫と思ふが、今晩中持てばいゝです。」細田氏は自信のあるやうにひとりごちた。

「そんな効果の著いものですかねえ。」私には、まだよく分らないので訊ねた。

「それは妙いものです。……それも時期を失しては、いくら藥が好くつたつて駄目だが、今注射をすれば最も好い時だ。……これで今晩中、明日の午頃までに持ち堪えるか、いけなくなるか、どちらかです。それを過ぎれば先づ生命は取留める。……明日の朝まで、どうかなあ。」細田氏は幾度も頸を傾けながらも自信もあるやうにいふのである。

子供はそのまゝ眠つてしまつた。

「どうも、あんまり眠り過ぎるやうですが、このまゝになるものではありませんか。」眠りは眠つて又私達には氣になつた。

醫者は、

「このまゝ眠つて、それつきりになるやうなことはあるものぢやありません。……又夜分に見に來ます。」といつて、歸つていつた。

それを玄關に送り出しておいて、私は病兒の枕頭に戻つて來た。そして妻に向つて話しかけた。

「このまゝ眠つてしまうやうなことがあると、實に飽氣ないものだなあ。」私は感傷的な氣持になつて來た。

「疫痢になるとは思ひませんでしたなあ。」

「うむ、家のやうに始終注意を怠らないでゐて、どうしてこんなことになつたものかなあ。」

私は、ぐつたりとなつて、そこに寢轉びながら、病原となるやうな思ひあたることを、あれかこれかといろ〳〵考へ出してみた。

「食べたもので中るやうなものは一つもないねえ。まつたく時候あたりだ。先達つて二十一、二日と急に暑くつて、それが又どかつと二十度も氣温が下がつた時に冷えたんだ。それにちがひない。」

「この間新宿の三越に買ひ物にいつた時に、あんまり暑いので、我折つて、そこのステーションから、どうしても歩かなかつた。あれなぞきつと障つてゐます。」

「それだ。その時分から胃腸の活動が鈍つてゐたんだ。……惡くなりかけてからぢや可けないが、もつと早く、私が十六日に箱根に仕事を持つていつた時分に鹽原に連れていつて居れば、こんなことには、きつとならなかつたんだなあ。つまり酷暑に對する抵抗力が負けたんだ。」私は、そんな返へらぬことをいつて悔んだが、爲方のないことであつた。

私は昨夜々半の二時に眼を覺まして、それから四時頃から又二時間ばかり寢るには寢たが、今朝一寸の間少し安心してゐたきりで、それから引續いて心配のために、ひどく自分の身體が疲勞を覺えて來た。午餐もいつの間にか過ぎてしまつて、空腹になつてゐたが、それでゐて何にも口に入れてみる氣持ちにならなかつた。わづかに砂糖湯をこしらへて、それを口から流し込んだ。

私は又しては病兒の脈搏を測つてみた。相變らず十秒に廿二三打つてゐる細い頸動脈のところが恐ろしいやうに急速に躍つてゐる。

「あれほど疫痢が恐い〳〵と、私は年中口癖のやうにいつてゐて、たうどうやられてしまつた。……どうも、どちらか一人はやられると思つてゐた。惡くすると二人ともやられるんだが、何だか此のまゝ二人が無事に育つものとは思へなか

つた。他の病氣なら、肺炎にしたつて、發疹にしたつて、私くらゐ注意深く氣を附けてゐるんだから、決してやられはせぬと思つてゐたが、疫痢だけは爲樣がないと思つてゐたんだ。自家の子は全く時候の酷しさに負けたんだから、早く涼しい溫泉場にやつておれば、こんなことにならなかつたんだ。」私はいふことが、又しては同じところに戻つて來た。

病兒は時々半ば夢中になつて寢返りを打つては切なさうに湯を求めた。そして忌儀さうに長い吸口から渴々飮みほすと、又そのまゝごろりと寢返つた。

そんな狀態がずつとつゞいた。夕方になつて、自分がまゐつてしまふやうなことがあつてはならぬと思つて、自分で阪下の細田醫師を訪づれ、鎭靜劑の水藥を調製してもらつた。それと同時に病兒が湯を訴える時、湯茶の代りに飮ますべき水藥をもらつて歸つた。

夕飯時が過ぎて夜になつた。子供は時々眼を覺ましては泣き聲を立てゝ飮みものを欲したが、それを與へると、すぐ又眠つた。醫者が午后の注射の効果を自信をもつていつたので、こちらも大抵大丈夫だらうと思つてゐたが、それは考へて見ると何の自信もないことであつた。深夜にどんなことになるかも知れなかつた。常から、眠りながら齒ぎしりをする癖のある子であつたが、殊に今夜はそれがひどくなつて夢中に、遠くの座敷まで聞えるほどの音を立てた。

ともかくも私達はめいめいの寢床に入つた。母親が一人病兒の傍に寢た。三つになるのは女中のまつが抱いて寢た。私は一と眠りすると、自然に目が覺めた。そしてがばと跳ね起きて蚊帳から出ていつた。そして病兒の蚊帳の中に入つていつて脈をとつてみた。脈はやゝ落着いてゐるやうである。十秒に十七八から二十を算するところをみると少し減じてゐる。熱もさう高くはなささうだ。

母親は湯のやうになつた氷枕を取換へてゐた。私はそこに橫になつてゐると、感傷的の氣持ちが剩々として起つて來た。

「こんなに心配して苦勞をするなら、自分の方で死にたい。芥川ぢやないがその方が、氣が樂だ。」

といつた。

その氣持ちは決してセンチメンタルではなかつた。子供を殘して自殺する氣には、私はどうしてもなれないが、もし今子供が必ず死ぬものとして、その死に他人が代ることが出來るものならば私は子供を生かして自分で死にたいと思つた。

「私ももう今まで生きてゐれば澤山だ。自分が死んだあとで、まさか子供が路頭に迷ふやうなこともないだらう。さうすれや、こんなに心配をするより此方(こちら)が代つて死んだ方がいゝ。」

私は妻に向つて喞ちた。

病兒は時に苦しさうに渇を訴へて、半夢中に吸ひ飲みから、それを吸つては、ぐたりと眠つた。そんなに心配してゐたにもかゝはらず、太い注射針の藥品の効顯があつたものか、その夜は變事もなくて曉方になつた。他に異狀もなさゝうであつたが、脈は又少し早かつた。十秒に二十二三くらゐ打つてゐた。素人には分りにくいこともあつた。それで女中のまつに命じて、細川氏に走らした。

「脈が少い又早い。一寸おいでをねがひたいつて。」

細田氏は早速來てくれた。そしてひとゝほり診察した上で、

「又一つ小さいのをやつて置きませう。」といつて、普通の注射をした。

十時に細田氏が又來診してくれた時に、相談の結果、腸洗滌をすることにして、それを決行した。大分腸内に殘つてゐる不淨物が出た。そのためか病兒は又一しきりに眠に落ちた。その日は午后の二時頃に牛込の手島氏が來診しくれることになつてゐた。

手島氏は約束の時間のとほりに來てくれた。細田主治醫と私とから交る〲今までの經過を聽取したうへで一とゝほり

診察したあとで、

「なに、もうこれなら、さう心配はありません。」といつたが、「しかし、油斷は出來ません。」おごそかにいつた。そして二十七日の朝粥に鰹節で食餌を取つたきり今日でまる二日あまり絶食でゐることを聽取したあとで細川氏と相談の上で鰹ぶしのスープをコーヒーのしやじに二杯ほど與へてみることをいひおいて歸つた。

尙は手島氏との相談の結果、細川氏はその夕方頓服下劑を投藥してくれた。その夜の中には通じがなかつた。咋朝來診した時にそのことを話すと、浣腸をして歸つたが、そのあとで果して大量の便を排泄した。私は、老眼鏡をかけて、まるで鼻先に便が附着しさうなところまで顏をのぞけて、何枚も重ねた新聞紙の上にひろがつたその便を檢査した。それには恐るべき黴菌が無限に含んでゐるやうで氣味が惡かつたが、私はそれを少しも意に介しなかつた。それから病勢は昂進しないで、少しづつだん〳〵回復期に向つたやうであつたが、便通はその後二度ばかり下劑をかけただけで、あとは自然に、每日三四回づつ絶食から少量の流動物を攝取してゐる病體に相應の便通があつた。發病後一週間くらゐになつて、はじめて病菌を含んだものが出て來た。素人にはたゞ不良なものが出るとのみ思つたが、醫者は、それが、まぎれもない疫痢菌であるといつた。私は今更のやうに悚然とした。そして、その病に罹つた小兒は大抵急速に生命を奪はれてしまふのが、私の注意の早かつたのと細川氏の手當てが屆いたのとで、やつと一命を取留めたことを思つた。

それから引續いて、心配と取込みとの中に、今日でやがてもう二週間になるが、まだ野菜スープと葛湯ぐらの流動物でゐる。每日一晝夜に四五回は便通がある。あんまり頻繁といふほどでもないが、その度に私は、いかなる眞夜中でも、やばとはね起きていつて、用便紙を持つて病兒の排泄するのを正面から凝視してゐて用を達したあとを拭ふてやるのは定つて私の役目である。他の者には決してそれをさせない。私が拭いてやつて、そして老眼鏡をかけてその糞便の良否を見ておいて醫者の來るまでしまつて置く。

私は老眼鏡をかけて病兒の糞便を厭はず毎日々々檢視してゐる自身を省みて悲哀を感ずることがあるが、此の連日九十度の炎暑の中で病疫と戰つてゐるのは、ひたすらに子供を愛する他に何ものもない今の私の心持ちの自然の表現である。「私は生まれて始めてこんなことをする。百合子の便なればこそ、こんなことをも決して厭ないのだ。」と、時々それをいふ。そんなことをして子供を大きくするところに、私の生存の信條もかゝつて存するのだといふのほかはない。

（八月九日）

定價		
	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一册に付十六錢申受けます

△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和二年八月十八日印刷
昭和二年九月一日發行　（禁轉載）

編輯發行人　島中雄作

印刷人　高木鳥三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　株式會社秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區

中央公論社

電話丸ノ内二〇六番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番


夏の滋強飲料
カルピス
朝 晝 夕
カルピスによりて
涼し

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12,48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S A. as second-class mail matter.



三越の新着帽子

◆二階西館の洋品賣場◆

秋に適はしい、輕快にして清新な各種の流行帽子を澤山取揃へました。何卒御用命願ひ上ます

…舶來帽子の主なるもの…

- 米國ステツソン會社製
- 同ノツクス會社製
- 同ハードマン會社製
- 英國リンカーンベネツト會社製
- 同ヘンリーヒース會社製
- 同ハーバートジヨンソン會社製
- 同グリーン會社製
- 同バタスビー會社製
- 同クリスティー會社製

東京市 三越呉服店 駿河町